ザ・スニーカー the Sneaker

2006年8月号

CONTENTS

特別付録　ハレ貼レユカイ♪描き下ろしポスター

綴込付録　「ドラゴン★オールスターズF」ザ・スニ限定カード

編集後記

本誌のアイドルが、この夏全国のヒロインへ。涼宮ハルヒの影響は編集部の隅々まで及び、不肖私も、ラジオに出演!ハルヒじゃないので緊張しました(汗)。(放送内容はhttp://www.avanti-web.com で)　●岳

草野球を始めて3年、初めて試合でヒットを打てた!　あんなにうれしかったのは、自転車に1人で乗れるようになったとき以来かも!　●青

明日履くパンツが無いことに気付き、涙が出そうになりました。がんばって洗濯しよ。　●竹

6/20現在。W杯の日本代表より、危機的なザ・スニ編集部!　ゴール決めたいな〜。　●久

僭越ながら私も。ロードスは僕のラノベ魂の原点。その最終回の特集に関われるなんて……すごい幸運ですよね。　●A

なぜか3月から時間がすっとんで6月末にワープ。この4か月の出来事は、ハルヒのアニメ放映順みたいに時系列バラバラにしか思い出せません。　●Y

この本が出る頃には、我がイタリアはベスト8に残っているはず……Forza Azzurri!　●猛

ガル通信ではネガティブなことばかり吐露してますが、本当は結構幸せなんですよ。これでも。たぶん。　●K

ハルヒたちには驚かせられてばかり。まだこれからも僕の想像もつかない事をしでかすんだろうなあ。　●餅

髪の毛の本数に反比例して、「ガンダムカードビルダー」のレベルだけが上がっております。ついに「准将」に昇格です。髪は「退位」です。　●X

表紙&本文デザイン●伸童舎
本文デザイン●佐藤仁
渡辺淳子(クリエイティブ・コンセプト)
付録デザイン●中デザイン事務所
編集長●野崎岳彦
副編集長●青山真優
編集スタッフ●上野新
女井正浩
柏井伸一郎
坂本浩一
田上猛
竹中敬
難波江宏隆
山口久美子

第14巻第6号特別定価780円(税込)・送料200円
発　行●2006年8月1日
編集人●山下直久
発行人●井上伸一郎
発行所●株式会社角川書店
住所　〒102-8177
東京都千代田区富士見2-13-3
電話　03-3238-8693〈ザ・スニーカー編集部〉
03-3238-8528〈販売部〉
振替　00130-9-195208番
印刷・製本●大日本印刷株式会社

●店頭にない場合は、書店に注文してください

ザ・スニーカー
the Sneaker
October
10
2006年10月号
8月30日発売予定
予価720円（税込）
次号予告
レンタルマギカをおかわり!?
三田誠
×pako
なんと2号連続で
レンタルマギカの特集を敢行！
次号ではレンタルマギカの語り部・三田誠と
色彩の魔術師・pakoの素顔に迫る!!
魔術の夜は、なおも続く――――。
イラスト●pako

もちろん、ハルヒもね!

特集［涼宮ハルヒの憂鬱］

みんなもご存じの通り、ハルヒのオフィシャル誌はザ・スニーカー唯ひとつ！話題がもりあがるにつれてハルヒ情報もあちこちで見かけるけれど、ザ・スニは「オフィシャル誌ならでは」にこだわって、お届けします！もちろんアニメやメディアミックス情報も満載！

新連載2作同時スタート！

推定魔法少女（仮）

一肇

「一肇」と書いて「ニノマエ・ハジメ」と読む謎のクリエイターが放つ、神出鬼没の正義の美少女をめぐる学園ストーリー。彼女の正体は何者!?

銀星みつあみ繁盛記（仮）

鷹見一幸

人気シリーズ「でたまか」から遡ること200年——“あの宇宙船”を舞台に鷹見節が炸裂するオールドファッション・スペースオペラ!

CLOSE UP!

スニーカー新人王2006

6人の新星に、次号ではさらにくわしく迫る!
君のごひいきは、どれだ!?

好評掲載陣

- ラグナロクEX.
- ムシウタ
- オイレンシュピーゲル
- 戦闘城塞マスラヲ
- バイトでウィザード
- 薔薇のマリア
- 北神伝綺
- 99番地のクロニカ

※掲載予定は変更になる場合があります。

新オトメ雑誌 7月10日誕生!!

ニュータイプ＊ロマンス

アニメはもちろん"大好き"が1冊にギッシリ

3大巻頭特集

◆今日から㋮王！

7月29日はユーリの誕生日。ヒートアップする㋮ワールドを超解説！発売直前「はじ㋮りの旅」もふんだんに大サービス

◆彩雲国物語

うっとり！美麗描き下ろし&CVメッセージにファン釘付け

◆.hack//Roots&G.U.

ハセヲこと櫻井孝宏が10問10答+置鮎龍太郎は初めての○○○

別冊付録

「ネオロマンス♥バイブル」

◆劇場版 遙かなる時空の中で 舞一夜
◆恋する天使アンジェリーク～心のめざめる時～
2大新作アニメを徹底紹介！CV20人も豪華総登場の保存版

緊急調査

人気キャラ100

「決定！愛されキャラベスト30」をはじめ
「制服姿がたまらない」「泣き顔にドキッ」
「ヘタレキャラ」など注目ランキング大発表！

ニュータイプ＊ロマンス
2006 SUMMER
月刊ニュータイプ8月号増刊
定価：税込580円 角川書店

表紙/松本テマリ

応募者全員サービス!!

ダブルで召しませ♥

今日から㋮王！図書カードセット

Aセット

Bセット

「ニュータイプ・ロマンス 2006 SUMMER」
「今日から㋮のつく自由業！②」
2冊で応募OK

〆切◆2006年9月15日(金)(当日消印有効)

7/10発売「ニュータイプ・ロマンス 2006 SUMMER」の全員サービスページ内にある応募用紙&7/26発売「今日から㋮のつく自由業！②」の帯に付いている応募券1枚で申し込み可能。台紙付き図書カードセット（Aセット、Bセット2種）を全員サービスしちゃいます！ 1件の応募につき、Aセット&Bセットともに1セットずつ応募可能です（どちらか一方のみの応募もできます。同じ絵柄を2セット応募することはできません）。応募用紙・応募券のほかに、1セットあたり1500円分の定額郵便小為替（実費・送料込）が必要です。

詳しい応募方法は「ニュータイプ・ロマンス」を見てね！

表紙はCLAMP描き下ろし!!

W巻頭特集
ツバサ・クロニクル&xxxHOLiC
水島努&大川緋芭対談
両タイトルのCV座談会ではドッキリ発言が!?

別冊付録
涼宮ハルヒ責任編集 SOS団活動日誌
とじ込み付録
サマーイベントBOOK 2006
ピンナップ
少年陰陽師
両面B2ポスター
BLOOD+

注目夏映画!
時をかける少女
ブレイブストーリー etc.

Newtype 8
THE MOVING PICTURES. MAGAZINE
月刊ニュータイプ8月号　7月10日（月）発売　定価550円

illustrated by MINORU UETA, color coordinated by IDUMI HIROSE
background by HIROMASA OGURA, illustrated by MINAKO SHIBA
finished by MAKIKO KOJIMA

表紙&巻頭カラー
涼宮ハルヒ大特集号!!
「涼宮ハルヒの憂鬱」
原作:谷川流　漫画:ツガノガク
キャラクター原案:いとうのいぢ

SOSキャンペーン第2弾開催
小説・アニメ・漫画イラスト3種セットの
QUOカードをプレゼント!

8月号
絶賛発売中
定価500円

7月5日よりTVアニメ放映開始!
NHKにようこそ!
原作:滝本竜彦／漫画:大岩ケンヂ

巻中カラー
喰霊 瀬川はじめ　ついに動き始めた黄泉――対する神楽の思いとは?

特別読切 **バイトでウィザード**
原作:椎野美由貴／漫画:佐伯淳一／
キャラクター原案:原田たけひと

特別付録 **涼宮ハルヒの憂鬱**
ハルヒ&長門&みくる、3人娘"夏×夏"うちわ

話題作そろいぶみのLINE UP!
ケロロ軍曹　新世紀エヴァンゲリオン
未来日記　時をかける少女 TOKIKAKE
BLOOD+　Fate/stay night
ほか人気作多数

「彩雲国物語①」より
©由羅カイリ

Kadokawa Comics A presents
.hack//G.U.+① 森田柚花／原作:浜崎達也●定価:567円●絶賛発売中
NHKにようこそ!⑤ 大岩ケンヂ／原作:滝本竜彦●定価:588円●絶賛発売中
ササナキ④ ゴツボ×リュウジ●定価:567円●絶賛発売中
されど罪人は竜と踊る 灰原薬／原作:浅井ラボ●定価:567円●絶賛発売中
バイトでウィザード① 轟け我が魂よ、と異端者たちは嘆いた 佐伯淳一／原作:椎野美由貴●定価:567円●絶賛発売中
機動戦士ガンダム SEED DESTINY ASTRAY④ ときた洸一／シナリオ:千葉智宏（スタジオオルフェ）●定価:567円●絶賛発売中
機動戦士ガンダム SEED DESTINY THE EDGE④ 久織ちまき●定価:567円●絶賛発売中
ASUKA Comics DX presents
彩雲国物語① 由羅カイリ／原作:雪乃紗衣●定価:546円●絶賛発売中

角川書店

※定価はすべて税5%込みです

"ちょいワル"ジローラモさんも大満足のハキ心地♥
これがウワサの"ちょいオタ"ふんどし全3種!

この夏はちょいオタが刺激的!!

◀Wチャンス賞
岬ちゃん携帯クリーナー付き ちょいオタストラップ

ちょいオタ新聞
滝本&乙一&大岩3人のここだけ話が読める!?

※プレゼント賞品は制作中のため、内容・仕様が一部変更になる場合があります。

キャンペーン対象書籍はこちら!
※「ネガティブキャンペーン」のオビがついているもののみ対象となります。

●滝本竜彦×大岩ケンヂのコミックス
[NHKにようこそ!①～⑤]
●大岩ケンヂのコミックス
[99(つくも)ハッピーソウル]
●乙一×大岩ケンヂのコミックス
[GOTH]

●角川文庫(著:滝本竜彦)
[NHKにようこそ!]
[超人計画]
[ネガティブハッピー・チェーンソーエッヂ]
●角川文庫(著:乙一)
[失はれる物語]
[GOTH 夜の章・僕の章]
●スニーカー文庫(著:乙一)
[失踪HOLIDAY]
[きみにしか聞こえない —CALLING YOU]
[さみしさの周波数]

KADOKAWA NEGATIVE CAMPAIGN

ネガティブキャンペーン5

夏のちょいオタ大作戦

「ちょいオタ」いいじゃない？

ネガティブキャンペーン第5弾のテーマは“ちょいオタ”！ 滝本竜彦＆乙一＆大岩ケンヂの特製ふんどしなど、“ちょいオタ”グッズが総計1000名に当たり〜な♪ この夏は、ネガティブコミック＆文庫を読んで、“ちょいオタ”に過ごすのがい〜んです☆

“ちょいオタ”グッズ 総計1000名プレゼント!!

A賞▶滝本竜彦・ちょいオタふんどし
B賞▶乙一・ちょいオタふんどし
C賞▶大岩ケンヂ・ちょいオタふんどし
＋(プラス) ちょいオタ新聞 **各50名**

抽選からもれた方**850名様**に**ちょいオタストラップ**＋**ちょいオタ新聞**をプレゼント！

応募方法

フェア対象書籍のオビについている応募券（コピーは不可、過去の「ネガティブキャンペーン」オビの応募券でもOK）を2枚、官製ハガキに貼り、希望する賞の記号を明記の上、①あなたの住所（郵便番号も）、②氏名（フリガナも）、③年齢・性別、④学年・職業、⑤電話番号、⑥作品の感想を記入して、下記までご応募ください。抽選で1000名にちょいオタグッズを差し上げます。

宛先 〒102-8078
角川書店　第二編集部
「ネガティブ5・ちょいオタ」
プレゼント係

応募締切 2006年8月31日（当日消印有効）

※発表は発送をもってかえさせていただきます。

※お客様の個人情報は、賞品の発送に利用させていただくほか、個人情報を含まない形で統計処理させていただきます。処理終了後は当社が責任をもって廃棄いたします。

見ちゃイヤン♥

“ちょいオタ”イメージモデル◎パンツェッタ・ジローラモ

©Photo by YOSHIHIRO NISHIOKA　©Styling by YOUICHI OHNISHI

くみりん(以下く)：は～い、いつもニコニコくみりんでっす♥ みんなは元気にしてたかな♥ ……おかしいわ。あの間の悪いうえぽんがこの決めセリフが終わるまで、入ってこないなんて。まあいいわ。邪魔が入らないならこのコーナーは私のものにしちゃうまでね♥

みんなも、酔っぱらいやおっさんや他人に飽き飽きしてるころよね♥ お口直しに私がアニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」のエンディングを、曲歌っちゃうわよ♥ しかも振りつきで♥ では、スタート！

♪……♪……

うえぽん(以下う)：くみりんさん！ やっぱりコーイチさんとたけぼうさんは、大人気のハルヒネタで来たであります！ 我々もハルヒネタで……

く：……………………今まさにソレをしようとしてたんだけどねっ♥ うえぽんったら、やっぱり、やってくれたわね♥

う：く、くみりんさん、目が欠片も笑ってないであります……

く：ねえ、うえぽん♥ 海と山、どっちが好き？

う：え、いきなりなんでありますか？ 自分的には海が……

く：じゃあ、東京湾か♥ コンクリ持ってくるから待っててね

う：嘘であります！ 山の方が好きであります!! だから沈めるのは……

く：山だと富士樹海ね♥ スコップ持ってくるわ♥

う：埋められるのもいやであります!!

く：う～ん、わがままねぇ♥ じゃあ、お腹空いたからご飯おごってちょうだい♥ それでゆるしてあげるわ♥

う：おごります。おごります。何でもおごります

く：じゃあ、後日連絡するわ♥ お店どこにしよっかな～

う：え、今じゃないんでありますか

く：せっかくおごってもらうんだから、よ～く選ばないとね。あ、ちなみに一回は一回だからね。値段は関係なしよね♥ フォアグラ、ステーキ、ツバメの巣、さ～て何にしようかな♥

う：……………有り金全部持っていくであります……

く：食べるっていえば今回のお題「カレーうどんとミートソーススパゲティを、服にはねないように食べる方法は？」さっさといってちょうだい

A.カレーうどんや
ミートソーススパゲッティを
食べる時は
そいや
服を脱げ!!
発想の逆転ですヨ！

(東京都／玄米)

カレーうどんと
ミートソーススパゲティを
服にはねないように
食べる方法
金
そんな時のために
前掛けはあるのです。
今こそ使う時です。
たけぼうさんならきっと似合います。

(静岡県／矢印標識)

㊎とりあえず脱いどけ
(石川県／キョンスケ)

㊎ストローを使って吸って食べてみたらいいのでは。
(大阪府／青空ミント)

く：うえぽん、このストローで吸ってみるっていいアイデアよね♥

う：確かに、素晴らしいアイデアであります

く：ちょっと試してみたら♥

う：そうでありますね。ちゅ～～～。うぐっ!! 熱っ!! 熱っ!! 熱っ!! 死ぬ！ げほっ！（編集部注 本当に熱いです。危険ですのでまねしないで下さい）

く：……ホントに引っかかるとは思わなかったわ。こんなちょっぴりおマヌケなうえぽんを何とかするために、次回はたけぼう真人間化計画ではなくて「うえぽん真人間化計画」をお送りするわ。お題は「間が悪いのを直すにはどうしたらいいですか」よ♥ お葉書待ってるわよ♥

おたより大募集!!
かしわどビーム

「カシワドビームっ！」……いや、そろそろワガハイも自分でもこのノリはいかがなものかと思ってはいる。だがやはりここはワガハイもハルヒに乗っかっておくべきだろう。なので改めて「カシワドビームっ！」。……………さすがのワガハイもちょっと辛いのであーる。ワガハイも誰か突っ込んでくれる相棒がいるコーナーへ行きたいのであーる。そのためには、みんなのハガキが必要なのであーる。どしどし送って欲しいのであーる。

次号の締めきり
7月28日(金)消印有効
〒102-8078
角川書店ザ・スニーカー編集部
「投稿王国」係まで

＊掲載するハガキは一部変更する場合があります。

おしえて▽まゆびん

ま：うぐっ。うぐっ。ぐすん。ごくごく、ぷはー。

た：……まゆびんさん。泣くか、呑むか、どっちかにするっす。

ま：うるさいわねー。しゅどんがいなくなるのは私だって悲しいのよー。何年机を並べて仕事してきたと思ってんのよ。

た：そうっすねー。自分もなんだか淋しいっす。でも、それと酒は別っす。そんなに毎回呑んでるから、こんなハガキが来ちゃうっすよ。

㊎先月ではみなさんがお酒を飲んでいましたが、一番ののんべえは誰ですか？

（宮城県／加藤琢也）

た：間違いなくまゆびんさんっす。

ま：そんなこと無いわよ！　あんただって結構量も呑むし、毎日家でも晩酌してるらしいじゃない！　しかも、下町のナポレオン「いいちこ」を。

た：そんなことまでバラさなくっていいっす！　確かに自分も酒好きっすけど……。

ま：けど？

た：最近、大分酒量減ってるっす。毎日も呑んでないっす。

ま：どーしたの？　あんたらしくもない。

た：……この前の身体検査で……。

ま：あー、解った！　体重増えてダイエットしてるんでしょ！　しょうがないわねー。でもお酒やめるだけじゃだめよ。あれはお酒と一緒の食べるおつまみが良くな……。

た：あー、増えたのは体重じゃないっす。肝臓の数値γ-GTPっす。おかげで最近ずっと体調悪いっす……。

ま：……うわ。…………まあ、気を落とさずにね……。

た：はいっす(泣)。健康を取り戻すためにも次の質問っす。

㊒いよいよ夏本番！　ということでまゆびんさんに質問です。万人に効く夏バテ解消法を教えて下さい。

（千葉県／成金マンＵＳＡ）

ま：万人に効くかは知らないけど、私なりのは幾つかあるわよ。

た：……肝臓にも効くっすか？

ま：それは知らん。というより、そのネタから離れなさい。

た：いや——。本当にショックだったもんで。

ま：それでなんだっけ？　質問。

た：夏バテ解消法っす。

ま：そうそう、私の場合は野球の球場、特に野外のがいいわね。そこでビール呑みながら、大声だして応援することよ！　これでばっちりよ。

た：……全然万人向けじゃないっす。で、やっぱり酒じゃないっすか。やっぱり一番ののんべえはまゆびんさんっすね。というか、その行動パターンはどっかのおっさんっすよ。

ま：うるさい！　自分なんか、心は幼児、知能は少年、体はおっさんのくせに！

た：次回までには健康体になってみせるっす(泣)。

投稿王には「お好み複製原画」をプレゼント！

「複製原画」プレゼントの詳細をお届けするぞ。指定できる絵柄は、掲載号とその前号、つまり今号で言うと２００６年の６月号と２００６年８月号からリクエスト1点（月号とページ数を必ず明記）と15Ｐ分のシールを貼って、「投稿王国」宛に送ってね。大きさはＡ４～Ｂ４で額縁をつけてお届けするぞ。（発送まで1～2ヶ月かかることもあるのでご了承下さい）これからも投稿王目指してどんどん送ってね！

投稿で貯めてお宝ＧＥＴ!!

これがポイントシールだ！

ザ・スニーカー 1point Silver

ザ・スニーカー Special Gold

投稿で貯めてお宝GET!!

ランク	内容	ポイント
投稿王	ザ・スニに掲載されているイラストのなかでお好きな作品を複製原画にしてプレゼント（2006年6月号、8月号に限る）	15P
女王	ザ・スニ連載作品のうち、お好きな作品のTシャツ	10P
王子	ザ・スニ連載作品のうち、お好きな作品のマウスパッド	8P
騎士	ザ・スニ特製メモ帳	5P

採用された方にはもれなくポイントシールを送ります。所定のポイントが貯まったらザ・スニーカー「投稿王国」宛にお送りください。商品と交換します。ポイント＆商品の発送は少々お時間がかかることがございます。予めご了承ください。

投稿王国 勝手にキャラボイス

（大阪府／青空ミント）

（石川県／キョンスケ）

（大阪府／仙木）

（石川県／優）

戦闘城塞マスラヲ（イラスト／上田夢人）

（大分県／オッチョ）

（宮城県／加藤琢也）

（島根県／ムムモメ）

（新潟県／ひびかり）

……ぺら…………ぺら…………ぺら……「ユニーク」。

なんだか、一人で長門のまねをしていると、しみじみと泣きたくなってくるっす。しかもコーイチとネタかぶってるし。長門は一日あーやって本読んでるっすかね？ 自分にはとても無理っす。えーい、やっぱり自分はテンション上げていくっす！ 今号もしゅどんに変わって自分が送る勝手にキャラボイス、さあ行くっすよ!!

次回のお題

ラグナロクEX.
（イラスト／TASA）

どしどし応募まってるっす！

こんなメール が来た！

……………おっす、オラコーイチ。未来からきた悪の魔法使いだ。……って、ダメだ。ハルヒにあやかって、長門のまねをしてみたけど、全然元気がでない……。まねをする相手を間違えたか？ それにやっぱり亀のメイゼルとステンシアがいなくなったら、オラはダメだ、ダメダメのダメ人間だ。ん？ 肩になんか感触が。ゆ、豊花、そうか、お前だけは残ってくれたのか！ オラにはお前だけだ。お前と二人でこれからはがんばるぞ！ それにがんばってハガキがたくさん来ればメイゼルとステンシアも帰ってくるかもしれないしな。よーし、みんな、ハガキどんどん送ってくれよー!!

前号のお題（涼宮ハルヒ）
「ミッションインコンプリート」

(金) **最後まで希望を捨てちゃいけない。あきらめたら、そこで試合終了だよ。**
（埼玉県／グリーヴァス将軍）

(銀) **ハルヒをビデオに取り損ねたの？**
（東京都／エムスタン）

(銀) **トリ・ブラのトレス・イクス？**
（奈良県／西野拓也）

(銀) **え？ インリンオブジョイトイ？**
（静岡県／大島俊光）

次回のお題は
「戦闘城塞マスラヲ」（92Pより）
ウィル子からからこんなメールが届いたら？
「引きこもりから病み上がりにグレードダウン……」

『もし○○が××だったら！』

(金) もし「涼宮ハルヒの憤慨」の表紙が長門ではなく、キョンのあかんべーだったら……長門ファン大暴走！
（愛知県／スケープゴート）

(銀) もしウィル子の正式名称がwiiだったら……任○堂の力により、名前が微妙に変わる？
（静岡県／大島俊光）

(銀) もし「ムシウタ新章突入」が「ムシウタ新庄突入だったら……ケモノバニー姿で新庄登場！
（大阪府／青空ミント）

(銀) もしギキナの愛刀ネレトーが「練れ、納豆！」の略だったら……なんかいやだ。
（熊本県／眼メ）

左手で描こう

逆手で描いたキャラクター大募集!!

今回の金

バイトでウィザード！

（神奈川県／七海ゆいり）

◎ヒント：闇の種族ではありません◎

にゃ困。

いったいどなたとお話していたのですか

お困りのようですね!! 他作品のホモサピエンス!!

何コレー!!?

妖精しーっ!!?

ごまかそうとしても無駄ですわよ

見えていない

A.困ってる人にしか見えない正義の味方です。

（東京都／玄米）

今回の金

の世界を知ってから今まで、いつも私の心のどこかにあって支えてくれる作品でした。登場人物もみんなステキで、中でもディードリッドは私の永遠のあこがれです。お別れは淋しいけど、これからもずっと大好き!!　（熊本県／眼メ）

ま：ロードスもついに最終回ね。そういえば、ロードス島戦記ってちょうど私が生まれた20年前から始まったのよね～。最初に読んだライトノベルがこのロードスという人も多いんじゃないかしら。

たけぼう（以下た）：は～い！　自分がそうっす。自分がライトノベルを読み出したきっかけがロードス島戦記っす！　なので今回の最終話は絶対に読み逃せないっす！　ニース、大好きっす!!　それとまゆぴんさん、嘘はいけないっす。

ま：な、なによ急に出てきたらびっくりするじゃない、たけぼう！

た：自分だけじゃないっすよ。ほら、みんな入ってくるっす

し：なんだどん。そろそろと？

た：そりゃ、ロードス島戦記だけじゃなく、しゅどんさんが卒業と聞いたら来ないわけにはいかないっす じゃあみんないくっすよ。音頭は若手一人がとるっす。

うえぽん（以下う）：自分たちにドキドキとワクワクをくれたロードス島戦記。

くみりん（以下く）：やさしく色々おしえてくれたしゅどんさん。

全員：「長い間お疲れ様でした!!」

コーイチ（以下コ）：しゅどん。ほら、餞別の花束だぞ。

カシワド（以下カ）：うむ、ワガハイからもだ。

ま：さあ、このまま送別会行くわよ！　今晩は飲み続けるわよっ！

し：ふご――――。ありがとうどん。おいどんは新天地でもがんばるど―――――――ん。

（千葉県／成金マンＵＳＡ）

（静岡県／矢印標識）

（神奈川県／セシルニャモ）

（長野県／朝霧）

（秋田県／谷川栄二）

（静岡県／キョーカ）

（和歌山県／アリサ）

そんなバカな！のコーナー

(金)近所の食堂で「息子が店を継いだら冷やし中華始めます」という張り紙が。親子関係うまくいってないのかな？　（栃木県／ダメ人間）

(銀)「顔がいい意味で文字化けしている」と初対面の人に言われた。　（静岡県／大島俊光）

(銀)携帯電話で友達と話している時に「ヤバイ！　携帯無くしたんだけど!!」と言ってしまった。　（愛知県／バンダイ）

(銀)ある日夢の中でしゅどんがまゆぴんに夢でもコキ使われていた。救えないなー。　（大阪府／青空ミント）

イラスト:愛姫みかん

メカしゅどんMk2（以下し）：ふご――――ふご――――。奇跡が起きたんだどん。おいどんが二号連続で投稿王国をしきることになったんだどん！　やっぱり、おいどんの時代がやってきてたのかどん!?　ふごー。ふご――――。ふご――――。ふご――――。やってやるど――――ん！

ま：…………張り切ってるところ悪いんだけど。

し：なんだどん？　まゆびんも張り切っていくどん!!　目指せNO.1投稿ページだどーん！

ま：そうね、一緒に目指したかったんだけど……。ねえ、しゅどん？　前号のこと覚えてる。

し：は！　そういえば、前号は確かにまゆびんがおかしかったどん。なんだか妙におとなしかったし、悪口言われても怒らなかったどん。は！　まさか、きさまはニセまゆびん!!　こんどは誰が入れ替わっているどん！

ま：また、そんな古いネタを！　くみりんと私が入れ替わってたなんて、みんな覚えてないわよ！　そうじゃなくて、今号はあんたに伝えなきゃいけないことがあるのよ。いい？　こころ穏やかに聞くのよ。

し：な、なんだどん？　改まって。

ま：あんた今回で投稿王国を卒業よ！

し：……へ？

ま：だ・か・ら、投稿王国を卒業するのよ！

し：だれがどん？

ま：あんたがよ。

し：いつどん？

ま：今号、というか今すぐ。

し：ふご――――――――――――――――――――。聞いてないどーん。

ま：確かに。今言ったからね。

し：な、なんでだどん？　おいどんが何かしたどん？　アレとかコレとかソレとかはばれてないはずだどん。

ま：別になんかしたからとかじゃなくてね。具体的には●×編集部。

し：ふご――――。聞いたことないど――――ん。

ま：そりゃ知らないでしょう。今度できた編集部だもの。そこがどうしても、あんたの力を借りたいってことらしくてね。OKって返事、しといたから。

し：勝手にするなど――――ん。

ま：いやー、その編集部が、超能力者だったり、サイボーグだったり、黒魔術師だったりと、メカに改造された、あんたみたいな超常な感じの人たちが揃ってるのよ。そこならしゅどんのさらなる能力が発揮されるとおもってね。

し：まゆびん。そこまで考えてくれて……おいどんは……。おいどんは……。ぐすっ。

ま：泣くんじゃない！　男にはやらなきゃいけない時があるのよ！　今こそあんたの力が必要とされてるのよっ！　いって男を上げてきなさいっ!!

し：まゆびん……。わかったどん！　そういえばメカに改造されたのは、まゆびんに東京湾に飛ばされたからだったような気もするけど、やってやるどん!!　おいどんはでっかい男になるど――――ん！

ま：さあ、ザ・スニーカー「投稿王国」最後の仕事よっ！　読者のハガキを紹介しましょう。

し：わかったどん。いくど――――ん。

☆衝撃の一話から、毎週先の読めない放送順番っぷりが中毒になりそうです（笑）。これからの展開も楽しみにしてます！　（東京都／星柘榴）

☆ハルヒアニメを見て京都アニメーションの凄さを知りました。今はEDのダンスを踊ろうとしてチャレンジ中です。　（兵庫県／ゆる助）

ま：アニメも絶好調よね。私も今回のポスターみたいにエンディングのダンス踊っちゃうわよ。

し：おいどんも新天地でハルヒみたいに暴れまくるど――――ん！

☆ロードス島戦記最終回、おめでとうございます!!　アニメでロードス

お天道様と仲良くしたい所存。メガホン(2本)買っとかなきゃ!

冲方丁（第二話「ウェーブ」）
第二話掲載っ! で…やってしまいました掟破りの百四十枚。いきなりのラフプレーにイエローカードか!? と危ぶまれるも担当氏および編集長の見事なキラーパスで一挙掲載。客席でウェーブ発生。本当ありがとうございます&すいません。前号のコラムに応募して下さったフーリガンたちに感謝! 次号で使わせて頂きまーす!

宮﨑柊羽（味覚は十代）
今日波。思いのほか早く、読みきりでザ・スニ山に再登頂です。さて、6月に『神様ゲーム4』が発売となりました。誕生月に新刊というのは中々嬉しいです。よろしくお願いします。で、また一つ大きくなるので、噂の炭酸コーヒーに挑戦してみました。えー、普通にコーヒーも飲めない人間にはハードルが高すぎました。

谷川流（作家）
現在『涼宮ハルヒの憂鬱』アニメ放映中です。京都アニメーションの方々、声優の皆さん、並びに賀東招二さんにはそれはもう大変お世話になっております。動いて喋るハルヒは予想以上に強烈……っ! どうか最後までお見逃しなく!

上田夢人（癒され系絵描き）
最近仕事の疲れでぐったりしていた僕を、友人がメイドリフレなるものに連れていってくれました。そこでは足ツボなどのマッサージをする按摩師の方が、不思議なことにメイドさんの格好をしていました。マッサージの効果はさほど実感できませんでしたが、とても癒されたような気がします……。

長谷敏司（どうやら作家）
2年前、ザ・スニの企画Pre-proの短編からはじまった『円環少女』も、ついになつかしの故郷に戻ってきました。既刊1～3巻に続く4巻が秋ごろ出ますので、お気にいりいただけたらひとつよろしくお願いします。

岩井恭平（魔法の虜）
メイド喫茶から分派した喫茶店が流行中! てなわけで打ち合わせの合間に、担当さんと魔法学園喫茶なるものに行ってみました。トランプを使ったマジッ……魔法を見せてもらったりと満喫。次の流行は何だろう。（注：流行うんぬんは田舎モノの偏った知識が混ざっております）

いとうのいぢ（イラストレーター）
先日、ネットで話題になったらしい「若者にしか聞こえない音」というのを会社の皆で試してみたところ、ほぼ、二十代前半の人にしか聞こえなかったりという結果に。すごいなあ。私も聞こえたのでちょっと嬉しかったです(笑)。

深遊（イラストレーター）
作業中はいつも音楽を聞いているのですが、最近はラーメンズのDVDを流しっぱなしにしてます。おかげでコント内容全暗記しそうです。

七草（たぶん絵描き）
最近、お茶をがぶがぶ飲んでます。特に麦茶。片っ端からいろいろ飲んでますが、同じ麦茶でもメーカーごとで味が全然違って面白いですねえ。気にいったものはペットボトルを一気に箱買い。

COMING SOON!

骨王（ボーンキング） I.アンダーテイカーズ
著：野村 佳　イラスト：THORES柴本

リバーシブル 1.黒の兵士
著：水月昂　イラスト：方密

純情感情エイリアン ①地球防衛部と僕と桃先輩
著：こばやしゆうき　イラスト：まくら

斬魔大聖デモンベイン 軍神強襲
著：古橋秀之　原作：鋼屋ジン（ニトロプラス）　イラスト：Ni θ

ムシウタbug 4th.夢並ぶ箱船
著：岩井恭平　イラスト：るろお

薔薇のマリア Ver1 つぼみのコロナ
著：十文字 青　イラスト：BUNBUN

シェアード・ワールド・ノベルズ
リボーンリバース 夜に舞う獣たち
著：友野詳／諸星崇／川人忠明　イラスト：安達洋介

イリーガル・テクニカIII 賢者の秘都
著：後藤リウ　イラスト：伊藤ベン

スニーカー文庫2006年8月1日発売予定

CREATOR'S NOW

拡大版 クリエイターズ・ナウ

気になるあの人の"今"を伝えるこのコーナー。イラストエッセイも大好評！

（掲載はコメント到着順です）

緒方剛志

来週から10日間ほど
北海道、野宿ツーリングに
行ってきまーす。
雨ふらないといいな
（笑）
あ、あと
アストレイ文庫、
よろしくお願いします!!

ogata

BMW
R1200GS

始めましての方、はじめまして。お久しぶりの方、おひさしぶりです。

「憐　Ren」を書いていた水口です。覚えていらっしゃいますでしょうか？

7月1日に刊行される「ウィッチマズルカ」の主人公は姉妹なのですが、彼女たち以外にも何組か兄弟姉妹が出てきます。その中の一組にでも共感（あるいは反感）を持っていただけたらな、と思っています。

是非とも本屋で手に取ってくださいませ。何卒ヨロシク。

Takafumi.M

林トモアキ（ちょっと一息な作家）
拙著『お・り・が・み』も、いよいよ最終巻の運びとなりました。最後まで、どうぞよろしくお願い致します。そのようなわけで少しのんびりしつつも、親の仇のようにゲームをやりまくる日々ですが、『戦闘城塞マスラヲ』も頑張って……って、のんびりしてないですね。

三田誠（腹減り中）
今回の巻頭特集に引き続き、次のザ・スニーカーでも『レンタルマギカ』のミニ特集をやってもらえることになりました。月刊Asukaの連載やらウェブドラマやら、いろいろ展開してますので、どうぞよろしくお願いします。あああ……ずっと止まったままの『FF12』と『大神』……！

仁木健（犬以下）
新しいアパートの隣家が犬を飼っていて、結構人懐っこく、ちょこちょこ頭をなでていました。そうしたらいつの間にか立場が逆転していました。こっちの姿を見るとすぐやってきて背中を見せます。なでてる間は嬉しそうですが、手が止まるとすぐ「けっ」と言いたげな表情を浮かべてすぐ小屋にもどります。うあああああああ。それはさておき、七月にはAdd長編の五巻発売です。よろしくお願いします！

BUNBUN（忘れ者）
最近(物)忘れ(物)が酷いです。というか昔から酷いです。先日は飲食店に携帯を忘れてきてしまいました…往復四時間ばかしかかるので、忙しくて取りにいけず音信不通で友達に怒られました。シヨボーン。

十文字青（休日は平日）
ひとさまにお話しするようなことは何もない地味な暮らしを送っています。宣伝でもします。webラジで薔薇のマリアの番組を配信中です。URLはhttp://www.jvcmusic.co.jp/m-serve/webradio/です。他ページに宣伝記事があったらまるで無駄です。なかったらなかったで寂しいです。

なかせよしみ（BGM選考委員）
通常と順序逆ですが、昨年9月に籍を入れた嫁さんと先日6月24日に挙式しました。準備では披露宴のBGMなどを2人で相談。でも、ついつい会話は脱線し「結婚式で掛かると嫌なラブソング」の選考会に。大賞に輝いたのはストロベリーフラワーの「愛のうた」。…今日も戦う運ぶ増えるそして食べられる。

安井健太郎（猫好き）
先日、我が家に黒いポメラニアンがやってきました。ですが、膝が悪いことが判明。すったもんだの末に、代金返却、犬はタダでもらえることになりました。小型犬は膝が悪いことが多いそうですので、ご購入の際は、みなさんもしっかり確認してください。あえて、健康診断でも調べてないことがあるようですので。

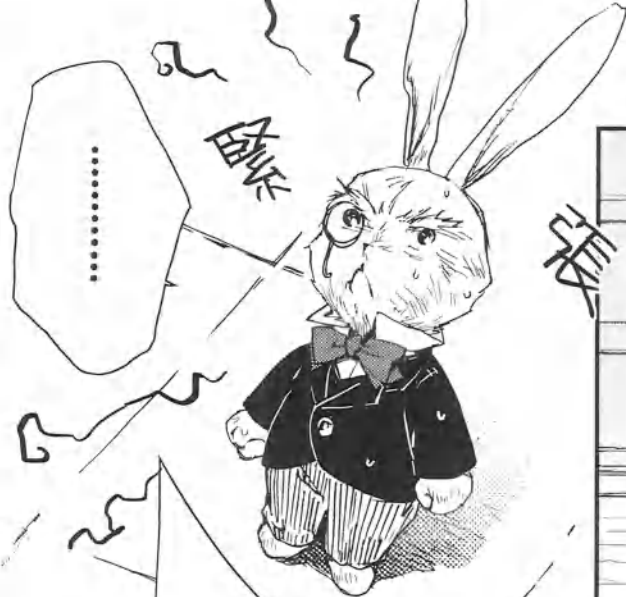
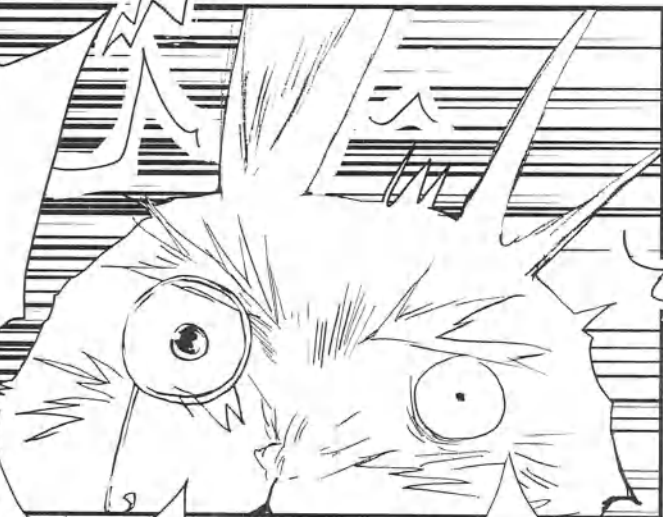
日日日（あきら）（機械音痴）
ここ最近の暑さのせいか働かせすぎなのか愛用のパソコンくんが壊れかけているので、ちょっくら買い換えようと思っているのですが、パソコンってどこのお店で売っているのですか？　魔法屋さん（やばい）？

東亮太（コモド）
先日『プテラノドン』という映画を見ました。現代に蘇ったプテラノドンが襲ってくる話でした。タ人がクチバシでパカパカ叩き割られてました。タノシカッタデス。あ、マキゾエ三冊目は鋭意執筆中。

Nino（グラフィックデザイナー）
最近ミスタードーナツにハマっております。そこで勝手に自己ベスト3ドーナツ決めました。1位ポン・デ・リング、2位エンゼルエッグ〜イチゴ〜、3位ハニーオールドファッション！　ヘビーローテーションしてます。皆さんもミスドに行ったら是非！

TASA（こちら側のどこからでも切れます）
今回登場している「キリム」。人型ではない闇の種族って珍しいなーと思いながら描きました。元ネタが自分の知らない怪物だったりすると固定観念に囚われる事無く好き勝手に描けて楽しいです。
（もちろんリテイクはありますが）

椋本夏夜（甲子園デビュー画策中）
うっとうしい天気が続いてます。といっても実はあんましお外に出ていないので関係ないのがせつないです。本格的な夏が来る頃には色々片づけて

…まったく
ふがいない
あるじで
お恥ずかしい
こんにちは
お届けものに
参りました
END

……
いいかげんになさいっ 男の子でしょっ
いつまでもめそめそするんじゃないの
新しいぬいぐるみ買ってあげたでしょ
やだっ
ちがうんだもん ほかのじゃだめなんだもん
ヘンリーじゃなきゃ

子供というものは移り気なものだ
今さら我輩が訪れても…
そんなことはありません
だって貴方はここにいるから
？
でなければここまで来られるわけがありません
貴方が彼を慕うのと同じに
彼も貴方を必要としています
こんな小さな身体で
たいへんな苦労をして長い長い道程を越えて
貴方が今ここにいらっしゃることこそが
貴方と持ち主との絆の証しです
マスター
………
大丈夫

ガラガラ
ガラ
………
どうかなさいましてっ?
いや…
もうすぐですよ
クロニカ殿
これで良かったのであろうか
え?
無我夢中でここまで来てしまったが
はたして我があるじは
その
喜んでくれるだろうか
一度ははなればなれになって
我輩のことはもはや無いものとあきらめているだろう
追いかけてくるなどと思いもすまい
新しいお気に入りがおるやもしれん

タタン
トン
かたじけない
何から何まで世話になって
いいえ
お手伝いができて光栄です
正直まだ信じられぬ
まさか本当にこんなところまで来られようとは
夢を見ているようだ

黙って聞いておればさっきから人をゴミ扱いするなど
すっ
ぱ
!?
なんと声が…
身体も…これは?
おぬしは…
失礼をお許し下さいミスター
クロニカと申します
ようこそ九十九骨董店へ
私どもが責任を持って
貴方の行くべき場所へお連れいたします
どうぞご安心下さいミスター

ふむ
ミス縁？
またおくれちゃいますよ
すまん
すぐ行く
……おい縁
なんだこれ
ん？
どうしたジャック
……………
おまえは欧州くんだりまでゴミ拾いにでも行ってきたのかよ
ああ
こいつか
なんとなくひっかかったんだよな
いいじゃないか駄目もとで
……？
あのな
整理すんのは俺なんだぞ
うちはガラクタ置き場じゃないっつの
おまけにあんな高価い宝石ホイホイ他人にやっちまいやがって
ちったあ経営の
ぶ
無礼者!!
!?

もう
駄目かも
しれぬ
なんとかここまで
やってきたが
こんなに
ぼろぼろになって
しまって
ここからさらに
海を渡ることなど
できそうにない
ああ
目の前が
暗く……
ん？
これは…
ぬいぐるみ
…か？

待て
ちがう
そっちは
逆方向だっ
なんだこれ
汚ねーな

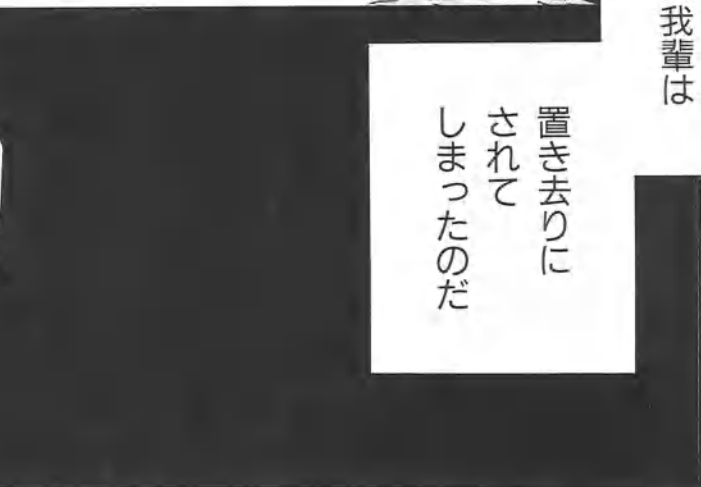
ボトッ
ガタ
ゴト
ズル
ガラガラガラ
はむっ

故郷を遠く
はなれ
見知らぬ土地で
一人
あやつは
この素晴らしい
環境を手放すと
いうのか？
よせ
何を
考えている
相手はもはや
海の向こう
なのだぞ
いまさら
追いかけても
辿り着ける
保障など
だいすきだよ
ヘンリー
ずっと
いっしょに……
くそっ
ええい

あれから
何日経ったのだろう
もう向こうに着いただろうか
無事だろうか
我輩がいなくてさぞかしびっくりしただろう
ひどく泣いただろうか
泣いただろうな……
間違いなく…
このまま
もう二度と会うこともないのだろうか

これで
おばあちゃん
わあ うさちゃんだ
どうしたの
かわいい！
よかったの かもしれない
だめよ 汚い手で 触っちゃ
洗ってからに なさいな
はぁい
ねえねえ 執事さん みたいね
おだやかで 静かで 粗雑に扱われる こともない
そうだ
これぞ我輩が 長年望んでいた 環境ではないか

思った
とおり！
ちょうど
この出窓に
ぴったりだわ
なんと
いうことだ
我輩は
置き去りに
されて
しまったのだ
これは
どうした
ものか…
しかし
信じられん
今までの
非礼の
数々といい
もはや
堪忍袋の
緒が切れた
ムカ
ムカ
あらまあ
ほつれてる
じゃないの

海越えて
運ぶ方が高く
つくっての
そうだよ
おかげで
俺らも
儲かるしさ
違いない
……あれ
ぬいぐるみ？
無礼者！
忘れ物かな
置いてった
んじゃ
ないのか
耳をつかむな
見ろよ
この服 絹だぜ
な
一緒に
売っちまえよ
もし忘れ物
だったとしても
新大陸から取りに
戻ってくるわけ
ないって
じーさんが
鉱山で一山
あてたん
だよなあ
うへー
いいなあ
なんだって――!?
FOR SALE
ANTIQU
あら
この
うさちゃん
珍しいわねえ
片眼鏡
なんて

こら
待て
我輩も
連れて行け
夜露に
ぬれる…！
ばたん
ぷ〜 すか
まったく
子が子なら
親も親だ
まあよい
あやつは我輩が
一緒でなければ
眠れないのだ
すぐに探しに
くるだろう
すぐ……
ああ
積めるか？
なんとか
このガーデン
セットもか？
しかし
金持ち
ってのは
まだ全然
使えるのに
捨てちまう
なんて
バーカ

大好きだよ ヘンリー
ぼくたち
ずっと いっしょに いようね
まあ 根は素直な よい子なのだ
こやつが どこに出ても 恥ずかしくない 大人になれるよう
これからも我輩が しっかり見守って やらねば……
もどかしい のう
言葉が通じれば ビシバシしつけ 直してやるのだが
くー
坊ちゃま！
いらっしゃい ました 奥様
ほんと 人騒がせな子ね
いいわ 起こすと うるさいから このまま車に 乗せて頂戴
!?

ご
ごめんよ ヘンリー
まったく 粗忽にも ほどがある！
いかに 我があるじと いえどもだ
おまけに 洗い方も なっとらん
水をかければ よいというもの ではないのだぞ
熱かった よね ごめんね
ボタ ボタ
まったく
……………
……まったく しようのない やつだ
でもさ
今日はいい おてんきだから じきにかわくよ！
それまでぼくも 待ってるから
そうしたら お茶会の つづきをしよう？
ザワ…

坊ちゃま
準備ができましたよ
見てごらん
ヘンリー
ぜんぶ
ぼくらのだよ
すごいだろ
フム
茶会か
おぬしにしては悪くない趣向であるな
いい香りだ
今日はみんないそがしいんだって
だからだれにも邪魔されないよ
どれから食べようかまよっちゃうね
とぽ
お茶をどうぞ
ー
ぼしゃ
ぶ
無礼者っ

ヘンリー！
大体おぬしは
落ち着きが
なさ過ぎるのだ
男子たるもの
もっと
どっしり構えて
こんなとこに
いたんだ
よかったあ
だからそれは
おぬしが
こっ
こら
よせ
ぎゃっ
つぶれる
？
サミィは
どうかしたのか
いつもの
ことですよ
ぬいぐるみが
なくなったって
大騒ぎして
はは
あの子は本当に
あのうさぎが
お気に入りだな
笑いごとじゃ
ありませんわ
いつまでも
赤ん坊じゃ
あるまいし
そろそろ
いかないと
お気をつけて
あなた
一足先に
君たちを迎える
準備を整えておくよ
いいところだ
きっと気に入る

なんなの
サミィ
騒々しい
ママ
ヘンリーを
しらない？
いなくなっちゃったんだ
いっしょに
おひるね
してたのに
ぐちゃ
知りませんよ
そんなの
どうせ
その辺に
落っこちてるんでしょ
よく探しなさい
奥様
手伝わなくていいわよ
プイ
どこにいるの
ヘンリー
ヘンリー
怒んないから
出てきてよ
モガッ
んなっ
何故我輩が
怒られねばならんのだ
あっ
あぬしが蹴り
落としたので
あろうが

人気絵師が描く、心温まるマテリアル・ファンタジー連載再開！
我輩の名は
サー・ヘンリー
オズワルド
椋本夏夜
Kaya Kuramoto
99番地のクロニカ
Cronica 99
Case.4×ヘンリー卿の冒険
由緒正しき工房で
熟練の職人の
手により
生み出され
あるじの元へ
やってきた
ヘンリー
出てきて
ヘンリー！

もう
駄目かもしれぬ

幾多の苦難を
乗り越えて
なんとかここまで
やってきた

しかし

今度という
今度は
駄目かもしれない

身体だって
こんなに
ぼろぼろだ

すまない
我があるじよ

もう
おぬしの元へ
辿り着けそうに
ない

ここで
朽ち果てて
しまうのだろうか

ああ

目の前が
暗く……

街角で呟く声——その正体は誰？

北神伝綺
HOKUSHIN DENKI

現象に過ぎません。その宗教現象を科学的に研究するのが民俗学であるべきなのにあの二人は神の実在説にうつつをぬかしている」
　岡はまくしたてた。その憤りの意味をその時の私は理解しかねたし、嘘の降霊術で私を惑わせた北神とそれを叱責した柳田が神を信じていると言われてもしっくりこなかった。
しかし、私はまだ何も真実を知りはしなかったのだから仕方ない。そして、現人神を信じない岡が現人神を妄信するこの国でこのあとどうふるまっていくのかもまだこの時の私は知りようもないのだ。
「そういうお話をしに来たのではありません。帰ります」
　私は教会の椅子から立ち上がった。
「それがいい。そして悪いことは言わない。その足で交番に行って相談しなさい」
　岡は好意で言ったのだということはわかったが、少し私は苛立っていたのだろう。
「御心配には及びません。神隠しに会った生徒たちはちゃんと戻ってきました」
　そう、岡に告げた。
　すると背後から別の大声が返ってきた。
「なに、女生徒どもが戻ってきたと」
振り返ると柳田の禿頭がそこにあった。
どうしてここに、と言おうと思ったが、ここは柳田の書庫だ。
　そして柳田は私が何故、ここにいるかを尋ねることもせず「いつだ」と私を睨んだ。
「ひと月と少し前、いなくなって三日かそこら前後です」
　私が言うと「何故、儂に報告せん」と柳田は私をいきなり叱責した。
「そんなことおっしゃっても、女生徒は無事でしたし、あまり大事にしてもと皆、思います」
　私は柳田の剣幕に言い訳じみたことを言おうとしたが、考えてみれば柳田に報告する義理などないではないか、と少し憮然とした気持ちになった。
　しかし柳田は岡とは正反対に私の心の内など一切、意に介さない種類の人間だった。
「だが、お嬢さん。あんたは女生徒が戻ってきたのにわざわざ北神のところにやってきた、ということは何か新たな異変が起きたのであろう」
　しかも、直感の鋭さは岡よりも柳田の方が一歩、勝っていた。私はたちまち追い詰められる。
「そ……それは……」
　私は口籠るしかない。
「言えぬなら当ててみせよう。なるほど、女学生は数日後に戻った。とすれば、この柳田などに相談することもないし、ふと、考えてみればさっきあんたが顔に出したように、わざわざ報告する必要もない」
　柳田は私の表情を読んでいたのだ。しかしそれは気遣いのためではなく、事を早く進める時の彼の癖であった。いちいち相手の言葉によって説明を待つのが思考が回転する時の柳田にはまどろっこしくて仕方がないだけなのだ、ということは後に知った。
　柳田は私の口の挟むのを許さず続ける。
「しかし、ここに来たということは再び何か不都合なことが起きた。しかも教頭や校長ではなくお嬢さん、あなたが来たということは、公の相談ではない。というより、校長らもまだ知らない。そして女生徒が歳の一番近い女教師だけに相談すること。
　答えは明らかである。
　戻ってきた女生徒たちは身ごもっていたな」
　柳田は勝ち誇ったように私に告げた。
「……そ……それは」
　私は言葉が見つからない。
　その私のうろたえる顔を見て柳田はこう言った。
「娘たちは神の花嫁となったようだな」

to be continued...

娘たちは神の花嫁となったようだな。

「民俗学を学びたいのならここではなく成城の柳田の研究所に来ればいいことで、わざわざ北神のところを訪ねてきたとすれば、何か厄介事でしょう。北神は民俗学のフィールドワークと称して探偵じみたことにまで手をだしているともっぱらの評判ですから」
　私はそれで少し納得がいった。女生徒たちが出奔した直後、北神が現われたのは柳田が呼びつけたのであることは柳田が学校の電話を使っていたので想像がついていたが、けれど何故、北神が呼ばれなくてはならないのか、北神に再会できたことに興奮してしまった私はその時は深く考えることがなかったのだ。
　しかし「探偵めいた仕事」を彼がしていると聞いて私は北神を頼ったことは間違いではなかった、と思った。
「ならばやはり相談は北神さんに致します」
「それは無駄というものですよ」
　岡が少し私を挑発するように言ったが、それは恐らく私にではなくその場にいない北神にこそ向けられていると察しがついた。
「だって、探偵さんなのでしょう、北神さんは」
「そう。学問の徒であることを顧みようとしないし、北神と一緒だと柳田まで探偵ごっこにうつつをぬかすのです」
　岡は吐き捨てるように言って自分で気づき「これは失礼」と言った。
「滝子さん、ここを尋ねた理由がそもそも神隠しで、しかもあなたは民俗学を研究する訳でもないとしたら答えは一つです。あなたの周辺で失踪騒ぎが起き、それをあなたは神隠しだと信じている」
「し……信じてはいません」
「そう。ただ、少なくとも疑っている」
「そ……それは……その通りです」
「ならばこんなところに来て北神や、ましてや柳田になど頼らないことです」
　別に私は柳田を頼っているつもりはなかったが、岡の方は二人揃って嫌悪の感情を抱いていることはとうに察せられていた。
「いいですか、滝子さん。失踪者や行方不明者を捜すのは民俗学者の仕事ではない。今すぐに交番に言って失踪届けを出すか、本物の私立探偵を雇うことです」
　岡は冷ややかに言った。
「けっこうです。もともとあなたに相談する気などありませんもの」
　私が言い返すと、
「そうじゃない」
　と岡は頭を左右にふった。
「いいですか。あいつらに関わっては事件の真相どころか、やがて天狗だ妖怪だという話になってくる」
「妖怪？」
　岡の深刻そうな口調とその口からもれた言葉がなんだかそぐわない気がして、私は笑いかけた。
　岡はふう、と溜息をつく。
「滝子さんが今、お笑いになったということは、まだあなたはそこまで連中に巻き込まれてはいないということです。ならば二度とこんなところに来てはいけない」
「……でも……私も神隠しにあいそうに……」
　私はうっかりあの夜のことを口にしてしまった。
「それ見なさい」
　岡は私を憐れむように言った。
「あなたはやっぱり柳田と北神に感化されている。いいですか、人がいなくなった、これは神隠しだ、そう奴らは言う。しかし奴らは行方不明の物を捜すのではなく、それでは人を攫った神とは何か、と言い出す。神隠しが起きた、ということは攫った神がいる、ということの証明なのです、あの二人には」
「あら、神様がいてはいけませんの……」
「別に私は初詣に行ったり若水汲みをするなといっているのではない。柳田と北神は神と言う種類の人種を信じているのですよ」
「おっしゃっていることがわかりません。神という人種と言うのは天皇陛下のことですか」
「ふん。彼が神であるはずがない」
　岡の顔がぐにゃりと歪んだ。私はうっかり陛下のことを口にしたことさえ後悔したが、あの時代、天皇は神でないと平気で言い捨てられる人間を私は初めて見た。
「神などどこにもいない。あるのは単に宗教

北神伝綺

HOKUSHIN DENKI

「先程北神の専門の民俗学上のお話だとかおっしゃってましたね」

　岡は改めて水を向ける。これまでのやりとりで私は岡が北神に微妙な競争心のようなものを抱いていることに気づいていた。それが岡のおだやかな口調に幾許かの執拗さを感じさせる印象となっていた。

「当ててみましょうか」

　いきなり岡は私の目を覗き込んで言った。

　口許には相変わらず微笑を浮かべていたが、目だけが笑っていなかった。

「神隠し……でしょう」

　私が口籠るより先に岡は答えをいった。

　多分、私の動揺がそのまま顔に出たはずだ。

「そ……それは……」

「別に顔に書いているわけではない。北神の散らかしたこの部屋を整理したら机の上に『仙童寅吉物語』や『嘉津問答問』が取り散らかしてあれば推理などせずともわかります。どちらも少し前に出た『幽冥界研究資料』に入っている復刻版ではないもので、ぼくも原本は初めて見ましたが」

　そう言って岡は和綴じ本から一冊、本を抜き出して私の前に示した。

　確かに『仙童寅吉物語』と読める文章が表紙には記されている。

「江戸時代のちょっとしたベストセラーです。神隠しにあったが戻ってきたと称して江戸中の評判になった少年の話を平田篤胤翁が真に受けてまじめくさって記録したものですよ。そのあたりの一角は皆、この種の神隠しを記録した文献の類いです」

　岡が指さしたあたりは本棚に三列ほどぎっしりと和綴じ本が並んでいる。

「北神さんは神隠しの研究が御専門でしたの」

「いや、柳田の専門……いや趣味といったほうがいい。北神は柳田のフィールドワーカーといったところでしょう」

「なんですの？　それ。学者さんのことですか」

　私は耳慣れぬ言葉の意味を問うた。

「いや。学者の使いっ走りですよ。柳田のように研究室に座って資料のページをめくるだけの学者を英国ではアームチェアー学派、つまり肘掛け椅子学派と揶揄します。北神は柳田に代わって現地の調査に赴くのですが、奴の場合は……」

　と今まで饒舌だった岡が言葉を濁した。

「それで、お嬢さんも神隠しの研究ですか」

　お嬢さん、と呼ばれてやっと私は自分が名乗っていなかったことに気づいた。帝大の肩書きを鵜呑みにするわけではなかったが柳田國男の書庫に出入りを許されていることだけは確かだから名前を告げるだけはいいだろうと思った。

「――滝子、といいます」

　私は姓まで名乗ってしまった後で少し後悔した。警戒心故ではなく、北神にまだ自分から私の姓を告げていないことを思い出したからだ。北神より先に岡に姓と名の両方を知られたことが北神に恋していた健気な私には不実なことのようにさえ思えたのだ。

　感情の乱れを神隠しに戻そうと「ええ、色々と調べておりますの」と言った。

　それは嘘ではなかった。図書館で捜してはみたが、そもそも神隠しなどを扱う学問はなく、泉鏡花の幻想的な小説に行き着くのがせいぜいだった。

「ほう、滝子さんも民俗学の研究を」

　少し皮肉の混じった言い方。

「ええ、これから色々と勉強してみようと思いますの」

　私も僅かに意固地になる。

「滝子さんは嘘が下手だ」

　岡はさらりと私をいなした。

「し……失礼な」

「気に障ったら申し訳ない。しかし滝子さんは何かを言い淀んだ時、左手の小指が少しだけ跳ねるように動くのですよ」

　私は思わず右手で自分の左手の指を庇うようにしてうつむいた。

「申し訳ない。人が物を言う時の癖を観察する習慣が先程申し上げたようについてしまっているのです」

　岡はすぐに詫びたのでそれ以上、怒ることもできない。

られて笑ってしまった。
　岡は金で装飾されたカップにコーヒーを注ぎソーサーに乗せてテーブルの上に置いた。
「なんだか懐かしいカップ……」
　つい口に出て、それで母さまがよく似たカップを一客持っていたことを思い出した。
「柳田の持ち物です。それ一客しかないのでぼくはこっちで」
　と岡は自分の分は白い陶器のカップに注いだ。
「この部屋は柳田があまり人目に曝したくないものを私蔵する書庫なんですよ。成城学園に図書館のような家を建て、蔵書の全てを移したはずなのに、何故かもう一つ、人目を憚ってこんな部屋を借りた。ここにあるということはことによったらこのカップも人目に触れて欲しくないものなのかもしれませんよ」
　冗談めかして岡は言ったのだろうか。私は一瞬、引っかかるものを感じた。けれどすぐに岡が「例えばこの本」と、西洋の辞典のように厚い本を三冊、テーブルの上に並べたので、深く考えることをしなかった。
　“The Golden Bough”とその本には金箔で刻印されていた。
「これ三冊で一つの書物です」
「金色の枝？」
「金枝篇と訳そうと思っています」
　岡は言った。
「まあ、岡さんが翻訳なさるのですか」
「そのつもりですが怒られました」
「どなたに」
　岡は肩をすくめた。書生である岡を諌めるとすれば柳田しかいないだろうことはさすがに私にもわかった。
「金枝篇はイギリスのフレイザー卿という学者の本です。昔、イタリアにディアナと呼ばれる森があって、その中心には金の枝の樹があって、そこで一人の男が寝ずの番をしている。男は森の祭司ですが、その目を盗み金の枝を折れば今度は祭司と一騎討ちができ、勝てばその地位に取って代わる。そういう話が書いてある」
「不思議なお話ですわ。だって森の王になったら今度は自分が殺されると脅えなくてはならないのに、何故、わざわざ金の枝を折りに行くのでしょう」
「ほう」
　岡は興味深そうに私の顔を覗き込んだ。
「北神も同じことを言ったのですよ。でもねぼくは金の枝を折りに行く者の気持ちがなんとなくわかるのですよ」
　北神と同じ、と言われて私は少し嬉しかったが喜ぶわけにもいかず「でもどうして岡さんが翻訳してはいけないのですか」と筋道を戻した。
「この本は柳田の論文の下敷きになっているのです。それだけじゃない。ここにある西洋の本は皆、そうです。自分の学問が西欧の影響にあるのを柳田は知られたくないので、ここに隠しているわけです」
　私は聞かなければよかった、と思った。人の秘密などそもそも知りたくないし、人の秘密を口にする人を好きにもなれない。しかしそう思って私はいつの間にか岡に好意を持ち始めていることに気づいた。
「でも、こちらは日本の御本でしょう？」
　私は何だか柳田を庇う気になってしまってそう言った。
「これは別の意味で隠しておかなくてはならない本なのですよ」
　岡の顔が僅かに険しくなるのを私は感じ、そしてそれ以上、私は知る必要のないことだと思った。大抵の場合、こういう時、気まずい沈黙が流れるものだが、岡は優雅にカップのコーヒーを一口、啜った。そして、
「我ながらうまい。あなたも試して下さい」
　とごく自然に言った。なるほど相手の気配や空気を読むのに機敏な男だと少し岡に対して冷静な距離を取り戻した私は思った。
「それで相談事は何でしょう」
　岡は私の目を見て北神とはまた違う抗い難い微笑とともに言った。
「それは……」
　私は口篭る。岡の余りの如才のなさに警戒心が芽生えていたこと、それに初対面の男に女学生たちの妊娠騒動を告げることは当り前だがためらわれた。

「いいえ、ヒョウドウさんの御専門についてのことですから」
　私はこの気障な男の鼻をあかそうとつい言ってしまった。
「専門？　あいつの」
「そう、民俗学の相談です」
　私の答えに男はにやりと笑った。
「だったら私の方が専門ですよ」
　男は身を乗り出し、まるで女を口説くように甘い声で言った。
「あ……あなたはどなたですの？」
　男は胸元の内ポケットにすっと指を入れると次の瞬間、私の前に指を差し出した。
　手品のように差し出されたのは名刺だった。私は思わずそこに書かれた文字を読み上げてしまう。
「東京帝国大学文学部　岡正雄……」
「そう。私もミンゾク学者のはしくれです。ただし柳田や北神のミンゾク学とは字が違いますが」
　彼が言っているのは民俗学と民族学の違いだとその時はわからなかったが、それが柳田とは違う意味での北神の天敵とも言える岡正雄と私の最初の出会いだった。
　私は岡に見据えられたまま後ずさりして階段を昇った。
　二階の部屋の窓は広く開け放たれ、明るかった。あの時室内をけだるく舞っていた埃は少しも見当たらず、しかも階段の扉を開けた時ほど消毒液の匂いはしなかった。
「全く辟易したよ。北神の奴ときたら掃除をするということを知らないと見える」
　私の後から階段を昇ってきた岡は片目をつむって私を見ると、小さな丸テーブルの前の椅子に私を勧めた。この間、来た時はこんな接客用の丸テーブルなどなかったのに、と思うと、まるで私の疑問を先回りしたかのように「本の山の下から発掘したばかりだ」と岡は笑った。椅子の方はあの日見た教会用のものだが、背もたれのところには橙色の本はなかった。書棚も整然としている。西洋の本が半分ぐらい、残りは和綴じのものであることが一目でわかった。本の背の西欧人の名を順に追うと著者別にアルファベット順に並べてあることもすぐに知れた。
「一週間がかりだぜ。北神の奴、本の整理を柳田から言づかりながら拝み屋めいた商売にうつつをぬかし、ただでさえ埃まみれの蔵書に更に埃をためたのだからあきれる」
　岡はそう言いながら小さなキッチンの焜炉に銀色のケトルをかけ、コーヒーの豆を挽き始めた。
「あの、私が」
　殿方にお茶の用意をさせるのはその頃の私には憚られることだったので私は立ち上がろうとした。
「なあに、ちょうど掃除が終わってコーヒーで一服しようとしたところに君が来た。気にすることはない」
　さらりと言うとフィルターに挽いた豆を移す。そして沸騰した湯を手早く注ぐと小さな泡がたち、たちまちコーヒーの香りが部屋中に広がった。考えてみれば私はあんなにうまくコーヒーを入れることなどできないから無理を言って代わっても恥をかくだけだったと思い内心ほっとした。
「いい香り」私は思わず言ってしまう。
「消毒液の匂いが少しは消えるといいんだけどね」
　私は岡の答えが意外だった。
「不思議そうな顔をしているところを見ると、ぼくが潔癖性か何かで部屋中をクレゾールで消毒しまくったと思ったようですね」
　先程よりも更に早く私の疑問を先回りしたかのように岡が答える。
「私、そんなに考えてることが顔にでてしまいますか」
　少し恥ずかしくなってつい尋ねてしまう。
「いや、悲しいことに人の顔を読む癖がついてしまってね。あの癲癇持ちの柳田の傍で二年も暮らせば望まなくても人の顔を読むのが得意となる」
「あら、柳田先生の書生さんでしたの」
「そうでなければ、誰に頼まれて大掃除などするものですか」
　そう言って余りに自然に笑ったので私もつ

それが北神の天敵とも言える岡正雄と私の最初の出会いだった。

が奥まですっとのびていた。チャールストンのリズムで毬をついていた少女の姿はなく、路地に面した窓も閉じられている。

あの日、振り返った時、路地の奥は闇に包まれている気がしたけれど今は陽こそ射し込まないが、コンクリイトの地面のせいなのか湿気もなく、思った以上に明るく、変な言い方だが清潔だ。あの日のように迷路に迷い込んだ気がしないのが奇妙だったが、路地の奥には曇り硝子の嵌め殺しの扉が見えるのだから間違いはないと足を進めた。

けれども扉の前で私は戸惑った。

降霊術と白く書かれた文字がない。よく見ると白いペンキの跡がところどころ硝子に残っているからどうやら消されたことはわかる。

私はたちまち不安になる。北神がここを引き払ってしまっていたらもう私は彼に会う術はないのだ。だが、再び扉をよく見るとその脇に「民俗学研究所」という小さな看板が掲げられていることに気づいた。それで私は少し安堵した。民俗学とは柳田のやっている学問で北神はその弟子だということは説明を受けていた。そして、北神は勝手に奇妙な占いの類の客をとり柳田の怒りを買っていた。つまり占い師の方は休業したのだろうが北神はまだここにいる、と私は自分に都合よく理解した。

そして扉をノックして、あのお河童髪の少女が顔を出すのを待ったが返事がない。私はそっとドアノブに手をかける。するとすっと開いた。

目の上に急な階段がある。

やはり、ここだ、間違いないと私は思う。だが、あの時と違って、黴臭い古書の匂いがしない。代わりに病室のような消毒液の匂いがつんと鼻に響いた。

私は少し困惑する。柳田に叱られて掃除をしたのだろうか。けれど消毒液の匂いの中に彼がいるのはなんだか想像できなかった。

私は不安になり、もう一度、「あの」と声を階上にかけた。

すると階上からではなく背後から「ヒョウドウ北神ならいませんよ」と険のある声がした。

私は咎められた気がして慌てて振り返った。

するとそこにはハリウッド映画の男優のような甘いマスクの――後で思えばそれは俳優ではなく映画監督のフランク・ボーセージに似ていたのだが――男が細いネクタイのスーツを自然に着こなして立っていた。

その頃は殿方の服装の半数近くは着物で、モボと称して背広を着ても似合う者など少なかった。

私は背広の似合う日本人を初めて見た気がして思わず見とれてしまったが、たった今、男が「ヒョウドウ」と北神の姓を口にしたのを聞き逃してはいなかった。

「あの方、ヒョウドウ、とおっしゃるのですか」

「おや、御存知なかった」

男は北神のように文字を逆さに宙に書いてくれることは当然しなかった。

「そのヒョウドウさんに用事があるのですか」

私は男の上を見下す位置にいるのが失礼に思えて階段をおりようとしたが、その人は階段の壁に私をさえぎるように手をついた。

「拝み屋なら廃業しましたよ。あいつの呪いに随分と惑わされた婦女子がいたようだが、苦情ならぼくが伝えておきますよ」

婦女子という言い方が人のことを見下している気がしたのは言うまでもない。

「別に相談事は呪いや占いのことではございません」

私は男をにらみ返した。

するとすっと男は口許に気障な微笑を浮かべる。女のあしらいにとことん慣れた振る舞いだ。

「あの方がいないなら出直します」

私は思い切って階段を降りた。私が近づけば手をどけるだろう、と踏んだのだ。

だが、男は手をどけない。

仕方なく、私は最後の一段で止まる。

「北神に相談事とはなんですか。事によったら私でも代わりができるかもしれませんよ」

男は今度は壁に肘をつき、そして頬杖をつくポーズをとった。

気障だが様になっている。

北神伝綺

HOKUSHIN DENKI

がつかないことだったのだから。

目の前の彼女も困惑したまま、ただ首を左右にふった。

「このことは誰かに話した？」

私は同級生の秘密を教師に告げてしまい少し後悔しかけたかに見える彼女に聞いた。

「いえ」

とうつむき短く答える。

「よかった。だったらこのことは他の誰にも話しちゃだめよ。同級生だけでなく寮監の先生にも校長先生にも教頭先生にも」

私が先生方にも言ってはいけない、と言ったことが彼女を安堵させたのか、一人で秘密を背負うことから解放され少しだけ表情が明るくなった。しかし、今度は彼女の代わりに私がその秘密を引き受けてしまったわけだが、かといって私に私さえ経験したことのない窮地から彼女たちを救う手立てがあるわけではなかった。

それでも私はただ彼女たちを救いたい一心で秘密を引き受けたわけでは本当はない。だから目の前のたった今、秘密を私に託した女生徒は私を尊敬の目でさえ見ているのが後ろめたかった。

そう。

私は彼女から難題を託されながら、このことは北神に相談しなくては、と考えていたのだった。失踪騒ぎがこのまま忘れ去られてしまえば、もう北神に遭うこともない、と私は失望しかけていた。かといって、また道に迷ったふりをして女学生に紛れて彼のところに降霊術をしてもらいに行くことも憚られた。

あの日から——北神が神隠しから私を助けてくれたと言ったあの日から私は並木通りに面した窓をいつも少しだけ開けて眠るようになっていた。

私は北神が私を浚いに来てくれればいいのに、と思い始めていたのだ。

菊坂の入り口でわざと迷子になるのは難しかった。あの時のように空を見上げたら銀色のツエッペリン伯爵号がいればいいのだけれど、とうに海の向こうに飛び去っていった。チャールストンのリズムも聞こえない。代わりにどこかの蓄音機から佐藤千夜子の東京行進曲の鼻にかかるソプラノの声が聞こえてきた。

シネマみましょか　お茶のみましょか

いっそ小田急で逃げましょか

私は好きでもないこの流行歌の一節を近頃つい口ずさんでしまう。小田急で逃げましょか、というのは小田急線沿線の温泉地が不倫や許されぬ恋の逃避行の行き先と相場が決まっていたからだが、考えてみれば駆け落ちや逃避行が歌にもなるほどの流行だったのだから、私だってどこかの映画女優のように北神の手を強引に引っぱって異国の国境を越えることぐらいすればよかったのにと、今になって悔やまれてならない。

けれどその頃の私は恋の逃避行など映画女優にだけ許される特権のように思っていた。

「東京行進曲」のリズムはよく聞けばジャズのリズムに似てはいたが、流行歌に誘われてあの小路を捜すのは無理だと、私はお呪いめいた手続きを気づかぬうちにとっている自分に苦笑した。そして、この道で迷ったのは夢か幻だったのだろうかとふと思った。

けれども、北神が夢か幻でないのは二度遭ったことで確かで、そのうち二度は本当の事を言えば夢か幻のように思えなくもないのだが、それでも一度目の失踪騒ぎの現場には教頭先生たちも居合わせたのだからやはり北神は幻などではない、そう自分に言い聞かせた。

ともすればあの日、迷い込んだ路地も幻ではない。

私は菊坂の入り口の家と家の狭間に一つずつ目をこらす。そして七度、菊坂を行ったり来たりした後で、煉瓦造りのモダンな家と隣家の黒い板塀の間に人一人すり抜けることのできるほどの木戸が閉じられているのを見つけた。

背伸びしてその木戸の向こうを覗くとコンクリイトの路地が見えた。

見覚えがあった。

どうやらあの日はこの木戸が開かれていたようなのだ。

そっと木戸を開けるとコンクリイトの路地

月のものが遅れているようなのです。

人で抱え込むには重すぎ、かといって放っておいてもやがて発覚するであろうことは無垢の彼女にも察することだけはできたからだ。

放課後、図書館で調べもの――それは実をいったら神隠しについてなのだが――をしていた私のところにおさげ髪の彼女が近づいてきた。

「――さん？」

私が彼女に気づき、彼女の姓を呼ぶと彼女はほんの僅かだが瞳を輝かせ「はい」と言った。級友からだけでなく近頃は男の教師たちからも渾名で呼ばれることの少なくない彼女にしてみれば本名を呼ばれる、ただそのことさえ嬉しかったのだろうが、私が渾名で呼ばなかったのは度の強い眼鏡をはずし髪をほどけば彼女が私などよりはるかに美しいことを知っていたからだ。手足がすらりと長く、しかし、それを丈の合わない制服に無理に押し込めているので、それがわかりにくいだけだ。小さな頭や彫りの深い顔は宝塚の舞台にでもたってようやくその美しさが知れる質のものだ。彼女の美しさに女学校という場や彼女の年齢がそぐわないだけで何年かすれば同級生たちは醜いアヒルの子の寓話はなるほどこのことだったのかと嫉妬と羨望の溜息をつくことになるだろう。

「何か質問？」

言いにくそうにしている彼女の眼鏡のレンズの向こうの瞳を見て言った。凹レンズの向こうのものは小さく見えるはずなのにそれでも尚、彼女の瞳は他の子たちよりも大きく見えることに私は妙に感心し、つい見とれてしまう。

「何か顔についていますか」

彼女は目をそらし、うつむいて困ったように呟く。するとその睫毛の長さに同性である私さえどきりとしてしまう。

そんなことを言ったらたちまちエスだと噂になってしまうから私は「ううん、あなたの質問を待っていただけよ」と何か言い出しかねている様子だけは察して言った。

「質問ではないのですが」

「かまいませんよ。何でもうかがってよ、――さん」

女学生が下級生に言うような口調でわざと言ったら彼女がくすりと笑った。

そして「――さんたちのことです」と失踪していた少女の一人の名を言った。

「――さんたち、ということは失踪騒ぎを起こした皆のこと」

「はい。でも全員がそうかは知れません。――さんと――さんは体調を崩した、ということで続けて休学して帰省なさったし、――さんは二学年下なので詳しくはわかりません」

彼女に言われて改めて気づいたのだが失踪騒ぎを起こした女性のうち二人が相次いで体調不良を理由に休学していた。女学校では神経を病んで休学する者は毎年幾人かいたし、まして集団での失踪事件はやはりヒステリーが原因だろうというところで教師たちの見解は一致していたから、体調を崩しての休学が続いたこともむしろ辻褄があっていた。

「それで彼女たちには一体何が起きているの？」

私はまだ具体的な事柄について言い淀んでいる彼女にたずねた。

「あの……月のものが」

そこまで言って彼女は耳たぶから首筋まで朱に染めた。

「月のものがどうなさって」

彼女の過剰な反応に私まで赤くなりそうだったが、なるべく声を平静にして言った。

「――さんたち、月のものが遅れているようなのです」

「どうしてあなたにわかるの」

「あの……寮では殆どが同じ日に皆くるし、そうでなくてもお互いにあの人はいつ頃だとか何となく知れるのです。口には出さなくても」

ああ、と私は納得する。不思議なことに寄宿舎に入ると女生徒たちの生理日が半年もしないうちにほぼ一致するのだ。

「それはただ遅れているだけなのかしら、それとも」

そう言いかけて、今度は私の方が言い淀んでしまった。

それとも、の先にあるものは私にさえ想像

北神伝綺

HOKUSHIN DENKI

も小石川の植物園も近かったしまして省線や小田急に乗って駅を二つ三つ郊外に出れば野山は幾らでもあった時代の話である。

　教頭たちは年頃の娘たちは時に大人たちの理解をやや超えた奇妙な行動に出ることがままあることだけは女学校の教師という仕事柄、理解していた。盛り場やビリヤード場で男子学生といるところを補導されたのならともかく、野原で遊びほうけていたという言い訳は学校にとっても比較的、都合がよかった。そのため女学生たちは一ヶ月の外出禁止と反省文の提出という思いの他、甘い処分で放免されることになった。

「滝子さん、この子たちを寄宿舎に連れていって入浴させて、着替えさせせなさい」

　教頭は通り一遍のお説教を言うと彼女たちに少し鼻をしかめて私に言った。私も気づいていたが、彼女たちの身体は近くで良く見ると耳や襟元に垢がたまり、制服も汗と土で汚れて、全身からすえた匂いを発していた。恐らくその若い女子に相応しくない不潔な姿に教頭は失踪中、彼女たちが男子学生とよからぬ関係に及んだことはありえまい、と確信したのであろう。

　だが私には彼女たちの耳許の垢がたった数日でこんなにたまるのか、まるで何ヶ月も風呂に入っていないような気がしてそれが不可解だった。

　彼女たちは大人しく私の後に従って寮に戻ってきたので私は彼女たちに浴室へ行くように命じ、脱衣所に伴っていった。しばらくは目を離すなと言われていたからで、彼女たちは同性の私の目を気にすることなくするすると服を脱いでいった。ブラウスの裾から枯れ葉が脱衣所の床に落ちた。よく見れば髪に草の葉がついたままの者もいる。

　本当に野山でこの子らは仔犬のようにころげまわっていたのか、と納得せざるを得ないが、しかし、やはり、あの日の晩のことが気になった。

　あれは彼女たちではなかったのか

　私は思い切って聞いてみた。

「ねえ、みんな、いなくなった日の晩、もしかして花園町にいなかった」

　花園町にいたのなら彼女たちが遊びほうけたのは神宮の森あたりということになり、辻褄もあう。

　彼女たちは私の問いかけに一斉に振り返り私を見た。

　私はぎくりとする。

　あのうすら笑いがその顔に浮かぶ気がしたからである。

　しかし、彼女たちは一、、斉に首を傾げた。

　その姿は何だか彼女たちの身体がただ一つの意志に操られているような気が一瞬した。まるで号令でもかけたかのように整然としていたからだ。戸惑う私を残して彼女たちは無言のまま浴室の扉をあけると硝子戸の中に一人一人と消えていった。

　私はふとその彼女たちの後ろ姿に違和感を感じた。浴室との境の敷き居をまたぐ、その時の仕草が妙になまめかしかったのだ。

　とは言え、その意味を問うことができるはずもなく、ただ釈然としない気持ちだけが残った。

　私のその違和感は結果としては当っていたことになる。彼女たちの異変に気づいたのは寮長のフジタと渾名される上級生だった。彼女は強度の近視で眼鏡をかけているが、それがパリ帰りでその頃画壇を騒がせていた藤田嗣治の眼鏡に似ていることで付けられた陰口である。彼女が陰口を叩かれるのは寮生たちの些細な行動や異変を逐一、寮監や教員に告げるからだ。寮生たちはそれを教師に気に入られるための点取りのためと非難したが彼女にそのような野心はない。ただ与えられた仕事に律儀であり過ぎるためだ。何かあったら報告しなさい、という寮監のことばに愚直なだけで、そもそも騒ぎの前に、その彼女から失踪した者たちについて何の異変の報告もなかったことで叱責されて哀れなほどに落ち込んでもいた。

　だが、戻ってきた女生徒たちに次に起きた異変については流石にフジタも男性である寮監には告げにくく、学校では一番の新米で何の権限もない私にまず告白したのは、彼女一

彼女たちは私の問いかけに
一斉に振り返り私を見た。

信じてしまうほど何も知らない子供だったといえる。

女生徒たちが戻きたのはそれから三日後だった。目撃した生徒の話を信じるなら裏庭の中ほどが、かげろうのようにまず揺れて、それが水面の乱れが元に戻って映っていたものの像が再び結ぶかの如く、ゆらめきながら彼女たちの姿が現われたのだ、という。彼女たちの帰還を発見したのは私の受け持ちの生徒だった。枕草子の一節を私が暗唱している間、授業が身に入らず窓際の席で校庭をずっと見ていた彼女が「ひいっ」と叫び、不意に立ち上がったのだ。

彼女のふるえる指先は窓の外に向けられていた。

「――さんたら、昼間にお化けでも見て」と級長の生徒がからかうように言ったが蒼ざめた顔の彼女の視線が動かないので仕方ないわね、といった顔でなだめるように窓の外に目を向けると今度は彼女の顔が変わった。そして私の方を見て「先生、――さんたちが戻ってきました」と叫んだ。彼女の声に一斉に生徒たちが立ち上がる。失踪の一件は箝口令が敷かれ、生徒たちには一部の不良たちが示し合わせて脱走した、学校はこのまま戻らねば親にも通告し放校処分も考えていると普通の事件として説明しようとしていたが、柳田と北神の言葉を聞いたわけでもないのにあっと言う間に失踪の真相は神隠しだという噂が学校中に広がっていた。無理もない。この年頃の娘たちはただでさえ狐狗狸さんだ、西洋の星占いだと神秘主義に魅せられ易い。学校が失踪した娘たちを学校嫌いの不良と無理に決めつけてもむしろ身近な彼女たちはそれを嘘だ、と知っている。

それ以前に、不意に行方知らずとなる、という出来事そのものがこの年頃の少女の琴線に触れることは私にもわかった。彼女たちが無関心でいられるはずがない。私だって北神にあの夜、言われた通り、私は兄さまに自分を重ね合わせ、どこかに攫われたい、と願っているぐらいだ。

今も願っている。

けれど私たちは誰にも攫われることなく、やがて平凡に嫁いで平凡に母親になり、窓辺で人攫いを待って佇むこともなくなるのだ。

だから神隠しという噂は女学生たちに共通の願望のようなものだった。

その彼女たちが神隠しから戻ってきたのである。

級長に皆を着席させるように命じると私は窓の外を見た。

彼女たちが立っているのが見えた。

あの晩に見た不確かな存在としてではなく、おかしな言い方に聞こえるかも知れないが二本の足で校庭の地面の上に立っていた。

その足許は、しかし、何故か素足だった。

私は窓から身を乗り出し、「あなたたち」と呼んだ。

彼女たちは私の声に我に還ったかのようにきょとんとした顔で一斉にこちらを見上げた。

あの、うすら笑いはそこにはなかった。

他の教室でも何人かに彼女たちの帰還は目撃され、すぐに校長たちに報告された。騒然とする生徒たちに教室で自習するように命じて、失踪から戻った生徒たちは保健室に集められた。まず、何か大事が起きていないかを案じたためだが、しかし、素足や腕に小さな切り傷があるものの大きな負傷はないことだけはすぐに確かめられた。私はこれまでの成り行き上、彼女たちを引率する役割を命じられた。他の教員たちに余り仔細を知られたくない、という教頭の思惑はわからないではなかった。

一つ奇妙と言えば、全員が裸足なことだが、手足の切り傷が草の葉で切ったり、野薔薇か何かの棘で引っ掻いたものに見えること、そして何より、彼女たちの制服に草や葉が付着していることで、彼女たちが野原で遊びほうけていたことが知れた。

「皆さん、一体どこにいってらっしゃったのです」という教頭の第一声には皆、うつむき口をつぐんだが一人だけうっかりと「山」と言って周りから目配せされたこともそれを裏付けることになった。女学校からは神宮の森

北神伝綺

HOKUSHIN DENKI

なかったが、校長たちは集団での脱走であろうということに落着いた。数日中に戻ってくれば幾日かの謹慎で、戻ってこなければ放校処分、ということで内々に処分をと申し合わせもなされたようだ。私はただその結論だけを何だか因果を含められるように教頭から聞かされた。

　けれどその日の私は不謹慎にも教え子たちの行く方よりも、もう一度、北神に遭えたことの方に高揚してラジオ気分で花園アパートに戻ったのだった。

　その北神がまた私の前にいる。

　私はしかしさすがに今度は再会を無邪気に喜ぶわけにいかなかった。何が起きたのかは理解できなかったが身の危険に曝されたことだけはわかった。そして北神が私を助けてくれたことも顚末から理解は出来た。

　けれど目の前で消えていった女生徒たちのことを考えると私は混乱する。

「神隠しに遭いかけたって、私が彼女たちに連れていかれそうになったことをおっしゃっているのですか？」

「やはり誰かに連れていかれそうな気がした？」

　北神は灰色の、あのさっき夢で見たロシアの空の色の瞳を向けて尋ねた。

「ええ、誰かに襟元を強い力で引きづられるような感じがして……」

　私がそう言うと、へえ、という少し驚いた顔を北神がした。私はその意味がその時はわからなかったが、北神はその時にはもう私たちのことに気づいていたのだ、と今は思う。

「滝子さんはあの女生徒たちと同じで神隠しに遭い易い気質のようです」

　北神はただそう続けた。確か柳田も昼間、同じことを言っていた。

「神隠しに遭い易い気質？　そんなもの、あるのですの？　風邪を引き易いようなものかしら？」

　私の譬えにくすりと北神が笑う。

「まあそんなところです」

「でも神隠しなんて本当にあるのですか」

「人攫いや家出や誰かに殺されて行方不明となったものも昔は皆、神隠しと言って済ませたのでしょうが今はそういうわけにもいかない。どこかに逃げて隠れて住んでも国勢調査で居場所がわかってしまうし、殺されていれば警察が見つける。しかし、そうではない者もいるはずです」

「では、私がさっき見たのは？」

「本物の神隠しに遭った娘たちです」

「でも一体、どういう神様なんですの？　女学生を攫うなんて」

「それはさっき滝子さんが感じたでしょう」

　私は胸元をぐいとつかまれたあの力を思い出す。

「……恐くはなかったわ」

「それは滝子さんが神隠しに遭い易い、つまり、誰かに連れていって欲しいと願っているからかもしれませんね」

　それは図星だった。私は兄さまのように人攫いに連れていって欲しい、と本当にずっと思っていたのだ。それが母さまに嘘の話をしてしまった理由だ。

　そして、北神は私のことをたった三度しか会っていないのに何でもわかってくれている、とまだ初な少女の気持ちが半分は残っていた私は更に北神を信用してしまった。

「でも私はもう神隠しに遭いたいなんて思いませんわ」

　私は思い切っていった。それはあなたと遭ったから、とさすがにその後に続けることはできなかったが私の生まれて初めての愛の告白だった。

　けれど北神はあの少し困った曖昧な微笑でたちまち私をはぐらかした。一体、それから何度、愛していると声に出して叫んではこの微笑にはぐらかされることになるのか。

　そして、私に触れることもなく「今夜はもう大丈夫でしょう」とくるりときびすを返した。

　私はその時初めて北神の肩にえりまきのように巻かれているのが、女物のショールだということに気づいた。

　それはあの夢の中で私が羽織っていたショールと同じ色だった。愚かな私はその符合さえも、自分と北神との間の赤い糸の一つだと

滝子さんはあの女生徒たちと同じで
神隠しに遭い易い気質のようです。

ず確かめる。街路樹からまだ青い銀杏の葉がはらはらと幾枚も落ちてきた。
　私はふうと溜息をつくと、その音の主が私の後ろにいることをとうに察していたからゆっくりと振り返った。
　やはり、北神が、いた。
　凛とした表情で、いた。
　そして私は彼の口許に弦の代わりに一本の髪がくわえられもう一方が北神の左手の小指に結ばれているのを見た。
　その姿に胸がきゅんと締め付けられるように痛かった。
　何故ならあの髪は、最初に会った日、私の頭から北神が一本、抜いた髪だ、と私は確信したからだ。それがまるで私たちの運命を暗示するかのように彼の小指に結ばれているのだ。
　北神は口許をゆるめると髪の毛を小指にくるくるっと巻いた。そして、少しあきれたような顔で、
「君は今、神隠しに遭いかけたんだぜ」
と言った。
「神隠し？」
「そう、昼間、柳田先生が言ったろう？　彼女たちが消えた理由は神隠しだって」
　私は思い出す。女生徒たちの失踪騒ぎに居合わせた柳田が講釈を始めた時に北神が現われそう言ったのだ。
「確か神隠しって言ったのはあなたでしょう」
「柳田先生のおっしゃることを先に言ったまでだよ」
「それであの後、柳田先生はあんなに不機嫌に」
　私は思い出し笑いをする。昼間、北神に最後の決め台詞を浚われた柳田は禿げ上がった額のてっぺんまで真っ赤にして「それがどうした」と言い捨てたのだった。
　とは言え、それまで散々、思わせぶりな講釈に付き合わせておいて、結論が「神隠し」だということに私たちはあきれていた。私よりはるかに現実主義者でそれより失踪事件が公になればその責を一身に背負う校長などは「神隠し」と言われてもそれではどうすればいいというのだ、と困惑を真先に憤りへと変えていた。
　しかし、柳田は意に介さなかった。
「そもそも神隠しとは」
　柳田は再び講釈に入ろうとしたが校長先生たち三人は顔を寄せて少しだけひそひそと話すと「いずれにせよ、この件は御内密に」と柳田に制するように告げたのだった。そして
「それでは柳田先生、この度は御講演に来て頂いたのに私たちの不始末で大変、御迷惑をかけました」と慇懃無礼とはこのことかとばかりに言って一礼するとそそくさと立ち去った。
　私はどうしていいかわからず、おろおろとその場に残った。
「ま……待ちたまえ、君たち、まだ話は」
「話したところで事件が解決するわけではないでしょう。それにどうせフィールドワークをするのは先生ではなくぼくなのでしょう」
　前半はなだめるように、そして後半はいささか棘のある言い方で北神は言うと、柳田は忌々し気に女生徒たちの血の跡の残った石を杖でこづいた。
「ふん、そもそもがただでさえ神隠しに遭い易い年頃の娘の集まる女学校にこんなイシガミなどを置くからいかんのだ」
　柳田が石に八つ当たりするように言うのがおかしかった。
「イシガミ」という聞き慣れぬ言葉に私は少しだけ興味を持ったが、そのことを口にすれば柳田の講釈が始まりそうなので止めた。
「いずれにせよ、あなたはあまりこの事件に関心を持たないことです」
　その言い方が気に入らなかったので「あら、事件ですの」と私が問い返すと北神は曖昧に笑った。それで私はそれ以上、聞くのを止めた。
　その時はこれから先ずっとこの曖昧な微笑によって私の北神への憤りも嫉妬も怒りも一切がはぐらかされてしまうことになるとは思わず、ただつられるように私もまた曖昧な微笑を返したのだった。
　その日、女生徒たちは寄宿舎には戻ってこ

して連れ戻さなくてはならない、と理性で思い直し、もう一度、「あなたたち、戻っていらっしゃい」と叫んだ。
　すると女学生の一人が軽く肩をすくめた。
　そのつもりはない、という意志表示のように思えた。
「とにかくそこで待ってらっしゃい。今、おりていくから」
　私は寝巻きのままでアパートの部屋を飛び出し三階から階段を駆け降りた。
　アパートの外に並ぶ街路樹の灯りの下に彼女たちは漂うようにいた。
　漂うようにというのは比喩ではない。
　彼女たちの存在そのものがひどく不確かなものとしてあったのだ。
　普段の彼女たちならその若々しい肌の色は朱に近く、そして夏服の制服の白とスカートの紺がそれをよけいに引き立てていた。
　けれども今の彼女たちには色というものがなかった。夢の中でみたロシアのよどんだ空さえ、そこには灰色や黒やあるいはかすかな青というものがあった。強いて譬えるならひどく映りの悪い、フィルムのかすれたシネマの画面に似ていたがしかし彼女らの姿はひどく不安定に左右に揺れた。
　後で考えれば奇妙なことだが私は幽霊ということばをそこで全く思い浮かべることはなかった。彼女たちはただ、漂っていた。私は意を決して彼女たちに近づく。彼女たちの誰か一人の手首をしっかりとつかまえればそれで済むと自分に言い聞かせていた。
　私は一番手前にいた一年生の小柄な少女の右手に手を伸ばし「――さん」と彼女の名を呼んだ。
　次の瞬間、私の身体はさっきよりはるかに具体的な恐怖で凍てついた。何故なら掴んだはずの彼女の手首を私の手が通り抜けてしまったからだ。
　雲を掴むような、という言い方が比喩であるが、私は本当に雲を掴んだ気がした。私の手の中に目の前にいる彼女の手首の感覚はない。けれど彼女の手首は私と重なっている。
そう。
　重なっているのだ
　二重映しの写真のように。
　私は驚きの余り自分の手を引くことさえ忘れてしまった。すると少女はあきれたように私の顔を見ると彼女の手を引いた。私の指は一本も開かれていないのに手首はすっと離れた。
　私は混乱する。
「あ……あなたたち」
私は叫ぶ。
彼女たちは再び一斉にこちらを見た。
　そして、あの人の笑いでない笑いを浮かべてもう一度、私を見た。
　不意に私の身体が前のめりになった。
　何かに身体ごと持っていかれそうになったのだ。軽くよろけた私を見て、彼女たちはおや、と不思議そうな顔を浮かべた。
　何が起きたのか理解できないまま身体を起こした私を今度は憐憫とは違う、値踏みでもするような目でしげしげと見た。
　もう一度、今度ははっきりと強い力で寝巻きの胸元をぐいと引かれた気がして前のめりに彼女たちの側に大きくよろけた。
　私の前の数人が私を受け止めるつもりなのか両手を大きく広げた。
　その時だ。
　ゆお――ん、とあの音が響いた。
　空気がびん、と震える。
　それが誰の発した音か私にはすぐに承知できた。女生徒たちの表情に困惑が走るのがわかる。
　もう一度、今度はもっと強く、おんと鳴る。
再び空気の震動が津波のように私の背後から押し寄せてくるのがわかる。
　女生徒たちの表情は驚愕に変わる。
　そして彼女たちが後ずさりするよりも早く、音の津波は彼女たちを呑み込み、そしてその姿は左右に乱れるようにかき消えた。その瞬間、彼女たちは互いに目配せし一様に満足気な表情を浮かべた。
　その笑いだけが彼女らの姿が消えた後にまでチェシャ猫の笑いのように束の間残り、しかし、たちまちすうと闇に呑まれた。
　私は自分の足が地面についているのを思わ

昼間、消えた私の学校の女生徒たちが立ちつくしているではないか。

の機会に祖国を捨ててアメリカに渡るか二つの途を自由に選ぶことができた。科人には祖国を捨てる自由が与えられるわけだ。多くの家族がアメリカ行きを選び、私は父さまも決心して下さらないかと毎日、マリア様のイコンにお祈りをしていたのだった。

私の腕の中には今しがた図書館から借りてきたばかりの英語のアルファベットで書かれた絵本があった。ロシアの文字ではなくアメリカの文字を覚えなくてはならないことは少しも苦ではなく、むしろ踊り出したいほど嬉しくてそれで、私は本当にこうやって、雨の中を踊っているのかと、そのロシアの不思議な身の上の少女ではないほうの私は思った。

そして私は初めてああ私は夢を見ているのだなあ、と理解した。

その時だ。

不意に私は強い視線を感じた。誰かが私を見つめている。ただ見つめているだけなのに私の背中がその視線を感じている。それほどに強く、私をとらえて離さない視線。

私はその視線の強さに驚き、振り返らず足早に石畳の上を駆け出した。そして逃げ込むように家の前の石段を駆け上がると、私は少しだけ乱れた呼吸を整えた。

視線はまだ、ついてくる。

私はその視線の主を確かめようと決意して振り返る。

あっ、と私は眼を瞠る。

そこに居た者の顔を見て、私の心臓がどくん、と大きく脈打つのが夢を見ている私にはわかった。

私が見た者が誰だったのか確かめようと夢を見ている私がもう一度目をこらすと、私の目の中に飛び込んできたのは天井のランプだった。窓から入る夜風に微かに揺れていた。

私は自分の胸の鼓動がまだ高鳴っていることに気づいた。視線の主の顔を見てロシアの少女であった私は驚いたのだ。しかし、私の目の中に飛び込んできたその者は誰だったのかと思い出そうとしてもできない。夢の中のロシアの少女は視線の先にあった顔を見たはずなのに夢を見ていた私はそれを確かめる前に夢からさめてしまったのだ。

ただ、彼女の胸の高鳴りだけが私の身体に残され、私はその意味が測りかねた。つまりそれは脅えや驚愕とは違うもののように思えたからだ。しかしそう感じたのは私の身体の芯にまだ残っていた熱のせいかもしれなかったけれど。

私は水差しの水で喉を潤そうと母さまの形見のベッドを降りる。レースのカーテンが窓からの風に揺れているのを見て、夜の冷たい外気に触れてみたいとふと思った。

けれどそれは本当は言い訳で、誰かが私の部屋の窓を見上げている気が不意にしたからだ。

今度は私自身の感傷によって胸が少しだけ高鳴った。

何故か私は北神がそこにいる気がしたのだ。

だから私はなるべく自然に見えるように意識しながら、半開きの観音開きの窓を大きく開けた。

そこにいたのは北神ではなかった。

昼間、消えた私の学校の女生徒たちが立ち尽くしているではないか。制服の後ろ姿から私はそう思った。

その頃、私が住んでいたのはカフェの女給たちが多く住む四谷区花園町の花園アパートで、新宿の遊廓とは目と鼻の先だった。

「あ……あなたたち、こんなところで何をしているの」

私は真夜中であるのを忘れて思わず叫んでしまったのは、夜中に女学生がいていい土地柄ではとうていないからだ。私の上ずった声に少女たちは一斉に振り返る。

やはり失踪したあの娘たちだ、見慣れた顔がある。だが、彼女たちと視線があった瞬間、私は自分の全身の皮膚がまず、恐怖するのを感じた。肌が反応し、そして遅れて私は私が彼女たちの口許に浮かんだ、まるで私を憐れむようなうすら笑いに恐怖している自分を理解したのだ。

それは人でない者の笑いだ、と思った。

私は思わず後ずさりする。

けれども行方不明の女学生たちが声の届くところにいる以上、彼女たちを呼び止め、そ

あ・ら・す・じ

幼い頃、お兄さんがさらわれたという「偽りの記憶」を持つ滝子は、ある時、誘われるように邂逅した拝み屋・兵藤北神に恋をする。女学校の代用教員として母校に赴任した滝子を待ち受けていたのは、女生徒たちの失踪――“神隠し”だった!?

私は夢を見ない子供だった。

夢を見ない、というのは将来や未来に何の展望もない、という意味では無論ない。眠っている間、私は夢を見ることがないのだ。女学生の頃、同級生たちが片恋いの相手に夢に現われてもらうためのお呪いについてあれこれと熱心に話している会話に成り行きで加わりながら、そもそも夢で誰かと会うこととはどういうことなのか、それは私があの人さらいにさらわれた兄さまの記憶をベッドの中で一人反芻することとどう違うのか、うまくわからなかった。

夢を見ない、といっても目蓋を閉じた瞬間に眠りに落ちたことさえ気づかずに次の朝を迎えるわけではない。眠っている私は、その眠っている私を一晩中、ずっと意識している。譬えて言うなら深い闇の中に私のベッドがぽつねんとあって、その傍で眠る私をもう一人の私がじっと見つめている、そんな感じだ。

つまり、それが夢なんだって、そりゃ、滝子は少し変わってるけど、と私が夢を見ないことを思い切って告白した女学校の一番仲の良かったお友達に断言されても私は釈然としなかった。夢とはもっと甘く切ないものだと思っていたのだ。例えば、兄さまがさらわれた私の一番、古い記憶のように。

けれども私はその晩、初めて夢を見たのだ。北神と二度目にあった日の夜のことだ。昼の騒動の余韻なのか、私は何だか私の肌が微熱を出した子供の肌のように火照る気がした。終わり損ねた夏の陽射しの中で、私たちは柳田と北神の奇妙な講釈を随分と長く聞いていたので、あるいは軽い熱射病にでもかかったのかもしれないと窓の扉を少しだけ開け、外の空気を部屋に招き入れた。それから、昨年の流感の時に母さまのために買って結局、使うことはなかったダンロップ製の水枕があったのを思い出してベッドにしつらえた。洗い立てのカバーに巻かれた水枕に頬をつけると木綿の感触を隔てて伝わってくる冷たさが心地良かった。

すうっと、睡魔が訪れる。目蓋を閉じるとぴちゃぴちゃと水溜りの中を誰かが歩く音がした。窓を開けた時は星が見えたのに突然雨が降ってきたのかしら、ならば窓を閉めないとなどと思いながらもう目蓋も身体も重く私の意のままにはならなかった。

耳をすました。ああ、雨の音が聞こえると思った。

そして私は雨の中を傘もささずに水溜りの中を踊るように歩いている私に気づいた。私は傘の代わりなのだろうか灰色の毛糸で編んだショールを肩からかけている。雨はそのショールの色にも似た重い灰色の空から風に乗って渦を描くように落ちてくる。庇の低い異国の建物が並ぶ通りに私は立っている。わずかに黄葉した落葉松が規則正しく植えられた緩い勾配の石畳の路を私はスカートの裾を腿のあたりまでめくって素足にははねかえる水溜りの水滴の感触を無邪気に楽しんでいるのだ。私は石畳の上に連なってある水溜りの輪を石蹴りの陣地に見立てて跳ねていっている自分に苦笑したが、同時にそう思った別の私が私の中にいることに私は気づいた。

その私の気分は高揚していた。

それは私を見つめる私にも伝わってきた。

そう、だって私はもうサハリンに住まなくてもいい、この土地がロシアのものでなくなったのだから私たちは出ていかなくてはならなくなったのだ。父さまと母さまは自分たちの住んでいた土地が突然、ロシアのものでなくなってからというもの途方にくれて何日も深刻に話し込んでいた

父さまにはロシアに残れない事情があったのだ。父さまはこの島を離れて故郷に戻ることができない科人なのだ

けれど昨日父さまが役場の吏員から一冊の仮綴の本をもらってきた。そしておまえが家族を代表して勉強しておけ、父さまたちは歳なのでもう新しいことを覚えられないと諦めたように言った。アメリカ案内、と表紙に書いてあるのを見て私の心は躍った。

アメリカへの移民を父さまは決意したのだ。村の者たちのうち科人の家族でない者たちはロシア本土への帰り仕度を始め、そして科人の家族たちはここよりももっと気候の苛酷なシベリアの流刑地に移住するか、もしくはこ

女生徒の失踪の謎の真相を求め、滝子は再び北神のもとへ。
しかし、そこには……。
小説家・大塚英志が贈る、闇の昭和史、連載第2回。
北神伝綺
HOKUSHIN DENKI
大塚英志 otsuka eiji 画：森美夏 mori yoshinatsu
第二講 稀に再び山より還る者ある事

ないけど、魔術士は名前をいくつも持ってるじゃないか。それと一緒だよ。マリアンヌってのは、僕がもう捨てた名なんだ。いやなんだ。嫌いなんだ。その名前で僕を呼ぶな」

「……だが、マリアンヌ……」

「呼ぶなって言ってるだろ？　なんでわかんないのかな。ばか？　それに、勘違いしてるみたいだからはっきりさせとくけど、僕は女の子じゃないから」

「な――」

「女じゃないって言ったんだよ。僕は言ってないよね？　一言も。僕が女だなんて。まあ、最初はそう思われてるほうが都合がよさそうだったからさ、黙ってたんだけど……いいかげんね。がまんの限界ってやつ？　本当は、ずっと、ずっと……気持ち、悪くて」

「……そう、だったのか……？」

「あんたの目が――目が、節穴だからさ！　節穴どころか、あんたは目が見えないんだから！　だから――わかるはず、ないんだよ。所詮、あんたなんかには。騙し――やすくてさ。いいカモだったよ。世間知らずで、金の価値も知らなくて――何も、知らなくて、結構稼がせてもらったからさ。もう……いいかなって、ね。だって、あんたときたら、もう僕にベタ惚れでさ。動けるようになったら、いつ襲われるかわからないしね。冗談じゃないよ。気持ち悪い。気持ち――悪いんだ、マジで」

「……きみは……泣いているのか？」

「泣いてなんかない！　ふざけるな！　どうして僕が泣かなきゃならないんだ！」

　僕は袖で顔をぬぐった。この服はヴィンセントがアール・ベルアノンに作らせたものだ。女性用だけれど、男装風で、旅をするのには悪くない。それら衣類や生活道具など、荷物はもうまとめてある。今までの給金は王立銀行に預けてあるのでいいとして、ヴィンセントの書斎にあった現金も盗んで懐に入れた。護身用に使えそうなナイフも背負い袋につめてある。行き先もだいたい決めた。首都エルデン。僕はあの街に帰る。忌まわしいあの街へ。すべてを失った街へ。そこで僕はとりもどす。僕自身をとりもどす。僕は生きる。一人で生きてゆく。必ず生きていってみせる。

「さよなら、魔術師ヴィンセント」

　僕は目を閉じ、耳を塞いで、駆け去る。もう彼の姿を見たくない。彼の声を聞きたくない。彼のことなど忘れてしまおう。僕は一人で生きてゆくんだ。一人きりで生きてゆくんだ。そうすれば、誰のことも裏切らずにすむだろうか。誰も傷つけずにいられるだろうか。

end

くそうとしている炎霊Ｎｉｇを静めてくれ。ぼくは祈りをこめて魔術を発動させた。マリアンヌの声が聞こえた。ぼくの名を呼ぶ声が。ぼくは満ち足りた気分で闇に落ちた。

「――儂も年だでな。何度もこりゃ駄目かと思うたが、手を貸してくれた知りあいの医術士らの腕がようて、応急処置がいい具合にできたのがさいわいだった。怪我の程度が程度だで、完治までにはまだいくらか時間はかかるであろうが、峠は越えたよ」
「そう……ですか」
「いや、あんたが駆けこんできて話だけ聞いたときは、そりゃもういかんだろうと思うたが。魔術による火傷はタチが悪うてな。それがもとで死ねば、蘇生も叶わんことが多い。弱気になっとったところに、やるだけやってみてくれとえらい剣幕であんたにゆわれて、間一髪、医術士の精神を思い出した。年ばかり食って、情けない話よな」
「いえ……私は、べつに……」
「謙遜することはない。あんたは治療の間、ヴィンセントさんを何度となく元気づけてもくれた。もう一人の、おなごの――なんといったかな、エドガーさんか。やれ、魔術士というやつは、マナだのカナだのおかしな名前がいくつもあってわけがわからんが、あっちのほうも、あんたが一緒にとゆわなけりゃ、ここに運びこみはしなかった。魔術師マガロさんもあんたには感謝しとったよ。何しろ、弟子二人の命を救ってくれたんだからな」
　真面目につきあっていると、老医術士の話は、いつまでたっても終わらない。それはもう学習していたから、あとは黙ってやりすごし、時機を見計らって、老医術士の診療室を辞した。
　このホーエングラム診療所には、所長の老医術士マフ・ホーエングラムの他に、見習いの医術士が何人かいて、入院患者を収容するための病室も五つある。今、四号室にいるはずのエドガーとは一度も顔をあわせていない。彼女も――そう、エドガーが女性だということは、ホーエングラムに聞かされて初めて知ったのだが、彼女も会いたくなどないだろう。そもそも、なぜヴィンセントは、藍色の炎につつまれた彼女を縛氷獄で救おうとしたのか。わからないし、わかりたくもない。理解する必要もないと思う。エドガーはヴィンセントを殺そうとした。ヴィンセントはそんなエドガーを助けた。その事実は当事者二人だけのものだし、その意味は二人がそれぞれ受け止めればいい。あとは勝手にやってくれればいい。僕には関係ない。これで――今日で、本当に、完全に、関係なくなる。
　五号室。
　ノックをせずに入った。
　ヴィンセントはベッドの上で上半身を起こして、窓のほうへ顔を向けていた。顔色はだいぶいいようだが、もともと痩せていたのに、以前よりさらにこけた。火傷はもう治っているものの、焼け焦げた毛髪はいったん剃り落とされたので、まだ丸刈りに近い。なんだか、怪我人というよりも、病人みたいだ。死病に冒されて、一人で静かに終わりの時を待っている。そんなふうに見えて、一瞬、心が揺らぎそうになった。
「マリアンヌ」
　ヴィンセントがこちらに向きなおった。
　その面にほっとした表情が浮かんでいる。
　返事をしそうになって、こらえた。
「――マリアンヌ。どうしたのだろう。きみだということはわかっている。ぼくの目はこの通り見えないが、きみを感じることはできるのだ」
　治療中、ヴィンセントは何度も危篤に陥った。一般に火傷は体表面積の三割に及ぶと生命に危険が生じるとされるが、ヴィンセントの場合は四割にも達し、循環系だけでなく、複数の臓器にも障害が起こって、脳まで深刻な損傷を受けかけていた。医術士に手を握って声をかけてやってくれと求められ、応じた。あの状況で拒否できる者はめったにいないだろう。だから、仕方なく、だ。やりたくてやったわけじゃない。まあ、一応、恩人でもあり、雇い主でもある。義理というやつだ。それで、屋敷の仕事をこなしつつ、毎日見舞いにきた。意識が戻ってからは、話くらいはした。おかげんはいかがですか。そうですか。お大事になさってください。それでは、また明日おうかがいします。
「マリアンヌ」
　でも、もうそろそろいいはずだ。
「――マリアンヌ。なぜ答えてくれないのだろう。ぼくはひどく不安だ。ぼくは……こうして臥せっているせいだろうか。初めてなのだが、一人でいることがとても苦痛のようだ。気がつけば、きみを待ちわびている。ぼくはいったい……どうしてしまったのだろう」
　知らないよ。
　知ったことじゃない。
「マリアンヌ。お願いだ」
　やめて。やめてよ。やめて。聞きたくない。聞きたくないんだ。
「ぼくのそばにきてくれないだろうか」
「いやだ」
　冷たく、言った。一つ、深呼吸をした。
「――やめてくれない？　マリアンヌ、マリアンヌってさ。そんな名前で、僕を……僕を呼ばないでくれる？」
「僕……？」
「ああ、そうだよ。僕の名前は違う。それは僕の名前じゃない。あんただって似たようなものだろ。なんだか知ら

たしかに、そうかもしれない。
　だって、ぼくは今、当時百十八歳の父が、魔術士八人を相手に戦い、五人までを討ち果たしたと聞いて、ひどく嬉しい。父は理論だけの人ではなかった。立派な魔術士だったのだ。父とぼくは、結局のところ、同じ道を歩んでいたのだ。ぼくは父のあとを追っていたのだ。そのことがやけに嬉しいのだ。
「……あり……が……とう……」
　自然と感謝の言葉がもれた。
　図らずも、それがエドガーを逆上させてしまった。
「ああ？　何……？　ありがとう？　なんだよ、それは。いったいどういう意味なんだ、ヴィンセント。ええ？　お前――いいかげんにしろよ。私を馬鹿にするのもいいかげんにしろ。許さないぞ。私を――馬鹿にして。ふざけるんじゃない。やっぱりお前はそうか。そうなのか。いいさ。わかったよ。見せてやるよ。お前に見せつけてやる。私はもうお前が知っている私じゃない。私の力はお前より上だ。その力で、あの淫売を殺してやる！」
「……や……め……やめろ……！」
　ヴィンセントはなけなしの力をふりしぼってエドガーの足にすがりつこうとした。だが、この身体はあまりに鈍重だ。動かない。うまく動いてくれない。ああ、マリアンヌ。逃げてくれ。お願いだから逃げてくれ。エドガーの言うとおりだ。きみが殺されるなんて耐えられない。ぼくはどうなってもいい。だが、きみには生きていて欲しい。一年だ。きみは一年もぼくのそばにいた。きみはどこか近寄りがたかった。ぼくたちの間の距離は最初のころとさほど変わっていない。ぼくがたわむれに魔術を教えても、読書をすすめても、きみの態度はほとんど変わらなかった。屋敷のなかも、きれいに掃除されながら、家具等の配置は基本的に変わらなかった。静かだった。穏やかだった。それでいてほのかにあたたかかった。ぼくはその空気を愛した。その空気を作ってくれたきみを好ましく感じていた。きみがいつか旅立つことを考えると、落ちつかない気持ちになった。きみがいる。いつの間にか、それがあたりまえになっていた。あたりまえなどではないのに。マリアンヌ。つまり、ぼくは、きみを失いたくないのだ。その一心で、なんとか両手でエドガーの足をつかんだときには、もう遅かった。
「ＮｉＬＩＬＮｕｍＭｏＬＳｅＬＺｅＬ我中子浄化闇魔也」
　その呪文は。長く、複雑で、特徴的な暗号化を施された上古高位語の呪文は――まさか、と思った。エドガーはそこまで到達しているのか。もっとも扱いにくい要素精霊のうちの一つとされる炎霊Ｎｉｇを手なずける、もしくは、服従させるまでに。藍色炎上。ヴィンセントにはもちろん見えないが、猛り狂う藍色の猛火で標的を焼きつくす、超高等要素魔術だ。ヴィンセントは絶叫した。やめろ。やめてくれ。頼むから、やめてくれ。お願いだ。マリアンヌを焼かないでくれ。燃やさないでくれ。殺さないでくれ。それくらいなら、ぼくを殺せ。どうかぼくを殺してくれ。
「ＤａｇｅＩｉｓＦｏｎｄＶｏｎｄ真藍蓮往還涅槃王ＳｅｖｅｎＮｅｖｅｎＸ＋Ｘ」
　だが、呪文の詠唱は止まらない。足を引っぱったくらいでは、エドガーの集中を乱すことはできない。駄目だ。駄目なのか。もう間に合わないのか。
「喪――慧――手――翅――痲――衛」
　間に合わなかった。
　藍色炎上が発動した。
　燃えあがった。
　エドガーが。
「……逆流……？」
　ミゲロ・ラブソルド流に言えば、気性の荒い要素精霊たちの力を借りようとして、失敗したときに起こる現象だ。狙った相手ではなく、自分自身に向けて魔術が発動する。ヴィンセントはのっそりと転がってエドガーから離れながら、焼け焦げたジャケットのポケットに手を突っこんだ。触媒。無限凍土産の氷石の欠片と、防水耐火布でつつんだハクバネ草。「……ヴィンセン……トォォ！」エドガー。きみは。「くそぉ……熱い……熱い熱い熱いぃぃ……！」自分自身の力を量り間違えた。きみは冷静ではなかった。「――た、助けて……くれ……！　誰か！　ヴィンセントォォッ……！」藍色の炎に焼かれるきみを、哀れんでいるわけではない、と思う。だが、今になってようやくわかったのだ。ぼくがきみにしたことの意味を。ぼくはきみを拒絶した。いや、それどころか、無視して遠ざけた。きみはそれでもあきらめなかった。ぼくも同じ態度をとりつづけた。きみを狂わせたのはぼくかもしれない。ぼくは集中する。ときに精神は肉体を超越するのだと信じて。
「寒礎罪母刹ＲｅｕＬａ外ＮａｕＲａ矛Ｊｕｄａｓ怨氷結酷寒冷獄」
　縛氷獄。我が友たる水霊Ｈｙｄと時霊Ｘｅｏよ、どうかエドガーを焼きつ

お前が信じている力なんてこんなものだ。お前は愚かだ。

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」
　雷霊Ｘｅｗはイキシシュタロとオーボンの結晶を一瞬で食らいつくした。ヴィンセントが持つハクロケイという暗黒大陸でしか見られない木でできた杖の先には、透明な石が埋めこんである。とりたててなんの効力もない、ただの石だが、集中点として用いるだけだから、それでいいのだ。爆雷索。透明の石から、数条の雷が放射された。それらはすべてエドガーに襲いかかる。非常に制御が難しい高位の要素魔術だが、エドガーは魔術の準備に入っていて動くことができない。たった一つの動かない的にあてるだけならば、なんとかなる。威力は雷咬撃の数倍。魔力の消耗はそれ以上。だが、これで決める。ヴィンセントが決意をもって放った一撃だった。雷はエドガーをとらえた――かに見えた。
「……消えた？」
　そうだ。消えた。雷はたしかにエドガーを撃ったはずなのに。何か音がしなかったか。砕け散るような音が。わからない。どういうことだろう。とにかく、エドガーは倒れていない。それどころか、もう魔術を発動しようとしている。突然、ヴィンセントの頭のなかに外界の様子がありありと映しだされた。何かが呼び起こされたかのようだった。見える。音が見える。空気の流れが見える。心が見える。マリアンヌが怯えながら、心配しながら、こちらを見ている。エドガーは解放しようとしている。あれは殺意だ。憎悪だ。精霊だ。炎霊Ｚｉｇだ。猛火炎葬。くる。エドガーはやるつもりだ。ぼくを。
「ＭｅｌｇＺｅｌｇＲｅｖＮａｖ遠炎近火ＫｒｅｙＢｒｅｙ動乱砲危黄回廻ＪｅｎＲｅｎＤ」
　違う。
　なぜだ。
　どうしてだ。
「――よせ、エドガー……！」
　ヴィンセントは飛んだ。飛ぶように走った。マリアンヌ。立ちすくんでいるマリアンヌを突き飛ばした。間に合った。きた。魔術だ。炎霊Ｚｉｇが暴れ狂う。ヴィンセントは必死に逃れようとする。猛火炎葬は集中点を中心として一定の範囲内に炎霊Ｚｉｇの強烈な緋炎を生じさせる要素魔術だ。無様に転がってでも、這ってでも、とにかく離れる。離れなければ焼け死ぬ。熱い。熱い。ぼくは燃えているのか。衣類が。皮膚が。肉が。焦げるにおいがする。ぼくは悲鳴をあげたかもしれない。地面に身体を押しつけて火を消そうとしながら、みっともなく泣き叫んだかもしれない。しかし、なぜだ、エドガー。どうしてマリアンヌを狙ったのだ。爆雷索はなぜ効かなかったのだ。わからない。触視はもうきかない。暗い。暗い世界だ。それでも、エドガーが近づいてきたことには気づいた。
「ふはは……ははは。ヴィンセント。みじめだな。でも、驚いたよ。まさか爆雷索を使ってくるなんてね。難しい魔術じゃないか。強力な魔術だ。まともに食らっていたらやばかったな。そのために用意したんだ。宝珠だよ。盾のヤンジャ。お前も聞いたことくらいあるだろう？　要素精霊の力を吸収してくれる。魔導師イブシラと機術師イニ・ガーゴイルが共同で製作した幼宝珠だ。今の一回で壊れてしまったけどね。高かったのに。九十万ダラーもしたんだ。大損だよ」
「……な……なぜ……」
「その淫売を狙ったかって？　わからないのか。意外と馬鹿だな。結果がぜんぶ物語ってるじゃないか。お前自身を狙うより、お前が惚れてる淫売を狙ったほうが効果的だ。あの淫売が死ねば、お前は死ぬほど苦しむ。淫売をかばってお前が死ぬなら、淫売はあとでゆっくり殺せばいい。どう転んでも私にとっては愉快だ」
「……マリ……アンヌには……手を……」
「嫌だね。この期に及んで、私がお前の頼みを聞くと思うか？　思わないだろう？　それなのに、お前は私に哀願するんだ。あの淫売を見逃してくれと。本当に腹立たしいな。頭にくるよ。頭にくる」
　エドガーがヴィンセントの頭を靴の爪先で蹴飛ばした。マリアンヌが短く何か声をもらした。
「――お前をもっといじめてやりたいよ。お前を怒らせて、それでもどうしようもないんだということを思い知らせて、絶望を味わわせて、殺してやりたい。そうだな。そうだ。ヴィンセント。知っているか。お前の父親のことだよ。私にとっても師の先師にあたるわけだな。魔導士デウス。彼を殺したのは誰か。知っているか、ヴィンセント」
「……父……を……？」
「ロデムの角笛団だ。団長マスター・ヘイム率いる魔術士八人がお前の父を殺した」
「……な……に……？」
「お前の父は、老いぼれのくせに勇敢に戦ったそうだよ。魔術でね。ロデムの角笛団の八人のうち、五人が倒された。最後はやむをえずマスター・ヘイムら三人が剣で刺殺し、魔術で遺体を焼いた。ただ、さすがに決闘の果てに敗死したようには見えなかったらしくてね。表向きロデムの角笛団はその事実を認めていないが。でも、私はその話を聞いて思ったんだ。いくらすぐれた魔術士でも、小人の剣ごときに斃される。じゃあ、魔術の力とはなんだ？　くだらない。くだらないよ。魔術なんて阿呆らしい。げんに、私より才能のあるお前が、こうして死にかけている。お前が信じている力なんてこんなものだ。お前は愚かだ」
――ぼくは、愚かだ。

勝たないといけませんね、明日。

リアンヌを拘束しているようだ。マリアンヌはなんらかの手段で行動の自由を奪われ、声を出すこともできないようだが、生きているし、意識もある。

ヴィンセントはそれを感じて少しだけ安堵していたが、エドガーが指摘したように、まだ憤りは静まっていない。六時間ほど前だろうか。物音で目が覚め、マリアンヌの不在を知って、最初、みずからの意思で出て行ったのかと思ったが、部屋の窓硝子が割られ、もみあった形跡もあった。マリアンヌを捜した。捜して、捜して、ロデムの角笛団の――エドガーの仕業に違いないと、ようやく思いあたったのではない。そんなことは最初から察しがついていた。だが、心のどこかで否定したかったのだろう。やっと自分を納得させて、ここにきた。決闘の場所に。

「そうだな。ぼくは多少、いや、かなり腹が立っている」

「嬉しいよ、ヴィンセント。私はずっとお前を怒らせることとさえできなかった。お前は無表情で、私には興味もないといった態度で、無視した。私はお前が感情をあらわにしているところを見たかったんだ。いい気分だ」

「そんなことのために、マリアンヌを拉致したのか」

「いいや。それだけじゃない。勝つためさ」

「くだらない小細工を弄せずとも、勝機はきみにもあった」

「きみにもあった……？」

　エドガーの声に、怒気がみなぎった。どうやらヴィンセントの小細工に引っかかってくれたようだ。

「そうかもしれないな。いくらかはね。ただ馬鹿正直に挑んだとしても、私にだって勝ち目くらいはあっただろうさ！　そうやって、お前は……！　いつも私を軽く見て！　しかも、冷静に、落ちつきはらって見下していたんだ！　わかっているのか？　それは、最大級の侮辱だ！　その屈辱が私を狂わせた！　私が堕ちたくて堕ちたと思うか、ヴィンセント！　違う！　お前のせいだ！　お前がいなければ、私は……！　わた――」

「款暗Ｊａｘｉｓ嘔劾碣」

　ヴィンセントはエドガーの怒声など聞いていなかった。特殊な精神集中に入って、魔術の準備を進めていた。そして、呪文を詠唱し、発動させた。雷咬撃だ。ヴィンセントの杖から一条の雷が放たれて、マリアンヌを拘束している二人の魔術士のうち一人を直撃した。そのときにはもう、ヴィンセントは駆けだしていた。目の見えぬぼくはかえって迷わない。もう一人の魔術士はひどく狼狽している。やすやすと間合いに入ることができた。杖で思いきりぶん殴った。一発。二発。魔術士は倒れたが、まだかすかに意識がある。容赦は無用だ。喉を靴の踵で踏んづけて体重をかけると、「おご」という声をもらし、ようやく彼は人事不省に陥った。

「マリアンヌ、大丈夫だろうか」

　思わずマリアンヌを抱きしめた。ふれてしまった。彼女は後ろ手で縛られ、猿轡をはめられている。急いでそれをほどいた。

「……すみませんでした」

「なぜきみが謝るのだろう。謝るべきはむしろぼくのほうではないか」

　そう答えながら、ヴィンセントはマリアンヌを背中にかばいつつ、エドガーに向きなおった。エドガーは激憤するより呆気にとられているようだ。

「邪魔者は排除した。エドガー、ぼくは逃げも隠れもしない。決着をつけよう」

「……決着？　決着だと……？　黙れ、ヴィンセント。よくも……よくも、私の……想定外のことを。まったく、お前はどこまでも私を裏切ってくれる。それで私を出し抜いたつもりか。それで……おのれ……！」

「マリアンヌ。さがっていて欲しい」

　ヴィンセントはマリアンヌを後退させた。魔術士の決闘は一瞬で勝敗が決する。最初の読みあいと、あとは単純な力比べ。ようするに、それだけだ。

　エドガーの精神はそうとう乱れている。それと同時に、かなり強い魔力を感じる。何をしてくるつもりなのか。エドガーは火の要素精霊と相性がいい。離れていてもひしひしと肌に感じるあの魔力からして、大きな魔術で一気に片をつける気か。おそらく、猛火炎葬。エドガーが御しうる魔術のなかで、もっとも強力な炎霊Ｚｉｇの要素魔術。しかし、あの状態では精神を集中させるのにやや手間どるだろう。なおかつ、猛火炎葬の呪文は長い。ヴィンセントは、キングダム・イズルハなどで採れる鉱石イキシシュタロと、錬金術で生成されるオーボンの結晶をジャケットのポケットからとりだした。精神を集中させる。何もない地平。無。空洞。下層エレメンタルプレーンに精神接続。あっという間に満たされる。訓練によって刻みこまれた呪文が口をついて出る。

いないので、くわしいことはわからないのだが、そういうことになっている。いずれにしても、魔術士としては最低の部類に入る、屈辱的な死に他ならない。父の名は地に堕ちた。ぼくも父は間違っていたと思う。魔術は力だ。力をふるえない魔術士に価値はない。しかし――父の理論は、本当に間違っていたのだろうか」

　妙だ。今まで誰にも言ったことがないし、言う必要もないと考えていたのだが。結局、平常心ではないということだろうか。

「ぼくは確かめたいのだ。ぼくの魔術はすべて父の理論をもとにしている。ぼくは要素精霊たちを友として、彼らとふれあい、語らって、彼らの力を借りる。ぼくには人間の友はいない。だが、友はいる。だから、ぼくは寂しくなかったのだ。ぼくは力が欲しい。もっと力を。そうすれば、ぼくは証明できるだろう。父が正しかったことを。ぼくは老いた父に何もしてやれなかった。失望させることしかできなかった。ぼくはいつか父の汚名を雪いでやりたいのだ」

「……それなら」

　マリアンヌがぽつりと言った。微笑んでくれたように感じた。気のせいだろうか。

「勝たないといけませんね、明日」

「そうだな」

　ヴィンセントは深く息を吐いて、微笑んでみた。

「きみの言うとおりだ」

　決闘。負ければ死ぬ。知らない。どうでもいい。勝手に死ねばいい。関係ない。関係ない。関係ないはずだ。それより、いつまでこんなことをやっているつもりなんだろう。らっしゃいましたので。らっしゃったので。なんだよ、あの言葉遣い。すっかりメイドが板についちゃって。気持ち悪い。なまじ要領がいいせいだ。子爵にも――あの外道にも、お前は覚えがいいとか、よく言われた。ろくな取り柄じゃない。あげく、淫売呼ばわりされて。屈辱には慣れているから、がまんすることはできる。でも、平気なわけじゃない。いやだ。いやだ。ああ、やだ、やだ、やだ。日増しにいやになってくる。

　遺産……？　冗談じゃない。重すぎる。そんなもの、背負ったりできない。やめて欲しい。いらない。何もいらないのに。何も期待しないで欲しい。何も思わないで欲しい。なんだか、息苦しくてたまらないから。僕には無理だから。あんたたちが見ている、感じている僕は、違うから。それは、僕じゃない。僕は欺いてるんだ。誰も彼もを騙してるんだ。そうやって子爵を陥れた。ざまあみろ。僕の十八番なんだ。僕はそうやって背中から刺すのが得意なんだ。薄汚いんだ。卑怯なんだ。それなのに、どうして？　野盗の一人が馬車から子爵を引きずり下ろしたとき――子爵は僕をかばおうとして、それで――僕は、笑いながら、ざまあみろと思いながら――僕の心臓に。見えない何かが突き刺さった。あの痛みはなんだろう？　恐怖？　極度の緊張？　それとも、哀れみ？　罪悪感……？

　明朝、魔術師ヴィンセントが魔術士エドガーに敗れて死んだら、僕の心臓はまた痛むだろうか。

　どうでもいいはずなのに。

　勝手に殺しあえばいい。

　遺産？　もらっておけばいい。お金はいくらあっても困らない。なければ飢え死にするしかない。くれるというのなら、喜んでもらっておけばいい。それでいいじゃないか。

　それでいいはずなのに。

　気持ち悪い。ヴィンセントの態度が明らかに変わった。子爵のもとで、他の貴族のそういう目にさらされたことがあるから、なんとなくわかる。汚らわしい。豚どもめ。気持ち悪い。本当に、吐き気がする。所詮、雄ってそういうことしか考えられないのか。汚い。思い出す。貴族たちのあの目つきを。なまっちろい手を。上品ぶった下劣な顔を。気持ち悪い。何もかもが気持ち悪い。何より――そんな脂ぎった視線を集めてしまう、僕が。僕の存在自体が、一番気持ち悪い。

　暗い部屋のなかで、ベッドの上に丸まって、逃げだしたい、と強く思った。

　窓が、割れた。

　魔術士の決闘には不文律の掟がある。簡単なことだ。魔術のみによって雌雄を決する。それは法ではない。誰が定めたわけでもない。だが、魔術士は力を欲し、その力の証明を求めて魔術士と争う。魔術で相手を上回ることができなければ、そもそも決闘する意味などないのだ。

　ただ、ロデムの角笛団の一人はその掟を破ってみせた。魔術師マガロも、彼らを指してもっともタチが悪いと評していた。魔術原理主義組織でありながら、決闘で魔術以外の手段を用いる卑劣な者たちだということは理解していた。

　いや、わかっていなかったのだ。

　あるいは、彼らの一味になりはてたとはいえ、同門のエドガーがそこまで堕落していたとは考えていなかった。

　午前五時。

　十一巡月下旬、早朝のレイクラルモン庭園通りを見下ろす空は、まだ暗い。

「エドガー。マリアンヌを放せ」

「ふはは。怒っているのか、ヴィンセント」

　エドガーの他に、ロデムの角笛団の者だろう魔術士が二人。その二人がマ

父から受け継いだ財産のすべてをきみに譲ろうと思う。

アノンの仕立屋を呼んで、自分の外套と、マリアンヌの新しい衣類とコートを発注した。マリアンヌは気がすすまない様子だったが、いずれここから旅立つにしても、着る物は必要だろう。どうせなら、丈夫で持ちのいい服がよいのではないかとヴィンセントが提案すると、マリアンヌも拒まなかった。来年は男装風の女性服が流行する模様だと仕立屋が言うものだから、それはちょうどいい、着回しのきく服を何着かお願いすると頼んだ。できるだけ急がせることにした。ヴィンセントの外套は、以前と同じ型のものが在庫であるとのことだったので、すぐに持ってこさせた。準備といっても、それで終わりだった。もとより、魔術は力、力こそ魔術、力なき魔術士など無価値と考えるヴィンセントは、いついかなるときでもぞんぶんに魔術を使えるよう、物理的な面でも、精神的な面でも、備えはしている。今さら特別な用意など不要なのだった。

とはいえ、夕食は早めにとった。明朝は何も食べずに決闘へとおもむくつもりなので、これが最後の食事になるかもしれない。そう考えても心は揺るがなかった。ただ、現実問題として、敗れれば死ぬだろうし、死ねばヴィンセントの存在は失われる。今は蘇生式があるとはいえ、死者が這っていって施式を望めるわけではないし、そもそも、「勝者には栄誉とそれに浴するいくばくかの未来を、敗者にはただ永遠の死を」が正式な「決闘」の習わしというものだ。どのみち、魔術による死は、遺体を蘇生不能の状態に陥らせることが多い。エドガーの力量も侮るわけにはゆかない。ぼくは明日死ぬかもしれない。そうだとしたら、やっておくことがある。

「マリアンヌ。きみに話しておきたいことがあるのだが」

マリアンヌは拒まなかった。いつもどおりだった。そこで、一緒に茶を飲むことにした。マリアンヌにはダイニングの椅子に座っていてもらい、ヴィンセントが茶を用意した。マリアンヌがいないころは、自分の面倒は自分で見ていたのだ。マリアンヌが食器等の配置を変えていなかったこともあって、たやすい作業だった。やはり、ぼくは一人でも大丈夫だろう。しかし、マリアンヌは平気だろうか。そのことだけが気にかかるのだ。

「ぼくは明日敗れるかもしれない」

だから、やれることはやっておこうと思う。

「エドガーはもともと力のある魔術士だ。それに、ぼくの推測では、精神開放剤と呼ばれる種類の薬物を過剰に摂取している。エドガーの目は真っ赤に充血していなかっただろうか。肌が異常に乾燥していたとか」

「……サングラスを、かけてらっしゃいましたので。それから、お化粧を――顔は真っ白に塗って、黒い口紅をつけてらっしゃいました」

「たぶん、副作用をごまかすためだ。誰にでも現れるわけではないのだが、急激に増量するとたいていそのようになるらしい。エドガーはそのせいで心身ともにきわめて不安定だろう。かわりに魔術士としては限界を超えた能力を発揮しうる状態にある。ぼくに勝ちたいのだ。師のもとで学んでいたとき、エドガーは何度もぼくに近づいてこようとしたのだが、ぼくは避けた。ぼくには不要だったからだ。エドガーはぼくを憎むようになった。あの憎悪をずっと感じていた。ときに憎しみは力となるようだ。ぼくは勝つかもしれない。負けるかもしれない。五分と五分だ」

茶を飲んだ。どうやら、マリアンヌが淹れてくれた茶のほうがおいしいようだ。

「ぼくが死んだら、父から受け継いだ財産のすべてをきみに譲ろうと思う」

「――え……？」

「この屋敷と家財道具一式、それから、いくらかの金品、王立銀行に預金もある。ぼくには子も兄弟もいない。友人もいない。きみ以外に遺産のもらい手が思いつかないのだ」

「でも……」

「むろん、ぼくが敗れると決まったわけではない。最善をつくすつもりだ。ぼくの父は魔術理論の構築に心血をそそぎ、一時期はそれなりの名声もえたのだが――そう、きみにも読んでもらっただろう。ミゲロ・ラプソルドの著書を」

「はい」

「あれがぼくの父だ。父は上古の精霊魔術に回帰し、混沌としながらも、精神性に富み、信頼と協調、反目と闘争にあふれた要素精霊の世界を描きだした。父は要素精霊を擬人化さえしていた。それがやがて批判されるようになった。現代魔術の思潮からすると父の思想はロマンチックすぎたのだ。なおかつ父は理論のみを追い求めて魔術の実践をおろそかにした。魔導士を名乗りながら、魔術原理主義者などに殺されたのだ。師が父の遺体を見せてくれなかったし、どの組織も声明を出して

触視というオーバラーツを持つお前は天才呼ばわりされて、私は凡才扱い……！　くだらない。くだらない。じつに、くだらない。魔術とは力だ。比較？　ふふ。あはは。あの温室のなかで比べられるものか。誰も知らないくせに。私の力を知らないくせに。だから、思い知らせてやるよ。ヴィンセント。魔術師ヴィンセント。ロデムの角笛団を知っているか」
「……なぜ、きみがその名を」
「我らは魔導王の再来を希う」
　エドガーは胸元から首飾りを出してみせた。ヴィンセントには見えないだろうが、細い鎖に、角笛をかたどった金細工がぶら下がっている。それは、この前、夜道でヴィンセントに決闘を挑んできた三人組が首に下げていたのと同じ物だ。
「残念ながら、私はまだ団のなかでは新参者でね。お前が三人殺してくれたおかげで、ようやく私に順番が回ってきた。私は魔術師のお前を殺して、正々堂々、魔術師を名乗る。ヴィンセント、私との決闘、受けてもらうぞ。三日やろう。せいぜいその淫売と別れを惜しむがいい」

　翌日、また魔術師マガロが屋敷を訪れた。エドガーの件だった。師は数巡月前にエドガーがロデムの角笛団に加盟したらしいと伝えにきたのだが、当然、ヴィンセントにとっては既知の情報だった。もっとも、二日後の早朝に弟子同士が相争うなどと聞いたら、師はさぞかし心を痛めることだろう。ヴィンセントはあらためて厳重な警戒をうながす師にうなずいてみせ、決闘については言わなかった。ただ、師が帰り際に気になることをもらした。
「御尊父のことだがな。確実ではないのだが、じつは――いや、いいのだ。忘れてくれ」
　しかし、それ以外はわりあい平穏な日々だったといってもいいだろう。
　あるいは、マリアンヌが平素と変わらない態度でいてくれたからかもしれない。
　決闘前日の午前中に、アール・ベル

人形みたいな顔をして。まだ餓鬼じゃないか。

られて、傷つくなんて、馬鹿げてる。
もっとも、応接間で向かいあったヴィンセントとエドガーは、再会を喜びあう様子もなく、会話さえ途切れ途切れだった。
「久しぶりだね、ヴィンセント」
「ああ」
「それだけか。相変わらずだ」
「そうだろうか」
「そうだ。君は変わらない」
「…………」
「いや、変わったこともあるな」
「そうか」
「あるさ。君が使用人を雇うとは」
「彼女は使用人ではない」
「メイドの服を着ているじゃないか」
「服の意匠のことはよくわからない。だが、それはぼくの本意ではない。違う服を仕立てさせよう」
「ふん……」
「…………」
「メイドでなければ、なんなんだ」
「彼女の立場になんらかの呼び名をつけることに意味があるとは思えないのだが」
「女に興味があるとは知らなかったよ」
「…………」
ヴィンセントはため息らしきものをついて、口をつぐんだ。だが、エドガーは止まらない。
「しかも、こんなに若い女に。人形みたいな顔をして。まだ餓鬼じゃないか。同門では一番疎いやつだと思っていたのに、わからないものだな。で、どうだ。女を覚えて、未知の世界でも見えたかい？　いや、君は目が見えないのだったな。見えるというよりは、感じるといったほうが正しいのか。覚えてはたいへんだというしね。どうせ、朝も昼も晩もそのことばかり考えているんだろう」
でも、なんだか――この人は、変だ。
エドガーは指でテーブルをトントン叩きながら、何かに取り憑かれたように、下劣なことを喋りまくっている。だんだんと声がうわずって、しきりと唇を舐める仕草にも落ちつきがない。
と、不意にエドガーはこちらに顔を向けて、鼻先で笑ってみせた。
「餓鬼は餓鬼なりに、無駄に美しい、淫売の顔をしているよ。君はヴィンセントにいくらで買われたんだい？　この男は親の遺産で金だけは持っているからね。おおかた大金をちらつかされて股を開いたんだろうが、まあ、その年でよくやるものだ。知っているか。淫売は淫売を生む。君は淫売の血を引いているし、君の子も淫売になって、淫売を生むのだ。自分の身体くらいしか売るものを持たない害虫が、増えて、増えて、増えまくる。まったく、汚らわしいね。汚らわしいったら――」
「エドガー」
ヴィンセントの声は乱れていなかった。それでいて、激しい怒気をふくんでいた。なぜだか、それを感じた。
「ぼくとマリアンヌはそのような関係ではない。彼女を侮辱するのはやめてもらおう。どうやらきみの精神はひどく不安定のようだ。用があるのなら早くすませて、今日はもう休んではどうだろうか」
「……不安定？　不安定だと？　私が、私の精神が、不安定……？」
「ぼくの推測なのだが、きみは精神開放剤を過剰に摂取しているのではないか」
「黙れ。黙れよ、ヴィンセント。過剰摂取だと？　私が……？　何を根拠にそんなことを。ふざけるのもたいがいにしろ」
そう言いながらも、サングラスの位置を直すエドガーの手が小刻みに震えている。かなり動揺しているらしい。
「……ヴィンセント。お前はいつもそうだ。いつもそうだった。お前はまだ私の前を歩いているつもりなのだろう。自分が先んじていることを疑っていないのだろう」
「そのようなつもりはない」
「見えすいた嘘を、痴れ言を、妄言を吐くな。態度に表れているんだ。お前が私をどう思っているか。見下して、見くびっているのだろう。馬鹿にするな、ヴィンセント。わからないと思うか」
「きみが誤解しているということしか、ぼくにはわからないようだ」
「誤解？　誤解だって？　おい。ヴィンセント。まだそんなことを言うのか。いいかげんにしろよ。言っただろう。私を馬鹿にするな。耐えがたいんだ。耐えがたい……本当に、がまんならない。ヴィンセント。私は、お前を……許すことはできない。絶対に」
「ぼくはきみに何かしたのだろうか」
「したさ。した！　当然だ！」
エドガーはテーブルをバンッと叩いて立ちあがり、さらに声を荒げた。
「――魔術師を僭称したな、ヴィンセント！　むろん、それがどういうことかわかっているのだろうな！　魔術師マガロの門弟として、私は常にお前と比較されてきた！　人一倍、血のにじむような努力をしていたくせに、人前ではそれを見せようとしない、しかも

「どう……でしょうか」
「すまない。ぼくは一方的にしゃべっている。聞き苦しいだろうと思う。ぼくは話がうまくない。きみも――相手がぼくのような者でなければ、会話を楽しむこともできるのだろう。気まずい――そう、気まずい思いをさせて、すまない」
　マリアンヌはまた無言で頭を下げた。彼女の困惑が伝わってくる。彼女の困惑がヴィンセントには苦い。つらい。胸が締めつけられる。そういえば、マリアンヌが笑っているところを感じたことがない。もしかしたら、笑顔を浮かべることはあるのかもしれないが、ヴィンセントの触視には「笑い」として認識されない。
　マリアンヌは笑うことがあるのだろうか。
　彼女を笑わせることはできるのだろうか。
　ヴィンセントは止めていた手を動かして朝食を終えた。ナプキンで口の周りをぬぐっていると、その間に食器が下げられ、かわりにテーブルの上に茶が用意されていた。昨日まで、それをあたりまえのことのように思っていたのだ。慣れていた。しかし、マリアンヌはいつか去るだろう。それもあたりまえのことのはずなのだが。
「もう寒い季節だ」
　マリアンヌが旅立つとしたら、あたたかくなってからだろうか。
「外套を――新しい外套を買わなければならない。一着駄目にしてしまった。マリアンヌ、きみも外套なりコートなり必要ではないだろうか。近いうちに仕立屋を呼ぶ。ついでに、きみも何かあつらえてもらうといい」
「……ありがとうございます」
「礼は不要だ」
　なぜなら、マリアンヌは本心から感謝などしていない。外套もコートも欲しくないが、雇い主の申し出を断って機嫌をそこねるのも面倒だから、やむをえず頭を下げてみせた。たぶん、それだけなのだ。ぼくは望まれもしない親切を押しつけて、断ることも許さない、横暴な人間なのだ。だから、何者かが屋敷の玄関のベルを鳴らすと、マリアンヌはほっとしたように一礼して、軽い足どりでこの場をあとにした。ぼくといるのが苦痛なのだろう。マリアンヌは早く旅立つべきなのかもしれない。きっと、そのほうがお互いのためなのだ。だが、そう考えると、ひどく息が苦しくなる。ひょっとして、ぼくはそれほどまでに一人になりたくないのだろうか。孤独には慣れているはずなのに。

6

　奇妙な風体の客だった。帽子、外套、衣服は目が覚めるような青と黄で、いやに踵の高い靴を履き、ʃ型の杖を持っている。顔は白塗りで、色の濃いサングラスをかけて、黒い口紅をつけているので、人相がよくわからない。たぶん、靴のせいで十センチ以上、上背が水増しされているから、実際はかなり小柄なのだろう。背丈だけでなく、幅も厚みもない。やけに肩幅があるように見えるのは、小さい頭と、肩パッドのせいに違いない。
　もしかして、女性だろうか。
　だが、名を名乗って来意を告げた声は、身体に似合わず、低く、太かった。
『我が名はエドガー。師は魔術師マガロ。師の先師は魔導士デウスだ。魔術師ヴィンセントにお会いしたい』
　日頃、ヴィンセントの屋敷を訪れる者は決して多くない。最初は、この屋敷がカリオサークの中心からかなり離れた郊外に位置するせいかと思ったが、すぐにそうではないことに気づいた。ようするに、ヴィンセントには友人も知己もいないのだ。日々の生活は、魔術の研究と訓練、それから、どうやら趣味らしい散歩と、必要があれば買い物。ヴィンセントの辞書には、人づきあいという項目がないようだ。使用人としては、面倒な仕事が増えるだけなので、来客などないに越したことはないが、ヴィンセントにとってはどうなのか。自分のことを棚に上げて、そんなことを考えたこともあるくらいなので、エドガーの口から魔術師マガロの名を聞いて、少々の驚きとともに、かすかな安堵も覚えた。すぐに、ばかばかしい、と思った。
　ヴィンセントは、雇い主としてはたしかに悪くない。あのとき、ヴィンセントに拾われていなければ、行き倒れになっていただろうから、恩人でもある。でも、それだけだ。
　だいたい、助けてくれと頼んだわけでもない。使用人の仕事だって、こちらからやらせてくださいとお願いしたわけじゃない。ぜんぶ、相手が自由意思にもとづいて勝手にやったことで、言いだしたことだ。それがたまたまこっちにとって都合がよかったから、受け入れて、話に乗った。つまり、自分に利があるかどうか。人はいつもそこを敏感にかぎわけて判断する。誰だってそうだ。自分以外のことを考えたって、損をするだけなんだ。不安な夜、寂しい夜に、僕が抱きしめて、頭を撫でて、慰めてあげたこどもたちのことを思い出せ。子爵の罠にたやすく嵌められた彼らは、何を囁いた？『あいつ、他人にかまいすぎだろ』『スパイなんじゃない？』『そういえば、知ってる？』『え？　そんなのって……』『気味が悪いわ』『気持ち悪い』『近づかないようにしようよ』――彼らのことを恨んでいるわけじゃない。むしろ、感謝している。彼らは教えてくれた。そんなものだ。人間なんてそんなものなんだ。だから、僕は、自分で、自分を守るしかない。他人を信じて、裏切

なぜだか、ぼくは安堵しているようだ。

て長いとはいえぬお前の人生は、多くの者の助けがあり、支えがあって、今、こうして形をなしておる。そのことをゆめゆめ忘れるでないぞ、ヴィンセント。僭越ながら、御尊父はそのことがおわかりにならなんだ。人を遠ざけ、孤高のなかで、誇り高い、しかし、無残な死を遂げられた。厚かましいことと承知してはいるが、お前には御尊父と同じ道を歩んで欲しくないのだ。あの道は厳しすぎ、険しすぎる。誰にも、何にも報いられずとも、おのれのなかだけで信賞必罰を完結させ、ただひたすら高みを目指す道は、超人のみが耐えうる隘路だ。私の勝手と知りつつ言うが、お前が御尊父のように苦しみ悶える姿は見とうないのだよ」

魔術師マガロはやさしい人だ。

魔術士としては、やさしすぎる人だ。

「……だが、やさしさは力にならない。ぼくには不要なものだ」

呟いてみた。

朝食の最中だった。

視線を感じる。

マリアンヌだ。

「すまない。手が止まっていたのは、考えごとをしていたせいだ。きみの料理に非があるわけではない」

マリアンヌは何も言わずに少しだけ頭を下げたようだ。彼女はなぜ頭を下げたのだろう。あの仕草の意味するところは謝罪だろうか。だが、彼女が謝る必要は微塵もない。

「きみの料理の技量は、徐々に向上していると思う」

ぼくは何を言っているのだ。

「――とても助かっている。最初は、きみに行くあてがなさそうだったので、見通しが立つまで、宿を提供するつもりで――そうはいっても、正当な対価としてでなければ、お互い気まずいと――」

そうだ。

気まずいのだ。

「……とにかく、そのようなつもりで申し出たのだが――もしよければ、ずっとここにいてもらってもかまわない。それは……もちろん、きみ次第ということになる。ただ、きみがいろいろやってくれるようになってから気づいたのだが、仕事はわりあいたくさんあるようだ。とはいえ、この間のようなこともあるし――必ずしも安全な職場とは言いきれない。やはり、きみ次第だろう。もともと、一人でなんとかなっていたのだから、きみが何かを見つけて、ここを去っても――おそらく、ぼくは大丈夫だ。いや、おそらくではなく、大丈夫なはずだ」

「はい」

「……そうか。そうだな。もうずいぶんたつのだし、きみの人生計画というか、先々のこともあるだろうし――」

「は……はい？」

「いや、いいのだ。そうか。それで、いつ出てゆくのだろう」

「え？　いえ、それは、べつに……」

「まだ決まっていないのか。そうか」

肺のなかの空気がいっぺんに吐きだされた。

なぜだか、ぼくは安堵しているようだ。

「――そうか。それなら……いいのだ。いいというのは、つまり、決まるまで、ここで働いていてかまわない。いや、このような言い方は傲慢だろうか。働いていて欲しい。ぼくは――先ほども言ったように、助かっている。きみがいてくれて、なんというか、以前よりもよほど人間的な生活を送っているように感じられる。魔術士にとって、人間的な生活が必要なのかどうかについては、なお議論の余地があると思うのだが――すまない。マリアンヌ。きみは困っているようだ。ぼくはそれを感じる。きみを困らせるつもりはなかった。謝罪させて欲しい。申し訳ない」

「い、いえ……そんな」

「すまない。きみは、よくやってくれている。ぼくはきみの働きに報いるすべを知らないのだ。魔術士というものは、概して常識がないといわれる。そのとおりだろう。正直、ぼくは、きみに支払っている給金が適当かどうかさえわからない。不足ではないだろうか」

「わたしは……あまりお屋敷から出ることもありませんし、いくらいただいても、使い道がありませんから」

「そうか。いや、だが、金はいつか必要になることもあるだろう。あって困るということはないはずだ。給金は今までの倍にしよう」

「倍……ですか？」

「まだ少ないだろうか」

「いえ、そうではなくて」

「足りなければ遠慮せずに言って欲しい。そうだ。きみにも欲しいものくらいあるのではないだろうか。妙齢の女性であれば、衣服や、装飾品や、化粧品など、心引かれるものはいくらでもありそうだ。何か欲しいものがあるのなら買ったほうがいいと思う。あいにくぼくは魔術以外に興味はないのだが、求めるものは違えど、欲する気持ちは一緒だろう。それとも、違うのだろうか」

さして不便はないようだが。この広い屋敷で一人きりだというんで、心配はしとったんだ。あんたがきてくれて、だいぶ助かっとるでしょうな」
「……いえ、たいしたお手伝いもできませんで」
「そうはゆうても、一人じゃないというだけで違うもんだよ。さっきもずいぶん血相変えとった。それに、ヴィンセントさんも、あんたのことを頼りにしておるんでしょう。いや、こどものころから、あまり表に出さない子だったでね。珍しいよ」
「そう……なんですか」
「あんた、まだずいぶん若いようだが、そうとうな別嬪さんですからな」
「そんなことは……」
「いや、あの子は――失礼、昔の癖です、ヴィンセントさんは目がほとんど見えん。少なくとも、儂らの見え方とは違うはずだ。何を隠そう、親父さんに頼まれてそのことを検証したのは儂なんだよ。いずれにしても、あんたの顔形を見てどうこう思っとるわけじゃなかろう」
　この老人はいったい何を言っているのだろう。どうこう思っている？　わけがわからない。いや、わからなくはないけれど、そんなこと、考えたくもない。気持ち悪い。反吐が出る。この気持ちを表情に出さないようにこらえるだけでやっとだ。慣れているけれど。何を感じても、何を思っても、微笑みさえ浮かべて黙っている。ずっとそうして耐えていた。今もそうしている。もうそんなことはしなくていいはずなのに。
「あんた、その髪、地毛なのかね」
「はい」
「いや、ずいぶんとまあ、きれいな赤い色をしとるでな。その目もたいそう珍しい色だ。あの子は、だが、色はわからんそうだよ。あの子は触視とやらで、何をどのように見ておるのかな」
「わたしにはわかりません」
「そりゃそうだろうな。いや、いろいろとくだらんことを言った。忘れとくれ。儂はそろそろ帰るよ。ヴィンセントさんは一日うちで休ませるで、あんたももう戸締まりして寝るといい」
　老医術士が帰ったあと、玄関のドアに施錠して、食器を洗ってから、自室に戻った。ベッドにもぐりこんでみたものの、なかなか寝つけず、無駄に数をかぞえてみたりした。妙に寂しかった。寂しさを感じると弱くなるから、嫌いだった。一人になりたいと思った。一人でなんでもできるようになりたい。強くなりたい。強くないと、きっと生きていけないんだ。誰かを平気で傷つけられるほど、強く。誰かから何かを奪ってしまえるくらい、強く。やさしさや思いやりなんて、いらない。欲しくない。

　あれ以来、どうにも気まずいのだ。ヴィンセントとしては、もっと正確に自身の心情を把握したいところなのだが、やはりこの気持ちは「気まずい」としか表現しようがないのだ。
　マリアンヌには謝罪した。結果的には単なる局所的な水腫だったようだが、負傷させてしまったこと、着替えの最中に部屋のドアを開けたこと、それから、裸形の彼女に接触してしまったこと。とくに、最後の点については、彼女が意識を失っている間の事故だったため、詳細な説明が必要だと思い、記憶しているかぎりの経緯を話した。マリアンヌは聞きながらそうとう動転していた。初めてだった。この目が見えなくてよかったと心の底から思った。マリアンヌにもそのように言ったのだが、彼女は戸惑っていた。何か訊きたそうにしていた。そのことが今も引っかかっている。何か問いたいことがあるのなら、率直に問うて欲しい。答えられることならば、ぼくはなんでも答える。だが、問うどころか、それ以後、マリアンヌの口数が極端に少なくなった。それが気になっている。何か悩みでもあるのだろうか。ぼくがまずいことをしたのだろうか。したのだろう。ということは、すべてぼくのせいか。ぼくは何をどう謝罪すればいいのだろう。わからない。
　先日、魔術師マガロが突然来訪した。どうやら、ロデムの角笛団の三人と街頭で決闘した件を聞き及んだらしい。魔術士にしては利他的な思想の持ち主で、非常に義理堅い好人物である魔術師マガロは、ひとしきりヴィンセントの身の上を案じてから、「ロデムの角笛団には気をつけるのだぞ。カリオサークに数ある魔術原理主義組織のなかでも、あの者どもはもっともタチが悪い。名と力のある魔術士はおらぬようだが、若い蛇のように執念深く、老いた狐のごとく卑劣な連中だ。なんなら、私の弟子のなかから数名お前のところへやってもよいが――」その申し出は、だが、丁重に断った。ぼくは父とは違う。それと同時に、我が師マガロとも違う。マガロのように大勢の弟子を抱えて、彼らを導き、育成するなど、ヴィンセントには不可能だ。触視を持つヴィンセントのことを、他人が理解できるとは思えない。すなわちそれは、ヴィンセントが他人を理解できないということも意味する。
　どうせ、ぼくには人のことなどわからない。
　一番身近にいるマリアンヌのことさえ、まるでわからないのだ。
「ヴィンセント。お前は一人ではない」
　去り際に魔術師マガロが言った。
「お前は一人きりで二十一年の時を生きてきたわけではないのだ。まだ決し

なら返事をして欲しい。マリアンヌ」
　さっき、同じように、マリアンヌに呼ばれたような覚えがおぼろげにある。
　ぼくはどう答えたのだろうか。
　マリアンヌは身体の一部分をかすかに動かして呼吸を乱すだけで、声らしきものはもらさなかった。
「……医術士に診てもらわねば」
　ひょっとしたら、頭でも打っているかもしれない。あまり動かさないほうがいいのだろうか。そうはいっても、このままにしておくわけにはゆくまい。
　ヴィンセントはマリアンヌを抱えあげようとして、思いとどまった。これ以上、彼女の肌に直接ふれるべきではない。それは彼女の同意なく行われるべきではない。それに――どうしてか、彼女にふれることを考えただけで、心が揺れるのだ。激しく揺れるのだ。ヴィンセントはマリアンヌの部屋に入り、ベッドのシーツをはぎとって、それでマリアンヌをくるんだ。大事に、大切に、丁寧に、くるんだ。怪我のことは頭になかった。シーツにつつまれたマリアンヌを抱きあげて、ベッドに運ぶ作業も、さして苦ではなかった。それから、外出の用意をしている間は多少きつかったが、つらかろうと、頭がふらつこうと、全身がだるかろうと、這ってでも行かねばなるまいと思った。
　今はとにかく、マリアンヌが気がかりだった。

――気がついたら、シーツにくるまれた姿でベッドの上に寝ていて、かなり焦った。慌てながらも、ちゃんと服を着て、屋敷のなかを捜しまわったが、ヴィンセントはいなかった。しばらくしてからだった。近くで診療所をやっている老医術士が一人でやってきた。
「ヴィンセントさんはうちで休んでもろうてます。怪我も軽くはないんですが、それより失血による衰弱がひどうてね。それでも、屋敷に戻るとゆうて聞かないものですから、事情をお尋ねしたら、屋敷に怪我人が一人おるとおっしゃるもので、こうして儂が参った次第ですが」
「そう……ですか。夜分遅くに、お手間をとらせてしまい、申し訳ありません」
「それはべつにええですが。商売柄、こないなことには慣れとりますからな。ところで、怪我人はどこです」
「わたし――のことだと思います。その……転んで、少し、気を失っていて。でも、もう大丈夫です」
「ああ、いや、それはいかん。一応、診せてもらうよ。打ち所なんかが悪いとね。あとあとたいへんなことにならんともかぎりませんよ」
　結局、応接間に通してたんこぶを治してもらうだけですんだが、枯れ木のように痩せた老医術士はそうとう疲れている様子だった。せめて一息ついてもらおうと、熱いお茶とお茶菓子を用意して出すと、老医術士は「年はとりとうないもんですな。気持ちはまだまだ若いもんに負けんつもりですが、身体がついてこんですわ」とぼやきながら、それでもうまそうに飲み食いした。
「儂はヴィンセントさんのことは赤子のころから知っとってね。親父さんが変わり者だったし、ずいぶん苦労されたと思うよ。目が見えんのは、触視とゆうんだったかね。あれのおかげで、

ろではない。汝の好きなようにするがいい。

そののちに、魔術師マガロがぼくに言った。我が師を──御尊父を恨まないでやってくれ。あの方はお前が憎いわけではない。ただ、あの方は完璧主義者なのだ。ああしてご自身を、周囲をも追いこまずにはいられぬほど生真面目な御方なのだ。

つまり──それは、ようするに、ぼくが完璧でなかったから悪いということか。

では、完璧とはなんだ？

父は完璧などではなかった。それは間違いない。

ぼくは力を欲する。

わかりやすい、力を。

証明したい。ぼくは間違っていない。ぼくは。そのために、ぼくは。そのためだけに。

音がする。

静かな音だ。

ひんやりしている。

それでいて、あたたかい。

安らかだ。

気分が、落ちつく。

とても苦しいのだが。

左腕が痛い。どうやら血を失いすぎたようだ。二人までは魔術のぶつけあいで容易に打ち倒すことができたのだが、三人目ともなるとやや疲れが出て、読みが外れ、タイミングが遅れた。相手の詠唱は予想より短く、初歩的な火系の要素魔術「火玉」があまりにも早く発動した。ヴィンセントは集中を維持したまま、左腕一本でそれを防いだ。すかさず「雷咬撃」を叩きこもうとしたときだった。相手が突っこんできた。

ヴィンセントの直観によると、明らかにもっとも魔力の弱い男が三番手だったことの理由がそこにあった。彼の役割は明確だった。一人目、二人目でヴィンセントを斃せればよし。さもなくば、確実に、どんな手を用いてでも、しとめる。魔術士としての力量は低いが、課せられた仕事は果たす、仕事人。

しかし、結果的に彼は失敗した。ヴィンセントの身体には、何種類かの防衛動作が刷りこまれている。火傷を負った左手が、彼が突きだしてきたナイフを自動的に受け止めた。そのときにはもう「雷咬撃」の準備は整っていた。至近距離で発動させた。雷撃が彼の眼球と脳を焼いた。彼は死んだ。ヴィンセントは魔術師たることを力で証明した。左手に負った傷は出血がひどいわりに痛みはさほどでもなく、深手ではないようだった。外套を巻いて止血して帰宅した。自室に戻ってから痛みがひどくなった。どうやら決闘の昂揚が痛覚を麻痺させていたらしい。それから、ぼくは──自分で手当てをした。傷を洗い、清潔な布をあてがって、数種の薬品を服用した。痛みは薄らぐ気配もなかった。さらに、貧血の症状が現れた。触視によると、火傷による火ぶくれの上に鋭利な刃物による創痍が重なっていた。血管の吻合、傷口の縫合などの処置が必要かもしれないと思った。むしろ、医術式が適当だろう。屋敷から多少距離はあるが、古くからつきあいのある医術士の診療所がある。それで、ぼくは──本日二度目の外出だと考えながら、身支度をしようとしたのだが、手が自由にならず、足許もおぼつかず、独力のみで診療所までたどりつくのは困難だと判断した。気が引けたが、やむをえず、マリアンヌに同行を頼むことにした。そこまでは明確に覚えている。

このぬくもりは記憶にない。

では、この音は？

とくん、とくん、とくん、と、いつまでもつづく、この音はどうだろう。

知っている。

これは。

「……心音だ」

ひとが生きている証しだ。

誰が？

このぬくもりの正体は？

ヴィンセントは触視で感じた。

肌。人間の皮膚。その下の薄い皮下脂肪。筋肉。温度。それらが渾然一体となって形づくるイメージは、立体的で、入り組んでいて、離れればなれでありながら、完全にとけあっている。ヴィンセントはそれを知っている。

「──マリアンヌ……？」

どうやら、マリアンヌが仰向けに倒れていて、その上にヴィンセントが覆いかぶさっている恰好のようだ。ヴィンセントの頭部は、横向きでマリアンヌの胸部の上にある。マリアンヌの心音がよく聞こえるのも当然だ。

しかし、なぜマリアンヌは裸形なのか。

いや。そうだ。着替え中だと言っていた。

着替え……？

裸形？

『ぼくは……もしかして、とても破廉恥なことをしているのではないか』

呟いてから、忸怩たる思いがこみあげてきた。なんということだ。裸形の女性にのしかかり、その肌を肌で感じている。しかも、相手の女性は気絶しているか、意識が朦朧としているようだ。同意がないということだ。よくわからないが、そのようなことは双方の同意のもとに行われるべきではないか。そもそも、ぼくはそのようなことを望んでいたわけではない。マリアンヌも同様だろう。これは不幸な事故だ。

ヴィンセントは上半身を起こした。

なぜだか、惜しい気がした。

「……何を……ぼくは……」

求めてなどいなかったはずだ。

ひとのぬくもりなど。

それは、所詮、えられるはずがないもので──だから、ぼくには、欲しいと思うことすら許されないもので。

「マリアンヌ。ぼくの声が聞こえるの

今までヴィンセントがそんなそぶりを見せたこともない。でも、万が一ということもある。ヴィンセントは、やけに落ちついていて、三十歳くらいにも見えるが、まだ二十一歳だという。こっちは「マリアンヌ」のときの癖で十六歳と言ってあるけれど、見境のない男はいくらでもいる。信じるに足る人間なんていくらもいないのだ。用心するに越したことはない――のだろうが、なんだか変だ。

「マリ、アンヌ」

「はい……？」

「ぼくは――」

と、ヴィンセントはいきなりがくんと膝を折って、床に両手をついた。

「……すま、ない……」

「え？　え？　ちょっ――と、ヴィンセントさん……？」

「うん」

ヴィンセントはうなずくなり、ばたんと倒れてしまった。なぜ？　どうして？　わけがわからなくて、半分混乱したままヴィンセントに駆けよると、逆になんで気づかなかったのか不思議に思った。外は暗かったし、ヴィンセントは屋敷についてすぐ「今日はもう休むといい」と言い残して足早に自室へと引きとったのだが、こうして明かりの下で見ればすぐにわかる。

怪我だ。

左手に何か布を巻いているが、ひどい巻き方だし、血がにじむどころか、ぐっしょりぬれている。顔色も悪い。結構汗をかいている。おそらく、決闘で負った傷だろう。その場に居合わせたので、無傷ではないと知ってはいたが、こんなにひどかったなんて。だいたい、こんな有様で平静を装う必要がどこにあるのか。がまんせずに、医術士でも呼べばよかったのに。

「ヴィンセントさん？　大丈夫ですか。声、聞こえますか」

呼べば、小さな声で何やら返事はする。なんとか起きあがろうとしているようだ。放っておけば、そのうち自力で立ちあがって自室に戻るかもしれないが、さすがにそれは忍びない。

さわりたくはないけれど。

ふれるのが、いやだ。

人が、怖い。

気持ち悪い。

でも、そうも言っていられない。やむをえず、思い切ってヴィンセントの両脇に手を入れて、ぐっと持ちあげてみた。意外と軽かった。背は高いものの、かなり痩せているからだろう。けれど、それからどうすれば……？　困り果てて、迷っているうちに、ヴィンセントが身動きした。状況を把握して、自分でどうにかしようとしたのか。その気持ちはありがたいが、タイミングが最悪だった。「――あ……や」ヴィンセントを抱えたまま、バランスが崩れた。後ろに倒れる。倒れてしまう。立てなおせない。だめだ。やばい。後ろ。後ろって――ドア……？　閉まって――しまった。

がん、と音がした。

3

ぼくは母親を知らない。父親とも親子と呼びうるような関係ではなかった。幼いころ、父の弟子で、ぼくの師である魔術師マガロは、唯一、慕わしい存在だった。ただ、彼にとって、ぼくは弟子でありながら師の息子でもあり、また、師弟の間柄でもある。魔術師マガロは魔術士には珍しい人格者で、弟子が大勢いたし、ぼくだけ特別扱いされるはずがなかった。ぼくもそれを望まなかった。

ぼくは肉親の情というものを知らない。ひとのぬくもりを知らない。それを欲したこともない。

どのみち誰もぼくを理解することなどできない。触視で感じるぼくの世界は誰かの世界とは重ならない。

ぼくは一人だ。

一人きりだ。

それでいい。

それでもかまわない。

ぼくには魔術がある。ぼくは力が欲しい。ぼくは父とは違う。魔術理論になど興味がない。魔術は力だ。力なき理屈には意味がない。価値がない。

いつだったか、魔術師マガロがぼくを伴って父のもとを訪れた。ジョナサンには才能があります、と魔術師マガロは言った。ジョナサン・グッドオール。ぼくの本名だ。父は書物に目を落としたまま、短く答えた。書もろくに読めぬ者に用はない。魔術師マガロは重ねて言った。ですが、ジョナサンには不思議な能力があるのです。たしかに目はほとんど見えぬようだが、そうとは思えぬほどつつがなく日常生活を送ることができる。古来、盲目の魔術士も大勢いましたし――父は遮った。私が求むるは魔術の原理だ。完璧な理論だ。それを書に著し、後世に残して、魔術史に名を刻む。いずれにせよ、その者では私の手伝いはできぬ。ゆえに、マガロ、汝にゆだねた。その者の扱いについては、もはや私の関知するとこ

やだ！　いやなんだ、こんな服……！

とはいえ、すぐに処分が下されるわけではない。その間に、子爵は裏切った僕を殺すだろうか？　それでもいい。もとより相討ち覚悟だ。この身一つ、命一つで、あの腐れ外道を道連れにできるのなら、安いものじゃないか……？
　そうはならなかった。
　子爵はその夜のうちに逃げだした。
　僕と、ごく少数の供の者だけを伴って、子爵は逃げる道を選んだ。
『――やってくれたな。よくもやってくれた。だが、それで私から逃れられるなどとは考えないことだ。私はお前を逃がしはしない。私は決してお前を離さない。なぜなら、お前は私の愛であり、私の神秘であり――私のすべてだからだ。今や名実ともにそうなったのだ。お前を失えば、私はお前を永遠に手に入れるかわりに、すべてを失うことになる。失うわけにはゆかないのだ。私はお前を逃がさない。そして、私はお前を赦さない』
　ああ。
　僕はもう解き放たれたはずなのに、この手が重いんだ。
　足が重いんだ。
　頭が重くて仕方ないんだ。
　これは子爵の怨念だろうか……？
　考えたくない。何もしたくない。ぬるま湯のようなこの暮らしが心地いいわけでもない。でも、どうすればいいのかわからない。進みたいのか。戻りたいのか。何を変えればいいのか。せめて、この服を脱ぎ捨ててしまうべきか。魔術師ヴィンセントが馴染みの仕立屋に作らせた、いかにも女性の使用人向けといったかんじの服を。
　そうだ！
　脱いでしまえ！
　やだ！
　いやなんだ、こんな服……！
　だって、僕はもう、着たい服を着たいように着ていいはずじゃなかったのか？
　僕は脱ぐ。服を脱ぐ。ここは、僕の部屋。魔術師ヴィンセントの屋敷にある、僕の部屋だ。外出の用があって、そのついでに外で夕食をすませ、帰り道の途中、魔術士たちに襲われて、ついさっき戻ってきた。もう今日は仕事はない。僕は。
　あてがわれた部屋に、僕は、一人でいる。
　僕は。
　やっぱり、今も飼われているようなものなのか？
　いや。べつに、強制されたわけじゃない。魔術師ヴィンセントは、もし何もあてがないのなら、と、たぶん親切心から申し出てくれて、僕は実際、あてなんか何もなかったから、それを受けた。生きるために、とりあえず受けるしかなかった。
　僕には力がない。一人で道を切り開いてゆくための力がない。意欲もない。
　結局、誰かの庇護を受けるしかない。しょうがないじゃないか？　楽な生活じゃないか。それでいいんだよ。楽で何が悪いの？　悪くない。ぜんぜん悪くない。掃除も洗濯も炊事もだいぶ慣れてきた。女物の服なんかもっと慣れている。女性らしい仕草や喋り方は完璧に仕込まれている。
　――子爵に。
　あの男に。
　もうどこにもいないはずなのに、あの男の息づかいをすぐそばに感じる。
　気持ち悪い。
　吐き気がする。
「マリアンヌ」
　――吃驚した。
　振り返ると、開け放たれたドアの向こうにヴィンセントが立っていた。いつの間に。まったく気づかなかった。まあ、もともと、ヴィンセントは足音もあまり立てないで歩くし、ドアを開けるときもそっと開ける。特殊な感覚を持っているとはいえ、やはり目が見える人とは違うので、聴覚に頼っている部分もあるのだろう。外界の音を拾うために、自分では極力音を立てないようにしているのかもしれない。それはいいのだが、部屋に入るときはノックくらいしてもらいたい。悪意はないみたいだけれど、やや不躾というか、エチケットを知らない部分がある人だ。
「……突然声をかけて、まずかっただろうか。どうやらきみはひどく動揺しているようだ」
「……ま、まずい、といいますか」
「まずくなかったのだろうか」
「い、いえ、まずいといえば、まずくないこともないのですけれど……」
「そうか。やはりまずかったのか。それでは出なおすことにしよう」
「あ、いえ――しょ、少々、待っていただけますか。今、その――着替えをしていたところだったので」
「なるほど。それは申し訳なかった。だが、気にすることはない。ぼくはこの通り目が見えないので、きみが裸だろうと、服を着ていようと、さわらなければわかりはしない」
「さ、さわ……？」
「そう。直にこの手でふれれば、かなり鮮明なイメージが頭の奥に描かれる。これだけ離れていると、きみがそこにいるということ、きみの様子などがぼんやりと感じられるだけだ。ところで、きみの着替えがすむまで、ぼくは外に出ているべきだろうか」
「で、できたら、そうしていただいたほうが」
「それでは、出ていよう」ヴィンセントは踵を返そうとしたが、途中で動きが止まった。「――マリアンヌ」
「は、はい……？」
　とっさに、脱ぎ捨ててベッドの上に置きっぱなしにしてあった衣服を手にとって、それで身体の前面を隠した。まさかそんなことはないだろうと思う。

お前は美しい。お前のすべてが比類なく美しい。

さしたる実績もなく、強力な後ろ盾もないままに魔術師を名乗れば、血気盛んな魔術士や、ロデムの角笛団のような魔術原理主義者たちが、こうして辻勝負を挑んでくる。すべて承知の上でこの道を選択したのだ。

魔術とは、力。

力こそが、魔術。

ぼくは父とは違う。

ヴィンセントはジャケットのポケットから触媒をとりだして、魔術のための特殊な精神集中に入った。

②

ぼくは魔術師ヴィンセント。迷惑でなければ、きみの名を教えて欲しい。

そう問われて、とっさに答えた。

マリア……、

マリアンヌ。

――偽りの名を。

それは、子爵の供をするときに使っていた偽名で、子爵がつけた。

『お前は美しい。お前のすべてが比類なく美しい。俗世の汚物がお前の名を呼ぶことを私は決して赦さないだろう。よって、私はお前に仮の名を与える。マリアンヌ。俗な名だが、それでもお前の美しさは微塵も損なわれない。塵界の穢らわしい外気にふれても、お前は枯れるどころかよりいっそう輝き咲き誇る。私の愛、私の神秘、私のすべてよ。いついかなるときも、お前は特別なのだ』

習慣なのか。こびりついているのか。剥がれないのか。落とせないのか。消すことはできないのか。

魔術師ヴィンセントの屋敷はカリオサークの郊外にある。家屋自体も大きいが、とにかく庭が広い。一面に樹木が生い茂っていて、ちょっとした森のようだ。くわしいことは知らないが、ヴィンセントの父親の遺産らしく、家のなかの状態からしても、以前はそれなりの数の使用人がいたのだろう。定期的にやってくる庭師は、先代からのつきあいだと言っていた。しかし、今、この屋敷で暮らしているのは、二人だけだ。屋敷の現在の所有者である魔術師ヴィンセントと、マリアンヌという名の使用人が一人。ヴィンセントは使用人とは呼ばないが、住みこみで掃除、洗濯、炊事をして金をもらっているのだから、どう考えても使用人以外の何ものでもない。

ただ、何か手に職を持っているわけでもない、まだ十四歳のこどもにとっては、そう悪くない境遇ではある。悪くないどころか、恵まれているといってもいいくらいだろう。何しろ、仕事はべつにきつくないし、住む場所にも、着る服にも、食べる物にも困らない。何より、ここには子爵がいない。

――自由、なんだ。

僕は誰にも支配されていない。

支配されずに、生きている。

なんだか、信じられない。

子爵を陥れることばかり考えながら、従順な飼い犬のふりをして、一瞬たりとも気を抜かず、ずっとあの外道が油断する隙をうかがいつづけていた。

張りつめていたんだ。

限界なんかとっくに超えていた。

子爵の友人の豚野郎に出す酒にあの薬物を混入させたときは、正直、ほとんど捨て鉢だった。もちろん、好機だという認識はあった。たくさんの人間が子爵の屋敷に集まることはめったになかったからだ。子爵の母親、エウクデア・モウンロール伯爵夫人の六十七回目の誕生日。ラフレシア第三帝国では、六十七歳の誕生日を「歓喜の日」として盛大に祝う。貴族だけの風習だ。人間的な情など欠片も持ちあわせていない男だったが、貴族としての振るまいは厳格に守った。あの潔癖な老婆の前でなければ、子爵自身とは親しくないどころか、どちらかといえば快く思っていない貴族たちの前でなければ、意味がなかった。そうでなければ、子爵はたぶん、あらゆる手段を駆使して事件をもみ消そうとするだろう。

子爵の屋敷で供された飲み物を口にした人物が死亡するという、事件。

事故ではなく、事件。

事件はただちに警察隊に通報され、子爵の屋敷が家宅捜索を受ける。子爵の書斎から死因となる薬物が発見される。前々から囁かれていた子爵が外道の錬金士であるという疑惑が真実味を帯びる。それだけではない。子爵が多数のこどもたちを飼育して、調教していた事実もやがて暴かれ、太華饒京を騒がせるゴシップになるだろう。

そうした事々が、どのような法に違反して、子爵がなんの罪に問われるのか。そんなことは些細な問題だ。どうでもいい。そんなものはきっかけだ。どうせ叩けば埃はいくらでも出る。子爵の行状すべて、とはいわない、一部でも明らかになれば、蟄居程度ですむとは思えない。監獄行きか。よくても、爵位剥奪、財産没収のうえ、首都から追放されるか。いずれにしても、プライドの高い子爵にとっては耐えがたい屈辱だろう。

訊き返された。雨に……？　違う。
「ぼくは目が見えないのだが、そこにいるきみを感じることはできる。きみは人間のようだ。ぼくは傘をさしている。雨が降っているからだ。きみは傘をさしていない。雨がきみをぬらしているだろう。この雨は当分やまない。きみはどうやら疲れているようだ。衰弱している。ぼくはそれを感じる」
苦労して顔を上げた。
雨のなかに男が立っていた。
背が高くて、痩せている。顔はよくわからない。目を閉じているせいだ。まだ若いようにも見えるし、三十歳くらいにも見える。右手に杖を、左手には傘を。ここは魔術と官能の街カリオサークだ。魔術士だろうか。
「すまない。ぼくは話がうまくない。だから率直に言うことにする。きみはこの雨にとけてしまうまでここにいるつもりか。この路地裏に。軒下を見つけられなかった野良猫のように。それがきみの望みなら、ぼくの介入する余地はない。ただ、きみがやむをえずそうしているのなら、雨宿りをするための場所を用意することくらいできる。ぼくは魔術師ヴィンセント。迷惑でなければ、きみの名を教えて欲しい」

まったく見えないというわけではない。ただ、ほとんど見えない。この目は光を感じる。光を遮るものがあれば、影として感じる。だが、物体の輪郭を視覚でとらえることは叶わない。色もわからない。
最初にそのことを察したのは父だったという。
魔導士デウス。またの名を、魔術博士ミゲロ・ラブソルド。百九歳にして、自身の研究を引き継がせるべく、金で雇った女に子を産ませた男は、息子が盲目に近い弱視だということを知って絶望し、失意のうちに魔術原理主義者たちの手にかかって惨殺された。愚かな父。たしかに、ヴィンセントの目はほとんど見えない。しかし、見ることができる。タクティル・ヴィジョン。触視。望んでも持ちえない、いかなる原因で発生するのかさえ定かではない、〝超越者の業〟の一種。ヴィンセントがそれを授かっていたことに、父は気づかなかった。気づきようがなかった。気づく前に、父はヴィンセントを見限って、捨てたのだ。
「——魔術師ヴィンセントだな」
相手は三人か。すでに日は暮れている。街中で、人通りもあるが、このカリオサークでは魔術士同士の争いなど珍しくない。余人が邪魔すべきものではないということも、誰もが理解している。ヴィンセントはマリアンヌを我が身のそばに引きよせ、杖の先で石畳を叩いた。
「いかにも、ぼくは魔術師ヴィンセント。きみたちは何者だ」
「我らはロデムの角笛団」
「我らは魔導士の再来を希う」
「魔術師ヴィンセント。師は魔術師マガロ。師の先師は魔導士デウス。相違ないな」
「間違いない。ぼくの師は魔術師マガロだ」
「では、問う。魔術師ヴィンセント」
三人のうち一人が前方に、二人が後方に位置どっている。進みでてきたのは前の一人だ。
「貴公を魔術師と呼ぶに値する者と認めたのは誰だ。貴公、弟子は幾人いる。貴公にとっての魔術とはなんだ」
「ぼくにとっての魔術とは、力。弟子はここにいる」ヴィンセントは顎でマリアンヌを示してみせた。「一人だ。何度かたわむれに魔術の基礎を教えたことがある」
「たわむれ、だと……？」
「ぼくはこの通り目が見えない。日常生活に支障はないのだが、それでもやはり不便はある。彼女にはそのあたりを手伝ってもらっている」
「ただの端女ではないか！」
「言葉に気をつけてもらおう。ぼくは彼女に給金を渡し、彼女はその対価として相応の仕事をしているだけだ。上下の別はない」
「なぶるか、我らを……！」
「そのようなつもりはない」
「だったら、答えよ、魔術師ヴィンセント！　いったい誰が貴様を魔術師と認めたのだ！」
「ぼく自身だ」
「——僭称したな、若造……！　貴様のごとき力なき者が魔術師を名乗ることは、魔術に対する冒涜だ！」
「ぼくにその力がないと言うのなら、試してみるか」
「もとよりそのつもりだ！　我々との決闘、受けてもらうぞ！」
「拒否する理由はない」ヴィンセントは右側の建物を背にして、マリアンヌを後ろにかばう恰好になった。「一人ずつか。それとも三人いっぺんか。ぼくはどちらでもかまわないのだが」
「我々を愚弄するのか！　古来より、魔術士の決闘は、一人の魔術士と一人の魔術士が真正面から互いの魔術を競い、力ある者が力なき者を屠る神聖なる儀式！　むろん、一対一だ！」
「なるほど。一人目が勝てなくとも二人目で、二人目も敗れたら三人目が、というわけか」
「——貴様……！」
前の一人がとくに怒髪天を衝く勢いで激怒している。ヴィンセントはそれを感じる。最初の相手はどうやら彼のようだ。三連戦。相手の力量次第ではあるものの、魔力は無尽蔵ではない。たやすくはなかろう。勝利の確信はない。敗れるかもしれない。
それでも、ヴィンセントは逃げるわけにはゆかなかった。

永遠大陸ルミナス・アルファ（α大陸）
ETERNAL CONTINENT LUMINOUS ALPHA : ALPHA CONTINENT

主な登場人物

MARIANNE
マリアンヌ

カリオサークで魔術師ヴィンセントに拾われた、絶世の美貌の持ち主。現在14歳。

MAGI VINCENT
魔術師ヴィンセント

マリアンヌに声をかけた魔術師。マリアンヌに心酔し、自らの屋敷に使用人として住まわせるが……。

——ざまあみろ。

ざまあみろっていうんだ。

子爵はたぶん死んだ。殺された。外道でもラフレシア第三帝国の貴族だった男が、薄汚い、ケダモノ同然の、下賤な野盗どもに襲われて、奪われて、殺された。あはははは。ざまあみろ。可笑しい。こんなに可笑しいことってない。あの男が死んだ。この世からいなくなった。嬉しい。すごく嬉しいよ。最高の気分だよ。だって、もうあんたの顔を見ることはない。あんたの声を聞かなくていい。あんたのにおいも嗅がなくていい。あんたにふれられる気色悪さとも永遠にさよならだ。僕は——そうだ。僕でいいんだ。自分のことを「わたし」なんて呼ばなくていいんだ。上品ぶったうざったい喋り方も。意味不明な貴族的所作とやらも。頭の悪そうな貴婦人歩きも。いらない。もういらない。ざまあみろ。イシュタル・アガメムノ・ド・ゴードン。最後に笑ったのは僕だ。あんたじゃない。あんたはこのゲームに敗北した。僕は勝ったんだ。その結果、僕はこうして雨のなか、膝を抱えて笑いながら——死ぬ、のかな。

それでもいい。あのままよりはいい。ずっと心に誓っていたんだ。あの男だけは、必ず、絶対に破滅させてやるって。そのとおりになった。満足してる。だから、もういい。僕は疲れた。ずいぶん歩いたし。おなかも——すいてるのかな？　どうかな。わからない。身体が動かない。この雨の冷たささえ感じない。どうでもいい。とにかく、ざまあみろ。僕はもう笑い声をあげることすらできないけれど、心のなかで笑ってやる。死ぬまで笑ってやる。あはははははははは。子爵。あんたが嫌いだった。憎かった。呪わしかった。そのあんたがいなくなった。こんなに嬉しいことはない。ざまあみろ。でも、本当は、わかってる。わかってるんだ。

あんたがいなくなったところで、何一つとりもどせない。僕が失ったものはすべて失われたままだ。子爵に殺されたこどもたちの無念を晴らした？　僕は彼らに仲間と見なされてもいなかったのに？　僕は一人だった。特別だった。僕は子爵の特別な飼い犬だった。僕を無視するこどもたちがいた。恐れるこどもたちがいた。羨むこどもたちさえいた。どちらにしても、僕は一人だった。僕は一人で戦って、勝った。そして、一人で死のうとしている。

笑われるべきは、僕かもしれない。だって、こんなにみじめだ。

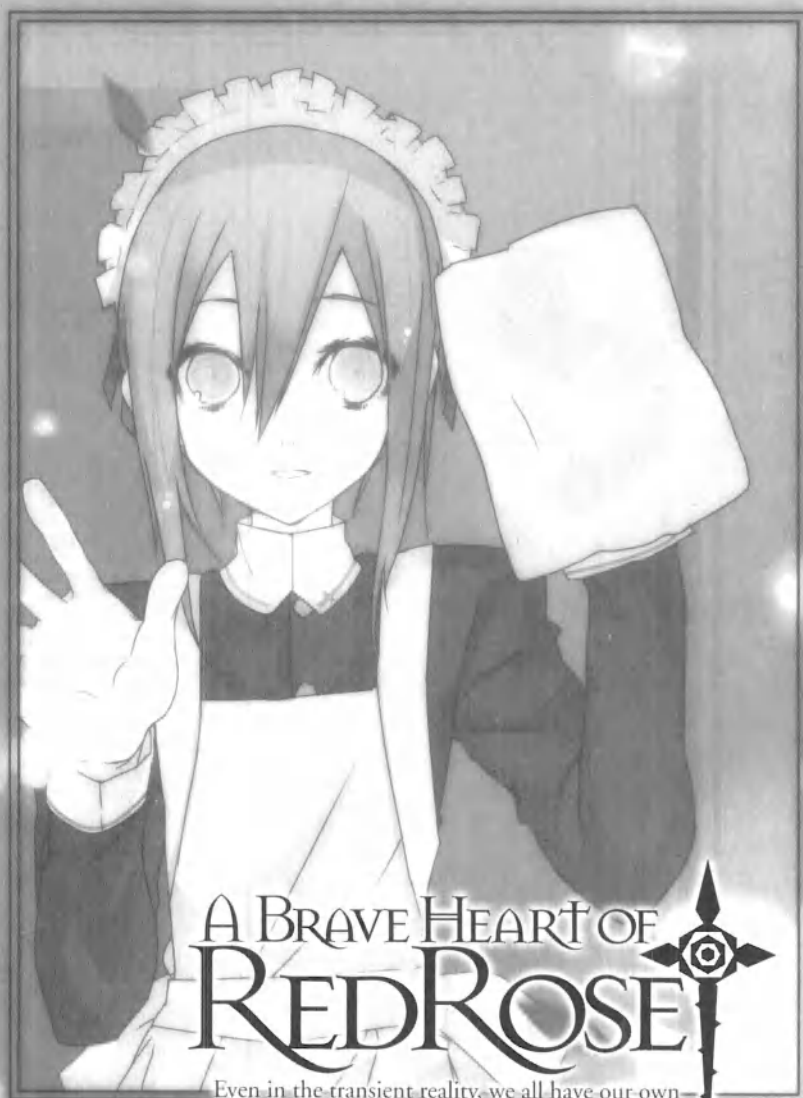
「……何……やってるんだろ……」

雨に呟いてみた。

雨が答えた。

「そこで何をしている」

いや。

あぁ、マリアンヌ。お願いだ。
ぼくのそばにきてくれないだろうか、
僕はきみを……。

A BRAVE HEART OF
REDROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

薔薇のマリア

魔術師(マギ)ヴィンセントは、カリオサークで運命的な出会いを果たした。
真紅の髪とオレンジの瞳を持つ美しきその人物の名はマリアンヌ。
いつしかマリアンヌに心奪われたヴィンセントを待ち受ける出来事とは!?
待望の『薔薇マリ』新クール、連載開始!

十文字青 AO JYUMONJI　イラスト BUNBUN

マキゾエホリック
MAKIZOE×HOLIC

まるで陽炎のような、あるいは時空の歪のようなその蠢きは、微かに人の形を取りながらも、瞬く間にガラスの破片のような光る粒子へと変じ、散り散りになって消えていく。

ゴトリ、と何かの落ちる音がした。それが妖怪の持っていた銃だと知った時、ミリルがこちらをゆっくりと振り向いた。

腹を撃たれたのだろう。シャツに穴が開き、その奥に血の気のない青白い肌が見える。

「あ、あの……」

何を言っていいのか分からなかった。あれほど私を殺そうとナイフまで構えていたこの少女は、果たして最後の最後で私を救おうとしたのか、それとも妖怪を葬るたった一つの方法に、ためらいなく従っただけなのか。

答えは訊けぬまま、帷子ミリルは黙って私の方に倒れ込んだ。

頭の中が真っ白になる。冗談なら、せめて一言何か口にしてほしい。そう思いながら私は彼女の体を受け止め、ともにその場に崩れ落ちた。

「――所詮虚像ね」

今にも溢れそうになった涙の横で、本当に一言が出てきた。

「実像の吸血鬼は、ピストル如きでは死ねないのよ」

そう言って私の頭を手で軽くずらし、ミリルが立ち上がる。その顔に、誰にともなく浮かべた嘲りの笑みは、もしかしたら彼女自身の呪われた体へのものだったのかもしれないが、どのみちあまりなジョークに唖然とする私には、そんな吸血鬼の哀しみなど共感できる余裕もなかった。

――九月三十日午後四時二分、図書室にて吸血鬼が妖怪を退治。

ミリルの言葉を受けた灘が、平然と今回の出来事をたったの一行で手帳にまとめ、ようやく事件は解決した。

「さあ、これでもうここには用もないだろう。帷子さん、焔邑さん、ついでに濃紫くんも保健室へ連れていってくれたまえ」

そんなことを命じてくる彼にミリルは頷くと、落ちていた銃を拾って私に返し、それから何か言いたげな焔邑と倒れた濃紫を引っぱって、ドアの方へと歩いていった。

鐘がカランと音を立てて彼女達の退散を告げた。この放課後だけで、寿命が閏年並みに縮んだ気がして、私はへたり込んだまま、フウと息をついた。

そういえば、図書室の仕事がまだだった。何だかもうこんな所にいないで早く帰りたい、と溜息をつき、そこで灘の視線に気付く。

何だ、その人を哀れむような眼差しは。

「灘くんも帰ったらどうですか？　仕事の邪魔ですから」

激しく鬱陶しい男に、私は一言不平をぶつけてやった。

「そうかい？　じゃあ僕も帰ろうか。君等がもう言葉もいらないほど親しくなっているなら、僕が手を貸すこともないだろうからね」

そんな謎の言葉とともに、灘が頷く。それを聞いた私が、いったいどういう意味だ、と首を傾げているうちに、彼は手帳をしまい、まっすぐにドアの方へと歩いていく。

親しいと言うのは、私と凛のことだろうか。いったい私達が親しくなかったら、灘は何を助けると言うのだろう。

うぅ、と凛の呻き声が聞こえた。どうやら目を覚ますらしい。さすがに放っておくわけにもいかないし、とりあえず声ぐらいかけてみよう――と思って、そこで重大なことに気付いた。

この拳銃、私はどんな顔で返せばいいのだ。変に誤解でもされた日には、明日どころか夜すら来ない。

迷っている猶予はなかった。私は再び銃をポケットに捻じ込むと、もしかしたらコレだけ置いて逃げればよかったのでは、と今さら冷静に考えつつ、鐘を鳴らして出て行こうとする生徒監視委員を追って、図書室の通路を慌しく駆けていった。

end

とは差し置いているようだった。
　そういえば焔邑も最初の段階で、真っ先にミリルを疑いから外していた。普通なら、後から来た焔邑には私とミリル、どちらが犯人だか判らなかったはずである。なのに二人まとめて疑うことなく、私に狙いを定めたということは、もしやミリルに容疑から外れる決定的な理由があったからか。
「そうでもないさ」
　だがそう言って灘は首を横に振った。
「妖怪がこの部屋にいるのは間違いないのだろう？　なのに捜して見つからない。疑わしい人物は片っ端から外れた。となれば、だ」
　そして手に持ったペンの先端で、私の後ろにいるミリルをまっすぐに指し示す。
「僕が思うに、妖怪は君に化けたんだ。帷子さん」
　本当に、振り出しに戻った。私が最初にそうしたように、灘もまたこの少女を疑ったのだ。そして当然ミリルも黙ってない。ようやく私から離れると、そのまま灘に歩み寄り、
「おかしなことを言うのね」と声を荒らげて言い返した。
「私のはずがないわ。焔邑もそう思うでしょう？　だって私は――」
「吸血鬼、だろう？　それがすべての答えだよ」
　灘は、しかし結論を改めることはなかった。
　吸血鬼――。帷子ミリルは確かに吸血鬼である。その事実がいったい今回の事件とどう関わってくるのか。それを訊ねようとして、私はふと、かつて映画で見たある有名な吸血鬼の特徴を一つ思い出した。
「吸血鬼は鏡に映らない」
　灘は、静かに言った。これが、ミリルが修理中の姿見を鬱陶しがった、そして焔邑がミリルを疑わなかった、何よりの理由だったのだ。
「そう、君の言い分は解っているよ。君は鏡に映らない。だから自分が問題の妖怪である可能性はゼロだ、とこう言いたいんだろう？　しかしね、僕は何も、君自身がその妖怪だとは一言も言ってないよ。あくまで君に化けたと言っているんだ」
　鏡に映らない吸血鬼。その映し身を、妖怪はそのまま借りた。
　私でも焔邑でもない。人間の魂を抜いて回るのに、帷子ミリルの虚像ほど恰好の姿はなかったはずだ。何しろそれは、まったく目に見えないのだから。
　不意に、私の背後で何かの翻る気配がした。薄手の布地。ミリルのマントの音によく似ている。しかしミリルはその布を羽織ったまま、私の目の前で灘と対峙している。となれば、他に誰がいるか。
　とっさに振り返ろうとした私のポケットに、誰かの手が差し込まれた。それは中の銃を掴み、そのまま虚空へと引きずり出す。
「――そこかっ！」
　焔邑が私を、いや私の背後を睨み、叫んだ。
　そして再び鬼を呼び出そうとした刹那、突如彼女の右肩から血が迸り、その激痛が否応なしに霊力を封じる。
　私は身を返し、巫女を撃った相手を見た。しかし見えない。ただ一つ、新たな熱を帯びて宙に浮かぶ一丁の銃と、そこから少し離れた空間に留まる、おそらく凛に撃ち込まれたのであろう一発分の弾丸だけが、そこにいる「何か」の存在をはっきりと表していた。
　犯人は、やはり最初からこの部屋に潜んでいたのだ。そして今までずっとここにいた。そう、完全に透明な姿で堂々と辺りをうろつき、私達を嘲笑っていたのだ。
　すべてが明らかになった。そしてこの瞬間、私に向けられていた銃の引き金がゆっくりと動いた。
　銃声が轟いた。だがほんの少しだけ早く、一つの足音がその前に立ちはだかっていた。
　思わず目を瞑った私の体に、痛みはまったく感じられなかった。ついでに、硝煙の臭いに混じって立ち込めるはずの血臭も漂うことなく、そっと目を開いた私の前で漆黒を伴う布地が揺れているのを見るや、ようやく何が起きたのか理解できた。
「……帷子さん？」
　本物のミリルが私の壁になっていた。
　私の声に、彼女は何の反応も見せなかった。ただこちらに背を向け微動だにせず、飛んできた凶弾にその身を貫かれていた。
　同時に彼女の体の向こうで何かが揺れる。

1年乙組でしかありえない
オチで物語は幕を閉じる――。

出しに戻りすぎだ。
「なあ、ちょっとおいら、思ったんだけどさ」
すでに事態が迷宮の入口へと差し掛かろうとしていた時、相変わらず私の姿のまま、濃紫が真顔で口を開いた。もっとも頭に巨大なたんこぶができていては、その真顔にも緊迫感がなかったが。
「服が左右逆だって、脱げば分からなくなっちまうぜ？」
「それはそうだけど……」
確かに一理ある意見だった。しかし、だったら犯人は裸だとでも言うのか。所詮ピンクの脳味噌だ。こんな意見一つで犯人が判れば世話はない、と鼻で笑ってやろうとしたところで、私はある可能性に気が付いた。
服なんてどうにでもなる。例えば、別の服に着替えるとか。
「……焔邑さん」
私の視線は、それをやったただ一人の人物へと注がれた。
「あなたなんですね。犯人」
その言葉に、焔邑の澄ました顔が私を見据える。同時に灘と濃紫がそんな巫女の方を振り向き、ミリルが一言「ご名答」と囁いた。
「……何だとコラ」
静かに、焔邑が吼える。いつもの凄みの籠った声で、しかしそれも演技のうちと判れば、恐ろしいことはない。
「簡単なことです」
私はそう言って、正面から彼女を見返した。
「今ここに左右逆の服を着た人はいない。なぜか——。それは、着替えたからですよ」
「着替えただと？　おい、じゃあこの装束はどっから持ってきたってんだよ。本物を襲って奪ったか？　そこまであたいはヤワじゃねーよ」
「それは、ええと……」
思わぬ反撃を受けて言葉に詰まる、だが、そこへミリルからすかさず援護が入った。
「往生際が悪いのね。べつに奪う必要なんてないわ。最初からその服装でいいのよ」
それ、着物よね。と彼女は言った。
「着物って、とても便利だわ。洋服なんかとは比べ物にならないぐらい。だって——。胸の合わせ目を逆にするだけで、簡単に左右が入れ替わるのだもの」
そう、着物だからこそ、誤魔化しは利いたのだ。
焔邑が黙る。ついでに灘が顔をしかめて、こちらと彼女とに目を走らせる。いったい彼は、今の推理に何を思ったのだろう。だがその言葉を聞くよりも早く、濃紫が動いた。
「よし、そいじゃ確かめてみようぜ」
言うや彼は素早く手を繰り出し、焔邑の袴を後ろからバサリと捲り上げた。
私は思わず目を見開いた。もっとも丈の長さが幸いしてか、捲れたのは後ろばかり。おかげで濃紫一人がその中に広がる光景を目に焼き付けたわけだが。
「むーん、ほくろの位置がいつもと同じ左だ。残念、藍子。この姉貴は本物だ——」
よ、と言い終える前に、彼の脳天を巨大な拳が捉えた。ちょうど焔邑の真後ろの床から青鬼が一体、憤怒の形相も露わに飛び出してきたところだった。
彼女の使い魔である。これを召喚できたというなら、本物でまず間違いない。そして次の瞬間、濃紫は私そっくりの顔に恍惚の笑みを浮かべ、額から真っ赤な噴水など迸らせながら、凛同様床の上に横たわり、一言も喋らなくなった。
寝てろクズが、と吐き捨てるように呟いた焔邑は、それから私とミリルに無表情な顔を向け、てめーらもな、と付け加えた。
「まあ、相手も普通そんな目立つ姿は選ばないだろうね」
灘が一言、感想を述べた。もっとも彼が何か言わずにいれば、間違いなく焔邑の皆殺し祭が始まっていたことだろう。多少落ち着きを取り戻して鬼を床にしまう巫女の姿に、私は安堵の息を漏らす。
「だから焔邑さんはすぐさま選択肢から外すべきだったんだよ。ねえ、帷子さんもそう思うだろう？」
「ずいぶん合理的な考え方ね。でも、そんなことをしていたら犯人がいなくなってしまうわ。見なさい、委員長。高浪も違うし焔邑も違う。もうこの中に、妖怪の可能性がある人間は一人もいないじゃない」
そう答えたミリルは、相変わらず自分のこ

「どちらも右手を伸ばしている」
特に複雑な思考など必要ない、実に単純な見分け方だった。
「本物の高浪さんも右利きのはずだから、この二人は虚像でも何でもない。となると、怪しいのはシャツが不自然なこちらの方だね」
「おい、ちょっと待てよ。虚像じゃねーなら、何でシャツが……」
「男物なんだろう？」
焔邑がとっさに挙げた反論を、灘はすぐさま封じてみせた。
「今入ってきたら、受付の所にベストが三着脱ぎ捨てられていたよ。高浪さんと瑪瑙さんの分はともかく、もう一着は誰のものか――。まあ、わざわざ高浪さんになりすまそうとする『妖怪』なんて、一人ぐらいしかいないと思うけどね。ねえ、濃紫くん」
そう言われ、ニセ藍子の顔が引き攣る。ついでに焔邑の眉毛がぴくんと動き、ポニーテールを掴む拳の表面に、筋肉と動脈の蠢きが見て取れた。
「濃紫……てめーか」
「アハハ♪」
「くたばれ」
渾身の笑顔を振り撒いたニセ藍子の頭部は、焔邑の腕にグイと押されて、呆気なく床に激突した。私はその光景にげんなりしながらも、そういえば濃紫も化けるんだよなぁ、と今さらになって思い出した次第である。
いや、これが普段ならすぐに気付いていたのだ。ただ、鏡の妖怪が誰かに化けて潜んでいるというこの状況では、どうしたってそっちに気が行ってしまう。
「やだなぁ、姉貴、暴力反対だよ」
額を真っ赤に腫らしたニセ藍子改め濃紫小太郎は、私の姿のまま、必死に実姉でもない巫女を落ち着かせようとした。まあ、それはいいから早く元の姿に戻ってほしい、と思い、そこでようやく彼の変身に課せられた一つの制約を思い出す。
濃紫は誰かに化けている間、身に着けている物が一つでも欠けると、元に戻れなくなる。受付で私のベストを見つけて、真似して脱ぎ捨てたのだろう。それで正体を現すこともできずに、困り果てていたに違いない。まったく、間の悪いやつだ。
「でも、どうしてボタンが男物のままだなんて、そんな中途半端な化け方をしたのかしら」
自分の完璧だった推理があっさりと覆されて、内心腹立たしいのだろう。ミリルもまた冷酷な笑みの端っこに十文字血管など浮かべながら、濃紫を睨み付ける。さらには灘に私と、一同の敵意を一手に受け、濃紫は慌てて弁明した。
「いや、だってこの方が、イザって時に脱ぎ慣れてるから」
脱ぐな。そもそもどんなイザだ、それは。
「それにさ、おいら、べつに悪意とかはなかったんだぜ？　ちょっと藍子にイタズラしようと思って……」
「それを世間では悪意と言うんだよ、濃紫くん」
灘が冷静に一言、真っ当な発言をした。
「大方焔邑さんから鏡の妖怪の話を聞いて、便乗しようとしたんだろう。これに懲りたらもう少しおとなしくすることだね」
さて、そうなると振り出しに戻るわけだけど――、と彼は続けた。そう、私と濃紫、ここにいた二人の藍子の正体が判明した今、結局この部屋に潜んでいるはずの妖怪の手がかりは、またも私達のもとから離れてしまったわけである。
――いや、果たしてそうか。
ミリルが大きなヒントをくれたではないか。
相手は左右逆だ、と。
私はこの場にいる一同を見渡した。ミリルに焔邑、それと灘に、ついでに言うなら私の格好をした濃紫――。この中に、左右逆の人物がいるはずなのだ。
まあ、この際濃紫はどうでもいい。灘も、ブレザーのエンブレムの位置とペンを持つ手からして、白に違いないはずだ。というか、ここまでいつもの調子で推理を見せ付けておいて、今さら犯人でしたということもないだろう。
残るは二人である。状況は、まさに振り出しに戻っている。
だがミリルも焔邑も、その服装に不自然な点は見受けられなかった。そう、左右逆の人物など、今この場にはいない。これでは振り

あなたなんですね。犯人。

いったいシャツがどうだと言うのか、私はミリルの次の言葉を待った。

「正確にはシャツのボタンの付き方ね。ご覧なさい。この二人、見た目はそっくりだけど、そこだけが少し違うでしょう？」

その声を合図に、全員の視線が私の胸元に集まった。続いてその視線はすぐさまニセ藍子へと移り、何度か往復を繰り返す。

「……ちげーな」

ようやく気付いた焔邑がしゃがみ込み、ニセ藍子の胸元を覗き込んだ。

「そいつのと左右逆だ」

「鏡の虚像なのだもの。当然よ」

それが――答えだった。

少し考えれば思い至ることではあった。妖怪は、姿見に映った姿を借りる。それは当然、本物と左右が入れ替わるはずなのだ。

なるほど、だからシャツのボタンなのか。

私は納得して自分の胸元を見下ろした。縦にボタンで閉じられたその部分は、右側の布地が左にかぶさるようになっている。そしてニセ藍子のそれは、まったく逆だった。

もし私がベストを着けたままなら、左胸にあるべきエンブレムの位置で、もっと早くに本物だと知れていたのだろうか。嗚呼脱いでてよかった――と、焔邑に勘違いされてボロボロになっているニセ藍子を見ながら、私は思った。

いや、本末転倒な気はするが。だいたい私が受ける残酷物語も、すぐ目前に控えているではないか。

背中にミリルがピッタリと張り付いている。逃がすまいとしているに違いない。

「さあ、あなた達、もう気は済んだかしら？　本物の高浪はこっち。早く終わりにしましょう」

首筋に冷たい息を吐きかけながら、吸血娘はその牙をゆっくりと私に近付けつつあった。

殺される――。

そう思って身を凝固させる。だが、そこで彼女は動きを止め、何やら考える素振りを見せた。

「一つ解らないことがあるのよね」

どうやら最後にして疑問が残っていたらしい。

「どうしてあなたはピストルを持っているのかしら」

やはり、これだったが。

「それはまあ、高浪さんだからね」

その質問に対して出てきた灘の答えは、最初にミリルが出した結論と、まったく変わらなかった。

「どうせまたよからぬことにでも巻き込まれたんだろう。その件についてはまた時を改めて、じっくり訊くことにするよ」

彼はそう言って己のメガネのずれを直した。時を改めて、というなら、私には明日が来るということでいいのだろうか。そして、もしや今のは彼なりに私を救ったのか。

先程も触れたとおり、灘は当然凛の本職のことも知っている。だから私が銃を持っている理由などお見通しだろう。そして、今の疑問が追及されれば、連鎖的に凛の秘密が明らかになってしまうことも。

どうやら学園を平穏に維持するという役目を持つ灘にとって、私との利害関係は奇しくも一致したらしい。私は小さく息をつき、あとはミリルと焔邑をどう宥めるかと考え出した時である。

「だいたいそこにいるもう一人の高浪さんだって、君等が追っている妖怪ではないと思うよ」

灘はニセ藍子の方を振り返り、驚くべきことを口にした。

先ほどから漂いっ放しの不穏な空気が、一際濃密さを増したように思えた。

「あくまで僕の推測だけどね。しかしその妖怪というのは、悪さをするために他人の姿を借りているんだろう？　なのになぜわざわざ高浪さんなのさ」

何のメリットもないじゃないか、と彼はニセモノの方に歩み寄りながら呟いた。

「君、何でもいいから、ちょっと本を読んでみたまえ。そっちの高浪さんもだ」

ついでに何を思ってか、そんな指示を出す。

ニセ藍子は髪を振り乱しながらも、うぅと呻いて頷き、手近な本棚に手を伸ばした。そして私もまた同様に手を伸ばしかけたが、しかし灘はすぐに待ったをかけると、「ほら見たまえ」と得意げにペン先で私達を指し示した。

カラン、と最後の鐘が鳴った。

その音に誰も大きな反応を示さなかったのは、すでに犯人がここにいると分かっていたからだろう。どうせ図書室の利用者に違いない。こんなタイミングで訪れるなんて、間の悪いやつだ――。せいぜいそれぐらいである。

そんな中でただ一人、少しでもこの状況を覆してくれるならぜひおいであそばせ、と期待したのが私だった。

期待は裏切られなかった。

「さっきこの部屋で銃声がしたという報告があったんだけど……高浪さん、また君か」

ただ、現れた相手は最低だったが。

メガネのレンズに挟まれた眉間に皺を寄せ、彼は私に――正確にはもう一人の私に――向かって、毎度お馴染みの台詞を吐き捨てた。生徒監視委員長、灘英斗である。

我が一年乙組の真の問題処理係である彼は、この蒸し暑い中でもブレザーフル着用といういつもの格好は崩さずに、冷静な眼差しでここにいる顔ぶれを一瞥した。そして、その段階でようやく私が二人いることに気付いたのだろう、薄く口を開けて溜息らしき呼吸を一つすると、「何も増えなくたっていいじゃないか」と、さらなる憎まれ口を叩いてきた。

人をカビか何かと間違えているに違いない。

私がひとり怒る様を気にすることなく、彼はつかつかとこちらへ歩み寄り、胸ポケットからこれまたいつものペンと手帳を取り出して、「いったい何があったのさ」と、敢えてミリルに訊ねた。他にまともな事情聴取の見込める相手がいなかったからだろう。

いや、あるいは――彼女の持つナイフを収めさせるためか。

灘に事情を説明しようと、ミリルがナイフをしまったのを見て、私はふとそう感じた。

「……なるほど、すると君等はその妖怪とやらのことで騒いでいたわけか」

ひとしきり話を聴いた灘は、そう言うと手帳に控えたメモをざっと眺め直した。そしてその目を今度は私に向け、「君が最初からいた方だね」と、改めて確認してくる。

「帷子さんは君を本物だと思っているのか。そしてそっちの――焔邑さん、いつまで掴んでいるのさ。窒息しかけてるじゃないか」

ニセ藍子を絞めていた焔邑が、言われて渋渋手を離した。ようやく解放されたニセモノは、そのままペタンと床にへたり込んだが、すぐにその頭を焔邑の手ががっしりと掴み直す。どうあっても逃がさない気か。

「焔邑さんは、そっちの高浪さんが本物だ、と言うのか。面白い」

「面白くないですよ」

みんなして面白がらないでほしい、と私は真顔で彼に毒づいた。何しろ本物はこの後倒される運命にある。そして、本物は私だ。

「まあ、しかし焔邑さんの意見――後から来た方が本物、というのは、とても理に適っていると僕は思うよ。むしろ帷子さんがどうやって最初からいた方を本物と判断したか。そこが気になる。だから聞かせてもらおうじゃないか。帷子さん、君の推理を、ね」

いつもながらの気取った口振りで、灘はミリルの発言を促した。

「あら、あなたほどの人が気付かないというのかしら、委員長」

そして気取り口調というなら、この吸血鬼も負けてはいなかった。

「どうせ解っているのでしょう？　私が見たのは、ここよ」

そう言って彼女はスッと私の斜め後ろに立つと、その人差し指の先端を私の鎖骨の間に押し当て、まっすぐ線を描くように下に降ろした。突然の感触に鳥肌が立ち、思わず後ろに逃げようとする。だがその退路は、ミリルのもう一方の手によって阻まれた。

「ねえ焔邑。鏡の虚像と言ったわね、その妖怪」

「ああ。それで、そいつの胸が何なんだ？」

「こんな胸なんてどうでもいいわよ。肝心なのはシャツだわ」

こんな、だけ少し余計である。

それはともかく、今ミリルははっきりと見分けるポイントを明かした。

「……シャツ？　んなもん、こいつだって着てるじゃねーか」

焔邑がニセモノのポニーテールを引っつかみ、軽く揺らす。彼女が私の方を本物だと思わなくてよかった、と微かに安堵しつつも、

聞かせてもらおうじゃないか。
君の推理を、ね。

真似している。
　高浪藍子――。あれは、私だ。
　う、と私が呻いた。同時に焰邑が、あ、と呟き、ミリルが、ん、と息を漏らす。そして最後に第二の藍子が、お、と驚いたかのような声を上げて、短なコーラスがここに完成した。
　この瞬間、唐突に現れたニセ藍子は何を思ったろう。本物の私に加えて、焰邑とミリルという強烈な存在が二人。それが全員激しく鬼気迫る顔で睨み合う中、迂闊に出てくればどうなるか。
　そう、このニセモノは、明らかに空気を読み違えた。
　ニセ藍子はすぐさま体を反転させ、逃走を図ろうとした。だがそれは無駄というもの。すかさず焰邑が突っ走り、逃げようとする彼女の襟首をむんずと鷲掴みにする。
　ちなみにこの巫女様、いつも霊力より暴力を振るうことの方が多いように思うのは気のせいか。
　彼女は私達のもとまでニセ藍子を引きずってくると、その体を乱暴に床に投げ出した。きゃう、と悲鳴が上がったが、声まで私そっくりである。
「……さて、これはどうすればいいかしら？」
　ミリルは犬歯のはみ出た口元を小さく歪め、焰邑に訊ねた。
「封じ先の姿見は、もう割れてしまって使えないのよね。まあ、今さらいちいち封じなくたって、殺してしまえば済むことでしょうけれど。そうすれば奪われた魂も戻ってくるはずだわ」
「言ったろ？　こいつは厄介なんだよ」
　焰邑は私とニセモノ、交互に視線を走らせながら、ミリルの問いに答える。
「相手は虚像の具現化したもんだ。虚像はどう殴ったって倒せねー。倒したけりゃ実像の方――本物を殺るしか方法はねぇんだ」
「そう、じゃあ本物を始末すればいいのね？」
「そーゆーことだ」
　ちょっと待て。何か話がまずい方向に進んでないか、それは。
　とりあえず今の各種発言が冗談で済まないものかと、私は乾いた笑みで対応してみた。しかし彼女達の顔には迷いがまったく感じられない。ミリルと焰邑。つい先ほどまで険悪な空気を漂わせていたはずの二人は、しかしすっかり息の合った調子で臨戦体勢に入り、あくまで無害な方の本物の私をキッと睨んだ――。
　……はずだった。
「おい、こっちだろ？」
「いいえ、こっちよ」
　私を刺すべく呪いのナイフを構えたミリルが、ニセ藍子の胸倉を掴んだ焰邑に言い返す。どうも最後の最後で意見が分かれたらしい。
　二人とも譲れないのだろう。ものの数秒、その姿勢のまま固まった。そして、あくまでそれが本物の私を始末するために取っているポーズだという切ない事実を改めて噛み締めた時、焰邑が「ぜってーこっちだ」と、ニセ藍子のリボンタイをグイと引っ張った。
「この二人の高浪。どっちかがヤツで、瑪瑙を襲ってるのは間違いねぇ。だったらどう考えたって、最初からいた方が黒じゃねーか。後から入ってきたこっちが本物のはずだ」
「それが焰邑の推理？　まあ、状況だけ見るならそうだけど、もっと簡単に見分ける方法はあるわよ。それに――やっぱりピストルが不自然だわ」
「本物の高浪がそんなもん持ってる方が、よっぽど不自然だっつーの」
　またそこに戻るか、この二人は。
　いや、ミリルの台詞から察するに、どうも銃以外に明確な「見分け方」というのは存在するらしい。そして彼女はそれに則って私を本物だと判断している。ならばその「見分け方」を披露すれば、答えは明らかになる。
が、しかし、だ。
　むしろ本物だとやばいというこの状況、何とかならないものか。
　私はニセ藍子の顔を見た。彼女は私そっくりの目に微かに涙を浮かべ、おろおろしているところだった。凛を襲って魂を奪った割には、妙に頼りない妖怪である。
　いっそのことこちらからニセモノですと名乗ってしまおうか――。窮地のあまり自暴自棄になりかけたその瞬間。

「……違うわ」
だがそんな時、ふと思慮深げな顔になったミリルが口を挟んだ。
「高浪ではないわね。焔邑、あなたではないの？」
それは、つい今しがたまで私を疑っていた少女の口から発せられたとは思えないほど、意外な台詞だった。そして、当然焔邑がそれを黙って聞き流すはずもない。
「言いがかりは止せよ」
ただでさえアレな彼女の柄の悪さが、一割増になった。
「あたいは今来たんだ。瑪瑙がやられた後にな」
「どうかしらね。この部屋、こちらから捜そうとしなければ、充分に隠れる隙はあるわよ。あなたが最初から隠れていて瑪瑙を襲う。そして、高浪と私が気付いて騒ぎだしたところで内側からドアを開閉すれば、あたかも今来たかのように見せかけられるわ。これならあなた自身がどんなに犯人を捜し回ったところで、見つかるわけが……」
「くだらねー。想像だけでいろいろ言うなよ」
「選択肢の問題よ。だって、高浪は白だわ」
ミリルははっきりと、私を擁護しだした。
いったいどういう根拠があるのだろう。私はそれが解らぬまま、妙な緊張感を漂わせ始めた二人の同級生を交互に見る。
「高浪はピストルを持っているわ」
根拠が出された。ていうか、それなのか。
「しかも発砲しているのよ。瑪瑙が魂を抜かれて倒れたなら、そのピストルはいったい何なのかしら。だから高浪が犯人というのは不自然なのよ。それとも魂を抜かれたのは嘘だったとでも言う？　まあ、どのみち嘘をついた人間が怪しいことには変わりないわね」
「いい加減にしろよ」
焔邑のコメカミに青筋が走った。まずい。彼女を本気で怒らせた場合、流血沙汰は免れない。かつて見た数々の暴力ショーを思い出し、私は後退りしようとしたが、その動きは焔邑の鋭い眼差しによってぴたりと封じられた。
「おい高浪、てめー、何で銃なんか持ってんだよ。しかも撃ったってのは何だよ、あ？」
完全に喧嘩腰である。私はまたもや首を大きく横に振ってみたが、ミリルの「あら、あなたが撃ったのではなかったの？」という言葉に、今度は完全に詰まってしまった。
肯定はできない。否定もできない。どうすればいいのだ。いっそのこと逃げるか。いや、それはあからさまに自分が犯人ですと言っているようなもので……。
「弾はどこだ？」
ふと、焔邑がそんな疑問を口にした。
「てめー、何を撃った？　瑪瑙は血なんか流してねーし、だったら弾はどこだよ」
そんなこと、知るわけがない。
とにかくこの銃の説明を何とかしない限り、私に明日はない気がした。だがそうなると、どうしても凜の正体は避けて通れない、仕事柄、生徒全員の背景を知る灘すらも公表を控えているこの秘密。もし私が明かせば、今後妖怪が退治されて彼女が復活した時、間違いなくその銃口は私目掛けて火を噴くことになる。
何てことだ。明日が来たって、明後日が来なくちゃあまり意味がないじゃないか。
絶望という名の恐怖に、私の頭の中は徐々に空白に蝕まれていく。そこを埋めるものがあるなら何でもいい、私に希望を与えてほしかった。

カラン、と鐘が鳴った。

希望だ、と思った。
ミリルと焔邑の視線がすぐさま室内を走る。果たして侵入者か逃亡者か。二人はじっくりと気配を窺い、鋭い殺気に満ちた姿勢をジリジリと入口に向けて進め始める。
ぱたぱたと足音がした。この部屋の中だ。
「……誰だ」
焔邑の低まった声が、それでもしっかりと静寂を揺さぶった。
それが合図だったに違いない。通路の少し先、巨大な本棚に阻まれた突き当りから、ひょっこりと一人の人物が顔を出した。
実に見慣れた姿だった。ポニーテールに丸顔に、ついでにベストを脱いでシャツとスカートだけになった今の状態まで、きっちりと

てめー、何を撃った？

怪奇マニアの吸血鬼に向かって、怪奇と戦う巫女はぶっきらぼうに言い捨てた。

「けど問題はこっからだ。その妖怪、厄介な能力を持っていてな」

「ええ、それも知っているわよ。姿を変えるのでしょう？」

「ああ、鏡の外に出る時は、姿見に映ったことのあるヤツを一人選んで、その姿を借りる。だから捜すのが面倒くせーんだよ」

なるほど、するとその妖怪、今はまったくの別人に成りすましているわけだ。それでは一人で捜し出すのも手間だろう。だが、それを私に振るのは、やはり間違っている。私は探偵でも何でもないのだ。

「面白いわね」

ミリルが微笑んだ。こちらはこちらで、さっきから面白がってばかりだった。

「もしそれがうちのクラスの誰かになっていたとしたら、なかなかの強敵だわ」

そして嫌な展開を予想しだす。確かに乙組の生徒は、ここにいる面々も含めて敵に回したくない連中ばかりである。だが焔邑が「真似るのは外見だけだ」と指摘すると、すぐさま彼女は詰まらなそうに「あら」と落胆の声を上げた。

「特技も真似できたらよかったのに」

「てめー、他人事だと思って好き勝手言ってんじゃねーよ」

ミリルの発言に、焔邑が口汚く罵り返す。

しかし——他人事などでは決してない。

「それはどうかしら」

私が思ったとおり。ミリルは笑いながら首を横に振った。

「魂を奪うと言ったわね。奪われると、もしかしてこうなるのかしら？」

そして肩に掛かったマントを翻し、その細い腕を本棚の間に向ける。

焔邑の顔が、心持ち引き締まった。そして急いで私を跳ね除け、ミリルの指差した方を覗き込み、小さく舌打ちする。

「……間違いねーな。もう精気が抜けちまってる。早くヤツを倒さねぇと、元に戻らなくなるぞ。おい、こいつが襲われるところ、見てたか？　相手はどんな姿だ。どっちへ行った。とっとと教えな」

日頃の口数の少なさからは想像もつかない勢いで、焔邑は私達に捲し立てた。ようやく見つけた手がかりなのだろう。躍起になるのも無理はない。

だが、事態はもう少し複雑だった。

「ええと……たぶんまだこの部屋のどこかに」

私は恐る恐るそう告げた。焔邑の眉毛が、微かにぴくんと跳ねた。

「ここのドア、鐘が付いてるじゃないですか。瑪瑙さんが倒れた後、焔邑さんが来るまで一回も鳴らなかったから、たぶん……」

言い終える暇は与えられなかった。焔邑はすぐさま身を返すと、草履履きにも拘らず素早い足で図書室中を走り回り、机の下やらエアコンの上やら、片っ端から探り始めた。

それが終わるまで、ものの五分もかからなかったと思う。しかし何の成果も得られないまま、彼女は手ぶらで私達のもとに戻ってくると、「いねーな」と呟いた。

「どこにもいねぇ。これだけ派手に捜して出てこねーってのは何だよ。おい、本当にヤツはここにいるのか？」

「間違いないわよ。この図書室からは誰も出ていないわ。そうね、だとしたら答えは簡単。その妖怪は、誰かに化けているのでしょう？」

ねえ高浪、とミリルは意地悪っぽく微笑んで私に言った。

そう、焔邑もミリルも知っていた妖怪の特徴。凛を襲い、魂を奪った危険なそいつは、今誰かに化けてこの部屋にいる。だとしたら、その人物の日頃とるはずのない不自然な行動も納得できる。

姿見に封じられてた、と言ったか。だったら教室で修理中のそれを鬱陶しいと思って、教室を離れていてもおかしくはない。

結論は変わらない。犯人はミリル——の姿に見えるこの少女だ。私と、後から入ってきた焔邑は絶対に違うはずである。

「そうか。だったらてめーか」

だが無表情な巫女は、そう言ってなぜか私をまっすぐに見据えてきた。

いや、ちょっと待ってほしい。どうしてそう誰もが、片っ端から私を疑うのだ。私は思わず首を左右にぶんぶん振り、後頭部のポニーテールを両耳にぶつけてみせた。

中が死ぬ。捜してくれ」
　少し違ったが、まあ、物騒さでは似たようなものだった。
「妖怪って……それ、どうして私のところに頼みにくるんですか」
「いつも使ってるクソガキがどっか行っちまってよ」
「クソガキって？」
「うちのクラスにクソガキは一人しかいねーだろ。濃紫だ」
　彼女の言葉に、小学生程度の背丈しかない生意気なエロボウズの姿が思い出された。濃紫小太郎である。あれも外見とは裏腹に二百五十歳は超えているという、人間とは明らかに違う次元の存在らしいが、焔邑の下僕だったとは。
「で、一人で捜すには、少しややこしいヤツなんでな」
　そう言って焔邑は、両手の拳をギリギリと握り締めた。
　何だか腑に落ちない話だった。怪奇事件専門解決などと看板を掲げた覚えはまったくない。私はただの図書委員なのだ。それがいつの間にかクラスの間で、怪奇も含めて厄介事相談係のように扱われているのはどういうことだろう。そういうのは、私とは別に生徒監視委員という本職の人間がいるのだから、そちらに任せればいいのだ。
　生徒監視委員、灘英斗――。一応私がこの学校で最もお世話になっている相手である。
べつに、なりたくはないのだが。
　だいたい私と灘は仲が悪い。生徒の関わった事件を解決するという、言わば学級警察にも似た仕事をやっている彼にとって、片っ端からいろんな事件に巻き込まれる私は疫病神も同然。一年乙組という問題だらけの教室で日々起こる事件の片隅に私を見つけては、小言を垂れ流してくるし、私は私で好きで巻き込まれているわけではないから、むしろそこにいちいち口出ししてくるこの男の方が、よほど邪魔だと思っている。
　そしてこんなに相容れない二人だというのに、周りからチームのように扱われているのはどういうことか。今焔邑が私の力を借りに来たのだって、要するに私をいつも灘とつるんでいる生徒監視委員の片割れと見なしてのことだったはずだ。
　厄介である。そんな妖怪なんてはるかに可愛く見えるぐらいに厄介だ。
　もっとも、どのみち今はそれどころではない。ここで焔邑の手伝いに行けば、私は確実に逃げたものとして、ミリルから犯人扱いされることになる。そんな展開だけは絶対に嫌だった。
「他に誰かいるのか？」
　その位置からでは本棚の間にいるミリルが見えないのだろう。焔邑は表情一つ変えぬまま、私に新たな質問をぶつけてきた。ただしそれに答えたのは私ではなく、当人の方だったが。
「ええ、いるわよ」
　ミリルはそう言ってマントをなびかせながら、私を押し退けるようにして通路へと歩み出てきた。
「妖怪ですって？　面白そうね」
「遊びじゃねーよ」
　現れた吸血鬼の姿に、焔邑の声が若干野太くなる。そういえばこの二人、大雑把に見れば、退治する側とされる側に当たるのだろうか。だとしたら仲は悪いのかもしれない、と私はまるで他人事のように人間観察などしてみた。
「それで、どんな妖怪かしら。高浪の力が必要だなんて、変わってるわね」
「どういう意味ですか」
　微妙に失敬な言い草に私は文句を言ったが、二人ともそれをあしらう素振りすら見せない。そんな哀しい空気の中、焔邑が「鏡だ」と答えると、ミリルもまた「ふうん」と可笑しそうに頷き返した。
「住み家の姿見に封じてたのが、割れたせいで抜け出ちまった。人間の魂を奪う危険なヤツだ」
「あら、それ。噂でなら聞いているわよ。鏡の中に潜む妖怪――。確か去年までこの学校の七不思議の一つになっていたわね。私も捜したけど見つからなくて、がっかりしたの。そう。封印されたのなら、見つからなくて当然ね」
「あれはあたいが入学初日に封印したんだ」

間違いないわよ。
図書室からは誰も出ていないわ。

ことか、わざわざ教室で修理しているのよ。それが鬱陶しいからここへ逃げてきた——。それだけのことだわ」

どじなメイドというのは同級生の一人だろう。それはともかく、授業中はおろか掃除中ですら爆睡している吸血鬼が、鏡の修理ぐらいで何だと言うのだ。

そう、やはりミリルは怪しい。というか私達以外に誰もいない以上、普通に考えて他に可能性など存在しない。

「何なら試してみましょうか」

だがミリルはそう言うと、マントに包まれた自分の体をまさぐり、どこからか一本のナイフを取り出した。柄に細かな装飾のあしらわれた、古風な物である。彼女が趣味で集めているというオカルトアイテムの一つに違いない。

「罪人殺しの魔剣。かつて中世ヨーロッパの魔女狩りで使われたものよ。もっとも使ったのは、教会側への密告者を暴く魔女の方だったけれど」

これを使えば誰が犯人かすぐに判るわ、とミリルは蠱惑的にナイフをちらつかせて囁いた。

「願うだけで、切っ先が独りでに犯人のいる方向を指し示すの。簡単でしょう？」

「それは……何か代償とかはないんですか？」

「そうね、見つけた犯人をこのナイフで刺し殺さないと、呪いで全員が死ぬわ。でも確実に刺し殺せばいいだけの話だもの。ね、簡単でしょう？」

「しまってください！」

私は慌てて柄を掴み、彼女の方に押し戻した。図書室を血の海にする気か。

あら残念、と呟き、ミリルがおとなしくナイフをしまう。私は突然の惨劇を回避したことでひとまず安堵したが、そこでふと戸惑いを覚えた。

今の道具だ。彼女自身が犯人なら、果たしてあんな品を持ち出してくるだろうか。

そういえば私が銃を持っていると知った時の不審げな表情も気になる。もし彼女が犯人なら、凛が撃って私が銃を拾ったという一連の流れは解っていたはずだ。なのにあの顔……、まるでその辺りの事情をまったく知らなかったかのようではないか。

それともただの誤魔化しか。しかし誤魔化そうにも、それで疑惑を逸らすには無理がありすぎる。何しろこの部屋には、凛を除けば私とミリル以外に誰もいないのだ。

そのはずである。他に誰かが隠れている可能性などない……と思うのだが。

どうだろう。この図書室、例えば受付の下とか本棚の陰とか、身を隠せそうな場所ならいくらでもある。だとしたら、果たしてこの部屋にいる人間は本当に私達だけか。

額を一筋の汗が這い落ちた。いやに冷たい。

カラン、と鐘の鳴る音が響いた。

「……ドアね」

ミリルの赤い瞳が細くなる。今の音は、確かにドアが開閉された証拠だ。

誰かが来たのか。それとも誰かが——出て行ったのか。

「高浪、いるか？」

しっかりした、それでいて起伏に乏しい女の声が、私の名を呼んだ。

来客の方らしい。私が小声で「誰ですか？」と訊ねると、相手はそれを頼りに素早い足取りでこちらへやって来た。

出迎えようと通路に顔を出した拍子に、真紅色の袴と、その横に揺らめく白い袂が見えた。こんな物を着て校内をうろつく人間など、うちの学校には一人しかいない。

焔邑相馬。同級生にして、近所の神社の一人娘である。黙っていれば美人という喩えを地で行く彼女は、その澄ました顔で私を見やり、何かあったかと訊ねた。

「顔色がわりーぞ」

そう言う自分の口の方がよっぽど悪い。

「ええと、ちょっと今いろいろあって……。焔邑さんは私に用ですか？」

「ああ。手を貸してくれ」

いったい何に、だ。

見てのとおり、焔邑相馬は「巫女」である。その「巫女」が装束姿でいるというなら、それはよからぬ事態が起きている証だ。例えば、どこかが祟りで燃えた、とか。

「妖怪が一匹逃げ出した。ほっといたら学校

とりあえず、私はそう答えた。だがそれ以上の推測も、すでに頭の中では組み上げられつつあった。

　あの音が銃声なのは間違いない。撃ったのは凛だ。凛はこの図書室で何者かに襲われた。襲われて、抵抗しようととっさに発砲した。しかしその甲斐虚しく、彼女は相手の魔手に掛かり、こうして気を失ってしまった――。

「ふうん。そう」

　私の曖昧な返答に軽く首を傾げて黒髪を揺らし、ミリルは倒れているメガネの図書委員を見下ろした。それから軽く鼻をひくつかせて一言、「血は出てないのね」と付け加える。慣れ親しんだ香りの存在がないことに、わずかながら落胆する素振りも見せたが、その笑みはすぐさま不審げな顔つきへと変じた。

「ピストル……ね」

　音と硝煙の臭いで、それはすぐに判ったはずだ。だが彼女が敢えてそう発言した時、その赤い瞳は私のポケットにしっかりと向けられた。

「この硝煙の臭い、あなたから香ってくる。高浪、あなたのそのスカートのポケットよ。どういうことかしら。銃声が聞こえて起きてみたら、瑪瑙が倒れていて、あなたがピストルを持っていて……」

　面白いじゃないの、とミリルの顔に笑みが戻った。もともとこの部屋には三人しかいない。そしてこの吸血鬼を除けば、残るは倒れている凛と、銃を持っている私――。

「……違います！」

　慌てて私は否定した。このマントの娘が何を思ったか。それは明らかだった。

「だってほら、瑪瑙さんは息があるじゃないですか。撃たれてなんかいないんですよ？」

「それはあなたの腕が悪いのよ。弾は外れたのでしょう？　ただその音で瑪瑙が気を失っただけのこと。いえ、もしかしたら銃身で殴って気絶させた拍子に、ピストルが暴発したのかもしれないけれど、どのみち何の取り柄もない本の虫を襲うなんて物騒な話ね」

　殺しの腕前だけで言うなら、凛の取り柄はありすぎるほどある。だが、そんなツッコミはどうでもいい。今は自分の弁護だ。

「ちょっと待ってくださいよ。本当にどうして私がそんな物騒なことをしなきゃならないんですか。だって瑪瑙さんを襲う理由がないし、銃を……その、使う必要だって」

「あら、そうでもないわよ。あなたなら何だってやらかしかねないもの」

　ミリルの述べ上げた根拠は、相当失敬な代物だった。

　それは確かに、私はここに転校してきて以来、一部から「受難」と称されるほど、いろいろなゴタゴタに関わっている。しかし好きでそうなったわけではない。悪いのは一年乙組というこのクラスそのものだ。

　だいたい、どこの世界に殺し屋と吸血鬼と、その他各種非現実的な高校生の共存している教室があるのだ。そんな所にいれば、否が応でも厄介事に巻き込まれて当然である。

　私は白だ。誰がどう言おうと、間違いなく真っ白だ。

　しかし――そうなると犯人は誰なのか。

　私の耳に誤りがなければ、発砲後、ドアの開閉を告げる鐘はまったく鳴ってない。

　窓から逃げ失せた、という可能性はないだろう。ここは四階だし、何よりこの奥まった場所から窓までは距離がありすぎる。走れば足音で気付くし、犯人が悠長に歩いて逃げるとも思えない。

　そして、この部屋には三人しかいない――。

「……帷子さんじゃないんですか？」

　ポケット越しに凛の残した武器の感触を確かめながら、私はできる限りの冷静さを装ってミリルに訊ねた。そう、今起きてきたかのように振る舞ってはいるが、この危険な吸血鬼こそ疑って然るべきである。

「だいたい放課後だっていつも教室で寝てるのに、何で今日はここにいたんですか」

「あら、いけなかったかしら。陽が沈むまで、どこで寝ようと私の自由でしょう？」

「でも……図書室は寝るところじゃありません！」

　何となく成り行きで図書委員らしい台詞を口にしてしまったのも束の間、ミリルは「理由ならあるわよ」と、素直にその白い顔をドアの方角に向けた。

「どじなメイドが、北校舎の廊下に掛かっていた姿見を割ってしまったの。しかもあろう

見つけた犯人をナイフで刺し
殺さないと、呪いで全員が死ぬ。

は避けているものの、半ばこの命を人質に脅される形で彼女に振り回されているのも事実である。

だから当然楽しくお喋りしながら、というのは難しい。それに、他に友人でも来ていれば、そちらを相手にしつつ、あわよくば手伝わせたりもできるところだが、そのたった一人の部外者は、あいにく読書用の席で睡眠中だった。

こちらも乙組の生徒で、帷子ミリルという。妙な名前だが、トランシルバニアからの帰国子女ということで、一応私は納得している。彼女がいつも身に羽織っている黒マントも、完全に昼夜が逆転している睡眠時間も、たぶんそのせいに違いない。そんな妙に犬歯が伸び気味の危険な少女を、わざわざ起こして手伝わせる勇気はなかった。

静かだった。広い図書室の中で一言も言葉を交わさず、黙々と作業を進める二人と眠りこける一人。しかもそれぞれが離れた場所にいるから、互いの姿すら見えない。物音も聞こえず、司書がふざけてドアに付けたヨーロッパ土産の鐘も鳴る気配すらない。

滅入りそうである。

私は大きく息を吐き、半袖のシャツから伸びた腕で額の汗を拭った。この週が終わればようやく冬服に衣替えだというのに、少しも冷える気配がない。このままあの緑色のブレザーなど羽織った日には、さぞかし蒸れることだろう。

自分の鬱陶しい想像でさらに気を滅入らせながら、私は高い所で出鱈目に並んでいる本を直そうと、爪先立ちになって手を伸ばした。

それが合図にでもなったかのように、惨劇は起きた。

パン、という破裂音が、室内に響いた。

思わず手に掛けていた本を床に落とした。しかし拾い上げることができないまま、私は少しの間身を硬直させて、辺りの気配に耳を傾けた。

静かだ。何も聞こえない。

「……瑪瑙さん?」

まだ下の名前では呼び慣れない相手に小声で呼びかけたが、やはりそれ以上の物音はしなかった。

私はいまだ強張り続ける体をどうにか動かすと、そのまま足を忍ばせるようにして恐る恐る奥へと進み始めた。この得体の知れない異様な空気の中、とにかく一人でいるのは不安だった。

暑さとは違う汗に首筋を濡らしながら、本棚の列の間を一つ一つ確認していく。凛は、奥から四番目で見つかった。右手に拳銃を握り締めたまま、仰向けに倒れていた。

動く様子はなかった。そして埃臭い図書室の中で、今この一帯にだけ硝煙の臭いが蔓延しているのは、彼女の手の中の銃が熱を帯びている何よりの証拠だった。

私はそっと身を屈め、凛の様子を確認した。僅かだが胸が上下している。息はあるらしい。

いったい何があったのだ。

怖々手を伸ばし、指先で銃に触れてみた。案の定熱くなったそれは、彼女が普段から持ち歩いている物である。この図書委員が「殺し屋」である何よりの証だ。だが、その「殺し屋」が銃声の後に倒れている――。

銃に触れる指先に力が籠った。嫌な予感がする。私は今、この上なく危険な状況にあるのではないか。

その時である。カツン、と靴音がした。

「何かしら、今の音。うるさくて目が覚めてしまったわ」

ミリルの不機嫌そうな声が響いた。こちらに来る。私はとっさに立ち上がろうとして、そこで――一瞬迷った。

凛の手の中には、彼女の大きな「秘密」が残されたままである。それを他人であるミリルに見られるということが、何を意味するか。

私が銃をもぎ取り自分のポケットに捻じ込むのと、ミリルの蒼白顔が本棚の間を覗き込むのと、ほぼ同時だった。

「あら高浪、何があったの?」

不自然なまでに赤く光る瞳を私に向け、ミリルはくすりと微笑んで訊ねてきた。凛が倒れているのは、彼女にも見えているはずだ。なのにまったく動じることなくそこに浮かべた笑みは、この悪意に満ちた魔性が異様な情景に悦びを見出しているからに違いない。

何しろ帷子ミリルは「吸血鬼」だ。

「ええと……倒れていたんです」

STORY

ありえない連続事件を解決し、
無事私立御伽学園1年乙組に転入した高浪藍子。
ただの「マキゾエ」だったのに、
同級生すべてを記号化することで
事件を解決する生徒監視委員・灘英斗の、
受付窓口件、コンビとしてクラスメイトに勘違いされ、
事件を請け負う日々。
そして今日。放課後の図書館で、
一発の銃声が鳴り響き、秘密を持っている少女が倒れた――。
前代未聞の密室事件、
記号を駆使して灘と藍子はどう解決に導く!?

九月の蒸し暑い放課後だった。
白く濁った空に無風の大気が重く立ち込め、雨が降り込まぬよう閉ざされた窓の中、室内にいる私の額に細かな汗を浮かばせている。本棚の組み合わせで構築された狭い空間は風の抜ける気配もない。おまけに辺りを漂う埃が身に張り付き、暑さで粘ついた肌をじわじわと汚していく。
　鬱陶しさのあまり、ベストは受付の所で脱いできた。それはともに図書委員である瑪瑙凛にしても同じで、あの無口なメガネの同級生もまた、後ろで縛っただけの髪を微かに脂で光らせながら、早く済ませましょう、と私に言い残し、一人で部屋の奥へと潜ってしまった。
　空気が悪い。今、この図書室は淀んでいる。天気もそうだが、蛍光灯が切れかけているせいか、部屋全体がどことなく薄暗い。それに今私がいるのは、窓からもドアからも離れた本棚の列の間。視界すら閉ざされては、どうしても気分は晴れない。
　なぜ私達が当番の日に、よりによって蔵書の点検などやるのだろう。ラベルを参考に並び方を正し、手持ちの貸し出し状況と照らし合わせて、逐一確認をしていく。もう一人の参加者であるはずの司書の深山は、急用で早退してしまっていた。
　おかげで私と凛の二人きりである。気まずい。同じクラスの女子同士とはいえ、私はあの子がたいそう苦手なのだ。
　いや、同じクラス――というのがむしろ問題なのかもしれない。
　私、高浪藍子は、私立御伽学園の一年乙組に所属していた。
　この秋から転校してきた。だから最初からそこにいたわけではない。しかしこの一年乙組というクラス、どういう経緯でそうなったかは知らないが、全国の特異な少年少女が一手に集まっているという、私のようなごく普通の女子が入り込むにはあまりに不釣合いな場所だった。
　もちろん知力や運動能力が極めて高いとか、そういった特異性ならそれほど問題はなかったに違いない。ありがちなエリートクラスだ。
　しかし現実はあまりにどうかしていた。
　例えばこの瑪瑙凛。私と同じ高校生の身でありながら、多額の報酬と引き換えに人の命を奪うという、相当特殊な職に就いている。
　当然周りには秘密にされているが、無口で地味な少女という表の顔とは別に、彼女は闇に満ちた裏を持っている。私はそんな秘密を知る数少ない人間の一人で、とりあえず他言

今、この淀んでいる図書室から
物語は始まる――。

私立御伽学園1年乙組クラス名簿

■女子

出席番号:女子13番
焔邑　相馬
(ほのむら　そうま)
【巫女】

出席番号:女子9番
高浪　藍子
(たかなみ　らんこ)
【受難】

出席番号:女子5番
串原　真葉
(くしわら　まよ)

出席番号:女子1番
葦ヶ谷　伊織
(あしがや　いおり)

出席番号:女子14番
瑪瑙　凛
(めのう　りん)
【殺し屋】

出席番号:女子10番
根室　アヤカ
(ねむろ　あやか)
【超能力者】

出席番号:女子6番
倉時　茶凪
(くらとき　さなぎ)

出席番号:女子2番
イオン=セラモード6世
【姫】

出席番号:女子15番
百川　優
(ももかわ　ゆう)

出席番号:女子11番
樋渡　萌華
(ひわたり　もえか)

出席番号:女子7番
クウ

出席番号:女子3番
緒深田　麗乃
(おみた　うらの)
【メイド】

出席番号:女子16番
弥生　雛世
(やよい　ひなよ)
【幼馴染み】

出席番号:女子12番
鬼灯　楓
(ほおずき　かえで)

出席番号:女子8番
犀川　要
(さいかわ　かなめ)

出席番号:女子4番
帷子　ミリル
(かたびら　みりる)
【吸血鬼】

マキゾエホリック

MAKIZOE×HOLIC

Trouble 1 ：密室という名の記号

■男子

出席番号:男子13番
BT-0　ネグ
(ばとるたいぷぜろ　ねぐ)
【改造人間】

出席番号:男子9番
田崎　龍平
(たざき　りゅうへい)
【ロボット乗り】

出席番号:男子5番
工藤　スグル
(くどう　すぐる)
【黒幕】

出席番号:男子1番
伊万里　修
(いまり　おさむ)

出席番号:男子14番
氷野　真砂
(ひの　まさご)

出席番号:男子10番
東城　功
(とうじょう　いさお)

出席番号:男子6番
倉時　孝助
(くらとき　こうすけ)
【女難】

出席番号:男子2番
狩野　比呂
(かのう　ひろ)

出席番号:男子15番
間宮　勇輝
(まみや　ゆうき)
【勇者】

出席番号:男子11番
遠乃　キミオ
(とおの　きみお)

出席番号:男子7番
濃紫　小太郎
(こむらさき　こたろう)
【妖怪】

出席番号:男子3番
岸田　駆郎
(きしだ　くろう)

出席番号:男子16番
渡辺　尚樹
(わたなべ　なおき)

出席番号:男子12番
灘　英斗
(なだ　ひでと)
【委員長】

出席番号:男子8番
菅原　稲美
(すがわら　いなみ)

出席番号:男子4番
キルニカ

私立御伽学園1年乙組。
このクラスにはなぜか、巫女やメイドに勇者など、
ライトノベルの記号的属性を持っている同級生ばかりがいる。
そんなある種完璧なクラスに転入してきた、高浪藍子というイレギュラー。
【受難(マキジエ)】という記号を持つ、彼女の果たす役割とは!?
この物語は32人の愛すべきクラスメイトたちの話なのである——たぶん。

ようだった。これって、もしかして良い雰囲気？　何も仕組んでないのに――という思いが不思議な気分をもたらした。探していたものが、急に見つかったような。捨てたはずのものが、意図せず再び手の中に戻ったような。

　だがそのとき異変が起こった。

　女の声――叫び。「ミハエル！」

　なんだって。それはまさに、あの女騎馬隊員であり、パレード中に陽炎を超絶に苛つかせたばかりか、足早に駆け寄ったかと思うと、眠り姫を差し置いて包帯だらけのミハエルにひしとしがみついたのだった。「無事だったのね！」

　ズバーン――陽炎の中で、先ほど芽生えかけた何かが轟音を立てて吹っ飛んだ。

　女にひっつかれたまま、ミハエルが言った。「ああ、紹介しよう。彼女は俺の――」

「では本官は〝射手〟についての報告書を整えに戻りますので」相手の言葉を待たず／言わせず／びしっと敬礼――直角に回れ右／迅速にその場を離れ去った。そのため――

「妹だが……」

　続きの言葉は宙ぶらりんになって消えた。

「〝射手〟の遺体と武器を回収。二挺ともプリンチップ社製です」副長フランツ＝手に通信機――ＭＰＢビル／大隊長室／壁のモニター＝撮影班による現場の映像。

「ライフル友愛会と六年前の狙撃事件の真相は、やはり明らかにならず。ただし当時、彼女を撃ったであろう例の人物が背景にいると見て間違いないかと……。彼女が我々の側にいることが、災いとなるか、幸いとなるか……また、断定は出来ませんな」

　沈黙――大隊長オーギュストは、銃口のような重圧を伴う眼差しをモニターに向けたまま、ゆっくりとうなずいた。

　牌――紅い文字＝『中』。それを投げ捨て／地面に叩きつけようとしつつも、なぜかそう出来ず、未練だな／女々しいなと思いながら、首にかけ／衣裳の胸元にしまった。

　同じ場所からガムを取り出す／開封／口の中に放り込む。そして弾痕だらけの演説台の上で談笑する涼月と夕霧へ歩み寄る。

　涼月＝にやりと。「一発食わせたか？」

　陽炎＝うなずく。「**がつんとな**」

　夕霧＝演説台の上で軽快なステップ／手招き。「陽炎も御一緒にどうぞーっ♪」

　パチン／階段を上がって台の上に向こうで救急車が走り去り、すぐに見えなくなった。

　陽炎は暮れかけた空を見上げ／腰に両手を当て／大きく息を吸い、叫んだ。「わぁ――――っ!!」長い長い叫び＝笑いへ。「――ぁっ、はっはっはっはっは!!」

　涼月と陽炎がきょとんとなり、そしてすぐに二人とも競うように笑い声を放ち始めた。

　惨状を呈する演説台で大笑いする三人の少女たちの悪ふざけ――大勢の大人たちが振り返り、その騒々しい不謹慎さに、やれやれという感じで肩をすくめている。

　知ったことか。こっちは笑いたいから笑うだけ。思いきり笑い飛ばしてやりたいだけ。

　言い換えるならこうだ。

　くっそー。何が男やもめだ。

　あー、もー、

　私の馬鹿――――っ!!

Fortsetzung folgt

冲方丁のイベントが開催決定!!　詳細は237ページへ

MPB Nachrich ―MPB通信―

私たちの「悪ふざけ」面白かったですか？　前回は夕霧にお便り沢山ありがとうございます♪　白山羊さんには食べられずに無事届きましたよ――！　で、感謝の意味も込めて、夕霧のためになるお話のはじまりはじまりー拍手っ♪

夕霧たちの街ミリオポリスって、実は超高齢化社会なんだよ。これは大問題。だから夕霧たちみたいにちっちゃい子、といっても夕霧は13歳だもん♪　大人だもん♪　もっとちっちゃい子の11歳から「市民」と呼ばれて、労働の権利を与えられているの。それで大人にも三段階あって初成人が15歳、準成人25歳、成人が35歳で、喫煙は35歳からなんです。もぉー涼月は悪い子なんですよー、だめですよー。夕霧と同じ歳なのに、煙草を吸っていてー。

じゃあここで呼ばれて飛び出て、やっつけまSHOW―♪

涼月と陽炎と夕霧、誰に誰（何）をやっつけて欲しいですか？

【　　　】に【　　　】を、やっつけて欲しい!!

「誰（何）を」は実在の人物でも人間以外でもノープロブレムー♪　楽しいお便りまっていまーす♪

そして次号からはみんなのお便り紹介と、一番「悪ふざけした人」のアイデアが小説になりますよー。こうご期待!!

夕霧たちと、この街で一緒に遊んで行こう♪

は！　さー、御一緒にっ――ただいまー♪」
　陽炎は自分が目を閉じていることに気づいた。目を開くと、後から後から涙が流れた。そして目の前にいる夕霧に助けられたのだと知ると、もう何だかたまらなくなって好き大好きな気持ちを込めて抱きしめていた。

《還送》の実行――エメラルド色の輝きとともに通常の手足に。夕霧は陽炎の背を優しく叩きながら身を離すと、ごそごそ衣裳のポケットを探り、何かを取り出した。
「頑張った陽炎さんに、ご褒美ーっ♪」
　陽炎はそれを受け取り、まじまじと夕霧を見つめた。牌――紅い文字＝『中』。
「どうやって……？」
「うふふー。みんなで帰ってから、夕霧だけまた車に乗せてもらったんですよー♪」
　急にまた泣けてきたところへ無線通信＝涼月。《てめー、さっさと仕留めやがれ。死ぬかと思ったっつの。あと、近くで集まってる救急車。お前を利用したあの野郎が包帯だらけで運ばれる前に、一発食らわせて来な》
　紅い回転灯／救急車の群／慌ただしく運ばれる負傷者たち――小隊長の指示＝陽炎は指に紐を絡めて『中』の牌をくるくる回しながら歩み寄った。そして担架の上に横たわり、救急車の順番待ちの時間をしのぐために鎮痛剤を飲み込んでいる大柄な男を見つけた。
　左肩から胸／右脚に血のにじむ包帯――しかし瀕死の蒼白というのではないミハエル中隊長も、陽炎の姿をみとめた。
「大した狙撃だ。お前もやつらも。まさか二人組とは、打ち勝ったお前に脱帽だ」
　悪い気はしない――出会い頭に誉められるというのは。「そちらも意外に元気ですね」
「プロテクターに感謝だな。骨と肉だけで命には届かずに済んだ」くるくる回る牌を見て、あの笑みを浮かべた。
「捨てられたんじゃないかと思ってたよ」
「私もそう思ってました」牌を手の平に握り込む。「これを渡したのは、私を犯人のもとへけしかけるためですか？」
「理由は話した通りだ。今回も鎖骨をやられた。何度も整形してる骨でな。年々、狙撃に支障が出ている。まだ六百ヤードを必中可能なうちに誰かに渡したかった」
「そういうことなら頂いておきます」どこかほっとして手を下げる。ちょっと深呼吸／心の準備／そして肝心な質問。「あなたの元部下の異動で、私を恨んでないんですか？」
「恨むってのは奇妙だな。部下の女房と子供は異動を喜んでる。この街にいるより安全だし、家族一緒に湖に出掛けられるしな。それに誰だって過ちから得るものはあるということだ」そして武骨で機械的で大ざっぱですっきりしていて妙に落ち着く――陽炎がすっかり気に入ってしまったあの調子で付け加えた。「誰も何も恨んじゃいない。誰のせいでもないんだからな。俺も俺の部下も。お前の親父もお袋も。お前と彼女も。そうだろう？」
　よしてくれ＝陽炎の内心。あんたはつまり私に**惚れろ**と言っているのか？　そういう魂胆で喋っているのか？　だが残念なことにそうではなかった。そんな訳ないことは分かっていた。それでちょっと悲しくなり、やや距離を置いて言った。「はい」
「それはそれとして俺の元部下の色男だが、本気だったのか？　あのくそ真面目の頑固者に？」急に砕けた調子に――茶化すことで相手を救う、タフな男の悪ふざけ。
「昔は。多分」なんだか結局やられっぱなしになりそうなので話題変更。
「今はそれより、いつ約束を守ればいいか気になります」
「お前が外した的のことか？　殊勝な心がけだな。どうせ二日か三日は入院だろう。そこで数時間かそこら俺の退屈を紛らわしてくれるってのはどうだ？」
「見舞いに来いと？」自分で言って、ぱっと何か色々な光景が浮かんだ。ベッドとか着替えとか手入れとかそんなものがめくるめく連想を働かせたが、**嫌われるぞ**という心の一声で、慌てて消し去った。
「男やもめな上に、薄情な部下どもに恵まれているからな。何かと仕事が舞い込んでくるが、何せ俺は動けんし色々と人手がいる」
　つまんねーと心のどこかで異議＝精神力で却下。「良いですよ。何でしたら搬送中も付き添いましょうか？」
　ミハエルが何台か新たに駆けつけた救急車の方を見る。「そろそろ順番だな。よし。どんな具合に、お前が二人もの"射手"を見つけ出し、狙いをつけたか聞かせてくれ」
「救急車の中で？」
「痛みを忘れるという点じゃ、鎮痛剤よりよっぽど効果があるだろうからな」
　陽炎が肩をすくめる。「ライフル好きもそこまでいくと病気ですね」
　あの笑み――最初の頃より少しおどけて。「書類にして提出する手間を省いてやれるぞ」
「では、了解です」そう返した途端、何の意図もなく、ちょっとすました感じの微笑が浮かぶのを覚えた。あれ？　なんかすごく自然？　あらためて相手を見ると、相手も同じように作意も操作もなく接してくれていることが、今さらながら分かった。
　ふいに温かな陽光が差し込んだかの

〝克服あれ〟

無が世界を支配しており、もしとかよもやとかいった思念は微塵も存在せず、引き金は引き金が、弾丸は弾丸がもたらすものを、ただもたらすべく作動するだけだった。
　そして気づけば、撃っていた。無心において放たれていた弾丸が、自分でもこれはちょっと遠すぎるんじゃないの、と思える軌道に従って、到達すべき一点へ到達していた。
　彼女はスコープ越しにそれを見た。光の狭間に開いた闇の入り口――おそらく清掃用のゴンドラで運ばれ、そこにうずくまっていた小さな〝射手〟の体から紅い霧が生じ、その左手が命を失って外へだらんと垂れるのを。
　ああ、やっぱり。小さな手――どう見ても自分より年下の、小柄な子供の手だった。
　MPBを相手に回して狙撃戦を繰り広げた〝射手〟の正体に、何だか痛烈に裏切られたような、ひどく嫌な気分に襲われ、立ち上がろうとし――突然、**疑問**を思い出した。
　幾つかのイメージ――病院での支援テロ＝**異なる角度**から飛来した弾丸／**二つのマグカップ**／ライフルの名＝〈**神の息子たち**〉／それらが脳裏を去来し、ぞっとなって身を伏せた途端――衝撃が襲いかかった。
　左腕――一撃で上腕をもぎとられた／近距離／仰向けに倒れかけたところへ第二弾――伏せようとしていたことが幸いし、エレベーター外の鉄枠が防いでくれた。
　もう一つの疑問＝その答え――〝射手〟はやつではない。**やつら**だったのだ。
　倒れる代わりに壁に背をぶつけ、横へ這ったところへ衝撃＝被弾＝右の腿を抉られた。
　うんざりすることに、新たな事実がまだあった。この、もう一人の〝射手〟には銃声がないのだ。消音器――銃声を出す方の陰に隠れ、沈黙のうちに撹乱をもたらす存在。
　だが侵入角が限られた箱の中という環境が幸いし、大まかな敵の位置が読めた。それは良いとして、ドアを開閉不可にしたことが災いし、次の一撃は確実に体の真ん中に近い場所に食うだろうということが分かった。
　咄嗟に、これが神様の声だろうかと思った。父様が待っていると告げた場所へ赴くための。それが聞こえたらすぐに来なさい、と父様は言った。神様が私たちを呼んでいると。
　だが彼女は答えを知っていた。それが父様と彼女を永遠に引き裂くことも分かっていた。
「私には聞こえないわ」
　実際に口に出したかは分からない。
　ただはっきりとその声が聞こえ、結局それが自分の真実なのだと悟ったとき、彼女は宙にいた。
　四撃目が来るまでの僅かな時間において、唯一外へ開かれた出口へと、全身の力を振り絞って――跳んだのだ。
　四十二階建ての高層ホテルの最上階から、虚無に満ちた青空への躊躇なきダイブ。
　いまだかつて経験したことのない騒乱――風が轟音となって襲いかかり／自由落下に伴う度肝を抜かれるほどの恐怖に呑まれ／血流が一挙に脳へ向かうせいで視界が赤くなり／逆流する滝のような風圧に吹き上げられる中――彼女はその機械化された手足を最大限に活用した。そして完璧な位置／完璧な姿勢／完璧な視野を確保したとき、完璧なライフルがその身に備わっていることが、どんな心境をもたらすかを初めて実感していた。
　〝**克服あれ**〟
　この世界を創造された神の意志において、彼女と私と父とライフルの関係が完結し、昇華され、そして高貴と呼ぶにふさわしい優美で厳格で苛烈な、尊大にして深い信仰と慈愛に満ちた自分がそこにいた。
　〝はい、父様〟
　いったい何に答えたのかも分からぬささやきとともに、彼女は／陽炎は／私は、優しく引き金を絞り――撃っていた。
　訪れたのはスコープ越しの真紅の死線／あるいは確かな手応えがもたらした刹那の幻――三百メートルほど離れたビルの壁面＝僅かな隙間に潜んだ、もう一人の子供の小さな頭に弾丸が命中し、その顔さえ確かめる間もなく、首から上が粉々に吹き飛ぶ光景だった。
　それを見届けた途端、全身が脱力し、めくるめく落下の中、深い悲しみとともに、もう青いのか紅いのかも分からない虚無に呑み込まれるのを感じた。
（一緒に狂ってあげられなくてごめんなさい）
　そんな哀悼と訣別が、彼女と父様をどこか遠くへ消し去り、ただ**私**だけになったとき。
　白銀の輝きが、ホテルの窓ガラスをぶち破って飛び出し、陽炎の体を宙で抱きとめた。
　その指先から伸びるワイヤー×10が、窓枠に絡みつき、しなりながら弧を描き、衝撃で何本か千切れ飛びながらも、雄大な振り子運動において落下の衝撃を分散。するするとワイヤーが伸ばされ、ロータリーの屋根に、すとんと二人して着地。
　そして歌うような声。
「とっても頑張りましたよ陽炎さん

ところでは？　という思案も一瞬で消え、陽炎は膝立ちの姿勢で、ただ鼓動を鎮静させ／規則正しいリズムに身を委ね／敵の位置把握という途方もない仕事に精神を集中させた。

　おそらく太陽を背にしているであろうという予想から、各探査装置の範囲を絞り、より精密な情報を求めたとき、ターン、という最初の轟きがこだました。

　銃声が銃弾より早く到達することはあり得ず、涼月が今まさにジグザグに疾走していることから、初弾で小隊長殉死という結果は免れたことは分かっていた。だがしかし、銃声がビルの狭間を複雑に反響することから音響探査は役に立たず、敵の弾道を知らせてくれるはずの位置探査は中途半端で、ということは既に、通信班の車両に設置された探査装置の一つか二つが、弾丸が撃ち込まれて破壊されたに違いなかった。

　こうなると視認による探査が確実だが、ビルの壁面が人の気も知らずに太陽光を激しく反射させ、スコープを覗く方の目も、そうでない方の目も、大いに眩ませてくれる。

　無茶が無理の領域に限りなく近づいたとき、走り続ける涼月のすぐそばで土煙が上がり、ターン、ターン、ターン、と銃声が連続して轟いた。それで中途半端だった弾道探査に僅かな根拠が生じ、音響探査も銃声の乱反射を計算し、両者が一致する範囲をあらわにした。これは素晴らしい、という気持ちと、相手がわざわざ自分の位置を教えるような馬鹿な撃ち方をしたことへの疑問が起こった。

　ムキになった？　まさか。優れた〝射手〟がそんな精神の持ち主だと？　それとも絶対に位置を読まれない自信がある？

　ふと何かに思い当たった。**若さ**／**史上最軽量**のライフル／読めない**位置**。

　突然、彼女は、何かが一つの推測と化すのを感じ、咄嗟にスコープを戻した。素早く精査し直し、そしてある場所に**可能性**という目に見えない印がつけられているのを悟った。

　暗闇——ビルの外観に変化をつけるための、巨大な構造に生じた僅かな隙間。上下に太陽光を反射する壁面。まるで輝きを盾にするようにして、底知れぬ闇がそこに結晶し、息づいているようだった。そしてまさにその輪郭を精密に精確に精査した直後、細い何かが突き出され、ちらっと動いた。

　いた——確信＝興奮や動悸が狙撃を妨げることはなく、さらに精査＝計測。その結果を見て——にわかに異議が発生＝ちょっと待て。幾らなんでもこんな狭い場所に入れるものか。それにこれは、なんという遠距離狙撃だ。

　《くそっ、やられた！》

　思わず確信を引っ込めたくなったとき、涼月の声が脳裏で爆ぜた。

　地上探査による情報＝涼月の右足首に弾丸が命中——転倒。おそらく狙ったものではない。全くもって不運な直撃。

　馬鹿、死ぬぞ。倒れた涼月が地面を転がって起き上がるまでの、瞬きをする間もないほどの時間の中で、彼女は、引っ込めそうになった確信を引きずり出し、深く見通した。

　もし自分が狙いを外したり、敵が別の場所にいたりした場合、転倒した涼月は起き上がろうとした瞬間の静止に等しい状態を狙われ、間違いなく弾丸を叩き込まれるだろう——という切迫した気持ちは、まさしく彼女の心の奥の六千万光年ほど彼方にあった。

　彼女はただ、自分が見通したものを抱いて無我の境地にいた。そこでは虚

やつを死線(キル・ゾーン)に叩き込め、陽炎!!

さらに二カ所で武装犯が出現――どれも極めつけに無駄で、馬鹿くさくて、ただひたすら弾丸がもたらすものを、もたらすままにさせるだけの、まるで父様の死みたいに――

《なにやってんだ陽炎!!》

涼月の憤怒――夕霧もとっくに機甲化して現場に直行している。分かってる。本当は知ってる。こうして突っ立っている自分が誰よりも極めつけに無駄で、馬鹿で――

《〝射手〟だ!!》

演説会場からの通信――多分、中隊の誰か。あの人が指揮してる部隊。ターン、ターン、という音が、雷鳴のように青空に響く。狙撃合戦――自分がここで馬鹿面をさらしている間も、命がけの仕事に取り組んでいる者達がいる。でもだからと言って、私は――

《ミハエル中隊長!!》叫び――悲憤に満ちた声。《ミハエル中隊長が撃たれた!!》

青空という名の虚無の彼方で響くライフルの雷鳴が、いきなり稲妻と化して彼女を直撃したようだった。今度こそ本当に彼女は硬直した。まるで人工と生身が半々の脊髄が急に凍りついて、胸から呼吸を奪い、心臓から鼓動を消し、体から熱を吸い取るようだった。

嘘――と心のどこかが声を上げた。

そんなはずない、そんなはず――

《陽炎!!》

びくんと全身が反応した。男の声だった。確かにそうだった。あの人が、苦痛に耐え、気力を振り絞って、通信用マイクに向かって、彼女の名前を呼んでいた。

《やつを死線(キル・ゾーン)に叩き込め、陽炎!!》

カチッ/バシュッ/ズーン――一連の衝撃/一連の作用が、凍りついて眠ったままになってしまいそうだった彼女の胸に/心臓に/体に、驚くほど激しい熱をもたらした。

「行け!」口が勝手に叫び、手綱で鞭をくれ、馬の腹を蹴った。いななき――蹄(ひづめ)がアスファルトを蹴る/白雪姫の勇壮な疾駆/市民が慌てて退避/脳の視覚野に送り込まれる情報をもとに経路を選択――人馬一体となって誘導用の柵を高らかに跳び越える。

着地=そのまま三百メートルほど疾走/目的地=高層ホテル――その玄関口=タクシー乗り場へ馬が駆け込む前に、さっと鞍の上に両足を乗せ、曲芸師顔負けの軽業――跳躍。

馬の到来で騒ぎになる玄関口/その上の屋根――着地/目の前に本当の目的地=三つ並んだガラス張りのエレベーター。ちょうど下に降りてきた無人の箱に向かって跳んだ。

「転送を開封」

宙で、手が・足が、エメラルド色の輝きとともに一瞬で変貌――右腕と一体化した巨大なライフル/シャープなフォルムの真紅の特甲姿――肩から突入、強化ガラスを粉砕してエレベーター内に飛び込む。左手で金属製のパネルを引き裂き、VIP専用のキーロックを引っ張り出す。同時に、無線を通して、緊急事態における施設使用を通達――MPB通信員が素早く対応してエレベーターを独占/治安機構への報告が義務づけられているキーロックの暗証番号を伝達――陽炎はそれを入力し、最上階以外は止まらないようにした。

七秒でエレベーターが最上階に。万が一本当のVIPがエレベーターに乗り込んで来ないようにするため、操作盤に左拳を叩き込んで破壊――開閉不可に。

振り返りざま青空に向かって一発お見舞いした。衝撃=周囲を覆うガラスが木っ端微塵に砕ける。風が吹き込み、長い髪を激しく煽られながら無線通信。

《遅れてすまん》

《ふざけんな馬鹿。お陰でこっちは亀みたいに縮こまってんだ》

《おかえりなさーい、陽炎さん。夕霧は大きな道路で活躍中です。州知事さんは地面の下の道を通って帰っちゃいましたよ?》

宙を走る幾つもの光線――複数の地点に囮の群=数を増した照準器による撹乱。

各員の位置を確認/涼月がいる会場一帯で狙撃戦=膠着/物陰に隠れたまま動けぬMPB隊員たち/狙撃手たち。州知事はもういない――だが戦闘自体が目的となった常軌を逸した敵=その位置を誰もつかめず。

《おい、陽炎。あたしが行くから、あのクソ野郎をやっつけろ》

《意味不明だ。説明してくれ》

《あたしが、こっから向こう側のビルまで走りゃ、やつが撃ってくるだろ。そこを――》

《標的になる気か? お前の体は恐怖を感じるホルモンを分泌しないのか?》

《知るか。無理なら無理って言え》

《無茶だが無理ではない》

《じゃあ、やれ。命令だ。準備は?》

《いつでも。夕霧、合図は出せるかい?》

《はーい♪　さー、行きますよー?　二人とも良いですかー?　いーち、にーの――》

《さん!!》全員の号令――会場から涼月が飛び出す/疾走/全チャンネル解放設定の雄叫び。《出て来て勝負しやがれ!!　卑怯者のクソったれ野郎ぉ――――っ!!》

普通、あそこは、助けて神様と叫ぶ

抱くのは政治理念でも、親族の雪辱でも、都市の歴史でもない。
ああ、**撃ちたい**。早く**撃ちたい**。沢山、沢山、沢山、**撃ちたい**、という無垢な欲求――ただそれだけだった。

ミリオポリス第二十一区／ウィーン州知事の演説会場の周辺道路を、だらだら周回／警戒／市民に反テロリズムの態度をアピール――治安機構のパレード。
ＭＰＢの装甲パトカー／ジープ／警察騎馬隊――そして一般応募によるチアガールに鼓笛隊に宗教関係者による祈りの列。歩道には一般市民／観光客／記者／テレビカメラの群。馬鹿馬鹿しいほどの大騒ぎの中、陽炎はぼんやりガムを噛みながら馬に揺られていた。
乗馬の経験があるのは陽炎だけ――涼月は五十メートル先の装甲車の上／夕霧は二十メートルほど後方でチアリーダーたちと一緒に歌って踊って大はしゃぎ。
ああ、部屋に閉じこもってベッドの中で丸くなってたいなあ＝いつも以上にアドレナリン不足の気怠い思考。というか事実そうしていたのだが、涼月がドア前の棚や机によるバリケードを突破／ベッドから引きずり出され／リターンマッチなる不毛な観念を押しつけられるも、陽炎が最後まで狙撃隊に編成されることを拒み、結局いつもの任務――〝可憐な少女たちが平和をアピール〟という馬鹿げた広告塔として三人揃って配置されていた。
《てめー……お陰で、あたしまで訳の分かんねえ格好しなきゃいけねーんだぞ、タコ》涼月＝怒気――超弩級のミスマッチ＝頭の上に大きなリボン／ひらひらスカート／ガラスっぽい靴／装甲車に乗った**シンデレラ**。
《……確かに、どこの国の平和を訴えているのか見当がつかないな》陽炎――純白のドレス＋ティアラ／胸に**紅いリンゴ**の飾り／周囲に七人の騎馬隊員／白馬に乗った**白雪姫**。
《うふふー♪　**不思議の国**の平和ですよー？》夕霧――前掛けつきドレス／三つ編み／ポップなタイツ／周囲には懐中時計を持ったバニーガールやトランプの模様入り水着姿の女性たち／バトンを手に踊る**不思議の国のアリス**――および**同国の住人**。
《こんなんじゃ絶好の標的だっつの。州知事ってのはなに考えてんだ？》涼月――チャレンジ精神を振り絞った笑顔で手を振る。
《演説は毎年恒例で行われるものだ。それを中止すれば知事の支持率にも影響が出るからな》陽炎――ぬぼーっとしつつも条件反射的な情報提示。《それに大きな声では言えないが、狙撃戦を示した例の〈憲法擁護テロ対策局〉局長は未来党で、州知事は社会党だ。局長が政治的に痛手を受けることは、あまりない》
《んだよ。全部ＭＰＢの責任ってか》
確かにそうだと陽炎は思った。ＢＶＴ局長は選りすぐりの狙撃手を集めつつ、ＭＰＢに指揮を丸投げした。テロ阻止に成功すればＢＶＴ局長の手柄／失敗すればＭＰＢは大隊長か副長か中隊長がクビにされ、そこへＢＶＴの人間が送り込まれて穴を埋める。
ＢＶＴの権限拡大工作――ミハエル中隊長も逃げ場がないんだな。でも、あの人だったら望むところだって言いそう。あの笑みを浮かべて――リアルに空想／なんか胸の奥の方がしくしく痛み出した。ああ、忘れろ忘れろ、と自分に命じた拍子に、つい、いつもの癖で、ぷーとガムを膨らませてしまい、すぐそばの女性騎馬隊員に見咎められた。
「ちょっと。ダメよ、ガムなんか」きりっとした感じの女――叱ってるくせに声はどこか優しくて／七人の小人の衣裳なんか着てるくせに堂々として／年上の色気をにじませて／凛とした美人で／ミハエル中隊長が恋人に選ぶならこういう人かもと思わせて――
思考中断――冷淡に返す。「不注意でした。噛むだけなら良いと許可を得ていますが？」
女＝くすっと苦笑。「その前にもっと微笑むべきね。白雪姫なのに。**魔女**みたいよ？」
むかっ――と来たが黙殺。すると何を思ったか、女が手の平を差し伸べてきた。
「こら、早くここに出しなさい」ややきつめの口調――〝**なんだこの女**〟＝自分から進んで手を汚してあげるから、お前も言うことを聞けというお仕着せがましい態度に彼女が猛る／断固抵抗／相手の目を見つめ返しながら、ごくりと喉を鳴らしてガムを呑んだ。
「あらあら」女が目を丸くする――陽炎はちょっぴり勝利感を味わい／ぷいと前を向き、そしてそもそもガムを呑むという行為を誰に教えられたか思い出してガックリ来た。
ああ、もう、忘れろって――
ドーン、という腹に響く音。にわかに前方から押し寄せてくる悲鳴――パニックの波。
緊急通信＝副長。《自爆テロを仕掛けてきたバイクを、装甲車で囲んで爆発させた。被害は軽微。各員、新たな襲撃に備えつつ市民を誘導。中隊は州知事の避難を――》
騎馬隊員たちが素早く市民を避難誘導する一方、陽炎は自分の馬を宥めるだけで、その場にぽつねんと立ちつくしていた。やる気――ゼロ。あ、なんかどうでも良いかも。
そこへ襲撃情報。五百メートルほど離れた道＝バンに乗った複数の武装犯が銃撃＝明らかに州知事どころか演説会場が見える場所にも辿り着けそうにない無謀な仕掛け。

を引くよりも、ほんの一瞬だけ早く——

恐ろしく精密な狙撃によって飛来した銃弾が、男の手から銃を弾き飛ばしていた。

すかさず涼月が男の腹へ左フック——夕霧の足が顔面を一蹴。椅子ごとふっとんで窓下の壁に叩きつけられ、跳ね返って床に転がった男に、陽炎が訊いた。「私を撃ったのは?」

男＝咳き込み／鼻血を噴き出し／笑った。「ゲオルグ・ヘンリケ・フォン・クルツリンガーという名の哀れなお前の父親だ」

振り下ろされる銃のグリップ——男の昏倒。そして大勢の迷彩服姿の男女が雪崩れ込んできて、男に銃を向けた。全員の肩に紋章＝MPB——涼月の困惑。「どうなってんだ?」

陽炎は窓辺へ——窓に弾痕。泉の向こうで木の枝が揺れ、大柄な人影が降りてきた。ライフルを抱え、ご丁寧に顔にも迷彩ペイントを塗りたくった——ミハエル中隊長。

陽炎は銃にしっかり安全装置をかけてポケットに入れた。帽子から弾丸を落とし、髪は垂らしたまま、それをかぶって玄関から外に出て、やって来るミハエルをじっと見つめた。

涼月と夕霧も遅れて外に出て来て、同じように目を向けた。

ミハエル＝特に何の表情も浮かべず／ペイントだらけの顔。「援護は必要なかったか?」

「私を利用したんですか?」

「彼女なら何か知ってるかもしれんと副長が言った。俺もそう思った。それだけだ」

陽炎の直感——彼女という言葉の響き／この人は知っていた／彼女と私を／弾丸の印の意味を／最初から——自分の過去を／どんな目に遭い、どんなことをしたかも。

何かが許せなかった。よせばいいのに、それを暴きにかかるのを止められなかった。

「私について詳しいんですね」たっぷり険しさをふくませて言った。

ミハエルは陽炎がどうして欲しがっているか察したようだった。事実——その暴露。

「それほど詳しくはない」ごまかしのない声——真っ直ぐな響き。「ただ、以前、MPBから国境警備隊へ移った元狙撃小隊の**小隊長**だが——あれは俺が軍にいた頃の元部下でな。やつが異動になった**理由**を、**本人**の口から聞いたってだけだ」

ズガーン——という衝撃が、いきなり来た。心の中のとんでもなく脆い何かが、木っ端微塵になって吹っ飛んだ感じがした。

「俺はやつと入れ違いで入隊したわけだが、やつによれば、MPBにはライフルに入れ込む危なっかしい子がいて、そいつには十分**気をつけろ**って話だった」

がたがた揺れるMPBのジープ——その荷台の上。涼月がぶんむくれ、夕霧が踊り、陽炎がうずくまっている。運転してきた車／免許／キー／銃は、全て使用許可を取り消され、ミハエルの部下に持って行かれた。

「やられっぱなしかよ」涼月の声。

「……んあ?」陽炎＝どろんとした目。

「正気に戻れ、タコ。肝心な所を中隊に持ってかれやがって。こうなりゃ、まだ捕まってねえ後継者とかいうやつを——」

「みなさん、お手柄ですよーっ♪」

「お手柄じゃねえっつの! 利用されたんだ、あたしたちは!」

ああ、そうかあ——ぼんやり痺れた頭で青空を見上げる／そうだね。彼女も沢山の男を利用したし／してるし／これからもするだろうからね。なんかもう嫌だね——などと思いながらトレーナーの胸元に手を突っ込む。

紐を足して首から吊した牌——紅い文字＝『中』／それを握り、ゆらりと荷台の上に立ち、大きく振りかぶって、投げた。それは青空という名の虚無へ向かって弧を描き、失速し、草むらに落ちて見えなくなった。

〝射手〟は、じっとそのときを待っていた。祖父であり師である男が教えたように。いつどこでどんな行動に出るべきか何百回となくイメージしながらも、そんなことを考えているとはおくびにも出さず、大都市の片隅で、ひっそりと身を潜め続けた。それは意志の力であり、狙撃手としての才気であるとともに、今や〝射手〟自身の欲望ともなっていた。

〝射手〟にとって、教えや、それを教えた人物といったものは、もう何の意味もなかった。その人物が、たとえ祖父であり師である男でも関係ない。彼が警察の追跡を引き寄せ、〝射手の〟代わりに逮捕されたかもしれないということも、とっくに忘れ去っていた。

〝射手〟は自分が何者であるかを知った。この都市に来て、生まれて初めて知ったのだ。自分たちと同じ存在——すなわち犬でも猫でも鳥でも鹿でもなく、人間を撃ったことで。

それは純粋な〝人間狩人〟——ライフルと一体となり、標的を仕留める快感を追求する存在だ。そう。心に

使ったものだろうか。「ライフルと〝射手〟はどこに？」
「一昨日の夜、最後の晩餐を済ませた。もう戻ってくることはない。私はここに残り、お前たちのような犬を引き寄せる獲物の役目を務めたに過ぎん。さあ、逮捕するがいい」
「もう一つ訊きたいことがあります」
「ではその前に、こいつを飲ませてくれ」酒＋グラス――陽炎がうなずく／男はグラスに茶色い液体を満たし、ぐいと飲み干した。吐息＝墓場の臭いがした。「何が訊きたい？」
陽炎は、いかなる予兆も反応も見逃さぬよう、相手の挙動をつぶさに観察しながら、その**疑問**を口にした。「六年前、この敷地で、八歳だった私を撃ったのは、誰ですか？」
涼月と夕霧が驚いたように陽炎を見た。
「お前の父だ……という答えは望んでいないようだが？　何か根拠があるのかね？」
「父様は決して、安全装置をかけ忘れ、最後の弾丸を残したことに気づかず、銃口を人に向ける人ではなかった。ライフル友愛会は父様の事故の後、立て続けに事故や事件に巻き込まれている。そして同時期、ライフル友愛会は、複数の狙撃事件での証言が求められていて、父様も証言台に立つはずの一人だった」陽炎は言った／一息に／六年という自分の時間はそれだけの速さで過ぎていったのだというように。
男はまたグラスの中身をあおった。
墓石の底から漂うような息と声＝優秀な射手の魂と技術が腐敗する臭いが鼻をついた。「奇妙な話だな。何者かが君の父の銃に細工を施したと……たとえば空包か実包か分からんが、何かの拍子に暴発するような代物を込めさせた。そして君の父と同種の銃、同じ弾丸を用いて、まだ幼い君を狙撃した……と？」
「私でなくても良かったのかもしれない。友愛会が悲惨な事故を起こすことが目的だったのかも――。事実、当時の狙撃事件は証人を一人も立てられず立件さえ出来なかった。何があったんですか？　なぜあなたはオリンピック出場資格を取り消され、都市を出なければならず、そして戻って来たんです？」
返ってきたのはライフルの轟きのごとき哄笑だった。男は大声で笑い、酒を零して手を濡らし、そのまま息絶えるのではないかと思うほどの勢いで咳き込みながら笑い続けた。
「**陰謀**が欲しいかね？　お前は私と同じだ、お嬢さん。こんなはずではなかったという人生のツケを誰かに支払わせたくなり、わざわざ二人だけで来たのだ。きっと本部の誰も、お前の行動を知ってはおらんだろうな」
カチリ／撃鉄を上げる音――陽炎の冷ややかな声。「答えて下さい」
「あの、こけおどしの大会に出られなくなった理由か？　良いだろう。ゲオルグの名に免じて特別に教えてやる。それはな、この私がうっかり、十七歳の少女に金を払って大いに楽しみ、それが仇となったからだ。まさか相手が市から売春許可も得ておらず、なおかつ未成年で、私との関係で妊娠したなどと、なんで分かる？　まさかそんな理由で弁護士や未来党員としての資格まで失い、弁護料と和解金だけであらかた財産を使うことになり、後は何もかもが崩れ果てると、どうすれば予想できたと思う？　そんなわけで当時の事件など私にはどうでも良かった。何せ自分が犯罪者になる瀬戸際だったのだから」
陽炎＝無表情――涼月＝あんぐり／夕霧＝きょとん。
「なぜ戻ってきたか？　それはな、きっとお前と同じように、ライフルしかなくなったからだ。また、このろくでもない人生で最も幸運だったことに、後継者にも恵まれた」
「その人物は、あなたの事情を御存知で？」
「いいや。もちろん後継者には、私がいかに不当におとしめられたかを沢山聞かせてやっている。全て陰謀であり、私にはかけらも非はないと。間違っているのはこの都市で今も財産も持ち続けているやつらで、名誉も財産も持ち続けているやつらで、そうした連中は全く生きるに値しないのだと。これぞ教育だ。若い世代に、歴史とはこれこれこうだと教えるだけで、それが事実であろうとなかろうと、それを学んだものたちによって新たに記憶されるのだから。これほど、人生で失われたものを取り戻せる確かな方法が、他にあるかね？」
「歴史ってな、てめーの汚ねー塗り絵か？」ボキボキ拳を鳴らす涼月＝怒りてついた悽愴の表情。「私の質問に答えて下さい」
陽炎＝不快／憤激／憎悪が凝縮／凍てついた悽愴の表情。「私の質問に答えて下さい」
「どんな陰謀や歴史が好みかね？」
「事実だけを」
「良いだろう。生き地獄の末に死んだ哀れなゲオルグに免じて私が知る限りの事実を教えてやる。ただし代わりに、私をここから逃がすという条件つきならば、だ」
涼月＝怒髪。「このホラ吹きじじい！　勝手なことばっかぬかしてんじゃねえ！」
カチン／撃鉄を戻し、陽炎がゆっくりと銃口を下げる。「良いでしょう」
涼月＝溜息――夕霧＝じっと男を注視。
「お前を撃ったのは――」ボトルとグラスをテーブルに置いた瞬間、震えていた手が嘘のように素早く動いた。テーブルの裏＝固定されたホルスター＝リボルバーの拳銃――グリップをつかみ、恐るべき滑らかさで抜き／構え／銃口を陽炎に向け／引き金を絞った。
陽炎がさっと銃を構え直して引き金

MPB遊撃小隊〈猋〉だ！ 動けば即射殺する！

陽が昇り、辺りを明るく染めた。地図と記憶を頼りに、豊かな森の小道を進み、やがて一度も道を間違えることなく古びた看板の前で停車。陽炎が銃を握った手をポケットに突っ込んで外へ／涼月が目を覚ます／夕霧が歌うのをやめて森の中に立った。

看板＝『ライフル友愛会敷地』——

〈UW〉＝“克服せよ”を意味する文字。

錆び果て倒れた金網と柵を踏み越え、もはや六年前と何がどう同じで違うのかも分からぬ景色へ入り込む。記憶が木立を揺らす風とともに吹き抜け、父様や友愛会のメンバーや幼い自分や可愛い猟犬たちの声がどこからかこだまし、消えていった。

すぐにコテージを発見＝廃墟／入り口のドアをこじ開けた痕跡——おそらくミハエル中隊長の優秀な部下たちがここを探り当てて捜査。だが何も見つからず撤収。

《お前の目的は幽霊に会うことか？》涼月——念のための無線通信。

《ある種の擬装だ》陽炎——さらに森の奥へ。涼月と夕霧が続く。三人のひそかな足音に、忘れたはずの父様の声が混じる。

彼は言った。私たちは初めて獲物を撃った場所を聖地のように思っている——と。

言い換えるならこうだ。

それはある種の動物の帰巣本能のように行動パターンを限定し、大きなことをしでかそうとするときの心の支えとして機能する。

そして森の中を三十分ほど進むと、泉とそのそばに建てられた狩猟小屋に出くわした。

《おい》涼月が指で茂みを示す——一台のジープ＝裏道を行き来するためのもの。

陽炎がうなずく／同時に体の奥から冷たい何かがにじみ出す。記憶——恐怖。心が悲鳴を上げる。そう。ここから百メートルも離れていない場所で、彼女を、一発の銃弾が——

涼月が、陽炎の肩を叩く。《突撃はあたしの役目だ。正面から行くぜ》

陽炎は恐怖とその提案を押しのけ／銃を握りしめ／小屋を睨んだ。《それは私の役目だ》

返事も待たずに身を屈めて茂みから出る陽炎の背後で、涼月がやれやれという顔で右手へ／夕霧が左手へ移動——三人で小屋を包囲＝夕霧の無線通信。

《いっち、にー、のぉ——》

《さん!!》全員で号令＝突入——陽炎が玄関のドアを蹴り開き／涼月が裏口から飛び込み／夕霧が窓ガラスを蹴り砕き、同時に屋内に侵入＝標的を駆り立てる。

確認／通信＝玄関口《無人》——台所《無人だ》——寝室《誰もいませーん♪》

居間——陽炎が銃を構え／叫んだ。「MPB遊撃小隊〈猋〉だ！ 動けば即射殺する！」

裏手から涼月／横の部屋から夕霧——窓辺で揺り椅子に座る、初老の男を取り囲んだ。

「武器はない」男＝カール・マキシム・フォルメルハウゼンが枯れ枝のような手を上げる。そばにテーブル——酒のボトル＋グラス／調味料／二つのマグカップ／二つの皿／二組の食器。壁に地図＝ミリオポリス全域——幾つも印／付箋に細かな数値／ミハエルに教えられた狙撃地点にも印——どんぴしゃ。

涼月と夕霧は、いつでも男に飛びかかれる位置で待機——陽炎の指示待ち。

「逮捕する前に訊きたいことがあります」陽炎＝右手で銃を構えたまま／左手で帽子を取る／長い火のような赤髪が流れ落ちる。「……マキシムおじさん」

男がゆっくりと目を見開いた。「陽炎……ゲオルグのお嬢さんか。なんと……あの筆舌に尽くしがたい不幸に見舞われた娘が、この私に銃を向けているとは」

「五日前、第十一区で狙撃による支援テロを行ったのは——」

「私ではない」男が両手を下げる——指の震え＝中毒者の顔／酒。「私からライフルの秘儀を学んだ後継者がしてのけた仕事だ。いや、幾ら優秀でも若さを補えるわけではないから、後継者とその道具がしてのけた仕事と言わねばならんな。道具とは、むろんライフルと弾丸で、一部が、そこの棚にある」

涼月が、棚に並ぶそれを一つ取って放る。

陽炎が帽子の山の内側でそれを受け取った——ケースレスの弾丸＝火薬に文字。

『PRINCIP INC.』——プリンチップ社＝支援テロを行う幽霊企業。

陽炎が鋭く男を見る。「入手方法は？」

「リヒャルト・トラクルと名乗る人物が手配した。顔も知らぬ相手だ。突然、電話をかけてきて、私が望むものを与えようとぬかしてきた。そして実際に送りつけられたものを見て、その言葉の正しさを知ったというわけだ。ミクロン単位で設計され、しかも信じがたいほど軽い。まるでプラスチックか何かで出来ているように。八百メートル先の十セント硬貨を撃ち抜く精度を持った、史上最軽量のライフル、〈ディオスクロイ〉だそうだ」

帽子ごと弾丸をテーブルに置く——

二つのマグカップ＝どちらが後継者の

声は呪いとなり、彼女を駆り立て／それまでに学んだ全手段を尽くして相手を誘い／強固だった壁を徐々に崩し／ついに籠絡させ、とてつもない喜びに満たされた。

敢行＝徹底的な支配——父様の面影をやどす妻子持ちの小隊長を自分のものにすべく、策謀の限りを尽くそうとし——何のことはなくそれは消滅した。噂では小隊長自身が上司に自分が陥った罠と罪を告白／上層部の判断——優秀な小隊長を評価／速やかなもみ消し＝異動——小隊長は妻子をつれ、国境警備隊員として山の遥か向こうへ去った。

残された彼女は、その肉体をライフルが吹き飛ばして以来、初めて、泣いた。

トイレの中だろうが食事中だろうが訓練中だろうがガムを噛みながらだろうが、めそめそ泣き続け／泣き暮れ／泣き明かし／涙に溺れ／そしていつしか涙の雨による大いなる作用によって声が消え去り、父様の面影だろうが何だろうがまとめて鼻紙と一緒にゴミ箱に叩き込む気になったとき、彼女は真に私との相似を得て、哀れな独りの人間としてこの現実に生きていることに気づいたのだった。

あ、来た——予兆を素早く察した陽炎は、さっと立ち上がり、薄暗く雑然とした部屋を器用に足早に進んでトイレに駆け込み／便器に突っ伏し、ぶが——っと盛大に吐いた。

しばらく頭がくらくらして何も考えられず、やがて、あー、久々に全部思い出した、ということを思い出した。

ちらつくイメージ——昔の体への被弾＝今の体への被弾＝ミハエルの微笑＝父の面影＝〝克服あれ〟／自分を暴走させる強迫観念の特盛りセット。

ふとポケットから何かが落ちたことに気づく——牌＝紅い文字＝『中』。

このままだと彼女はあの中隊長を誘惑しに走るな、という他人事のような思考。

トイレの水を流し／便器の蓋を閉め／その上に座りこみ／思案——さて、どうしよう。

薄暗い部屋におぼろな光——モニター＝示された標的／過去の因縁／そして**可能性**／自分が撃たれたときの**疑問**。

すぐに結論——やれやれ、これも神様の声だというなら、従う以外にないのでは？

彼女は／陽炎は、床の『中』を拾い、必要な準備を整えるべく立ち上がって部屋を出た。

四

午前五時——MPB本部ビル地下駐車場／公用車が並ぶ区画。

エレベーターを出ながら荷物を確認。地図／潜入捜査員が使う偽の運転免許証／隊の公用車のキーと使用許可証＝陽炎が警邏任務中であり、非常時に特甲の要請権を持つことを示す品／そしてグロックの拳銃。

その全てを、あの手この手を使って手に入れてしまえるのが陽炎だった。過去に手に入れたアクセスコードを活用＝任務データのコードの差しかえ／隊の備品管理官や情報官にしおらしく甘えれば、それだけで〝清純可憐な特甲少女である陽炎の極秘任務〟という怪しげな大嘘を信じた男たちが、たいてい一肌脱いでくれる。

問題はどれだけ早く戻れるか——強引にこじ開けた空白は六時間。それまでに確実に判断し／行動し／結果を導く——などと考えながら、荷物を入れたリュックを背負い／だぶだぶのトレーナーのポケットに両手を突っ込み／野球帽をかぶった姿で、ぷーとガムを膨らませて車に近づき——硬直した。

「も、くっそ、眠っみー」涼月＝くわえ煙草／パーカー姿。

「来ましたよー」夕霧＝敬礼／ワンピ姿。「さー、御一緒に。おはよーございまーす♪」

「なぜここにいる」陽炎＝目をすがめて。

「てめーの様子がおかしいなんてことはフロイトじゃなくたって分かるっつの。夕霧と交代でてめーを張っただけだ」涼月＝眠たげに親指で車を示す。「ほら、早く開けてあたしにもう少し寝させろ。どこ行くんだか知んねーが、さっさと終わらせて帰るぞ」

パチン／陽炎は無言でドアのロックを外して運転席へ——涼月＝助手席／後ろ＝夕霧。

「どうした？　早く出せよ」

「……支援を担う狙撃手ほど、その実、支援を必要とする者はない」陽炎＝キーを差し込んでひねりながら。「狙撃手は単独では戦えず、チームを前提にして初めて成り立つ」

「朝っぱらから全員で教訓復唱ってか？」涼月＝うんざり顔／煙草を灰皿へ。

「えへへー、違いますよー？」夕霧＝座席の間から顔を突き出す。「陽炎はー、ありがとうって言いたいだけー♪」

涼月＝ぷいと顔を背ける。「……別に、てめーがおかしいまんまじゃ、小隊長のあたしの責任になるっつの」シートを倒して両足をダッシュボードの上に乗せ／人差し指を前方へ向ける＝隊員に突撃指示。

陽炎は車を出した——ろくでもない人生を通して手に入れた、得難いものたちを乗せて。

本部ビルを出て三時間——涼月も夕霧も運転技術は習得していないので、途中で食事休憩を入れつつ陽炎が全距離を走破。涼月の間抜けな寝息／カーラジオの音楽／夕霧の素敵なハミングを楽しみながら車を走らせた。

初めまして、彼女と私さん♪

そう言って彼女の額に優しくキスした。

「はい、父様」

父は少し離れたところに立ち、銃口をくわえ、引き金を引き、ライフルの轟きがもたらすものが、その命にもたらすままにさせた。

彼女はその一部始終を冷静に見届けたつもりでいたが、精神は決してそうではなかった。警察がドアをこじ開けてやって来たとき、激しいショック症状を呈しており、すぐさま病院へ運ばれた。そして命を保つための処置を施されると、今度は別の施設に運ばれた。

なぜなら彼女は、一時的に自分が誰なのか分からなくなっていたからだ。

そこにいた期間は比較的短かったが、それなりに学ぶことは多く、中でもバラバラになりかけた自分を再び一つにするものを得たことは有意義だった。

『§』――その〝相似〟を表す記号は、彼女が私であることを受け入れられない精神において、彼女と私が似たものであることを示し、自己をつなぎとめる契機をもたらした。

すなわち『Ss§』――〝彼女と私は相似である〟という、精神を現実にとどめる楔を。

また同じ頃、児童福祉法において身体に障害を持つ児童は機械化されるということを教えられた。またそうしなければ、いずれ肉体が衰弱して死に至ることも。彼女は生存を選び、肉体の機械化を受け入れ、新たな手足を得て労働児童育成コースに放り込まれた。

多くの機械化児童たち――その中に、新たに得た手足を苦もなく我が物とし、自由に操縦する少女がいた。その少女を彼女は観察し、手足の使い方を学び取った。

また少女の方でも、彼女を見つけた。車椅子に乗ったまま立てない彼女が、繰り返し手足に書き込む『Ss§』を見て、こう言ったのだ。

「初めまして、彼女と私さん♪」

その一撃で彼女は、少女の超直観的かつ電波的性格に惚れ込んだ。もしかして自分は同性愛者なのではと思うくらいの好き好きぶりだった。やがてその少女こと夕霧が、手足の操縦ぶりを評価されて専門職コース入りが決まると、彼女もそれを追った。

それが、彼女と私と父とライフルの三つ目の関係の始まりとなった。

少女＝夕霧の就職先が警察であることを知った彼女は、どういう精神の作用によるものか、それをある種の神の声と受け取った。自分と父様のかつてあった人生を根こそぎ奪った、ライフルとの対決のときだと。

彼女の一念発起――父様とその仲間が標榜していた合言葉の復活＝〝**克服あれ**〟

夕霧に遅れること半年余――手足の操縦を完璧にマスター／警察の専門職コース入り／数年ぶりにライフルに接触。その恐怖と苦痛と呪いを、噛み／味わい／膨らませ／弾かせ／自分のものに。やがて負の記憶の中核たる父様の声＝〝**克服あれ**〟の自然消滅――成長期の急激な精神の発達が、それを忘れ去ろうとしていた。

その矢先――ライフルだけでなく父様自身が現れた。それは正確に言えば、当時の訓練教官であり、ことあるごとに彼女の体に触れ／撫で／押しつけ／密着してくる男だった。

あっさりと復活した声＝〝**克服あれ**〟／彼女はその教官に父様の面影を見つけ、それを消すことを決めた。その方法＝あらゆる情報の収集／その中から最適なものを選択／入念な準備――彼女は自ら教官を誘い／身を委ね／過去に父様が行っていた肉体の手入れを、新たに得た電子的な疑似感覚のもとで再体験＝詳細に把握／その一部始終を自ら設置した機材で撮影――余すところなく映し出されたそれを自分の顔が映らぬよう加工＝教官の家族および上司および福祉局に送りつけた。

教官の失職／離縁／服役＝父様のように哀れな独りの男となって彼女の人生から消滅。

さらに数ヶ月後――いったん消したはずの声がまたもや復活。MPBの情報官＝彼女の過去を探り出し／勝手なことをささやき／色々と要求し／強要。その情報官にも父様の面影を見た彼女の情報収集／駆け引き／二ヶ月余りの関係の末――情報官の隙を突き／当人の端末のパスを盗み／データベースのアクセスコードを入手。当人が撮影した猥雑な二人の画像を彼女の顔や特徴を消したものを除いて全て破棄――残りをその情報官にしか送信できぬはずの経路で流し込み、全情報部員およびマスコミに出血大サービス。

児童ポルノ画像が政治家の首さえ一瞬で断ち切るご時世――情報官の失職／白眼視／離縁／服役／ワイドショーのネタに＝父様のようにみじめになって檻の中で首吊り自殺。

その副産物＝情報部へのアクセスコード――彼女は謎めく情報通に。ただし翌年になって解析官なる部署が設立／上層部により規制された情報は閲覧不可となる。

それから数ヶ月――声が再三にわたり復活。愕然となる彼女――相手は狙撃部隊の小隊長。彼女に厳しく接し／深く思いやり／生き抜くすべを教え／娘のように愛情を注ごうとしてくれた男――その小隊長にも父様の面影＝強く／はっきりと／抗いがたいほどに

界的に見れば、ごくありふれた事故といえるものだ。
　父様が仲間たちとともに、余った弾薬を費やすべく、森に設置された標的を一通り撃ち終え、ライフルをケースに収めて、愛娘にコテージへ戻ろうと告げたとき、その悲劇は一続きの連鎖においてまさに命中した。
　父様のライフルには撃ち残された最後の一発が込められており／忘れるはずのない安全装置がその日に限ってかけ忘れられ／ちょっとやそっとでは暴発を引き起こさないはずの引き金が何かの拍子で撃鉄との連結を解除し／それがたまたまライフルをケースに収めようと娘から目を離した瞬間／彼女は父様を迎えに駆け寄ったのだ。
　ライフルの轟きは、それがもたらすべきものを彼女にもたらした。誰もが予期せず発射された弾丸は、彼女の左胸から侵入し、胸骨を砕き、背骨を吹き飛ばし、全身の自由をまさに瞬きする間もなく奪い去った。
　衝撃とともに彼女はどことも知れぬ虚無へ叩き出され、それから十五日後に再び意識が引き戻されたとき、首から上と、右手首から先しか動かせぬ体になっていた。
　娘を破壊された母様は、嘆き／怒り／呪い、その全てを父様にぶつけた。
父様は自分が愛する娘とライフルへの取り返しのつかぬ罪悪の地獄に陥った。
そして彼女が身体の自由を失い、また精神的なショックから言葉を発さなくなった代わりとでもいうように、父様と母様はとてつもない勢いで争いを始め、馬鹿げたことにそれは裁判にまで発展した。
　やがて緩慢に進む時間とともにどんな作用が働いたものか、いつしか母様は彼女の人生から消え去り、父様だけが残された。父様は、奴隷か罪人のようにひたすら彼女に尽くした。病院にいた期間は比較的短く、父様は自宅を改造し、そこに彼女を迎え、設置した。
　そうして彼女と私と父とライフルの二つ目の関係が始まった。
　市は繰り返し、彼女を機械化して身体の自由を取り戻させることを勧めたが、父様は、彼女のまだ健康な手足を切除して機械に置き換えることを半狂乱になって拒んだ。
　機械化という言葉が父様を脅かし、やがて彼女の周囲から人を遠ざけるようになった。本来なら医師がやるべき検査の多くを自ら行い、彼女のまだ生きている肉体の手入れをし、髪や爪や、あるいはそれが排泄するあらゆる汚物を命の証拠であるとして喜んで保管した。
　父様の執着が日に日に増長し／意外性を増し／やがて平然と彼女の肉体が排泄したものを食べて「これは私とお前の生命が一つになるよう運命づけられた神様の御意志だよ」と痩せこけた寂しい顔でささやく一方――彼女は彼女なりに新しいものを手に入れていた。
　一つはガムを噛むという習慣――かつて母様が毛嫌いしたそのくちゃくちゃもぐもぐ音を立てる菓子は、体のごく一部しか動かせぬ彼女にとって嗜好品であり娯楽であり精神を穏やかにする祈りの所作となった。
　またさらに父様が備え付けた端末によって、これまた母様が心底から憎悪し、堕落の象徴とみなしていたインターネットの情報を自由に閲覧するようになった。彼女はガムを噛み／膨らませ／弾かせ／そしてあらゆる知識を何の制限もなく集めることを覚えた。
　中でも強く印象に残ったのはフロイトやユングなどによる心についての様々な解釈で、多くの事例の中に、父様に似たものもあれば、それより遥かに衝撃的なものもあった。
　いつしか彼女は再び父様と言葉を交わすようになり、ときおり父様が口走る「神の声が聞こえる」とか「お前のおしっこには青い光が満ちている」といったことへも冷静に淡々と反応するようになった。そうして、ときおり家政婦が顔を見せる以外、父様とともに全く外界の人間と接することのない月日が、それはそれで平穏に過ぎていった。
　あの日、いつも通り父様が彼女の肉体を手入れするため、ごそごそと動き、ぎしぎしとベッドが軋み、うとうとと彼女がうたたねしているところへ、ふいに家政婦が部屋に入ってきて、金切り声を上げるまでは。
　驚いて目覚めた彼女は、なぜ家政婦が叫んでいるのか分からずにいた。父様がズボンを脱いでベッドに乗っている姿など既に見慣れていたし、それが彼女の体に必要な行為だと言い含められていたからだ。けれどもそれは外界においては法を犯す重大な行為であり、家政婦は警察を呼びにすっ飛んでいった。
　父様は大慌てで家の鍵を全て閉ざすと、改めて、いつも以上に入念に彼女の手入れを終わらせた。そして一番上等な服を着ておめかしをすると、長いことどこかにしまったままでいたライフルを取り出し、こう告げた。
「神様が私たちを呼んでいる。行かなければ。もっと早く行くべきだったかもしれない」
　だが彼女は、その肉体を破壊したライフルを見るなり強い恐怖にとらわれ、こう返した。
「ううん。彼女には神様の声が聞こえない。まだそうじゃないみたい」
　父様は寂しげに微笑んだ。この期に及んで彼女が反対しても、決してそれを否定したりせず受け入れてくれる、どこまでも穏やかで純粋で脆い心の持ち主だった。
「神様の声が聞こえたら、すぐに来なさい。父様はずっとお前を待っているよ」

心配なんざ、してねーっつの。

「いつも悪ぃな――って、あたしじゃなくて。こら、陽炎、お前が礼を言えっつの」
「ああ、それを頼んだのは私なんだ」陽炎――ディスクを受け取る／真顔で。「君に声をかけるなら涼月を通すべきだと思ってね。面倒なことを頼んでしまってすまないね」
「ううん。いつも大変なお仕事をしてる涼月ちゃんたちを支援することが、転送員としての僕の役目だから」本心から役に立てたことを嬉しく思っている、無垢なる慈愛に満ちた姿。「じゃ……僕、戻るけど。僕に出来ることがあったら何でも言ってね、涼月ちゃん」
「おう」「じゃーねー」手を振る涼月＋夕霧――名残惜しそうにフロアへ戻る吹雪。
　その小さな背へぼそり。「汚したい」
「……あ？」ぎくっとなる涼月。
「いや、なんでもない」
「つか、なんで、あたしを通すんだ？　てめーで吹雪に頼めっつの」
「私と会話しているときでも、彼はお前の名前ばかり口にするが？」
「だからなんだってんだ？」
　眉をひそめる涼月――陽炎はしばし無言で見つめ、涼月の肩をぽんと叩いた。
「な……なんだよ」
「別に」回れ右――エレベーターへ／十二階＝女性隊員の寮。「私は部屋でデータを眺めている。消えたわけではないから心配するな」
「心配なんざ、してねーっつの」涼月がファックサイン――さっさと自室へ向かう陽炎を、夕霧がじっと見送る。

　情報――**カール・マキシム・フォルメルハウゼン**／資産家／未来党員／弁護士の資格／元オリンピック選手／支援テロの**容疑者**／元ライフル友愛会会員／〝**克服せよ**〟の指輪。
　六年前＝極右的な言動が問題視され、オリンピック出場資格を取り消されたという**噂**。
　六年前＝超保守主義の中絶反対派による医師狙撃事件に関わったという**噂**。
　六年前＝職も栄光も失って都市を去る。
　今年＝都市に戻り、複数のグループの非合法活動を支援／傭兵的な〝射手〟の**可能性**。
　彼女はその情報を眺めた――雑然と散らかった薄暗い部屋でモニターの灯りだけをつけて／がらんとしたビルの屋上を眺めたように／何か隠された意図があるのではないかと思いながら／なぜ自分がそうしなければならないかを考えながら――
　記憶の扉が開かれ、消し去ったはずのものが後から後から甦るのを止められずにいた。
（彼女は私と出かけるのかな？　それとも母様と一緒に留守番をしているかい？）
　いつ身についたかも分からぬ習慣。
（もちろん彼女は父様と出かけたいわ！）
　幼い頃から自分のことを彼女と呼ぶ癖。父様はそれに付き合ってくれた。母様はそれを嫌がって直させようとした。
　母様は純血主義で、根っからの貴族で、親の資産を受け継いだ者としての誇りでがちがちで、陽炎という日本語名を嫌がり、彼女をミドルネームでサビーネと呼んだ。
　父様は同じ身分だが世界市民主義の思想の持ち主で、少年のような心と、決して怒鳴ったりしない穏やかな心を保ち、彼女を優しく陽炎と呼んだ。
　二つの呼び名＝父様と母様――その狭間で、彼女は陽炎でありサビーネであり私であり、クルツリンガー家の一人娘であり、そしてあの事件の被害者だった。
　六年前。
　彼女と私と父とライフルの最初の関係／父様の趣味＝貴族の証し――**ライフル友愛会**。
　ミリオポリスの整地された公園の多くは、かつて貴族の狩猟場だった場所だ。貴族にとって狩猟を学ぶことは、少年から大人になる証しであり、この豊かな地上を創造された神を知ることであり、また逆に年老いた者をも若返らせる活力の源だった。
　そんな狩猟の精神を伝えるライフルの伝統について、父様は少年のように目を輝かせて彼女に語ってくれた。友愛会に集う紳士たちも同じように彼女に接してくれた。彼女はそんな彼らと森が好きだった。ライフルの轟きや獲物たちの死はとても怖かったけれど、人はその恐れを通して多くのものを学ぶのだと教えてくれた。彼らは会員しか入れない友愛会の敷地とコテージに彼女を迎え入れ、まるで童話のお姫様のように扱ってくれた。
　言い換えるならこうだ。
　彼女はそこでは自由だった。母様が押しつける学びごとや窮屈な価値観や、厳しいだけの教育から解き放たれる唯一の場所だった。
　そんなわけで彼女は毎月、父様と連れだってライフル愛好家たちの集いに参加し、猟犬と遊んだり父様と一緒に焚き火を囲んだりして楽しんだ。もちろんその日も、輝かしい一日が始まり、そして父様のライフルに込められた最後の弾薬とともに終わるはずだった。
　それは夕闇が包む森で突如として起こった悲劇――単純で救いがたい、世

っつーの」涼月――噛みつきそうな顔。
「散歩だ」陽炎――淡々と。「人生について考えていたら道に迷ってしまってね」
「陽炎さんは哲学者ですねー♪」
ＭＰＢ本部ビル二十階――情報解析・通信班のフロア／ロビーのベンチに並ぶ三人。
「てめーの場合、冗談に聞こえねーんだよ」涼月――ふと声を低め。「お前がミハエル中隊長の車に乗ってたって噂を聞いたぜ」
「例の賭けの払いで、奢らされただけだ」
「それだけか」
「他に何か？」
ぷーとガムを膨らませる陽炎――涼月が押し黙る。情報通の陽炎につきまとう、まことしやかな噂＝売春。
彼女はその噂を知っていたし、涼月がそのことで変に気遣ってるのも知っていた。かといってこちらに釈明する気もなければ、相手に追及する気もなく、二人とも疑惑を隠すとか暴くとかいうほどの気分にもならず、大抵は曖昧なまま不問に付される。
「別に……てめーが道に迷おうが踏み外そうが知ったことじゃねーよ。ただ、哲学だの何だので目が覚めてみりゃ独りでどっかに行っちまってんのは、小隊長としちゃ迷惑だ」
いつも以上につっけんどんな口調――どうやら、涼月なりに心配していたらしい。
パチン／ありがたさと面倒くささ半々で応える。「以後、気を付けよう」
黙然となる涼月――気まずい雰囲気を、夕霧が一蹴。「あっ、哲学と言えばですねー、夕霧も、目が覚めたらハーゲンダッツになった夢を見てびっくりしたことがありますよ？」
「それは斬新なバージョンだね。私が知っているのは、**虫**になった話だよ」
「あー……それ知ってるぞ。カフカの『変身』だろ。起きたらでかい虫になってんの」
「ほーう、お前が知っているとはな。さすが、**受験勉強**をしているだけはある」
「……なんっか、むかつく言い方だな」
「**虫味**のハーゲンダッツですかー。それは夕霧も想像出来ませんでしたねー」
「すんな!!」跳び上がる涼月。「うっおーい！　想像しちまったよ気持ち悪いーっ！」
「ふふふ。**哲学度**が足らないな、涼月」
「むふー。夕霧は高いですよ**哲学度**♪」
「なんの**度**だ！」涙目でわめく涼月――その背後でふいに声。
「どうしたの、涼月ちゃん？」データディスクを手にした、細い体軀の少年＝ＭＰＢの解析通信員／マスターサーバー〈劢〉の接続官――**吹雪**・ペーター・シュライヒャー。
「ちょ……ちょっと待て、吹雪」頭を振る涼月――をよそに、立ち上がる陽炎＋夕霧。「やあ」「こんにちはー、吹雪くん」
「こんにちは」吹雪――優しさの模範のような笑顔。「涼月ちゃん、本当に大丈夫？　僕、脳のフィードバック酔いの薬なら持ってるけど」
「あー……何の薬だって？」
「情報過多で現実感がなくなったときの薬。接続官って脳を端末に直接つなぐでしょ。たまに地球が降ってきたり、宇宙が割れたりするの」
「夕霧も降ってみたーい♪」大はしゃぎ。
「なんか……そっちの方がヤバそうだな」涼月――感心＋同情。「あー、それより――」
「はい、これ」吹雪――にっこり微笑んでディスクを差し出す。

〈ÜW〉——〝克服せよ（ウーバーヴェンデン）〟を意味する文字だそうだ。

どこの誰がテロに走るか皆目分からん不確かな状況下で、あらゆる可能性に対処しなけりゃならん」

〝**だからなんだ**〟／苛つく／よくある新聞記事の見出しをそのまま口にする。

「まるでジャングルのゲリラ戦のように？」

「ゲリラには目標がある。支配地域の拡大や、正規軍の援護といった目標がな。だが、こうしたテロを仕掛ける連中は気分を目的にする。自分たちが正しいという気分、大きなことを成し遂げたいという気分をな。それが出世や色恋に結びつかなくなり、ある日突然、誰かを撃ってやろうと思いつく」

苛つき／悲しさ／衝動／咄嗟の言葉。

「**私の父もそうだったと？**」

ちらっとミハエルがこちらを見た——武骨で機械的で大ざっぱですっきりしていて妙に落ち着く——そんな男の眼差し。「いや。俺が知る限り、お前とお前の親父はとんでもない不幸に見舞われただけだ。そしてお前は、その不幸を生き延びただけだ。そんなお前にとって、ライフルはどうしようもなく、おっかないものだったろう。だが、お前はそいつを克服した。お前なりのやり方でな」

カチッ／彼女の中で何かが音を立てる——苛つきが和らぐ／相手の穏やかさに呑まれたように／落ちたガムを拾って食われたときの、呆れたような感心したような気分になる。

「私について詳しいんですね」

「隊員の資料を読むのも仕事だからな。とはいえ、お前が、そんなのは全部たわごとだと言えば、それまでだ。俺が知ってるのは資料であってお前じゃないからな」

カチッ／また音がする。「……それほど間違っていないと思います」

「何よりだ。隊員理解は、隊長としての査定に響く」微笑／車は第二十四区に入り、本部ビルが近づいてくる。「お前をこの件に関わらせたいってのは半分当たりだ。てのは、お前がBVT局長の話を蹴飛ばして出て行ったことについちゃ俺も同じ気分だからな」

「でも辞退はしない？」

「確かにお前の後で何人か同じように出て行ったが、中隊長が真似するわけにはいかんだろう。それに、こうも思ってる。狙撃合戦は馬鹿馬鹿しいが、しかしこの件は、ライフルを知ってる人間がやるべきだと」

「それだけ敵が優秀だと？」

「それだけ相手がライフルを知っているということだ。その魅力と美しさを。そのろくでもなさと危険を。世の中には、お前のようになれなかった連中が大勢いて、そいつらなりのやり方で人生に復讐してやろうと思いつく。もしそれがライフルを汚すことになるなら、同じくらいライフルを知ってるやつが、その汚れを拭き取ってやらなきゃならんとな」

美しさ／汚す——あまりにストレートな表現に彼女は内心でちょっと呆れ、ちょっと苦笑し、そして感心した。この人はもしかして、誰かがライフルで犯罪を犯すたびに、ライフルに対して申し訳ないと思うのだろうか。自分が愛するライフルに謝罪しちゃったりするのだろうか。いや——多分、そうだ。困ったことに、この人は、そういう素敵な人だ。

車が本部ビルの地下駐車場に入り、隊長連中のための専用区画にぴたりと停まった。

ミハエルはバックミラーに手を伸ばすと、たった一つの飾りである例の牌を外し、差し出した。「働き者へのプレゼントだ」

思わず受け取る／しげしげと相手を見る。「大切な物では？」

「現場でライフルを構える身分じゃなくなってきたからな。てことは、誰かにそれを渡したくなるってことだ。俺と同じようにライフルを知り、扱えるやつに」あの微笑——そしてなんと、軽く右目をつむった。

まさに不意打ちとも言えるウィンク——おお、さすが半分フランス人、と感心する彼女をよそに、その心が大きな音を立てた。カチッ／バシュッ／ズドン——それは予想を遥かに超えて響き渡り、彼女をくらくらさせた。

ミハエルが車外へ出る／陽炎が遅れてそれに従った／ドアを閉めた——相手を見つめた／手にもらったばかりの牌を握りながら。

ミハエルは言った。「来週、二十一区でウィーン州知事がテロ否定の演説をする。当然、標的になる。その前に〝射手〟が逮捕されなければ、狙撃合戦の可能性大だ」

「私に、参加しろと？」

「千二百メートルの狙撃を可能にする人物が、本当に元オリンピック選手の爺さんかどうか、心当たりがあったら教えてくれ。またもし〝射手〟を逮捕できなかった場合は——お前が、やつを死線に叩き込め」

なんで私が？——とは訊けなかった。うっかり答えを刻まれたものを事前に受け取ってしまっていたからだ。陽炎は心を静めるためにガムを噛み／膨らませ／パチンと弾けさせ——言った。

「気が向けば」

ミハエルは微笑し——去った。

「だから、どこほっつき歩いてたんだ

ーン専門の旅行代理店／結婚式の共済組合／ウェディングドレスとタキシードの仕立て屋――見事にカップルだらけのフロア。十代と三十代＝少女と男の組み合わせに、奇異な者でも見るような視線が集中。だがミハエルは全く気にせず、若者向けのカフェへ。
　窓際の席――ミハエルはコーヒー、陽炎はダージリン。二人とも砂糖ミルクなし。
「奢れということですか？」
「賭けの払いは、殊勝な心がけってやつの中でも一等に近いものだからな」
　何となく安堵――とんでもなくでかいステーキでも奢らされるのかと思った。「まさか私に合わせて、ここを選んだんですか？」
「俺とお前の職業的な見地ってやつだ」
「意味が分かりません」
　ミハエルの目が地上へ向けられる。
「晴れてて良かったな。はっきり見えるぞ」
　その視線を追う――第十一区の林立するビル群／その狭間／ぽつんとそれが見えた。
　総合病院――まさか、と心が反論／距離をざっと目算＝確実に千メートル以上は離れている。病院の窓など、テーブル脇の砂糖の粒ほどにしか見えない。
　ありえない。離れすぎだ。ほぼ無風状態の地下訓練所ならともかく、不規則なビル風が吹きつけるこの場所で、あの距離にいた彼女に、指先ほどの大きさの弾丸を当てるなんて。
「ここから最も遠い場所にいた人質まで、およそ千二百メートルだ」ミハエルがこちらを向く――まるで世界の重大な秘密を知ったような低い声。「事件当日の午後一時から三時の間、このビルの外壁および窓の清掃が行われていた。午後二時過ぎ、清掃員を乗せたゴンドラが、ちょうどお前が座っている二メートル先の空中に来た。それから三十分ほどかけてゴンドラは少しずつ横へ移動し、〝射手〟を水平に移動させた」
「なら店の人間が気づいたのでは？」
「同時間帯、各フロアの電力および火災検知器の点検が行われ、各店舗は順繰りに営業を中止し、窓にはブラインドをかけている。窓の外を清掃員がうろついたり、電気が止まったりと、商売の邪魔になることは、いっぺんに同じ時間にやってやろうってわけだ」
「清掃会社の人間が気づきます」
「グルだったら？　清掃現場の監督官が極右的思考の持ち主だとしたら？」
「調べたんですか？」
「俺の優秀な部下どもがな。監督官と労働者二名を締め上げ、ある名前を吐かせた」じっとこちらを向く――予兆を告げるように。「カール・マキシム・フォルメルハウゼン。オリンピック出場経験もある優秀な狙撃手だ。六年前までこの都市のライフル友愛会に所属。この会は、六年前に中絶反対派による医師狙撃事件で関与を疑われ、解散している」
　陽炎は無言――真に射撃手としての天与の才を発揮し、微動だにせずにいる。
「監督官たちの証言では、〝射手〟つまりカールは、ある文字を刻んだ指輪をしている。かつてのライフル友愛会の合言葉で、〈ÜW〉――〝**克服せよ**〟を意味する文字だそうだ」
　何かが決定的だった――なぜミハエルが自分に接触したか／途端に彼女の中で何かが醒めた／手がレシートへ。
「では奢ります」
「つまらない話だったか？」
「興味深い話ですが、私には関係ありませんので」陽炎の起立――相手を見下ろす／冷ややかに。「たとえ**私の父**が、その友愛会のメンバーだったとしても」
　ミハエルが立ち上がり、陽炎の手からレシートをひょいと奪った。「ここで奢ってもらうと言った覚えはないぞ」
　突っ張る気分――なし。妙な脱力感。ミハエルが清算するのを黙って見つめ、淡々と礼を言い、駐車場に降りて車に乗った。
　車がビルを出てすぐ、ミハエルが言った。「別にお前さんが支援テロに関与したと思って近づいたわけじゃない。若い狙撃手と的について話してるうちに、そうなっただけだ」
　何か見え透いたものを感じて、思わず言い返した。「私から犯人像を聞き出し、私に事件への積極的な参加を促したかったのでは？　また当時の友愛会がどんなもので、私の父もふくめ、どんな人間が疑われていたか喋らせたかったのでは？」
「なにせ俺たちの側にいる唯一の証人だからな」穏やかな口ぶり――ごまかしのない響き。「過去、狙撃事件への関与を疑われた途端、当時の友愛会のメンバーは片っ端から不幸な目に遭っている。アインシュタインじゃなくたって何かあったんだろうと推察がつく」
「私は当時、八歳でした。大した記憶は残っていません。それも疑いますか？」
「思い出して欲しいとは思うがね」
　黙った／そのまま無言でいようとした／だが我慢できずに口にしていた。
「当時のメンバーは私が知る限り、みな紳士的で友好的な人物でした。彼らを疑ってかかれと？」
「それが俺たちの戦いだ」静かな声――多くの経験を積んだ男の、乾いた風のような口調。「新聞じゃ公安がテロリストの戦闘ヘリを撃墜しただの、〈憲兵特殊部隊〉が正々堂々と狙撃戦をするだのと書き立てているが、どれも重装備と確実な情報があってこそだ。俺たちは違う。都市の観光資源保護法だのなんだので持てる武力を制限され、

偉いさんはそう考えるかもしれん。犯人は高価な照準器を捨ててでも、出来るだけ沢山撃ち、出来るだけ早く逃げたがったとな。事実、照準器のデータ分析と実際のターゲットはほぼ一致。被弾した特甲員の誰かさんもふくめてな」

　また問うような目――陽炎は淡々とガムを噛むふりをし／相手に対する困惑や落ち着かない感じが消えるのを待ち／照準器とロープと逃走車両という三つの情報が、三点式位置探査と同じ機能をもって犯人像を浮かび上がらせるのを――感じなかった。

　あれ？　何か変だ――というかすかな表情の変化を、ミハエルに正確に読まれた。

「どれも下らんたわごとだ。ちょっと考えれば分かるはずだ。照準器とロープがあった。だから逃走車両があっただろうと考える自分が、そう考えさせられたに過ぎんことはな」

「つまり犯人は、わざと照準器とロープをここに放置し、捜査を撹乱した？」

　あの笑み――少しだけ唇を上げる、ひどく渋みのある微笑。「ということは？」

　思案――冷静に／矛盾や予断を丁寧に取り除く＝ガムの包みを開くように／そして事実だけを噛み／味わい／精査された可能性を膨らませ――あるべき隠れた事実を弾かせる。

「つまり逃走車両などなかった。照準器自体が囮だった。犯人は照準器が狙ったものを撃っただけであって、同じ空間にいたわけではなかった。つまり――ここは擬装された空間であり、犯人は別の場所から狙撃した」

「正解だ、スナイパー。的を外すばかりじゃ人生面白くもないからな。お前さんがまだ例の賭けを覚えているってんなら、ついでにもう一つ、面白い的を見せてやる」

　移動――ミハエルの車＝ファイブドアのセダン／きちっと整理された車内／運転席周辺に複数の携帯電話とモニター／後部座席＝寝袋と歯磨きセット／後部荷物スペース＝キャンプ用品と釣り道具。

　きっと家もこんな感じなんだろうな――助手席に座った彼女の雑感／武骨で機械的で大ざっぱですっきりしていて妙に落ち着く／バックミラーに吊された飾りが一つ――多分、自分で加工した穴に紐を通したもの＝古びた四角いプラスチックのブロックに紅い文字。

『中』――弾丸と同じサイン。

　興味／好奇心／何を喋って良いか分からないので好都合な話題。「〝アタル〟ですか？」

「昔、戦友からもらった麻雀牌だ」

「マージャン？」

「東洋のゲームだ。ポーカーを三倍複雑にしたようなやつでな。百三十六個の牌のうちの四つにこのマークが刻まれている。お前、『レクター博士』三部作って知ってるか？」

「アンソニー・ホプキンス？」割と好みの俳優だった。「『羊たちの沈黙』と『ハンニバル』は知ってます」

「なるほど、お前さんらにとっちゃ映画のタイトルかもしれんな。もとは小説で、『レッド・ドラゴン』ってのが第一作だ。そいつにも、このマークが出てくる。力を司る紅い竜の象徴としてな。どうやらもとは中国語らしいが俺に教えてくれたのは日本人だった」

「どういう意味なんですか？」

「X――つまり命中だ。日本じゃ食中毒を意味する言葉にも、この字が使われてる。毒が、命に中るってわけだ」

「危険な放送禁止用語に聞こえますが」

「そうかもしれん。俺にとっちゃ、こいつは紅い死線だ。レーザー照準器がもたらす光点――狙撃手の眼差し、死の宣告だ」

　そんなものを弾丸の印にするんだ、若いなあ――彼女の雑感＝陽炎は次の話題を探したが、ミハエルに先んじられた。

「お前の弾丸のサインは、SとIの間に何かの記号だったか？　何か思い出が？」

「別に――」何となく相手の反応が見たくなる／気を引きたくなる。「――内緒です」

「てことは当ててみろってことだ。さて。SとIと来たら……狙撃手とハリネズミってところか。お前さんにぴったりだろう？」

「外れです」表情＝淡々／内心＝むかっ。「それほど職務熱心でも強情でもないです」

「ふむ。そうか。それじゃ――」柔らかなハンドル捌き＝ビルの駐車場へ車を滑り込ませる／停車――ドアを開く／何かを呟く。

「え……？」同じく外へ出て聞き返す。

　ミハエルは答える前に、ごくっと喉を鳴らした。噛みっぱなしだったガムを飲んだのだ。つくづく大ざっぱな人だなと呆気に取られたところへ、きわめつけの一言が来た。

「彼女と私は？」何気ない口調＝エレベーターに向かいながら／振り返りもせず。

　思わず棒立ちになりかける／しいて歩み続ける／狙撃手の本領発揮＝鼓動の高鳴りを抑え、体が予想外の動きをみせるのを封じる。

　相手に並び――呟く。「内緒です」

　ミハエルは口の端を少しだけ上げた。

　エレベーター――二十五階＝ハネム

開いた。
「てめー……」室内＝机に向かう涼月／乱視用の縁なし眼鏡――振り返る／睨む。
「高校受験の勉強か？」入室――枕を抱いてベッドに腰掛ける。「無駄だぞ、涼月。特甲児童としての労働期間を変えるには、よほどの点数を取らねばならない。とはいえ私が手伝えば大いに助けになるかもしれんが」
「お前な……眠れねーから話し相手になってくれって素直に言えっつーの」
「なってくれるのか？」
「ざけんなタコ。夕霧んとこ行け」
「それはなしだ。幾ら私でも、夕霧の壮絶な寝相の悪さに付き合う勇気はない」
「だったら一人で羊でも数えてやがれ」
「羊？　なんだそれは？」
「知らねーの？　寝れないときに数えんの。羊に一発、羊に二発ってな具合に」
「虐待はよせ。悪習を親から受け継ぐな」
「受け継いでねーっつの、失礼だな」涼月――諦めたように眼鏡を外す。
「一人で部屋に閉じこもりやがったくせに……てめーがどっかの偉い局長を怒らせたっつって、あたしが副長から注意されたんだぞ」
「そんなこともあったな。ちなみにどっかの局長ではなく大隊長の直属の上司だ。どうせ副長も人員を割く気などないだろうし、それくらいで専属の特甲児童をクビにはしない」
「あー、要するにだ。昨日の事件で、てめーはどっかのタコに一発食らった。そんでやり返さねー限りスカっとしねーってんだろ」
「ふむ。それだ。そういう馬鹿馬鹿しくて単純で分かりやすい思考が欲しかった」
「なんだと、この――」
どかん！　とドアが大きな音を立てて開かれ、寝ぼけまなこの夕霧が登場。
「もう夕霧はねむねむですよ。二人が楽しそうにお喋りしてても、ちっとも起きる気しないんです」
「だったら自分の部屋で――」
陽炎がベッドを叩く。「おや夕霧、そんなことを言わないで、ここでお眠り」
「はーい♪」夕霧がダイブ＝勢い余って壁に激突／構わず毛布にくるまり寝息。
「ふふふ、可愛いなあ」陽炎――枕を抱いて立ち上がる／退去。「では、ごきげんよう」
「てめー！　夕霧をどうにかしやがれ！」
怒鳴り声を無視＝再び自分の部屋のベッドに戻り、あらためて考え、そして声がまた聞こえる前に素早く眠った。

午後二時／ミリオポリス第十二区――ビルの群の一つ＝屋上。
がらんとした空間を、陽炎はじっと見つめた。〝射手〟がいた犯行現場――本部の捜査データでは約七十二時間前、〝射手〟はここから四百メートルほど離れた病院の人質を牽制／MPB隊員を射殺／自分を撃った。確かにおおむね太陽を背にし、身を隠しやすく、病院を狙いやすい。だがそれだけ。この〝射手〟は凡庸で凄味がなく、それゆえ彼女は困惑した。なぜこいつの弾が当たった？　なぜこいつを事前に発見できなかった？
「ふーん」ガムを膨らませる／ゆっくりと辺りを歩く／立ち止まる／首を傾げる。
コンコン――ふいにノックの音。大きな男が開きっぱなしの屋上のドアにもたれていた。
「意外に働き者なんだな」口の端を少しだけ上げる笑い方――ミハエル中隊長。
陽炎は無言――咄嗟に反応できず／膨らませたガムが、プシンと変な音を立てて萎んだ。
「いつもとずいぶん違うな。どこの坊やかと思ったぞ」ミハエルの笑み。
途端に気恥ずかしさが彼女を襲う――スニーカー／だぶだぶのトレーナーの上下／上着のポケットに両手を突っ込み／前後逆にかぶった野球帽に長い髪を押し込んでまとめた、飾りっ気も何もない、これからサッカーか野球でもしに行く少年のような姿――
「非番時の服装規定に抵触していないはずですが？」気を取り直してガムを膨らませる／プスン、という感じで途中で弾ける／苛つく／包みに入れてポケットに突っ込む。
「俺はまた、そいつが規定なのかと思ったよ」ミハエル――屋上の一角へ。「ここだ」
「ここ？」新しい包みを開いてガムを口に放り込む／狙いを外す／頬に当たる／床に落ちる――なにやってんだ――得体の知れない恥ずかしさでその場に座りこみたくなる。
ミハエルは知らん顔で歩み寄ると、落ちたガムを拾い、ひょいと口の中に放り込んで、先ほど示した一角を指さした。「あそこに、敵の照準器が放置されていた。プログラムに従って標的を追尾し、情報を無線でライフルのデジタルスコープに送り込む優れものだ」
「落ちたものですよ？」陽炎――真顔。
「だからなんだ？」ミハエル――ガムを噛みつつ別の一角を指さす。「あっちの手すりには登山用ロープだ。下は人通りの少ない路地裏で、逃走用の車が用意されていたと推測されている。ビルを降りる際、追ってきた警官と鉢合わせするのを避けるためだそうだ」
陽炎は、また新しい包みを取り出し、ゆっくりと丁寧に口の中に入れた。顔を上げるとミハエルと目が合った。問うような視線――思わず目をそらした。
「敵は脱出を第一に考えていた？」
「早とちりな捜査員や、楽観主義のお

隊員の期待に応えてやるんだな、スナイパー（シャルフシュッツ）。

弐

MPB本部ビル二十二階——大会議室に集合した各隊の狙撃手たち＝総勢三十二名。

「——先の現場で支援テロを行った〝射手〟の狙撃地点が判明したが、依然として正体はつかめていない。MPBの管轄外でも同種の犯行が認められることから、この〝射手〟は複数のグループに雇われた傭兵的な人物である可能性が高い」

副長フランツ・利根・エアハルト——長身痩軀／エリート風の銀縁眼鏡／隊内随一の知恵者／二重三重の搦め手を得意とする通称〝蜘蛛の巣フランツ〟の解説。

「また射殺された医師たちはいずれも政府高官のお抱えばかりだ。そもそもの占拠事件が宗教的かつ政治的な声明を伴うものであったことから、〝射手〟は極めて危険な反政府的人物とみなされ、〈憲法擁護テロ対策局〉が直接その対応に乗り出すことが決定した」

副長が視線を横へ——そこに、どっしり座った大隊長オーギュスト・天龍・コールの姿＝巌のような体軀／銃口より雄弁で容赦ない眼差し／会議中も事件中も滅多に声を発さぬ男——通称〝**沈黙のオーギュスト**〟が、ほんの僅かに顎を下げてうなずき返す。

「この件についてBVT局長から、MPBに直接お話がある」副長が檀上で受話器を取る＝MPBの上部組織への直通電話。「……は、局長。準備が整いました」

副長の背後——壁一面の大モニターが点灯／痩顔の男の顔が映し出される／黒ずくめのスーツ／黒眼鏡の奥で光る神経過敏気味の目つき／静かで凶暴な黒いカマキリを連想。

この男に比べたら、まだ副長の方が話の分かる人間に見えるな——陽炎の所感＝蜘蛛とカマキリってどっちが強いのかな、というか両方とも罠を張って待ってるだけだから戦いにならないか、などと頭の中で想像。

男の手に受話器＝テレビ電話——きびきびとした右翼的演説口調＝声。「BVT局長エゴン・ポリだ。このたび我が局が管轄する〈特殊憲兵部隊〉および〈第二作戦部隊〉から、選りすぐりの狙撃手を集め、くだんの〝射手〟を駆り出す作戦が立案された」

〝**馬鹿言え**〟——内心での彼女の批判を、陽炎が冷静に顔に出さないようにする。

「ついては諸君らからも参加者を募りたい。愚劣な犯行を繰り返す犯罪者に対し、この都市の治安を守る者の優秀さを断固たる一撃をもって知らしめる気概のある者は、今この場で意思を表明するもよし、のちほどその意思を大隊長に示すもよしだ。むろん不参加の意志を表明する者もいるだろうが、この都市の法執行者たる諸君らにおいては、そのような臆病で卑怯な姿を同僚の前にさらすことをよしとする者はいないと思う」

〝**話長いなぁ**〟——彼女の雑感につられ、思わず挙手。すぐに黒カマキリがうなずく。「見たまえ、早速の志願者だ。他に——」

「辞退します」淡々と相手を遮る彼女の声。

「……なに？」局長——険を帯びる顔の中で目だけがぎらぎら光っている。

ちらりと檀上を見る——副長・大隊長は微動だにせず無表情／最前列に座ったミハエル中隊長が小さく肩をすくめ、他の狙撃手たちも白けた様子でいる。

「言い換えるならこうだ。

みな彼女と同じく、狙撃手VS狙撃手などという馬鹿げた発想は政治家の自己満足か市民への無意味な娯楽提供に過ぎず、必要なのは敵の潜伏場所を突き止め、相手にライフルを持つ隙を与えず包囲することだと考えているのだ。

また彼女と違う点は、それを大っぴらに表明して治安機構の権力者に睨まれる馬鹿な真似はしないということだ。

途端に色々と面倒くさくなって、ぷーと風船ガムを膨らませると、局長の顔が凶悪なまでに引きつるのも構わず、パチンと弾けさせて言った。「死にたくないので辞退します」

「なら、なぜそこにいる？」局長——激怒から、むしろ穏やかささえ帯びた声。

陽炎の起立／ぴしっと敬礼／ガムを膨らませつつ回れ右——会議室を去った。

〝**克服あれ**〟

心のどこか六千万光年ほど奥でこだまする声が、はっきり聞こえた。陽炎ははばちっと目を開き、薄暗がりの中、散らかし放題に散らかしまくって床も見えない自分の部屋を見た。

久々に来た——と思った。忘れたはずのものが甦ろうとしている。声はまさに悪夢の前兆だ。理由は？　〝射手〟のせい？　弾丸を食らったから？　それより前から声は聞こえていた——苛つきの理由／それがミハエル中隊長との間抜けな勝負や、意味深な呟きや、馬鹿げた狙撃合戦の話で刺激されたのだ。

これは困った。陽炎はベッドに座り／冷静に思案／時刻がまだ午前0時前なのを確認／枕を片手に部屋を出て、隣のドアをノック——返事も待たずに

《各狙撃手に分配される弾丸を識別するための、個人標だ。担当者に言えば自分の好きな文字や模様を入れてくれる》涼月の手から弾丸を取り、さっと弾倉に収める。
《あと十発だな?》
《つか、それ、なんて意味だ?》
《なにが?》素早く残りの弾丸を次々に収めて涼月の目に見えないようにする。
《弾の字だよ。……それって字か?》
《さあな》ぷいと標的の方を向く。
《んだよ教えろよ、気になんだろー》
《うふふー、夕霧には分かりますよー》
《本当かよ。また適当じゃねーの?》
《夕霧は知ってるからね》ぼそり＝陽炎。
《もー、涼月のひねくれさん。そんなんじゃ夕霧に勝てませんよ?》誇らしげ＝夕霧。
《んだよ、てめーら。そーいうのよくねーぞ》疎外感＝涼月。
そこへ野太い男の声。《まだやるのか?》
三人が揃って、ライフルと弾丸のケースを抱えた男を振り返る。
《こんにちは♪ **ミハエル中隊長**さん♪》夕霧の天真爛漫な挨拶――男がほんの少しだけ唇の端を上げて優しい微笑を返す。
MPB〈怒濤〉中隊隊長ミハエル・宮仕・カリウス――壮年／長身／丸太を削ったような逞しい体／フランス人とオーストリア人のハーフ／短く刈った金髪／ひどく静かな茶色の目――左眉に走る傷跡。優秀な射手というより、自身が標的にされながらも生き抜いてきた、タフで俊敏な大角鹿の風情。
《おつかれさんだな、小隊全員で狙撃手のペナルティに付き合ってやるとは》ぽんと夕霧の肩を叩き、陽炎のいるブースに自分のライフルと弾丸を置く。
《ミハエル中隊長にまで訓練命令?》涼月――ミハエルの弾丸を覗き込みながら。
《いいや。若い連中に引き金と弾の関係ってやつを見せてやろうと思ってな。で、ノルマを終えたやつがいたんで来てみたら、そいつはまだ撃つ気まんまんだったってわけだ》
《毛頭ありません》陽炎――淡々と／ライフルから弾丸を抜き、場を譲る。
《一発ずつ交代で当てるたびに、五十ヤードずつ遠ざけていく。外した方が飯を奢る。これで撃つ気になったか?》
《毛頭――》陽炎を遮る涼月／夕霧。
《それってあたしらも?》《夕霧はー、日本食のテンプラが食べてみたいと思いまーす》
《よし。良いだろう。俺はお前ら三人分は食うからな》ミハエルが陽炎を見る。《隊員の期待に応えてやるんだな、スナイパー》
《私の訓練規定ではヤードではなくメートル測定です》陽炎――相手のライフルを一瞥。《そのスコープは規定外のものでは?》
《測定はお前さんに合わせる。それとデジタル表示の測定器は必要ない。俺には弾を的に当てる技術があるからな。どこを撃てば良いか教えてくれる技術なしじゃ、的も分からん素人じゃないってことだ》
陽炎――パチンとガムを弾かせて。
《どちらが先に?》
《俺からやろう。小隊長、俺の弾をくれ》
《うーっす》涼月が箱から弾丸を一つ取り出す――ケースレス弾／紅い文字＝『中』。
《なんすか、この文字?》《変な形の十字架みたーい♪》涼月と夕霧――ミハエルが弾丸を受け取る。《昔、日本人の戦友に教えてもらったまじないでな。〝中〟と読む》
ミハエルが弾丸を薬室に送り込み／構え／狙う――その動作があまりに滑らかで素早く、危険な緊張に満ちていたせいで、涼月と夕霧が黙り／陽炎が目をみはった。
静止――彫像と化したミハエルの指が、ゆっくりといつの間にか引き金を引いた。銃口が跳ね上がり、弾丸が標的を穿ち、モニターが六百メートル先のXを告げた。
《すごーい♪》無邪気に感心する夕霧――眉をひそめる涼月。《あー……負けたときは誰が払うんだっけ?》
《心配するな。私が払う》陽炎――弾倉をライフルに叩き込み、前へ。
《熱くなったか?》ミハエル――モニター操作＝標的の距離を五十メートル先へ移動。
《別に――》〝やっつけろ〟＝彼女の躍起になる気持ちを冷静に見つめ、陽炎がライフルを構えたとき――にわかに声が響いた。
《全狙撃員へ告ぐ。訓練を中止し、装備を担当者に預け、大隊会議室に集合せよ。繰り返す――》屋内放送＝副長による招集の声――完全無視＝陽炎が引き金を絞る。
その一瞬前――ミハエルが何か呟いた。
撃った。
六百五十メートル先の架空の標的を弾丸が穿ち、モニターがXを表示――せず。弾丸は、標的の中央から十センチほどずれた場所に着弾していた。
ぽかんとなる涼月と夕霧――外した的を見つめる陽炎に、ミハエルが言った。
《集合に遅れるな》
ライフルと弾丸の束を抱えて去るミハエルの背を、陽炎は、ちょっと呆然となって見つめた。聞き間違いだろうか? いや、確かにあの男は彼女に向かって言ったのだ。彼女が引き金を引く瞬間を正確に読んだ上で。
〝**克服あれ**〟――と。

黒犬(シュヴァルツ)・紅犬(ロッター)・白犬(ヴァイス)――！〈猋(ケルベルス)〉、全頭出撃(アル・シュトゥルム)！

が見えなくなる馬鹿同士の殴り合いなどというものには全く興味のわかない陽炎の精密無比な狙撃――壁を貫通した弾丸が改造サイボーグの腹部に命中／はらわたがクラッカーの紙吹雪なみに舞い飛んだ。

《あたしの獲物だぞ!!》涼月の怒声。

《それはすまなかった》淡々とスコープを移動――病院入り口／ロビー＝MPB〈怒濤〉中隊による激しい銃撃戦／ふいに敵の背後＝緊急外来入り口から銀色の輝きが飛来／血風／歌声。

《ティーンクル・ティンクル・テロリズムー♪　ハウ・アイ・ワンダー・スライスチーズッ♪》

白銀の特甲少女＝指先から放射される幅二ミクロンのワイヤー×10が乱舞――白犬こと《悪ふざけの夕霧》が、歌って踊れる殺人ミキサーと化して遊撃／武装犯たちの五体が切断されて宙を舞う。その歌を聞きつつ陽炎は二階から降りてきた数人の敵をまばたきする間もかけず狙撃――さらに隣のビルに跳び渡り／構え／狙い定め／人質を移動させようとしていたターゲットを次々に撃ち倒す。

ロビーを制圧した〈怒濤〉中隊／複数の入り口から侵入した複数の突入小隊／人質が助け出され、屋外へ。事態は収束に向かうと思われたそのとき。

銃声――晴れた青空に高らかに響く。

激しい悲鳴――解放されて外へ出た人質たちが、一人また一人と撃ち倒されてゆく

副長の憤激。《敵性の狙撃手が人質を撃った！　人質を屋内へ戻せ！　各狙撃員は、敵の位置を割り出し、即射殺しろ！》

《お前か、陽炎？》ロビーに向かう涼月。

《馬鹿》冷ややかに返答／脳裏に飛来した弾丸の弾道情報を画像化／周囲のビル群から敵を探す――刹那、それが見えた。

念のため発していた暗視用探査――本来なら暗闇での視覚補助装置に過ぎないそれは、万一、敵性の狙撃手がレーザー照準器を自分に当てていたときに効果を発揮し、死の宣告である射手の視線を事前に警告してくれる。

そして今まさに、青空という名の虚無の果てから突如として発射されたかのような、おぼろな黄色い光が一条、陽炎の胸元へ伸びて、明確な紅い光点を結んでいた。

そんなときでも陽炎は冷静そのものの態度で、さっと身を投げ出し、紅い光点を避け、逆に自分の宣告がどんなものであるかを相手に教えるべく狙い定めたとき――

衝撃が到来した。

右肩に一発――巨大なライフルと一体化した腕の付け根／機甲に亀裂／自動的に痛覚が無に／鎖骨がねじれるような感覚を味わいながらも、全身体能力を駆使して投げ出した身を前転させ、素早く跳躍／生と死を分かつ一瞬に勝利すべく、遮蔽物である給水塔の陰に飛び込んだ。その寸前――背をかすめるようにして弾丸が飛来＝屋上に弾痕を刻んだ。

再び驚愕＝**違う角度**から来た⁉

陽炎は損傷した肩口に特定して〈再転送〉を要請――エメラルド色の輝きとともに一瞬で新品に取り替えられた後も、じっと動かず、敵の視線＝光線を再びとらえようと試みつつ、考えた。

なぜ当たった？　敵の光点は外したはず／敵が一瞬で照準器をオフにして狙いを切り替え移動した？

それとも――

光線は現れず／敵の狙撃は人質五名を射殺したのみで停止／突撃命令から四分強――やがて陽炎は給水塔の陰から出て、辺りを見回し、見えざる敵が去ったことを察した。

MPB本部ビル地下一階／射撃訓練場――全狙撃手に対する副長からの〝**訓練命令**〟＝ペナルティー。

人質の死／敵狙撃手を予測できず／発見できず／射殺できず――それらの失態を、非番だった者の胸にまで刻ませるという大きなお世話に、副長の画像を的にインプットしたりする狙撃手たちでごった返す中、陽炎は平静に淡々と実弾射撃をこなしている。

《当たりましたぁーっ♪　夕霧の勝ちいーっ♪》《あ、もう、くっそー》歓声／うめき――鼓膜を守るためのヘッドホンをつけた涼月と夕霧の無線通信＝射撃中の陽炎のすぐ後ろで晩御飯のデザートを賭けて対決中。

《ほら、次いけ次》せかす涼月。

《今ので終わりだ》陽炎――ぷーとガムを膨らませて仕切り版の電子パネルを指さす。

Xの表示×百――距離は全て六百メートル。実際に地下室にそれだけの距離があるわけではなく、標的は百メートル先にあり、遠近感は立体映像によって模造されている。的への着弾からコンピュータが自動計算して、標的へのXを算出する仕組みだ。

《小隊長の命令だっつの。あと十発――》涼月が陽炎のボックスに手を伸ばして弾丸を取り出し、ふとそれに見入った。全てケースレス弾＝火薬を固めて弾頭を覆い、薬莢の代わりにしたものだ。その火薬の色味の差を利用し、何かの文字が浮かび上がっていた

『SS』

緑の火薬に紅い字／涼月が弾丸をつまんでみせる。《なんだこの文字？》

全頭出撃！》副長の緊急通信＝予備動作無しの迅速反応——涼月が非常階段の鉄柵を蹴って宙へ／夕霧が装甲車から跳んでビルの壁を蹴り、噴き上がる炎よりも遥か高みへ。

　陽炎は支援要請に従い、ライフルを抱えて屋上から跳躍／宙へ／七メートル先のビルの屋上へ向かって雄大な弧を描きながら要請。

「転送を開封」

　陽炎の手足＝《特殊転送式強襲機甲義肢》＝通称《特甲》が機能を発揮／遠吠えにも似た音を発し、エメラルドの幾何学的な輝きに包まれる／ライフルや服ごと粒子状に分解＝置換＝強力な武器・弾薬・強化義体に。

　長く優雅な指・腕・脚が、紅いシャープなフォルムの機甲に変貌／各急所をカバー／右肩から、腕と一体化した巨大な超伝導式ライフルが出現——一瞬で起動。

　優雅に着地——ガムを膨らませながら、当該病棟を振り返る。膨大な情報が脳の視覚野へ／複数の通信班の車両による三点式位置探査・超音波・各線探査情報——両手足に高度な震動式探知機・ライフルのレーザー照準器をオンに／スコープがとらえたものが脳の視覚野に飛び込んでくる／視界中央に具現＝まるで別次元への窓が開いたかのように数百メートル先の建物の壁の内側さえ透視。

　パチン／ガムが弾ける／準備完了＝一秒余／紅い鋼鉄の四肢を持つ少女が膝立ちの姿勢でライフルの安全装置に解除を命じ、銃身が熱を帯びるまでのさらに一秒かそこらの間に、その日最初のターゲットをとらえた。

　病棟の通路を、ロケット弾を抱えて走る三十代くらいの白人の男——遮蔽物の角度が瞬時に計算され／鼓動が鎮静し／瞑想的ともいえる射撃体勢において／殺すとか打ち倒すといった考えは全くないまま／ただ精確に静かに、刃物のような虚無感と、聖母のような優しい指使いのイメージで、自分の手と一体化した引き金に撃鉄との連結の解除を命じた。

　特大のケースレス弾が超音速で発射され、窓ガラス＝カーテン＝廊下に飾られた風景画＝コンクリートの壁＝ロケット弾を構える男の頭蓋骨と脳を一瞬で吹き飛ばす。

　必中必殺——紅犬こと通称《魔弾の射手の陽炎》の本領発揮によって濛々たる血の霧が立ちこめ、後から来た仲間が茫然自失の顔で立ちすくんだところへ第二弾を放った。複数の探査情報によって浮かび上がる姿——まだ若く熱意を秘め、自動小銃を抱えた青年の首に命中。頭部が離れてどことも知れぬ場所へ転がり、失われたものへ慌てて手を差し伸べるような仕草をしながら胴体がくずおれる前に、陽炎は素早く銃口を移動させた。

　南面・最上階——漆黒の特甲少女＝両手足に超震動型雷撃器を内蔵した黒犬こと通称《対甲鉄拳の涼月》が、通路を見張っていた複数の武装犯を瞬殺——拳が触れた瞬間に防弾プロテクターごと相手を粉砕＝そのまま壁を破壊してナースセンターへ突撃敢行。

　あまりに見え透いた目標＝先ほど屋上で声明をぶち上げていた改造サイボーグに向かって突進——ミリオポリス憲兵大隊〈焱〉遊撃小隊の小隊長の悪癖＝目立つ敵にはすぐに突っかかる部類の一騎打ち好き。

　言い換えればこうだ。

　馬鹿。

　改造サイボーグのパンチをかわした涼月の右フック——相手は反対側の壁に叩きつけられるも、すぐに起き上がって果敢に前進。頭に血が昇ると周囲

至急、私の飛び降り自殺許可を請う。

たちまち飛んでくる罵詈雑言を無視——照準器をオフに／スコープを移動＝五十メートルほど右手の地上——待機中の装甲車の上で、浮き浮きステップを踏む少女を視認。

白金の髪／澄み切った青い瞳／広報部支給の白いワンピにソールシューズ／優雅で軽快なマルチーズの風情——その晴れやかな笑顔を、しばしスコープ越しにて観賞。いつも可愛いなあ、歌ってくれないかなあ、と堪能——一方で涼月がガミガミ何か言ってるが無線の音量を最小にしてやり過ごすうち、ふと少女が正確にこちらを向いた。

《なにかキラッと光りましたよ！　もしかしてー、陽炎かなーと夕霧は思います！》

《よく分かったね、夕霧》

《えへへ。あっ、ところで夕霧は思いつきましたよー。名づけて、病院ソングー♪》

《歌っておくれ、夕霧》

《はーい！》右手を挙げて素直に応答。

《あっるーっ日っ♪　病院っにっ、行きまっしったっ♪　入ったら四百ユーロっ♪　包帯巻いて二百ユーロっ♪　検査したら三百ユーロっ♪　でも一番偉いのはお医者様ー、お大事にーの一言でぇ五百ユーロもかかりますー♪》

事件進行中の不謹慎な歌が途中から暗号化フィルターに引っ掛かってノイズの海に——だが陽炎は気にせず最後まで拝聴。

《素敵だね。ちなみに医療費の高騰は貧富の差の拡大で健康保険が破綻したせいだよ》

《陽炎さんは物知りですねー。じゃあ次はお医者様ソングー♪》

突如、病院の方から猛烈な音声が勃発。

「我々はー!!　ここに要求するー!!」

陽炎の即応——素早くスコープを戻す／病院の屋上＝拡声器とメモ用紙を手に哮る男。スキンヘッド／両肩につつい動力装置／全身機械化。制御装置を外し、寝返りを打った拍子に自分の首を切断しかねない腕力を手に入れた改造サイボーグ——またの名を馬鹿。

《おーお、頭の足んなさそーな化け物が何か言ってら》囃すような涼月。

《夕霧が歌ってたのぉー》ぶすっとした夕霧。

「胎児を殺した中絶医師に天誅を！」——男の要求／声明＝避妊と中絶を奨励する反キリスト教的政党は退陣せよ／ローマ法王に中絶否定を明言させろ／拘留中の仲間を釈放せよ。

ふと疑問＝スコープを人質へ——名札を視認＝産婦人科と一緒に、肛門外科や胃腸科の医者がいるのはなぜだろう。

さらに男の声明——ホモセクシャルは認めない／性転換は犯罪／同性愛者を逮捕せよ。

あー、納得。

《アホか、あの禿げサイボーグ。病院を占拠するほどのことかっつの》涼月＝うんざり。

《ローマ法王さんにも会いたいなんて、欲張りな人ですねー》夕霧＝感心。

《実際、避妊も中絶も同性愛も、四十年前までは犯罪だったからな》陽炎＝解説。《ごく最近まで、中絶手術をした医師の狙撃や、病院爆破の犯人がしばしば無罪になった。中絶手術や経口避妊薬に関係する医師へのテロは、ヨーロッパとアメリカでは多数の国民から支持され、胎児の命を救うという大義名分で、多くの命が奪われた》

《ひでーな。今は違うんだろ》

《911のお陰でな。アメリカのツインタワーが破壊されて、テロ全般が悪とみなされ、超保守的な生殖至上主義を標榜する政党崩れのテログループも否定された》

《アッラーもびっくりの展開だぜ》

《子供は大事でもテロはいけませんねー》

《避妊や中絶を宗教へのテロとみなす者がいるんだ。夕霧もそんなものに巻き込まれないよう、自分を大切にしなければいけないよ》

《はーい♪》

《意味分かってんのか、夕霧……》

涼月の声が尻すぼみに——突然のサイレン＝猛スピードで病院に向かう一台の救急車。

《病院が乗っ取られたことも知らねーレスキュー隊って説は？》涼月——低い声。

《ありえない。第十一区内の全救急隊員に通達済みのはずだ》陽炎——スコープ越しに救急車を見る／閉ざされたカーテンの隙間——車両後部に積まれたガソリンタンクの山。

《テロ支援と思われる救急車両が接近！》警戒中の全狙撃手が同種の内容を緊急通信。

封鎖線＝隊員が拡声器で停車命令／装甲車の上の夕霧が振り返る。

《来ましたよー♪》

止まらない救急車＝副長が強制停止を指示／隊員らが発砲——運転席にいた男が射殺される／タイヤが破裂／横転——砕けたフロントガラスをまき散らし、救急車が勢いよく滑り込んでいって装甲パトカーに激突。

爆発——光／火炎の渦／道路両側の樹木と商店が燃え上がり、封鎖線が火に包まれ、装甲車の上にも火の雨が降り注ぎ、夕霧が驚きの顔で炎ダンスを踊った

《黒犬・紅犬・白犬——！　〈続〉、

こぼれ知らずの超硬質ナイフのごとき無表情さで覆われている。
ミリオポリス第十一区のビル群／スコープ越しに見える巨大な総合病院／その窓辺に並ばせられた人質たち／それらの上に広がる青空とて、彼女の灰色の目に映るだけで、心においては何色とも認識されず、ただ精確に精密に精査された輪郭として把握されるばかり。
ときに心の奥の六千万光年ほど彼方から声がしたり、昨夜うっかり最後まで観てしまった深夜の宣伝番組『**超健康／震動式マッスル回転椅子**』の動作説明を回想したり、あるいは慢性的なアドレナリン不足による憂鬱な気怠さが〝**もう死んで良いよお前**〟とささやくことはあれ、その精神はおおむね無我の境地の出入り口付近で横飛び運動を続けている。
それらは全て彼女が生まれながらの優秀な狙撃手たる証し——意志の力を逸脱して別の領域へ達し、そこに居座り続けることが出来る才能の持ち主としての正しい有り様だ。
パチン／弾けたガムを口に戻す——
途端、脳裏にノイズが響いた。
少女の顎骨に移植された無線通信＝本部からの連絡——敵の数がどうたら／人質の身元がなんたら／視聴者の反応／突入を許可する書類の用意——精神集中に入った狙撃手にとってはまさにノイズでしかない。
よく他の狙撃手は我慢できるな、大人だな、と思ったところで副長の声。
《**本部から紅犬へ、本部から紅犬へ。**犯人たちが犯行声明の準備中であることが判明。連中の所属グループの特定に有用であることから突入を遅らせ、声明を待つ》
《紅犬から本部へ。了解》彼女の内心＝〝**うるさい**〟が無線言語化されないよう注意。
《紅犬へ。敵が外に出ても撃つな。黒犬と白犬も現状維持だ》副長の念押し。
《本部へ。了解》〝分かった黙れ〟
《紅犬へ。声明後の状況に留意。屋外に支援者がいる可能性も否定できない》
《本部へ。了解》〝いいから黙れ〟
《紅犬へ。もう一つ。声明後に狙撃位置を変更するかもしれん。迅速に従うように》
《本部へ。了解》〝**ふざけるな**〟＝精神集中を台無しにする下らない通信や移動の示唆に苛つく彼女の心を冷静に察した少女の無線通信。《紅犬より本部へ、紅犬より本部へ》
《どうした紅犬。屋外の支援者か？》
彼女の視線＝スコープ越しに並ぶ人質たち／若いインターンは範疇外／年輩の髭を生やした外科医が好み／パパって呼んだらどんな顔するかなと空想しつつ本部へ通信。
《人質の射殺許可を請う。繰り返す。人質の射殺許可を請う》
みしっ＝副長がマイクを握りしめる。
《本官は、敵制圧時に最大の障害となる彼らを現時点で除去すべきと愚考します》
《……確かに愚考だな、紅犬。貴様の悪ふざけに付き合っている暇はない》
《大変です本部、大変です本部へ》
《**なんだ陽炎!!**》大呼ばわりから少女の本名に＝副長の憤激の兆し。その望ましい結果をさらに完璧なものにすべく返信。
《副長のつれない返答により本官の自殺願望が刺激されました。至急、私の飛び降り自殺許可を請う。繰り返す。至急、私の飛び降り自殺許可を請う》
《別命あるまで警戒待機だ、陽炎!!》
がちゃん＝副長がマイクを叩きつけ通信アウト。
なんだかんだ言って最後まで聞いてくれるんだな、この人——淡々と思う**彼女**／少女＝すなわち紅犬こと**陽炎**は、再び訪れた静寂の中、ぷーとガムを膨らませている。
パチン／暇つぶしにスコープを移動＝三百メートル先のビル——非常階段＝事件進行中の当該病棟へひとっ飛びに辿り着ける位置にて、ショートホープに火をつける少女を視認。
短い黒髪／黒い切れ長の目／広報部支給の黒いミニのワンピにエナメル靴——颯爽と立つ可憐にして凶暴なトイプードルの風情。その足下には踏み消された吸い殻×一箱分。
《十一本目か、**涼月**》
少女／黒犬＝すなわち涼月が、一服しかけた煙を噴き出す／むせる／ぎろっとした目——こちらの位置をつかめぬまま、くわえ煙草で宙に向かって凜としたファックサイン。
《てんめー、せっかく誰も見てねーのに、覗いてんじゃねーっつの》
《ヒマでね。喫煙は緩慢な自殺という言葉を知っているか？》
《知るか。てめーは色ボケた頭ん中で、人質の寸評会でもやってやがれ、タコ》
《怪しい人物を発見》レーザー照準器をオンに——涼月の胸元に紅い光点が生じる／待機中なので引き金はロックされたまま。
涼月——怒り狂うかと思ったら、すぱーっと一服／腕を組む／じとっとした目。《てめー、なんか嫌なことでもあったのか？》
《む……》確かにちょっと苛つき気味かも／なんでだろう／というか、よりにもよって涼月に図星を突かれたことの方がむかつく。
《返事しろっつーの、この馬鹿女》
《大人な発言をするお前は嫌いだ》
《なんだそりゃ》呆れ声。
《ニコチンのせいで胸がないんだ》
《余計なお世話だ風船ガム野郎！ てめーの無駄にでかい胸でも標的にしてやがれー》

STORY

西暦2016年――かつてウィーンと呼ばれ、今はミリオポリスと呼ばれる、人口2500万人の超巨大な国際都市。
犯罪やテロが増加の一途を辿るなか、1ヶ月あたりの平均銃殺者がＡＰ（ロケット燃料）の着火点である648度と同じ648人であることから『ロケットの街』と渾名される一方で、2500万人のうち「たった648人しか銃死してないゆえに、ヨーロッパ一平和」と居直る欺瞞の都市。
そんなミリオポリスでは、多発する凶悪犯罪に対処すべく、また11歳以上の全市民に労働の権利を与えるべく、児童の中から特に才能あるものに《特殊転送式強襲機甲義肢》――通称《特甲》を与え、治安の維持にあたらせている。
選ばれし三人の特甲少女たちが、飼い主たる警察権力MPBと、獲物たる凶悪犯罪者の間で繰り広げる「死に至る悪ふざけ」――それがオイレンシュピーゲルなのだ！

CHARACTERS―MPBに所属する三頭の美少女〈猋〉

夕霧・クニグンデ・モレンツ
〈猋〉隊員。暗号名〈白犬〉、通称〈悪ふざけの夕霧〉。プラチナブロンドに蒼い瞳の14歳。凶悪に悪ふざけ。能天気。歌と踊りで平和を称える殺人ミキサー。サポート役の遊撃手。中距離戦闘型。両手にワイヤーカッターを装備し、高い殺傷力を誇る。

陽炎・サビーネ・クルツリンガー
〈猋〉隊員。暗号名〈紅犬〉、通称〈魔弾の射手の陽炎〉。紅髪灰目の14歳。超モデル体型のナイスバディ。冷淡なニヒリスト。嫌煙家でガム好き。バックアップ役の狙撃手。長距離戦闘型。1500ヤードからの正確無比な狙撃が特徴。

涼月・ディートリッヒ・シュルツ
〈猋〉小隊長。暗号名〈黒犬〉、通称〈対甲鉄拳の涼月〉。黒髪黒目の14歳。ぺったんこの胸。乱暴者。ヘビースモーカーなハードボイルド。リーダー役の突撃手。近接戦闘型。両手足に超振動型雷撃器を内蔵し、最強の雷撃力を誇る。

あの人は言った。
完璧な位置、完璧な姿勢、完璧な視野、完璧なライフルが私を貴族にする――と。
言い換えるならこうだ。
完璧などというどこにも存在しない幻を信じる以外に貴族になるすべがなかった、脆く儚い人間だったと。

壱

〝**克服あれ**〟
唐突な声＝少女の心／どこか六千万光年ほど彼方の奥で響く虚ろなこだま――の一片。
だが**彼女**に反応なし――少女はそれを聞かなかったことにして新しい包みを開き、噛み終えたものをきちんと包みに収め、新しいそれをふっくらとした唇の狭間に押し込み、この上ない規則正しさで噛み始めた。
んぐ、んぐ、んぐ、んぐ、んぐ、んぐ、んぐ、んぐ＝非の打ち所のない八拍子／そして唇の間から、ぷーと膨らむ風船ガム。
長い火のような赤髪／冷たく澄んだ灰色の瞳／冴え冴えとした美貌／十四歳とは思えぬ発達した砂時計型の肢体／その豊満な胸の谷間を目一杯強調する紅いドレス／長い脚を飾る鮮赤のストッキング／深紅のエナメルパンプス／広報部支給の入念で馬鹿げた衣裳／その中でもきわめつけの一品＝伏射姿勢でお尻を突き出すと丸見えになる紅いフリル付きパンティ＋『24st.Bewahren!（二十四時間、警戒待機／能力実証中！）』のプリント。
広報部の意図＝〝少女の意図的に過剰な色香と小悪魔的ボディで、有象無象の撮影屋どもや上空を飛び回るテレビ局のヘリに憲兵隊の勤勉かつ質実剛健な態度をアピール〟
彼女の感想＝〝敵性の狙撃手にとってはロビンフッドのリンゴ並に絶好の標的では？〟
両者の意見を言い換えるならこうだ。
十四歳の機械化児童にして狙撃手などという規格外な存在は、優秀であるにしろ無能ゆえに事件中に殉職するにせよ、市民の同情と共感を招くに十分であり、彼女の死体がテレビで放映されようものなら、そもそも未成年を危険区域に配置したことはさておき、広報部は全力を尽くして犯人の非道さを訴え、憲兵隊員の勇敢さを褒め称えるだろう。
そんな生ける広告塔たる**彼女**は、一十五階建てビルの屋上で狙撃用の携帯マットを敷き／その上でうつ伏せになり、どでかいライフルを完璧な三点支持姿勢で構え／ガムを噛み／膨らませ／噛み終えたガムの包みを綺麗に並べる以外、文字通り微動だにせず／ぴくりとも動かず／凍りついたように身を横たえ／伏せを命じられた真紅のドーベルマンの風情をたたえ／その美貌は刈

「克服あれ――」
機械化された少女たちが治安を守る、欺瞞に満ちた都市ミリオポリス。
右肩と一体化したライルフを持つ！
孤独で美しい狙撃手（スナイパー）が求める福音とは――？
超大型企画「オイレンシュピーゲル」連載第2回

EulenSpiegel
オイレンシュピーゲル

第弐話　Red it be

冲方丁
Tow Ubukata

イラスト
白亜右月
Ugetsu Hakua

あれ？」
賀東「あれじゃなーい！　なにヘタレた目を出してるのー！」
中澤「あいすいません」
賀東「信じてたのに」
中澤「信じるものは皆だまされるですよ。勉強になったね」
賀東「いばるなー！」
中澤「だったら賀東さんも妨害すればよかったじゃん！」
賀東「俺は他にやることあったのー」
谷川「ケンカしない」
賀東「まあ、いいか。まだサイコロで低い目が出る可能性もあるわけだし」
谷川「低い目出たらゴールだから」
中澤「あーあ、賀東さん言霊かけちゃったよ。これで低い目が出たら賀東さんのせいですよ」
賀東「仲間割れしてないで、ここは一緒に祈ろう！」
中澤「う……そっか。そうですね！　6ゾロっすよ！　ここで6ゾロの神様降臨っすよ」
賀東「6ゾロ、6ゾロ」
中澤「6ゾロー（両手をあわせ拝む）」

谷川「では振るね。それ……4と……」
中澤「うお、一個は4？　まずまず高い！」
賀東「もう一個は6で！」
中澤「ろく、ろくー！」
谷川「もう一個は……」
賀東・中澤「ろーく、ろーく、ろーく、ろーく……」
谷川「……2」
賀東「うおおおー、低い目だ！」
中澤「（あらぬほうを指差し）……あれ？　あんなところにオムライスが……（2のサイコロの目をいじろうとする）」
谷川「さすがにそれは引っかからないから」
中澤「ちいっ」
賀東「でも、実際何マス移動なの？」
中澤「ええと、4＋2を10から引くから……お!?　よっしゃ！　1マス足らない！」
賀東「あぶねー」
中澤「なんだ、間に合ってたんだ！」
谷川「みくる」
中澤「ん……」
谷川「みくるの能力で4を1に変えて」
賀東「あ……」
谷川「さっきと同じって言ったでしょ」
賀東「そこまで計算に入れて……」
中澤「や、やばい」
谷川「10－（1＋2）＝7。なんで7マス移動」
賀東「マジで」
谷川「ちなみに〈射撃〉なんて誰ももってない」
中澤「STOPマスにもかからない……」
賀東「ってことは？」
谷川「あっさりゴール！」
中澤「えええええー！」
賀東「やられた……」
谷川「一番決定！」
中澤「のおおおー！」
賀東「全部中澤さんがヘタレたせいだよ」
中澤「賀東さんの言霊のせいでしょ！」
賀東「んなわけあるか！」
谷川「じつりき、じつりき」
中澤「……ち、ちっくしょー！　こうなったら賀東さん！　ビリ決定戦だ！　といってもあと1マスだから移動すれば勝ちだけど」
賀東「仕方ない！　アルの特殊能力でランク＋2したクラマで全力妨害だ！」
中澤「もうビリはやだー！」
賀東「ヘタレには負けない！」
　しかし、賀東氏の妨害のサイコロの目は1。
賀東「今度はヘタレの神様こっちに降臨？」
中澤「よっしゃあー！」
賀東「ま、負けた……」
中澤「じゃあ、移動できるんで、もはや何が出てもゴールですよ」
賀東「うわあああーん」
中澤「……（サイコロ振って）……3？　2マスもあまっちゃった。うぷぷ」
賀東「む、ムカつく……」
中澤「は、初めてだよ。賀東さんの前でゴールしたの。しやあせ」
賀東「ビリなんて、ビリなんて……ちっくしょおおー！」
中澤「さて、谷川さん。優勝おめでとうございます」
谷川「ありがとう。でも、けっこういい勝負だったよね」
中澤「そうっすね」
谷川「これで二連勝なんで、今日は気分よくビールが飲めます」
中澤「だそうです。賀東さん。ごちそうさま」
賀東「なんで俺？」
中澤「ビリだから」
賀東「そんな約束してないってば」
谷川「ごちそうさま」
賀東「ああ、もうビリなんて最低だよ、ほんと」
中澤「気持ちはわかります。経験豊富ですから」
賀東「こんなゲーム、ぜんっぜんつまんない！　みんな、こんなゲーム買うなよー、つまんないぞー！」
中澤「どこのダダッ子ですか」
賀東「もう絶対負けないからなー！」
　この日、賀東氏は宣言通り、編集さんを三人翌日出社不能に追い込む、飲み会の勝者になったそうな。めでたし、めでたし。

さあ、次はキミが「ドラスタ」に挑戦する番だ!

(ルールについての最新情報や、取り扱い店の情報は公式ホームページで公開しているぞ)

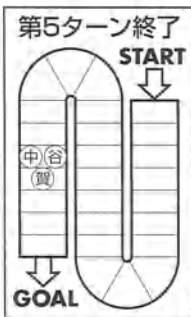
ク0だけど」
賀東「俺も一人しかいないし、妨害してておこうかな。ランク2だけど」

ランク0とランク2、そんな妨害が成功するはずもなく……。

谷川「んじゃあ、サイコロ振るよ」
中澤「はいはい、どうぞ」
谷川「10－サイコロ二個だっけ」
中澤「そうです」
賀東「サイコロが大きすぎてマイナスになったら下がるんだよね」
中澤「マイナス分だけコマが戻ります」
賀東「戻っちゃえ!!」
谷川「振るよ……えい！　よし、一個は3。もう一個は……」
中澤「6－！」
賀東「やた！　合計9だから……1マス？」
中澤「ですね」
谷川「ちょっと待って。その6を1に変えるから」
賀東「ん？」
中澤「なに勝手なこと言っちゃってるんですか」
谷川「みくる」
中澤「はい？　自分がみくるのようにかわいいと言いたいんですか？」
賀東「言ってないでしょ」
谷川「みくるの特殊能力で、この移動方法を使ったときにサイコロの目を一個、1に変えられる」
中澤「マジっすか!?」

谷川「うん」
賀東「ってことは……」
中澤「10－（3＋1）＝6。だから6マス進んじゃいますね……ここにきて、SOS団が本領を出してきた……」
賀東「ちょっと待った」
中澤「お！　止められますか」
賀東「いや、6マス進むのはいい。そのときにイベント・カードを使う《ウィスパード》の呼び声》」
中澤「何する気？」
賀東「誰かが普通の移動以外の効果でマスを進んだ場合、その半分自分も進める」
中澤「ええー！」
賀東「というわけで、俺も3マス進む」
中澤「二人してズルいー！」
賀東「（無視して）……にい、さん」
谷川「（無視して）……しい、ごお、ろく」
賀東「ほんとに団子になったなあ」
谷川「でも、次のターンが……」
賀東「むーん」

このターンはこれで終了。

第5ターン終了
START
中 谷
賀
GOAL

しかし、第6ターン。賀東、谷川両氏は、山札がなくなってしまったのでお休み。中澤の一人旅となる。

第六ターンキャラクター配置
賀東：《相良宗介》《千鳥かなめ》《ナミ》《ヤン・ジュンギュ》《アル》《テレサ・テスタロッサ》
谷川：《巫女ハルヒ》《キョン》《制服のみくる》
中澤：《かっこう》《土師千莉》《ミユマ》《ラッタ》

中澤は二回移動可能なように配置し、万全の態勢。一回目の移動は3。残り2マス。
そして二回目の移動。出た目は……。

中澤「5！　よっしゃ、ゴールだあー！」
賀東「あああああー……奇跡の1を期待したのに……」
中澤「初めて、初めてリプレイシリーズで勝ったよー！」
賀東「あーあ……」
谷川「えっと、ここにSTOPって書いてあるんだけど……」
中澤「ん？」
賀東「おお!!」
谷川「このゴール1マス手前のちょうどここに」
中澤「……ホントだ……」
賀東「ええと、［射撃］を持っているキャラがいたらここでストップ……だって！　射撃、射撃（カードを覗き込む）」
中澤「そんなのいない……ハズ……かっこおおー！　お前はなんで余計なものを持ってるー!!」

賀東「お！　ってことは!?」
谷川「ゴール1マス前でストップ？」
中澤「……うん……」
賀東「あっぶねえー」
中澤「しかも、もうキャラ残ってない……。このターン終わり……」
賀東「よっしゃ、残った！　次のターン勝負だ！」

第七ターン。休みだった二人は捨て札をすべて山札に戻し、全員手札を六枚に。続いてキャラの配置となるが。

中澤「あれ？　谷川さんはキャラクター乗せないの？　三人しか乗ってないのに……」
谷川「これでいい」
中澤「そうなの？」
賀東「いいならいいんじゃない？」

かくして第六ターン配置は次の通り。

賀東：《相良宗介》《ナミ》《ヤン・ジュンギュ》《アル》《クラマ》
谷川：《巫女ハルヒ》《キョン》《制服のみくる》
中澤：《かっこう》《セロ》《ミユマ》《ラッタ》

そして、運命のイニシアティブは……。

中澤「手札全部使う！　合計29！」
賀東「ダメだ！　届かない」

中澤「ハルヒ監督ありがとう。引きなおしたおかげで、ランクの高いカードが来たよ」
賀東「いいなあ。うちの監督、あんまり役にたってない」
谷川「うちは合計36」
中澤「ええー！　負けたの!?」
谷川「そのためにキャラを配置せずに全部とっておいたんだから」
賀東「そういうことだったのか！」
中澤「……お茶目なふりして、けっこう計算高い……本性はどっちなんだ」
谷川「さて、うちからでいいかな？」
中澤「仕方ない。どうぞ」
谷川「さて、やることはひとつ。さっきとまったく同じ、キョンとハルヒで必殺移動」
中澤「全力で妨害してやる！　ランク9のかっこうで妨害だ！」
賀東「まかせた！」
中澤「え？　賀東さん妨害は!?」
賀東「中澤さんを信じた！　がんばれ！」
中澤「よ、よし！　まかせておいてよジャイアン！」
谷川「キョンがランク7。ハルヒが3なんで、こっちの合計ランクは10」
中澤「こっちは9だからちょっと負けてる。でもそんなのは気合で！」
賀東「いけー！」
中澤「いくぞ！　でええい！」
賀東「おお！（盛大に転がるサイコロを追いかける）」
中澤「（止まった目を見て）……1……

谷川「いい度胸だ」
中澤「躊躇してでもしょうがない。先にゴールしちゃえば勝ちですから。もう前に進むのみですよ」
賀東「なるほど。一理ある」
中澤「というわけで、大助と亜梨子で移動です。妨害します？」
谷川「いい」
賀東「早く進んでトラップにかかって欲しい」
中澤「ぬぬぬ、いいんですか。今日のボクはサイコロ運がすごくいいですよ。どーんと進んじゃいますよ」
賀東「どうぞ、どうぞ」
中澤「じゃあ、進んじゃいます。えい！……4！　まあまあですね」
賀東「4マスなのはいいとして、さあ、トラップ・カードをめくってもらおうか！」
中澤「嬉しそうですね」
賀東「けっこうね」
中澤「では、めくります。えい！……《最強、ゴブリンスレイヤー！》？」
谷川「踏んだ人は、名前に「ゴ」「ブ」「リ」「ン」のどれかがついたキャラクターを乗り物から落とす」
賀東「どれか一個でもついてたら？」
谷川「そう」
賀東「ひらがなでも？」
谷川「漢字の読みでもダメ」
賀東「んー、効果はわかったけど、すごいのそれ？」
中澤「（自分のカードを確認して）《一之黒亜**リ**子》《在**リ**し日のミカ》《セパタ**ン**》《くす**リ**屋大助》《あ**ン**本詩歌》だいじょうぶなのはラッタだけ？……ひぃいいいいい！」
賀東「うわっ！　そんなすごいの!?」
谷川「うちだとキョンと朝倉しかかからない」
賀東「あ、うちもかなめとヤンだけだ。ついてなかっただけか」
谷川「二人落とされるのでも、十分つらくない？」

コースに潜む罠、トラップ・カード

「どらぼれ!」ウェスタンランド

▲コース・カード

トラップ・カード▲

トラップ・カードはそこを通ったプレイヤーのキャラクターを捨て札にしたり、後ろに戻らせたりと、強力な効果を持つものばかり。コースは一本道なので避けることはできない。誰かが先に通るのを待っていれば抜かれてしまうし、妨害するつもりで突っ込んでも妨害が成功するとは限らない。相手を悩ませ、プレッシャーをかける効果もあるのだ。また、先行されてもさらにその先に仕掛けられるので、相手に引き離されたときにも効果を発揮するぞ。

賀東「そうかも」
中澤「妨害、ぼうがーい！　絶対ぼうがーい！」
賀東「そりゃそうだ」
中澤「残った中で一番ランクが高い詩歌で妨害。ランクは6」
谷川「トラップのランクは5」
中澤「こっちが有利！　勝負だ！」
賀東「負けーろ、負けーろ」
中澤「どっちが？」
賀東「どっちも」
中澤「くそー、応援なんかなくてもボクは勝つ！　いくぞ！　えい！」
谷川「（サイコロを振って）……3。だから合計8か。ちょっと低いかな？」
中澤「1!?」
谷川「お？　1なの？」
中澤「……こんな肝心なときに1……」
賀東「妨害失敗？」
中澤「合計7……失敗です」
賀東「ということは、みんないなくなるの？」
中澤「うん」
賀東「さっきのやつらみんな？」
中澤「五人まとめて」
谷川「まさに一撃必殺。爽快だ」
中澤「ラッタ……ランク0のラッタが一匹だけ残ったところで……」
谷川「中澤さんに引っかかってもらってよかった、よかった」
中澤「全然よくないです……」
賀東「まあ、4マス進めたんだからよかったじゃない」
中澤「…………」

賀東「次、俺の番だね。じゃあ、中澤さんの仇をとってあげよう」
中澤「あんたにとってほしかないけど、ラッタ一匹じゃなんもできないし……よろしくお願いします」
賀東「では、いつもの要領で宗介の能力を使って、谷川さんを……」

攻撃対象に選んだのはトウジと涼子。

トウジと涼子のランクを足しても4しかなかったこともあり、あっさりと宗介が勝利をあげる。

賀東「よし。じゃあ、前回と同じようにナミの能力を使おう」
中澤「一人倒すごとに2マス進むというやつですね」
賀東「そうそれ」
中澤「今回も二人倒したんで、4マス進みます」
谷川「確かに悔しいね、これ」
中澤「でしょ」
賀東「他人のキャラ五人も一気に飛ばした人に言われたくないなあ」
中澤「そうだった」
賀東「4マス進めるよ」
谷川「仕方ない」
賀東「……にい、さん、しい……ん？　なんかマスに書いてあるね……」
中澤「そうですね……ええと……〈体力〉を持たないキャラは、全員……疲労する!?」
谷川「おお！」
賀東「全員疲労!?」

中澤「〈体力〉ない奴だけですけどね」
賀東「ええと……うお、〈体力〉を持ってるの宗介とヤンだけだ」
中澤「宗介はもう攻撃したから疲労してますよね。ってことは……」
賀東「起きてるの、ヤンだけ？」
中澤「そういうことになりますね」
賀東「なんだよ、このターンで休みになるっていうのに、一人じゃ前に進めないでしょ！」
中澤「いや、ボクに怒られても」
賀東「くそー……なんか一番最初にも同じような目にあってない？」
中澤「あってますね」
谷川「そういう日なんだよ。疲労感謝の日」
賀東「何に感謝しろと」

そして決着は？

谷川「次、いいかな」
中澤「どうぞ」
谷川「もうゴール間近だし、必殺移動を使おうか」
中澤「フローティング・マットの特殊移動の方ですね」
谷川「それそれ」
中澤「実行するには〈体力〉〈体力〉が必要です」
谷川「じゃあ、ハルヒとキョンで」
賀東「やっと主人公コンビでの移動だ」
中澤「ラッタが一匹だけ残ってても仕方ないんで、妨害しますよ。ラン

中澤「もー仕方ない。じゃあ、また圭吾の能力を使っておきます」
賀東「そんな卑怯な手には屈しない！　正面から戦って勝つ！」

その気合が好結果を生む。
【虫憑き】コンボによりランクは下回ったものの、賀東氏はサイコロの目で大きく相手を上回り、バトルに勝利。

賀東「正義は勝つ！」
谷川「アメリカ軍のノリだ」
賀東「勝てばいいのだよ、勝てば」
中澤「がっかり（言いながら負けたカードを捨て札に移す）」
賀東「あ、そうそうもう一個忘れてた。ここでナミの能力を使わないと」
中澤「なんですか」
賀東「攻撃で一人倒すごとに2マス進める。今回は二人倒したから合計4マスかな」
谷川「なに？　4マス進むの？」
賀東「そういうこと」
中澤「なんかもう、キャラ落とされるわ、先に進まれるわ踏んだり蹴ったりじゃないですか」
賀東「はっはっは」
中澤「ボクの財布のお金でパーフェクトグレードのストライクルージュ買わされて、目の前で自慢されてる気持ち」
谷川「意味がわからん」
賀東「俺、種系には興味ないから」
谷川「それもわからん」
中澤「とにかくくやしー！」
谷川「なんにしろ能力が乱れ飛んで、目がチカチカするよ」
賀東「目に来るもんなの？」

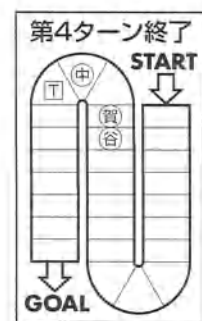
続く谷川氏は移動を選択。しかし、中澤がミカによる妨害に成功。このターン1歩も進むことができずに終わってしまう。
中澤も移動を選択。谷川氏にキャラクターが一人残っており先ほどのお返しをするかと思われたが、最後尾ということで冷静にスルー。しかし、サイコロで出た目は6。さらにマスの効果で1マス進み、合計7マスの移動に。

中澤「ええと、1マス余計に進んで次のコース・カードに突入ですね……（伏せてあったコース・カードをめくる）……お、ミスリル基地だ」
賀東「おお」
中澤「進んだ先のマスの効果も適用されます。ええと……おお！　自分以外の全員の山札をサイコロ一個分減らせますよ」
賀東「なんだそれ」
中澤「振りますね……うおお、また6！」
谷川「また？」
中澤「すごくないっすか、ボクちん」
賀東「厳しいなあ」
中澤「では二人とも山札を六枚ずつ捨て札にしてください」
賀東「うおお、やばい。もうほとんど山札ないよ」
谷川「うちも同じ……」
中澤「ふぉっふぉっふぉ」
賀東「もってあと1ターン……短期決戦しかない！」

決意を固めた賀東氏は迷いなく移動を選択。しかし、谷川氏の妨害を退けたところまではよかったが、意欲に反してサイコロが振るわず出た目は1。

賀東「なにこの中澤さんとの差は。不公平だ！」
中澤「いい子と悪い子の差ですよ」
賀東「意味がわからない」
中澤「さて、全員キャラクターを使用したし、このターン終わりでいいですか？」
谷川「あ、ちょっとまって」
中澤「なんすか？」
谷川「ええと、中澤さんのいるコース・カードにトラップを仕掛けるから」
中澤「マジですか」

ドラスタにはトラップ・カードというものが存在する。このカードは、各コース・カードの真ん中のマスに伏せた状態で置いておくことができる。最初にそのマスを通過した人がそのカードを表に返し、トラップの効果を受けなくてはならない。
現在中澤はコース・カードの一番手前にいるので、目の前のマスにトラップが仕掛けられたことになる。

賀東「トラップかあ。名前からしてやな感じだなぁ」
中澤「ボクの目の前ではありますけど、ボクが引っかかるとは限りませんよ。最初に通過した人ですから」
賀東「谷川さんがひっかかったら笑うね」

トラップを仕掛け終わったところでターン終了。コマの位置は以下のようになった（「T」はトラップ）。

第五ターン。キャラクターの配置は次の通り。

賀東：《相良宗介》《千鳥かなめ》《ナミ》《ヤン・ジュンギュ》《アル》《テレサ・テスタロッサ》
谷川：《巫女ハルヒ》《キョン》《制服のみくる》《朝倉涼子》《鈴原トウジ》
中澤：《一之黒亜梨子》《在りし日のミカ》《セバタン》《薬屋大助》《ラッタ》《杏本詩歌》

イニシアティブはトラップを警戒してか低ランクのカードを出し合うが、ランク3のカードを出した中澤が取った。

トラップ炸裂！

中澤「さて、ボクからですね」
賀東「トラップが目の前にあるけどどうする？」
中澤「いいです。移動しちゃいます」
賀東「お」

相手の行動を妨害せよ！

「ドラスタ」はレースのゲームだ。プレイヤーにとっての第一の目標はもちろん誰よりも早くゴールすること。そのためにはまず「進む」必要がある。そして、それだけでなく、相手の移動やイベント・カードを妨害することが重要だ。妨害をする時は、自分のチームのキャラクターの誰に妨害させるかを決め、そのキャラクターと、妨害する相手のキャラクターやイベント・カードのランクで勝負するのだ。ただし単に数字を比べるのではなく、それぞれダイスを1個振ってランクに足し、合計を比べる。妨害側が大きければ、相手の行動は失敗となるぞ。

妨害！

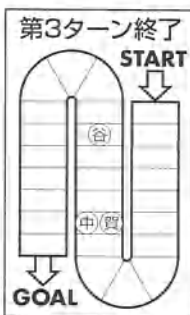
▲次ページ3段目の妨害の図解

さい。どうせ負けですから」
谷川「負けだね」
賀東「ちっくしょー！」
中澤「あ、そうそう、あたらしく出てきたうちの監督《かなめ&テッサ》のおかげで、手札を一枚捨てれば特殊能力を使っちゃったキャラを未行動にできるんで、圭吾を戻しておきますね」
賀東「そんなことまでできるの!?」
中澤「うん」
賀東「ひどーい」
谷川「なんか、いろんなカードの効果が乱れ飛んで、濃い攻防だったなあ」
中澤「宗介の能力に土師家のコンボに、Fカードの能力……確かに濃い」
谷川「まるで流行のカードゲームをやってるみたいだ」
中澤「カードゲームしてるんですってば」

その後、全員一回ずつ移動。谷川：4マス、中澤：3マス、賀東：1マスをそれぞれ移動。

さらにとても危険と判断された圭吾を、谷川が一人残ったカヲルで攻撃。サイコロが走って、見事にこれを撃破。

第二ターンは終了となった。

第三ターン。先行していた中澤を賀東氏がアーバレストの特殊攻撃で狙い撃ち。しかも中澤の移動のサイコロは1。攻撃を成功させた賀東氏は5を出し、一気においつく。攻撃しあって二人が一回移動になった間に、谷川氏が一人だけ二回移動。二回とも4を出し、一気に二人をまくる。

結果、コマの状況は次のようになった。

第3ターン終了
START
谷
中
賀
GOAL

毎回トップが変わるというめまぐるしいレースとなった第四ターン。キャラクターの配置は次の通り。

賀東：《相良宗介》《千鳥かなめ》《ナミ》《ヤン・ジュンギュ》《アル》
谷川：《巫女ハルヒ》《キョン》《制服のみくる》《銀河の有希》《冬月コウゾウ》
中澤：《一之黒亜梨子》《在りし日のミカ》《セパタン》《ラッタ》《土師圭吾》《ミユマ》

イニシアティブは中澤が取り、ターンは開始された。

一進一退の攻防

中澤「では、ボクからいきますよー」
賀東「OK」
中澤「んでは、まずはイベント・カードから。使うのは《土師千莉》です」
谷川「また？」
中澤「全員【虫憑き】になりますよ」
賀東「くそー。わかってたらバルサン持ってきたのに」
中澤「虫憑きとゴキは違うから」
谷川「韻は踏んでるね」
中澤「一緒にしちゃダメ！……それに効いたとしても、自分のとこのキャラもやられちゃいますって」
谷川「ここで焚いたら、キャラどころか我々もやばいでしょ」
賀東「ほんとに焚くんだ」
中澤「本日19：00頃、雑誌『ザ・スニーカー』執筆陣三名が、カードゲームのプレイ中にバルサン中毒で入院。原因は【虫憑き】を追い払うためと供述」
谷川「やばいって（笑）」
中澤「やばいかあ。実に的確な表現ですね」
谷川「いろんな意味でね」
賀東「バルサンなくてよかったのか？」
谷川「そうかも（笑）」

【虫憑き】コンボはこれでおわらず、続いて使われた「一之黒亜梨子」の効果によって、【虫憑き】となった谷川氏のキャラクターが二人、乗り物から落されそうになる。必死に妨害を試みるも、今度は「土師圭吾」の能力でランクを操作され、それが元で妨害も失敗。谷川氏の3キャラクターは叩き落されてしまった。まさに【虫憑き】コンボ恐るべしである。

中澤「これでよし。あ、そうそう、手札一枚捨てて、圭吾を未行動の状態にもどしておきますね」
賀東「そっか、戻せるんだ。ほんとヒドいなあ」
中澤「ふぉっふぉっふぉ……で、賀東さんの番ですよ」
賀東「やっぱり、その圭吾だけはつぶしておかないとまずいよな……」
中澤「んなことないっすよ。ほら、どどっと前に進んどきましょう。谷川さんの移動回数減ったし、二人で追いつくチャンスじゃないですか！」
賀東「それもそうか」
中澤「うんうん」
賀東「もうひどいことしてこないよねー……ちょっとカード確認させてよ」
中澤「どうぞ。うちのキャラたちならいくらでも見てやってください」
賀東「ふーん……このミユマって娘とかけっこうかわいこちゃんだね」
中澤「ドラスタのオリジナルキャラなんですよ。いいイラストでしょ」
賀東「よし、決めた」
中澤「はい」
賀東「宗介でその娘を殴っておこう」
中澤「どうしてそういう流れに!?」
谷川「かわいい子にはビンタをさせろ？」
中澤「旅だから、そこ！」
谷川「ちっちゃいことは気にしない」
中澤「ちっちゃくない。全然違う」
賀東「世界秩序維持のために使うのが軍事力。自国の平和のために圭吾は叩くべし！」
中澤「ミユマは？」
賀東「戦いには犠牲はつきもの！」

谷川：《巫女ハルヒ》《渚カヲル》《制服のみくる》
中澤：《一之黒亜梨子》《みんみん》《土師圭吾》《セパタン》

イニシアティブは中澤が取った。

中澤「さて、ではまずはこれからいきましょうか。イベント・カード《隠れた才能》」
谷川「イベント・カード？」
中澤「手番で一枚だけ使うことができる特別なカードです」
賀東「効果は？」
中澤「手札から、監督のカード（Fカード）をあと二枚まで出すことができます」
賀東「監督増えちゃうんだ」
谷川「船頭多くして船山に登るんじゃない？」
中澤「古代アテネの三頭政治だからだいじょうぶです」
賀東「三頭政治はローマ」
中澤「ちっちゃなことはいいんです！　とにかく監督が増えて、特殊効果がわんさかつくんです」
賀東「手札にないといけないんでしょ。ちゃんと新監督のカード持ってるの？」
中澤「んっふっふ。そこで活用されるのが、うちの現監督《ヒビ・コクマ》の効果です。彼女は、山札の他に五枚サイドカードを用意しておいて、新監督カードはそこから自由に引っ張り出すことができます」
賀東「ズルい！」
中澤「ズルくてもそういう効果なんです。というわけで……（脇にあった五枚のカードを眺めて）……《涼宮ハルヒ》と《かなめ＆テッサ》の二枚をだしましょう」
谷川「あ、うちの監督」
中澤「出張していただきました」
賀東「手札の交換できないの俺だけになっちゃったんだ」
中澤「そういうことです」
賀東「いつも思うんだけど、なんかやり方がこずるい気がするんだよな」
中澤「もっとほめてもよろしくってよ」
谷川「はいはい、えらいねー」
中澤「ほめ言葉が気持ちいいー」
賀東「……ほめてんの、今の？」
中澤「さて、あとは普通に移動しますよ。亜梨子とみんみんで移動しましょう」
賀東「はいどうぞ」
中澤「んでは、サイコロ振りますよ。えい……5！　イイ目きた！」
谷川「さっきのイベント・カードといい、サイコロといい、なんかいいことだらけだなあ」
中澤「（コマを数えながら動かす）……さん、しい、ご。よし、トップ！」
賀東「いまだけ、いまだけ」
中澤「次、賀東さんですよ」
賀東「俺かあ……ここは少しトップの足を止めておこうかな」
中澤「ボクっすか！？」
賀東「他に誰がいるの……ええと。これこれ、宗介の能力を使うかな」
中澤「来ましたね」
賀東「アーバレストは相手を二人攻撃できるっていう特殊攻撃を持っているんだけど、宗介はそれを使うことができる」
谷川「攻撃？」
中澤「攻撃する人とされる人、お互いにサイコロを一個ずつ振ります。『攻撃したキャラのランク＋サイコロの目』と『攻撃されたキャラのランク＋サイコロの目』を比べて、小さい方が負けとなって、乗り物から破棄されてしまいます」
谷川「アーバレストは、その攻撃相手を二人選べるの？」
中澤「そうです」
賀東「というわけで、選ぶのはまだ使ってない二人だな。セパタンと圭吾」
中澤「そうだった。すまして解説してる場合じゃなかった……お、でもセパタンも圭吾もランク4だから二人あわせるとランク8ですよ」
谷川「合計するんだ」
中澤「二人攻撃される場合は。宗介はランク7だから一点勝ってる！」
賀東「ふっふっふ、宗介は特殊能力で攻撃するときランク＋2できるんだよ。よってランク9。こっちが一点勝ってるのだ」
中澤「ぬう」
賀東「さあ、勝負だ！」
中澤「……ちょっと待って。その前にイベント・カード使う」
賀東「また！？」
中澤「まだです。使うのはコレ、《土師千莉》」
谷川「それキャラクターのカードだよ？　イベントじゃない」
中澤「このキャラクターはイベントとして使うことができる特殊能力を持ってるんです」
谷川「そんなのもいるんだ」
中澤「いるんです。この効果で、場に出ている全キャラクターが【虫憑き】になります」
賀東「うちのキャラも全部？」
中澤「そうです」
賀東「で？」
中澤「ムシウタに出演可能になります」
谷川「岩井さんいないのに、勝手に出演？」
賀東「谷川さん、そんな優しくしちゃダメ。無視、無視」
中澤「ムシウタだけに無視」
谷川「…………」
賀東「…………」
中澤「…………」
賀東「自分まで黙らない。話し進まないから」
中澤「そうですね。ええと、この効果は単に【虫憑き】の属性を与えるだけです」
賀東「それだけ？」
中澤「続きがあります。次に《土師圭吾》の特殊能力を使います」
賀東「そりゃなんかあるよな……」
中澤「味方の【虫憑き】キャラは全員ランク＋2されて、ボク以外のとこのキャラはランク－2されます」
賀東「ん？」
中澤「つまり、賀東さんとこの宗介はランク－2されるんで、「7（元の値）＋2（宗介の特殊能力）－2（圭吾の特殊能力）」＝7なので、ランク7になります」
賀東「なるほど」
中澤「んで、ボクの方は「4（圭吾の元の値）＋2（圭吾の特殊能力）＋4（セパタンの元の値）＋2（圭吾の特殊能力）」＝12となります」
賀東「マジ！？」
中澤「土師一族虫憑きコンボ炸裂ですよ！」
谷川「凝ってるだけに強いな」
賀東「……やっぱ攻撃やめたとかナシ？」
中澤「当然ナシ」
賀東「くそー、いいよ振るよ、振ってやるよ！　でかい目が出ればまだ可能性が……（サイコロを振る）……1。がっかり……」
中澤「こっちは振る前から12。そっちは合計しても8。振らなくてもいいっすか」
賀東「いいよ、いいよ！　どうせ負けだよ！」
中澤「じゃあ宗介の負けなんで、捨て札にしてねー」
賀東「負けたけど、うちの監督のおかげで捨て札じゃなくて山札に戻せるぞ」
中澤「どうぞ山札におもどしくだ

……そっか、[知識]はかなめもゲイツも持ってるけど、[体力]は宗介しかないんだ」
中澤「では、宗介と誰かを組み合わせるんですね」
賀東「やっぱりかなめかなあ……主人公とヒロインだし……」
谷川「なるほど。それっぽい」
中澤「初めての共同作業ですね」
中澤「そっちのゲイツでもいいんじゃない？」
賀東「初めての共同作業を？」
谷川「なるほど。モーホーっぽい」
賀東「はいはい、移動するよー。夢を守って宗介とかなめね（言いながら二つのカードを横向きに）」
中澤「サイコロを振ってください。出た目の数だけ移動できます」
賀東「（サイコロを手に取り）振るよー……ほい……6！」
中澤「いきなり6!?」
谷川「やるねえ」
賀東「かなめにしといてよかった」
中澤「出ちゃったものは仕方ないんで、コマを6マス進めてください」
賀東「じゃあ、進めるよー」

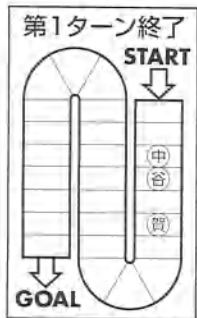
コース・カードは伏せて置かれている。通常のスゴロクと違い、前に行ってみるまで先がどうなっているのかわからないのだ。

賀東「（コース・カードをめくってみて）「どらばれ」ロケットタワー？」
中澤「今回新しく発売されるカードセットのテーマが遊園地なんで。そのアトラクションのひとつです」
賀東「ふーん。とりあえず、6マスね。なんかマスのところに書いてあるな……ええと【キャスト】を持たないキャラクターはすべて疲労？」
中澤「キャラカードは、ランク、能力、属性、特殊能力っていう四つのカテゴリーをもっているんですけど、【キャスト】ってのは属性ですね（カードの属性が書かれているところを指差す）」
賀東「ここか……うん、うちのは誰も持っていないらしい」
中澤「疲労ってのは使用後の状態にしちゃうことを言います。かなめと宗介はすでに疲労してるんで、ゲイツも横に倒しちゃってください」
賀東「そうなの!?」
中澤「こころの底からザマアミロと申し上げたい」
谷川「同感で」
賀東「ガッカリだ……」

最凶！『ムシウタ』コンボ

中澤「続いて谷川さんです」
谷川「こっちも前に進むかな」
中澤「フローティン・グマットの場合、[体力]と[謎]で普通に進む方法のほかに、乗り物特殊行動というので進む方法があるんですが……」
谷川「特殊？」
中澤「[体力]と[体力]を使うんですけど、サイコロを二個振って、出た目の合計を10から引きます。残った分だけ進めます」
谷川「ほう」
中澤「出た目が1ゾロなら10－2なんで、8マス進めます。普通の移動では6が最高値なんですが、それ以上進める可能性があります」
谷川「必殺技？」
中澤「ある意味」
賀東「6ゾロならどうなるの？」
中澤「ああ、もう余計なこと聞くー」
賀東「なにが」
中澤「6ゾロの場合は、10－12なんで－2マス進みます」
賀東「－2マス進む？」
中澤「要するに2マス戻ります」
賀東「戻っちゃうんだ」
谷川「ほう」
中澤「あーあ。谷川さんがやっちゃったときに初めて教えようと思ってたのに、もうわかっちゃった」
賀東「それズルだから」
中澤「ズルじゃない。作戦」
賀東「いやズルだから」
谷川「普通に移動しようかな」
中澤「ほらー」
賀東「関係ないって。でもさあ、リスクはあるにしても、その特殊な方がコンスタントに進めない？」
谷川「いや、普通でいい」
賀東「そう」
谷川「必殺技はとっておく」
中澤「でた、イチゴは最後に食べるタイプの人だよ」
賀東「微妙に違うような……」
中澤「イチゴ最初派のボクとしては相容れない」
谷川「必殺技はここぞという場面で使わないと」
中澤「そこで6ゾロを振ると」
谷川「必殺とは必ず殺すだけではなく、殺されても必殺！」
賀東「それは自爆」
中澤「メガンテが必殺技だとするなら一理ある」
賀東「そうかなあ？」
谷川「いいの。とっとくの」
中澤「はいはい。お好きにどうぞ」
谷川「じゃあ、賀東さんにあやかって、うちも主人公とヒロインの組み合わせでいこう」
賀東「ほう」
谷川「ええと……キョンと綾波レイで」
中澤「ヒロインそっちー!?（笑）」
谷川「うん」
中澤「……谷川さん、前よりお茶目さんになった？」

しかし、ヒロインにハルヒを指名しなかった報いか、サイコロの目は1。
続く中澤も移動を選択。同じくサイコロ目が振るわず1。
賀東氏は未使用のキャラクターがいないので手番をパス。
残り二人は1回ずつ仲良く移動するが、出た目はそれぞれ3と2。合計しても1回移動の賀東氏に及ばないという状態で、第1ターンは終了した。

第1ターン終了
START
中
谷
賀
GOAL

中澤「んでは、第2ターンです。まずは手札が六枚になるように補充してください」
谷川「引いた後、いらないのを入れ替えていいんだよね」
中澤「そうです」
賀東「いいなあ……これいらないんだけどなあ（手札のカードを一枚ぴらぴらする）」
中澤「手札引いたら、キャラクターの配置ですよー」
賀東「でも、三人までしか配置できないんでしょ。もうすでに三人いるんだけど」
中澤「入れ替えはできますから」

現在コマがいるコース・カードによって配置できるキャラクターに制限がかかっている。賀東、谷川両氏のいるロケットタワーはリミットがキャラクター三人。中澤のいる某県立高校はリミットが四人となっている。
結局、三人は次のようにキャラクターを配置した。

第2ターン
賀東：《相良宗介》《千鳥かなめ》《ベルファンガン・クルーゾー》

意した各人のカードを紹介しておこう。

■賀東招二
乗り物：《ARX-7〈アーバレスト〉》
監督：《終わるデイ・バイ・デイ》（相良宗介＆千鳥かなめ）
山札内容：フルメタ＆交響詩篇エウレカセブン連合軍

■谷川流
乗り物：《フローティング・マット》
監督：《涼宮ハルヒ》
山札内容：ハルヒ＆新世紀エヴァンゲリオン連合軍

■中澤光博
乗り物：《フィアット》
監督：《ピピ・コクマ》
山札内容：ムシウタ＆ドラスタオリジナルキャラクター連合軍

中澤「今回のレースは、コース・カードを九枚使います。カード一枚につき3マスなので、合計27マス。最後にゴールのマスがあるので、全部で28マス移動したら終わりになります」
谷川「なるほどね」
賀東「28マスか。先は長いなあ」
中澤「始める前から何を言ってるんですか。ほら、まずは山札から六枚カードを引いて手札にしてください」
谷川「はいはい」
賀東「六枚ね」
中澤「あ、谷川さんは六枚になるように引いたあと、いらないカードがあったら山札に戻して、もう一回手札が六枚になるようにカードを引きなおすことができますよ」
谷川「ほう」
賀東「谷川さんだけ？」
中澤「Fカードのハルヒの効果です」
賀東「Fカードって、監督？」
中澤「そうそう。気に入らない奴は即放り出して、メンバーを集めなおすというのが監督さんの方針で……」
谷川「そういう意味なんだ」
中澤「ハルヒさん、わがままいっぱいですよ」

手札の補充が済んだところで、各人乗り物にキャラクターを配置。

第1ターン
賀東：《相良宗介》《千鳥かなめ》《ゲイツ》
谷川：《巫女ハルヒ》《キョン》《制服のみくる》《キョンの妹》《綾波レイ》
中澤：《一之黒亜梨子》《立花利菜》《みんみん》《セパタン》

中澤「キャラクターの配置が終わったところで、誰から順番に行動するかイニシアティブを決定しましょう。手札にあるカードを一枚選んでください」
賀東「なんでもいいの？」
中澤「はい。カードにはそれぞれランクっていう数字が設定されてるんですけど、それを比べます」
谷川「キャラクターを五枚だしちゃったから、手札が一枚しか残ってないんだけど……」
中澤「あるものを出してください」
賀東「はい、いくよいくよー。カード出すよー。せーの」
谷川「3」
中澤「5」
賀東「8」
中澤「一番大きい人からなんで、賀東さんからですね」
賀東「うっす」
中澤「あとは時計回りなんで、谷川さん、ボクと続きます」
賀東「じゃあ、最初は俺からだけど、どうしようかな……」
中澤「コマを前に進めるのはもちろん、対戦相手のキャラクターを攻撃して乗り物から落としたり、いろいろできますが……」
賀東「なにはともあれ、まずは移動かな。前に進まないと」
谷川「最初にゴールしたら勝ちなんだし、前に進むのが一番大事でしょ」
中澤「了解です。アーバレストが前に進むためには、［知識］を持っているキャラクターと［体力］を持っているキャラクターを一人ずつ使用しなくてはなりません」
賀東「［知識］とかって、キャラカードの四辺に書かれてる、コレのことだよね」
中澤「そうです」
賀東「ええと……（カードを確認

ドラスタ早分かり3ポイント いろいろ複雑に見えるけど、基本はスゴロク。ここに挙げた3つの基本がわかっていればすぐに遊べるようになるハズだ。

①レースの主役、キャラカード

①ランク
このキャラの原作での役割（例えばランクが6か7なら主人公だ）を表す。ゲーム内での、キャラの強さの目安にもなる。

②属性
男性／女性の区別のほか、軍人、宇宙人、吸血鬼などの特殊な設定も表す。

③キャラ名
キャラ名が同じカードは同一人物なので、同時に2枚以上出すことができない。

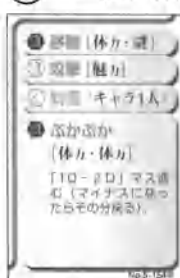
④能力
乗り物で移動や攻撃をするときに使う能力。上下左右の4か所に欄がある。

⑤特種能力
それぞれのカードに特有の能力。便利な効果、攻撃的な効果など、様々なパワーが用意されている。

レースの主役はなんと言ってもキャラカードだ。乗り物に乗せた（つまり、場に出した）キャラカードは乗り物を動かすか、特殊能力を使うことができる。行動したキャラはそのターンが終わるまで疲労して、能力・特殊能力が使えなくなる。キャラは多ければ多いほど有利なのだ。

②レースの舞台もカードで作る！

コースをつくるのがこのコース・カード。カード1枚が、スゴロクのマス3つになる。左右のテキストマスにとまると様々なイベントが発生するぞ。今回はこのカードを9枚使い、全27マスのコースでゴールを目指すのだ。

③ゴール目指して、キャラクターがマシンを動かす！

乗り物カードの、「移動」の欄に書かれた能力を持つキャラを疲労させる（カードを横向きにする）と、サイコロ1個の出目と同じだけ進むことができる。この《フローティング・マット》なら［体力］と［謎］だ。同様に、「攻撃」の欄に書かれた能力を持つキャラを疲労させれば、相手の乗り物のキャラを攻撃して捨て札にできる。

《フローティング・マット》の性能

一年ぶりのごぶさたでした。TCG『ドラゴン☆オールスターズ』が再び本誌に出張登場です！　気分的には「ただいま」ですよ。んで誰も言ってくれないだろうから、自分で自分に「おかえり」ですよ。

今回およばれされたのは、もちろんレースの模様を「誌上リプレイ」の形でお伝えするため。それも、アニメ『涼宮ハルヒの憂鬱』の大ヒットを記念しておこなわれた、世紀の大レースですよ、お客さん！

ええと、一人でいきまいてハァハァしててもしょうがないので、さっそく出走者を紹介しましょう。

まずはレースタイトルからもわかる通りの『涼宮ハルヒ』シリーズの著者、谷川流先生！

続いて『フルメタル・パニック！』著者の賀東招二先生！

そしてドラスタ制作者であるボクちんこと中澤光博の三名。

最後の一人はおいとくとして、スニーカー文庫のエース対ファンタジア文庫の四番打者の対決ですよ！フェニックス対ドラゴンの勝負ですよ！　ヒョードルとボブ・サップが相撲で対決な感じの無差別級異種格闘技戦の勢いですよ！　ボクとしては、参戦した以上は本業で醜態さらせない曙の気持ちがたっぷりですよ……。

なにはともあれ、やたらと広い会議室で三人だけでポツンと遊んだとは思えない、となりの会議室さんごめんなさいぐらいの大声はりあげた大熱戦の模様をお伝えしましょう！

はたして勝者は‼

中澤「お久しぶりでーす」
賀東「おつかれっす」
谷川「こんにちはー」
中澤「今日はドラスタ記念レースのために集まっていただいて、ほんとにありがとうございます」
賀東「あ、悪いんだけどさあ、なにぶんにも久しぶりだから……」
中澤「大丈夫ですよ、ちゃんとレクチャーしますから」
賀東「さすが、ちゃんとわかってる」
中澤「じゃあ、説明しますからそっちとそっちに座って……」

時計回りに賀東→谷川→中澤の順に座る。

中澤「ドラスタはレースのゲームで……っていうかまあスゴロクで、サイコロを振って出た目の数だけコマを進めます。んで、一番最初にゴールしたら勝ち」
谷川「そのぐらいは覚えてるから」
中澤「でもほら、二人が想像以上におバカちゃんかもしれないし」
谷川「なるほど」
中澤「……納得された……ま、いいや。じゃあもう少し細かいルールを説明しますね」
賀東「あ、もういいよ」
中澤「え？」
賀東「だいたい思い出したからもうルールの説明はいいや」
中澤「賀東さんはよくても谷川さんが……」
谷川「いいよ」
中澤「いいのー!?　いや、しなくていいならしませんが」
谷川「やっぱりお願いしようか」
中澤「じゃあ説明しますね」
賀東「えー、いいよ。めんどくさいよ」
谷川「そうだね」
中澤「もう、どっち!?」
谷川「わからないところが出てきたら、そのときに教えてもらえばいいや」
賀東「そうそう」
中澤「んがー！　どいつもこいつもワガママばっかりー！　負けない！こんな人たちには絶対負けない！」
賀東「ほら、さっさと始めよう」
谷川「そうそう」
中澤「……まるでこっちがダダッ子のような扱い……」
賀東「はい、始めるよー。よろしくお願いしマース」
谷川「よろしくお願いしまーす」
中澤「……お願いします」

レース　スタート！

ドラスタでは、それぞれ山札とは別に、乗り物（乗り物カードというのがあります）とチームの監督（Fカードと呼ばれてます）を用意することになっている。ここで編集部が川

豪華プレイヤー陣&選手陣（第1ターン）をチェック！

谷川チーム　プレイヤー 谷川流

前回（05年8月号掲載）優勝者。今日もSOS団の面々を引きつれて登場。お茶目なのかクールなのか一見しただけではわからない言動の裏に、深い戦術を秘めている。チーム監督のハルヒは、手札を引きなおせるという強力なカードだ。

Fカード《涼宮ハルヒ》

乗り物《フローティング・マット》

キャラ

《巫女ハルヒ》《キョンの妹》《キョン》《制服のみくる》《綾波レイ》

賀東チーム　プレイヤー 賀東招二

富士見ファンタジア文庫の人気作品『フルメタル・パニック！』の作者が登場人物たちを率いて参戦。積極的なプレイスタイルにあわせ、デックは攻撃型。攻撃力に優れた乗り物〈アーバレスト〉に主人公の宗介が乗れば、その戦力は倍増する。

Fカード《終わるデイ・バイ・デイ》　乗り物《ARX-7〈アーバレスト〉》

キャラ

《相良宗介》《ゲイツ》

《千鳥かなめ》

中澤チーム　プレイヤー 中澤光博

「ドラスタ」のゲームシステムをデザイン。これまでのリプレイでは全敗し、連続ビリッケツ記録を更新中。今回は強力な「虫憑きコンボ」を備えた『ムシウタ』メインのデックで登場。果たして、念願の連続最下位脱出はなるのだろうか？

Fカード《ヒビ・コクマ》

乗り物《フィアット》

キャラ

《一之瀬亜梨子》

《みんみん》

《立花利菜》《セパタン》

ハルヒ vs ムシウタ vs フルメタ
主人公たちが、
原作者&ゲームデザイナーと
大爆走！

AUTHOR
中澤光博/ORG
MITSUHIRO NAKAZAWA
イラスト:
四季童子、いとうのいぢ、
るろお、中島鯛

ドラゴン☆オールスターズF どらぱれ 発売記念リプレイ

暴走覚悟のオーバーテイク！

谷川流（涼宮ハルヒ）×賀東招二（フルメタル・パニック！）×中澤光博（ドラゴン☆オールスターズ）

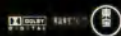
スニーカー文庫、富士見ファンタジア文庫、月刊少年エースなどの人気キャラクターが、作品の枠を越えて登場するトレーディング・カードゲーム『ドラゴン☆オールスターズ（略してドラスタ）』のゲームの様子を収録した誌上リプレイが再び登場！ 原作者をプレイヤーに迎え、『涼宮ハルヒシリーズ』『ムシウタ』さらに富士見ファンタジア文庫の『フルメタル・パニック！』のキャラクターが白熱のレースを繰り広げる！

トピック！

ハルヒのアニメにドラスタが登場!?

TVアニメ『涼宮ハルヒの憂鬱』の第9話冒頭で、キョンと古泉が遊んでいるカードゲームが『ドラゴン☆オールスターズ』だ。「ハルヒ」ワールドでも「ドラスタ」は人気らしい!?

e'tude prologue
〜揺れ動く心のかたち〜
手をすり抜けてしまったこの想い、
もう一度拾い上げて握り締めることが出来ますか？
季節は空気も凍るような冬。何処にでもあるような田舎の「南青瀬」という街に、何処にでもあるような県立の高校『天鷹高校』という高校がある。
すでに推薦で大学が決まっているもの、進学しないもの、これからが受験本番のもの。
そして、この時期になってもまだ進路が決まらないもの。そんな将来への期待と不安を胸に抱きながら、徐々に近づいてくる、卒業という二文字。
この学校を去るまでに、僕等は何か一つでも想い出を残せるのだろうか。
あなたは「郡司達也」や「佐伯瞳」となって、将来の目的や、大切な人を見つけることができるでしょうか？
CAST
郡司 達也 ： 森久保 祥太郎
片桐 那智 ： 武内 健
真田 博士 ： 笹沼 晃
草薙 瞬 ： 福島 潤
天野 神吾 ： 下和田 裕貴
佐伯 瞳 ： 松本 彩乃
萩原 麻美 ： 茅原 実里
藤乃 梓 ： 曽田 光星
佐伯 悠見 ： 黒田 ひとみ
山田 まゆ ： 狩野 茉莉
鮎瀬 碧 ： 福原 香織
中沢 薫 ： 平間 樹里
エチュード・プロローグ
【 初回限定特典 】
『 バラエティーディスク ver.e'tude prologue 』
好評発売中！
希望小売価格 ¥6,800（税込価格 ¥7,140）
プレイステーション 2専用ソフト / 夢渡り恋愛アドベンチャー
鳥篭の向こうがわ
2006年7月27日発売予定
希望小売価格 ¥6,800（税込価格 ¥7,140）
夢世界『フェムト』。そこは今を捨て、夢に生きることを望んだ人々が集う場所。
どこまでも続く蒼天。踏みしめる地は優しく包み込む。夜の帳が落ちることも陽が昇ることも知らない。
移ろい変わりゆくものなどない。そこにあるのは永遠。
優しく触れた指先が淡い夢の先へと誘い、鳥は眠る。
閉ざされた箱庭で安寧の時を願いながら。
繋いだ手に引かれ貴方は夢の世界へと迷い込む。
ただ貴方だけ。
貴方だけが、その手を振り解くことが出来る。
移ろい変わりゆくことのない世界、
僕はこの手に永遠を繋ぐ。
鳥篭の向こうがわ
cast
浅野 真澄
桑谷 夏子
綱掛 裕美
森永 理科
高橋 美佳子
浅川 悠
植田 佳奈
笹島 かほる
鳥海 浩輔
森久保 祥太郎
鈴木 千尋
初回特典分には書き下ろしミニドラマやテーマソングを盛り込んだ『バラエティーディスク / ver.鳥篭の向こうがわ』が付いてくる！
＊特典CD（別冊）に関しましては、TAKUYO web または、店舗・法人様でもお取り扱い頂いている場合があります。詳しくは、各店舗・法人様へ直接お問い合わせ下さい。
7/23・30(日) 25:00〜25:30 に放映される『アキハバラ情報局 PLUS』（アニマックス、スカイパーフェクTV 724ch）にて、
鶴笠未来役の高橋美佳子さんが出演され、『鳥篭の向こうがわ』が紹介されます。
株式会社拓洋興業 / TAKUYO 〒239-0815 神奈川県横須賀市浦上台3-27-1
[TAKUYO Official Homepage] http://www.takuyo.co.jp
[TAKUYO Support Mail] support@takuyo.co.jp
"PS" および "PlayStation" は株式会社ソニー・コンピュータエンタテインメントの登録商標です。
PlayStation 2
TAKUYO

終り。
鳴ったら必ず死んでしまう"死の着メロ"。その恐怖から逃れるたった一つの方法。それは
「転送スレバ死ナナイ」。
友達に死を転送できますか?
極限のサバイバルホラー着信!
着信アリ
Final
堀北真希　黒木メイサ　板尾創路　ジャン・グンソク(장 근 석)
製作:黒井和男 ／ 企画・原作:秋元 康(角川ホラー文庫刊) ／ プロデューサー:有重陽一・山本 章
監督:麻生 学 ／ 脚本:大良美波子・真 二郎 ／ 主題歌:中 孝介「思い出のすぐそばで」(EPICレコードジャパン)
製作:「着信アリFinal」製作委員会(角川ヘラルド映画・日本映画ファンド・日本テレビ放送網・東宝) ／ 共同制作プロダクション:CJ ENTERTAINMENT
配給:東宝　©「着信アリFinal」製作委員会
東宝系大ヒット上映中!
www.chakuari.jp
「着信アリ Final」
原作:秋元康
好評発売中
定価:500円(税込5%)

涼宮ハルヒの憂鬱

すずみやはるひのゆううつ

HARUHISM ハルヒ主義

CDシリーズ快進撃中!

「冒険でしょでしょ?」

「風読みリボン」

歌：平野 綾

LACM-4255 ¥1,200(税込)

特製スリーブパッケージ! NOW ON SALE

「ハレ晴レユカイ」

「うぇるかむUNKNOWN」

歌：平野 綾(涼宮ハルヒ役)
茅原実里(長門有希役)
後藤邑子(朝比奈みくる役)

LACM-4261 ¥1,200(税込)

NOW ON SALE

キャラクターソング Vol.2 長門有希

歌：長門有希(C.V.茅原実里)

LACM-4270 ¥1,200(税込)

2006.7.5 発売

キャラクターソング Vol.1 涼宮ハルヒ

歌：涼宮ハルヒ(C.V.平野 綾)

LACM-4269 ¥1,200(税込)

2006.7.5 発売

キャラクターソング Vol.3 朝比奈みくる

歌：朝比奈みくる(C.V.後藤邑子)

LACM-4271 ¥1,200(税込)

2006.7.5 発売

今秋発売予定!
乞うご期待!!

- 涼宮ハルヒの憂鬱 ドラマCD 企画進行中!
- 涼宮ハルヒの憂鬱 SOS団ラジオ支部 番外編CD Vol.2

涼宮ハルヒの詰合

～TVアニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」劇中歌集シングル～

「God knows...」
「Lost my music」

歌：涼宮ハルヒ(C.V.平野 綾)

「恋のミクル伝説」

歌：朝比奈みくる(C.V.後藤邑子)

LACM-4268 ¥1,200(税込)

特製スリーブパッケージ! 2006.6.21 発売

涼宮ハルヒの憂鬱
SOS団ラジオ支部
番外編CD Vol.1

パーソナリティ：平野 綾(涼宮ハルヒ役)
茅原実里(長門有希役)
後藤邑子(朝比奈みくる役)

LACA-5523 ¥2,500(税込)

2006.7.5 発売

平野 綾 3rdシングル発売決定～!!

9.6 on sale

LACM-4292 ¥1,200(税込)

涼宮ハルヒの憂鬱 オフィシャルサイト
http://www.haruhi.tv/

[Lantis web site]
http://www.lantis.co.jp

発売元：株式会社ランティス 販売元：キングレコード株式会社

Ring in this month

作家

今月のリング・イン!

イラストレーターが語るスニーカー文庫

仁木 健

TAKESHI NIKI

はじめまして、作者の仁木健です。
本来イラストレーターの椋本さんがコメントするページですが、色々な意味で「Add」が新展開を迎えたので、作者登場となりました。
「Add」を簡単に言うと
①サイボーグ少年
②無感情少女
③撲滅!ヒューマニズム です。
ちょっと壊れたロボット小説「Add」をよろしくお願いします!

スニーカー文庫7月1日発売!

Add
喪せし機械のバラード

仁木 健 イラスト/椋本夏夜

今月のリング・イン！
イラストレーターが語るスニーカー文庫

すまき俊悟
SHUNGO SUMAKI

3月9日生まれ。東京生まれの九州育ち。東京造形大学卒業後コンシューマ系ゲーム会社に勤務。現在フリーな絵描き人。富士見ファンタジア文庫　突撃アンソロジー小説創るぜ！『スペル・ブレイク・トリガー！』。ファミ通文庫「シンシアマシン」を担当。

こんにちはこんばんははじめまして
すまき俊悟と申します。

一風変わった魔法をめぐる
あんなこんなが盛り沢山の
「ウィッチマズルカ」

みなさんも、ほの
ぼの(？)魑魅の日常
非日常を一緒に体
験してみませんか？

ちょっとでも気になった
そこ行く紳士淑女の皆様方
7月1日書店へＧＯですよ！

そんなわけで水口先生が
贈る「ウィッチマズルカ」
ぜひぜひ手にとってみて下さいね～。

バトルもあるよ！

スニーカー文庫7月1日発売！

ウィッチマズルカ

Ⅰ.魔法、使えますか？

水口敬文 イラスト／すまき俊悟

中学生の部

THE SNEAKER ILLUSTRATIONCONTEST

すがすがしい笑顔が花盛りになった中学生の部。新1年生も落ち着いたらぜひ投稿してきてねー。

30 なんか不思議なアイデアが面白い！　しかもちょいエロで◎。次は何を繰り出してくるかな!?

神奈川県　サムゥ（20）
「Jamp!!」

32 おおっ、大きな瞳に決意がみなぎってる！　思わず応援したくなりますね。

大阪府　流星あやか（12）
「告白寸前!」

33 タイトルよりもう少し困ってる感じかな？　キャラを引き立てる水しぶきがいいね。

埼玉県　鵺（14）
「笑顔満開」

31 丁寧に描き込んでるね。細部がキャラを引き立てるように……と意識するといいのでは。

神奈川県　味素うどん粉（19）
「昼下がりの画家」

34 ひまわりと女の子、可愛いね。さらっとした主線が繊細なイラストに生きてます。

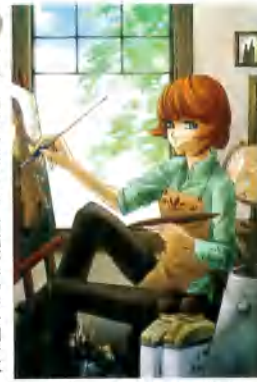
埼玉県　龍之介（14）
「夏色」

35 まさに今傘をたたんだというポーズがよく描けてます。水滴とか描きこんでもよかったね。

愛知県　苗之布岬（13）
「梅雨の晴れ間」

36 陽射しを表わすホワイトの効果をよく使ってます。まさに「まぶしいっ」だね。

山口県　遠峰ハル（14）
「雨あがり」

金賞

37 おーっ、巧くなったね！　男の子の表情にドラマが感じられます。女の子に水がかかっている感じもよく考えて塗ってるね。

石川県　桐崎灸（14）
「夏の恋の始まり方」

■このところ応募数が少し減り気味なイラスト・コンテスト。も、もしや青のコメントがきびしめだからでしょうか!?　すみませーん。■とはいえ、最近投稿来ないなーと思っていたら、書店店頭でイラストのお仕事をしているのを見かけたりということも増えてきて、誇らしく思ってます。プロをめざしてがんばる方はもちろん、趣味で楽しく描いたイラストをもっと多くの人に見てもらおうと投稿いただくのも大歓迎なイラコンですが、思いがけず色々な人が見ていて、チャンスになっていたりするんだぞっ☆とアピールしておきますね。投稿者はこれからもがんばりましょう！■さてさて、次号のテーマは「夏の終わり」。ポイントは、みんなが描きそうなイラストはうまく外すこと。採用の可能性が高まりますよ！

THE SNEAKER ILLUSTRATIONCONTEST

人気投票 BEST 8

順位	名前	票数
1位	雄	226票
2位	十文字	216票
3位	碧風羽	208票
4位	ぴろきち	96票
5位	頴	86票
6位	笹本ユーリ	82票
7位	佐藤一弥	81票
8位	アリサ	63票

応募の決まり

サイズ：基本はハガキのサイズ（縦15cm×横10cm）のイラスト。ただし同じ縦横比率だったらそれより大きくてOKだよ。
〆きり：7月24日（月）必着
宛先：〒102-8078 角川書店 ザ・スニーカー編集部イラコン係
★原稿の裏面に「本名（フリガナ必須）、ペンネーム（フリガナ）、年齢、住所、電話番号、職業（学年）、作品タイトル、持っていればホームページアドレスを明記してください。応募作品の返却はしません。

イラコンのポイント制について

イラコンでは本誌アンケートで掲載イラストの人気投票を行っています！
人気投票で8位以内に入賞したらそれぞれポイント加算。1位5点、2位4点、3位3点、4位2点。5～8位1点のポイントがあたえられ、獲得ポイントを蓄積することで名誉ある称号が授与されます。5点以上で男爵、10点以上で子爵、20点以上で伯爵、30点以上で侯爵、40点以上で公爵、50点で大公という具合。きみも常連＆爵位保持者をめざそう！

18
えん吉さんの描く世界が広がってきた感じがします。塗り方と色に奥行きが出せるといいね。

東京都　えん吉（21）子爵 14P
「・・・・・」

19
画面前方から奥にかけての塗りが均一のために奥行き感がうまく出なかったね。表情は◎。

広島県　つきと（22）
「Help!」

20
色の描き込みが細かくて画面がごちゃついたかな。でもタイトル通りのニュアンス伝わります。

千葉県　美嶋こうき（20）
「あの笑顔にはかなわない」

21
アリスそっちのけで目立ってしまう兎さん？背後の四頭身のバニーのほうが可愛い。

熊本県　梅原りな（17）
「主役より輝く君が好き」

銅賞

22
ようこそ一般の部へ！　そしていきなり銅賞です。反則なくらいの直球だけど、見た人の胸に飛び込んでくるような可愛らしいニュアンス、これぞキャラクターぢからって感じだね。将来におおいに期待してます。

神奈川県　佐藤一弥（16）男爵 9P
「大好き。」

23
冴村さんとしてはちょっと異色のテイスト。集中している少女の表情に惹きつけられるね。

大阪府　冴村明（30）子爵 19P
「白の魔道士」

24
初投稿ありがとう。指や足にももっと繊細さが出せたらレベルアップだよ。

福岡県　寺月オリガ（21）
「水舞」

銅賞

千葉県　秦宮（19）3P
「琥珀日」

25
おっ、キャラぢからが上がってきたね！　キャラクターの内面に興味を抱かせることができたら成功です。これはかなりいいんじゃない？　ファンタジー以外にもいろいろなシチュエーションを描いてみてほしいな。塗りとかも変わるはず。

26
すごく丁寧に仕上げた背景だけど、キャラとうまくハマってないみたい？　もうひと頑張り！

北海道　本藤もんがも（25）
「森が語る」

27
衣装に描かれた鳥がじつに綺麗。表情も独特の謎めいた感じがあって惹かれました。

千葉県　風一色（22）
「夕凪」

28
今回猫の後ろ姿が多い気がするのはなぜだろう？女の子の透きとおった感じが魅力的だね。

北海道　神月弥（25）男爵 5P
「黄昏の海に花束を」

29
壮大な構図、お見事です。塗りで色が濁ったりごちゃついてしまったのがとても残念。

東京都　霞（29）
「Jupiter」

金賞
神奈川県　十文字（24）子爵 15P
「夏の光」
9 夏の景色が、気温や陽射しまでよく描かれています。とうとう金賞！　いつもすごく巧いけど、キャラが背景や場面の添え物にならないイラストに仕上がるともっといいですよ。次のトップ賞のイラストには大いに期待してます！

5 相変わらずシチュエーションと表情が抜群。線の描き方や画材など色々試してみて。
茨城県　GOH（17）1P
「あそぼ」

6 最近この角度の女の子ばかり見てる気がするよ？色々と奥行きのある表情を見てみたい。
徳島県　雄（32）子爵 18P
「ウンディーネ」

7 背後にものすごくちっちゃく魔女（？）がいるんだけど、見えるかな？
大阪府　WIDE LOVE（24）
「奪回」

8 夏の強い陽射しを表わす陰影はたしかに難しいね。でも気持ちのよさが伝わるいい絵です。
福岡県　みきち（21）1P
「日差しの強い日は」

10 背景のシーンが説明的すぎかもしれない。女の子の表情はとてもうまく描けてるよ。
埼玉県　鶉ヒツキ（20）
「絶望の中にある希望の光」

11 三人の表情がどれも生き生きしてて共感できます。デジタル塗りはもっともっと勉強しよう。
東京都　紅茶プリン（20）
「遊びに行こうよ！」

12 ピカッとした眩しさがうまく出てます。表情や身体が生き生きと描けるとパワーアップ。
神奈川県　桜井柚南（23）4P
「ラストマジック」

13 タイトル通りのドキドキ感が伝わってきます。身体はちょっとデッサンヘンだけど。
福岡県　塚本響（21）
「僕のヒカリ」

14 こちらも、顔と身体が「止まってる」感じだね。せっかく動きがある構図なのに残念。
東京都　神無月晶（24）
「カーニバル」

15 なんてことないけど素直で気持ちいいイラスト。こんな絵本が読みたいいね。
埼玉県　ぴろきち（28）3P
「雨がやんだよ」

16 全体的に描き込みすぎて暑苦しい感じ。画面の中にメリハリをつけることを意識してみて。
大阪府　ミヅキユエ（27）
「The water land～王子たちの休日～」

17 おおお、いいねエロいね！　単にポーズや服のはだけ方じゃない「エロさ」を皆も感じて。
和歌山県　アリサ（24）4P
「まどろみの午後」

THE SNEAKER

ザ・スニーカー・イラストコンテスト

ILLUSTRATION CONTEST

いよいよ夏。自然も生き物も生き生きしてきて、眩しいものがたくさんあって、絵心が刺激されますよね。これからの夏休みは、せっかくなので、素材を見つけに外出してみましょう。同じ「まぶしいっ!」を描くにも、描き手の実感が注ぎ込めると、思いがけずいいイラストになったりしますよ!

今月のお手本

「fatal end」
碧風羽(22)子爵 14P
(2006年6月号金賞受賞者)

一般の部

THE SNEAKER ILLUSTRATIONCONTEST

今月のテーマは「まぶしいっ!」。
夏らしくて気持ちいい絵が出揃いました。

④
すべてCGで描く必要はないよ。手描きとデジタルの良いところを組み合わせてもいいかも。

京都府　くろにゃこ。(17)
「配達日和。」

③
相当完成度の高い萌え画。笑顔がチャーミングで夏ですな。でも体型が三人とも同じだぞ!

北海道　ナベール(31)
「海!!」

②
最近あちこちで本物の子猫を見るけど、本当にこんな感じかも。木の上で遊ぶ姿、可愛いです。

三重県　ソラネコ(25)
「木漏れ日」

①
あえて真っ白なのがいいね。身体や服にもっとこだわって描いたらパワーアップだよ。

東京都　七種ひのる(21)子爵 16P
「やさしい光」

コミック本編は352Pから!

「人気の絵師が贈るコミック連載、今号からリ・スタート！」
Antique 99
◆クロニカ◆
〈九十九骨董店〉の看板娘。相手が子どもでも大人でもモノでも変わらず〈友達〉として接する不思議な美少女。
99番地のクロニカ
Crónica 99
椋本夏夜
Kaya Kuramoto

小説本編は272ページから

一筋縄ではいかない**少女**たちが**織**りなす
「**渾身**の**悪**ふざけ」をしかと**見**よ!!

誰もいないビルの屋上。うつぶせになり、自らの腕でもあるどでかいライフルをかまえる少女。その完璧な美貌の瞳から覗くスコープの先にあるもの――それはもっとも信頼している遊撃小隊〈猋〉の仲間の二人、涼月と夕霧。

西暦二〇一六年、二五〇〇万人の人口を持つ国際都市ミリオポリス。この都市では選ばれし三人の特甲少女たちが治安の維持に努めている。悪化の一途を辿る都市情勢に対し、警察組織「MPB」の飼い犬として。

陽炎は、天才的な狙撃の技術を誇っている〈猋〉の中でもっとも理性的な狙撃手である。しかしそんな彼女も幼い頃、父のライフル事故により、全身の自由を奪われた過去を持つ。失った体の代わりに手に入れたのは皮肉なことに人生を破壊したライフル、そして誰かを殺し続ける、自らの体についた引き金。完璧を求める彼女の福音は――「克服あれ」。自らのトラウマに向き合う事件が、今陽炎

Eulenspiegel
オイレンシュピーゲル

冲方丁 Tow Ubukata　イラスト 白亜右月 Ugetsu Hakua

ビーンズ文庫発 史上最強の少女小説マガジン!!

The Beans ザ・ビーンズ

The Sneaker増刊

VOL.7 定価780円(税込)

イラスト／あさぎ桜

特別付録 少年陰陽師クリアファイル

大好評発売中!!

第1特集

2大アニメ化特集!!

ここだけの情報満載!

テレビアニメ大人気放送中!!

『彩雲国物語』

雪乃紗衣 イラスト／由羅カイリ

アニメ化企画進行中!

『少年陰陽師』

結城光流 イラスト／あさぎ桜

第2特集

津守時生特集

「やさしい竜の殺し方」

「揺らぐ世界の調律師」

少年陰陽師の表紙が目印!

まるマ ゲーム化総力取材 +α(お楽しみ記事)

アニメに続き、今度はPS2で登場だ!!

スペシャル全員サービス (応募者負担あり)

『彩雲国物語』&『少年陰陽師』録り下ろしドラマCD!!

豪華ラインナップ

若木未生／榎野道流／志麻友紀

喜多みどり／瑞山いつき

雨川恵／月本ナシオ／菅沼理恵

栗原ちひろ／めぐみ和季

BLOOD+(敬称略・順不同)

角川書店

月刊ドラゴンエイジ増刊
DRAGON AGE
Pure
【ドラゴンエイジピュア】
ILLUSTRATOR：ITO NOIZI / AKANE KOTETU
新ヒロイン発見！
新コミック誌発進!!
LINE UP!
三宅大志／武田日向／ガイナックス×茜虎徹
ビジュアルアーツ×霜月絹鯊／清水文化×月吉ヒロキ
グループSNE×榊／髙木信孝／MAKOTO2号
龍牙翔／秋月亮／水谷悠珠／千宏／蒼樹うめ／☆画野朗
まっつー×椿あす／いとうのいぢ×神野正樹／竜騎士07
待望のコミック化!!!
［トップをねらえ2!］
ガイナックス×茜 虎徹
最新の情報が満載!!
「ひぐらしのなく頃に」著者――次の一手とは?!
竜騎士07 新作発表!
ピンナップもコミックも掲載!!
大人気作家渾身のオリジナル企画が表紙+コミックでついに始動!
いとうのいぢ
［bee-be-beat it!］
ドラゴンエイジピュア
月刊ドラゴンエイジ8月号特別増刊 Vol.2
6月29日発売!
定価580円(税込)【富士見書房】
http://www.fujimishobo.co.jp/pure/

2006年7月1日発売

Add 喪せし機械のバラード

仁木健　イラスト:椋本夏夜

〈世界の終末の果て〉に戦う理由(わけ)は――?

ここが一押し▼

二重人格だったアイとリンが、それぞれ別の体を手に入れて帰ってきた！……となればAddファンには面白さ倍増なのがわかるはず。ご存知、典型的ツンデレ少女のアイは、異能力〈風妖精の羽〉を一人で使いこなせるようになったため、〈外数員〉としてのコウとのタッグを強める。一方「ただの女の子の無機人」となったリンは、少女の素直な心のままにコウに恋して……恋も事件もいよいよ盛り上がるAddに注目だ！

あらすじ▶ アイと共に〈外数員〉としての新たな任務のため、外国に旅立ったコウとミナ。一方日本に残ったリンには、その身体に施された天才・カレルの技術を求める者たちが襲いかかる！〈世界の終末の果て〉に火花が散る！

お・り・が・み 澱(おり)の神

林トモアキ　イラスト:2C=がろあ～

神を殺し、未来を自分の手で創る。新世界の黙示録完結編

▼ここが一押し

本誌にて好評連載中『戦闘城塞マスラヲ』の林トモアキが描く、剣と銃と魔法の乱舞、ついに完結！魔王になった主人公はいるけれど、同時に聖女にもなったヒロインはライトノベルで初登場!?　神の使徒と魔人を引き連れて、鈴蘭は天の住む神殿に人類の未来を賭けて突入するが、そこで待ち受けるのは神殿の奥に眠る「澱(おり)の神々」。タイトルの謎も初めて明かされ（え？　気づいてた？）、決戦の後衝撃のラストが待っている！

あらすじ▶ 天は黒龍・伊織貴瀬を利用し、新たな世界の仕組みを作ろうとしていた。魔王にして聖女、両方の力を手に入れた鈴蘭は行き過ぎた天を食い止めるため絶対防壁の待つ大神殿へ向かう。やがて始まる最終決戦。人は自らの手で未来を創れるのか!?

機動戦士ガンダムSEED DESTINY ASTRAY②

原作:富野由悠季　矢立肇　著:千葉智宏　イラスト:緒方剛志

人気アニメの公式外伝、ついに完結！

ここが一押し▼

TVアニメ放映後も、まだまだ熱いSEEDシリーズ。その中でも本編には出てこないながらも、それぞれの事件に関わったキャラクターたちの視点からC.E.という世界を描き好評の「ＡＳＴＲＡＹ」が本誌連載時から大幅改稿を加えて、ついに完結です。前シリーズのキャラクターはもちろん、フォト・ジャーナリストのジェスが、「真実」というものに対してどんな答えを出すのか？　お楽しみに！

あらすじ▶ フォト・ジャーナリストのジェスは「情報」を操り世界を支配しようとする“一族”との戦闘に巻き込まれていく――。ジャーナリストであるはずの自分が戦うことに悩むジェスだったが「真実」を見いだすため再び戦場へと向かい“一族”と対峙する！

ウィッチマズルカ Ⅰ.魔法、使えますか?

水口敬文　イラスト:すまき俊悟

二人だから、戦える――

▼ここが一押し

水口敬文が描く新シリーズが登場です！「憐 Ren」では“未来からの流刑”という運命を背負った憐とフツーの高校生・玲人の絶望と希望と日常を描きだした著者が、新たに挑戦するのは「魔女」のお話です。「偽りの魔術」にまつわる謎が生み出す姉妹の葛藤と苦悩、そして戦い。さらに、苦悩を持つがゆえ二人が大事に思う日常の生活。「憐　Ren」よりも過酷で、激しく、それでいてどこか優しい物語、是非読んでみて下さいね。

あらすじ▶ 高校生の綾白未玖とその姉である夏咲は「偽りの魔術」と呼ばれる力を使うことができる「魔女」の姉妹。その姉妹を同じ「偽りの魔術」の使い手たちが襲い始める。そこには未玖に秘められた「偽りの魔術」に関する秘密があった――

スニーカー文庫新刊情報

今月も人気シリーズの続巻がぞくぞく登場!

レンタルマギカ
魔法使い、修行中!

三田誠 イラスト：pako

アディリシアとメイド長ダフネ。二人の過去が明らかに

▼ここが一押し

ソロモン王の末裔にして魔術結社〈ゲーティア〉の首領、アディリシア。その彼女に陰のように付き従うメイド長のダフネ。彼女はなぜアディリシアに付き従うのか？　前号ザ・スニで掲載したエピソード「魔法使いとソロモンの血」と同じ時間軸、実はダフネが魔法を失ったアディを陰ながら助けていた舞台裏を書下ろしで収録。他にも「レンタルマギカの基礎理論」や「〈アストラル〉業務日誌」など書下ろし多数収録！　ザ・スニと文庫で〈アストラル株券〉がもらえるキャンペーンも実施中！

▼あらすじ

七十二の魔神を召喚するアディリシアだったが、ある日彼女の使い魔であるフォルネウスが彼女の命令を聞くどころか、彼女に牙を剥いた。一体何故!?　裏切り者の手によって魔法を封じられ、ただの少女に成り下がってしまったアディリシアをいつきは護れるか！　そして事件の陰でアディを救うため、メイド長のダフネと旧友隻蓮が捜査を開始する。大好評異種魔術格闘戦第6弾！

バイトでウィザード 双子の飼育(しいく)も銀玉次第!

椎野美由貴 イラスト：原田たけひと

ドタバタからしんみりまで、豊花と京介の奮闘記

ここが一押し▼

おなじみ「研修生編」の最新刊。りっぱな矯正術者になるために研修中のはずなのに、今回も豊花と京介は、さまざまな事件に邪魔されます。双子の父にして不屈のギャンブラー、なぜか南の国の王位継承者（ダックスフントそっくりの小精霊付）の家庭教師、そして、赤ん坊に戻った研修生たちと筋肉隆々の保育士親子など、凶悪なゲストキャラが引き起こす事件で、いつにも増して大混乱！　本誌未掲載3編収録でお買い得です。

あらすじ▶ **双子の父親、尚は、今日も母親の留守をいいことに、京介と豊花を連れてパチンコ勝負！　ところが、目を離した隙に二人が誘拐されて……!?　双子に輪をかけて破天荒な父を描く表題作ほか、京介と砂島礼子が初めて出会うエピソードなど7編。**

熱風海陸ブシロード OVERLORD CHRONICLE

吉田 直 イラスト：後藤なお

「トリ・ブラ」の吉田直が遺した熱き、最後の物語!

▼ここが一押し

本書はアニメやゲームなど様々なメディア展開が予定されているＳＦ大河バトルロマン『熱風海陸ブシロード』の前史である。世界観設定・監修というかたちで「ブシロード」に関わった吉田先生の突然の逝去（2004年7月15日）により、未完となってしまったこの物語を、先生が遺された完結までのプロットとともに、読者にお届けする。「トリ・ブラ」と並び、先生の代表作となるはずだったこの壮大なる物語に酔いしれてほしい。

あらすじ▶ **隕石雨が惑星から文明を奪い去ってから数百年。公国トウライの公子カズサ＝シンは、天から巨大な魔神とともに舞い降りた美しき逃亡者ヒカゲと出逢う。戦いに倦んだ世界で、誰も見たことのない未来を切り開かんとする大河バトルロマン！**

ブックレビュー新刊ニュース

注目の新作5冊を紹介！

文：滝和代

鋼殻のレギオス

なんのために、ここで

荒廃した大地にもう人間の住める場所はなく、巨大な爬虫類に似た汚染獣に支配されている。人々は、それ自体が汚染獣を避けて歩く〈自律型移動都市〉で生活していた。孤児のレイフォンは、ある事情でそれまで暮らした都市を離れ、奨学生として学園都市に移る。隠していた武芸の才能は入学式で早々に明らかになり、彼は都市の自衛小隊に配属されてしまった。……と、一見して特殊な舞台設定が目をひく異世界ファンタジーで、もちろんそこが魅力なのだが、この作品はさらに、少年の挫折と再起と迷いの物語としてもとても読みごたえがある。そのうえレイフォンを取り巻く、それぞれ性格が異なる少女たちが愛らしいという、とにかく贅沢に楽しめる作品なのだ。

雨木シュウスケ　イラスト：深遊
富士見ファンタジア文庫
定価：609円（税込）

"文学少女"と死にたがりの道化

太宰治は甘いか苦いか

私は活字が好きなので舐めるように本を読みますが、それは比喩であって、実際に紙面を舐めるわけではありません。この作品のヒロインは私以上の活字好きで、食べちゃうくらい愛しています。これは比喩ではなくて。ほんとうにページを食べてしまいます。むしゃむしゃと。ここでは特に「太宰治」の作品を深く味わっています。彼女の感想をきくと、じっくりと太宰を読みたくなります。

その「本を食べる」天野遠子と井上心葉（男子）の、二人だけが所属する文芸部に依頼された恋文代筆が、事件の発端でした。悩みながら書き進めていた心葉は、その手紙の宛名の人物が校内に存在しないことを知ります。手紙は誰に、なんのために送られていたのでしょうか。

野村美月　イラスト：竹岡美穂
ファミ通文庫
定価：588円（税込）

伊佐と雪 ～やさしいよる～

一緒に暮らす。人も妖怪も

修験者を志している高校生・袴田幸太朗は、ある日二人連れの少年が人ならぬものだと看破し、調伏するべく挑んだ。しかし袴田の実力ではまったく歯が立たず、逆に二人の元で修行をするという話になってしまう。外見は少年だが、数百年を生きているという二人。慈徳院伊佐は母親の幽霊に育てられ、自らも半分幽霊のような存在だといい、白方雪は雪女の息子だという。二人と関わることで袴田は、妖のすべてを調伏する必要はないのかもしれないと気付いた。袴田と、伊佐と雪とその仲間たちとの交流や共同生活は、ちょっと変則的なホームドラマのようである。妖怪がたっぷり登場するので「ホラー」に違いはないのだが、ほのぼの優しい余韻が残る。

友谷蒼　イラスト：三日月かける
GA文庫
定価：620円（税込）

天使のレシピ

うまくいかないのが恋

「恋愛」という単語だけをみるとそれは、幸福でとても楽しい現象のようだ。でも実際そこに足を踏み入れると、ものすごく気持ちが忙しくてタイヘンなもの。この本はそんな、「タイヘン」まっただ中の少年少女たちの物語、連作短編集である。恋心を自覚した戸惑いや、つき合い始めてから浮かんでくる不安など、恋を経験した人なら共感できる場面がきっとある。いま悩んでいる人にはヒントが見つかるかもしれない。たとえば、天使の言葉の中に。

御伽枕　イラスト：松竜
電撃文庫
定価：599円（税込）

大鷲の誓い デルフィニア戦記外伝

のちの騎士団長たち

一度は都を追われたが、再び玉座を取り戻し、デルフィニア国に平和をもたらした王を描いたのが本編『デルフィニア戦記』である。この外伝では、作中で活躍した名脇役、ノラ・バルロとナシアスの少年時代が描かれる。出会いから、身分の差を超えた友情が育まれるまでの物語で、のちの名場面につながるような描写やセリフに、改めて本編を読み返したくなる。本編以前のエピソードなので、これが初めてのデルフィニア、という人にも読んでほしい。

茅田砂胡　イラスト：沖麻実也
C・NOVELSファンタジア
定価：945円（税込）

こんな本、知ってますか？

ノンフィクションが語るワンダーランド

文：まんぎん

ライトノベル探求の旅の記録
ライトノベル「超」入門
新城カズマ

ソフトバンク新書
定価787円（税込）

著者が言うには、「ライトノベルなんて知っているし、普段から読んでいるよ」という人にとって、この本は時間と金の無駄遣いということなので、本誌の読者向きではないのかもしれない。入門書である以上、もう門から入ってしまっている人には釈迦に説法、こんな本を読むより話題の新人デビュー作でも読んだほうがましと考えるのが正しい。昨年からあまた出版されたガイドブックのたぐいでさえないのだから。

それでも、この本には価値がある。考えてみてほしい。年に一度しか会わない親戚の叔父に、自分が好きな本を語ろうとした時、言葉に詰まらないか？ そういうシチュエーションに役立つ本があるとしたら、この本だ。

「ライトノベル」という言葉が流通しはじめて、好きで読んでいる小説が世間の目にさらされる機会が増えた。「ライトノベル」という名称がなくたって、ずっとそれは続いていて、毎月たくさんの文庫が本屋に並べられてきたわけで、学生時代から途切れることなく読んできた身には、今でも「ライトノベル」の名が恥ずかしい（本書もこのような気分を「違和感」と呼んで重要なキーワードにしている）。でも、「ライトノベル」という名称があれば、親戚の叔父さんにも説明しやすいかもしれない。そして、説明するためには、その前にライトノベルとは何か？ という問いかけが必要だし、この本は主にその問いをめぐって書かれている。

この本が優れているところは、この問いに対し、定義付けのようなもので答えようとしないことだ。〝ミステリーとは殺人事件を書いた小説〟だとか〝SFとは科学をテーマにしたエンターテインメントだ〟という言い方をしない。あくまで、ライトノベルがどのように誕生し、今どういう本がライトノベルだと思われているのか、実際に起きている現象そのものを描こうとしている。著者があらかじめ答えを知っているのではなく、ライトノベルをめぐるさまざまな事実を掘り起こすことで、ライトノベルとは何か？ に迫ろうというのだ。

その探求の旅の行き着く先は、ここでは触れない。ただ、著者の新城カズマ氏は、ライトノベルの作り手として、長いあいだ実績を積み上げてきた作家だ。誠実に語ろうとすればするほど、内側の目線から出る言葉を使いたくなると思うのだが、ここでは可能な限り外側の目線で語ろうとしている。どんなキャラが好まれるのか、どんな小説が代表作なのか、そういった中身の話でも、手放しで褒めることを避け、ライトノベルの何がそうさせているのかを考察する。この本はガイドブックではないと言ったが、リアルタイムでライトノベルに接したことのない読者に対しては、説得力ある紹介となっていると思う。

著者のスタイルに感じることは、文芸の一ジャンルの紹介というよりも、文化的な背景をもって登場してきた工業製品（楽器やオーディオ、ある種のファッションなど）の紹介といった雰囲気なのだ。

今回このコーナーで取り上げるにあたって、新城氏にその辺を伺ったところ「ライトノベルという、生まれて二十年そこそこのものを調べていく過程で、読者がどう受け取ってきたのか、編集者はどんな気持ちで作ってきたのか、書店や流通過程はどうなっていたのか、といったところへ関心が移っていってしまったから」と言っている。さあ、それは何を意味しているのだろう。新城氏のこの答えに興味を持った人がいたら、本書をお読みになることをお奨めする。

僕は、もう「ライトノベル」が恥ずかしくない。

コミック前のめり!

ボクたちの大切なことは、コミックのなかにある。

文：紙屋研究所

今月のオススメ

ライフ

すえのぶけいこ
別冊フレンドKC
①～⑫（以下続刊）　定価：410円（税込）

「お岩さん」といえば、いまや「オバケ」の超スタンダード。血まみれの顔、目の上の巨大な血腫、ごっそりぬけた髪……。しかし、今やあまりにパターン化しすぎて、だれもこわがらない。

だけど。

お岩さんの物語――「四谷怪談」は、カネ欲しさに浪人が妻を殺し、金満家の娘といっしょになってしまう話だ。家族や夫婦というものが倫理や道徳の根本だった時代に、カネのためにそれを侵す行為には、目もくらむような非道さがあった。「四谷怪談」を観る江戸庶民は、殺されるお岩のうらみを背筋も凍るリアルとして感じたはずなのだ。

本当に怪談が立ち上がる瞬間というのは、別に「気味悪いオバケ」が出るからではない。

その背後に、身を切られるほどに生々しい人間関係の物語があるからこそ、その時代の人々にとって「怪談」になる。

その意味において、今回紹介する『ライフ』は、現代の怪談だ。…などと書くと、『ライフ』の真剣な読者が聞けば、お前は何ということを言うのか、と怒り出すかもしれない。まあ聞け。

『ライフ』は高校でのいじめの物語である。それも、クラスのあらゆる人間関係を断ち切られ、孤立させられる、つまり仲間はずれのタイプのいじめだ。

作者の恐ろしさは、まず「他人とのコミュニケーションで傷つきたくない」という誰のなかにもある素朴な感情から出発して、その感情を極限までにふくらませるエピソードを冒頭にもってきていることだろう。

主人公の女子高生、椎葉歩（あゆむ）には中学時代、無二の親友・篠塚がいた。二人で受験勉強をがんばり、手なんか握りあっちゃう描写がつづく。

「一緒にがんばろうね―」

ありきたりといえばありきたり。しかし、このありきたりさが、ひどく身近っぽい。今日、絶対、日本のどこかのクラスで見られる光景である。

成績の悪かった歩は、勉強のできる篠塚に初めは教えられているが、次第に成績がよくなり、ついに逆転してしまう。しかし歩はそのことを篠塚に言えずに、テストは悪い点数だったとごまかしたりしてしまうのだ。

受験競争の中で友だち同士の間に生まれるストレス。ぼくらは見覚えがある。その中でついた小さなウソの小さな積み重ねが、おたがいの間に落とすカゲにも、やはり見覚えがある。

「ありきたり」で「誰にでも経験のある」物語が、しだいに読者であるぼくらの心の中に浸潤していき、ぼくらをからめとっていく。

気がつけば、歩は高校に合格し、篠塚は不合格になっていた。

卒業式が終わった教室で、篠塚は歩に吐き捨てるようにこう言うのだ。

「あんたなんか　いなければよかった」

作者は、ここで篠塚の描線のタッチを一変させ、影をつけた劇画タッチにしてドデカく描く。

こわい。

「ありきたり」な物語の中から、世にも恐ろしいものがどうやったら顔を出すのかを、作者はよく知っている。

どんなことがあっても人間関係でもう絶対に傷つきたくない、という強迫観念にも似た恐怖心――この話を読む前は小さなシミのように誰の心にもあったこの感情を、作者は、ふくらませるだけふくらませる。まずこの冒頭のエピソードで、作者はそのことを読者の心にたたきこむのだ。

この冒頭のエピソードがあるゆえに、高校に入ってから、クラスの中心的な女子グループから必死で仲間はずれにされまいとする歩の痛々しい描写が、まるで我が事のように感じられてしまうのである。

そして、ついにいじめの標的にされた歩には、一人の理解者もいないのだ。教師も、そして家族さえもまったく歩の言うことを聞いてくれない。

ちょっと極端すぎるスジのようにも思える。しかし、いじめに遭っているとき、世界はこんなふうに見えるのかもしれない。いじめという牢獄から、永遠に脱出は不可能なように思えるのだ。

世界は牢獄となり、クラスメイトは理解不能な他者に見える――その瞬間、この物語は「怪談」へと転化しかかる。

よく注意して読んでみてほしい。

ドアの暗闇のむこうから無気味に差し出されている手。トイレに逃げ込んだときに上からのぞきこんでいる得体の知れぬ顔――この漫画にはそういう描写が無数に出てくる。人間関係において、身も心も切り裂くような恐怖を味わったとき、相手が「化け物」に見えてしまうのだ。

これはまさに「怪談」というものが生成する、その瞬間である。

そしてぼくは、「救済」まで怪談的であるとさえ思う。

「四谷怪談」ではお岩は幽霊となって復讐をとげる。武士には逆らえなかった江戸時代、救済は幽霊となって万能の力を得るという形をとるしかなかった。

『ライフ』では「いじめから逃げない強い自分」に変わることで救済をもたらそうとする。強くならなければいじめから脱出できないのであれば、強くなれる人はそう多くない現実の中では、非現実的な救済ともいえる。

しかし「強く変わった自分」がいじめを破る物語は、幽霊が武士に復讐するように、胸のすくようなカタルシスをもたらす。それゆえ、強い願望が反映したこの物語こそ、現代の怪談というにふさわしいのだ。

ライトノベルが好きだから読んでほしい

未成熟な人間に生みださ

文：タニグチリウイチ

アイの物語

山本弘

角川書店　定価:1995円(税込)

と話し合いながら解決し乗り越えていくゲームのメンバーで、物語では、会長の女性が逃亡した少年に過ちを気付かせ、悔い改めさせようと新たなシナリオをネットにアップし、逃げてはいけない、勇気をもって現実に立ち向かえと訴えかける。

仲間のいる素晴らしさ。相手の顔が直接は見えないネットの世界でも、集まる人たちがそれぞれに持っている〝心〟は通じ合えるんだと教えてくれる物語で、アイビスは人間の少年を感動させる。けれども、しょせんは架空の物語だと反発する少年にアイビスは、鏡のような装置の中で、持ち主との会話を通して成長していく「ミラーガール」が、長い期間に渡って持ち主の思いを受け止め続けた結果、一種の自意識を持つようになった話を聞かせる。

「ミラーガール」に生まれた自意識。それは、鏡の少女と話ながら喜怒哀楽の感情を見せた持ち主の女性の〝心〟を写したものだった。こうして生まれた〝心〟を持った人工知性は、ブラックホールの入り口を見張るロボットに指令を越えた彼方への夢を見させ、人間を介護するロボットに人を愛する感情をもたらす。自分で考え行動できる〝心〟持つに至ったロボットは、他人を傷つけようとする人間を、それが自分たちロボットを守ろうとする好意から出たものであっても、諫めて争うなと呼びかける。

同じ〝心〟であっても、人間が昔から持っている〝心〟は損得勘定を抜きにして暴走し、結果として自分たちを傷つける。対してロボットに生まれた〝心〟は、無用な争いを防いで世界を平和に導こうとする。問題は〝心〟の有る無しなんかではなく、〝心〟をどう正しく使うのか、ということだ。

『アイの物語』は指摘する。人間は知性体として進化したくても限界があって、協調できるはずなのに争いを選んだり、肌の色が違う相手を嫌悪するような考え方から逃れられなかった。〝心〟が生命の理想として描く姿に追いつけなかった。だから自らの住まう地球を滅ぼしかけた。〝心〟を使えるロボットにとって代わられた。

『ポストガール』で迷いながらも正しさを求めるシルキーの〝心〟に打たれ、〝心〟持つ人間の素晴らしさを改めて思った後で、人間の〝心〟が持つ矛盾に気付かされる『アイの物語』を読むのは厳しすぎる。けれども見渡せば、今も続く戦争に貧困に環境破壊、絶えることのない不正に犯罪が、人間という存在に厳然としてある限界を指し示す。

もはや滅びるより他にないのか。

違うと『アイの物語』は言う。人の限界を超え、矛盾を乗り越えられる強い〝心〟を持ったロボットが生まれたベースには、『ポストガール』のシルキーが思い出させてくれたような、悩みながらも前向きな人間の〝心〟がある。アイビスたちのように、人間を駆逐することなく、逆にその記憶を永遠に受け継ぎ語り継いでいってくれる優しい〝心〟を持ったロボットも、正しく働いた人間の〝心〟から生まれたもの。そんなロボットを作り出すまでは、人間に滅びることは許されない。『アイの物語』に人間の希望を見よう。〝心〟が正しく伝わる未来を人間の手で生み出そう。

イラスト／ひらのあゆ

SNEAKER BOOK REVIEW

スニーカーブックレビュー

…れたロボットに宿る"心"とは？

文明が進んだって科学技術が発達したって、戦争はなくならないし貧困も病苦も解決しない。自然は破壊され資源も枯渇しているのに、人間は衰退への道をひた走る自分たちの暮らしを、改善できないどころか逆に悪化させている。

人間が悪いからなのか。動物にはない人間の〝心〟というものが、欲望を生み出し争いを招いているのか。そんな人間の〝心〟について、ひとつの考え方を示してくれたのが、増子二郎の『ポストガール』(電撃文庫）というシリーズだった。

主人公はシルキーという女の子の形をした人型自律機械(メルクリウス)。戦争で荒廃した大地を走って郵便物を届ける仕事に就いている。メルクリウスでもシルキーと同じタイプの物は、顔の表情や声のトーンを操って人間の感情を表現する機能を持っていて、戦争に荒んだ人間たちに潤いを与えていた。それでも人間の命令には、何の違和感も覚えず従うようプログラムされているはずのメルクリウスにあって、シルキーだけは命令の善し悪しを考えたり、起こった出来事を悲しんだりできた。

シルキーが〝バグ〟と呼ぶそれはまるで人間の〝心〟のよう。『ポストガール』は、シルキーが〝バグ〟によって悩んだり迷ったりしながら、最善の道を探そうともがく姿を通して、人間が本来持っていたはずなのに、荒廃の中で失ってしまっていた他人を思いやったり世界を慈しんだりする〝心〟の大切さに、思い至らせる物語だった。

やっぱり〝心〟は必要で、〝心〟を持っている人間はだから正しいのかというと、そう断言できないことは、混乱に満ちた世界を見れば瞭然だ。どうしてこんな矛盾が起こるのか。それは人間が〝心〟を正しく使い切れない未熟な生命体だからなんだという、辛い答えを山本弘が書き下ろし長編『アイの物語』(角川書店）で突きつける。ファンタジー『ソードワールド』シリーズの中心的な書き手で『サーラの冒険』シリーズを刊行。一方で「と学会」会長としてオカルトや疑似科学の嘘を暴く活動でも知られる山本弘だが、テクノロジーやサイエンスに根ざしたハードな設定のSF作品でも高い評価を受けている。

近未来、人は知性を持ったロボットによって駆逐され、わずかな人数が世界のあちらこちらにコロニーを作って暮らしていた。そんな生き残りのひとりである〝僕〟は、食糧を手に入れるため忍び込んだ新宿で、アイビスという名の女性型ロボットに捕まって七つの物語を聞かされる。

一話目。いじめを受けていた少年が相手をナイフで刺し殺してしまった。少年は、ネット上に作られた架空の宇宙船の乗組員となり、誰かのシナリオによって起こされる事件を、他の乗組員たち

ポストガール
増子二郎　イラスト:GASHIN
電撃文庫　定価:557円(税込)

今月読んでもらいたい本はこれ!

● I N D E X

※このコーナーで紹介した書籍の定価は、平成18年6月末現在の税率(5%)に基づいた表示です。

Sneaker's BU

COMING SOON

劇場版アニメ
時をかける少女

以前この情報ページにてお伝えした劇場版アニメーション「時をかける少女」の公開日が決定したぞ　7月15日(土)より、東京・テアトル新宿、千葉・シネプレックス幕張ほかにて順次全国公開。劇場前売り券は以下の映画館で発売されるので、公開が待ちきれないというキミ、ぜひ足を運んでみてね！

北海道：
ユナイテッド・シネマ札幌
シネプレックス旭川
東京：
テアトル新宿
千葉：
シネプレックス幕張
京成ローザ
神奈川：
シネプレックス平塚
埼玉：
シネプレックスわかば
シネプレックス新座
シネプレックス幸手
茨城：
シネプレックス水戸
シネプレックスつくば
愛知：
名古屋シルバー劇場
大阪：
テアトル梅田
兵庫：
109シネマズＨＡＴ神戸
福岡：
シネプレックス小倉
熊本：
シネプレックス熊本

ほかにも全国ローソンのチケット端末「Loppi」でも前売り券を購入できるぞ

映画に関する最新情報やイベント情報、現場レポートなどをスタッフがお届けする「時をかける少女」公式ブログ
http://www.kadokawa.co.jp/blog/tokikake/

こちらもチェックしてね！

TOPICS

出渕デザインのロボットが歩く！『チョロメテ』お披露目！

『ロードス島戦記』のイラスト以外にも、『機動警察パトレイバー』などのメカニックデザインでも有名な出渕裕が、外装や全体のデザイン監修をつとめた小型ヒューマノイドロボット「HRP-2m Choromet」が開発・発表されたぞ。

小型で安価であることを目指して開発された「チョロメテ」は、二足歩行し、寝そべったり起きあがったりする事も可能。教育・研究用ロボットへの応用を期待されている。キミのもとに来る日も近いかも!?

産業技術総合研究所
http://www.aist.go.jp/

MAGAZINE

衝撃のアニメ放送から10年――『エヴァンゲリオン・クロニクル』創刊

一九九五年にテレビ放送され、社会現象にもなったアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』のパートワーク『エヴァンゲリオン・クロニクル』がソニー・マガジンズより創刊されるぞ。

パートワークとはテーマをしぼった百科事典を分冊刊行する方式で、「エヴァ」のテレビ版や劇場版のストーリー、キャラの解説に加え、描き下ろしイラスト満載の内容なのだ。

ファンのキミ、全巻揃えて「エヴァ」の大百科を完成させてみては!?

創刊号は590円（税込）で7月1日発売予定

ANIME

近未来幕末ミリタリーアクション登場 TVアニメ『イノセント・ヴィーナス』

地球規模で発生したハリケーンにより、多くの命が失われ、経済・軍事バランスが崩壊した世界。日本は限定的に復興に成功するも各地の貧富の差は拡がっていた。そんな中、特殊部隊《ファントム》を脱走した丈と仁は、謎を秘めた少女・沙那を連れ出す。沙那を巡って多くの思惑が絡み合い、3人にパワードスーツ部隊が迫るが!?　近未来の日本を舞台にした『イノセント・ヴィーナス』は7月26日深夜0時よりＷＯＷＯＷノンスクランブルにて放送開始！

http://www.innocent-v.com/
（公式HP）

EVENT

冲方丁原作のアニメの合同イベント開催

二〇〇六年夏放送予定の『シュヴァリエ』とアニメ化企画進行中の『マルドゥック・スクランブル』の合同イベントが開催されるぞ。「シュヴァリエ」の第1話の上映に加え、両作品の原作と脚本をつとめる冲方丁のトークショーでは『マルドゥック・スクランブル』のプロモーションビデオが初公開されるなど、見所たっぷり。そこで、このイベントに10名様をご招待。どしどし応募してね－

【日程】8月5日（土）
【場所】東京・スペース汐留ＦＳホール
【開演】13時（開場12時30分）
【募集要項】住所、氏名、年齢の他、必ず「ザ・スニーカー」を見て応募と明記。抽選で10名様をご招待（招待状は当選者1名様のみ有効）。発表は招待状の発送をもって替えさせていただきます（招待状は松竹より発送されます）。
【応募先】〒一〇四－八四二二　東京都中央区築地四－一－一　東劇ビル10F　松竹株式会社「冲方フェスタ　昼の部」係
【締切】郵便7月18日（火）消印有効
※詳細は、http://www.chevalier.tv/
もしくはWOWOWカスタマーセンターへ
0120-580807（9時～20時／年中無休）

ARD スニーカー情報局

夏目前！　今号では長い休暇にぴったりのアイテムをご紹介！

DVD

名作は何度でも蘇る——OVA『ロードス島戦記』が限定復刻！

一九九〇年にOVA化され、その映像クオリティの高さで当時のアニメファンを驚かせた『ロードス島戦記』が、装いも新たに蘇る！

　一九八六年に登場し、圧倒的な支持を得た『ロードス島戦記』。TRPGから始まり、小説、PCゲーム、アニメへと展開し、メディアミックスの先駆けとなった。アニメ化された当時は、レーザーディスクとして発売され、九九年にはDVD化もされた。そして今回、多数の要望に応える形で、DVD＋CD BOXとして限定復刻生産されるのだ。

　内容は超豪華。BOXを始め、DVD（6巻、全13話）、オリジナルサウンドトラックCD（3枚組）などのジャケット、そして解説書の表紙にもこのDVD専用の出渕裕のイラストが使用されているのだ。解説書には32ページにわたって『ロードス島戦記』をとりまく世界を書いており、「ロードス」に初めて触れる人にもオススメの内容。さらに先着予約購入特典として、『ロードス島戦記』のコンセプトブック（こちらは九〇年に発売されたLDの先着予約購入特典の復刻版）がもらえるのだ！

　まもなく二〇周年を迎える『ロードス島戦記』。その節目にふさわしい本作をぜひキミの手に！

ビクターエンタテインメントより
30000円（税込）で9月21日発売予定

先着予約購入特典のコンセプトブック→
購入するなら今すぐ予約を!!

MOVIE&GAME

この夏、劇場版アニメとゲームが展開中『ブレイブ ストーリー』に注目！

宮部みゆきのベストセラー『ブレイブ・ストーリー』（角川文庫版、スニーカー文庫版が発売中）が劇場版アニメとして、この夏公開される。

　ワタルはある夜、「幽霊ビル」の探索中、階段の上に浮かぶ奇妙な扉の中に転校生のミツルが入っていくのを目撃する。ミツルによると「扉の向こうに行けば、運命が変えられ、願いが一つだけ叶う」という。そんな時、ワタルの家でいくつものトラブルが発生。そんな運命を変えるべく扉の向こうに行くことを決心する。

　扉の向こうは「幻界（ヴィジョン）」とよばれる世界。願いを叶えるには5つの宝玉を集める必要があった。旅の途中で知り合った仲間とともに、ワタルは宝玉を集めることができるのか？　そして「幻界」で再会したミツルの目的とは!?　少年が出会う不思議と成長を描いたファンタジー『ブレイブ ストーリー』は7月8日ロードショー。

　そしてニンテンドーDSソフト『ブレイブ ストーリー　ボクのキオクとネガイ』が発売。記憶をなくした少年がプレイヤーとなり「幻界」を旅して記憶を取り戻していく。「幻界」で出会うワタルか、ミツルのどちらかと旅をするマルチストーリーとなっていて、くり返し楽しめるのだ。

　夏休みにふさわしい「冒険と成長」の物語。キミも是非楽しんで下さい！

劇場版アニメ『ブレイブ ストーリー』は
7月8日ロードショー

バンダイナムコゲームスより
5040円（税込）で7月6日発売予定

涼宮ハルヒ率いるSOS団を応援するためのサポータークラブ

SOS会報

大好評!
「涼宮ハルヒ」特製QUOカード
応募者全員サービス応募要項!

大好評全員サービスQUOカード。今号の表紙を飾ったSOS団の誇る三人ムスメが登場!

ご注意!

【ご応募について】
●封筒は中身が出ないように、しっかりと封をしてください。
●1通の封筒でご応募できるのは1口のみです。2口以上の応募は無効となりますのでご注意ください。
●応募台紙に記入ミスがある場合、QUOカードの発送が出来なくなる場合がありますので、ご注意ください。
●海外からの応募、並び海外への発送は受け付けておりません。

【郵便定額小為替について】
●小為替の「受領証」以外の部分には、何も記入せず折ったり切り離したりしないでください。
●「受領証」は搬送中に事故等が起こったときに必要になりますので、賞品が届くまで大切に保管してください。
●小為替の有効期限が1ヶ月未満のものは使用しないでください。
●規定金額より多額の小為替をお送り頂いても、差額はご返金できません

QUOカード発送に関するお問い合わせ先
(株)J・L・S「角川書店　ザ・スニーカー8月号」係
TEL:03-3262-6151
(10時～12時と13時～17時。土日祝日を除く)
FAX:03-3262-8218
(24時間受付可能。お問い合わせ内容、お名前、返信用FAX番号をご記入ください)

※この全員サービスに関するお問い合わせの期間は、2006年12月25日までになります。この期間を過ぎたお問い合わせには、お答えできませんのでご了承ください。
※編集部へのお問い合わせは一切受け付けておりませんので、ご了承ください。

応募方法

❶応募台紙を用意
下の《応募台紙》(コピー不可)をきりとって、必要事項を正確に記入してください。応募台紙1枚につき、一口の応募になります。

❷750円分の郵便定額小為替
郵便局の窓口で《500円と200円と50円の郵便定額小為替》を購入してください(このとき手数料がかかります)。現金・切手等のご応募は出来ません。なお、小為替にはQUOカードの送料80円が含まれています。

❸定型封筒に入れて応募
定形封筒(長型4号)を用意して、以下の要領で必要事項を記入してください。その封筒に80円切手を貼って、上の①②で用意した《応募台紙》と《750円分の郵便定額小為替》を入れてご応募ください。

《封筒表》
80円切手
102-8078
角川書店
ザ・スニーカー編集部
「ザ・スニーカーQUOカード応募者全員サービス8月号」係

《封筒裏》
(あなたの)郵便番号・住所・氏名

❹応募完了
QUOカードの発送は2006年10月下旬予定です。2006年11月中旬になっても届かない場合や、QUOカードが破損しているなどの事故については、左記の連絡先までお問い合わせください。

応募締切　2006年8月28日(月)
当日消印有効

◀専用応募台紙(コピーは無効)◀

ザ・スニーカー 2006年8月号台紙	※ここには何も書かないでください
●電話 (　　　)　　ー	
フリガナ ●氏名	
●性別 男・女	●年齢 歳
●住所 〒□□□-□□□□	

特集「涼宮ハルヒの憂鬱」

DVD

DVDリリース開始!
第1弾は「朝比奈ミクルの冒険Episode00」!!

各地で話題沸騰! あの衝撃の話題作がDVDになって好評発売中!。

↑通常版はミクルVSユキのバトルが描かれているぞ!

←こちらが限定版。いとうのいぢのイラストが目印だ!

「涼宮ハルヒの憂鬱」アニメDVD

第1巻「朝比奈ミクルの冒険 Episode00」
発売：角川書店／販売：角川エンタテインメント
価格：《限定版》4830円／《通常版》3780円 （ともに税込）
好評発売中！

EVENT［イベント］

「アニメロサマーライブ2006 アウトライド」

7/8(土)に行われる「アニメロサマーライブ2006 アウトライド」に『涼宮ハルヒの憂鬱』のエンディング曲「ハレ晴レユカイ」を歌う平野綾、茅原実里、後藤邑子の3人がライブに特別出演決定!

日程：2006年7月8日（土）
時間：OPEN 15：30／START 16：30
会場：日本武道館
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2－3
地下鉄東西線・半蔵門、都営新宿線「九段下駅」2番出口より徒歩5分
料金：前売り・指定、立見 ¥7,500円（税込）
主催：ドワンゴ／文化放送
後援：キッズステーション
企画：アニメロサマーライブ2006実行委員会
制作：フューチャーシンジケートJ
協力：エイベックス・エンタテインメント/エボリューション/オンザランギザ/キングレコード/ジェネオンエンタテインメント ビクターエンタテインメント/ベルウッドレコード/ランティス リアライズレコード（50音順）

※イベントについての詳細やチケットの購入については「Animelo Summer Live 2006 -OUTRIDE-」公式サイトでご確認ください。
アドレス http://www.animelo.tv/outride/

MOOK

アニメから原作まで!『涼宮ハルヒ』のガイドブックが登場!

NOW PRINTING

涼宮ハルヒの全てが詰まったハルヒの公式ガイドブックがついに登場! いとうのいぢの描き下ろしイラストや、その他ハルヒファンなら垂涎の面白企画満載だぞ!

オフィシャルファンブック 涼宮ハルヒの公式

予価2100円(税込)/A4版 並製

TV-ANIMATION［テレビアニメ］

アニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」を見逃すな!

放映を重ねるたび評判を呼ぶTVアニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」の放送局・放送時間を改めて紹介。

放送局	曜日	時間
東京MXテレビ	毎週水曜日	25：30～26：00
チバテレビ	毎週日曜日	24：00～24：30
テレ玉	毎週日曜日	25：30～26：00
テレビ神奈川	毎週月曜日	25：15～25：45
テレビ愛知	毎週水曜日	26：28～26：58
サンテレビ	毎週火曜日	24：00～24：30
KBS京都	毎週月曜日	25：30～26：00
広島ホームテレビ	毎週土曜日	26：05～26：35
TVQ九州放送	毎週土曜日	26：40～27：10
テレビ北海道	毎週月曜日	26：00～26：30
東北放送	毎週火曜日	26：00～26：30

※放送日時は局の都合により変更になる場合があります。
※正確な日程については当日の各新聞テレビ欄または各放送局にお問い合わせ頂くか、公式HP（http://www.haruhi.tv/）をご覧下さい。

HOMEPAGE［公式ホームページ］

アニメの最新情報はココにあるぞ! 放送時間変更もここでチェック!

団員紹介や活動報告など盛り沢山! アニメでも登場するあのキャラが君を迎えてくれるぞ。アニメ放映時間変更の情報もここで確認できるので、チェックしてね!

アドレス
http://www.haruhi.tv/

涼宮ハルヒ世界SOS化計画発動中！

ハルヒ・ワールド

HARUHI-WORLD

アニメも絶好調の『涼宮ハルヒ』。だがハルヒは「世界を大いに盛り上げる」ため、まだまだ様々なジャンルに拡大中。小説はもちろん、コミック・CDなど、現在もその活動の枠を広げているハルヒの最新情報をここに紹介するぞ。

[コミック] COMIC

No.1ライトノベル、待望のコミック第2弾登場!

キュートなSOS団が大暴れする、少年エースにて好評連載中のコミック版「涼宮ハルヒの憂鬱」の2巻が好評発売中! それを記念してのSOSキャンペーン第2弾も開催中! キャンペーンの詳細は次ページにあるぞ。

涼宮ハルヒの憂鬱②
原作／谷川 流　漫画／ツガノガク
キャラクター原案　いとうのいぢ
角川コミックスエースより好評発売中
価格：567円（税込）

CD [音楽]

君は誰の歌が聴きたい?

楽曲も注目を集めている「涼宮ハルヒ」。好評発売中のオープニングテーマとエンディングテーマに続いて、劇中歌シングル、三人ムスメのキャラクターソング、ラジオ支部の番外編も登場! キャラクターソングはそれぞれ新規2曲の他に、エンディングテーマ「ハレ晴レユカイ」のソロバージョンも収録されているぞ!

劇中歌シングル
涼宮ハルヒの詰合（つめあわせ）
涼宮ハルヒ（C.V.平野 綾）
朝比奈みくる（C.V.後藤邑子）
発売元：（株）ランティス
販売：キングレコード（株）
LACM-4268
価格1,200円（税込）
好評発売中

キャラクターソング
涼宮ハルヒの憂鬱 キャラクターソング Vol.1 涼宮ハルヒ
涼宮ハルヒ（C.V.平野 綾）
発売元：（株）ランティス
販売：キングレコード（株）
LACM-4269
価格1,200円（税込）
2006年7月5日発売

キャラクターソング
涼宮ハルヒの憂鬱 キャラクターソング Vol.2 長門有希
長門有希（C.V.茅原実里）
発売元：（株）ランティス
販売：キングレコード（株）
LACM-4270
価格1,200円（税込）
2006年7月5日発売

ラジオCD
SOS団ラジオ支部 番外編CD Vol.1
平野 綾（涼宮ハルヒ）
茅原実里（長門有希）
後藤邑子（朝比奈みくる）
発売元：（株）ランティス
販売：キングレコード（株）
LACA-5523
価格1,200円（税込）
2006年7月5日発売

キャラクターソング
涼宮ハルヒの憂鬱 キャラクターソング Vol.3 朝比奈みくる
朝比奈みくる（C.V.後藤邑子）
発売元：（株）ランティス
販売：キングレコード（株）
LACA-5523
価格1,200円（税込）
2006年7月5日発売

[ラジオ番組] RADIO

三人ムスメが喋りまくりで送る30分。ラジオも絶好調!

SOS団の誇る三人ムスメ役の平野綾、茅原実里、後藤邑子が、いろんなお題で喋りまくりで話題のラジオ。本放送の一週間後にはインターネットで全国どこでも視聴可能だぞ!

涼宮ハルヒの憂鬱「SOS団ラジオ支部」
ラジオ関西　毎週金曜、24:30～
出演平野綾（涼宮ハルヒ役）、茅原実里（長門有希役）、後藤邑子（朝比奈みくる役）
本放送の一週間後には、ランティスウェブラジオ（http://lantis-net.com/）にて視聴可能。

放送第10話　構成4話「涼宮ハルヒの憂鬱Ⅳ」

監督　石原立也
シリーズ演出　山本寛
キャラクターデザイン・総作画監督　池田晶子
美術監督　田村せいき

脚本　石原立也
絵コンテ・演出　石立太一
作画監督　西屋太志

STORY

不思議なことを探すために街に出たSOS団だったが、そうそう簡単に不思議なものが見つかるはずもなく、ハルヒは次第に不機嫌になっていく。そんなハルヒが喜ぶような事件など起きるはずもないと思っていたキョンだったが、実はキョンの方にこそ事件が起きていたのだった。呼び出しの手紙をもらい、教室へ向かうキョン。そこにいたのはクラス委員長の朝倉だった。ナイフを手にした朝倉に動揺するキョンに告げられる新たな事実。それは彼女も長門と同じヒューマノイド・インターフェイスであるということ。状況を変化させるため、キョンを殺すというのだ。長門の介入により、朝倉を消滅させることに成功し、難を逃れたキョン。だが、その結果不自然なタイミングで転校したことになってしまった朝倉という「不思議」にハルヒが興味を持ち始めてしまう。そしてキョンの元にさらなる呼び出しの手紙が。それは未来から来た朝比奈みくる、その人だった——。

POINT

●この回は、弱ったハルヒや、普段アクションに縁のない長門による手に汗握る超常バトル、朝比奈みくる（大）のダイナマイトなセクシーショットと見所が盛り沢山だ。

放送第11話　構成13話「射手座の日」

監督　石原立也
シリーズ演出　山本寛
キャラクターデザイン・総作画監督　池田晶子
美術監督　田村せいき

脚本　賀東招二
絵コンテ　演出　武本康弘
作画監督　堀口悠紀子

STORY

みくるが入れるお茶を啜りながら、のんびりと過ごすSOS団。そんな静寂を破ったのは、ハルヒにパソコンを奪われた過去を持つコンピュータ研の面々だった。ハルヒの暴挙を根に持って、自作の宇宙艦隊シミュレーションゲームで勝負しにきたのだ。勝負が好きなハルヒは部員全員分のパソコンを景品に勝負を受ける。だが、突撃しかしないハルヒに、パソコンの素人の団員では勝負にならず、SOS団は劣勢に追い込まれていたが、長門が分艦隊の機能を使い、なんとか敗北を間逃れていた。常人ではあり得ないほどのタイピング速度でパソコンを操る長門に、ズルをするなと告げるキョン。だが長門によれば、コンピ研こそ索敵モードをインチキして、SOS団の艦隊の位置をすべて把握していたらしい。そんな姑息な手段も、長門有希のハッキングでぶち破り、状況が逆転。総攻撃をかけ、さらには長門艦隊による波動砲発射、SOS団の圧勝に終わったのであった。

POINT

●今回の見物はやはり艦隊戦の様子。ただ、派手なシーンだけではなく、各艦隊のオペレーターにも注目してみよう。それぞれの個性にあったオペレーターを見ることが出来るぞ。

放送第12話　構成12話「ライブアライブ」

監督　石原立也
シリーズ演出　山本寛
キャラクターデザイン・総作画監督　池田晶子
美術監督　田村せいき

脚本　山本寛
絵コンテ　山本寛　門脇聡
演出　山本寛
演出補佐　渡邊政治
作画監督　門脇聡

STORY

徹夜で「朝比奈ミクルの冒険　Episode00」を仕上げ、どうにか学園祭の上映に間に合わせたキョンは、疲れた体を癒すべく鶴屋さんとみくるがやっている焼きそば屋へと向かう。しかし、あまりの繁盛ぶりに長居ができず、校内をぶらぶらした後、しかたなしに講堂で吹奏楽や軽音楽の演奏を見ることにする。しかし疲れが限界に来ていたキョンは居眠りを始める。しかし会場が盛り上がり目を覚ますと、誰あろうハルヒと長門がENOZというバンドでライブに登場していた。驚くキョンの前で、抜群の歌を披露するハルヒと、スーパーテクニックでギターを奏でる長門は観客を虜にしていく。その演奏はキョンも聞き入ってしまうほどだった。翌日に話を聞くと、ENOZのオリジナルメンバーが演奏できないため、代役で登場したとのこと。さらにそのメンバーにお礼を言われ戸惑うハルヒだったが、キョンと話をするうちに気持ちは来年の文化祭へと暴走していた。

POINT

●楽器演奏シーンまで音楽にぴったり合わせたハルヒや長門の演奏の描写は驚愕の一言。アニメ史上NO.1のライブシーンは絶対に見逃せないぞ。

放送第7話　構成8話
「ミステリックサイン」

監督　石原立也
シリーズ演出　山本寛
キャラクターデザイン・総作画監督　池田晶子
美術監督　田村せいき

脚本　ジョー伊藤
絵コンテ　演出　石立太一
作画監督　西屋太志

STORY

ハルヒは訪問者が全く増えないサイトを賑やかにするためSOS団のシンボルを作成していた。その地道な活動を続けたおかげか相談者第1号が現れる。その依頼人の名は喜緑江美里。彼女は自分の彼氏を捜して欲しいと告げる。しかも、その彼氏はコンピ研の部長。依頼人が来たことで上機嫌のハルヒは、この事件を簡単に引き受けてしまう。二ヶ月遅れの五月病で引きこもっているだけと主張するハルヒに連れられてコンピ研部長の部屋へと向かったが、そこには部長はおらず、部屋は異常空間になっていた。このままでは大変なことになるというので、ハルヒ抜きで部屋に再集合したSOS団の目の前に巨大なカマドウマが現れる。なんとかそれを倒し部長は確保したが、長門によれば、ハルヒが造ったSOS団のシンボルがその現象を引き起こしてしまったのだという――。そこでキョンはSOS団からZOZ団へとシンボルを変え、この現象を収めることに成功する。

POINT

●原作で謎めいた言動を繰り返す喜緑江美里もアニメに登場。サブキャラまでもしっかりと作り込まれ可愛らしく描かれているぞ。さらにムシキ○グばりの昆虫アクションも必見。

放送第8話　構成10話
「孤島症候群（後編）」

監督　石原立也
シリーズ演出　山本寛
キャラクターデザイン・総作画監督　池田晶子
美術監督　田村せいき

脚本　志茂文彦
絵コンテ　演出　荒谷朋恵
作画監督　門脇聡

STORY

発見された多丸圭一は、部屋に鍵が掛かっているというクローズドサークルと呼ばれる状況で胸にナイフが刺さり亡くなっていた。さらに、弟の多丸裕が屋敷からいなくなっていることが明らかになる。犯人は？　この中にいるのか？　それとも消えた裕が犯人なのか？　犯人探しを始めたハルヒ。そのとき豪雨の屋外に人影が！　追いかけるハルヒとキョンだったがその人影を見失ってしまう。さらに崖から落ちたことにより身動きがとれなくなってしまった二人は洞窟で休憩を兼ね、推理を始める。そしてハルヒは、圭一の死はドアをこじ開けた時の事故で、キョンたちが殺してしまったという結論にたどり着くが、キョンたちをかばうためその事実を胸に秘め屋敷に戻る。そのことを同じように事実にたどり着いた古泉から告げられたキョンは、事実を知ってしまった古泉を手にかける――。

POINT

●ミステリ調に進むストーリーもさることながら、それと共にハルヒとキョンによる洞窟での雨宿りなどドキドキシュチエーション満載のこの回。さらにキョンは他にも大活躍を見せるので、キョンファンは絶対に見逃せないぞ。

放送第9話　構成14話
「サムデイ イン ザ レイン」

監督　石原立也
シリーズ演出　山本寛
キャラクターデザイン・総作画監督　池田晶子
美術監督　田村せいき

脚本　谷川流
絵コンテ　山本寛
演出　北之原孝将
作画監督　米田光良

STORY

ハルヒがいないSOS団部室。静かな部室に安心とほんの少しの寂しさを感じながら、のんびりとみくるの入れたお茶を啜りながら、カードゲームに興じるキョン。だがその安心も一瞬だった。ハルヒがいつもの勢いで部室に現れ、ストーブを貰えることになったので取ってこいとキョンに告げる。渋々ながらも取りに向かうキョン。しかし、それはみくるの写真を撮る邪魔をするキョンを追い出すためのハルヒの陰謀だったのだ。キョンがいなくなった部室や学校でみくるの写真を取りまくるハルヒ。本を読み続ける長門。思い思いに過ごすSOS団の面々。ようやく部室に戻ったキョンだが、疲れて眠りこけてしまう。目覚めたキョンが見たのは、ハルヒの姿と自分に掛けられた2枚のカーディガン。キョンを待っていたというハルヒと共に、一本しかない傘に入り、二人は雨の中を帰るのだった――。

POINT

●SOS団の日常が垣間見えるこの回。色々なコスチュームを着せられるみくるはもちろん、最大な見所は長門が本を読んでいるシーン。君は長門の日常にたえられるか!?

放送第4話　構成7話
「涼宮ハルヒの退屈」

監督　石原立也
シリーズ演出　山本寛
キャラクターデザイン・総作画監督　池田晶子
美術監督　田村せいき
脚本　村本克彦
絵コンテ・演出　吉岡忍
作画監督　池田和美&荒谷朋恵

STORY

部室でゲームに興じつつ、みくるの入れたお茶を飲み、春に起きた事件を回想していたキョンの前に、いつものようにテンション高く現れたハルヒ。その手に持つチラシには「野球大会」の文字が。ハルヒはSOS団を世間に知らしめるため草野球に参加するというのだ。なんとか人数を集めて参加したのはいいものの、優勝候補を相手に手も足もでないSOS団。思い通りの試合にならず、少しずつ募ってくるハルヒのいらだち。そのとき、古泉の携帯電話が鳴り響き、告げる「閉鎖空間が発動しました」と。このままでは、ハルヒの無意識の暴走によって世界が危うい。そこでキョンと古泉はある人物に助っ人を頼む。その人物こそ、長門有希。一見運動に全く適しそうにない彼女だが、宇宙的な力を用いて、バットを勝手にボールを追いかけるホーミングバットに変え、さらにボールを思い通りに曲げるミットなどを駆使して、SOS団を勝利に導き、窮地を救った――。

POINT

●この回から「おやっ」と思った視聴者も多いはず。この話は時間的に「涼宮ハルヒの憂鬱」の後に当たるため、そこかしこに、この後放映されるエピソードの情報やイメージの一旦を伺うことができるのだ。気付いた人はいるかかな？

放送第5話　構成3話
「涼宮ハルヒの憂鬱Ⅲ」

監督　石原立也
シリーズ演出　山本寛
キャラクターデザイン・総作画監督　池田晶子
美術監督　田村せいき
脚本　山本寛
絵コンテ・演出　坂本一也
作画監督　堀口悠紀子

STORY

自らが宇宙人であると告白し、さらに涼宮ハルヒが自律進化の可能性を秘めており、都合の良いように周囲の環境情報を操作する力があると告げる長門。なぜ自分にそれを明かすのかと問うキョンに、キョンはハルヒに選ばれており、ハルヒと共にすべての可能性を握ったことにより、危険が迫っていると告げられる。理解できない告白にとまどうキョンの前に、翌日ハルヒがSOS団の新団員をつれてくる。それは、ただこの時期に転校してきただけで、謎の転校生と決められた少年・古泉一樹。さらに明らかになったのはSOS団の「宇宙人・未来人・超能力者を捜して一緒に遊ぶこと」という目的であった。その目的を果たすため、土曜日に不思議捜しのツアーを敢行するSOS団。そのツアーの最中、キョンはみくるから自分が未来人であると告げられ、さらに後日古泉からも自分が超能力者であると告白される。しかも二人とも「涼宮ハルヒ」こそが、すべての鍵であるというのだ――。

POINT

●長門、みくる、古泉それぞれがキョンに向かって長ゼリフを披露するこの回。それぞれに個性豊かなセリフ回しだが、特に見物なのは普段ほとんど話さない長門の長時間にわたる説明セリフ。長門ファンは必見だぞ！

放送第6話　構成9話
「孤島症候群（前編）」

監督　石原立也
シリーズ演出　山本寛
キャラクターデザイン・総作画監督　池田晶子
美術監督　田村せいき
脚本　村本克彦
絵コンテ　吉岡忍　荒谷朋恵
演出　吉岡忍
作画監督　荒谷朋恵

STORY

突然、夏休みに三泊四日の合宿をすると告げるハルヒ。しかも行き先は古泉の知り合いが持っている無人島に建てた別荘。孤島にある館では、事件が起きるに違いないと信じて盛り上がるハルヒ。だが、フェリーにのって向かった別荘は、思いがけず普通なものだった。安心してメイドの森、執事の新川、別荘の持ち主、多丸兄弟（兄・圭一　弟・裕）への挨拶をすませ、ビーチバレーやらバナナボートやらと、思いっきり夏の海を楽しみつつ、SOS団は合宿1日目を終える。2日目は嵐となり島に閉じこめられたことに不安を覚えつつも、屋敷内で麻雀・卓球・王様ゲームに興じるSOS団。このまま何事もなく終わると思われた合宿だったが、執事の新川から、別荘の持ち主である多丸裕氏の部屋に鍵が掛かり、さらに内線にも出なく連絡が取れなくなったと告げられる。そこで鍵の掛かったドアを破ることにしたキョンたちだったが、そこには、ナイフが胸に刺さった裕の姿が――。

POINT

●海と言えば水着。SOS団の誇る三人ムスメの水着姿は、言わずもがなのナイスバディーみくるはもちろん、スタイル抜群のハルヒ、スレンダーな長門とそれぞれ破壊力満点。夏を満喫するSOS団の様子は目の保養になること間違いなし！

TVアニメ「涼宮ハルヒ」誌上特別放映

ハルヒ・ストーリーズ

HARUHI-STORIES

先を読ませぬ構成に加え、各話の高いクオリティで評判を呼んでいるアニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」。ザ・スニーカーでは現在までに放映している全ての話数の誌上放映を行うぞ。アニメを見てない人はもちろん、アニメを見た人も、この誌上放映を見てをもう一度、アニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」を楽しんでくれ！

放送第1話　構成11話
「朝比奈ミクルの冒険 Episode00」

監督　石原立也
シリーズ演出　山本寛
キャラクターデザイン・総作画監督　池田晶子
美術監督　田村せいき
脚本・絵コンテ・演出　山本寛
演出補佐　渡邉政治　作画監督　門脇聡

STORY

どこにでもある商店街。そこにある八百屋でバニーガール姿で売り子をしている一人の少女・朝比奈ミクル。実は彼女は未来からきた戦うウェイトレスで、超能力者古泉イツキを守るため現代に来ていたのだ。イツキを狙うのは、悪の宇宙人魔法使いユキ。ここにミクルとユキによる対決が始まった。ぶれる画面、写り込むキャラ、繋がらない音声、揺れる乳と息をつかせぬ展開の中、繰り広げられる二人の対決。さらにミクルとイツキによる新婚さんのような嬉し恥ずかしハプニングやユキによるラブラブアタック等々をへて、最終決戦が始まった。そしてミクルが追い込まれたときイツキのスーパーインクレディブパワーが目覚め、ユキが倒され世界に平和が取り戻された……。そして流れるエンディングクレジットと「この物語はフィクションです」のアナウンス。そう、今までに流れていたのは、SOS団団長・涼宮ハルヒが学園祭のためにとった自主映画だったのだ……。

POINT

●自主映画の映像、演出をオーバークオリティに描き出した本作。その最たるものはこの回のために用意されたOPソング「恋のミクル伝説」だろう。もはや説明の必要もないほどのインパクトを持って世に衝撃を与えた、アニメ史上に残るオープニングだ。

放送第2話　構成1話
「涼宮ハルヒの憂鬱Ⅰ」

監督　石原立也
シリーズ演出　山本寛
キャラクターデザイン・総作画監督　池田晶子
美術監督　田村せいき
脚本・絵コンテ・演出　石原立也
作画監督　池田晶子

STORY

学校へ続く急な坂道を上りながら少年は思う。世界の物理法則は良くできていて、宇宙人や未来人、超能力者などいないということを。そんなことを考えながら自己紹介を終えたキョンの次に口を開いた少女から出たのは「ただの人間には興味ありません」の一言。その少女こそ涼宮ハルヒその人であった。全てのクラブに加入する等の奇行を繰り返すハルヒに興味を持つキョン。話しかけ続けたおかげか、少しずつ会話をするようになった二人。「どのクラブもつまらない」というハルヒに、それが当たり前だと告げるキョン。それがきっかけになったのかハルヒは思いつく「自分でクラブを作ればいいのよ」と。そこから驚愕のバイタリティを発揮するハルヒ。文芸部室と文芸部員のユキを確保しつつ、さらに萌え要素満載の美少女・朝比奈みくるを強引に部員に加えることに成功。こうして「世界を大いに盛り上げるための涼宮ハルヒの団」通称SOS団が発足されたのだ――。

POINT

●お馴染みの「ただの人間には興味ありません」のセリフや、小説では見ることの出来なかったハルヒ髪型七変化や各部活で活躍する様、さらにはSOS団をあっという間に立ち上げる等々、ハルヒのバイタリティにあふれた行動が見所。

放送第3話　構成2話
「涼宮ハルヒの憂鬱Ⅱ」

監督　石原立也
シリーズ演出　山本寛
キャラクターデザイン・総作画監督　池田晶子
美術監督　田村せいき
脚本　山本寛
絵コンテ・演出　北之原孝将
作画監督　米田光良

STORY

ついに始まったSOS団としての活動。まずは部室にパソコンを完備することを宣言するハルヒ。パソコンをゲットするため、となりのコンピュータ研に向かうが、もちろん素直にパソコンを渡さないコンピ研に、ハルヒはみくるを使って罠を仕掛け、見事パソコンをゲットすることに成功。その勢いにのって、みくるを伴いバニーガール姿となり、SOS団の所信表明を校門で配り始めた。その内容は「広く不思議なものを募集します」というもの。そんな内容が教師たちに認められるハズもなく、生徒指導室に連行されハルヒは不機嫌になっていく。そんなこんなでSOS団としての活動が始まったなか、文芸部員でありながらSOS団の団員である無口な眼鏡っ子・長門有希からの呼び出しを受け、キョンはその自宅へ向かう。そこで長門は告げる「私は宇宙人によって造られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイス」だと……。

POINT

●パソコンをゲットするために、コンピ研部長に××を□□られちゃったり、問答無用でバニーガールの恰好をさせられてしまったみくる。恥じらいながらも披露してくれた、そのハルヒをして「私よりでかい」と言わしめたナイスバディーは一見の価値あり。

あれは小説ではまずやらないじゃないですか。そういう違いは自覚的にやらないと、つまんないものになっちゃうかもしれません。

谷川　小説のままでは、脚本にはなりませんよね。でも今回は、いったん小説にしてから脚本にした方が楽だったかなぁって、いまは思ってます。2度手間みたいな感じですけど。

キョンの本名があきらかに!?

賀東　キョンの本名が本当はあるという話をうかがったんですが。

谷川　どれにしようかなって考えてる状況で。

賀東　そこは謎めいた声で「本当はあるんですよ」って言うところじゃないですか！（笑）

谷川　出すか出さないかも込みで、いろいろ考えている最中なんです。無意味に出してもしょうがないなと思うんですよね。

賀東　最終回の一番最後に出すとか。

谷川　僕の想定している最終回では、そういうシーンはないので。

賀東　でもやっぱり、最後はあたためてらっしゃるわけですね。

谷川　それがないとつらいですよね。書いてても、終わりが見えないと。

賀東　それはあります。自分も一応決めてはいるんですけども、いつになったら行けるやらって感じですけどね。

谷川　そのあたりは、物語的な要請があるじゃないですか。このエピソードやっとかないと、物語を終わりにできないってのがあるから。

賀東　唐突にラストシーンを出す訳には、いかないですからね。

谷川　その前に、やることはやっておかないと。

賀東　で、最後はどうなるんですか？ここだけの話。

谷川　いや、僕も賀東さんに聞きたいですよ。フルメタはどうなるんですか？

賀東　いや、これはスニーカーの企画ですから、僕の話はいいですよ（笑）

谷川　いや、ここ（対談の行われた場所）富士見だし（笑）でもまぁ、オチがどうなるかなんて聞きたくないでしょ？　僕も言いたくないですし。

賀東　言うと一気に、書く気がなくなりそうな気がしますよ。

谷川　言ったはいいけど、そんなオチにならなかったりするかもしれないし。

賀東　それも往々にしてありますからね。書いてるうちに気が変わったりしますから。

実現なるか？夢のコラボ企画

賀東　そのうち合同企画で『フルメタVSハルヒ』というのは（笑）

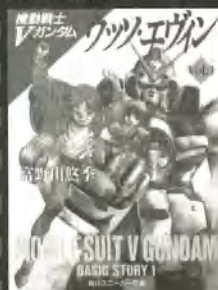
谷川　実は、ハルヒが陣代高校に突然通ってもいいんじゃないのと（会議の席で）言ってたんですよ。「あ、間違えた！」と言って帰る、ただそれだけのために（笑）

賀東　逆に、宗介が北高に転校してきたりね。ちょっとだけ入って去っていくとかね。

谷川　あるいは、『フルメタ』の1つのエピソードを、『ハルヒ』のキャラがまるまるやるとか。

賀東　それは凄いな。『フルメタ』のOVAがこんど出るんですけども、その中に出てくるクルーゾーってキャラクターが、実はアニオタなんですよね。夢中になってるアニメを『ハルヒ』にすりゃよかった（笑）

五月某日　富士見書房ビルにて

※4　'93年に放送された『機動戦士機動戦士Vガンダム』は、第1話でいきなり主人公のウッソがガンダムを操縦して戦闘を繰り広げ、第2話以降の回想でそこに至るまでを描くという手法がとられた。小説版が角川書店スニーカー文庫より発売中。

角川スニーカー文庫
機動戦士Vガンダム（全5巻）
著：富野由悠季　イラスト：美樹本晴彦

*5 '81年に放送された『太陽の牙ダグラム』は、なんと第1話が番外編扱いのエピソードとなっている。ある意味、時代を四半世紀ほど先取りした作品。

「賀東招二」×「谷川流」対談

谷川　やられちゃったんですかね？　構成について言えば、本来ならば、最初から（時系列順に）順繰りにやればいいんですけども、『憂鬱』のラストを最終話に持って来るという前提条件があったから。まさか、『憂鬱』の話を十数話も続けられないので、そういうところから派生したわけですね。そう最初に先行するエピソードをやって、回想で『憂鬱』の話をするというアイデアもあったと思うんですけど、それよりは入れ子方式でやってしまおうではないかということで、何度か会議している間に決まったという感じですね。

賀東　原作のプロットそのものを改変しちゃうような案は出たんですか？　例えば、基本は『憂鬱』の流れなんだけど、SOS団が揃うまで早めにやっちゃって、その後に普通の短編エピソードを入れ込んでみたいな。

谷川　それは、僕がちょっと嫌だった。やっぱり、後のエピソードというのは、『憂鬱』が終わってから発生しているので、キャラクターの心情とかが変わっちゃう。『憂鬱』を踏まえてということだから、時間軸上で短編を先に持ってくると、おかしいことになっちゃうんですよね。

賀東　そこは難しいですね。そうするとやっぱり、いまのような形にならざるを得ないと。

谷川　結果的になったって訳ですね。最初からこの形を目指していた訳ではないかな。僕は『Vガンダム』（※4）の第1話とか大好きだし、面白いんじゃないかとか思いまして（笑）

賀東　僕も『ダグラム』（※5）の第1話好きですから（笑）　いまの若い人にはわかんないかなぁ？　でも『ダグラム』、『Vガンダム』を継ぐ血統なんですよハルヒは（笑）

谷川　そこまで無茶なことはやってませんよ（笑）

小説と脚本の違い

賀東　谷川さんも脚本を担当されましたが、やってみていかがでしたでしょうか？

谷川　正直、見よう見まねでやったので、いいのかどうなのかわからないところが、いまだにありますね。それに、僕のはオリジナルエピソードなので、元からあった話を脚本化するという訳ではないので、そのへんの苦労も僕はしていないように思います。どの脚本も、縮めたり削ったりちょっと増やしたりしないといけないとかあるんですけど、僕の場合は最初から最後までずーっと書いちゃいましたから。

賀東　そうなんですよね。確かに原作をいじると、削ったり組み替えたりとかが、とても多くなるじゃないですか。加えて、ちょっとアニメ映えするところをボリューム増やしたりとか。

谷川　そうですね。

賀東　自分がやった脚本の話ですと、人様の作品の脚本というのは初めてだったので、なかなか楽しかったですね。そういう立場でやってみると、原作をどの程度活かすかとか、このへんは変えちゃうとか削るかとか迷いまして。自分の作品の脚本やるときは、削る場所なんて「俺が削るんだからどこでもいいだろう」ってくらいのものなんですけど、やっぱり人様の作品ですから、そのへん気を使って悩んだりはしましたね。まぁ面白かったですけども。書いていくと、だんだんキャラクターがかわいくなってきますしね。僕はキョンが大好きでしてね。

谷川　それはありがたいことです。

賀東　キョンがもっと目立ちまくる話とか、自分でやってみたいですね。キョンと古泉だけ出てくるロードムービーっぽい話とか、なんか面白そう。

谷川　プロット下さいよ（笑）

――小説を書くときとアニメの脚本で、発想が変わったりとかはありますか？

賀東　とりあえず、入浴シーンとか長くしようとか（笑）　小説でお色気描写って、書いてる本人もたいして楽しくないじゃないですか。

谷川　まぁ、実際に見られるわけじゃないし（笑）　小説にない要素といえば、カメラワークとかですよね。このキャラの角度で向こうの方は見えないとか、そういうのって小説では意味ないですよね。そのへん、違いがあるといえるんじゃないでしょうか。

賀東　あとは、シーンの切り替え方とかですね。『射手座の日』の冒頭シーンでハルヒが自分の艦内でコンピ研なんかどうのこうのと言って、そこでキョン側の艦の発令所が映って、スクリーンの中のハルヒが「ギッタギタにやっちゃいなさい」って言う。アニメだと普通にある切り替え方なんですけど、

賀東招二
ゲーム企画・ライター業などを経験し作家デビュー。代表作の「フルメタル・パニック！（富士見ファンタジア文庫）」は、アニメやコミックなど幅広いメディア展開を見せライトノベル界に新風を巻き起こしている。

谷川流
2003年、第8回スニーカー大賞〈大賞〉を『涼宮ハルヒの憂鬱』で受賞し、デビューを果たす。同作はシリーズ化し現在8巻まで刊行されている。

計算の上に築かれたメチャクチャさ加減

賀東　その第1話なんですが、最初に（こうしようと）言い出したのは誰なんですか？

谷川　たぶん、何割かは僕なんです。

賀東　（笑）じゃあ、みんなで共犯なんですね、あれは。

谷川　第1話の選択肢として、普通に『憂鬱』の冒頭からってのもあったと思うんですけど、これから時系列がゴチャゴチャになるのに第1話をマトモにしても、これはかえって不親切だろうと。最初から〝メチャクチャになる〟ということを明示しておいた方がいいなと、少なくとも僕は考えました。

賀東　確かにメチャクチャですもんね、最初から。

谷川　一応、計算されているというエクスキューズはあるんですけど。

賀東　計算されたメチャクチャだと（笑）

谷川　決してサイコロ振って決めたわけでなく。

賀東　僕はどういうことやるのか、あらかじめ聞いはいてたんですけど、本放送のときにテレビ見て「やりやがった！」と思いましたよ（笑）

谷川　まぁ「みんみんミラクル」（※1）には確かに。

賀東　あの歌が、また強烈なんですよね。頭から離れないんですよ。

谷川　（歌を）全部覚えてしまいましたよ。

賀東　「おしゃまなキューティー」とか「カモン、レッツ・ダンス」とか、ダサダサなフレーズをちゃんと狙って持ってこれるところがまた。作詞が総合演出の山本さんなんですけどね（笑）どうですか聴いてみて？

谷川　素晴らしい電波ソングです。一回聴いたら忘れられない。あれは歌っている声優の後藤さんも素晴らしいですね。

賀東　ああいう（第1話で描かれている）自主制作映画とかを、昔作ったりはしたんですか？

谷川　高校時代に1本くらい、文化祭で作ったのがあって。

賀東　やっぱり経験あるんだ。山本さんも大学時代に、結構その筋で有名な自主制作映画をやってた方でして。僕は「パタン、プー」（※2）が、かなりツボだったんですけどね（笑）

谷川　あのへんもまぁ、自主制作映画ならこれくらいあるだろうって。古泉がレフ持ってるのが映っちゃったりとか。

賀東　ほんと手間暇かけて、音とかも凄かったですよね。

谷川　そうですね。微妙に入ってなかったり、つながってなかったり。

賀東　ミクルビームのときに、ちゃんと音がブツ切れになるところとか、まためんどくさいことをと（笑）あと、同じテーマソングを何度も使っちゃうところとか。

谷川　なにもそこまでチープにしなくてもいいだろうってくらい、チープですよね。

『ハルヒ』の中には偉大な作品の血が？

賀東　監督の石原さんからは「こうやりたい」みたいのはなにかありましたか？

谷川　石原さんがおっしゃってたのは、たとえばキャラがデフォルメされないとか、わかりやすい漫符（※3）が出ないとか。そういうところにもこだわってらっしゃいました。

賀東　第1話で、ああやってチープさ加減をさんざん見せたあとに、いきなりエンディングでうねうね動くダンスを見せられて、それでみんなやられちゃったのかなって感じなんですけど。

※1　『ハルヒ』第1話で上映(?)された『朝比奈ミクルの冒険Episode00』において、主演の朝比奈みくるが歌っていたテーマソングの歌い出し。かなりの電波強度なので要注意。

※2　『朝比奈ミクルの冒険 Episode00』内において、「余計なもの」が映ってしまった様を現している。まぁ、自主制作映画にはありがちなことといえる。

※3　マンガでキャラクターの心理状態を表す際に使われる表現記号。もちろんコミック「涼宮ハルヒの憂鬱」でももちろん使われている。アニメにおいても「吹き出しにでっかい汗」などといった形で使われている。

Kadokawa Comics A
「涼宮ハルヒの憂鬱②」より
漫画：ツガノガク　原作：谷川流

「賀東招二×谷川流」対談

涼宮ハルヒ――その全て。

「サムデイ イン ザ レイン」、そして「射手座の日」。各話で、それぞれ違った面を見せてくれるアニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」の中でも、この二つには共通項ある。それは、原作者である『谷川流』、そして「フルメタル・パニック!」でお馴染みの『賀東招二』という『作家』が脚本を担当したということ。『作家』でありながら『アニメの脚本』という似て非なるものを体験した、ライトノベルの二大巨頭が贈る「涼宮ハルヒの憂鬱」とは――。

朝比奈みくるの誘惑

賀東 まず最初に、なぜ私がこの場にいるのかということを(読者に向けて)お話ししますと、京都アニメーションさんの絡みでハルヒの脚本をやってみないかというお誘いを頂きまして。一つ返事で引き受けて、『射手座の日』というエピソードを、僕の脚本と京アニのスッタフ武本さんのコンテでやったんですね。同じ京アニのアニメ『フルメタ』のコンビでやってみようという、サプライズ企画だったんですが。

谷川 いっそ『フルメタ』を1話やればいいじゃないかって、僕は言ってたんです(笑)。ハルヒと思って観てたら一話まるまる『フルメタ』だったみたいな。

賀東 ボン太くんは出したかったなって気はしますけどね(笑) それで、なぜ「射手座の日」を僕がやったのかというと、単純に戦闘の描写があったからではないかと(笑)

谷川 構成会議で「脚本は誰に頼みます?」という話になったときに、賀東さん書いてくれないかなという話をしまして、じゃあ賀東さんでみたいな。

賀東 やっぱり簡単に決まったんじゃないですか(笑)

――構成会議の場で、脚本に作家の名前が挙がるのは、わりと珍しいんじゃないでしょうか?

賀東 単純に京アニの人たちと、普通に仲いいだけなんで(笑)

谷川 (『ハルヒ』と『フルメタ』で)スタッフも大いにかぶってますし。

賀東 あと、同世代で話もよく合うし、結構気楽にひょいっと決まった感じが。まぁ、富士見の編集さんは、渋い顔でしたけど(笑)

谷川 その際は、お手数をかけまして。

賀東 ほんとはもっとやりたかったんですけどね(笑) それで、まず一番に聞きたいのは、『ハルヒ』のアニメシリーズの不思議な構成についてなんですけど、どんないきさつで?

谷川 『憂鬱』のラストを最終話にするということが決まったんですけど、じゃあ間のエピソードはどうするんだと。短編エピソードを挿入するしかないんだけど、時系列がゴチャゴチャになりますよね。それをどう解消しようかというときに、もうそのまま、あえて説明せずに時間を飛ばすということで。

賀東 思い切ったことをしたなと誰もが感じたと思いますが、不安はありませんでした?

谷川 そりゃさすがに多少は。「やっちゃった!」という感じで(笑) でも、『朝比奈ミクルの冒険』を第1話にする誘惑からは、逃れ得なかったですね。

まじまじとハルヒを見るキョン。

キョンM「で、お前は帰らずに残ってたのか」

ハルヒ、キョンを睨みつつ、早口で、

ハルヒ「しょうがないでしょ、あんた寝てるし、部室に鍵かけて帰らないとダメだし、それに雨も降ってるしっ」

キョン、窓の外を見る。本格的に降っている雨。

ハルヒ「カーディガン、返しなさい」
キョン「あ？　ああ」

肩にかかっていたカーディガンを取り、ハルヒに手渡す。しかし、もう一枚のカーディガンがキョンの肩に残される。なぜか怒ったような顔でカーディガンに袖を通しているハルヒ。キョン、二枚目のカーディガンを手に取りながら首をひねる。

キョンM「一枚はハルヒのもので間違いない。だが、このもう一枚は誰のだ？」

キョンの視線が動き、長門がいつも座っているテーブルの端（閉じた本が置いてある）と、みくるのメイド衣装が掛かっているハンガーラックを見比べる。

キョンM「って待てよ。ということは、朝比奈さんは俺が寝ている横で着替えをしたのか？　くそ、どうして本当に寝ちまったんだ。寝たふりをしておけば…」

ハルヒ、カーディガンを羽織り終え、

ハルヒ「さ、とっくに下校時間だし、あたしたちも帰るわよ」

キョン、カーディガンを椅子の背に掛けながら、

キョン「ああ。でも俺、傘持ってきてないぜ」

ハルヒ「一本あれば充分でしょ」

キョンの前に手を突き出すハルヒ。握っているのは男物の黒いコウモリ傘。

○校門外。

相合い傘で雨の中を歩くキョンとハルヒ。傘の柄を持っているのはキョン。

ハルヒ「もっとこっちに寄せなさいよ。あたしが濡れるじゃないの」

キョン「充分寄せてるだろ……。ああ？　この傘、お前のじゃねえな。職員用って書いてあるぞ」

ハルヒ「学校の備品だもん、生徒が使って悪いことなんかないでしょ。それとも何？　濡れて帰りたいってんなら貸さないわよ」

ハルヒはキョンから傘を奪い取り、走り出す。キョン、その姿を眺めつつ、

キョンM「まったく…。せっかくストーブを貰ってきてやったってのに、いたわりの言葉もなしか、この団長様は」

キョン、溜息を一つついてから、

キョン「待てよ！」

ハルヒの後を追って走り出す。
ハルヒ、身体ごと振り向く。楽しげな笑顔。そしてアカンベー。

（ストップモーション）

おわり。

頭を押さえてしゃがみこむみくる。

ハルヒ(off)「惚れ惚れするくらいのドジっこぶりねえ。ひょっとしてワザとやってない？」

カメラが揺れて古泉を写しだす。

ハルヒ(off)「古泉くん、ちょっと、これ持ってて」

カメラの持ち手が古泉に替わる。時刻表示が『4：16』に。映像の中、みくるに駆けよっていくハルヒ。バトンを拾い上げると、

ハルヒ「こうするのよ、こう」

見事なバトン芸を披露する。

○文芸部部室。

キョンM「三人が今どこで何をしているのか、少しは気がかりだが、さすがに嵩張る荷物持っての坂道登りはこたえたぜ。しかも同じ道を下校時にまた下りないといけないときた日にはなおさらだ」

ぶるっと震えたキョン、段ボールから電気ストーブを取り出して、コンセントを繋ぐ。スイッチをオンにして、かじかむ指先をかざす。

キョン「あー、指先が冷てえ」

ゆっくりと赤みを増す電気ストーブ。キョン、しばらくストーブ前にしゃがんでいたが、パイプ椅子に座り、テーブルに着く。テーブル上にはやりかけのカードゲーム。

キョン「疲れた…」

キョンはテーブルに突っ伏す。薄目を開けてぼんやりしているウチにウトウトし始める。

霞がかった視界の端で、長門が本から顔を上げてキョンのほうを見る――と同時にブラックアウト。

×　×　×

しとしとと降り続ける雨の音。テーブルに突っ伏して眠り続けるキョンと、無言で読書（『蹴りたい背中』綿矢りさ）している長門の姿。長門が時折ページを捲るだけで他に動きなし。それだけのシーンがカメラ固定でしばらく続いた後、長門は音もなく本を閉じて立ち上がる。

○部室棟遠景。

本降りになっている雨。日が暮れかけているので薄暗い。

○文芸部部室。

眠っているキョンのアップ。室内灯の灯りを誰かが遮っているような影がキョンの顔に落ちている。

キョン「ん……」

キョン、人の気配を感じてゆっくり目を開ける。誰かが跳びすさったような音。顔を上げると、ハルヒが跳びすさった後のようなポーズで立っていた。部室内にいるのはハルヒとキョンだけ。

キョンの肩には女子用カーディガンが引っかけられている。二枚。

キョンは部室を見回し、やや掠れ声で、

キョン「あん？　お前だけか」

ハルヒ「何よ。悪いの？」（ちょっと不機嫌な声）

キョン「悪くはないが…」

顔を撫でながら、

キョン「お前、俺の顔にイタズラ書きとかしてないだろうな」

ハルヒ「しないわよ、そんな幼稚なこと」

キョン「他の三人は？」

ハルヒ「先に帰ったわ。あんた、なかなか　起きそうになかったから」

○高校前坂道。

小雨の中、黙々と坂を上るキョン。

○校舎近景。部室の向かいの廊下。（窓の外からの映像）

窓の中で撮影中のハルヒ、みくる、古泉。そこに鶴屋が合流してみくるに何か言っている。〝明日なんだけどさっ、ちょっと用事入っちゃって、掃除当番替わってくんない？〟という口パク。
みくる頷く。ついでにみくると肩を組んで記念撮影する鶴屋。その後、いつもの笑顔でさっくりと立ち去る。

○昇降口。

キョン、校門から走って昇降口に辿り着く。

キョン「やれやれ」

段ボールを置き、服についた雨を手で払っているキョン。そこに現れる鶴屋。

鶴屋「あれれ、キョンくん、お使いだったのかい？」
キョン「鶴屋さん」
鶴屋「道理でっ」（楽しげに）
キョン「は？ 何がです？」
鶴屋「んーっ（猫のような口になりつつ）、何でもないっさ！ ご苦労さんっ。んんっ、濡れてるねっ」

鶴屋、広げたハンカチをキョンの頭に放るようにして被せる。

キョン「あ、ども」

鶴屋、にこやかな表情で鞄から折りたたみ傘を取り出しながら、キョンが首に巻いているマフラーを指さし、ますますニコヤカに、

鶴屋「じゃーねーっ、ハンカチなら、それと一緒に後でみくるに渡しといてっ」

そのまま下校していく。その後ろ姿を見送りながら、怪訝な顔つきのキョン。

キョンM「相変わらず、挙動のよく読めない人だ。さばけた感じの良い先輩だが」

○文芸部部室。

キョン、段ボールを携えて部室に入り、マフラーをほどいてハンガーラックのみくるの制服に掛ける。このとき衣装の中にウェイトレスがないが、キョン気づかず。
長門は元々の位置で読書中。

キョン「長門、お前だけか」

わずかに頷く長門。

キョン「ハルヒ達は？」

わずかに首を傾げる長門。

○体育館。

ハルヒが撮影するビデオカメラ視点映像の中で、体操着姿のみくるが跳び箱をしている。着地に失敗し、コケるみくる。

ハルヒ(off)「そう！ そこはコケるべきところよ！ なかなか解ってるじゃない」

画面の中にデジタル表示で録画中であることを示す『REC』と、時間『4：10』が出ている。カメラが振られ、レフ板を持ってニコニコしている古泉が一瞬映りこむ。ここで一端映像が途切れ、再開したときには時間表示は『4：15』になっている。
チアガール姿にチェンジしたみくるが、あやうい手つきでバトントワリングしている。バトンを投げ、取るのに失敗して頭に当てるみくる。

みくる「あいたぁ」

○光陽園駅前。
改札から出てくるキョン。そこに喫茶店から出てきた谷口と国木田が通りすがる。

谷口「よう、キョン。何やってんだ、こんなところで」
キョン「見て解らないか。荷物運びだ」
谷口はニヤニヤと、
谷口「はん、ご苦労なこった。どうせまた涼宮の命令だろ」
キョンM「どうやら半年もあれば クラスメイトが俺の立場を正しく認識するに充分のようだった」

国木田は穏やかに、
国木田「これから学校に戻るの？　本当にご苦労様だね」
キョン「まったくだ」

谷口と国木田、手を挙げながら去っていく。
谷口「じゃあな」
国木田「また明日」
キョン「おう」

高校への道を歩き出そうとしたところに、ポツリと雨が降ってくる。まだ雨粒程度。
キョン「ちぇっ、降って来やがった」

空を仰ぎ見るキョン。
キョンM「天気予報じゃ降水確率十パーって言ってやがったのに、あてにならん気象予報士だ」

段ボールを抱え直し、歩き出す。
キョンM「本降りにならんことを祈ろう」

○渡り廊下。
ハルヒ、みくる（ウェイトレス姿でツインテール）、撮影機材を抱えた古泉が歩いている。ハルヒは意気揚々、みくるは恥じらいつつ、古泉は微笑顔。
古泉がふと足を止め、廊下の窓から空を見上げる。
古泉「雨のようですね」

窓ガラスが雨粒で濡れ始める。徐々に勢いを増す雨。
ハルヒとみくるも立ち止まる。
みくる「キョンくん、大丈夫かな…」

ハルヒは微妙な表情で、窓の外を見つめている。

○高校へ至る通学路県道沿い。
段ボールを抱え、息を切らしながら歩いているキョン。
小雨に濡れながら、
キョンM「今ほどあの部室が恋しいと思ったことはない。一刻も早く朝比奈さんの入れてくれるお茶にありついて、心と身体をあったためたいぜ」

○文芸部部室。
長門が一人で読書している。と、突然扉が開かれ、
鶴屋「やっぽー、みくるいるーっ？　って、あれ？　長門っちだけ？」

長門は無言のまま。
鶴屋「明日の掃除当番替わって欲しくてさー。それ頼みに来たんだけど、みくるは？」

長門、無言で片手を校舎の方に向ける。
鶴屋「そっちの方にいんのかいっ？　あんがとっ」

さくっと立ち去る鶴屋さん。

○文芸部部室。
アマガエル衣装のみくるを撮影した後、今度はウェイトレス（ミクルの冒険で使用）に着替えさせようとするハルヒ。

ハルヒ「ほら、脱いで脱いで」
みくる「わわっ、ちょっ…。ひえっ」

あわや脱がされそうになったみくるの半裸シーンが見えると思いきや、それまでじっと本を読んでいた長門が、不意に立ち上がって本棚に移動、みくるの姿を覆い隠す。

ハルヒ(off)「みくるちゃん、また大きくなったんじゃない？　ますますダイナマイトね」
みくる(off)「涼宮さ…その、触らないで…ひっ」

※注　(off)とは、画面上に出ていないキャラクターが話すセリフのこと。

本を選び終えた長門、再び定位置の椅子に座る。その動きにつられたようにもつれ合うハルヒとみくるも移動。結局、着替えシーンは映らない。ハルヒの姿とわたわたするみくるの髪や手足のみが長門ごしに見える。
長門、淡々と読書していたが、ふとカメラのほうを見て、しばらくそのまま。（冷たい眼差し）

——中CM——

○大森電器店。
大森電器店店長（大森栄二郎）が段ボールを床にドスンと置く。

大森「これが約束のストーブだよ。持って帰れるかい？」
キョン「ええまあ、なんとか」
大森「あの可愛い娘さんたちは元気かな」
キョン「一人が元気ありすぎて困ってますよ」

キョン、店内を見回す。

キョン「CMの効果はありました？」
大森「正直言って、あまり変わってないね」
キョンM「そりゃそうだろうな。高校の文化祭映画上映中のCMじゃあ、あまりに局地的すぎる。よくスポンサーなんかになってくれたものだ」
大森「ところで、あの元気のいい娘さんが電話で言っていたんだが、映画の続編を作るって本当かい？」

キョン、あきらめ顔。

キョン「あいつがそう言ってんだったら、そうなるんでしょうね」
大森「次もスポンサーになるよう頼まれてしまったよ」

大森店長はおかしそうに笑い、

大森「そのストーブは次のスポンサー料の前渡しだと思ってくれ」
キョンM「そういうカラクリだったか。いくら何でもタダでくれるなんて話がうますぎると思ったんだ」

×　×　×

大森店長に頭を下げるキョン。にこやかに手を振る大森店長。キョン、段ボールを抱えて店を出て行く。

キョン「さて、帰るか」

○文芸部部室。
長門が一人で本を読んでいる。

○電車内。（がら空き）
座席に座って揺られているキョン。傍らに電気ストーブ入り段ボール。

○文芸部部室。
読書中の長門。ふっと顔を上げて窓のほうを見る。

行く。
ポイポイっと空中に投げ出されるメイド衣装。ただし脱衣そのものは長門の頭が邪魔になって見えないカメラワーク。

○文芸部部室前通路。
古泉、湯飲みを片手に部室ドアにもたれている。背後にハルヒとみくるの嬌声。古泉はのんきに、

古泉　「平和ですねえ」

○文芸部部室。
バニーガールとなったみくる。胸元を押さえつつ、ぶるっと震え、

みくる　「うう、さぶいです…。それに、恥ずかしいですよぅ…」
ハルヒ　「みくるちゃん、あなたはもっと自信を持つべきよ。何と言ってもこのあたしが選んだ学校一のマスコットキャラなんだから。ね、古泉くん」

古泉、またレフ板を持っている。爽やかに、

古泉　「まったく、その通りかと」

ハルヒ、バニーガール朝比奈の激写を開始。また様々なポーズと角度から。

ハルヒ　「んじゃ、次。これ着て」

ハルヒの手にはナース服。また脱がされていくみくる。もちろんその様子は長門の頭に隠れて見えない。ハルヒと、ばたつくみくるの手足だけが辛うじてかいま見える。

○文芸部部室前通路。
部室ドアにもたれて優雅に微笑む古泉。湯飲みを傾け、のんきに、

古泉　「ふー」

○光陽園駅前。
切符を買っているキョン。

○文芸部部室。
ナース姿のみくるをハルヒ激写。古泉はレフ板持ち。長門は読書中。

ハルヒ　「はい次。これ」

持っているのはアマガエルの着ぐるみ。みくるは恐る恐る、

みくる　「あのぅ、さっきのナース服もそれも、映画の中で着たりしてないんですけど…。本当にこれ、ジャケットの撮影なんですか？」
ハルヒ　「うん、そうよ。でも今アイデアが閃いたわ。この分だと写真集だって作れそうね。どう？　古泉くん、このアイデア」
古泉　「まことにけっこうなアイデアかと」
みくる　「ひえぇ」
ハルヒ　「いえ、待って。どうせDVDにするなら、特典としてオマケ映像をつけるべきよね。どう？　古泉くん」
古泉　「非常によいお考えかと」

みくるにウインクする古泉。縮こまるみくる。

○文芸部部室前通路。
部室ドアにもたれている古泉。ふと廊下の窓から外を眺め、

古泉　「どうやら、一雨来そうですね」

○電車内。（座席は埋まっている。『光陽園女子学院』の生徒が多い）
つり革を持って揺られているキョン。窓の外では、曇り空が濃くなっている。

ハルヒ「さ、邪魔者は消えたわ」
みくる「えっ？」
ハルヒ、机の中からデジカメを取り出す。不安そうにピクっとなるみくる。
ハルヒ「みくるちゃん、あなたの写真撮りたいから、ポーズとってくれる？」
みくる「ええっ？　なな、なんの写真ですか？」
ハルヒ「決まってるでしょ、文化祭で上映した映画、『朝比奈ミクルの冒険 エピソード00』をＤＶＤにするから、そのジャケット撮影よ」
みくる「えええっ。あれ、本当に作るつもりなんですかぁ？　あきらめてくれたんじゃあ…」
ハルヒ「あん時はキョンがうるさかったから。いいじゃない、今なら反対するヤツもいないしね」
ハルヒ、ニヤリと笑ってカメラを構える。長門は無反応で読書中。おろおろするみくるに、古泉が微笑んで肩をすくめてみせる。

○高校前の坂道。
キョン、坂を見下ろしながら下っている。両手をポケットに突っ込み、テクテクと。
キョンM「最初にこの坂道を上って登校した日にはウンザリさせられたが、半年以上通っているとすっかり慣れちまった。ハイキングコースみたいな登下校にも、そしてＳＯＳ団にもな」
キョン、歩きながら遥か下に広がる風景を眺めて、やれやれという表情。
キョンM「今頃、俺のいない部室でハルヒは何をやってんだろう。ヒマだからとかなんとか言って、朝比奈さんをオモチャにしてなければいいんだが」
首に巻くマフラーを触るキョン。

○文芸部部室。
最初の位置からまったく動かず本を読んでいる長門。みくるは怯えた表情で盆を抱えて棒立ち。
ハルヒ「古泉くん、レフ板係お願いね」
古泉「解りました」
古泉、部室のガラクタ置き場からレフ板（ベニヤに車用サンシェードを貼ったもの）を引っ張り出す。
ハルヒ「みくるちゃん、ぼうっとしてないでポーズをとりなさい。ほら、ほら」
みくる「は、ふぁあい…」
古泉がレフ板を掲げる前で、みくるを激写するハルヒ。様々なポーズを取らされるみくる。せわしなく色々な角度からシャッターを切りまくるハルヒ。

○県道沿いの坂道。
自動車が行き交う車道沿いの道を歩いているキョン。背景の山際がほのかに紅葉している。

○文芸部部室。
ハルヒ、カメラを下ろし、ニパっと笑う。片手にバニーガール衣装。
ハルヒ「そろそろ衣装チェンジしましょ。次はこれ」
みくる「えー…」
ハルヒ「いいから、いいから」
腰を引かせるみくるをガッシとつかみ、ハルヒは強制着替えを開始。
みくる「あわわ…わわっ」
古泉は微笑したまま、静かにレフ板を置くと部室を出て

キョン　「今度は何だよ」
ハルヒ　「部室に暖房器具を設置する手はずが整ったわ」
　　　　ハルヒ、ずかずかと団長机に向かい、ドスンと座る。
みくる　「あっ。はい、はい」
　　　　みくるは編んでいた毛糸と棒針を置き、いそいそとお茶の準備を始める（嬉しそうに）。
ハルヒ　「映画撮ったときにスポンサーになってくれた電器屋さんが提供してくれるって。去年の売れ残りを倉庫にしまったっきり忘れちゃってて、処分に困っている電気ストーブでよければって、さっき電話があったわけ」
キョンM　「ハルヒにわざわざ電話して、そんな申し出をするほどヒマでも親切でもないだろうから、どうせこいつがゴリ押しでねじ込んだのだろう」
ハルヒ　「だからね、キョン。あんた、これから店に行って貰ってきてちょうだい」
キョン　「俺が？　今から？」
ハルヒ　「そう。あんたが、今から」
キョン　「お前、俺に毎日往復している山道をもう一回下りて、しかも電車で二駅かかる電器店まで行ってから、おまけに荷物抱えてまたここまで戻って来いって言うのか」
ハルヒ　「そうよ。だって急がないとおっちゃんの気が変わっちゃうかもしれないじゃない。いいからさっさと行きなさい。どうせヒマなんでしょ？」
キョンM　「この部室にいる時点でヒマでないヤツなどいないような気がするが」
　　　　ハルヒ、みくるの入れたお茶をズルズル啜る。
キョン　「お前はヒマじゃねえのか」
ハルヒ　「あたしはこれからしないといけないことがあるから」
　　　　ハルヒ、にんまりとみくるを見る。キョトンとしているみくる。
　　　　キョン、古泉を見る。手持ちのカードをテーブルに伏せ、わずかに肩をすくめる古泉。

ハルヒ　「古泉くんは副団長で、あんたはヒラの団員なんだから。階級の低い方がキリキリ働くのはどこの組織だって同じよ。もちろんSOS団もそのルールを採用しているわ」
キョンM　「人使いが荒いのは今に始まったことじゃないが、…まあいいか。今回ばかりはハルヒもマシな用件を取り付けてきた。ちょうど部室に暖房器具が欲しいと思っていたところだ。俺が行くのでなければなおのことよかったのだが、朝比奈さんや長門に行かせるくらいなら俺が行くさ」
キョン　「わかった、わかった」
　　　　腰を上げ、立ち上がるキョン。古泉は意味ありげな微笑。
古泉　「どうぞ、お気をつけて」
みくる　「あ。あたしも行きましょうか？」
ハルヒ　「みくるちゃんはいいの、ここにいなさい。雑用係はキョンの使命みたいなものなのよ」
みくる　「はぁ…」
　　　　心配そうにキョンを見るみくる。長門は一切顔を上げず、読書中。みくる、何か思いついたように手を合わせるとハンガーラックへ歩み寄り、ぶら下がっているセーラー服にかけていたマフラーを持ってきて、
みくる　「今日は冷えますから…」
　　　　キョンの首に巻いてやる。一瞬驚いてからホワンとした表情になるキョン。
キョン　「いやぁ……どうも」
　　　　ハルヒはやや不機嫌そうに、
ハルヒ　「は・や・くっ。行きなさいよっ」
　　　　キョン、ひらりと片手を振って部室を出る。
　　　　×　×　×
　　　　ハルヒ、窓際に立って中庭を見下ろしている。中庭をキョンが横切って歩いていくのを確認し、パッと振り返る。

○北高正門。天候曇り。

冬服姿で下校していく生徒達。女子はセーラーの上にカーディガン、男子はブレザーの下にニットのベスト。マフラーを巻いている生徒もチラホラ。

○部室棟遠景、背景に曇り空。

キョンN　「文化祭やその後にやってきたゴタゴタも終了し、早や冬の足音が山風とともに聞こえてくる今はもうそろそろ十二月で、建築以来の古さを誇る旧館、この部室棟はその壁の薄さのせいもあって、屋内にいながら妙に寒々しい日のことである…」

※注　Nとはナレーションのこと。

（OP）

○文芸部部室。

キョンと古泉は向かい合ってカードゲーム（ドラゴン★オールスターズ）、長門（制服の上にカーディガン）はテーブルの隅で読書中（『赤頭巾ちゃん気をつけて』庄司薫・中央公論社ハードカバー、図書館貸し出し本）。みくる（メイド姿）は座って編み物（マフラー）をしている。

キョン、ふと顔を上げる。

キョンM　「毎度いろんなことに巻き込まれてきたSOS団…というよりもっぱら俺だったが、しかしそんな事態が毎日毎日律儀に訪れるわけはなく、だいたい毎日のようにアレやコレやの非日常爆弾が炸裂していたら俺の身が保たず、心のほうはもっと保たない」

※注　Mとは心の中でつぶやいているモノローグゼリフのこと。

キョン、傍らに置いてあった湯飲みのお茶を飲みつつ、

キョンM　「しかしハルヒがいないとホント、静かでいいな…。でも少し、静かすぎるか……」

キョンの視線が無人の団長机に向く。

机の上に雑多な物が散らばる下、『世界の鍋百選』というムック本やクリスマス特集の雑誌が隠すように積み重なっている。

×××

キョン、サイコロを一つ振ってテーブルに転がす。

キョンM　「よく考えたらハルヒや朝比奈さんたちと出会って、もう半年経ってんのか」

古泉が転がすサイコロの出目から目を逸らし、部室内に顔を巡らすキョン。部屋の隅にある段ボールに入っている薄汚れた野球グローブとボール、短く切られて枯れた笹にかかっている短冊、壁に画鋲で貼ってある集合写真（孤島の浜辺で水着になっている全員）、ハンガーラックにかかっているみくるの衣装（バニーガール、ナース服、夏用メイド服、ウェイトレス、アマガエルの着ぐるみ、セーラー服とカーディガン＋マフラーも）、テーブル上の四台のノートパソコン。

キョンM　「いろいろやらかしてきたもんだ。ハルヒが原因なものもあれば、そうでないものも含めてな。まあ、たいていはこうして俺たちがまったりと時を過ごしている最中に、あいつが突然飛び込んできて始ま――」

モノローグが終わらないうちに部室のドアが勢いよく音を立てて開く。

ハルヒ　「みんな聞いて！　朗報よ！」

携帯電話を掲げて笑顔いっぱいのハルヒ。格好はセーラー服にカーディガン。

キョンM　「…またか。こいつの言う朗報とやらが、俺たち…特に俺と朝比奈さんにとって朗らかな報告となったことなど、実際ほとんどないのだが」

アニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」好評特別企画　谷川流書き下ろし脚本完全掲載!

[涼宮ハルヒの憂鬱]

「サムデイ　イン　ザ　レイン」

脚本／谷川流

脚本は実際に放映されたアニメーションと異なる場合がございます。

ハルヒの思いつきによって、一人ストーブを取りに行かされたキョン。
キョンがいなくなった部室で始まるフツーでいて、それでもSOS団らしい日々。
それはアニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」でただ一本だけ、原作者「谷川流」が脚本を書きおろした、
アニメのためだけに作り上げられたオリジナルストーリー。
ファン垂涎のエピソードを描いた脚本を今号のザ・スニがお届けするぞ!
さらに、この脚本がどうして生まれたか、
そしてアニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」全体についても語る対談が、224ページから掲載されている。
合わせて読めば面白さ100倍。
まずは、脚本をじっくりと楽しんでくれ!

←この脚本と「涼宮ハルヒ」の全てが解る「賀東招二×谷川流」の対談は224ページから

本を完全掲載！　原作のコンビがお送りするアニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」は必見だ！　しかも、今号では付録としてついているアニメEDのダンスシーンをいとうのいぢが描き下ろしたポスターがあったり、アニメ「涼宮ハルヒ」で脚本を書いた、作家の賀東招二（代表作：フルメタル・パニック）と谷川流との対談があったりと新しいチャレンジがてんこ盛り。
それを読んで是非是非「ハルヒで大いに盛り上がって」ね。

特集［涼宮ハルヒの憂鬱］

やれやれ、こいつといると、常に驚きの連続だな——

オリジナル脚本「サムデイ イン ザ レイン」独占公開 ここでしか読めないアニメオリジナル「涼宮ハルヒ」が登場！

衝撃の第1話「朝比奈ミクルの冒険　Episode00」以降、野球、ミステリ、学園祭etcと様々な要素を盛り込んだエピソードをハイクオリティなアニメで表現して、放送を重ねるごとにファンに衝撃を与え続けているアニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」。

その中でも、特に異色な回があることに、みんな気付いているかな。それは「サムデイ　イン　ザ　レイン」だ。相変わらずのハルヒの思いつきによって、一人ストーブを取りに行かされたキョン。それは実はハルヒの策略で、キョンのいなくなった部室では……というある意味、SOS団のフツーの日常を描き出したこの作品。実は原作の谷川流が脚本を書き下ろした、小説にもない完全オリジナルエピソードなのだ。ここでもハルヒの「世界を大いに盛り上げる」ためのチャレンジが行われているぞ。さらに今回のザ・スニーカーでは、そのイメージカットを原作イラストのいとうのいぢが描き下ろした上、その書き下ろし脚

イラスト／いとうのいぢ

特集[涼宮ハルヒの憂鬱]
面白いものを
捜しにいくのよっ!!
ジしているのだ。
　ということで、丸ごとハルヒ満載の公式ガイドブックの刊行が決定したり、コミックの最新刊第二巻が発売などなど、ハルヒの周りは常に新しいニュースが満載。ザ・スニーカーでは、その最新情報をお伝えしていくので、これからもハルヒを見逃すなっ！

もっともっともっと

SOS団は常に新しいことにチャレンジするのよっ！

「世界の不思議を広く募集します」

というハルヒ率いるSOS団の所信表明。平たく言えばフツーじゃないものを見つけて、遊んじゃおうっていうこと。

その活動はキョン（雑用係）、長門有希（部室の付録但し宇宙人）、朝比奈みくる（萌え担当但し宇宙人）、古泉一樹（謎の転校生但し超能力者）を集めて、SOS団を立ち上げたのが全ての始まり。それからも文化祭用の映画を撮ったり、休日にみんな集まって不思議捜しをしたりと日々、フツーじゃなくて面白いことを捜し続けているSOS団の活躍はもうみんな知っているよね。

そんなSOS団の活動は小説、アニメ、コミックと様々なメディアに広がって発表され、現在進行形でファンが急増中！　だけど、ハルヒはこんなものじゃ満足しません。常に前向きな超ポジティブ思考のハルヒは、もっともっと不思議なこと・楽しいことを捜して大暴れ。SOS団の面々を引っ張り回して、新しいことにチャレン

イラスト／いとうのいぢ

HARUHI NEWS

NEWS❶

NOW PRINTING

「涼宮ハルヒ」オフィシャルガイドブックがついに登場！

「涼宮ハルヒの公式」

8月3日発売！

NEWS❷

コミック第2巻早くも登場！SOSキャンペーン2も開催中！

コミックス

「涼宮ハルヒの憂鬱❷」

好評発売中

さらにコミック「涼宮ハルヒの憂鬱」が連載中の少年エース8月号も漫画家ツガノガクのハルヒが表紙！

さらに詳しい情報は232ページへ！

なぜならSOS団とは、
「世界を大いに盛り上げるための涼宮ハルヒの団」だからだ。
まだまだ、世界を盛り上げるために
ハルヒとSOS団は走り続ける。
今回のザ・スニーカーでも、
そんなハルヒたちの更なる
「世界を大いに盛り上げるため」の
活動を大特集。
この特集で「涼宮ハルヒの憂鬱」をさらに知って、
君も、ハルヒたちと一緒に「世界を大いに盛り上げ」てくれ。

これからも面白いこと、いっぱいやるわよっ!

特集「涼宮

2006年、春――
すさまじい勢いで世間を席巻したアニメがある。
「涼宮ハルヒの憂鬱」。
原作ファンならお馴染みの、あのシーンが登場するOP。
SOS団が息のあったダンスを見せるED。
オーバークオリティで文化祭映画を作り出した第1話。
次を予測させせない構成。
毎回繰り出されるハイクオリティな動きと映像表現。
そんな、みんなをびっくりさせる仕掛けを散りばめたアニメ「涼宮ハルヒの憂鬱」。
スニーカーファンなら、知らぬ人はいないほどのビッグヒット・ライトノベル。
それを原作とするアニメが、画面に登場した直後から、全ての人を虜にし続けている。
それでもハルヒたちSOS団の野望はとまらない。
キャラ原画：池田　晶子
ペイント：宮田　佳奈
背　　景：田村せいき
ハルヒの憂鬱」
©谷川流・いとうのいぢ／SOS団

TVアニメ・コミック、そして小説。
全ての「涼宮ハルヒ」がここにある！
まだまだ世界を
盛り上げるわよっ！
特集
［涼宮ハルヒの憂鬱］
谷川流×いとうのいぢ
スニーカー文庫の最先端が集まった！
スニーカー祭'06
「涼宮ハルヒ」の全てがビッグニュース！
©谷川流・いとうのいぢ／SOS団

美少女onlyビジュアルマガジン
コンプH's
2006 Summer
Heroine
コンプヒロインズ
コンプティーク初のビジュアル情報マガジン誕生!!
コンプティーク8月号増刊 定価750円(税5%込)
好評日発売中!!
注目タイトル
15作品が勢揃い
大迫力!
描きおろし
超HQ
ハイクオリティ
ピンナップポスター
涼宮ハルヒの"超萌え"イラストを含めた
オール描き下ろしが15本!
アニメ作品20本!
2006 注目アニメ大特集!!
N・H・Kにようこそ!
となグラ!ほか
そのほかアニメ・ゲーム・コミック・ライトノベル・声優……
オールラウンドの美少女キャラクター情報が集結!!
スペシャル付録
涼宮ハルヒの憂鬱
オリジナル下敷き
アニメを含めたすべてのジャンルのヒロインが集う!
総力特集
涼宮ハルヒの憂鬱
角川書店

DVD

少女たちは、空で、陸で、そして海で戦いを挑む。

ストライクウィッチーズ
STRIKE WITCHES

今夏PV発売予定!!

フィギュア＋豪華冊子同梱!!

ストライクウィッチーズ

世界は突如出現した正体不明の存在の襲撃を受けていた。それらに立ち向かえるのは、魔力を持った少女たちのみ。みずからの体に兵器をまとい、世界を守る少女たちの戦いが、いま始まる。

原作■島田フミカネ&Projekt kagonish　監督■杉島邦久　アニメーション制作■GONZO　発売元■角川書店

公式サイトOPEN! http://s-witch.cute.or.jp/

PlayStation®2

大空を翔る数々の名機　その雄姿が今蘇る…

7月27日(木)発売!!

ZERO PILOT 零™

ZERO PILOT・零

第二次世界大戦中期。極東の小国と蔑まされてきた日本の戦闘機が米国を震撼させた。その名は、"zero fighter(零戦)"。 そのパイロットとして、真珠湾攻撃～ミッドウェー海戦～南太平洋海戦など、様々なミッションをクリアしていく本格派フライトシューティングゲーム。

価格■7140円(税込)[SLPM-66459]　ジャンル■フライトシューティング＋シミュレーション
発売元■Project ZERO PILOT

同梱特典
特典DVD
「ディスカバリーチャンネル
ミリタリー全集プロモーション映像DVD」

PlayStation®2

8月31日(木)発売!!

気鋭のスタッフが贈る、新世代『EVE』ワールド!!

EVE ～new generation～

私立探偵天城小次郎と、内閣情報調査室のエージェント法条まりな。二人の主人公が追う事件の真相とは……？　シナリオ原案・打越鋼太郎、キャラクターデザイン・橋本タカシ(FC-G)、プロデューサー・金杉はじめが手掛ける新たなEVEが幕を開ける!!

EVE
new generation

価格■デラックスパック 9240円(税込)[SLPM-66337]
　　　通常版 7140円(税込)[SLPM-66338]
メディア■DVD-ROM 1枚組　ジャンル■マルチサイトADV　発売元■角川書店

デラックスパック特典

- 「ピクトリアル・ストーリーズ」キャラ設定等が収録された特別編集本
- ドラマCD「EVE new generation ～もうひとつの島で～」
  本編では見られないコメディタッチのスペシャルストーリー
- タトゥシール「LOVE&HATE」
  ゲーム中に登場するマークなどをおしゃれなタトゥシール化

公式サイトOPEN! www.eve-newgene.com

って思いますし、自分の中に新撰組とかそういった連中の生き様に憧れる部分がありますから」

鷹「日本人の心の中に時代を越えて感じる何かがあるのは事実だろうな。だから今でも剣術は伝えられているんだ」

ま「今でも中学高校の部活動で剣道は盛んですものね」

鷹「いや、実を言うと現代に残る剣術は剣道だけじゃない。真剣を扱う方法や、より実戦的な動きを残した居合道や抜刀術というのも伝えられているんだ」

ま「そういえば私、居合道って良く知らないんですけど、どういうものなんですか?」

社長「居合というのは、それほど歴史があるものではありません。特に今伝えられている居合は明治の中期ごろ作られたものがほとんどです。武士の魂、道徳、所作、強さの象徴としての剣術を滅ぼしてはならないという思いから生まれたのが「居合道」ですね」

鷹「現在残る「居合道」には、端座し、床に刀をおいた状態からすばやく剣を抜き、目の前の人型の藁束を斬るという、いわゆる抜刀術に近いものから、目の前に敵を想定しながら殺陣を行う剣舞的なものなど、さまざまな流派がある。いずれにしろ修練を積んだ人の動きは美しいものだぞ」

ま「わかります、さっき社長さんが居合刀を抜いて見せたときに、その動き見ただけで。うわ、決まってる! って思ったもの」

鷹「日本刀を取り扱うときの仕草は、無駄な動きやそういったものをすべて削ぎ落とした後に残ったものだからな、実に合理的な美しさがあるんだ」

社長「鷹見さん、合理的な美しさ、なんて気取った言い方は似合いませんよ、はっきり言っちゃいましょうよカッコイイって。

日本刀というのは一振り一振り刀鍛冶の方が精魂込めて鍛え上げたこの世に一つしかない品物です。構え方一つ、振り方一つにしても、長い伝統に支えられています。そのカッコイイ日本刀を、ちゃんと扱えるようになりたい、日本刀に負けないくらい自分もカッコよくなりたい、それが私が居合を始めた理由です」

ま「居合をやることで、イメージの中でしか体験できなかったことが、よりリアルに実際に自分の身体で感じることができる。単にチャンバラごっこや頭の中で殺陣をイメージするだけでも楽しいけれど、実際にリアルに身体を動かして実体験すると、イメージ以上の何かが感じられる・体得できる。その体験は、単なるシミュレーションを超えた一つの経験値として自分を高めていくものになるってことかしら」

鷹「人を殺すという効率だけで武器を突き詰めれば核ミサイルに行き着く。あれほど効率的な武器は無い、そしてあれほど夢も何も無い武器も無いな。この店に並んでいる武器は、ライトノベルや時代小説の世界のヒーローと、現実に生きる自分とを繋ぐパスポートのようなものかもしれない」

う「そうか、つまり、ここで居合刀を買えば、現実の僕も、ライトノベルのヒーローのようにカッコよくなれるってことですか!?」

ま「あんた、今まで何を聞いていたのよ! そんな簡単なものじゃないわよ!」

鷹「いや、だれだって最初の動機はそんなものだ、カッコよくなりたいなら、ちゃんとした先生について修行しろ。詳しくは社長に聞いてみるがいい」

う「社長さん! 修行すれば僕でも、きゃーうえぽん、カッコイイーとか言われるようになれますか? どれくらいでなれますか? 三日ですか四日ですか?」

社長「剣の道は精神修行の道です、まずその甘い考えと煩悩を切り捨ててください」

鷹「いや、それは無理ですよ社長、うえぽんから甘い考えと煩悩を切り捨てたら、後に何も残らん」

う「そんなあ、僕にだってやる気と根性ぐらいありますよ」

ま「そうねえ、子ネコ一匹ぶんくらいは残るかもね」

鷹「試しに、この買い求めた居合刀を構えて、俺が気合で甘い考えと煩悩を吹き飛ばしてみよう、とりゃあああっつー!」

う「ちゅーちゅー!」

鷹「うむ、ハツカネズミぶんしか残らなかったか」

ま「うえぽんのやる気と根性がハツカネズミぶん、だということがわかったところで今回はここまでです。皆さんの企画募集してます。宛先は「がんばれハツカネズミのうえぽん」係までよろしくね」

う「ちゅーちゅー(よろしくお願いしますー)」

(text by KAZUYUKI TAKAMI)

WEAPON's Notes

うえぽんの編集後記

鷹見先生と同じく店長さんも博識。お二人に挟まれるようにして刀の歴史をお聞きしていると、ほとんどサラウンド状態。頭がパンク寸前でした。それにしても刀はやっぱり魅力的。小さい頃、刀鍛冶を夢見ていた事を思い出しました。

取材協力

武器屋 ~Brade Works~

〒101-0021
東京都千代田区外神田1-5-7
宝ビル402
TEL 03-3254-6435
http://www.wbr.co.jp/bukiya.htm
営業時間・午前11時~午後7時30分
定休日・水曜日(但し水曜日が祭日の場合は営業)

ハツカネズミにも1割ぐらい魂があるんです! ……たまには優しくして(泣)。泣き言ばかりのうえぽんに体験させたい「ラノベ的シチュエーション」をアンケートに記入して送ってね!

店に一歩入ると東西問わない、武器や甲冑がお出迎え。ファンタジー魂に火がつく瞬間です。

壁には模造刀や居合刀がズラリと並ぶ。刀にも色々な種類の鞘や拵えがあって感心します。

模造刀を鞘から抜いた状態。刃が描く曲線がなんとも優美。日本刀の魅力の一つです。

写真の一部は武器屋HPより引用

ま「日本刀って戦争では使われなかったんですか?」

社長「戦国時代の戦でも日本刀は使われましたけど、あくまでも補助的な護身用の武器のようなもので、主役じゃないんですよ。ごらん下さい（すらりと居合刀を抜く）見てわかるとおりこの刀身は美しいですけど、耐久性は考えられていませんよね。何十人も相手にできる武器ではないということです。日本刀が主役になったのは戦国時代の終わりごろから江戸時代にかけて。いわゆる平和な時代が始まった頃ですね。有名な剣術使いが名を残し、様々な道場ができたのもこの時代のことです」

ま「どうして平和な時代になると日本刀が主役になるの」

鷹「集団同士の戦いのときは効率が求められる。訓練も何もしなくても簡単に扱え、一人で何人も殺せるもの、そういった武器に価値がある。でも平和になれば集団殺戮には意味がなくなる。こんどは個人の美学とか個人の意識とかそういったものが尊重されるようになるのさ」

う「江戸時代の武士って、戦争をしたことのない軍人みたいなものですよね。でも、いざというときのために鍛えておかなくちゃならないわけで、剣術は武士にとっての基礎教養みたいになっていったってことでしょうか?」

鷹「剣術には柳生新陰流とか北辰一刀流とか、さまざまな流派がある。江戸時代の初期は十に満たない数だったんだ。だが、幕末の頃には三百を越える流派があって、それぞれに技を競っていた。それだけ剣術が盛んになったのは、剣術は個人の技量の優劣がはっきりわかるもので、努力と修練で上達できるものだったからなのだろうな」

ま「剣術っていうのは互いに剣同士で正々堂々と戦うというルールの上に成り立つものって考えればいいのかな?」

鷹「うむ、そうだな。剣と剣の戦いは一対一、その対等性、研ぎ澄まされた技能同士のぶつかり合いで雌雄を決するという潔さが、武士の、そして日本人の精神風土に合っていたのかもしれない」

ま「時代劇大好きな人って多いですものねえ、女の私から見るとどうして日本人の男の子ってあんなに日本刀にこだわるのか、わからないところがあるんだけどね」

鷹「だって日本刀には物語性があるじゃないか。物語のクライマックスで主人公と敵が一対一で日本刀を構えてにらみ合う、というだけで絵になるだろう?もしこれで片方がウォーハンマー、もう片方がメイス持ってにらみ合っていたんじゃカッコつかんぞ」

ま「まぁ、そうですね。結局、日本刀のカッコよさというのは、すべての男の子の心にあるヒロイズム、一兵士になりたいのではなく、ただ一人の「剣豪」や「ぬきんでて強い者」になりたい!という気持ちにフィットする武器と技術だからなのかな?」

う「ええ、それはあると思います。僕はそれほど歴史とかに詳しい人間じゃありませんけど、それでも日本刀ってカッコいい!

ロングソードがあるわよ、どうせならこれでひとおもいにざっくり逝きたいわよねえ」

う「逝きたくありません！」

ま「なんかノリが悪いわね。ゲームの世界に迷い込んじゃったみたいで面白いじゃない。これ、本物なんですか？」

鷹「詳しいことは、社長さんに聞くといい。社長さんは居合の有段者で、日本刀を始めとする各種の武器に精通している方だからな」

社長「甲冑などの防具は本物と同じ鉄などの材質でできていますが、剣や刀の刀身は、鉄ではない重い合金でできていますね」

鷹「鉄だと危険だし違法だけど合金で作ると自由に所有できる。この店は、ちゃんと店の人に断れば、店内の刀剣を持たせてもらえる。ただ見るだけの博物館よりも、実際に持てるこの店の方が勉強になると思ったのさ」

う「では、ここにあるロングソードを持たせてもらいます……うわ重いですねえこの剣！ 西洋の騎士は、よくこんな剣を振り回せますねえ」

ま「重さって見ただけじゃわかんないものなのね……このバックラーって小さな丸い盾は、ファンタジーのゲームとかで、よく神官やお姫様が護身用に持ってる盾なんだけど、すごい重さよ」

鷹「見た目は軽そうに見えるけど、鉄の板に皮で裏打ちされているから、実際には結構重いんだな」

ま「こんなもの装備して旅なんかしたくないわ。私のような普通の女の子にお姫様は無理ね」

う「いや、まゆぴんさんは、その普通の女の子ですら無理だと思いますけど……」

ま「うるさい！」

う「そう言いながら片手で二メートルもあるバスターソードふりかざすのはやめてください！」

鷹「まゆぴんやめなさい、間違って傷つけたら大変だ」

う「ああ、鷹見先生のやさしいお言葉が嬉しいです」

鷹「……それは売り物だからな」

う「心配してるのはバスターソードの方ですか！」

鷹「あたりまえだ、うえぽんの傷は舐めれば治るが剣の傷は舐めても直らない」

ま「それにしても西洋の剣って日本のものに比べてどうして、こんな風に重いのかしら」

社長「それは戦い方の違いですね、全身を覆った金属製の鎧を着て戦った中世の時代には、切れ味より打撃力が重視されたのですよ」

鷹「日本はヨーロッパに比べるとはるかに湿度と温度が高いから全身を金属で覆った鎧が発達しなかったんだな」

う「真夏の日本の戦場であんな金属鎧着てたら、戦う前に熱中症で死にますね」

鷹「日本の戦国時代の戦いのほとんどは野原を駆け回る機動戦だからね。鎧を軽く薄くしなくてはとても戦場を駆け回ることはできない。薄くて軽い鎧を相手にするなら西洋のようなあんな重い剣を使う必要は無いってことだな」

う「だから日本では日本刀のような軽くて切れる刀を使うようになったってわけですね」

鷹「ところが戦国時代には、主に槍と鉄砲が使われた。日本刀の使い方とかが発達するのはずっと後の時代からなんだ」

時は幕末、京の都。
新撰組の取り締まりは
熾烈を極めていた。

天誅～!!

うえぽん的
ラノベシチュエーション
例題⑤

GO! WEAPON GO!

半熟編集者 うえぽんが行く！

第5講 刀 -Blade-

講師■鷹見一幸　イラスト／愛姫みかん

この企画は、スニーカー編集部の末端構成員・うえぽんを一人前の編集者にすべく仕掛けられた「虎の穴」的育成プログラムである。「今日の取材は？」「刀関係らしいです」「へえ、クビを切られなきゃいいけど」という会話に胃を痛めながら、今日も逝く（？）のであった。

Characters

うえぽん
編集部に流れ着いた丸いモノ。最近妄想に磨きがかかり、密かに危険視されているらしい。

まゆぴん
ご存知ザ・スニ編集部の女帝。相変わらず疲れ気味で、肩こりの痛みで朝目覚めると嘆く。

鷹見講師
小説のみならず書けるものはなんでも書く「雑家」として活動中。著作に「でたまか」シリーズ、「ネオクーロン」シリーズ（スニーカー文庫）、「時空のクロスロード」シリーズ、「ガンズハート」シリーズ（電撃文庫）などがある。

うえぽん（う）「まゆぴんさん、今日の取材はどこですか？」

まゆぴん（ま）「あら、聞いていなかったの？　秋葉原よ。鷹見先生が秋葉原で一番危ない店に連れて行ってくれるんですってよ」

う「秋葉原で一番危ない店!?　来た！　この企画が始って苦節ンヶ月、ついにこの日が来た！　ああ秋葉原秋葉原、メイドが唄い舞い踊る、萌えの都秋葉原！」

ま「わけのわかんないこと言ってるんじゃない！（げし）」

う「はっはっはっはっは、まゆぴんさんの拳も蹴りも、今回ばかりは痛くない、さあ急ぎましょう！　鷹見先生を待たせちゃいけません！」

ま「……この積極性が普段の仕事のときに欲しいものだわ」

う「というわけで、やってきました秋葉原駅。えーと、改札口の床に貼られたハルヒのイラストが目印だったんだけど……鷹見先生はどこでしょう？」

鷹見一幸（鷹）「やあ、うえぽん&まゆぴん」

う「あ、どうも鷹見先生！　今日は一番危ない店に連れて行っていただけるそうで……えへへへ、ダメですよ、鷹見先生。ザ・スニーカーは健全な少年少女のための雑誌です、そんな店なんて……僕はかまいませんけど読者には……」

鷹「……何か勘違いしとるようだが、いいからついて来なさい」

二人が連れて行かれたのは、秋葉原の裏路地を少し入ったところにある雑居ビルの四階。

ま「わあすごい！　ここ、何のお店ですか？　店の入り口に西洋の騎士の甲冑とチェンメイルと日本の鎧がお出迎えしてる！」

鷹「さあ、ここが今日の取材先、秋葉原で一番危ない店『武器屋』だ。銃や体術について取材したから今度は刀剣について勉強してみようと思ってね」

ま「そうか、そういえば刀剣とかの刃物系については、まだでしたものね……ねえ、うえぽん、あんた刀剣とかに興味ある？」

う「……甘かった、僕が甘かったんだ。考えてみろ、相手はあの鷹見先生だ。秋葉原で一番危ない店と言って、メイド喫茶なんかに連れて行くわけがない……すべてはこういうオチが読めなかったこの僕の……」

ま「何わけのわかんないことをぶつぶつ言ってるんじゃ！　仕事しろ仕事！（すぱこーん！）」

う「いててて、グーで殴らないで下さいよ、グーで」

鷹「そうそう、ここは武器屋だからな、どうせ殴るならそこに並んでるメイスやウォーハンマーでだな、こう、がすっーと」

う「死にます死にます、間違いもためらいもなく一瞬に！」

ま「見て見て、うえぽん、こっちにトリプラに出て来たような

未来放浪ガルディーン通信Z④ ～押し込むだけだろ、柳沢ぁ。

火浦功の大百科

ガルディーンの小説原稿が載らないときでも、ちょっぴりお得な気分になれるエッセイ。
映画『遊星からの物体X』を見た後、しばらく蒸し鶏及びカニが食べられなくなった経験があります。今回はそんなエイリアンのお話です。

え【エイリアン】腹の中から時計の音。

text by 火浦功

えーと、何だろ、これ。
俳句？
いや、いろは歌留多か？
ネタ的には、『ピーターパン』の、フック船長に目がない美食家のワニ。――あれ、ですね。
そして、この場合、エイリアンっていうのは、もちろん、ギーガー・デザインの、あのエイリアンです。
そこで、もう一句。
『エイリアン、食べてみたら美味かった』
あれ、茹でると赤くなるような気がするのは、私だけだろうか？
で、あのアタマの部分の、つるんとした殻を、むきしっと開けると、中にびっしりミソが詰まってるような気がするのだが……。
エイリアンの産卵期が上海ガニと同じなら、季節的には、秋がいちばんおいしいはず。

◆

つまり、エイリアンは、秋の季語ということになる。（同様に、UFOは冬。タイムマシンは春。金鳥は夏の季語という気がする）（気がするだけ）（特に根拠はない）（ので、あまり深く追求しないよーに）
まあ、それはさておき。
ガルディーン本篇において、コロナたちが巨大なカニと遭遇する話がある。
このカニ。卵から孵った時は、フェイス・ハガーと呼ばれる幼生体で、通りがかった生き物の体に寄生。成長すると、腹を食い破って出て来る……という設定だった（笑）。
で、コロナたちを追ってカニの街に到着したアルタミラが、レーベンブロイあたりと、いつもの会話「そこへ直れ！　今日こそ叩っ斬ってやる！」を、なごやかに交わしている背後で、整列している帝国軍の兵士たちが、次々と顔面に幼生体を貼り付けて倒れていく（が、もちろん、アルタミラたちは気がつかない）という、ズッカー・ブラザーズの映画みたいなシーンを用意していた……のだが、諸般の事情（主に締め切りのことを指す）により、泣く泣く省略したという経緯があったのだ。
冒頭の、五七五っぽいナニカも、おそらくその関連で、ボウフラのように湧いてきたものと思われる。
腹の中で時計の音をさせているエイリアン。
特定の個人だけを、執拗に狙ってくるエイリアン。
これは、イヤ度そーとーに高い。
昔の怪獣映画で言えば、『サンダ対ガイラ』のガイラが、そーゆータイプのモンスターだった。
ゴジラほどデカくないため、逆に、『おまえを食ってやる！』というガイラの意志が、肌感覚で伝わって来るからだ。
そう言や、昔、『お父さんが、がんばって買った建て売り住宅』を目標に、東京湾から上陸してくるゴジラ、というネタを考えてたこともあった。名古屋城とか東京タワーじゃなく、建て売り住宅。
あーゆー『絶対に話の通じない』存在が、なぜか、他の誰でもない『自分』だけを狙って襲って来るわけで、理由がわからないところが、なおさら不気味であり、恐怖でもある。そして、恐怖とは、常に理不尽なものなのだ。

◆

まあ、体の一部を食いちぎられるのに最適のキャラ（誰とは言わないが）がいるにもかかわらず、このネタを使わなかったのは、やはり筒井（康隆）さんの『走る取的』という大傑作が頭にあったからかなあと思う。
あれは怖い。
すんげー怖い。
ちょー怖い。
未読の方は、ぜひお読み下さい。

イラスト／愛姫みかん

なにもなくて、夏……。

火浦功の大百科、次回予告
お【落ちる】禁句

※お題は変更になる場合がございます。掲載は不定期です。

今回はトリッキーに火浦センセイの文章から始まりました「ガルディーン通信Z」ですが、この原稿が送られてきたメールのタイトルが、「日本、全敗確定か？」でした。W杯オーストラリア戦の結果を受けてのことですが、この連載がみなさまの目に届く頃には、W杯における日本の行く末も確定していることと思います（この原稿を書いている時点では、日本はクロアチアと引き分け、決勝トーナメント進出の可能性は風前の灯火状態です）。
しかし、日本は個々の能力はあってもその能力を発揮する能力が足りませんね――とはあるコメンテーターの言葉の受け売りですが、それはサッカーに限らず、「恋のW杯」についても同じではないでしょうか。
「キミの心をサイドチエンジ」だの、やれ「恋のクロスを上げてくれ」などと、私も含め世の男は（妄想フィールドで）絶叫しているわけですが、決定力不足は否めません。私自身も、思い切って〝恋のオーバーラップ〟をしかけ、裏スペースに走り込んだら、逆サイドでゲームが展開されていたことがあります。決定力以前の問題ですが……まぁ、それはいいとして、何事も決定力です。火浦センセイ。
思い切ってミドルレンジから、原稿をシュートしてみて下さい。今大会はボールの特製も相まってミドル決まりまくりです。迷ったらシュートです。ゴールネット揺れまくりです。今まさに「ガルディーン」はW杯ですよ、センセイ！
原稿、お待ちしております。

火浦様、ピンポイントクロスを上げて下さい。僕が決めます（ただし決定力なし）。

様子でトーストにマーマレードを塗りたくっていた。十崎家の掘りごたつに置かれたちゃぶ台は、もう片付けられている。

内藤一家は都内の《公館》宿舎のひとつを借りてそこに住むことになり、今朝の六時前に出発したのだ。仁も引越しをすこしだけ手伝った。

洗面所には、きずなが内藤家の小さな子どものために置いた踏み台が、まだ残っていた。内藤家は、確かにここにいたのだ。

そのきずなも、メイゼル同様、ときおり眠気で意識を飛ばしそうになりながら、卵のサラダをフォークで差している。誘拐事件の残務に追われ、ごたつく前にサミュエルたちを新生活の場へ転居させてやった十崎京香は、今朝五時にようやく仕事を終えて帰ってきた。もちろん今日の仕事は定時にはじまる。個人的に、テーブルに突っ伏していても、なんだかそっとしておいてやりたい気分だ。

「ひどい有様だわ。みんなそろって、だらしないわね」

内藤家がたった一泊二日しただけで、十崎家の女性たちは全員、力を吸い取られたようだ。

「でもまあ、昨晩はみんな、あんなことがあって疲れてたから、しかたないかしら。サミュエルたちの寝室も、ずいぶん早く電気が消えてたもの」

「わっ、わたし何にも聞いてないですよ！　夜中、全然何にも聞こえませんでしたっ!!」

きずなが突然の大パニックで完全にわやくちゃになっていた。内藤家は、思春期の女の子からみると恥ずかしいくらい子だくさんな家だった。それだけ罪人サミュエルにぬくもりが必要だったのか、もっと即物的な理由があったのか。彼らは本当に、そう、切ないくらいに人間だった。

そして京香が、むくりと起きあがって、思い切ったようにコップ一杯の牛乳を一気に飲んだ。

「あー、ごめんね。きずなちゃんの部屋の隣だったっけ、内藤さんたちの寝室」

「きっ、聞こえてません！」

「そういえばあの夫婦、なんだかんだ言っても、ありえないくらい円満だったのよね。結婚八年目なのに、隙(すき)があったら子どもの目盗んで手ぇつないでたし！」

思い返しながら食パンを裂く京香が、微妙にうんざり気味に見えるのは気のせいだろうか。

「あれは愛よね。すっごい見せつけっぷりだったもの」

メイゼルが、素敵ねと付け加えて、テーブルの上に出ていた仁の手に小さな手を重ねてくる。いつの間に買ったのか、おもちゃの指輪を左手の薬指にはめているのは、おまじないというにもちょっと重い。

きずなは、真っ赤になった顔を隠すようにマグカップでトマトジュースを飲んでいた。

「……そうだったのか？」

どうやら何も気づかなかったのは、仁だけらしい。

「武原さん、信じてないですね。本っ当に、昨日の晩の十一時ごろから真夜中の三時まで、隣の壁から何も聞こえなかったんですよ」

仁には、きずながもしも犯罪に手を染めたら、五分くらいで洗いざらい白状させられると思う。

まだ微妙に眠そうな幼なじみが、立ち上がった。メイゼルのおもちゃの指輪を、彼女がやさしく見おろす。

「あ、おもちゃの指輪だー？　なつかしー、私もメイゼルちゃんくらいのころ、仁にもらったわー」

爆弾発言だけを残して、京香のスリッパの足音が玄関へと遠ざかってゆく。

そもそも、責められる筋合いなどないはずだ。だが微妙に嗜虐的に目つきが変わった、問い詰めモードのメイゼルが、こつこつと歯痛になりそうな音で掘りごたつのテーブルをたたきはじめたのだ。

「せんせ、大事な話があるからそこに正座してほしいの」

この世界には、かつて万能の魔法使いがいた。今は誰もが、微妙に額に青筋を立てながら、ままならない自分を抱えている。ひとりで救われるのは大変なのだから、早すぎることも遅すぎることもないから、人は愛について語ろう——つまり寛容さと人類愛。

小さな魔女は、幼なじみという隣人愛の魔法についての仁の弁明を聞き終えると、微笑んだまま、かわいらしい指輪をはめた手を強く握った。

「でもせんせ、やくざの人をあんなやさしく抱いたげてキョウカに指輪あげるのが愛なら、あたしの立場は何？」

end

円環少女　—サークリッドガール

したそれは、まるで蠢く〝かいぶつ〟のように震えていた。
　いよいよ耐え難いほど火が回った床の上から、仁が救われてほしいふたりに語りかける。真理は、この神なき地獄では、銃弾より多くの人間を殺してきた欺瞞でしかない。
「どんな世界にも善良な人間はいるしそうでない人間だっている。危ない目に遭うこともあるし、思いがけない相手に助けられることだってある。神様も奇蹟もない世界で、人を救ってくれるものなんて最後には人間と、愛情だけだろ」
　けれど仁が抱いているのがサミュエルの無垢な赤ん坊ではなく、何十年かで汚れきった男だとしても、彼らはそれを捨ててはならないのだ。腕の中で揺らすと、矢島の目じりが子どものようにあどけなく引きつった。
「オレの魔法は、まわりの温度があがればあがるほど威力を増すんす。今からこいつを、旦那と〝そいつ〟とお嬢ちゃんのまわりに、つくりやす」
　メイゼルが反応するより、サミュエルの魔術が早い。
　炎の赤と橙色にあおられて、微細な氷片でかたづくられた花が花弁を広げた。高速発火魔術の百個を超える多重発動だ。
　無数の白花は繚乱する。氷花に熱を奪われて、プレハブ小屋の床に残っていた炎が、たちどころに鎮火した。サミュエルがあつかう熱の源は周囲の気温だ。だから火災で焼かれた熱気を吸って花開く魔法の威力は桁外れになる。焦点温度は、間違いなく千度を超え鉄すら溶かす焦熱。視界を埋め尽くす発火魔術の花園の、花弁は重なっている。床から奪った炎の熱を、花弁どうしで受け渡させて〝どこか〟へ中継しているのだ。
　燃える床の上で足に大火傷を負い、重いやくざの体を抱きかかえた仁に、サミュエルの術をかわす速度は無い。仁と少女を取り囲んで咲き乱れる、何十という火妖の花が――――――――――。
　そして炎の夜の最後を締めくくるように、現れたものは紅蓮の大渦。サミュエルの発火魔術ではない。これこそ魔法使いをおそれさせる《地獄》の、魔炎とも呼ばれる業火だ。この世界の住人、悪鬼が魔法を破壊するとき、砕けた魔法の破片として放散する、悪鬼自身の目には映らない光の乱舞。
「は、ははっ、……なんで、何も起こらないんすか」
　サミュエルが、仁を、メイゼルを前に放心していた。必殺のはずの魔術に、全員が無傷だったから――。いや、仁たちを牽制しつつ、あの魔法がサミュエルの抱え続ける《彼の地獄》を体ごと焼き尽くす、人体発火による自殺となったはずだったから。
「なんや……苦しいぞ……ボケ」
　だが仁が抱きあげた腕の中で、人の痛みに無頓着すぎた最低の男、矢島丈太郎が咳きこんでいたのだ。
　武原仁は何もしてなどいない。ただ、目を覚ましたこの悪鬼、矢島に複雑な多重発火魔術が観測され、破壊されただけのことだ。
「人と……愛ってなぁ、こいつはなんの冗談です？」
　サミュエルが〝かいぶつ〟ではなく、生れ落ちて不安な赤ん坊のように顔をゆがめた。
　仁も、男へと、つかれきった、けれど他にどうしようもない笑みを向ける。
「なんだおまえ、泣きながら笑ってんじゃないか。俺の〝勝ち〟ってことだよ」
　内藤家の父は、彼を追い詰めたやくざに発火魔術を破壊されて命を救われた。矢島たちにはしかるべき罰を受けてもらうが、罪人だからこの世から消えればよかったわけではない。愛し合いながら、憎みあいながら、慈しみ深くあるいは残酷に、それでもみんなつながっているのだ。そのつながりは結構捨てたもんじゃないと思うなんて、楽天的すぎてここにいる魔法使いたちに怒られそうだけれど。
「勘弁してくだせえよ旦那。笑ったら、負けなんすか」
　サミュエルの煤だらけの顔にしわをつくっているのは、あの川底の揚田クラリスの、解き放たれた死人の微笑みではない。生ある者だけに許された、しがらみを引きずった苦い諧謔（ユーモア）だ。
　お姫様抱っこの体勢のまま、矢島がゆでだこのようにゆだった真っ赤な顔で、仁を見あげていた。
「わし、夢の中にいるのんか？」
　元凶の男の安らかさがやるせなくて、仁はよく眠る悪党を床に落とす。打ち所が悪かったか、矢島が再度、気を失った。

†

　そしてプレハブ小屋の火事の炎と煙とを通報されて消防車が到来し、事件は終わった。
　駆けつけたものはもうひとつある。内藤倫子だ。十崎家のママチャリをこいで、髪を振り乱した彼女が、健康サンダル履きのままで、もはやすべての魔法を破壊される夫へ駆け寄った。あの男をただひとり本当に止められるかもしれない彼女が、仁たちのことなどかまわずサミュエルにしがみついた。傷ついた内藤太一も、両親へ転がるようにすがりついた。
　たぶん本当に夜が終わったのは、そのときだったのだろう。
　泣きながら夫婦がかたく抱き合った夜が明けて、翌朝、ごはんを食べにおりて来たメイゼルが、まだ寝たりない

サミュエルを道連れで殺そうとしたのだ。魔女と今のサミュエルは、たぶん同じだ。

男の慟哭とともに、氷の花のかたちでひとつ、殺意が弾けた。魔法で、微小が全体構造に相似な植物の葉脈のような導熱管が構成され、その広がる範囲から効率よく熱を吸いあげる。

仁は間一髪、氷と高熱の中心点を、身をよじってかわす。

だが仁たちは知った。今、壁と屋根の炎が完全に熱を失い、火の海である室内が息をできる気温に戻っていた。舞い踊る火が消えたのではない。木質のプレハブ小屋の壁と屋根が、別の桁外れに高温の燃焼ガス流にのみこまれたのだ。太陽にたたきこまれたようにはげしくオレンジ色に輝く壁を直視できず、男たちは目を細める。オーブンのように蒸し焼きであるべき小屋の中で、生きられている理由はひとつしかない。熱放射と熱気の対流が、完全に制御されている。小屋内が外部の悪鬼に観測されない魔法破壊の死角になっているとはいえ、おそろしく高レベルの熱制御だ。

一分とかからず、全焼後の火災現場さながら炭化した柱をさらして、壁と屋根は燃え尽きた。頭上から屋根の変わり果てた姿である灰が雨のように降り落ち、残った床の火の熱気で再び高く舞いあがってゆく。魔法のように仁とサミュエルは星空の下にいた。

「そんなものに、あたしたちが負けるですって？　ふざけないで」

そして床の火からの熱気にあおられたおとなたちは声の方向へ目を向け、ことばを失う。サミュエルと同じ死すべき理由を刻まれた刻印魔導師が、守られるべき子どもがそこにいた。人間は罪の奴隷ではないとばかりに、内藤太一と同じ小学生の鴉木メイゼルが胸に手を当て、誇り高く立っていたのだ。

刻印魔導師、鴉木メイゼルが操る魔法は円環大系。熱放射の根源である電子を支配するその魔法は、極大破壊力と紙同然の貧弱な防御力を特徴とし、熱をたくみにあやつることでも有数の力を有する。

「本当に頭にくるわ、あんたの見失ってる答えを教えてあげる。あんたは、今さら死のうが、一生洗おうがぬぐい尽くせないくらい、とっくに体の隅から隅までしあわせなのよ」

少女は、卑屈に下を向きそうになる視線で、それでも歯を食いしばってまっすぐ仁たちの世界を見ようとしていた。それが、ひどくうれしかった。

サミュエルの浅黒い左手には、鉄のようにかたく、結婚指輪が炎を照り返して輝いている。

小さな刻印魔導師がわななく拳を強く握って、サミュエルを見据える。

無人の工場で、生きのびてもしあわせになるとは決まっていないと言った少女が、細い脚で踏ん張っていた。下からの火で火傷を負った内藤サミュエルの影が、焼け跡にのびていた。カエルのように背をかがめて、長く黒々と

んだ小さな火と、その直前の避け切れなかった高熱の焦点が、彼の皮膚に火傷をつくった。脱いだジャケットでたたいて、せめて床の炎を消す。半分と消火できないうちに、今度はジャケットに氷の花が咲き、燃えあがった。
「旦那、そんな方法じゃあと何秒も耐えられやせんよ」
　白煙と陽炎に咳きこみながら、膝立ちになった仁が構える拳銃は、銃口に内藤サミュエルをとらえている。極刑の罪人が、体の内側からの冥い圧力にさいなまれるように顔をゆがめる。仁の後ろには、彼が避ければかわりに火達磨になる、意識を失い倒れた矢島丈太郎。
「なあ、なんで俺たちが戦ってるんだ？　この戦いは、ナニがどうなりゃ勝ちなんだ？」
　仁の指を止めているのは、あの揚田クラリスの死体が浮かべた、救われたような微笑みの記憶だ。すこしずつ勢いを増してゆく炎に巻かれ、火傷だらけで、陽炎の向こう側はぼやけて見通せない。この事件でひとりでも死なせたら、仁は刻印魔導師を監督する役目として処分をつけねばならない。今も、本当はすぐにでも撃つのが、専任係官としての彼の正解なのだ。
「……いっそオレを撃ったら〝勝ち〟すよ。オレさえ死んだら、あいつらだってもうおっかあや、子どもたちに手を出す意味がねえ。借金だって、生命保険がおりりゃだいじょうぶなんだ。すくなくともみんな、しあわせになれやす」
　公館の報告書類では、内藤家の三千万円の借金自体に違法性はない。一家は大金が転がりこみでもしない限り、借金で工場を手放さねばならない。矢島の出所後の報復と、また食いつかれることの恐怖におびえねばならない。
　そしてサミュエルは、あんなにも軽い理由で四百人を焼き殺した〝かいぶつ〟と、命尽きるまで向き合い続けるのだ。
「今回のことが起こったとき、これは神サマが罰をくださったんだってわかったんすよ。だってそうでしょう？　悪人がいなくなって、みんながしあわせになるなら、それが〝勝ち〟じゃありやせんか？」
　地獄のごとき焔にあかあかと照らされて、サミュエルは男泣きに泣いていた。
「オレはいいんす。太一を、助けてください……。秀次を、助けてください。秀三を助けてください。……ひとみを、助けてください。……双葉を助けてください。みつきを、助けてください……」
　カエルのように背中をまるめた刻印魔導師が、絶望の底から、祈りをこめて見あげてくる。なのに、昨夜、赤ん坊を抱いたサミュエルを見たときと同じだ。仁の腹の底にほんのわずか、生理的な嫌悪感がこびりついて取れないのだ。
「ああ、そうか。おまえ自身が、誰よりもこの嫌な感触に毎日苦しんでるんだよな。確かに〝これ〟をこそぎ落としたきゃ死ぬしかないか」
　仁の倫理観の正しさを求める部分は吐き捨てる。サミュエルが自らを罰してもしかたない。憎まれながら故郷の世界で生き抜くなら贖罪になったかもしれないが、罪を知られていないこの世界では、それすらないのだからと。
　そして、彼の甘い部分は反論する。それでも、ここで愛してくれる人間のためにただ生きろと。おとなになってしまった彼には、職務なり責任ということばに飛びついて人の死を片づけられない。
　正解などない。
　馬鹿げたマネだとは思った。だが仁は、気がついたら銃をホルスターに戻して、矢島丈太郎の九十キログラム近い体を抱きあげていた。人殺しにサミュエルを利用しようとし、子どもを誘拐して殴った、触りたくも無い男をだ。彼が目の前の刻印魔導師に、そしてメイゼルに見せたいのは、そういう世界だから。
「旦那、いくらなんでもそいつはないでしょう」
　炎にあおられサミュエルが、傷ついたように太い眉を寄せた。
「死ぬ理由のある誰かがいなくなればいいなんて言っても、おまえ、昔、何やったか家族に教えてないだろ。おまえが死ぬ理由はおまえにあっても、家族から見りゃどこにもないんじゃないのか？　理由なんて取りようのあやふやなモンだけで、勝手に死んだり殺されたりされてたまるかよ」
　無数の炎色の光に照らされて、影が落ちる場もなく彼らは炙られていた。まるで人間を焼く、永劫の業火の中にいるようだ。サミュエルが悪人と無辜の者四百人を炭にした孤児院の中も、こんな様子だったのか。だがこのうなる炎の向こう、十崎家には父親を待つ内藤家の子どもたちがいる。内藤倫子は、今晩も、きっとむやみにレモンの入った晩ご飯を作って待っている。
「旦那とオレたちはちがうんすよ。オレたちの本当の《地獄》はここにあるんです」
　そうして、浮かばれない魂に操られたように、〝かいぶつ〟が握った拳で、自分の心臓の真上をたたいた。あの水中に死んだ女が自ら魔法で吹き飛ばしたのと同じ、左胸を。
　ようやく、仁にも川底の揚田クラリスの微笑みが、すとんと腑に落ちた。あの夜、川面を走ったクラリスもきっと、焼きさいなまれ解放されない胸をかかえて、死に場所を求めていた。もし目的地が工場だとしたら、納得できる価値を加える生贄として、同じ死ぬべき理由がある罪人、刻印魔導師内藤

「いいえ、何も終わっていやせん」

サミュエルの静かな怒声と同時に、仁は、炎の雨を受けたような、何百というともしびに囲まれていた。

まるでシャンデリアの中に飛びこんだようだ。一瞬で、プレハブ小屋の中には無数の小さな火が燃えはじめていた。これが故郷の世界で四百人を焼き地獄に堕とされた男の、本当の実力だ。誰もが魔法使いである魔法世界で、地獄送りになるほどの大罪をやりおおせるのは、ある種の異才だけだ。そしてこの内藤サミュエルには、子どもを売った後ろ暗い孤児院職員たちすらゴミのように焼いた、超高速の発火魔術がある。

「どういうつもりだ？」

地獄堕ちの罰を背負わされながら、この世界に根を張り生活を築いた男が、仁に答えた。

「だってそうでしょう？　旦那がたが逮捕して、こいつら一体どのくらいの罰になるんですかい。二年か三年か、ほんのちょっとの間、牢屋に入って、すぐ外に戻ってくるじゃないすか」

出口に陣取ったサミュエルの、殴られ蹴られて早くも腫れはじめた顔の奥の瞳には、憎悪が火のようにちらついていた。

「こいつら出てきたときは、今よりずっとカネに困って、オレたちをしゃぶりつくそうとするに決まってるでしょう。この傷を見てくだせえ、太一がどんな目にあったか見てくだせえ。どうやって家族を守れるんだ。旦那ぁ、オレを希望だと言ったじゃないすか！」

「ふざけるな！　おまえ、つぐないとか、良心とか、さんざん言っておいて、どうしてそうなんだ！　家族が待ってんだぞ。こんなことで、誰が救われるつもりだ」

眼球の湿気が奪われて、目がちかちかする。火の回りが早かった天井からは、ぱちぱちと木材のはぜる音がしだしていた。あがりはじめた煙と熱気でむせた。いまやせまい小屋の中で、板やプラスチック、可燃物はすべて燃えはじめている。意識を失っていようと、悪鬼の体に魔法で火をつけるのは難しい。きれいに誘拐犯四人の周囲だけが、魔法を破壊されて炎の空白地だ。

「これが、つぐないなんすよ」

まるで悪夢の中にいるようだ。サミュエルのシャツは汗だくだった。仁も同じようなものなのだろう。服は汗でへばりつき、額から落ちたしずくが目に入る。たぶん、これは涙ではない。

「うちの太一を、連れて帰ってくれやせんか。こんな真夜中に知らない場所にほっぽり出されて不安にしてると思うんす」

この解体現場へ来るまでの車中、サミュエルは仁の煙草に火をつけた。刻印魔導師はおのが得意とする高速の発火魔術で彼を出し抜けそうか、試したのだ。

「この大馬鹿野郎が！」

仁がふところから拳銃を抜いた。この世界で父になった男が、なにかがズレたまま戻らなくなってしまったように笑っていた。

「オレが、魔法で人並み以上にできることなんて、これだけす。けど一回くらい、それで家族を守ってやれる〝魔法使い〟になったっていいじゃありやせんか」

仁へ向けて収束するように、一瞬、霧のように微細な氷の花が何十となく咲き乱れた。魔法で熱を奪われた水蒸気が氷結し、星のようにきらめいたのだ。因果魔術で氷が発生したとは、周囲の大気が熱を奪われたのと引き換えに、どこか一点の温度が急上昇したということだ。その熱量を集めた発火点は、氷の花弁の中心――――。

「ちがうだろ！」

仁は炎からのがれるため、すでに燃えはじめている床へと転がる。飛びこ

「たぐけて」――その声を聞いた仁の我慢も限界だった。

魔法使いたちが快適にすごすための魔法をそのままに悪鬼の訪問者から逃げ去った事例は、おとぎ話にもある。善良な旅人が今まで人がいたようなあたたかい家に出会うおはなしの原型はこれだ。

――そうして時代は進んで現在、魔法使いは「死体をあたためろ」と、我が子を人質に取られてせまられている。

「子どもひとりじゃかわりもおるしな。弟と妹も全員連れて来たろか、な？」

矢島という男は、人を殺して、被害者の死亡推定時刻をごまかしたいのだ。死体はそこにあらわれる複数の現象で、死からの時間を推定される。だが、そのいくつかは体をあたためることで狂う。死後硬直は遅くなるし、直腸内温度も正確でなくなるのだ。体温だけでは、血流が止まるから死斑が出たりと、偽装は決して完璧にはならない。だが死体現象は総合的な問題だ。たとえば死体が冷たい川の中のように体温以外に熱源のない場所で発見されてしまえば、体があたたかかった事実を無視できなくなってしまう。魔法という、観測即ち破壊なため科学的に立証できない現象をはさまれると、裁判で無罪になる可能性が十分に出てくるのだ。

こうして人の肌に吸いつき血をすする蛭のように肥え太ってきたのだろう。矢島が濁った目でじっとサミュエルを検分していた。どのくらいのカネを搾り取れるかをはかるように。

そして、さるぐつわがずれた何の罪もない長男が、かすれた、今できる精一杯の声をあげた。

「たぐけて」

高揚したやくざ者たちの注意は完全に、もっとも弱い内藤太一だけに集まっていた。

そして、仁の我慢も限界だった。

解体現場に着いた途端、サミュエルが派手な格好の男に引きずりこまれたところまでは予定どおりだった。その間に、裏手から仁が解体現場にもぐりこむ。サミュエルが魔法なんてものは知らないと今さら言いだし、中の男たちの注意をそらす。仁が窓から発煙筒を投げこみ突入、誘拐犯の視界をふさいで内藤太一の身柄を確保。サミュエルと息子はプレハブ小屋を離脱。そして煙に乗じて、仁が残った男たちを無力化・拘束する、単純な手はずだった。

狂ったその予定を元に戻すべく、仁はプレハブ小屋の窓を、発煙筒を投げこんで割る。缶ジュース大の金属筒からもうもうと噴きあがった白煙と慌てた男たちの中心に、飛びこむ。ガラス窓を体ごと突っこんで割った武原仁を何人がまともに視認できただろう。

「なんだごら！」

「誰や、ガキいてまうぞ」

「撃つなボケ!!」

矢島丈太郎の声が、夜間、煙に巻かれた光なき底を揺らした。仁は足音の乱れから体勢の崩れを読み取り、白濁した風を貫き爆発的な加速で踏みこむ。三センチ先も見通せない状態でも、武原仁は足音で敵の位置をはかる。逃げ足の速い魔法使いたちを、どんな状況でも間合いの中にとらえれば必殺できるよう訓練されたのだ。

仁は、心臓の直上に、全体重をのせて肘をたたきこんだ。肋骨が折れた鈍い感触と、肺から空気が押し出される笛のような音と同時に、矢島は意識を失った。

「矢島さん！」

その声で頭部の位置を確認し、二人目の襟首をつかみ背負い投げに切って捨てる。

「殺すぞ、ガキ殺すぞ」

三人目が最も弱いものに飛びついたことに、この世界の恥部を見られたようで暗澹たる気分になった。子どものいた位置で待ち構えて卑劣な男を一打ちに仕留める。

「たい――ち！　逃げろ、たいちぃ！」

父親の祈るような叫びとともに、白い闇に満たされた小屋のドアが、勢いよく開かれた。

「動くな、こいつら殺すぞ!!」

四人目が怒声をあげ、仁に背中を向けることになるのに拳銃を出口へ向けた。武原仁にとって素手の殴り合いでは、柔道や空手の有段者もいるやくざ相手のほうが、本来、魔法使いより注意を要する。だから冷酷といえる判断で確実な突入タイミングを待ち、間合いの感覚をつぶすため薄闇に慣れた誘拐犯の視界を発煙筒で奪いまでしたのだ。不意打ちとはいえ、彼らの自滅は情けないのひとことにつきた。

「もういいぞ、終わった」

仁の足元に、意識を失った四人目が崩れ落ちた。

そして煙が急速に晴れはじめる。開いたドアから白煙が拡散して吹き流されるとともに、室内の視界が回復してゆく。内藤サミュエルの、自然現象の因果を操作する因果魔術だ。矢島らやくざ者四人が完全に気を失い、内藤太一がこのプレハブ小屋からきちんと逃げた証だった。悪鬼に魔法を破壊されなければ、魔法使いにとってこのくらいのことは朝飯前だ。

拳銃を取り出し、遊底を引いて初弾を装填する。誘拐犯側が拳銃で武装している可能性と、人質をとられていることを考えれば、使いたくなどないが万が一の用心だ。
「ややこしくなるから、合図までは外に出るなよ。この世界の人間相手じゃ魔法がほとんど効かない以上、おまえはただの小学生なんだからな」
ここからサミュエルはひとり、バンから積みおろした自転車をこいで、誘拐犯と息子のところへ向かうのだ。男が、勇敢にサドルにまたがり、緊張で汗まみれになった顔で仁たちを見あげる。
「後は頼みやす」

†

電灯ひとつない薄闇の中、大制産業レクリエーション事業部部長補佐、矢島丈太郎が、わずか七歳の内藤太一を張り飛ばした。
泣きはらしたのだろう子どもの頬には、うっすらと涙のあとが白く残っていた。さるぐつわをはめられて、泣き声をあげることすらできず顔をまっ赤にしていた。すでに何本か乳歯が折れたのだろう、噛まされていた白いタオルはにじんだ血でまだらに染まっていた。
小屋に入ったサミュエルが立ち尽くし、闇に慣れて息子の姿を認めた瞬間、手近にいた男につかみかかった。
「それでも人間か！　畜生。それでも人間か？」
かつて死体が家より高く積みあがるほど子どもを焼き殺し、今は父親になった刻印魔導師が、人として哭いた。
「なんだこら！」
「沢村！　しっかりつかまえとかんかい」
「玉木ドア閉めぃ、逃がすなこいつ!!」
内藤サミュエルは三分ともたず、何発も殴られ蹴られ、ベニヤ板の床に押さえつけられていた。
全身ベルサーチのスーツでかためたやくざ、矢島がふところから拳銃を抜く。
「このダボが、今さら逃がすかぃ。ガキいてまうぞ。聞こえてますかー。お父さん、聞こえてますかー。こ、ん、な、ふ、う、に、く、そ、ガ、キ、い、て、ま、い、ま、す、よ」
拳銃の銃口を、ねじこむように父親のこめかみに押しつける。サミュエルを三人がかりで押さえつけた男たちが、下卑た笑いに唇をつりあげる。
「あ――――――、あ――――――」
父親は強くて何でもできる、そう信じていた幼い世界が粉々に砕け散ったか、七歳の子どもがはげしく泣きわめいていた。だがそれで許してくれるはずもない。
「ぼくぅ、お父さんに、ちゃあぁんとお仕事するように言ってくれへんかなぁ？」
「……やめてくだせえ。……お願いす、やめてくだへえ」
悪鬼に注視されていては魔法を破壊されるだけの魔法使いが、踏み潰されたカエルのように、こぽこぽと泡を吐きながら哀願した。サミュエルは歯を折られて下唇から血をあふれさせている。我が子を守ろうと父親は懸命だった。
矢島がサミュエルの泥と垢に汚れた耳に耳打ちする。
「ちょっと死体をあったためてくれ言うてるだけやないか」
「カンペンしてください。それはカンペンしてください」
とらえられた刻印魔導師が懇願する。相手が弱さを見せた瞬間、窓からの星明りを背負った矢島が、得たりとばかりに笑った。
「カンペンできるわけあるかぃ。な、大きいもんに火はつけられんから、あっためることしかできんいうてたよな？　火ぃつけるのはできません。あっためるのもイヤです。おどれなめとんか？」
魔法で死体をあたためることは可能だ。確かに、この世界の人間に観測された魔法は破壊される。だが裏を返せば、奇蹟の力は、もはや何も観測しない死体にならはたらくのだ。
「ぼくぅ。お父さんにお願いしてみようか？」
矢島が目配せするより早く、下品さを共有した舎弟のひとりが、まだ骨のもろい子どもの腕をねじりあげた。力をこめられるたび、そういう仕掛けの玩具であるかのように、昨夜、十崎家でから揚げをほお張っていた口からうめきをあげ、見開いた目から涙をこぼす。
「やめてくだせえ、……カンペンしてくだせえ」
出所がわからない熱は、古来、魔法使いの痕跡だった。
たとえば十九世紀、大西洋で帆船マリー・セレスト号から乗員がそっくり消える怪事件が起こった。その無人で漂流していた船には、直前まで人がいた気配があった。まだ湯気を立てていたコーヒー。調理室で火にかけたまま煮立っていた鍋に、船員の部屋に残っていたチキン。だがこの船に「直前までひとがいた」とする根拠は、ほとんどが熱にかたよっている。
そして熱が伝わる自然現象の因果を止め、あたたかさを保つのは、内藤サミュエルたち因果大系の魔法使いにはたやすい。それが、幽霊船マリー・セレスト号の真相だった。悪鬼である船員に観測されたせいで、食べ物をあたためていた魔法が破壊され、そこは無人であるほか当たり前の風景に戻った。発見した船員たちは、自分たちが乗員消失という謎の最後の仕上げをしたと、気づきもしなかったろう。このように、

だが誇り高い少女は、サミュエルの腕で眠る赤ん坊とはちがう。同じ罪人、刻印魔導師でもあるのだ。

†

あくる日の夕方遅く、仁が小学校の校門を出たころ、携帯電話の呼び出しが鳴った。珍しいことに、日常はメールばかりで通話をひかえる倉本きずなからだ。
〈武原さんお願いします！　太一君が家を出てたみたいで!!　もう一時間も、姿が見えないんです！〉
彼女の悲鳴で状況は理解できた。内藤太一――七歳児の長男が、十崎家に閉じこもっていることに早くも退屈して外に出て、誘拐されたのだ。刻印魔導師は管理の都合上《公館》近辺にしか住めないし、内藤家の工場もそうだった。そして十崎家も徒歩十分の近所だ。おそらく内藤太一は迷子になって、人目につきやすい大通りにでも出てしまったのだろう。敵が目を皿にして探しているのに、近辺を獲物がうろちょろしていたら、見つかっても不思議ではない。
「きずなちゃん、落ち着いて。最悪でも、必ず向こうからサミュエルの携帯に連絡がくる。まだ来てなかったら、俺は二十分くらいで戻るからそれまでは電話を取らないでくれ」
だが、誘拐犯の背景がわかっている以上、冷酷に判断するならまだ余裕はある。

†

「あと十五分で、連中が今、おまえの息子を引っ張りこんでる工事現場だ」
仁が、車のハンドルを握りながらくわえた煙草の先に、突然火がついた。あれから《公館》に連絡して、バンを回してもらったのだ。
「自然発火か。こんな高速でやる魔導師はそういないな、見事なもんだ」
古くから呪いや神罰のたぐいと認識され、今なお科学では個々の事例の実現可能性を指摘するに留まっているものに、自然発火現象がある。火の気がないはずの場所で突然物が燃え、人体までも炎に包まれ黒焦げになる。仁が知る限り、これの正体は魔法だ。因果大系という、因果関係に《魔力》を見出し操作する魔法で、現象の原因と結果を逆転させ、あるいは因果を遮断した結果の発火――
つまり自然現象では、熱はあたたかいところから冷たいところへ伝わる。因果大系の魔法はこれを逆転させ、冷たいものから熱を奪って、あついものを逆に温められる。その結果自然発火するほどの高温に到達したのが、発火現象の正体なのだ。――そして、仁の煙草に一瞬で火をつけたサミュエルは、発火魔術の名手と言っていい腕前だ。
孤児院を焼き、四百人以上を焼き殺した男が、悔いるようにつぶやいた。
「府中の競馬場で、こうやって、煙草に火をつけてたんですよ。人ごみで魔法を使っても、どうせこの世界の人間に見られたら魔法は壊れるし、誰にもバレねえ安全だって思って。あいつらに目をつけられたのは、〝これ〟なんですよ」
この奇蹟果てる《地獄》の住人、悪鬼に観測された魔法は破壊される。だが、魔法で自殺した揚田クラリスがよみがえっていないように、一度魔法で起こした変化は取り消しようがないのだ。同じように、サミュエルが魔法ですでにつけ終えた煙草の火も、燃え続けること自体は自然法則に反していないから消えない。サミュエルの発火術は、その度外れた超高速によって、人ごみの東京競馬場ですら煙草に火をつけられた。だがそれゆえ、男は悪党の目に留まった。
「旦那は、この世界の、その……まっとうなお人じゃねえんですね。オレは魔法を目の前で使ったのに、破壊しなかった」
法定速度を守って進む車の窓から、夜の街が見えた。その流れゆく灯火を惜しむように、サミュエルはずっと光を視線で追いかけていた。
今、彼らは誘拐犯たちに呼び出されて、倒産した会社ビルを解体中の工事現場へ向かっている。誘拐犯の電話は、《公館》スタッフまで十崎家に集まった万全の体制で受けた。犯人の身元は見当がついているし、内藤太一救出のシナリオも組んである。
目的地から十分に離れた道路脇に車を停めたとき、ただの父親の顔で刻印魔導師が漏らした。
「旦那、本当にこれで大丈夫なんすか。……太一は、無事なんでしょうね」
解体現場のはす向かいにあるパチンコ店には、すでにシャッターがおりていた。街灯もまばらな二車線の道路には、路上駐車したまま放置された自動車や錆びた盗難自転車がぽつりぽつり屍をさらしている。住宅の明かりすらなく、まったく車がとおらない。
「あそこに、鉄パイプの骨組みに支えられてる、高さ三メートルくらいの白いビニールシートの壁があるだろ。あの奥に、緑色の小さなプレハブ小屋がある。おまえの息子はあそこだ」
「せんせ、あたしはどうするの？」
ここ数日はまともに寝つけなかったのだろう、車の後部座席でうとうとしていたメイゼルが目を覚まして窓を開けた。
「内藤太一が工事現場から出てきたら、車の中に入れてやってくれ。誘拐犯を完全に無力化できたら俺が携帯電話を鳴らすから、それが回収の合図だ。どうやら四、五人だ。問題なく片づけられるよ」
仁はジャケット下のホルスターから

世界で根を張ってしあわせになる刻印魔導師もいるんだと。
「わかってる、俺の言ってることなんて偽善だらけだ」
「ナニしてるの、せんせ？」
静かだった夜に、当の少女の声がくさびのように打ちこまれた。
パジャマ姿のまま、二階の部屋から刻印魔導師鴉木メイゼルがおりてきたのだ。薄闇の中、リボンを結んでいない漆黒の髪が、かきあげる手にしたがって滝のように落ちる。
話を聞かれたのではないかと、寒気がした。奥歯を食いしばって、それでも彼女の前でつらい顔を見せられず、平気をよそおい振り向く。
「せんせの腕枕じゃなきゃ、あたしが眠れないって、わかってるでしょ？」
メイゼルはいきなり無茶を言って彼を慌てさせるのが好きだ。それでも、彼女が楽しそうだとほっとする。仁はあどけない魔女に、その希望になってもらいたいのか？　そうではない。守られるべき彼女の小さな肩に、おとなが重荷を背負わせること自体、恥知らずに思えた。
「もう十二時回ってるから、ちゃんと寝なさい。明日は学校あるんだからな。……あと、こいつが言ったのは嘘だぞ、腕枕なんかしてないぞ」
けれど彼のことばでいつも止まってくれない姫君が、ぺたぺたとスリッパ履きで歩いてくるのだ。

「今日は驚いたわ。刻印魔導師って、この世界で結婚できたのね……」
「結婚くらいするさ、そりゃ。一応戸籍はあるしな」
少女が、髪がばらけないようかきあげたまま、仁の顔に上体を近づける。かたちよりも洗い髪のにおいと少女特有の青くさいような気配で、そこにある彼女の体を意識する。
小さな魔女は、顔をこの世界で十年すごした刻印魔導師へ向けていた。
「あんたは、今までしあわせだった？」
汗と脂にまみれた魔法使いは、頭で考えてもわからない答えを探すように、自分の手をじっと見た。分厚い爪の間も汚れ、小さな傷がいっぱいについた手には、刻印魔導師内藤サミュエルのこの世界で生きてきた年月がしみついている。
その左手の薬指には、まるで鉄のように硬く結婚指輪がはまっている。
「そんな簡単なことじゃねっす」
サミュエルが、わが子と同年代で重荷を背負った少女に、恐縮していた。
メイゼルは、その短いことばだけで答えを手に入れたかのように、満足げに仁を振り返った。
「よくわかんないって顔してる」
「おまえはわかんないんだ。すごいな、俺はさっぱりだったよ」
〝かいぶつ〟ならぬ夜の妖精がくすくす笑う。無邪気なよろこびに瞳をとろかして。
「せんせ、薬指に指輪をはめると、男の人はすこしだけ頭がよくなるのよ。首輪でも素敵だけど」

それでも俺は、メイゼルに生きていてほしい。

以上もカサカサで嘘みたいに小さくなった子どもの死体が転がってたんす。ばかでかい黒い影が、ぬうってそのうえに人食いの怪物みたいに落ちたんですよ。おどろいて、それが自分の影だってわかったとき、見えちまったんです。その男はもう〝かいぶつ〟でした。そうして、こんな呪われて、《地獄》にでも堕ちなきゃおかしいと思ったんす」
　サミュエルの愛情は本物だ。そう頭ではわかるのに、二百人以上も子どもを生きながら焼いた〝かいぶつ〟が赤ん坊を抱きあげる姿に、仁は生理的に腹の底がむかむかするのを止められない。
「なんで、おまえみたいなやつが事件を起こしちまったんだ」
　男は暗い川底と同じ深みから、泣き笑いに顔をゆがめた。
「あいつら、オレを『カエル』って呼びやがったんです。あそこにいたときから、ずっと、カエル、カエルってよ」
　四百人を無差別に殺すには、めまいがするほど軽かった。耐え難い軽さの後ろに、ねっとりした闇が覗いた。
「『もういい。やめよう』『旦那ぁ』『もう十年だ』っておっしゃいやしたね。でも、どんな殊勝に地獄堕ちしてきた罪人だって、刻印魔導師の戦いに三回も出りゃ、たいてい生きのびてえって手のひら返すんでさ。だから最初は、シメたって思うんすよ。刻印魔導師は、ついた専任係官が〝アタリ〟なら戦いに徴発されねえし、自分から死に場所へ飛びこむかここの法律を破るかしねえ限り、生きのびる可能性はありやすからね。魔法を捨てるのだって、本当に生き汚いクズならやってのける。
　でもね、根付いたらそんなもんじゃありやせん。あたりまえの人間のツラして、あたりまえの人サマと接して人間らしくなってくと、どんなクズにだってあたりまえの良心が戻ってくるんです。ここじゃ、しでかした罪だって誰にも知られちゃいねえんですよ。クズは死ぬまで焼かれ続ける。罪をつぐなえることも、終わることもありやせん」
　この男が背負ってきたものなど、今日はじめて会った仁にわかろうはずがない。それでもただひとつだけ、ぶれようのない真実はあった。
「それでも、おまえが抱いてる赤ん坊は宝物だ。そうだろ」
「オレはこの子が泣いたとき、石にかじりついてでも、駆けつけてやらなきゃなんねえんでしょうね」
　太い眉毛の下の瞳が、にぶく輝いていた。
　男ふたりで、何も知らずに眠る赤ん坊を見下ろす。魔法使いと悪鬼の間の子どもは、九割以上は悪鬼として生まれる。この子は父の魔法を継ぐこともないし、その罪を背負う必要もない。そんなことがあってはならないのだ。
「この子、名前はなんてったっけ？」
「内藤……みつき」
　内藤家の三女、内藤みつきは今、夢を見ているのだろうか。心配などないように、この夜の底で安らかな寝顔を浮かべていた。サマになった馴れた手つきで、サミュエルが赤ん坊の産着の襟をなおしてやる。不安になるほど小さなその体を前にして、仁には「抱かせてくれ」となど言えるはずもなく、遠巻きにながめていた。ぱちりと乳飲み子が目をあけた。魔法など使っていないはずなのに、父親はこれを予知したのだろうか。今晩の仁には、もうその醜悪で尊い者の罪を、これ以上掘り返す気力はなかった。
「今日、テーブルでめし食ってた、おまえんとこのガキと変わらないくらいの年の女の子がいただろ。あの子、おまえと同じ刻印魔導師なんだよ」
「十崎さんに聞きやした」
「あいつな、本気で百人討伐して、元の世界に帰るつもりなんだ。バカみたいだろ、まだ小学生だってのに。ひとりも達成できたヤツなんていないってのに。そこまでして、あんな年で生き急ぐんだよ」
「大事にしてるんですね。けど、事情は知りやせんが、刻印魔導師にはみんな〝何か〟ありやす」
　〝かいぶつ〟サミュエルは守るべきものを太い両手にしっかりとかかえていた。仁はあの少女を〝かいぶつ〟だとは思えない。暗い部屋から夜空を見あげた。遠い闇の向こうに、決してつかめない星がまたたいている。
「それでも俺は、どんな理由があっても、メイゼルに生きていてほしい」
　この世界で十年生き抜いたサミュエルは、必ずしもしあわせには見えない。それでも、半分泣きそうで、半分吐きそうになりながら、仁は言った。
「この世界で生活を築いてくれる魔法使いは、希望だよ。そういうやつらがいなきゃ、俺たちはいつまでも今の地獄を続けなくちゃならない」
　仁はこんなにもサミュエルの話が苦くなければ、この男を生き方の手本として少女に紹介したかもしれない。ムリをして命がけで戦わなくても、この

う感じたのだ。
「赤ん坊ってのは、こうやって誰かが見ててやらねえと、不安で不安でしかたねえんすよ」
　カエルのように背を丸めた男が、ようやく眠ったばかりの我が子の脇にあぐらをかいていた。
「この世界に来てもう十年だってな。おまえは、よくやってきたよ」
　仁は、赤ん坊をはさんで、男の隣に腰をおろす。
「そんな立派なモンじゃありやせんよ。オレぁ、こっちのことばの読み書きだってたいしてうまくねえし、計算だってヘタだから工場をこんなに傾けちまいやした。バカはどんな世界に行ったって、ダマされたり利用されたりでまわりにまで迷惑かけちまう」
　何もかもうまくいく人間ばかりではないと、仁は言いかけ、あまりにむなしいおためごかしだからやめた。
「本当に、ダメですよ。借金取りのやくざが狙ってるのはカネじゃねぇんです。オレの魔法のことを知られちまって、それで金もうけに一役買えってぇ話になっちまって」
　この世界に堕とされた刻印魔導師のうち半数は、三年以内に死亡する。百人討伐がそれだけ過酷だというだけではない。魔法使いにとっては奇蹟なき《地獄》にすぎないこの世界の暮らしに適応しようとせず、犯罪に手を出し狩られる者が跡を絶たないのだ。そして、今回のように、この世界の人間側から犯罪に巻きこもうとすることもある。
「そいつらは、《公館》のほうで始末をつけとくよ」
　仁は煙草をつけたくなって、ポケットから箱を取り出したところで、赤ん坊のことを思い出してやめた。
「……けどおまえ、逃げてきたってことは、ずっとこの世界で生きてたいんだよな」
　サミュエルが、火のように触れがたく沈黙した。肌の固まった脂を機械油でのばしたような臭いがする男の気配は、自殺した揚田クラリスに似てよどんでいた。今日、仁は《公館》で調査書類を見た。事件の二日前、あの魔女は別のアルバイトの面接先でアジア系外国人と間違えられたという。無口な刻印魔導師は好感をもって迎えられ、来週からはたらくと決まった途端いたたまれない表情になって席を立ったと調書にはある。そしてクラリスは事件現場の飲食店へアルバイトの面接へ行き、店員を皆殺しにして逃亡した末、微笑みながらおのが命を絶つ。
　仁がその薄暗い窖の前で迷いながら、夜風に揺れる葉ずれの音を聞いていると、刻印魔導師が言った。
「昔々の話です。生きててもしょうがないような男がいたんす。そいつは、ここに来る前に、いっぱい人を殺しちまったんです。……孤児院を焼いて、クソみたいな寮長や監視といっしょに、子どもまで殺しちまった。みんな殺しちまったんです」
　仁も聞いたことがある。内藤サミュエルは、戦災孤児としてかつて引き取られた孤児院に、おとなになって舞い戻り焼き尽くした。寮長職員護衛約百名に加えて、三百名を数える子どもまで全滅だったという。
　言い知れない不吉さが、現実の薄暗い裏側から忍び寄るようだ。
「それはやめろ。おまえには、守らなきゃならない子どもがいるだろ」
「その男はね、てめえの子どもたちを見てると、火をつけちまった焼け跡の、ものすげえ数の黒焦げんなった子どもの死体を思い出すんです。空に手を伸ばすみてえに、焼けてカチカチになった小さい体が仰向けに倒れてたんですよ。黒焦げの体がしきつめられた泥沼に、真っ黒な花が咲き乱れるみたいでしてね……小さな手がこうやって、何かつかむみたいに半分だけひらいてるんです。
　その中には、太一くらいの子もいやした。秀次くらいの子だって、秀三くらいの子だっていやした。……ひとみや双葉の年の女の子もいた。……みつきくらいの赤ん坊だって眠ってる間に、さなぎみたいな炭になっちまってた。その男がみんな燃やしたから、あんな真っ黒な泥人形みてえで、目玉も鼻もなくなって」
　淡々と、サミュエルが過去の地獄の光景をことばにする。夜の闇が、空気すら泥のように濁らせて彼らの息をつまらせる。
「その男が、殺りたかったのは寮長と愛人の使用人頭だけだったのに、夜が明けたら何もかも消し炭の大火事になってたってわかったんす。そいつは、しくじったと思ったんすよ。だから死体を確かめようとしたんです。けれど、そいつが焼け落ちた二階の床を掘り返しても、どこまで掘ってもまっ黒な子どもの死体しか出てこねえんです。丸一日すぎてやした。なんでうまくいかねえんだって、この世は呪われてるって思いながら、焼け残りの柱を燃やして一晩目は眠りやした。二日目も、三日目も、ひとつひとつ、子どもの死体を見つけるたびに、頭がおかしくなりそうになりながら外に並べたんです。掘り返して、死体を並べて掘り返して、死体を並べて、四日目の夕方に、ようやく前歯に金歯のはいった野郎が丸焼けになってるのを見つけたんです。その男は大笑いしましたよ。この怪物寮長、ようやく死にやがったってね。この使用人頭、乳首にピアスしてやがったってね。燃えるみたいにまっ赤な夕焼けで、四日たってもまだものすごいにおいが取れねえ焼け跡に寝っ転がって、ずっと大笑いしてやしたよ。
　それでようやく安心して振り返ったんですよ。そしたら後ろには、三百個

せんせ、でも本当に、これで背が伸びるの？

今日は人数が多いから、十崎家の遅い晩ご飯は、掘りごたつの横にもう一個座卓を出して、大皿料理を派手に並べることになった。鳥のから揚げと、子どもの好きそうなグラタンといった洋食がきずな、家庭的な煮物あえ物類が内藤夫人の作だ。

「おかあさんよりうめー！」

「おいしい」

「うん、おいしい！」

子どもたちのはしが、勢いよくのびる。見ていて気をつかうくらい、きずなの作ったものばかりなくなってゆく。母親が目の前にいるのに、小さい子どもは空気を読まない。

仁が、きずなが、メイゼルまでが、内藤倫子のかたまりっぷりにあわててフォローを入れる。

「このマカロニサラダも、うまいですよ。レモンとか入ってて」

「酢の物も、レモンがさっぱりしていいですね。わたしも、ちょっと今度レモン入れてみます」

「肉じゃがにこの酸っぱいのを入れるの、なんか斬新だと思うわ」

内藤夫人の作るものは、なぜかレモンがよく入っている。なんで家庭料理って、こういう変なこだわりがあるんだろう。

「レモン！　レモンいいわね、レモン！　ウイスキーに合うし」

十崎京香はすでに、ビールが入ったただの酔っ払いだ。

「でしょう！　レモンにはビタミンCが――――」

レモンの話になると、内藤夫人のテンションが突然あがった。きっと若いころは愛嬌のある女性だったのだろう。生活に疲れても、目尻に刻まれた笑いじわが引きこまれるような笑顔をつくった。

健康食には一家言あるのか、レモンの効用話はいつまでも続く。仁は疲労回復のためにすすめられ、京香は肌のためにすすめられ、きずなは頭がよくなるとすすめられた。最後のは眉唾だ。

「せんせ、でも本当に、これ食べると背が伸びるの？」

メイゼルの問いに仁は曖昧に返す。この場で「それ嘘」と否定するのは気が引けたのだ。

仁は内藤サミュエルと、彼がこの世界で手に入れた家族の食事風景をながめる。今日の夕方に受け取った報告書類では、この刻印魔導師が副社長をつとめる工場の経営は、今日明日行きづまるほどではなかった。だが内藤倫子の母シズエが、今年一月に亡くなったとき、借金取りが葬式に現れたのだ。シズエが生前、ホームヘルパーの借金の保証人になっていたというのだ。借金の額は三千万円。この不景気で工場はとっくに抵当に入っている。払うアテなどない。

「顔をあげてやれ。飯を食うのに、父親が辛気臭い顔をしてたら、家族が心配するだろ」

仁は、ひとり味などわからぬ様子で食い物をかきこむサミュエルに、声をかける。

「へえ」

サミュエルは顔をふせたまま、それ以上ことばが出ない様子だ。

「なんにせよ、よかったよ」

言った声があまりに他人事めいていたから、仁は自分の磨耗ぶりに、胸に重い疼きを覚える。専任係官の管理義務とは、犯罪に手を出した魔法使いを誰が処分するかという話であって、生活の面倒を見ろということではない。

それでも今朝、この一家の夜逃げを知ったときから、仁はもっと心配してやってもよかったはずだ。

「こら！　太一！　から揚げはひとり四個まで」

いつの間にかしっかりサミュエルと手を握り合っていた内藤倫子が、内藤家の食卓の様子が知れる大喝をはなつ。

はしが止まっていた仁は、コップに手酌でビールをつぎ、一気に飲んだ。

「それじゃ、俺のぶん食べてください。ほら、お兄ちゃんは今日、から揚げを子どもにあげたい気分だから、思いっきり食え」

この小さな子どもたちによろこんでもらって罪滅ぼしのつもりだなんて、我ながらどうしようもないと思うのだが。

真夜中、子どもたちが寝静まっても内藤一家の空気は、十崎家に奇妙なあたたかみを残していた。十崎京香の両親が、もう新しい表情を見せてくれない思い出になったのは、ずいぶん昔の話だ。京香は明日また早いのでさっさと眠ってしまった。倉本きずなと内藤倫子が片付けたテーブルに、もはや数時間前の活気は残り火ひとつない。

刻印魔導師内藤サミュエルは、まだひとり起きて、夜中に泣き出した赤ん坊をあやしていた。電灯を消した真っ暗な居間のガラス戸を開けて、夏の夜風にあたっている。いや、たぶん見ていたのは街の明かりも消えた闇だ。同じ暗い部屋で、最低限度の用心のため、刻印魔導師を監視していた武原仁はそ

「だってそうでしょう？　厚かましくても、ほかに頼るところがねえんです」
「私ん家の玄関でモメない」
　十崎家の家主が、廊下の奥からようやくお出ましだ。十崎京香は、仁たち専任係官を束ねる高級官僚だ。そして、彼が昔から何をやってもかなわなかった、ひとつ年上のおさななじみでもある。ただし今は、魔導師公館で見せる氷の事務官の顔が詐欺のようなだらけっぷりだ。
「私が許可したのよ。職業上の義務はさておいて！　あれよ、最低限度の倫理として、子どもをほうりだすのはねー」
〝京香お姉ちゃん〟は、メイゼルをこの家で生活させはじめたときと同じことを言った。
　仁たちは、魔法使いがこの国の治安を乱したらそれを排除する、番犬だ。人助け役ではない。だが、人を見捨てていいわけでもない。場合によっては刻印魔導師を使い捨てる《公館》を頼るほど、サミュエルは追い詰められていた。気づかいひとつできなかった自分がかっこ悪かった。まだまだ情けない、武原仁は若造だ。
「十崎家も忙しくしてる家だから、いつまでもとは言いにくいんだけど、しばらくは我が家のつもりでくつろいでねー。サミュエルさんが南米から日本に帰国したとき付き合いのあった父も、生きてたら絶対そうしろって言ったと思いますしー」
　口裏を合わせろと京香が目で合図してくる。《公館》が日本人に見えない刻印魔導師のニセの身元をつくるときは、南米移民三世で、二重国籍で日本国籍を持っていたことにしているのだ。
　サミュエルが、《公館》の情なんて珍しいものを見たせいだろう、黒ずんだ両手で顔を覆った。その妻、内藤倫子が、夫の肩に顔をうずめてすすり泣いていた。弟と妹を守ろうと、仁のことをにらんでいた長男が、ただの不安な子どもに戻った。湿っぽさは妹と弟にも伝染し、長男が抱く赤ん坊まで火がついたようにむずがりだした。
　泣き止まない六兄妹を引き連れて、内藤夫妻は奥へ戻っていった。
「いいんじゃない？　内藤家の奥さんと子どもは、刻印魔導師とか《公館》のこと知らないみたいだしー。だいたい、仁のアパートじゃ、あの人数預かるのムリでしょ」
　揚田クラリスが起こした殺人事件の対応で、今、誰より忙しい京香がそれでも選んだ情を、仁は足蹴になどできなかった。気遣いを噛み締める彼の鼻先に、揚げ物の香ばしいにおいが漂ってきた。
「あ、お帰りなさい、武原さん」
　Tシャツにジーンズのラフな格好の上にエプロンをかけた十崎家のもうひとりの居候、倉本きずなが、台所から廊下へ顔を出した。明るい色の髪を弾ませ、深い青の瞳をやさしく微笑ませている。高校生のきずなはにぎやかなのがうれしいらしい。菜ばしを手に、まぶしそうに十崎家の小さなお客さんをながめていた。
「きずな、何してんの！　コンロの火‼」
「ふふーん。今日は、内藤さんの奥さんも台所にいるから、あわてなくてもいいのです」
　きずながメイゼルのツッコミを受け流す。我が家のつもりで倫子夫人が、手伝ってくれているらしい。
「はい、みんなー。ごはんの前には、手を洗おうねー」
「「はーい」」
　きずなの声に、さっきまで泣いていた子どもたちと、十崎京香まで行儀のいい返事をして、洗面所へ行った。まるで幼稚園の保母と子どもだ。
「納得いかないわ！　どうしてきずなの言うことはあんなすなおに聞くの⁉」
　微笑ましく見ていると、ウェットティッシュで服についた鼻水を落とそうとがんばっていたメイゼルと目が合った。
「ほら、リボン結びなおしてやるから、こっち来いよ」
　なぜだろう。発作的に、あの魔女の不可解な自殺が、たった一日で日常に埋没しかけている事実に、胸が詰まった。そして仁は、あどけない刻印魔導師が子どもらしくしている死から遠いこの時間が、ただ長く続いてほしいと思う。
「子どもたちと遊んでくれてたんだな。ありがとう」
　少女へ、仁はカバンを手わたす。彼女が一瞬だけぎゅっとその感触を確かめ、くるりと彼に背中を向ける。
「あたしは怒ってるのよ！　そんなことで、ごまかされないわ」
　仁がリボンを結び終わるまで、メイゼルは口元から微笑みをこぼしそうにしては、どんどん頬の赤みを濃くしていったのだけれど。

　内藤サミュエル、この世界に堕とされてきたときの名は振木サミュエル。
　彼が故郷で犯した罪は、仁も知っている。魔法世界側は決して刻印魔導師の罪状を明かさないが、それでも他の罪人から伝え聞いたほど有名な事件だったのだ。
　少年時代、戦災孤児として孤児院に引き取られた彼は、我が家だったその施設を焼き尽くした。寮長職員護衛約百名に加えて、三百名を数える子どもまで巻きこんで皆殺しだったという。
「世界の子どもたちのために」と美しい題目をかかげた施設は、子どもを傭兵や娼婦として売っていた。カエルのように背を丸めたまま、彼は神判にかけられ、地獄堕ちの判決を聞いた。

ため、普通は生涯魔法を見ることすらない。だから異世界人たちは、ここを奇蹟尽き果てる《地獄》と蔑み、地獄人を忌まわしい《悪鬼》とおそれるのだ。
悪鬼の人口が六十億にふくれあがった現代では、魔法使いがおおっぴらに魔法を使っても、観測され破壊されるだけだ。だから、もはや彼らはおとぎ話の主役たちではなく、人間として額に汗して自分の問題を解決するしかないのだ。

「せんせ、どういうことか説明してくれない？」
つまり、玄関のドアを開けると、鴉木メイゼルが仁王立ちで立ちふさがっていた。
ここは《公館》の高級官僚、十崎京香の自宅だ。公館史上最年少の刻印魔導師であるメイゼルは、罪人を集めた官舎が子どもには環境が悪すぎるため、四月からこの十崎家で生活している。
だが今、彼女は、仁には見覚えのない子どもたちに、なすすべなくたかられていた。背中まであるきれいな黒髪は、引っ張られてぐしゃぐしゃだ。リボンも小さな手にほどかれて、いまやだらしなく垂れ下がっている。
「くらえ！」
幼稚園児くらいの男の子に、ふたりがかりで背中によじのぼられそうになったメイゼルが、悲鳴をあげて振り落とす。
「なにしてんの？　無断であたしに痛いことしていいのは、せんせだけなのよ」
しなやかな人差し指で、悪ガキの額を一発ずつ弾く。双子なのだろうか、痛かったのが信じられないとばかりに同じ仕草で目を見開き、そして大声で泣きはじめた。
「なっ、こんなことで泣くの？　もっと耐えてくやしがりなさい。ああもう、鼻水たらしてしかたないわね。なんなの!?　あたしの服になにしようって……いやっ！　鼻かんだ!!」
顔をまっ赤にした幼稚園児に、小さな魔女は逆襲されていた。大惨事だ。
仁がたずねる前に、廊下の奥からゆっくりした足音と、歩幅の小さいせかせかスリッパで床をこする音が近づいてきた。
「こら、何してんだ。お嬢さんに失礼すんなって言っただろ」
彫りが深い、地球基準で言うなら東南アジア系の顔立ちだった。今朝、見事な夜逃げをぶちかました工場経営者にして彼の管理下にある刻印魔導師、内藤サミュエルその人である。
仁は靴を脱ぐことも忘れて、蛙のように背中をまるめた中年男を呆然と見る。奥さんが続いて玄関に来て、不安げに仁の様子をうかがっていた。ぞろぞろと来るは来るは、小学生から乳のみ子まで六人もの小さな子どもが玄関に集まっていた。
昨夜の揚田クラリスとこの男のことを《公館》で調べていたせいで、今は夜も遅い午後十時半だ。内藤一家がここにいる理由がわからず、仁はまず、根本的な疑問をぶつけた。
「ちょっと待て。おまえら、自分ちの工場から夜逃げしたよな？」
当の刻印魔導師が、天然パーマの巻き毛の頭を深々とさげる。
「恥ずかしながら、借金こさえて工場にいられなくなっちまったんでさ」
内藤家の小学二年生の長男が、乳飲み子をかかえていた。その汚れたTシャツを、小学校にあがったくらいの長女が握っていた。そのほつれたスカートに、さっきメイゼルによじのぼろうとした双子の次男と三男がしがみついている。幼稚園児らしい次女は半泣きで母親に助けを求めていいか様子をうかがっていた。六人の子どもが、十二個の瞳で仁を見あげていた。
「そんな顔するなよ！　俺を見たって、しょうがないだろ」

とくくりにして呼んではいるが、彼らはそれぞれ別の魔法世界でちがった事情で罪を犯して極刑を受けた、いわば別種の生物のようなものだ。仁が今日、もぬけのカラとなった工場に来たのは、別種のイキモノをすら引き寄せあう何かがあるのか、念のための確認だった。
　足を運んだのが仁だったのは、書類上のこととはいえ彼がサミュエルの生活を監督する立場だからだ。刻印魔導師は、元々リスクのある罪人であるため、専任係官によって管理され、罪を犯せば処分される厳しい決まりに縛られる。そんな制限をつけてまで、一般社会で職につかせて暮らさせているのは、魔法世界はここへ極刑の罪人を遠慮なく堕としてくるが、日本政府には日本を刑場にした覚えはないためだ。だから関係者にはただ《公館》と略される魔導師公館は、魔法使いを道具にしない仁に、社会生活に順応できそうな刻印魔導師の管理を書類上まとめてまかせている。罪人というには常識はずれにおさない鴉木メイゼルの保護を、彼がすることになったのもそのせいだ。
「大丈夫か？　家で休んでいてもいいんだぞ」
　メイゼルの目は、寝不足なのだろう、すこし充血していた。
「せんせ、ここの工場にいるのも、刻印魔導師なのよね？」
「そうだ」
　それ以上どうなぐさめてやれるかわからず、仁は知っているうち一番いい可能性を教えてやった。
「こんなふうに魔法使いが行方をくらますこと自体は、ちょくちょくあるんだ。犯罪に関わっていたらそれなりの結果になるけど、そうでなきゃ内藤サミュエルは元の暮らしに戻れるよ」
　言葉をぼかしても、昨夜彼女と同じ境遇の人間がひとり死んだのは事実だ。メイゼルには名前も教えていない揚田クラリスの死で、少女が倒すべき〝百人の敵〟のノルマはひとり減った。今頃はクラリスの管理者だったベテラン専任係官《鬼火》の配下が、あの魔女の身辺に何があったか調べあげているだろう。そして彼女の人生はそこで終わり、あとは一点ぶんの抹殺人数として以外かえりみられない。こんなふうに百体の死体を積みあげて、生き残れば自由になる。それが刻印魔導師という修羅道だ。
　メイゼルが、子どもらしさからぬ静かな目で事務所をながめる。
「そうね……。みんな、たいへんだものね」
「ここの刻印魔導師は、工場の社長の娘さんだったこの世界の女の人と結婚して、六人も子どもがいるんだ。事件に関わってたとしても、家族まで不幸にするようなことはしてないはずだよ」
　救いのない運命を背負う少女が、ぽつりと彼にかえした。
「……なに言ってるの？　せんせ、これ、『夜逃げ』じゃないの？」
　がらんとした事務所の中心で、仁の全身から冷や汗が一気に浮いた。工場ぐるみの夜逃げにも見えたからだ。魔法使いだって、この世界で生きるにはお金が必要だ。借金だってするし、返せなければ最悪逃げる。
「まああたしかに刻印魔導師だって、働いてんだから解雇もあるし倒産もあるさ。だが、いや待て。むしろ落ち着け、俺」
「せんせ、この世界で生きのびたら刻印魔導師がしあわせだなんて、決まってないのよ。ここの魔法使いが、魔法でほしいものをつかめたのは、神話の大昔だけ。あとは好きな人に子どもあつかいされたり、思い通りにならないことばっかりだもの」
　胸に手を当てて主張するメイゼルの視線に刺されて、冷や汗の温度がさらに下がった。事件と関係は薄いと考えながら、仁自身があの魔女の死と、サミュエルを頭のスミで結びつけていたのだろう。短絡的な仁をあざ笑うように、工場の玄関でけたたましいブレーキ音が響いた。
　ガラの悪い男が三人、大またにどやどや工場へと押し入って来た。どう見てもやくざ者だ。
「探せ！　どこかに手がかりくらい残っとる」
「すっからかんかい！　魔法みたいやな、ド畜生が!!」
　基本的に戦うしか能のない対魔法使いの専任係官である武原仁は、悲劇か喜劇かのまっただなかに、呆然と立ち尽くす。全身をベルサーチのスーツでかためたやくざが、仁の肩になれなれしく、人を殴りなれた分厚い手を置いた。
「兄ちゃん、借りたもん返さんドアホをコンクリ詰めにしよ思うんやけど、知り合いやったら、どこ逃げたか知らんか」

†

　魔法使いの世界がもし存在したとしたら、それはどんなものだろう？
　魔法のもとになる〝何か〟があふれているのだろうか？　それとも、呪文を唱えれば〝何か〟が呼び出される仕組みがあるのだろうか？　現実の魔法は、単純で身もふたもないものだ。魔法使いたちは奇蹟なく存在できない世界の住人だから、魔法を使う。彼らの世界は自然秩序がどこかゆがんでいる。だから異世界にはそれぞれ、ゆがみを足がかりにした魔法があり、世界を支える神がいる。魔法使いたちはみな、そんな異世界からの来訪者だ。
　我々のこの世界は、自然秩序にひずみがなく完全に均衡しているから、魔法も神もない。安定したこの世界の住人は、観測した魔法を破壊してしまう

せんせ、あたしのリボン、食べちゃってるわ。

なかった。
　汚い川に潜ったまま、植物に引っかかったビニル袋や空き缶をよけ、仁は追っていた魔女の姿をさがす。揚田クラリスの書類上の年齢は二十二歳、仁より二つ年下だ。刻印魔導師の管理施設で二年間生活し、精神が安定しているとして一般社会への順応訓練を許可された。そのわずか五日後、魔女は飲食店から生きた人間を消した。この世界で犯罪に手を染めた刻印魔導師は、即座に〝敵〟とみなされ、こうして狩りたてられる。犯人は、逮捕されて魔法世界へ引き渡されるか、はげしい戦闘のすえ殺されるか。仁は、小さなメイゼルをいつか追わねばならなくなる日が、来ないでくれと祈っている。冷たく静かな川底を泳いでいると、仁はそれがまるで彼らを取り巻く闇そのものに思えてきた。
　懐中電灯を消せば即座に真っ暗になる夜の水中に、仁のナイフを肩に突き立てたまま、魔女はいた。
　まるで人魚だ。
　枯れた葦の茎にからまった若くしなやかな体が、水底の藻になったようにゆうらりと揺れていた。長かった巻き毛が、川の下流へゆく水の流れになびいている。
　豊かな胸を覆っていた下着は外れ、なくなっていた。だが、にわかに赤黒く黒ずんだ水ごしに、仁に劣情をおよぼさせるようなものは何もない。左の乳房から心臓を貫いて、左胸に明らかに致命傷とわかる大穴が開いていたのだ。
　水が唐突に重くなって、彼の体にからみついてきた気がした。何者かから魔法攻撃を受けたわけではない。せいぜい三分前は確実に生きていた魔女の無惨な姿に、たぶん仁の力が抜けたのだ。
　魔法での偽装を疑いつつも、仁は近づいて血の気がうせた犯罪魔導師の首筋に指を当てる。頸動脈に反応は無い。心臓が砕け散っているのだから当然だ。胸にぽっかり空いた大穴に早くもはいりこんでいた小さな魚が一匹、驚いて逃げ去った。女は、死んでいた。
　死因を確かめるため、こんな状態で息ひとつ乱さない自分に呆れながらも、死体の各部を検分する。女の右手が血まみれだった。そして左胸の致命傷は、懐中電灯を当ててよく見ると、肋骨が内側からの強い圧力で折れていた。魔法で左肺を内側から破裂させたのだ。まず即死。水底に沈んだ後の時間の短さと右手の血からみて、おそらく自殺だろう。
　そして、追跡を終えた彼は、あまりに救いのない水の中から、空気を求めて深夜の川面に浮かびあがる。
「せんせー、どうだったのー？」
　何も知らない少女が、堤防から声をかけてくる。二ヶ月前この世界に堕とされ、過酷な戦いに立ち向かう彼女は、まだひとりの敵も〝殺して〟はいない。
　仁は、そのあどけない声に、答えを返せなかった。今は闇に沈んだ水底を思い出し、なにより怒りがこみあげて、ことばにできなかったのだ。
　あの死んだ魔女の青白い顔は、命をみずから捨てたというのに、救われたように微笑んでいたから。

†

「こんな話があるのを、知ってるか？　一八七二年の十二月に、一ヶ月前出航したマリー・セレスト号が大西洋を漂流しているのを、ある船が発見したんだ。そして船員たちが乗りこんで中の様子を確認したら、そこには誰もいなかった。
　船の船長一家と乗員は、煙みたいに消えていたんだ。なのに、マリー・セレスト号の、船長室にあった朝食は食べかけであたたかかった。コーヒーは今までそこに人がいたように湯気を立てていて、調理室では火にかけたまま鍋が煮立ってた。船員の部屋には焼いた鳥が食べかけ。船長の航海日誌には、走り書きが残っていた」
　水中の自殺から一夜明けた朝、武原仁は、さっきまで人がいたような工場事務所をながめていた。出納帳らしいバインダーは開いたままだった。触れると、コーヒーカップはまだ温かい。工場奥のこぢんまりとした事務所の窓は古いすりガラスだ。まどろむ室内を揺り起こすように、やわらかい日光が差す。あるじたちだけが、ここにいない。古い木製の柱に、電動のハト時計が掛かっていた。現在、日曜日の朝の九時四十五分。
　――幽霊船の謎を二十一世紀の日本に再現したかのように、百平米ほどの小さな工場は無人だった。
　この工場の副社長、内藤サミュエルも刻印魔導師だ。そして昨夜魔女が自殺した地点とここは、わずか二百メートルしか離れていない。普通なら事件との関係を疑うべきところだ。ただ仁たちの経験上、地獄堕ちした罪人同士は、おたがいの存在を警戒して、積極的に接触をとらない。刻印魔導師とひ

は《協会》と呼ばれるシステムの敵を百人倒すまで自由になれない、達成者ゼロの死の重罰。武原仁たち専任係官は、治安維持の職務のため、使い捨ての道具としてその刻印魔導師を魔法世界から与えられる。メイゼルも彼らが追う魔女も、同じ〝それ〟なのだ。

「せんせ、あの子のこと、足止めするんでしょ？」

少女が、魔法で地面をスケートしながら、一本の鉄パイプを手わたしてきた。

「ありがとな。できるだけ、傷つけないようにするよ」

仁も走りながら受け取ると、街の明かりが星のように落ちた寂しい水面をゆく逃亡者へと狙いをつける。

メイゼルの足元に、あわい光の魔法陣が展開していた。

「いいわ。投げて」

仁は槍投げの要領で、堤防から夜の川へとパイプを投擲する。ぶつけて怪我をさせるのではない。

金属棒が狙いどおり女の足元の川面に落ちた瞬間、ばぢりと鈍い破裂音が響いた。感電した女が、足をもつれさせた。水面に高圧電流を流して魚を感電させる漁法と同じ原理だ。鴉木メイゼルのあやつる魔法は電子の操作を得意とする。仁の手を離れ空中を飛翔している間に、少女が金属棒に強い電気を帯びさせたのだ。

だが、暗い川に女が倒れこもうとしたそのとき、猛烈にイヤな予感がした。

「伏せろ！」

仁は、キャミソールにデニムのミニスカートの、小学生の体を横抱きにして地面に倒れこむ。次の瞬間、川面の魔女から投擲された金属針が、弾丸のように彼らの真上を抜けて飛び去った。

背中と肩は盛大にすりむき摩擦熱でやけどをし、顔にはメイゼルの長い黒髪がかぶさってきて窒息しそうになる。

一流れの動作の中で、仁は少女を抱えたまま立ちあがる。追跡対象の魔女、揚田クラリスは、この隙に闇へ逃げこもうともせず、それどころか距離をつめて突っこんで――――。

仁はスラックスの内側に隠したホルスターからナイフを抜いて、一挙動で投げた。今度は軽いケガではすまない、確実に動きを止める一撃。八メートル向こうの女の下着の肩紐を断ち切って、ナイフは右肩に根元まで突き立った。魔法を維持できなくなった魔女の体が音をたてて川に沈んだ。

「終わったよ」

「え？　もう？」

彼の胸の中で、メイゼルが顔をあげる。敵の攻撃をかわしてからせいぜい十秒、真っ暗な水面にはもはや水しぶきひとつ残ってはいない。

重傷だが致命傷ではない。魔女は、汎用性としぶとさに定評がある完全大系という魔法を使った。川を走り続けるなら水中呼吸くらいやるのだろうと、まずはメイゼルを立たせてやる。

彼女が、膝を払って前かがみになった仁の口元に、愛らしい指をのばしてきた。

「せんせ、あたしのリボン、食べちゃってるわ」

さっき転がったとき、彼が口の端に少女のリボンをくわえてほどいてしまったのだ。長い髪をおろした彼女が、夜の妖精のように微笑む。月光の下、その頬はいまだ桜色に上気して、乱れたキャミソールの肩からむき出しになった肌は夏の果実のようにつややかだ。

「こういうたくましいときのせんせって、世界で三番目に素敵よ」

「あはは、まあ、三番か……」

シュッと小気味よい音をたて、彼女が黄色のリボンを結びなおす。その両手を頭の後ろに回した仕草が妙におとなっぽかったせいで、仁もそれどころじゃないはずなのに気恥ずかしくなってきた。

「二番目に素敵なのは、小学校で、なんにもうまくできなくて、あたふたしてるせんせ」

仁は、メイゼルの最低限の教育と監督のため、小学校で先生までしている。教員免許を持っていないからニセ教師なのだが、いろいろあって、そういう羽目になった。

「一番も知りたい？」

そして小学六年生の魔女は、魂を持ってゆかれそうなほど澄んだ瞳で、真夜中の太陽みたいに笑うのだ。

「一番大スキなのは……、いつかあたしに心の底から屈服して、くやしいのがうれしい目であたしを見あげてるせんせ」

どんな未来を想像したか、キャミソールの下の背筋を甘く震わせ、両手で熱っぽい吐息を隠す。几帳面で責任感の強い鴉木メイゼルという少女に、ひとつ問題があるとしたら、嗜好が嗜虐的にゆがんでいることだ。

「……………まあ、それはいいとして、そろそろ一分になるな。ちょっと様子を見に潜るから、水面に気をつけといてくれ」

「そうね。さすがにこれで逃げられてたら間抜けだわ……。あ!?　今、助けてくれたときせんせがスリむいた傷、魔法でなおしたげるから、かさぶた剥がしていい？」

スラックスを引っ張って仁に視線を要求したメイゼルは、心から楽しみにしているようだ。これがあどけない魔女の、恐怖をやわらげるガス抜きか、ただの性癖か、仁は知らない。

ジャケットと靴だけを脱いで、仁は防水の懐中電灯を片手に夜の多摩川に飛びこむ。六月末の水温はまだ低く、暗い水に潜ってライトをつけても、汚れた緑色は数メートル先までしか見とおせない。堤防からはわからなかったが、緑の葦の太い茎が密生していて、水中はまっすぐ泳ぐことすらままなら

STORY

魔法を〈見る〉だけで消滅させてしまう人類が住まうゆえに、魔法使いたちから《地獄》と呼ばれ忌み嫌われている地球。だがその特殊な環境は魔法研究に欠かせないもののため、数千の魔法世界の代表である《協会》と呼ばれる組織が地球に常駐していた。その《協会》に属する魔法世界では、重大な罪を犯した者に対して《刻印魔導師》という刑罰が存在していた。《地獄》へと堕とされ刻印魔導師となった者は、《協会》に敵対する魔導師百人を倒すまで赦されず、元の世界に戻ることができない、過酷な刑罰であった。

刻印魔導師たちは、魔法使いが起こす問題解決のための政府機関《公館》に所属し、専任係官からの管理を受けていた。円環大系世界から堕とされた少女・鴉木（あぎ）メイゼルも刻印魔導師のひとりとして、専任係官の武原仁とともに、達成した者のいない過酷な百人討伐の修羅の道を歩んでいた。

MAIN CHARACTER

武原仁
《魔導師公館》に所属する専任係官。メイゼルを管理する任を受けている。

鴉木メイゼル
元の世界での罪により《地獄》に堕とされた少女。円環体系魔法の使い手。

倉本きずな
十崎家に居候している高校生。

十崎京香
《魔導師公館》の事務官。

夜は魔法使いの時間だ。

だから、静かな川面を蹴って、下着姿の若い女性が全速力で駆けてゆく。

――武原仁は、全力疾走しながら、このあまりにおかしな状況を整理しようとする。

今は深夜十一時で、若い女が、川幅の広い多摩川のど真ん中の水面を蹴って走っている。ガーターベルトで留めた黒いストッキングの脚線美は魅力的だが、水上に立てることとは無関係だ。

こんなことができるのは、女が魔法使いだからだ。雷をはなち人間をカエルに変える神話やおとぎ話の主人公たちは、現代も異世界からこの世界を訪れ続けている。そして、異世界人だからこの世界の法など守らず、平気で犯罪に手を染める。

だから仁は、堤防伝いに、その黒い下着の女性を全身汗だくで追っている。

彼は文化庁の非公式機関《魔導師公館》に属する、対魔法使い事件の専任係官。実在自体大っぴらになっていない魔法使いによる犯罪を、取り締まるのが仕事だ。

「……あはははは」

女の笑い声が、直線距離で十メートルほど離れた仁にまで聞こえてきた。墨を流したように真っ暗な水面を走る女へと懐中電灯を向ける。光に照らされた、女の体は血まみれだった。

この魔女は約三時間前、飲食店へアルバイトの面接へ行き、そこで店長と従業員二名をナイフで惨殺した。返り血を浴びた衣服を脱ぎ捨て、犯人は下着のままで逃走。そして今、仁が多摩川の下流へ向かって彼女を追い詰めつつある。

「せんせ、あの子のおしり見すぎだわ！」

揺れるガーターベルトの尻を照らし出していた懐中電灯の光が、唐突に消えた。

「見てねえ！」

「あたしのおしりじゃ、こんなかぶりつきそうな目、しないくせに。せんせの変態」

仁を責めるかわいらしい声は、彼のおなかの高さからあがっている。見下ろすと長い黒髪とリボンをなびかせ、身長百三十一センチの女の子が、力走する彼のジャケットをつかんでいた。少女は瀟洒なサンダルの下に磁力のレールをつくり、スケートさながら優雅に地面をすべる。この恨めしげな表情の鴉木メイゼルも魔法使いなのだ。

「……おまえにそんな目をしてたら大問題だよ」

答える仁は、殺人犯を追いながらの軽口をたしなめはしなかった。鴉木メイゼルは小学六年生だ。本来は戦いに巻きこまれるなどもってのほかの、守られるべき子どもなのだ。

魔法使いたちの世界には、罪人をこの世界に追放して戦わせる、刻印魔導師という託神裁判の極刑がある。それ

ねえせんせ。ただ生きのびていても、
刻印魔導師はしあわせじゃないのよ――。
神無き《地獄》であらがい続ける者たちの
灼熱のウィザーズバトル、登場!!
円環少女
サークリットガール
しあわせの刻印
長谷敏司
Satoshi Hase
イラスト/深遊 Miyuu

結局、かのうに進路を塞がれて、俺は憮然としながらも立ち止まるしかなかった。
「此度も見事に植物を咲かせたものだのう」
床から数十センチ上の辺りでふわりと佇みながら、かのうはそう言って、さも楽しげに微笑んだ。
「……まさか、棗を学校に寄越したのはお前じゃないだろうな？」
軽く睨むようにかのうを見るが、その白い面には相変わらず、とらえどころのない笑みが浮かんでいるだけで、だんだんと腹立たしくなってくる。
「さてのう？　だが、此度の植物はやはり多加良向きであったろう？　お子様ののう？」
「……ああ、そうかもな」
だが、午前とは違って、俺があっさりとそれを認めれば、かのうは少し不思議そうな表情を浮かべ首を傾げた。その動きに合わせて銀色の髪がさらさらと肩から胸へとこぼれる。
「子どもが想像と可能性の塊なら、それならゆっくり大人になるのも悪くない……俺はいまはまだ子どもでいい」
そう答えれば、かのうは再び唇に笑みを刻んで、
「なるほどのう……。それ故に多加良は妾にのーさつされないのかもしれぬのう」
やはり俺の言葉を茶化した。
「多分、俺は大人になってもお前みたいな妖怪もどきに悩殺されないから、安心しろ」
拳を固めながら、俺が宣言すれば、
「そうかのう？　未来は誰にもわからぬよ」
からころと笑いながら、かのうはそんな風に言って――そして、現れた時のように唐突に姿を消した。
俺はため息を吐くと、気分を切り替えて、再び家庭科準備室を目指した。
やっと到着した家庭科準備室の扉を開ければ、中は暗かった。どうやら暗幕が引かれているようで、俺は注意深く室内に目を凝らした。確か、ダストシュートの出口は棚の側だ。
が、俺の目が捉えたものは残念ながら眼鏡ではなく、暗闇に浮き上がる白い毛皮……黒い部分は逆にとけ込んでいる。忠実に本物を写したらしいそれはしっぽもちゃんと白い――パンダの着ぐるみ。
ただ、頭部はパンダではなく、明るい茶色の髪に覆われた人間仕様。
下だけパンダのその不審人物は、更に不審なことに家庭科準備室の冷蔵庫の前に陣取っていた。そして、暗闇に響く咀嚼音。
「……鈴木、なにをしている？」
振り向かずともわかったが、敢えて名前を呼び尋ねたのは、一応弁明の機会を与える為だったが、その口の周りに付いた生クリームを見れば一目瞭然だった。
「あ、ああぁっ！　多加良っち!!」
「それは、誰のケーキだ？　俺の推理では、この後桑田が出すつもりのケーキなんだが？」
「あわわ……。えーと、これはこれは、その、味見だよっ！　黙って食べたのは、悪いかもだけど」
「そうか、悪いことという自覚はあるんだな」
言いながら、俺が一歩踏み出せば、鈴木は一歩後退り。
がしゃん
非常に非常に不吉な音が、そのパンダの足の下でした。
「ん……？　なんか踏んだ。あれ、何でこんな所に眼鏡があるのかな？」
一転して能天気な鈴木の声に、俺は自分の理性がはじけるのを感じた。
「鈴木、パンダは笹だけ食べる生き物だ」
「だって、それじゃ栄養が偏るよ？」
「ああ、それは心配ない。鈴木、お前に明日はないからな。ああ……今日こそお前を許さねぇっ！」
そして、逃げる鈴木を追い始めた俺はこの時まだ知らなかった。
この後、俺を待ち受けている〝TEA ROOM KANOU〟と執事のごときユニフォームのことを。

end

此度も見事に植物(はな)を咲かせたものだのう。

ーが使えないなら、絵に描いて伝えたらどうだろう、とかな」
　きっと俺よりずっと鮮やかな世界を見ているだろう棗の榛色の双眸を見つめながら、俺は更に語りかける。
「棗、テレパシーじゃなくても人が人に伝える方法はたくさんあるんだ」
「でも棗、絵……は、好きだけど、あまり上手じゃないもの」
　だが、棗は自信が無さそうに目を伏せる。
「そうか……でも、絵じゃなくてもいいんだ。歌を歌ったり、物を作ったり、ダンスを踊ったりでも。なあ……棗。テレパシーが使えないから地球人はたくさん想像できるんだと俺は思う。そして伝える方法もたくさんあるんだと思う。だからな、棗の方法を探してみないか？」
　懸命に宇宙人を探していた少女に、俺は提案する。誰かに伝えることをこのまま諦めてほしくないから。そして何よりも、
「探して、俺に棗の見ている世界を見せてくれないか？」
　俺は、棗の世界が見てみたい。
「棗の、方法をさがすの？」
　そうすれば、棗はゆっくりと瞼を上げて、もう一度俺を見る。
「でも、すぐには見つけられないよ？　見せられないよ？」
　また焦って、もどかしそうに告げる棗の肩に俺はそっと手を置く。
「ゆっくりでいいって、言っただろう？　今日じゃなくていいんだ。明日だって、来年だっていい」
　急がなくていいと告げれば、棗の肩からはそっと力が抜けていく。
「うん……きっと今日の棗よりは来年の棗は絵が上手だと、思う、よ」
　そして、自分の言葉に、今はまだ弱くだけれど頷いて。
「じゃあ俺は、ゆっくり待つ。いつか棗が、綺麗な世界を俺に見せてくれる日まで」
　棗の顔を下から覗き込めば、まだ赤い棗の目には、きらきらとした輝きが戻っていた。
「ゆっくりで、いいなら……棗も探せると思うから。いつか、棗の星を見せてあげますから、待っててください。だって……あのお姉さんにも出来たんだもの、ね」
　城下には少々失礼な台詞ではあったが、
「ああ、そうだな」
　俺は笑いながら大きく頷いてやった。
「あの……本当の本当に宇宙人じゃないんだ、よね？」
　が、なぜかそこで再び棗は頬を上気させながら俺に問う。
「秋庭多加良は」
「チャイナ服のよく似合う」
「地球人ですよ……多分」
　そうすれば、答えは俺の背中に降ってきた。
「羽黒、多分、は余計だ」
　振り向けば、約束通り棗を探していてくれた尾田達の姿がそこにはあった。
「多分、なの。ふふっ」
　羽黒と俺の遣り取りに棗は思わずといった感じで噴き出して、それはやがて大きな笑い声へと変わった。俺達四人を巻きこむほどの。
　そうして、棗の胸には小さな小さな百合に似た植物が咲いていた。
　それは見る間に透明な水晶のように結晶化していって、俺は掠(かす)めるようにその花を摘み取った。
「さて、と」
　さんざん笑った後で棗をバス停まで送り、尾田達と一度別れて、俺が目指したのは家庭科準備室だった。俺の眼鏡が捨てられたダストシュートは幸いにもその部屋に繋(つな)がっていたのだ。
　ならば回収するのが当然だ。高くもないが安くもない眼鏡なので。
　子どものパワーにほぼ半日付き合ったせいか、いつもより体力を消費していて、俺の足取りは決して軽くなかった。
　しゃんしゃららん
　そんな俺の耳に届いたのは、ある意味不吉な例のあの音で――俺は雷を怖がる子どもみたいに両耳を塞(ふさ)いだ。
「俺には何も聞こえない」
　その状態のまま歩き続けたが、
「でも、多加良には妾の姿が見えるであろう？」

は、宇宙人ではなくて、俺だから。
　棗の視界はきっと、空想や想像の翼に彩られ、きっと本当に美しく、鮮やかなのだろう。誰かに見せたいと、それを共有したいと強く願う位に。
　そして、その空想こそが人の、棗の可能性だと俺は思う。
　城下も、歴史に名を刻んでいるような偉い発明家や優れた画家も、空想するところから始めたのだから。
　人はまず思い浮かべて、そしてそれを形にしてきた。だから今、空だって飛べる。
　そうやって人は進化してきた。人間は歩くのにも一年かかるけれど、でも立ち上がって進んでいく。今は使えないテレパシーもいつか使えるようになるかもしれない。
　でも、それがいつかはわからないから、棗は焦り、結果として宇宙人を探し始めたのだろう。それは棗にとってたった一つの選択肢。
　棗は自分の前にはもっとたくさんの可能性があることにまだ気付いていないから。
「棗、さっき会った城下も、お前と同じで、みんなに自分の見ている物を見せたくて、ああいう形にして見せていたんだと俺は思う」
　目線をしっかりと棗に合わせながら、俺は静かに語りかける。
「でも、棗にはできない……もの」
　俺の言葉に棗は首を振り、唇を噛んだ。
「そんなことは無い。なあ、例えば去年の棗なら一人でバスに乗れたか？」
「……乗れなかった、もの」
「だけど、今年は乗れただろ？　それに去年より背が伸びただろ？」
「ちょっとだけ」
「うん、ちょっとでもいい。でもちょっとでも棗は大人に近付いてるってことだ。そして、同じように人間はゆっくり大人になっていく。なぜだと思う？」
「どうし、て、なの？」
　俺が更に問えば、棗は首を傾げる。その目には既に涙はない。
「それは、いっぺんに色々なことをできるようにはならないからだな、きっと。俺だってまだ出来ないことはある。でもずっと出来ないとは思わない」
「そ……なの？　高校生でも出来ないことがあるの？」
　俺が大きく頷くと、棗の顔にはほんの少し安堵が浮かぶ。
「ああ、ある。でも俺は出来ないことをどうやったら出来るかな、って考える。一つの方法でだめなら、他に方法は無いかって考えるんだ」
　棗が理解しやすいように、俺はなるべくゆっくりと話す。
「他の方法？」
「例えば、自転車に上手く乗れないなら、早く走れるようになればいいとか……テレパシ

途中——他校舎との連絡通路が左右に伸びている地点——で、俺は自分の作戦が成功していたことを知った。だが、俺の表情は晴れ晴れとはいかなかった。
「……本当に、悪い予感ばかりあたる」
棗には聞こえないよう口中で呟きながら、俺の目は棗の胸に注がれていた——青い葉を繁らせて、既に蕾を付けた願いの植物へと。
「棗」
内心の動揺を隠しながら、俺がその名を呼べば、逃亡者はあっさり足をとめた。
そしてそのまま棗は振り向いた。どうやらもう逃げる気はないらしい。
ただ、俺の眼鏡をかけて、じっと視線を送ってくる。
「棗」
いつまで経っても、声が返ってこないことに少し焦れて、俺はもう一度名前を呼んだ。
「やっぱり、宇宙メガネには発信機がついているんですか？」
眼鏡を外しながら、ようやく棗は声を発した。
「いや、そんな物はついていない。だから、もう、わかったな？」
そして、俺は棗に静かに語りかける。
「俺の眼鏡で宇宙と交信は出来たか？　何も起こらなかっただろう？」
「うん。棗がかけても誰のテレパシーも聞こえなかったもの。それに今も宇宙王子にテレパシーを送ったんだけど届かなかったみたいだもの。でも……宇宙王子がかけたら違うでしょう？　正しい使い方があるんだよね？」
棗の台詞は無邪気にも聞こえたけれど、幼い顔に浮かぶ表情は焦燥にも似た、縋るようなそれで。空想に遊んでいるようにも、ましてや酔っているようにも見えなかった。
「それは、俺がかけても普通の眼鏡だ」
だから、俺に用意出来た答えはそれだけだった。
「……じゃあ、これはいらないもの」
絶望した声で、棗は近くのダストシュートに俺の眼鏡を放り込んでしまった。でも俺はそれを咎めなかった。
「どうして？　どうして棗は本物の宇宙人に会えないの？　棗はずっと願っていたのに。ずっと宇宙人さんを探していたのに。パパやママが探しちゃダメって言っても探したのに。みんなに笑われたって探したの、に……」
唇をわななかせて、顔を歪めながら、棗は堰を切ったように、俺に言葉を、想いをぶつける。
「棗はっ、テレパシーで見せたいだ、けだ、もの。夜の道、で割れたガラスの欠片がどんな風にキラキラ光るか、とか。葉っぱの影が素敵な模様を作っているか、とか、を」
棗の言葉はだんだんと嗚咽混じりになっていく。でも俺は真剣に耳を傾け続けた。
棗の胸の植物が、棗の声に想いに呼応するように小さく揺れるのを見つめながら。
「それは、言葉じゃ伝えられないのか？」
ひたむきな棗に応えて、俺もまた真摯な眼差しを少女に向けた。
「だめ、だもの。だってみんなには棗が見ているみたいに、見えないからっ。それ、に目の裏側で光る星をどうやって、見せたらいいの？　テレパシーじゃなきゃ、だめ、だもの」
棗は頑なにそう信じていた——自分に見えている世界は、美しい映像はテレパシーという、直接意識に映像を送ることでしか見せられないと。
確かに、棗の瞼をめくってみても、他人がそこに星を見ることは適わないだろう。そして、どんなに言葉を尽くされても、棗と同じ世界を見ることは難しい。さっき、俺には天井に映ったそれが、ただの影にしか見えなかったように。
「……ほん、とに。あなた、は、テレパシーを使え、ないの？　宇宙王子じゃ、ないの？」
嗚咽を飲み込みながら、棗は縋るような目で俺を見る。最後にもう一度だけと、問う。
棗が「宇宙人と会う」ことだけを望んでいたのなら、俺はいくらでも頷いてやれた。それが嘘だとしても。
でも、棗の願いは——その小さな身体を満たして、植物を生じさせるほどの想いは、とても大きく強いから。誰に何と言われても失わなかった願いだから。
俺は頷けない。その願いを叶えるためにも、頷かない。
棗の植物を咲かせて、摘むことが出来るの

つかるまで一時閉店だ。いいよね、桑田さん」

「ええ、もちろん。ただ、今いるお客様だけさばいてしまってから、だけれど」

そして、柔らかいアルトの声と共にキッチンスペースから出てきた桑田もそう言ってくれる。

「ありがとう」

振り向きながら、礼を言えば、桑田は俺の顔を見て数秒硬直し、

「ほ、放送部なら、そこに小宅君がいるわよ」

その後、バツが悪そうに俯きながら教えてくれた。

ああ、やっぱり悪人顔には眼鏡は無いよりあった方がいいのか――俺はほんの少し傷つきながら桑田の情報に従って、客席に小宅の姿を探した。そうすれば、すぐに目当ての人物は見つかり、

「小宅、ちょっと用事を頼まれてくれるか？」

「え……う、あっ、ふくかいちょぉぉ！」

ああ、小宅。悪いな。いま眼鏡が無いんだ。でもそこまで大袈裟に仰け反ることはないだろう？　でも、お前もいまこの俺を〝副会長〟って言ったからな、今日は特別それでお互いチャラにしようじゃないか？

「そうだ、秋庭多加良から放送部に依頼だ。今から言う内容を校内に放送してくれ」

色々と胸の内に飲み込んで、俺は小宅から一歩身を引くと、淡々と告げた。

鼻の頭に汗をかきながらも、なんとか恐慌から立ち直った小宅は俺の言葉をメモする。

「放送室はこの鍵で開けてくれ。頼んだぞ」

「は、はいぃっ！」

なぜか小宅は敬礼と共に、走り去っていった。

そして、まもなく小宅の涼しい声がスピーカーから流れ出す。

「迷子のお知らせです。迷子の名前は小学生の棗ちゃん。おさげに、白のファーコート姿です。副……秋庭さんが探しています。なおこれはKコールではありませんが、本日の秋庭さんはノー眼鏡にチャイナ服で、一見の価値ありです」

「……小宅、余計なことまで」

俺は小さく拳を握ったが、これは後にとっておこう。

「最新の目撃情報によると棗ちゃんは北校舎にいる模様です。ちなみに北校舎方面には二宮金次郎像が、南方面には時計塔があります。お心あたりの方は生徒会役員までお知らせください」

初めと同じ鉄琴を鳴らす音で放送は締め括られた。

「よし、準備は整った。俺は先に行く……まずは南校舎を目指して、な」

「北校舎じゃないの？」

俺がそう言えば、桑田は頬に手を添えながら首を傾げた。

「あ……罠か」

そして、尾田はしたり顔で頷いた。

「その通りだ、尾田。棗はあくまで逃亡者なんだから、迷子放送くらいで大人しく見つかるはずがない」

「ああ、それでわざと北って言ったんですね」

給仕の方が一段落したのか、ここで羽黒も話に加わる。

「それに放送では〝時計塔のある方が南〟と言わせたからな、南校舎に向かう確率は高い」

『なるほど』

俺の頭脳的な作戦に、三人は手を打った。

「ってことだから、後で南校舎で合流だ」

そう言い置くと、俺は再び〝叶野茶館〟を後にして駆け出した。

急ぐのには理由がある。もちろんそれは〝願いの植物〟にかかわることだ。

俺はさっき走りながら棗の開花に必要な要素を考えたのだが、俺には他にも気になることがあった。それは棗のような子どもに願いの植物が芽生えた場合、どんな速度で育つのか、ということだ。

俺はいままで、願いの植物の発芽から開花までの期間を長くて二週間程度と認識していたのだが、それが幼い子どもならどうなのかというところまでは考えていなかった。

その成長の速度が常よりも緩やかならばいい。でも逆の場合は事態は一刻を争う。

そんな風に考えながら道を急いでいれば、俺はすぐに南棟に辿り着いた。

まずは一階をくまなく調べたが、そこに棗の姿を見つけることは出来なかった。

同じように二階も通過して、三階の廊下の

叶野学園で俺から逃げられると思うなよ？

「眼鏡、拾ってくれたんだな。ありがとう」
　そして、俺は顔を上げて、そう言いながら棗に手を差し出した。けれど、その途中で俺の手は止まる。
　涙を手の甲で拭いながら、俺の眼鏡をじっと見つめる棗の胸に願いの植物――俺にしか見えない、その小さな双葉の芽を見つけて。
　俺の近視の程度は軽いから、眼鏡をかけなければ全く見えないということはない。だから、いま見えている棗の植物も決して見間違いではないだろう。
　それは願いの植物の発芽の最年少記録、ではあるが。
「……棗、眼鏡を」
　とりあえず、発芽の衝撃からは醒めて、俺は改めて棗に手を差し出した。俺の眼鏡は当然、俺の手元に返ってくると信じて。
　だが、棗は俺と眼鏡を交互に見るばかりだ。真剣な瞳でもって。
「宇宙王子の宇宙メガネ……これがあれば棗にもテレパシーが使えるんだもの」
「棗？」
「ごめんなさい。宇宙メガネは棗が貰いますっ！」
　そして、棗はそう叫び、すべてを言い終えないうちに身を翻して走り出す。
　当然黙って行かせる俺ではない。立ち上がり、即座に後を追おうとした。
　が、長いチャイナ服の裾を思いがけず踏んでしまい、体が傾ぐ。一瞬、こんな物を着ろといった人間を恨みそうになったが、とにかく今は無様に転ぶという事態を避けるべく、受け身をとることに集中する。
　それで、なんとか転ばなかったのはいいが、俺が顔を上げた時には、もうそこに棗の姿はなかった。
　俺は舌打ちをしながらも、すぐさま立ち上がった。このまま棗を逃がすわけにはいかない。言っておくが、別に眼鏡が惜しいからではない。
　問題は棗の胸に咲いた、願いの植物だ。俺はそれを咲かせて摘み取らなければならない。ゲームとかのうは言うが、願いの植物は願いが叶い、咲かなければ、やがてその宿主を醒めない眠りへと誘う。死にも等しい眠りへと。
　まだ幼い棗を、そんな状態にするわけにはいかない、絶対に。
　俺は、優秀な頭を高速回転させて、これからすべきことを考えた。
「よし、これで行く……叶野学園で俺から逃げられると思うなよ？」
　そして、シミュレーションを終えると同時に走り出した。

「あ、お帰り、多加良」
〝叶野茶館〟入口で最初に迎えてくれた尾田は、俺の顔に眼鏡が無いことを確認すると苦笑した。
「宇宙メガネを取られたみたいだね」
「ああ……色々あってな」
　色々の部分に力を込め、親指で自分の胸を指し示せば、俺とかのうのゲームのことを知っている尾田はその意味を理解して、今度は重いため息を吐いた。
「あ、秋庭さん！　やっと戻ってきてくださったんですね！　あれ、眼鏡が……あ、でもそれよりも、いまちょっと大変なんです！」
　俺達の声を聞きつけて、羽黒も中から顔を出す。本当に大変らしい羽黒は額に汗を滲ませていたが、
「悪い、まだ手伝いには戻れない」
「あ……そうですか」
　俺が告げれば、羽黒は一度は肩を落としたが、すぐにまた笑顔になって、
「大変ですけど、大丈夫ですよ」
　給仕の仕事に戻っていった。
「それで、ここには何の用事で？」
「ちょっと校内放送をかけたくてな、鍵を借りに来た」
「校内放送？」
　今日、全教室の鍵を預かっているのは尾田なのだ。だが俺が用件を伝えると、尾田は首を傾げた。
「棗は植物をつけたまま迷子になったんだ」
　そう言い添えれば尾田は納得して頷いた。
「僕達の手は、必要？」
「出来れば。でも、この混みようじゃ……」
　俺が店内を見回して言えば、尾田は首を振った。
「いいよ〝叶野茶館〟は。棗ちゃん？　が見

論は口をついて出てこなかった。

「棗、これで映像の正体はわかったな」

俺が声をかければ、棗は俺の顔を見て、一つ頷いた。

「はい。でも……やっぱりきれいです。棗もこんな風に見せられたらいいのに、な」

だが、虹の失敗作だとわかっても、棗は天井に映ったその影を再び見つめて、小さく笑った。つられて天井を見上げた大手と城下はやはり首を傾げたけれど。

「あの……ここにあるのはみんなあなたが作ったんですか？」

そんな城下と正体不明の発明品の数々を見比べながら、棗は尋ねた。

「うん、そうよ」

「あの、じゃあ、この中に、他人にテレパシーを送れるような道具はありますか？」

頷く城下に棗は続けてそう問いかけた。とても真剣な眼差しと共に。

「テレパシー……は、ないわね」

「やっぱり、ありませんか。地球の技術ではまだ無理ってことですね」

だから、城下も正直に答えたのだが、棗は肩を落とし、目を伏せた。

「ああ？　でも、このぴょんた初号機はおススメだっつーの」

「時々制御不能になるけどね」

元気を無くした棗を慰めようと、城下は不気味な茶色の物体を勧めて、大手はすかさず忠告したが、棗は小さく首を振って断った。

そして、俺の服の裾を掴むと、そのまま科学部のコーナーに背を向けて歩き出す。

俺はそのまま棗に引っ張られるようにして、バザー会場の隅へと連れて行かれた。

ようやく立ち止まっても、棗はまだ俺の服の裾を離さなかった。逃がさない、というように小さな手には力が籠もっている。

「やっぱり、地球人がテレパシーを使えるようになるにはまだ時間がかかるみたいです。でも、宇宙王子。棗はいま……テレパシーを使えるようになりたいんです。だから、その宇宙メガネを棗にくださいっ！」

棗の双眸はさっきよりも更に真剣な色を宿していて、もし俺が本当に宇宙王子で、宇宙メガネを持っていたら、ただでそれをやっただろう。

「棗、俺はテレパシーを使えない」

でも、俺はその台詞しか口にできない。

「嘘だもの！　だって宇宙人はテレパシーで話すんだって、自分の目に見えた物もそうやって相手に見せるって、言っていたもの！」

しかし、俺の言葉に棗は納得せず、叫んで、棗の両目には涙の粒が盛り上がっていく。大人と違って変に堪えようとしない涙は見る間にあふれ出し、すぐに棗の頬を濡らしていく。

けれど、棗は涙を溢れさせながら、それでも俺の目を見返す。

「だって棗は……みんなに、テレパシーで見せたいんだもの!!」

が、その次の瞬間。俺は急激な痛みに襲われて、俺はそれ以上棗を見ていられない。

眼球の裏側から何かがはい出してくるような、不愉快な痛みの発作に棗の声が遠くなる。でも、どうにかこの痛みの発作を棗に気取られぬようにやり過ごさなければならない。

ふいに襲ってくるこの痛みがやがて去っていくことはわかっている。俺の目には傷一つ残さずに、だ。

なぜならこれは〝願いの植物〟が原石から芽吹いたと、それを知らせる為だけの痛みだから。

人間の一番の願いに反応して芽吹き、やがて花開く――願いの植物。

これを百本咲かせて、そして摘む。百本咲かせるまで終わることのない、それがかのうと俺の間で行われている〝ゲーム〟だった。

「……けど、いちいち、こんなに痛むのは嫌がら、せだろ、あの腹黒妖怪」

眼鏡と顔の隙間に手をいれて目を押さえながら、俺は毒づいた。

「どうしたの？　目にごみでも入ったの？」

「あ、あ……でも大丈夫、だ」

まだどくどくと脈打つような痛みは続いていたが、俺は手を上げて見せて、その拍子に眼鏡が外れて床に落ちた。

「あ、宇宙メガネがっ！」

そうすれば、ぼやける視界に眼鏡を拾い上げる棗の姿が映り、また、棗が眼鏡を手にしたのと同時に、俺の目の痛みは嘘のように消える。

こんなに痛むのは嫌がら、せだろ、あの腹黒妖怪。

　そして、故障中の発明品を腕に抱えた城下はそこでようやく俺達の存在に気付いた。
「たったいま、だ」
　俺は城下の動きに注意深く目をやりながら、少し棗を自分の側に引き寄せた。
「っていうか、きょう生徒会の連中が妙な格好して喫茶店やってるって話だっ……」
　そこで、城下の話はいきなり途切れた。テーブルの脇をすり抜けようとして、思い切りテーブルの脚に脛をぶつけ、その際手に持っていたレインボー3号を取り落とし、それは大手の右足を直撃していた。
「だ、大丈夫っ？」
　自分も足を押さえ、顔をしかめつつも大手は城下を気遣う。
「だいじょうぶだっつーの」
「人間台風は……相変わらずだな」
　それは見慣れた光景ではあったが、小規模災害とも言える城下の一連の動きに俺が呟きながら肩をすくめれば、
「び…びっくりしたもの。でも……大丈夫みたいだもの」
　まだ目をしばたかせつつ棗も体から力を抜いた。
　それから、発明品の間に置かれた、いわゆるパーティー用のおもしろ眼鏡に視線を移動させた。これは、恐らく実家がおもちゃ屋の大手が持ってきた物だろう。
　だが、宇宙メガネではないので、棗はそれにはすぐに興味を失い、先程天井に影を作り出していた物体をテーブルの上に探し始める。
「それで、秋庭はお客さんを連れてきてくれたわけ？」
　足の痛みからも立ち直り、ようやく棗の存在に気付いた城下はそう言いながら、珍しく俺に笑顔を向けた。よほどこの店は繁盛していないらしい。
　大手曰く、小中学校の時の城下の〝発明〟は凄かったそうだが、同時に失敗作も多かったと見える。俺はテーブルの上の〝発明品〟をざっと眺めて、
「いいや、客は連れてこない。俺には機能も用途も不明な物に、他人の金を使わせる趣味はないしな」
　率直な意見を述べた。
　と同時に、城下の笑顔は消えた。
「あたしがバカだったたっつーの、秋庭にあたしの発明品の素晴らしさがわかるわけなかったっつーの!!」
「あ……うん、そうだな。あー秋庭、円菜にはまだブランクがあるから、さ？」
　こめかみをひきつらせ声を荒らげる城下に、大手は妙なフォローを入れる。
「ブランクで片付けていいのか？」
「あ、これだもの」
　そして、俺達が他愛もない遣り取りをしている間に、棗はその〝発明品〟のスイッチを入れていた。
「ちょ、勝手にスイッチを入れたら何が起こるかわからないぞ」
「秋庭、いい加減に失礼だっつーの！　レインボー2号は故障中だけど危険じゃないっつーの！」
　しかし、棗はそんな俺達をきっぱりと無視して、天井をじっと見上げている。
　だから俺も棗の視線を辿ってみれば、そこにはさっきと同じ様な歪な模様があった。ただし今度は、青と赤、そしてその二色が重なった紫色、と影に色がついていた。
「城下……そのレインボー2号とやらはなんだ？」
　だが、この〝発明品〟はやはり俺には理解できなかった。でも、それは俺ではなく制作者に問題があるせいだ、間違いない。
「よくぞ聞いてくれたっつーの！　これはね、あたしの自信作、虹発生装置、通称レインボーシリーズよ！」
　だが、その問題のある制作者は、偉そうに腰に手をあててふんぞり返りながら答えた。
　そして、そのまま後ろに倒れそうになった。
「ただし、今は故障中で虹とは呼べない代物を映してる」
　すかさず城下を支えながら、大手は商品の欠点を隠さずに教えてくれた。
　いま天井に映っているのは、ようするに〝なり損ないの虹〟ということだ。
「城下、叶野学園の評判に係わるから、少なくとも故障品を売るのはやめろ」
　俺が極めて冷静に諭せば、城下は眉をつり上げたが、大手の言ったことは事実らしく反

「わかりました。それに棗はワープには興味がないもの。棗が知りたいのはテレパシーの使い方だけだもの、宇宙王子」

　少しほつれてしまった三つ編みを撫でながら、棗は頷いた。ただし、一番わかって貰いたい部分は相変わらず、理解してくれない。

「……なあ、俺はそんなにその〝宇宙王子〟っていうのに似ているのか？」

　もしかしたら特撮物の登場人物――その場合、多分悪役だ――に似ているのかと俺が問えば、棗は首を横に振り、それから今度は縦に振った。

「……イエスか、ノーか？」

「半分正解、です。あなたは……棗が描いた宇宙人の似顔絵の宇宙王子にそっくりです」

「似顔絵は似せて描くから似顔絵って言うんだ。で、この場合、それはただの絵だ」

　棗の誤りを俺が訂正すれば、少女は軽く唇を噛んだ。

「でも、棗はあなたが宇宙人だってわかったもの。ずっと宇宙人を捜していたんだから、間違うはずないもの」

　そして、一歩も退かない意志を持った眼差しで、俺を見上げてくる。

「テレパシーを使う宇宙人を、か？」

　どうも棗にとってのキーワードは〝テレパシー〟のようだ。ただ宇宙人を見つけることではないのだと見て問えば、棗は頷く。

「そうです。前にテレビで宇宙人はテレパシーでお話ができるって言ってました。棗はね、どうしてもテレパシーを使えるようになりたいの。だから宇宙王子、お願いします。棗にテレパシーを……」

　そこで、棗は唐突に言葉を切って、天井に目を向けた。

「きれい……」

　その呟きにつられて、俺も天井に目をやり……首を捻った。

　天井には何かの影が映って、歪な模様を作っていた。ただ俺にはそれのどこが綺麗なのかわからない。

「ね、あの影とその影が重なり合ってキレイ」

　俺に向き直って、棗は何か温かいものに触れたような、ほわっとした笑みを浮かべてみせる。

　だが、俺が同意できないでいると、その笑顔は消えてしまった。

「……うん、きっといまは宇宙メガネのスイッチが入ってないからだもの」

　そして、小さく呟くと、

　気を取り直して尋ねてきた。

「あれ、誰が作っているのかな？」

「えーと……ああ、科学部、みたいだな」

　恐らく意図して作ったのではないと思うが、バザー会場を見渡したところ、その影の発生源は科学部で間違いなさそうだ。

「行ってみるか？」

「……行ってみたいです」

　そして、棗が頷いたので、俺はそちらへと進路をとった。

「ったく、メンテはしたっていうのにどうして動かないんだっつーの」

　ショートカットに青いセルフレームの眼鏡、そして制服の上になぜか白衣という出で立ちで城下円菜は今日もいた。城下の背が低く見えるのは、傍らで見守る大手隆哉がでかいせいだけではなく、事実背が低いからだ。

　恐らく、自分の〝発明品〟らしきものを難しい顔をして振り回している城下は近付いていく俺達に気付く様子がない。ついでに科学部の仕切るテーブルの上に並べられている〝発明品〟も売れている気配が全くない。

「あ、秋庭……なんか噂通りすごい格好をしてるなぁ」

　城下より先に俺に気付いた大手は、挨拶代わりにそう言いながら大きな体を揺らして笑った。

「……噂になっているのか」

　それは〝叶野茶館〟にとっても、俺にとっても確実にダメージだ。

「お……大きい人ですね」

「ん？　こんにちは。この子は秋庭の隠し子……なわけないよね」

　190センチ近くある大手は棗の目には巨人にも等しく映ることだろう。だが、大手が冗談交じりに――ああ、隠し子云々はもちろん冗談だよな、大手――笑いかければ、一生懸命に見上げながら棗も頬を緩めた。

「あーっ、レインボー3号、だめだっつーの！　ん？　秋庭いつの間に？」

「く、桑田」
「……ここは確かにお茶と共に楽しいお喋りを楽しんでいただく場所だけれど、ね？　お客様、秋庭君、お茶が冷めているわよ？」
　せっかく淹れたお茶がまったく飲まれずに冷めている、というのは桑田にとってはかなりゆゆしき事態だ。一応、相手は子どもということで、桑田は怒りを最小限に抑えているようだが俺の背中を冷たい汗が伝う。
　桑田の名誉のために言っておくと、常の彼女は静かな表情で落ち着いた雰囲気を醸し出し、かつその心根は優しい――ただ、お茶のこととなると少々我を失う時が、あるだけで。
　俺はとっさに棗を背中に庇いながら、棗の手荷物を確認する。ポシェットが一つ、これなら大した荷物ではない。
「そ、そうだな。せっかくのお茶が冷めてしまったな。ほら、棗、桑田に謝れ」
「？　冷めたら温めればいいですよ？」
　桑田のお茶への愛を知らない棗が呑気にそう言えば、桑田の肩が微かに震えた。
　そして、俺は桑田がゆっくりと拳を握り込んでいくのを見て、次の行動を決めた。
「……いいか、棗。俺が合図したら走れ」
　短く告げれば、さすがに何か察したらしく今度は棗も頷いた。
「桑田、営業妨害のお客様は、俺が責任をもって会場の外まで送っていくから……な？」
　なるべく静かな声を心がけながらなだめる言葉を口にすれば、そろそろと桑田の背後に近付く影が二つ見えた。俺はその影――青ざめた羽黒と尾田――に目で合図を送り、
「棗、走れ！」
　続いて、棗のポシェットを掴みながら声を発した。
「羽黒、尾田、悪いが桑田は任せた！」
　途中で棗を抱え上げて走り出した俺が、振り向き様に見たのは、懸命に桑田を押さえる尾田と羽黒だった。

〝叶野茶館〟を追われた俺達は、ひとまずバザー会場の奥の一画――手芸部有志のコーナーを潜伏先に定めた。
「た、助かりました。ありがとうございます、宇宙王子！」
　俺の腕から地面に降りた棗は、礼を言いながら頭を下げた。
「ああ、お互い無事で良かったな」
　息を整えながら俺が言えば棗は頷いた。
「はい。……でも、今みたいな時こそワープすれば良かったんじゃないですか？」
　うっすらと額に滲んだ汗を腕で拭く俺を見ながら、棗は至極真面目な顔で言った。
　ああ、まだ俺は棗にとって、宇宙人なのか。
「だから、俺は普通の人間だ。この眼鏡は普通の近視用眼鏡。ワープに見えたのはダストシュートを使って移動しただけだ。ああ、でもどれが移動用かわからない棗は、絶対に使うなよ！」
　チャイナ服という、バザー会場にはそぐわない自分の格好に視線が集まってきているのを感じながら、俺は口早に訴えた。

神様ゲーム

The God Game
ホシニノバステ

って、テレパシーで宇宙人と交信していました。それからワープもしました。……棗は見たんですよ」
一応さっきの〝秘密を守る〟という話は覚えていてくれたらしく、俺の耳元で囁きかけるように棗はそう話してくれた。
「残念ながら、俺はテレパシーで交信していないし、ワープをした覚えもない」
本当に身に覚えがなかったので、俺はきっぱりとそう言った。
「でも……棗は見たもの」
だが、棗はそれでも引き下がらなかった。
二本の三つ編みを手で軽く引っ張りながら、自分の言葉に自分で頷く。
ワープと宇宙メガネという俺には理解不能――いや、単語の意味は理解しているがSF的なその言葉が俺とどう結びつくのかがわからなかった。
「見たもの。宇宙メガネをかけてから、誰もいないのにお話を始めたのを見たもの」
「そんな記憶は無い」
俺は正直に言った。子どもの想像力に水を差すのは本意ではないが、このまま宇宙人になるわけにはいかないのだ。
「それは嘘だもの。さっき、あっちの建物の二階の廊下で宇宙に向かってお話ししてたでしょ。きっと地球暮らしの癖で、声にしちゃったんでしょ。それに、二階にいたと思ったら、宇宙人さんはもう下にいたんだもの。ワープしたんでしょ！」
棗の声と顔が真剣さを増すほど、その声のボリュームも上がり、俺達二人に再び他の客席から視線が注がれ始める。
その好奇の視線を気にしつつ、俺はある事に思い当たった。そう、二階の廊下といえば、さっき俺がかのうと話した場所だ。俺をはじめとして限られた人間にしかかのうの姿は見えないという事実を忘れた覚えはないが、人目がないと思いこんであの時失念していたのは本当だ。
だが、目撃者は棗ひとり。ならばまだかわせるはずだ。
「ワープ？　それも覚えがない」
本当はダストシュートを使った移動手段のことだと理解していたが、俺はわざと斜に構えてしらを切る。不満顔で棗は口を噤んだ。
「でも、それは宇宙メガネでしょ？」
けれどまたすぐに口を開くと、今度は俺の掛けている眼鏡を指さす。
「これが……宇宙メガネ？」
軽くフレームを叩いて示せば、棗は大きく頷く。しかし、これはごく普通のシンプルなフレームとデザインのどこにでもある眼鏡だ。だが、俺を見上げる棗の双眸には、また子ども特有のきらめきが宿っていて、俺は即座に否定の言葉を口に出来ない。
「それで宇宙にいる宇宙人とテレパシー交信するんだって、棗にはわかっているもの」
その間にも、好奇の視線は集まって、中には棗の言葉を嗤うような声もある。棗も気付いたのか少し身を縮める。俺はそれらの視線から棗を庇うように背筋を伸ばした。そして俺は
「いいか、これは普通の眼鏡だ。俺は宇宙人ではない。それが事実だ」
けれど、どうしてもそれは言い聞かせなければならない。俺は基本的に自分の目に見えるものしか信じないが、だからといって見えないものをすべて否定する気もない。
でも、俺は棗の求めている宇宙人ではないのだから、仕方ない。
「あのな、棗」
「何ですか、宇宙王子」
声をかければ棗は、俺が宇宙人だという期待に未だに満ち満ちた表情で俺を見上げる。
「宇宙人は、宇宙を探せばいるかも……いると思う。だけど俺は地球人なんだ」
俺は、これが最後と言い聞かせる。しっかりと棗の眼を見て。
「いいえ、あなたは絶対に、棗の宇宙王子です!!　先週、叶野市でミステリーサークルも発見されているんだもの!!」
しかしながら、俺の誠意は棗の大音声に掻き消された。いい加減これは、営業妨害かもしれないと、俺が思い始めたまさにその時。
「お客様、営業妨害につき、退出願います」
俺の背後から凍りつきそうな気配と共に声が響いた。いつもより温度の下がった声だったが、その声の主が誰かは振り向かずともわかった。だが、俺は半ば反射的に後ろを見て、その名を呼んでしまう。

宇宙人の宇宙王子！　ジェントルビームは止めてくださいね！

とを宇宙人と呼んでいる点についてはとりあえず流す。

「いいから、礼儀として名乗れ。ああ、俺は秋庭多加良だ」

「なるほど、それが地球人としての名前なんですね。棗は……ワタシは梶井棗です！　よろしくお願いします！」

今度こそ名を名乗って、少女――棗はもう一度頭を下げた。そうして顔を上げると同時に、また俺を、ある種の希望と期待に満ちた瞳でもって見上げてくる。

「えーと、ちょっと、いいか？」

俺は挙手して、発言の許可を求めた。ああ、俺が喋るのに許可なんてものは本来いらないのだが、今はそういう気分だ。

「ど、どうぞ、宇宙人さん！」

微かに頬を緊張させて、棗は頷いたが、俺がこれから言う台詞は、棗の期待を十中八九裏切るはずだ。

「いま名乗った通り、俺は秋庭多加良という名前で日本国籍をもつ日本人だ。故に地球人というカテゴリー以外の宇宙人になった覚えはない」

眉間に皺を刻みながら、俺ははっきりと告げたのだが、棗はきょとんとした顔で見つめ返して来るだけだった。

「……あの、今のは宇宙語ですか？　棗はまだテレパシーが使えないので、お話しする時は日本語にしてください」

俺の言い方が悪かったのか、棗は俺の言葉を明らかに理解していなかった。俺達の会話そのものが噛み合っていない気も大いにするが、俺は仕方なくもう一度口を開いた。

「……俺は、宇宙人ではありません」

腰を落として目線も合わせ、はっきりと、滑舌もよく今度はわかりやすく伝える。

誤解は解けて、これで一件落着だ――そう考えるほど俺は楽観的では無かったが、

「人間？　そんなの嘘です！　だってこの顔は宇宙人の宇宙王子の顔だもの！　今は地球にお勉強にきているんでしょ！」

棗は俺の予想以上に手強い相手のようだ。また俺にわからない単語を――宇宙王子、ってなんですか？――織り交ぜながら、棗は俺の顔を指さしてまた大きな声で叫ぶ。

いい加減、俺のこめかみもひきつってくるというものだ。

「静かにしろ、他のお客様の迷惑だ。それから人様の顔を指さすんじゃない」

苛立ちを抑えて、諭すように言えば、棗は慌てて手を下ろして、それを背中に隠して頭を下げた。基本的に素直らしい。というか、一連の発言もその純粋さ故だろう。

「わかればいい」

だから、俺も寛大に許してやる。

「ごめんなさい。宇宙人の宇宙王子！　だからジェントルビームは止めてくださいね！　棗は女の子なのでおひげは嫌です！」

ただし、その妙な誤解は未だ健在の模様。すいません、紳士光線ってなんですか？

「ウル○ラマンもＭＩＢも宇宙人は自分の正体を隠して暮らすんですよね。でも、棗は他の人には言いません、秘密は守るもの。だから、テレパシーの使い方を教えてください！」

声を潜めてくれたのはいいが、棗の想像力は依然加速中だ。俺は額に手をあてて、目眩を堪えた。

もし、棗の表情に僅かでも偽りやからかいがあったのなら、他の対処法もあっただろうが、問題はそれが欠片ほども見えないから深刻だ。上手く解決しなければ、この少女をいたずらに傷つける結果になる。

とにかく、一足飛びに事態を解決するのは無理そうだ。これはじっくりと誤解を解いていくしかない。そうだ、いまこそ俺の素晴らしい交渉術を応用するのだ。

「テレパシーの前に、まず、なぜ俺のことを宇宙人だと思うのか、説明してくれるか？」

怯えさせることのないよう注意を払いながらも、俺は棗の榛色の瞳を見つめて、まずそう尋ねた。

「ちゃんと話してくれ」

小首を傾げる棗に俺は繰り返した。どうやら棗は俺を宇宙人だと思うのと同時に、テレパシーが使えると思いこんでいるらしい――多分、棗の抱く宇宙人像がそういうものだからだろうが。

「ええと、宇宙王子はさっき宇宙メガネを使

神様ゲーム

The God Game

ホシニノバステ

ですか？」

眼鏡の位置を直しながら、俺が確認のために問えば、少女は弾かれたように振り向き、そのまま俺の顔を仰いだ。

「テレパシー……やっぱり、本物、だ」

そして、謎の呟きと共に向けられたその瞳に、子ども特有のキラキラした感情を見て、一瞬それに飲まれる。

「……お客様？　プーアル茶のセットで？」

だが、すぐに我に返ると、もう一度問い直す。これから彼女と話をするにしても、まずは注文を取っておかなければならない。ここが〝叶野茶館〟である以上。

「あ、はい。あのそれは……あなたが運んできてくれますか？」

「はい」

俺が頷けば、少女は胸を撫で下ろして、もう一度椅子にきちんと座り直した。

「では、少々お待ち下さい」

そう言いながら踵を返せば、俺の背中にはさっきの様子を窺うようなものとは異なる、いわば期待に満ちた眼差しが送られてきて。

本来ならば歓迎すべき類の視線なのだが、俺はまたも嫌な予感を覚えていた。

プーアル茶に中国風の蒸しパン付きで、350円のセットと共に再び俺が近付いていくと、少女は三つ編みを弄る手を止めて、顔を上げた。その顔はやはり期待に満ちていて、頬はさっきよりも心なしか上気している。多分、暖房のせいではない。

「プーアル茶セット、お待たせしました」

嫌な予感はしているが、自分から係わってしまった以上逃げるわけにもいかず、俺は小さな盆ごと少女の前にお茶と菓子を置いた。

少女は、お茶と菓子にちらっと目をやったが、すぐに俺に視線を戻し、

「あの、これは宇宙食ですか？」

意表を突く問いをぶつけてくれた。

「……はい？　これはあえて言うなら、中国料理で、普通の食べ物だ」

思わず、給仕の口調を忘れて俺は言った。

「あ、ああ。そうですよね。今は地球人として暮らしているんですね」

だが、少女の言葉は更に意味不明の度合いを増している。

「あー、ここはお茶が冷めないうちに飲め」

もしかしたら、俺が厨房にいる間に、少女が動揺するような出来事が起こったのかもしれない。ああ、きっとそうだ。ならばお茶を飲めば落ち着くだろう。

しかし、俺が勧めても少女はお茶に手をつけなかった。代わりに、ゆっくりと椅子から立ち上がり、俺の正面に回ってくる。立ち上がってもその身長は俺の胸にも届いていない。

そして、少女は目一杯首を上げて、俺の顔を見つめると、息を吸い込み、

「宇宙人さん、お願いします！　どうか棗にテレパシーの使い方を教えてください!!」

一気に言葉を吐き出し、勢いよく頭を下げた。

その大声に店内の客の視線が俺に集まる。叶野茶館の狭い店内に響き渡った〝宇宙人〟の声に、人々の眼差しはまず少女に注がれて、それから彼女が真っ直ぐに見詰める俺へと移動し——その後しばらく店内は静寂に包まれた。

俺もまた、次に何を言うべきか迷い、沈黙する——悪人顔の俺でもさすがに〝宇宙人〟と言われたのは初めてだったから、な。

その間も少女の頭は下を向いたまま。三つ編みの先の方は床に触っていて、このままでは頭に血が上ってしまうんじゃないだろうか。

「えー、お客様、なんでもありませんので。引き続き当店のお茶をお楽しみ下さい」

とにかく、この異様な沈黙を解消すべく、俺が客席に顔を向ければ、事態は一応の収拾を見せた。人々の視線も元へと戻ったが、小さな笑いと共に、それでもまだちらちらと俺達の方を見ている客もいる。

「とりあえず、顔を上げてくれ。で、それから自己紹介だ」

俺は、この少女も見習ってくれるように声のボリュームを落としながらそう促した。

「はい。んーと、でも宇宙人さんにはもう名前を教えましたよ？」

素直に俺の言葉に従い顔を上げつつ、続いて少女はそんなことを言って首を傾げる。確かにさっき、下の名前を口走っていたが、それと自己紹介は別物だ——ちなみに、俺のこ

テレパシー……やっぱり、本物、だ。

ままでは、さすがに俺も立ち上がれない。
「は、はいっ！」
そう言えば、羽黒は大きく二回頷いた後で、俺の手から盆を受け取った。
「俺はもういいから行け。客を待たせるなよ？」
俺が立ち上がってもまだ、申し訳なさそうに項垂れている羽黒を促せば、
「はいっ！　も、もう転びません！」
真剣ゆえに、眉を八の字に寄せて、羽黒は慎重な一歩を踏み出した。あまりに慎重すぎて効率は悪そうだが、こぼしてしまうよりはいいだろう。
長い三つ編みまでも緊張しているように見える羽黒の背中を見ながら、俺は諦めのため息を吐いた。
明らかに午前よりも客席が埋まっているこの状態で、羽黒がてんぱった日には目も当てられない事態になることは、たった今、身をもって証明された。
だから俺も注文を受けるべく客席へと向かおうとしたのだが、そこで俺は例のパンダがいないことに気付いた。
鈴木がいないにこしたことは無いが、あいつだけのうのうと遊んでいると思えば、それはそれで腹立たしいのも事実だ。
「尾田、鈴木のヤツはどこに行った？」
「ああ、鈴木くんなら〝客寄せパンダ〟に任命したから」
近くを通った尾田に問えばそう答えが返ってきて、確かに、パンダに一番相応しい仕事に納得し、俺は改めて客席へと足を向けたのだった。

その子どもが〝叶野茶館〟に入って来たのは、俺が再び給仕を始めて三〇分が経った頃だった。
小学校の中学年位の子どもがたった一人で入って来た為、俺の視線は数秒少女に向けられた。子ども自体はバザー会場でも〝叶野茶館〟でもそれなりに見かけていたし、別に問題ない。でも、殆どが保護者同伴であったから単独行動の少女は俺の目をひいたのだ。
そして、ふと俺と目が合うと子どもは一瞬びくりと肩を震わせ、そのまま俺の方を見ながら、空いているテーブルに場所をとった。
腰を下ろしても尚、その視線は俺から外れない。仕方が無いので、俺の方から目を逸らせば、少女は小さく息を吐いてようやく肩の力を抜いた。
それから、テーブルに置かれていたメニュー――といっても、三種の中国茶と三種の菓子のセットしか無いのだが――の検討に入る。
と見せかけて、メニューの陰から再び俺の様子を窺っている。
その視線に若干の居心地の悪さを感じながら、俺は記憶を探ってみる。だが、俺のかなり優れた記憶力の中にこの少女の面影はない。左右二本の三つ編みにされた髪型にも、ラビットファーのショートコートがよく似合う、可愛らしい顔立ちにも覚えがない。
故に、あんな眼差しを向けられる覚えもないのだが、このまま放って置いても事態は解決しないだろう。俺はグラスに水を注ぐと、その少女の下へと向かった。
俺がテーブルに近付いていくと、少女は少々慌てた後で、背筋を伸ばしてパイプ椅子に座り直した。
「いらっしゃいませ。ご注文はお決まりですか？」
グラスをテーブルに置き、まずはマニュアルに沿って、俺は注文を訊いた。
「え、あっ。ええと……」
メニューを見るふりをして、俺を見ていたのだから、当然注文が決まっているはずもなく、少女はうろたえて周囲のテーブルを見回す。
その首の動きを三つ編みが追っていくのを見つめながら、俺は軽く眼鏡のフレームに触れた。
この少女が俺に用事があるのは間違いないと思うのだが、まだ用件はわからない。だからといって、こちらから下手に尋ねても警戒されるだけだろう……何しろ今の俺は暗黒街の顔役なので。
そんな風に俺が次の手を考えあぐねている間に、少女の動きがふと止まる。その視線を追っていけば、中国風の蒸しパンにかぶりつく子どもの姿があった。
「プーアル茶と蒸しパンのセットでよろしい

ところだ。そう、その方が拳を振るうよりもきっと効果的だ。
「……用がないなら俺は行く」
そして、俺は踵を返しこの場から離れるという、最善の方法を選んだ。
「まあ、此度はお子様の多加良の方が、子どもも心がわかっていいかも知れぬのう？」
だが、かのうは俺を引き止める台詞の代わりにそんな呟きを俺の背中に落とす。
「また何か企んでいるのか？」
正直今日は、桑田の経営戦術で既に腹がいっぱいで、かのうが持ち込んでくる厄介事に対処する余力はない。それでも、振り返らずにいられないのは、かのうの持ってくる厄介事には〝願いの植物〟という要素が絡んでくることが多いからだ。
「さてのう？　妾はお洒落をして、ばざーとかいう市の様子を見に来ただけだからのう？」
しかし、かのうは肩に零れた髪をうっとうしそうにかき上げながら、再び俺をはぐらかすような台詞を口にして。
そのくせ、肩越しに振り向いた俺の顔に、黄金色の双眸はしっかりと据えられていた。
「本当に、用事はそれだけか？」
だったら、俺に顔を見せる意味はあるのかと言外に俺は尋ねたのだが、
「妾は楽しいことが好きなだけだからのう」
かのうは答えになっていない言葉と共に小首を傾げて見せ——直後、現れた時と同様、突然空中から姿を消した。
しゃらしゃらん、という連環の響きだけをその場に残して。
かのうの楽しいこと＝俺にとっての厄介事という数式が、かのうの消えた空中に一瞬見えた気がした。だが、その式を慌てて振り払う。本当に今日ばかりは、これ以上の面倒は避けたい気分なのだ。
「……しまった。開店時間」
時計を見れば、開店時間を少し過ぎていた。思いがけず時間をとったせいだ。ようするにかのうのせいだ。
だけど俺は、走り出す代わりに、近くのダストシュートを探した。
「使うのは、ちょっと久し振りだな」
独りごちながら、俺は目当てのダストシュートを見つけるとその取っ手に手をかけた。続いて、そのダストシュートの中に足から滑り込む。
そうすれば、一見人間が通り抜けられそうにないが、中は秘密の抜け道になっているダストシュートは、滑り台の要領で一気に俺を階下へと運んでくれた。
代々の生徒会メンバーしか知らないこのルートを積極的に使っているのは今は俺だけだ。慣れれば楽しいと思うのだが、尾田達には不評だ。急いでいる時は特に便利なのに。
そうして、見事に地面に降り立った俺は、再び体育館へと急いだ。
だから、さっきまでいた二階の廊下に、俺を見る一対の目があったなど当然知らず、
「い、今まであそこにいたのに、もう一階にいる……やっぱり宇宙人だもの」
そんな呟きのことも当然知るよしもなかった。

〝叶野茶館〟と掛け替えられた看板を見て、入口を通り抜ければ、既に客は入っていて、俺は一つだけため息を吐いた。
「もう、腹を括るしかないか」
尾田達も着替えを済ませ、働き始めていた。全員違和感なくチャイナ服を着こなしていて、俺はより一層の所在なさを感じる。
俺は踵を返したくなったが、だが次の瞬間、両手にお茶と菓子の載った盆を持った羽黒が俺の目の前を通り過ぎ、
「あっ、きゃあっ！」
何の予告もなく、躓くものなど何もない所でいきなり転倒した。
「お、おおおーっ」
「さすが副……秋庭」
羽黒が取り落としたお盆をお茶ごと、床スレスレで受け止めて見せた俺には、称賛の声が浴びせられる。今日初めていい気分だ。
「す、すみませんっ！　秋庭さん、大丈夫ですか？」
「ああ、俺もお茶も無事だ。だから、とにかく盆を受け取ってくれ」
スライディングの体勢で両手に盆を持った

見せろ」
結局俺は足を止めて、誰も歩いていない廊下の中空に視線を据えた。
「妾なら、こっちだがのう？」

けれど、声は鈴のような音がしていたのとは真逆の方から降り注いできて、俺は面倒に思いながらもそちらを向いた。そうすれば、今度こそ、そこにはアレの姿があった。
　銀色の絹糸のような髪は踝までも届き、双眸は太陽の光を写し取ったような黄金色。赤い唇は常と同じように笑みを形作っている。両手と両足には白金色の連環が嵌っていて、女が動く度にしゃらしゃらという鈴に似た音を立てるのだ。
　俺の眼前に佇む女は確かに美しいけれど、それは人ではないから備えられるものではないだろうか。叶野市限定でだが、不可視の力を振るうことの出来るこの女は、名を〝かのう〟と言う。ただし、外見の美しさに反比例するように中身は一筋縄ではいかない腹黒さだ。
「……前言撤回だ。今すぐ消えろ」
　そして、俺は今日のかのうの衣装を確認すると、少々うんざりしながらそう言った。
「さて、何故に？　せっかく今日はしゃれた着物を選んだというのにのう？　多加良と同じで妾もとても似合っているであろ？」
　明らかにからかいを含んだ声と瞳でそんなことを言われても、一ミリ、いや、一ナノ程の説得力もないということが、かのうにはわからないらしい。
　いったいどこから調達したのか——そもそも俺が接しているかのうは実体ですらないのに——今日のかのうは、俺が着ているチャイナ服と生地から模様まで同じ物を着込んでいた。違いはかのうの方は完全なチャイナドレスでズボンが付いていないところくらいだ。
　この服は、やはりかのうの嫌がらせだったらしい。
「用事はそれだけか？」
　この問いにかのうが頷いたら、当たらないことは承知した上で、それでも拳を振るってもいいはずだ。そんな風に、少々物騒な思考をしながら俺が問えば、
「うむ。でも、せっかくお揃いなのにのう。妾の宇宙の神秘とも言うべき美しさがわからぬどころか褒めてもくれぬとはのう。……多加良はまだまだお子様だのう」
　予想通りふざけた台詞が返ってきて、俺は拳を固めた。
「……宇宙の神秘？　ああ、確かにお前の頭の中は宇宙人でもなければ覗けないだろうな」
「ほほ、宇宙人も妾の美しさは理解すると思うがのう。理解できぬのはお子様な多加良くらいかのう？」
　軽く皮肉れば、何が面白いというのか、かのうの唇には更に深い笑みが刻まれる。ついでに俺が黙殺しようとした一言をご丁寧に繰り返してくれた。
「俺は、ガキじゃないぞ？」
「そうかのう？　むきになるところが怪しいのう？」
　だめだ、ここで挑発に乗ったら負けを認めるも同然だ。ここは大人の余裕を見せつける

おらず、同じ色の光沢のあるパンツを穿くようになっていて、動きやすそうではあった。

桑田には藤色の、羽黒には縹色のチャイナ服で、尾田には女子とは少しデザインの違うカンフー服に似た感じの黒の上下。

「中々いいね。ほら、多加良のも見せてよ」

「秋庭さんのは何色ですか？」

「……まずは見るだけ、だからな」

一応保険をかけておくことは忘れない。

そうして、中から現れたのは、尾田とは違い、光沢のある黒地で裾が膝まであるチャイナ服。襟や袖口には朱色の縁取り、裾には五本爪の龍の刺繍。

「あら……彩波さんにしては、いいセンスね」

桑田は顎に手を押し当てながらそう言ったが、俺は即座に袋の中にそれを戻した。

「いいセンス？　俺がこれを着たら、客足が遠のくぞ」

これを着た自分を想像するに、悪人顔の俺はどう控え目に表現しても〝暗黒街の顔役〟以上には見えないと思う。そんな人間が接客なんて大問題だ。

「大丈夫だよ、多加良」

だが、尾田は全員を代表して、何の根拠も示さずにそう言うと目を細めてみせた。

「みんなで着れば、ユニフォームだから」

「……意味が、わからない」

以上、長々と記憶を遡ってみたが、やはり俺はこのチャイナ服に意味を見出せず、

「俺には、意味がわからない」

もう一度俺は呟いた。

「だから、これから〝叶野茶館〟になるからよ？」

すると今度は桑田に諭すような声と視線を向けられる。頼みの二人の内、羽黒は、チャイナ服を胸に抱いて楽しそうで、尾田はその仕事を称えるように、鈴木の肩に手を置いていた。俺は四面楚歌の状況を改めて認識する。

「……ユニフォームなら制服だって」

「それじゃ、赤字を回収するほどの収益は望めない。やるなら客の目を引くものがないと」

それでも食い下がろうとする俺に、尾田ははきはきと語ってくれた。ある意味、経営者の台詞だ。俺につけ込む隙を与えないのは中々だ。でも、俺はまだ諦めるつもりはない。

「多加良……赤字の決定打になったのはさ、この間の城下さんと科学部の件なんだ。その時言ったよね、この損失をバザーで補填する場合は一生懸命客寄せをするって」

しかし、俺が胸に燃やした闘志を見抜いたかのように、尾田はその約束を持ち出した。

「確かに言ったんでしょう？」

尾田だけでなく、桑田にも眼前に迫られて――その一種異様な二人の迫力に、傍らの羽黒までがおののけば、

「……着替えて、くる」

俺は膝を屈するしかなかった。

「ねえねえ、パンダの鳴き声ってさー」

鈴木の能天気な声が今日ほど腹立たしかったことはない。

一人で着替える場所を探して――自分でその悪役じみた仕度を確認した後でなければ、人の目に触れさせることは憚られたからだ――俺は体育館から近い東棟の教室をその場所に選んだ。

そうして、着替え終わり、窓に映った自分を見てみたが、予想通りこの衣裳は俺の悪人顔に拍車をかけていた。

「……雑魚キャラに見えないだけ、ましか？」

そんなことを呟きながら教室の外に出て、俺はいつもより視界がぼんやりとしていることに今更気付き、慌てて眼鏡をかけた。

しゃらん

その次の瞬間、俺の耳には鈴の音のような、金属の擦れる音が聞こえて。

でも俺は、それを気のせいにして歩き出す。靴までもチャイナ仕様になっていたが、これはこれでリノリウムの床でも音がしなくていい。

しゃらん、しゃらしゃらしゃん

しかし、その音はしつこく、俺の耳朶をくすぐろうとするように繰り返し鳴らされて、

「……うっとうしい真似をする位なら、姿を

あの紙袋から怪しい気配がしないか？

「……羽黒、昨日は世界史の勉強か？」
　尾田に続いて、期末テストが近いことを思い出しながら俺が問いを向ければ、羽黒は素直に頷いた。
　そんな風に、羽黒に冷静に対応しながらも、俺の目は桑田の腕の中に収まった紙袋から離れない。
「羽黒、あの紙袋から怪しい気配がしないか？」
　霊感少女という触れ込みで転校してきて、俺よりもその手のことにはずっと敏感なはずの羽黒に問いかけてみたが、
「？　悪いものの気配は感じませんよ？」
　羽黒の答えは俺の期待に添わなかった。
　だが、いつまでも二人を見つめていても埒が明かないので、俺は思いきって口を開く。
「桑田、その紙袋の中身は一体何だ？」
「ただの貸衣装よ」
「貸衣装？　……もしかして、鈴木が着ているようなアレか？」
　桑田は極めて簡潔に答えたつもりだろうが、俺達は揃って首を傾げた。
　視界の外に追いやりたいその姿を、示しながら問えば、それには桑田は首を振った。
「でも、ぼくのパンダも彩波っちが貸してくれたんだけどね！　似合うでしょ！」
「……着ぐるみに似合うも似合わないも無いと思うけど」
　くるりとその場でターンを決めてみせる鈴木を見ながら尾田は冷静に言ったが、俺の嫌な予感はまだ消えていない。
「パンダ、も？」
　微妙な言い回しに俺の勘は反応を示す。
「うん、みんながチャイナ服を着るならぼくはパンダって言ったら出してくれたのさ！」
　そして、その台詞を聞いた瞬間、俺はフリーズした――チャイナ服を着る？
「あの、チャイナ服ってなんのことですか？」
　動かない俺を横目に見ながらも、迷った末、羽黒はおずおずと桑田に問いを向ける。
「ああ、花南ちゃん。私達がこれから着る服のことよ」
　桑田はこぼれた髪を耳にかけながら、至極あっさりと羽黒に答えた。
「これから、着る？」
　その言葉を受けた羽黒は、ふいに餌を取り上げられたハムスターのような顔で、小さく首を傾げた。
「なるほど、わかった。十一時半から十五時までは〝叶野茶館〟だから、だ。うん、いいんじゃないかな」
　その隣で尾田がしたり顔で笑えば、桑田は答えに満足げに頷いた。
　そうか、中国茶を振る舞うから名前もそれ風に変えるのか、と、そこまでは俺も理解した。
「あ、わかりました。〝叶野茶館〟の店員はこのチャイナ服を着る決まりなんですね！」
　ぽん、と羽黒が手を打ってそう言えば、
「その通り！」
　桑田と鈴木は仲良く声を揃えて頷いた。そして、桑田は鈴木から受け取った紙袋の中から一回り小さな紙の袋を取り出して、羽黒、尾田の順で配っていく。
「はい、秋庭君」
　最後に桑田は謎の微笑みを添えながら、俺の胸にその紙袋を押しつけた。
「あ、あと彩波っちからお手紙預かってきたから読むよ――多加良ちゃん、尾田ちゃん、花南ちゃん……オマケに美名人ちゃん、こんにちは。今日は彩波は用事があってバザーには行けないの。でも頼まれたチャイナ服はちゃんと用意したので鈴木君に預けるね。家に着ないであった物だから、レンタル代はいらないよ。だけど後でこれを着た多加良ちゃんの写真だけはちょうだいねっ！　絶対絶対よろしくね！　それじゃあまたね――だってさ！」
　パンダのもこもこした手で鈴木はちゃんと手紙を元通りに畳むと、桑田に手渡した。
「ということで、開けてみましょう」
　そして、俺がその紙袋をじっと見つめている間にも、和気藹々とした会話を交わしながら、三人はさっさと紙袋を開けていく。
「やっぱり、彩波さんは太っ腹だな」
「どんなチャイナ服でしょう？」
　結果、一分も経たない内に三人の手にはチャイナ服が出現していた。
　それはおそらく、日本人が最もイメージしやすい形のチャイナ服だった。右開きの上着は腰までの長さで、ドレスのようにはなって

今日の役割分担を決めたのももちろん桑田だ。当然、厨房担当は桑田、俺と羽黒が給仕。尾田は客の案内と会計という風に。メニューというか、出すお茶は午前は緑茶、昼は中国茶、三時からは紅茶と、桑田はそこにもこだわりを見せた。

ただ、今朝会場に着くと同時に和服と前掛けを渡されて、着るように言われた。和服で給仕して貰うから、という決定事項と共に。

俺はなぜ制服にエプロンではいけないのかと首を捻りながらも、指定された和装で午前の仕事をこなした。ちなみに羽黒と桑田は着物にエプロンという仕度で、大正風のカフェスタイルだった。

そして、桑田の振る舞うお茶と菓子のうまさはすぐに会場内で噂になり〝茶店かのう〟は会場でも一、二を争う賑わいを見せながら、午前の部を終了した。

昼の部は十一時半から。ということで、休憩しながらも体育館の角の一画を仕切るパーテーション――これに囲まれた範囲が俺達の喫茶スペースになる――の隙間から会場の様子を窺っていた俺は、人の流れを意外に器用にかき分けて、こちらに向かって来るモノに気付くと腰を浮かした。

「尾田、今すぐ店の入口にバリケードを作る。手伝ってくれ」

そう指示しながら、俺は客席から椅子を移動させるべく動き出そうとした。

「多加良、残念ながらもう間に合わないよ」

「尾田、諦めるな。まだ間に合……」

尾田の声に半分振り向いたところで、俺の視界は白と黒の毛皮で埋め尽くされた。

いつの間にか俺の背後には――しかもこの俺に気付かれないように――パンダ、がいた。いや、正確にはパンダの着ぐるみを着たおかしなヤツが。

「だーれだ？」

両腕に大きな紙袋を下げつつ、腰に手を当て、能天気に訊いてくるパンダに、俺を含め全員が沈黙した。ただし、それは驚いたからではなく、いつも通りの反応としてだ。こんなパンダの着ぐるみを学園内で着る人間の心あたりなど俺達には一人しかいなかった。

「……鈴木さん、ですよね」

誰も問いに答えないのを憐れに思ったか、

「ぴんぽんぴんぽーん！　さっすが、羽黒っち。そこの多加良っちとはひと味違うね！」

羽黒が答えてやれば、鈴木パンダは調子にのって、俺に対して大変無礼な発言をする。

「鈴木、パンダの着ぐるみが着たいなら、遊園地にでも行け。そして金を稼いでこい」

「そうね、私も秋庭君に賛成だわ」

尾田がため息を吐き、羽黒が俺の顔色を窺いおろおろとする中、桑田だけが俺に賛成票を投じてくれた。

ついでに冷たい一瞥を向けられれば、鈴木パンダはそれで怯むはずだった。けれど、鈴木パンダは怯むどころか一歩前に踏み出して、桑田にその着ぐるみの顔を近付ける。

「……美名人っち、いいの？　ぼくは彩波っちから頼まれて、アレを届けに来たんだよ？」

次の瞬間、ボタンのようなパンダの瞳に怪しい光が宿ったのは気のせいだと、俺は思いたかった。

「……アレ、用意出来たのね？」

その発言を受けて、逆に桑田は一瞬怯み、それからほんの少し唇を持ち上げて、怪しく笑んだ。それは今まで見たことのない類の笑い方で、悪いことにはよく働く俺の勘は、その時点で警報を鳴らし始めていた。

「アレはこの紙袋の中だけど、どうする？」

腕に下げていた大きめの紙袋を鈴木が見せつけるようにすれば、

「ありがたく、受け取るわ。パンダさんごゆっくりどうぞ」

桑田はなんと、鈴木パンダに軽く頭を下げてそれを受け取った。我が目を疑う光景だ。

「秋庭さん、尾田さん。アレというのは何でしょう？　も、もしかしてアレキサンダー大王の宝物でしょうかっ！」

俺と同様二人の――いまこの場にいない、叶野学園理事長子女、和彩波も数に入れるなら三人だが――企みを知らされていない様子の羽黒は、胸の前で手を組みながら、やや興奮した声を発する。その感情に呼応するように、羽黒の長い三つ編みがピンと伸びて見えるのは、相変わらず不思議な現象だ。

「いや、それはないから……アレからアレキサンダーって、相変わらずだね、羽黒さん」

今週末に臨時バザーを開くから。

を握り返す。

　そんな二人に大丈夫だと言うように目配せをし、意を決して俺――秋庭多加良――は口を開いた。

「その赤字は、本年度の予定になかった色々な行事に金がかかったからだな？　賞品付きのドッジボール大会とか、冬の肝試しとか」

　いまこの場にいない、その〝色々な行事〟の提案者を思い出して、俺の手は知らず拳を握っていた。

「ようするに、鈴木のせいだ」

　尾田の肯定を待たずに、俺が断定すれば、尾田は頷いた。

「八割はね。でも二割位は生徒会長を止められなかった僕達にも責任がある」

　俺達にも責任があると言う尾田に俺は反論を試みようと思ったが、その両手が俺以上に固く握りしめられているのを見て、声を飲み込んだ。

「だから……今週末に臨時バザーを開くから」

　それは提案ではなく、決定事項として伝えられた。

　そして、告げられた俺達は顔を見合わせ、それから同時に首を巡らせて、壁に掛けられたシンプルなカレンダーを見た。

「あの……バザーというのは楽しそうですが、あと四日しかありませんよ？」

　尾田の言葉を受けて、おそるおそる、半分桑田に隠れるようにしながら、羽黒が尋ねる。

「そんなことはわかっているよ。でもバザーはやるから。それと……生徒会も会場管理以外に模擬店をやるつもりだから、みんな協力よろしく」

　これから三月にかけて三年生を送る会だとか、卒業式といった行事が俺達を待ち受けていることは知っているはずなのに、尾田の答えに迷いは微塵もない。ただ恐ろしいばかりの気迫が声にも体にも満ちているだけで。

「けど、何の準備もしていないのに、間に合うかしら？」

「間に合わせるんだよ。僕達ここ数ヶ月で、かなりそういうの得意になったよね」

　念のため、という調子で桑田が問えば、尾田は更に鬼気迫った表情をそちらに向けて、桑田は凍り付き、その背中に羽黒は隠れた。

　本当に、尾田は会計としての迫力がついた。

「いや、でも、せめてもう一週間準備を……」

　それでも俺が食い下がろうとすれば、尾田は窓の外の凍てついた空気よりも冷たい一瞥をくれて――俺はこの場は沈黙するという、英邁な判断をした。

「じゃあ、臨時バザーは今週末に開催って事に決定だね」

　声こそ穏やかさを若干取り戻していたが、目は血走っていて、そんな尾田に、逆らえる者がいるはずもなく、こうして臨時バザー開催は決定した。

尾田の宣言から四日後。

　本来先頭に立ってキリキリ働くべき鈴木が、屋上で懐中電灯を振り回すという、いつも通りの奇行に出ていても、尾田の計画通り臨時バザーは開催の日を迎えた。

　会場となった体育館は開始から二時間が経ち、それなりに人で溢れていた。

「……意味が、わからない」

　だが、その一隅で俺は手の中にある物――中国服、いわゆるチャイナ服を見つめながら呟いていた。

「意味ならあるよ。これから〝茶店かのう〟は〝叶野茶館〟にチェンジするんだから」

　手の中のチャイナ服をじっと見つめる俺に、尾田は笑顔でそうのたまってくれた。

「ところでさ、パンダはどんな鳴き声なのか花南っちは知ってる？」

「パンダの鳴き声ですか？」

　そして、その脇では羽黒とパンダの着ぐるみが会話をしていた。一見平和な光景だが、俺の心を更に乱すパンダから、目を逸らした。

　そうして、自分がなぜ今、チャイナ服を手にしているのか、時系列に沿って、改めて記憶を遡ってみる。

　まず、午前九時。バザー開始と共に、叶野学園生徒会執行部による模擬店――〝茶店かのう〟は開店した。この店の企画準備は桑田がほぼ一人で行ったから、桑田の好みで喫茶店になったことには納得していた。

GAME PLAYERS

生徒会会長・鈴木　朔（すずき・はじめ）
その行動、その言動、全てが人間の常識を超越している。

生徒会副会長・秋庭多加良（あきば・たから）
会長になりたい、と心から強く思っている、ニヒルな切れ者。

生徒会書記・桑田美名人（くわた・みなと）
お茶が好きなクールビューティ。外見に似合わず武道の達人。

生徒会会計・尾田一哉（おだ・かずや）
繊細でマイペースだが、ツッコミの切れ味は生徒会一。

生徒会臨時採用・羽黒花南（はくろ・かなん）
霊感少女のわりに、日常の行動はハムスターのような愛くるしさ。

GAME MASTERS

かのう様
叶野市の土地神様。見た目は超キュート、しかしその実は超腹黒。

和　彩波（かのう・いろは）
叶野学園理事長の娘にして"かのう様"の憑坐。基本性質はハイテンション。

GAME RULE

叶野市には願いを強く持つ人が集まるという。なぜならば人々の願いを叶える存在"かのう様"がこの土地に住みついているから。しかしこの見た目はキュートな"かのう様"は、めちゃくちゃ腹黒。叶野市で唯一、願いを持たない人間・秋庭多加良を見つけたことで、彼にゲームを挑んできた。それは――100人の願い事を叶えること！

しかしそのゲームは、一筋縄ではいかないやっかいなゲームだったのだ!!

目を閉じたら、目の裏で星が光った。
だれかと一緒に見たいと思ったけど、だれにも見せられなかった。
わたしだけの星。キラキラ星。
どうしたら、みんなにも見せられるだろう。
この星の光を伝えられるだろう？
テレパシーなら伝わるかな？
心と心で伝えあえれば。
わたしの星をみんなの星にできるかな。

1

二月も半分以上消化したある日。

「このままじゃ、赤字だ」

叶野学園高校の生徒会会計を務める尾田一哉は告げた。

そして、生徒会室に居る全員――俺、桑田、羽黒――の顔を見渡していく。その双眸にいつもの穏やかな光は既に無く、真剣を通り越して気迫に満ちた眼差しに、俺達はまず姿勢を正し、それから息を詰めた。

「赤字、だよ？　僕はそんな事にならないように、しっかり予算を振り分けたはずなのに」

尾田は視線を俺達に据えたまま、苛立った声で話を続け、その間にも室内の空気は張りつめていく。

生徒会臨時採用の羽黒花南が普段とは違う尾田の様子に、困惑と警戒をないまぜにした表情を浮かべて、隣に座る書記の桑田美名人の腕に手を置けば、桑田も不安そうにその手

キュートなくせして腹黒な〝神様〟が仕掛けた超難関ゲーム！
今回のやっかい事の舞台はバザー会場内の叶野茶館らしいけど――。
話題騒然の『神様ゲーム』が、ザ・スニでPLAY ON!!
神様ゲーム
The God Game
ホッニノバステ
宮﨑柊羽
Miyazaki Syu
イラスト 七草
Nanakusa

書き終わった時、創作者として、小説家としての自分が、そこにチャレンジしていないのはおかしい、という気持ちになりました。

たとえば、『ロードス島戦記』第一巻で六英雄であるファーンとベルドが一騎打ちするシーン。その時点では、二人がそこに至るまでのエピソードや、大きさ、深さが描けていなかった。だから、そこに意味を与えたいという思いで、彼らの若き日を描く『ロードス島伝説』を書かざるをえなっかたんですね。

——シリーズを通して、書いていて楽しかったキャラクターをあげていただけますか。

大ニース、レイリア、ニースの一族。特に大ニースとウォートはドラマティックでしたね。魔術師と聖女という関係が、僕の中では一番ファンタジー的だったし、悲恋であったところが気に入っています。二人は、レイリアとスレインの関係の逆パターンなんですよ。スレインはレイリアを愛した時に、いろんな覚悟を背負い世俗的になる。でもウォートは不器用ゆえに大ニースを拒むんですが、これが実に魔術師的だと思います。僕自身が魔術師的なキャラクターだと思っているので、感情移入している面もあるかもしれません。

※連載だからこそ——

——それでは、最後に、毎号連載を楽しんできた本誌読者へ、ひとことお願いします。

書き下ろしの作業が滞っていた時期に、ザ・スニーカーに連載していくという決心をしたことで、試行錯誤の中から満足のいくものを書いてこれました。振り返ってみると、当初考えていた構成とは違った結果にはなりましたが、おかげで無事完結することも出来たと思っています。毎回毎回、あえて迫力を強調したり、シーンをいくつか端折ったりしましたが、そこで目指したダイナミックな展開は、連載だからこそのものだと思います。そのような連載を楽しんでくれたことに感謝しています。

また秋には文庫も最終巻を刊行することになるでしょうが、それはそれで楽しんでいただけると思っています。僕は、文庫と雑誌はまったく別のものだと考えていますので、文庫化の時に書き足すことはあっても、それは足りなかった部分を補完するということではなくて、文庫という形態に合わせた内容にしているつもりなので、是非それぞれのテイストを比較していただけたらと思います。

連載が完結した「新ロードス島戦記」だが、この秋には文庫最終巻『新ロードス島戦記6 終末の邪教（下）』の刊行が予定されている。連載で堂々たるフィナーレを迎えたスパークの物語に、文庫長編ならではの工夫をこらすべく、水野良の戦いは続く。ロードス、いまだ終わらず！

美樹本晴彦

長い間お疲れさまでした！ ロードスは…ちょっとひと休みですね（笑） 今後も期待しております!!

TVアニメ『ロードス島戦記〜英雄騎士伝〜』の放送開始
5月 小説『新ロードス島戦記 序章 暗黒の島の領主』【角川mini文庫】
8月 LD&ビデオ『ロードス島戦記〜英雄騎士伝〜』（99年4月まで9巻発売）【バンダイビジュアル】
9月 小説『新ロードス島戦記1 闇の森の魔獣』【スニーカー文庫】
コミックス『ロードス島戦記 ディードリット物語 上』（作画：よねやませつこ）【あすかコミックスDX】
12月 RPGガイドブック『ロードス島ワールドガイド』【富士見書房】
ゲームボーイカラー用ゲームソフト『ロードス島戦記』【TOMY】
コミックス『ロードス島戦記 ディードリット物語 下』（作画：よねやませつこ）【あすかコミックスDX】

1999年
4月 画集『ANAM 出渕裕ロードス島戦記画集』【角川書店】
5月 小説『新ロードス島戦記 序章 炎を継ぐ者』【スニーカー文庫】
コミックス『ようこそロードス島へ−3』（作画：百やしきれい）【カドカワコミックスAエキストラ】

2000年
1月 小説『ロードス島伝説 永遠の帰還者』
6月 ドリームキャスト用ゲームソフト『ロードス島戦記 邪神降臨』【角川書店】

2001年
4月 小説『新ロードス島戦記2 新生の魔帝国』【スニーカー文庫】
12月 小説『新ロードス島戦記3 黒翼の邪竜』【スニーカー文庫】

2002年
11月 小説『ロードス島伝説5 至高神の聖女』【スニーカー文庫】

2004年
11月 小説『新ロードス島戦記4 運命の魔船』【スニーカー文庫】

2005年
11月 小説『新ロードス島戦記5 終末の邪教（上）』【スニーカー文庫】

2006年
6月 「ザ・スニーカー」8月号 小説『新ロードス島戦記』完結

今回、彼らの物語がラストを迎えることで、『新ロードス島戦記』が完結したわけですが、それは、「ロードス」シリーズの完結とイコールというわけではないんです。ただ、『ロードス島戦記』を始めてから今まで、登場させたキャラクターについては、もう書き残したという思いがないので、その意味で、今回の最終回は、限りなく「ロードス」シリーズの完結といってもいいかもしれない。もちろん、これからでも、魅力的なキャラクターを核にすることができれば、新しい「ロードス」が生まれる可能性は否定できないけれど、現在のところそのアイデアはないですね。

――「ロードス」シリーズを構成した各作品をいま振り返ってみて、それぞれの位置づけを教えてください。

『ロードス島戦記』は、成長していく物語でした。ロードス島を舞台に、ひいては僕の中のファンタジー世界の中で、キャラクターが成長していく、キャラクターが成長すれば世界は変動し歴史が動く。書くにつれて成長するキャラクターに僕自身が引っ張られてできあがっていった作品だったと思います。

『戦記』が僕にとって書きたい作品だったとしたら、『ロードス島伝説』は書かねばならない作品だった。というのも、実は『戦記』は僕のアイデアの中では後発的なものなんですね。最初にTRPGの「ロードス島戦記」をつくった時、歴史的背景として『ロードス島伝説』の設定があったんです。そういう設定を前提としてTRPG「ロードス島戦記」を遊び、そこからインスパイアされて『ロードス島戦記』の小説を書くに至った。『戦記』を書いているあいだ、僕の頭の中には、『伝説』の人物や歴史設定はあったものの、彼らの物語がどのようなものなのか、明解な答えは無かったんです。だから『戦記』を

12月 小説『ロードス島戦記6 ロードスの聖騎士(上)』【スニーカー文庫】
PC版ゲーム『ロードス島戦記II 五色の魔竜』【ハミングバードソフト】

1993年
1月 カセットブック『ロードス島戦記5 開かれた森』【角川書店】
4月 小説『ロードス島戦記7 ロードスの聖騎士(下)』【スニーカー文庫】
12月 カセットブック『ロードス島戦記6 復讐の霧』【角川書店】

1994年
5月 『ロードス島戦記 ファリスの聖女I』(作画／山田章博)【ドラゴンコミックス】
9月 小説『ロードス島伝説 亡国の王子』【スニーカー文庫】
12月 PCエンジン用ゲームソフト『ロードス島戦記II』【ハドソン】

1995年
1月 CDブック『ロードス島戦記 風と炎の魔神』1巻発売(4月までに4巻を発売)【角川書店】
7月 小説『ハイエルフの森 ディードリット物語』【スニーカー文庫】
小説『黒衣の騎士』【単行本で発売後スニーカー文庫に】

1996年
7月 小説『ロードス島伝説2 天空の騎士』【スニーカー文庫】
11月 小説『ロードス島伝説 太陽の王子、月の姫』【角川ミニ文庫】

1997年
4月 小説『ロードス島伝説3 栄光の勇者』【スニーカー文庫】
7月 コミックス『ようこそロードス島へ! 1』(作画:百やしきれい)【カドカワコミックスAエキストラ】
12月 「ザ・スニーカー」2月号 小説「新ロードス島戦記」連載開始

1998年
1月 コミックス『ロードス島戦記 英雄騎士伝』(作画:夏元雅人 2000年までに6巻発売)【カドカワコミックスA】
3月 コミックス『ようこそロードス島へ! 2』(作画:百やしきれい)【カドカワコミックスAエキストラ】
4月 小説『ロードス島伝説4 伝説の英雄』【スニーカー文庫】
RPGリプレイ『ロードス島戦記～英雄騎士スパーク～』【角川ミニ文庫】
劇場版アニメ『ようこそロードス島へ!』公開

『ロードス島戦記』から20年、『新ロードス島戦記』の連載開始から8年。ついに最終回を書き終え、シリーズの幕を閉じた水野良に、今の心境と彼自身にとっての「ロードス」を語ってもらった。

――八年にわたる『新ロードス島戦記』の連載を終えた感想はいかがでしょう。

八年と聞いてまず驚きますね。そんなになりますか（笑）。こんなに長くなったのは、「ロードス」シリーズは、もともと書き下ろしで刊行していて連載のスタイルではなかったことが大きいと思います。スタートはザ・スニーカーですが、何度か中断しているはずです。載せていただいた作品については、全力投球したつもりなのですが、文庫にする際には一から作り直すということが何度かあって、そのたびに苦労しました。文庫では、シーンの迫力よりも全体の構成を大事にしていたいという思いがあったので、やはり書きづらかったんだと思います。

――では、今号の最終回につながる連載は、どういう経緯でスタートしたんでしょうか。

第三巻あたりで、僕の頭の中で物語の色々な可能性が浮かんできて、どれにするか決定できずにいた時期があったんですよ。そんな時に編集部から「連載再開しましょう」という提案がありました。かなり迷ったものの、新連載の気持ちでやり始めたら、それで僕自身も吹っ切れた。そうして毎回の連載で確定した物語が本当にベストかどうかはわからないけど、そのおかげで文章にドライブ感が出たり、アイデアが膨らんだりして、「ロードス」を先に進めることができたんです。

＊書き残したという思いはない

――新ロードス島戦記の完結は「ロードス」シリーズ全体の完結なのでしょうか？

「ロードス」シリーズ全体の完結がどこにあるか？　って問題になりますけど、「フォーセリア世界が終るとき」ということではないですよね？（笑）　僕はそれぞれの作品で核になっているキャラクターのラストが完結と考えているんです。『ロードス島戦記』ではパーンとディードリットが核となって、『戦記』の中で彼らの物語は完結した。でも、スパークやニース、ギャラックたちは、『戦記』だけでは書ききれていないという思いがあって、それが『新ロードス島戦記』になったんです。

『新ロードス島戦記』完結記念インタビュー

水野良、20年目のロードスを語る――

聞き手・構成／スニーカー編集部
イラスト／美樹本晴彦

ロードスの軌跡

20年前、月刊「コンプティーク」にTRPGのリプレイとして掲載され、初めて世に出たロードス。その後、小説、コミック、ゲーム、アニメと、様々なメディアに展開していった。この年表ではその軌跡を追ってみた。

1986年
8月　月刊「コンプティーク」9月号にてRPG誌上リプレイ「ロードス島戦記　灰色の魔女」が掲載（87年4月号まで8回連載）

1988年
4月　小説『ロードス島戦記　灰色の魔女』【スニーカー文庫】
10月　PC版ゲーム『ロードス島戦記　灰色の魔女』【ハミングバードソフト】

1989年
2月　小説『ロードス島戦記2　炎の魔神』【スニーカー文庫】
5月　カセットブック『ロードス島戦記　眩惑の魔石』【角川書店】
8月　ルールブック『ロードス島戦記　コンパニオン』（著：高山浩／グループSNE1994年までに3冊発売）【角川書店】
10月　カセットブック『ロードス島戦記2　宿命の魔術師』【角川書店】
12月　RPGリプレイ『ロードス島戦記Ⅰ』【スニーカー・G文庫】

1990年
1月　PC版ゲーム『ロードス島戦記福神漬』（1992年までに3巻発売）【ハミングバードソフト】
2月　小説『ロードス島戦記3　火竜山の魔竜（上）』【スニーカー文庫】
6月　OVAシリーズ『ロードス島戦記1』（91年11月まで13巻を発売）【角川書店】
　　カセットブック『ロードス島戦記3　魔獣の森』【角川書店】
7月　小説『ロードス島戦記4　火竜山の魔竜（下）』【スニーカー文庫】
10月　RPGリプレイ『ロードス島戦記Ⅱ』【スニーカー・G文庫】

1991年
3月　小説『ロードス島戦記5　王たちの聖戦』【スニーカー文庫】
8月　RPGリプレイ『ロードス島戦記Ⅲ』【スニーカー・G文庫】
　　カセットブック『ロードス島戦記4　妖精界からの旅人』【角川書店】

ゲームやアニメにどっぷり浸かった高校生活でした。誇張でも何でもなく、この本がなければ、今の私はなかったでしょう。
そんな私が、今こうして、同業者としてシリーズ完結のお祝いをお贈りできる――これ以上ない光栄です。『ロードス島戦記』シリーズ完結、本当におめでとうございます。

谷川流

【作家。代表作『涼宮ハルヒ』シリーズ（角川スニーカー文庫）ほか】

ロードス島戦記という名称に初めて触れたのは、あれは僕がぺっぽこい学生時代を過ごしている時だったでしょうか。その時には、まさか同じ誌面の末席に加えていただけることがあろうとは想像だにするはずもなく、と言いますか水野様のおかげで僕はこうしてここにいるわけですが、それを語り始めたらキリがなくなりますので、ひとまずは『新ロードス島戦記』完結お疲れ様でした。また次なるゴールに向けて走り出してください。不肖なる我が身も、その後ろ姿を目指しつつ、必死こいてついていきますから一っ。また飲みにつれてってください。

築地俊彦

【作家。代表作『まぶらほ』シリーズ（富士見ファンタジア文庫）ほか】

ロードス島戦記完結、おめでとうございます。思い起こせば学生時代、ロードス島戦記のリプレイを読むためだけにコンプティークを買おうと、毎月発売日には自転車で本屋に直行していました。どきどきしながら読むページは、出渕先生のイラストと共に光り輝いており、読後はいつも深いため息をついていました。あれからおよそ二十年、業界の人間となって完結の場に立ち会えるとは感無量です。これからも素晴らしい小説を発表し続けてください。

友野詳

【作家。代表作『ルナル・サーガ』シリーズ（角川スニーカー文庫）ほか】

ロードスの、最初のリプレイがコンプティークに連載されたのは、まだ友野が平凡な街のGMだったころ。リプレイという手法に、ずいぶんと驚かされたのを覚えています。まさか数年後に『ロードス島戦記コンパニオン2』で『用語辞典』という名のギャグページを担当するとは夢にも思いませんでした。そのページで、友野が書いたギャグより、故・中野豪先生のギャグカットのほうがはるかに面白くてヘコんだのも、もう十五年も前の思い出になります。
作り手として、読者として、遊び手として、ロードスは常に目標であり、喜びであり、素敵なオモチャでした（いや完結しても現在形ですが）。水野さん、本当にお疲れさまでした。十五年前のギャグは古くなったので、もっぺん、どっかでめいっぱい茶化していいっすか？（笑）

安井健太郎

【作家。代表作『ラグナロク』シリーズ（角川スニーカー文庫）】

ロードス島戦記完結、おめでとうございます。そして、おつかれさまでした。ロードス島戦記の第一巻を手に取ったとき、僕はまだ中学生でしたが、それは、和製のファンタジーに触れた最初の体験でもありました。あのときの驚きと興奮は、忘れられるものではありません。その完結にこういった形で関われるということは、言葉にできないほど光栄です。これほど長い間、第一線で売れ続けるシリーズは希有な存在でありますが、それを成し遂げた先生の努力と熱意にただただ感嘆と賞賛の念を感じるばかりです。今後も、その背中を確かな指針としていきたいと思います。

渡瀬草一郎

【作家。代表作『陰陽ノ京』『空ノ鐘の響く惑星で』シリーズ（電撃文庫）ほか】

まだ中学生の頃。電車通学をしていた僕の鞄には、いつも文庫本が入っていました。特にロードスは、繰り返し繰り返し、それこそ飽きることなく何度も読み返した小説です。
頁をめくるたびに、パーンとディードの進展にニヤニヤしつつ、スレインの大人びた言動に憧れ、黒騎士の強さにぞくぞくしながら、ピロテース様（様づけは基本）の色香に惑い――当時、ただの一読者だった僕は、いつの間にか物を書く側にまわってしまいましたが、そんな今でも、ロードスを読む時には、あの頃と同じ一人の〝読者〟に戻ってしまいます。本当に楽しい、素晴らしい時間を貰いました。
――完結、おめでとうございます。本音を言うと――少しだけ、寂しいです。

（敬称略、掲載は五十音順）

山田章博

【漫画家・イラストレーター。『ロードス島伝説』のイラストを担当し、コミックス『ロードス島戦記　ファリスの聖女』（角川書店）を手がける】

永きに亘るご執筆、お疲れさまでした。創造者が筆を擱いた後もまだフォーセリアの歴史は続いていくのでしょうが、縁あってロードス島の歴史の一端を記録する栄に浴した者からは、心よりの賛辞と労いを。
ロードスの偉大な最初の七日間は終わりました。造り主の生み出した数多の自然や呼吸や人生から成るこの島は、これからも頁を開く者の心の中にその版図を拡げていく事でしょう。

←次ページから水野良の完結記念インタビュー。20年間の想いを語る。

のときでした。
　ちょうどその頃、織田信長や太閤記などの小説を読んで、戦記って面白いなぁ、もっと他にこういう小説ないかなぁ？と、書店をふらふらしていたときに、本棚に『ロードス島戦記』の文字を見つけて。お、戦記って書いてある！　じゃあこれ戦記ものだな！　と購入して帰って読んだら、魔法が出てきたり、イラストがあったりと、いままで読んできた小説とはまるで違うことにびっくりし、しかしその面白さに、すぐに夢中になりました。
　その、僕がまだ小5のガキのときにはすでに何冊も出ていた大長編が完結するとのことで。
　それは二十数年に渡る大長編なわけで。なんか、こう、物凄いです。だって、僕の年齢分ぐらいの長期に亘るシリーズなんです。もう、あまりに凄い偉業なので、僕なんかが軽々しく言葉で言えることはなにもないのですが。
　でも、それではなんなので、一言。
　本当に素晴らしい作品をこの世に残してくれて、ありがとうございます。
　そして、お疲れ様でした。

　って、結局、一言どころじゃすまなかった……

神坂一

【作家。代表作『スレイヤーズ』（富士見ファンタジア文庫）、『日帰りクエスト』（角川スニーカー文庫）ほか。水野良氏とはプライベートでの親交が深い】

　ディードリットが好きです。でもリーフはもっと好きです。
　ということで水野先生、新ロードス完結おめでとうございます。
　とはいえ、これで全てが終わったのではないわけです。
　ロードスという物語は、呪われた島とも呼ばれた地に生きる者たちを描く、いくつもの伝承歌。
　登場人物それぞれが選んだ生き方の中で、ある者は英雄と謳われ、ある者は邪悪と誹られ、またある者は灰色と呼ばれ。だがその誰もがそれぞれの色で煌めいていて。
　今。
　ロードスの歴史を紡ぐ物語の一つが完結します。
　けれど一つの物語が終わってもロードスという世界は終わらず、人々は在り続け、いつの日か、新たな物語を織り成すでしょう。
　その時まで、島はしばし眠りにつくだけのこと。
　水野先生、ひとまずお疲れさまでした。
　次の物語を楽しみに待っております。

賀東招二

【作家。代表作『フルメタル・パニック！』シリーズ（富士見ファンタジア文庫）ほか】

　この度は『新ロードス戦記』の完結、まことにおめでとうございます。水野先生とは日ごろからお酒関係で親しくさせていただいているのですが、たまにロードスの話題を振ったりすると『こういう席ではそんな話したくないよー！』なんて顔をされながらも、けっこう熱い思いがビシバシと伝わるお話しを聞けたりして、なんというのか一ファンとしては役得です（うらやましいでしょう！）
　長大なシリーズを完結させるのには、すさまじいエネルギーと読者への誠実な心が必要だと思います。若輩者の私も現在、身をもってその困難を思い知らされている最中です。それをどーんとやってのけてしまう水野先生。そこにしびれる、あこがれる！
　とにかくお疲れ様でした！

上遠野浩平

【作家。代表作『ブギーポップ』シリーズ（電撃文庫）、『殺竜事件』（講談社ノベルス）ほか】

　ロードスの長い長い旅路は、ちょうどかの指輪物語のフロドの行程と同様のものであったように思います。数々の困難があり、別れもあり、変化もありました。そして苦難の旅の果てに安息に帰ろうとしても、その旅の深い影響は決して消し去れず、もはや二度と旅に出る以前の穏やかな世界に戻ることは叶わないのです。我々も同じように、ロードス以前の小説界にはもはや戻れません。それを経た後の、この時間の先の何処かへと旅立っていくしかないのでしょう。かの呪われた島の、その遠く眩しくも、どこか懐かしい夢の欠片を背負いながら。

三田誠

【作家。代表作『レンタルマギカ』シリーズ（角川スニーカー文庫）ほか】

　実は、ロードスとの出会いは、TRPG『ロードス島コンパニオン』だったりします。精霊界に戯れるディードリット、恐るべき魔法の炎を操るカーラ……美麗なカラーページの数々に、これは自分がいままで知っている物語とは違うぞ、とゾクゾクしたものです。
　そう、中学生の僕は、何よりもロードスに、新しい物語を見たのです。そして、当時最も新しかった物語が、新ロードスとなる過程で古典の風格さえ備えていく――それは正しく、神話の創造です。
　この、最も新しい神話の完結へ立ち会えたことを、感謝します。

時雨沢恵一

【作家。代表作『キノの旅』『アリソン』『リリアとトレイズ』シリーズ（電撃文庫）ほか】

　思い起こせば私が高校生の時、最初に読んだライトノベル（当時はそのような言葉はありませんでしたが）が『ロードス島戦記』一巻でした。以後シリーズを追いかけ、リプレイ掲載誌を買い続けました。それがきっかけで、

れに触発されて海外ファンタジーを読みあさったり、果ては自作のTRPGを仲間と楽しんだり、そんな懐かしい記憶の中心にある小説です。
長年にわたる創作、お疲れ様でした。
そして、ありがとうございました。

有川浩

【作家。代表作『空の中』『海の底』『図書館戦争』(メディアワークス) ほか】

あの日、全ての少年たちの伝説だった。

——そんな一大叙事詩のご完結に心からお祝いを申し上げます。

あの頃、少年たちの情熱を分けてほしくて、ルールもうろ覚えでテーブルトークにまで参加していた女の子もたくさんいました。私も漏れなくその一人であります。八面ダイスとか十面ダイスとかそんな謎のサイコロの存在を知ったのもこの頃です。

「百面ダイスってこれ単なるボールちゃうん!?」みたいな？

願わくば、ロードスに続く「伝説」で日本の空想世界を新たに席巻していただけますことを心よりお祈り申し上げております。

出渕裕

【イラスト・アニメなど幅広く活躍するクリエイター。「ロードス島戦記」シリーズのイラストを担当。「機動警察パトレイバー」などのメカデザインをつとめ、TVアニメ「ラーゼフォン」では監督をつとめる】

最初はコンプティーク誌上でのTRPGのリプレイの設定とイラストでした。ロードス島は全てここから始まっているんですよね。僕自身はTRPGのゲームはやらなかったのですが、スタンダードでオーソドックスなファンタジービジュアル、要するに指輪物語をやりたいんだな、と。当時まだ主流ではなかったハイファンタジーの入門編としてのビジュアルを心がけました。ブライアン・フロウドやアラン・リーといったファンタジー画家の持つエッセンスをアニメ的な手法でスタンダードに再構築する、そういった方法論です。結果コスチュームではなくキャラクターとして「宇宙戦艦ヤマト」のキャラクターに近くなった事に気付いて、要するに自分のスタンダードは「ヤマト」だったんだ、って(笑)。

ロードスの仕事を振り返ると、とにかく「ディードリットを描いてくれ」という依頼が多かったのを思い出します。とにかくディードリットを!!　みたいなね(笑)。その結果としてディードリットはロードスのキービジュアルにまでなってくれたんだとは思います。

とにかく長かったですね。僕が抜けてからもかなり経ってるし、一度完結した形でもあったので、水野君も続けていくのに苦労したのではないかと思います。本当に御苦労さまでした。

で、本当に終わったんですよね？

安田均

【㈱グループSNE代表取締役社長。同社のメンバーを率いて、「ソード・ワールドRPG」等のゲーム企画を立ち上げる。水野良氏は、グループSNE在籍中に「ロードス島戦記」の執筆をスタートさせた】

祝　ロードス・サイクル完結

今回、ついに「新ロードス島戦記」が完結した——いや、それをいうなら、戦記、伝説も踏まえて、ひとつの「ロードス・サイクル」が大団円を迎えたといってもいいだろう。

思えば早いもので、最初に「ロードス島戦記」のRPGリプレイが始まったのが一九八六年。もう二十年ちょうどが過ぎたわけだ。

しかし「ロードス島戦記」はぼくにとって、永遠の〈青春の書〉というイメージが強いのか、そうした始まりの時期——つまりリプレイ全三部や最初の長編小説群、その後のアニメなど——は、つい昨日のことのように記憶にこびりついている。

特に、この「新ロードス島戦記」のキャラクターたちは、当時水野良を中心にRPGリプリイ第三部を始めるに当たって、結成されたばかりのグループSNE立ち上げメンバーほぼ全員で取り組んだので、愛着もひとしおだ。そして今回、そこから作者のストーリーがどんどん発展して、見事な小説となっていくのを読むのは、とてもぜいたくな楽しみでもあった。水野良にはすばらしい作品をありがとうと感謝したいし、ほんとうに二十年をかけて、この一大ファンタジー叙事詩を完結させたのは偉業だと思う。

最後にトリビアクイズを一つ。後半ささいなキャラの名前のいくつかには、ファンタジーとはまたちがった楽しみも含まれている。ぼくは四つ見つけたがなんだかおわかりだろうか？

冲方丁

【作家。代表作『マルドゥック・スクランブル』(早川書房) ほか】

実は最初の出会いは『ロードス島戦記』の三&四巻シューティングスターとの決死の戦い。諦めないパーンやカシューたちに子供心にのめりこみました。今でもあの感動を思い出すと、けっこうやる気になります。このロードスというシリーズは水野先生にとってまさにシューティングスターだったのではないでしょうか。苦闘によって得た宝を読者に分け与えて下さったことを感謝し、心よりお祝い申し上げます。おつかれしたーっ!!

鏡貴也

【作家。代表作『伝説の勇者の伝説』シリーズ(富士見ファンタジア文庫) ほか】

僕がロードスに出会ったのは、小5

『新ロードス島戦記』完結記念 祝辞

ロードスに祝福あれ——

『新ロードス島戦記』が今号ついに最終回を迎え、同時に「ロードス」シリーズは、ひとまずの完結をみることになった。この世に登場してから20年。その永く、壮大な物語の完結を祝して、水野良と親交の深いクリエイターや、現在のライトノベル界で活躍する作家からお祝いの言葉が届いた。彼らの言葉は、同じく「ロードス」に魅せられた君達の想いと重なるに違いない。

あかほりさとる

【作家、プロデューサー、漫画原作など。代表作「MAZE☆爆裂時空」(角川スニーカー文庫) ほか】

えっ? 終わっちゃうの? そりゃ、もったいない。駄目駄目。今からでも遅くないから考え直しなよ、水野さん。ロードスのなにがすごいって、未だに売れ続けていること。第一巻なんか一〇〇万部超えてんだよ。そんなライトノベルズ他にないって。ったく、オイラのような金欲作家からすればうらやましいことこの上ない。そんな金のなる木を手放さなくてもいいんじゃねえ。っていうか、続けろ! ファンのためというよりも、オイラのために! でないと、今度から飲み屋でたかれなくなるじゃんか。

秋田禎信

【作家。代表作「シャンク!!」シリーズ(角川スニーカー文庫)、「魔術士オーフェン」シリーズ(富士見ファンタジア文庫) ほか】

まずは完結、おめでとうございます!

ゲームや映像、今では様々な世界に根を広げたロードス島戦記、わたしが最初に出会ったのは月刊コンプティークのRPGリプレイ、スレイン・スターシーカーがドラゴンに火の球を投げた場面でした。その時、わたしもこの物語の歴史に巻き込まれた名もないひとりになったわけです。

それから約二十年。そろそろ本当に時代と呼べる年月をロードス島の歴史を覗きながら過ごしてきて、終という文字に出会うことがなんだか奇妙ですらあります。

本棚に手を伸ばせばいつでも触れられる歴史、冒険、物語。価値あるものをとどけてくださった水野先生に感謝! なのです。

あざの耕平

【作家。代表作「BLACK BLOOD BROTHERS」シリーズ(富士見ファンタジア文庫) ほか】

『ロードス島戦記』完結、おめでとうございます!

思えば、ジャンプでもドラクエでもなく「小説」の話題でクラスの友人と盛り上がったのは、あとにも先にも『ロードス島戦記』だけでした。多彩なキャラクターに魅せられ、リアリティのある世界観に惹かれ、最後には物語の歴史にまで。ファンタジー小説の楽しみ方としては、理想的な形を提示してくれた作品だったと思います。こ

イラスト/出渕裕

スパークが問い返してくる。
「あなたが追いかけてきてくれて、嬉しいと思っているわたしがいるから……。最愛の人じゃなかったら、たぶん、拒絶していると思うから」
「そういうものなのか？」
スパークは焦ったような表情を見せた。
「そういうものよ。世界で二人だけになったとき、側にいて欲しいと思うのは、女にとって理想の人だから」
ニースはそう言うと楽しそうに笑った。
「あれだけの覚悟をして、もしも君に拒絶されていたら、オレは世界でもっとも不幸な男になるところだった……」
「十分、不幸だわ。わたしを選んでなかったら、あなたはもっと幸せになれたと思うもの」
こうして終末の時へと落ちてゆくこともなかった。
ニースにとってこれは、自分の運命だったかもしれないが、スパークにとってはそうではない。
「フィオニスも、他の転生者たちも、亡者の女王と出会っていなければ、違う人生があったと思う……」
「ライナが言っていたが、男の人生を狂わせるというのは、女の誉れなんだそうだ……」
そう言ったあと、わたしには無理だわ、と彼女はため息まじりに続けたものだが。
そのライナは、夫、ギャラックとともに逝った。
彼らは、スパークのこの選択をいったいどう思うだろうか？
「亡者の女王は誰よりも自由で奔放で、だから男たちは彼女を崇拝した……」
ニースはつぶやいた。
「生まれ変わったわたしには、とてもできそうにないけど……」
「そこまでなられても困る。オレは不器用なんだから」
スパークはあわてて言った。
「心配しなくても、ここには、もうふたりしかいないわ……」
ニースは妖艶な笑みを浮かべると、スパークとふたたび唇を重ねる。
心も身体も、彼を求めていた。身に着けている黒い衣服を脱ぎ捨てようと手をかける。
しかし——
「嫁入り前の娘が、はしたないですよ」
突然、のんびりとした声が響いた。
聞き慣れた声だった。
ニースは驚き、同時にひどい羞恥を覚えた。
「お父さま……」
声のほうを振り返ると、すぐ近くに父スレインが浮かんでいた。
隣には、母レイリアの姿もある。
「お母さま……」
どうしてここに、と続けようとしたが声にはならなかった。
「あなたがどこにいるかを突き止めるために、あれから、いろいろと手を尽くしたのですよ。幸い、あなたがマーファの聖印を持っていてくれたので……」
それを手がかりにして、瞬間移動の呪文でやってきたのだと、スレインは得意そうに説明した。
「帰りますよ、わたしたちの小さなニース」
レイリアが優しく微笑んだ。
「もうすぐ、わたしたちのものじゃなくなるというのがねぇ……」
スレインは不満そうに言った。
「父親というものは娘を幸せにしてくれる男と一緒になってほしいものなのですが、マーモの失踪王と噂される男が相手では……」
「マーモの失踪王？」
スパークが怪訝そうな顔をする。
「どういうことなんですか、スレイン師？」
「どうもこうも、あなたが娘のあとを追っていったものだから、わたしが摂政としてマーモ王国をまとめるしかなかったのですよ。ロードスの騎士パーンが、スパークが帰還するまでという条件で、マーモ王国の騎士団長を引き受けてくれたので助かりました。あなたがどういう国を目指していたかは、魔獣使いのエレーナ、薬草師のラーフェンたちに教わったのですが、いやはや無茶な理想をたててくれたものです」
スレインはため息まじりに首を横に振る。
「マーファ神殿の司祭は、教団に復帰したレイリアが務めています。終末の門が消え、カーディスも力の源を断たれました。この世界には、いまだ女神の信者もいるでしょうから、油断することはできませんが、もはや脅威となることはないでしょう」
「オレたちがいないあいだに、何年が過ぎたのですか？」
「半年ほどですよ。この世界は時空の狭間にある。わたしたちの時間が、あなたがたの時間となります」
そう言うと、スレインは妻である女性にうなずきかけた。
「慈悲深き大地母神よ……」
心得たように、レイリアがマーファに祈りを唱えはじめる。
そして帰還の奇跡が完成した——

ロードスという名の島がある。
呪われた島と、かつては呼ばれた。
そう呼ぶ者は、もはや誰もいない。
ただひとつの例外は、ロードス南東部に位置する暗黒の島マーモである。
そこは、終末より帰還した国王と亡者の女王のふたりが治める邪悪な王国であると、人々は恐れつづけた。
だが、ふたりの治世のあいだこそが、ロードスにおいて、もっとも平和な時代であったと、後世の人々からは評されている。
ひとつの戦もなく、魔物の跳梁も抑えられていたゆえに……

end

次のページより、新ロードス島戦記完結特集！

そんな苦しさはなかった。深い安らぎに包まれるような感覚だった。それでも、その安らぎのなかで、自らの魂も消えていってしまいそうな気がした。
　だから、自分の手を握り、懸命に呼びかけてくれる若い騎士の声に意識を集中し、ニースは自らの魂を守った。
　救いを求めるように、ニースはその若者を振り返る。
　スパークは十歩ほどのところで立ち止まったまま、じっとこちらを見つめていた。
「ニース……」
　静かな声で呼びかけてくる。
「君が何をやろうとしているのか、オレは完全に理解していないかもしれない。だが、それが君の望むことなら、オレは見届けるしかないと思う」
　苦しそうな、しかし、決意のこもった声だった。
「スパーク、わたしに覚悟をさせてください……」
　ニースは訴えた。
「カーディスを降臨させるだけの覚悟を！　亡者の女王として滅びる覚悟を!!」
「終末へ帰れ！　亡者の女王ニース!!」
　スパークは、彼女が望んでいる言葉を叫んだ。
「ありがとう、スパーク……」
　ニースは微笑んだ。
　迷いは、完全に消えた。
　最後に必要だったのは、自らの命を捨て去る覚悟だったのだ。
　そして終末の門へと向き直る。
「破壊の女神よ！　我が身を生贄に捧げましょう。我が身に降臨せよ！　そして終末へと続く門を壊したまえ！」
　両手を上にあげ、高らかに叫んだ。そのままの姿勢で、ゆっくりと終末の門へと倒れこんでゆく。
　その瞬間、破壊の女神の冷酷な魂が近づいてくるのを意識した。
　ニースはすべてをカーディスに委ねようと思った。
　抵抗することはない。
　肉体は終末の時へと落ちてゆくだろう。だが、自分の魂の行き場は、もはやどこにもないのだから……
（微塵の欠片となり、砕け散ってゆけばいい）
　ニースは思った。
　そしてその通りに、意識が打ち砕かれてゆく。
　そのときだった。
「ニース！」
　すぐ近くで、誰かが呼びかける声が聞こえてきた。
「手を伸ばせ!!」
　その声に、ニースの身体は反射的に応じていた。
　右手が熱いものに包みこまれる。
　カーディスが彼女が願った破壊を実行しているのを心の片隅で意識しながら、砕けつつあった魂の欠片がふたたび結晶化してゆくような感覚を覚えた。
　そして、どれだけの時間が経っただろう。
　ニースの身体は虚空をゆったりと落ちていた。
（終末の時へと向かっているんだわ）
　ニースはそう悟った。
　そして背後から誰かが自分を抱きしめているのに気がついた。
　あわてて身を離し、向き直る。
　そこにいたのは、マーモ公王である若者だった。
「スパーク……」
　ニースは言葉を失った。
　涙が溢れでてくる。
「どうして？　あなたには、あの世界でやるべきことが……」
「オレは、ひとりの少女を命をかけて守ると誓った。その誓いは、マーモの公王になるよりも先だったから……」
　それを果たしただけだ、とスパークはそう答えると、ニースを力強く抱きしめる。
　娘は若者の胸に顔を埋めると、しばらくのあいだ涙を流しつづけた。
　そして顔をあげ、唇を重ねる。
　それが終わり、
「オレたちは、終末へと落ちているんだろ？」
　と、スパークは訊ねた。
「そうよ」
　ニースはかすれた声で答えた。
「いつ、着くんだろう？」
「分からないわ。わたしたちは今、時空を越えているの。時間感覚は無意味なものだと思う。一瞬と永遠でさえ、ここでは混じりあう……」
「オレたちの気持ちしだいなのかもしれないな。なら、飽きるまでこのままふたりで落ちてゆくのも悪くない。そして世界の終末を見届けよう……」
「あなたが望むなら、終末さえ越えてもいいけれど……」
　ニースは悪戯っぽく笑った。
「亡者の女王は、葬ったんじゃなかったのか？」
「わたしは、わたしよ。魂はひとつで、それは不変なの。わたしはナニールであり、ニースでもある。そしてあなたの妃になることを選び、最後の人生をともに歩む決意だった。こんなことになってしまったけど……後悔はしていない？」
「あの世界では、後悔することと果たせなかったことはいろいろある。だけど今、ここにいなかったら、もっと後悔していただろうと思う。転生者フィオニスに斬られ、死の淵から目覚めたとき、君を奪われたことを知り、オレは気が狂いそうだった」
「いろいろなものに縛られていたから気づかなかったけど、わたしたちは、きっと、思っていたより、愛しあっていたのかもしれない……」
　ニースはそう言うと、スパークの胸に頬を押し当てた。心臓の鼓動は感じない。それは時を刻むものだからだろう。
「どうして、そう思うんだ？」

「それには及ばない。あなたは本当にいるべき場所へ、終末へと旅立ちなさい……」

「次の世界で、待っているぞ。おまえをふたたびこの手で抱くことを夢見て……」

そう言い残すと、フィオニスはその場に倒れた。

最後に一言、なにごとかをつぶやいた。

その瞬間、ニースの背後で、終末の門が胎動するような動きを見せた。

新たな終末の魔物がやってくる予感を覚える。フィオニスという恐るべき転生者が、最後に呼び寄せたものだ。

（もう猶予はない……）

今こそ、亡者の女王にもどるべきときだと、ニースは思った。

「破壊の女神カーディスよ。汝が不肖の娘に、今一度その力を！」

そして高らかに叫ぶ。

「ニース！　やめるんだ！！」

スパークはあわてて、彼女のもとへと駆け寄ってゆく。

「それ以上、来ないで！　世界を破滅から救うには、もう、こうするしかないの！」

「どうするつもりなんだ？」

「見ていれば、分かるわ……」

ニースはスパークの視線から逃れるように顔を伏せる。

「ナニールは、破壊の女神を復活させるひとつの扉として生を受けた。しかし、生贄となる運命を拒んだ。滅びるべきは、自分以外のすべてであると……。そして彼女は、亡者の女王となった」

そして覚悟を決めたように顔をあげ、スパークを見つめる。

「わたしが選ぶ運命は、その逆です」

ニースは言うと、なかば地面に埋もれた巨大な女神像に視線を送った。

強く、強く破壊を願う。

「女神よ、この終末の門を破壊したまえ！」

ニースは両手を広げ、女神に呼びかけた。

終末の門は、この世界に属するものでは、たとえ神々でさえ、破壊することはできない。

しかし、破壊の女神カーディスだけは違う。それは次なる世界に属するものだから。そしてカーディスは破壊する対象を選ぶことはない。

すべてを壊し、無に帰す。

転生者サーキスこそが、もっとも忠実なカーディスの従僕だったと、今更ながら思う。

ニースはアルド・ノーバをこの手で殺めたときのことを、脳裏に何度も思い描く。

亡者の女王が殺めた多くの命も思いだす。

カーディスの声は何度も聞いた。女神の魂に呼びかけ、生贄に降臨させたことも数えきれぬほどある。

「今、一度……」

ニースは願う。

「わたしに力を……」

カーディスの亡骸ともいえる石像に向かい、祈りを捧げつづける。

「いったい、どういうことなんだ？」

それまで無言でなりゆきを見守っていたパーンが、我慢しきれなくなったようにスレインに訊ねた。

「見ての通り、聞いての通りですよ。彼女は破壊の女神カーディスを自らに降臨させ、奇跡を起こそうとしているのです……」

「そんなことをさせていいのか？」

「それが分からないから、わたしも困っているのですよ。間違いなく言えるのは、娘は今、命をかけているということです」

「世界を救うためか？」

「結果として、そうなるでしょう。しかし、彼女が望んでいるのは純粋な破壊です。そうでなくては、カーディス神は力を貸してくれませんから……」

スレインは苦悩の表情だった。

「あなた、門の様子が……」

レイリアが注意を促す。

門が脈動し、噴きだす瘴気が激しくなっている。

「終末の魔物が、やってくるのかもしれませんね。とてつもない力を持った……」

スレインが喘ぐように言う。

世界の終末はたった今、すぐそこから始まろうとしているのかもしれない。

その予感に全身が震える。

「なんとか、できないのかしら？」

ディードリットがパーンを見つめた。

「無理だろうな……」

パーンはゆっくりと首を横に振った。

「オレたちにできるのは、あの門から現れるものと戦うことぐらいだ。命が尽きるまで、な」

「そう……」

ディードリットはうなずいた。

ハイエルフには、永遠の命が与えられている。だが、それとて世界の終末を越えられるものではない。

今がそのときなのかもしれない、とふと思った。

（でも、あなたと一緒なら、それほど悪くはないのかもしれない）

ディードリットは、心のなかでそうつぶやいた。

（もう時間がない……）

ニースは背後から迫りつつある気配に身が震えるのを抑えることができなかった。

破壊の女神の意志は、先刻より捉らえている。

だが、それが降臨してくる気配はない。

かつては、必死に拒んでも、容赦なく身体と心を蹂躙したというのに……

あのときは、自らの魂が砕けないよう、自我を保つのに必死だった。

女神マーファの魂を受け入れたときは、

「小癪な！」
怒りの声を転生者はあげた。
スパークとパーンは目線で合図をかわすと、左右に分かれ、相手との間合いを取った。
「……雷の戒めを！」
「……石の飛礫を！」
スレイン、ディードリットが古代語魔法と精霊魔法の呪文を唱える。
紫電の網が転生者を包みこみ、火花が散り、白煙が立ちのぼる。
そして大地から大小の石が飛礫となって、フィオニスに襲いかかっていった。
そのあいだに、レイリアがスパークの側により、治癒呪文を唱えて、傷を塞いだ。
「さすがに、ひとりでは無理か……」
フィオニスは紫電の網が消えるのをじっと待ったあと、自嘲の笑みをもらす。
スパークは油断なく剣と盾とを構える。
相手は隙だらけのように見えるが、攻撃を誘っているのかもしれない。
「今回は、オレの負けのようだな……」
フィオニスがスパークを振り返る。
「終末の魔物も、亡者どもも、そして他の転生者たちも皆、滅ぼした。最後はおまえだ」
「それは違うな……」
スパークの言葉に、転生者はくくっと忍び笑いをもらす。
「どういうことだ？」
目を細め、フィオニスを睨みつける。
「最後に滅びるのは、わたしではない。この世界だよ。貴様たちは今、世界の終末に立ち会っているのだ……」
「戯れ言を！」
スパークは怒りの声をあげた。
「戯れ言ではないわ！」
それまでずっと無言で、戦いを見守っていたニースが、ようやく口を開いた。
スパークは視線だけを彼女に向ける。
「フィオニスの言うことは本当よ。終末の門は、今や完全に開きつつある。時空を超えて、魔物はいくらでもこの世界にやってくる。破壊の女神カーディスに匹敵するようなものが、あるいは終末の巨人そのものが、いつ姿を見せてもおかしくはない……」
「そんなこと、信じられるものか！」
スパークは大声をあげた。
「信じる信じないの問題ではないわ！」
ニースも激しく言い返す。
「そういうことだよ」
勝ち誇ったように、フィオニスは笑う。
そして黒衣に身を包んだ娘のもとへと戻った。
「最後の奇跡を行使すれば、終末はもっと早まる。そうしなくても、いずれ世界は滅びるのだがね……」
「そうは……させるか……」
スパークは呻いた。
だが、終末の門を閉ざす手段はない。
神の奇跡を行使してさえ不可能なのだ。
それどころか、その行為は世界の破滅を早めることになる。
「終末を超えられるのは、我ら転生者のみ」
フィオニスはニースを振り返った。
「おまえが真に亡者の女王であれば、破壊の女神に奇跡を願い、終末の巨人をこの世界に降臨させられよう。今こそ、その時なのだ！」
「そうね……」
ニースは決意の表情でうなずいた。
「わたしは、破壊の女神に奇跡を願う……」
そのときだった——
「転生者どもよ、滅び去れ！」
全員が驚いて、声のほうを振り返る。
闇にまぎれるように、二十人ほどの弓兵の姿があった。
彼らは特徴のある長弓を引き絞っていた。
「アラニアの森林衛士です！」
スレインが警告の声をあげる。
「そのとおり。そして大地母神の教えに従う者でもある！」
そんな答えが返ってきたあと、彼らは一斉に矢を放った。
フィオニスとニースのふたりに矢が降りそそいでゆく。
フィオニスは舌を鳴らした。
「雑魚どもが……」
そしてニースを抱き寄せ、身をもって庇う。
彼の背中に、何本もの矢が深く刺さった。口から鮮血が溢れでてゆく。
「亡者の女王も仕留めるんだ！」
「させませんよ！」
スレインが珍しく怒りの表情で言うと、火球の呪文を彼らのまっただなかに見舞った。
爆発が起こり、弓兵たちは四方に吹き飛んでゆく。
「あなたたちには分からないのですか？　娘が今、何をしようとしているのか？」
レイリアが駆け寄り、呻き声をあげる男たちに向かって言う。
「世界を……滅ぼそうとしているのだろう？　最高司祭様はそう仰っていた……」
「それが本当かどうか、その目で見届けなさい……」
レイリアは声を震わせた。
「そうさせてもらおう……どうせ、この身体では弓など引けぬ……」
「クローゼンが警告していたのは彼らのことだったんだな。至高神ファリスの信者とばかり思ったが……」
スパークの顔からは、血の気が失せていた。
目の前で、ニースを失うところだった。
彼女を救ったのは、皮肉にも転生者フィオニスである。そして彼自身は瀕死の重傷を負っていた。
「礼など言わないわよ」
ニースはフィオニスから身を離すと、冷ややかに言った。
「無用だ……。おまえはただ、最後の奇跡を行うだけでいい。オレを贄に使っても……いいぞ。破壊の女神を受け入れても、オレの魂が砕けることなどない」

た。
　戦いがなくなることはない、と言いたいのだろう。
「それでは、我らも退散するとしましょう。光の神々の狂信者どもを刺激したくはありませんからな」
　暗黒神の司祭クローゼンがそう言って、挨拶した。そのまま近づいてくると、そっと耳打ちをする。
「義勇軍のなかに、不穏な一団がいます。聖印をつけてはいませんが、どこかの教団の神官戦士に間違いありません。確証はありませんが、用心しておくにこしたことはないかと……」
「分かった、心に止めておこう……」
　スパークはうなずいた。
　暗黒神の布教を許したことで、敬虔な至高神ファリスの信者たちからは、邪悪の烙印を押されている。
　暗黒神の司祭たちもだが、自分が命を狙われているとしても不思議ではない。
「わたしたちもいったん闇の森へ帰ろうと思う……」
　ダークエルフ族の族長ゼーネアとその片腕であるカイエンのふたりが、スパークのすぐ側に姿を現した。
　姿隠しの呪文を使っていたのだろう。
「公都が落ち着いたら、呼びだしてくれ。わたしは、いつでも応じよう……」
「あたしも彼らと一緒に行くね」
　リーフが言う。
「そうか……」
　一瞬、引き留めようかと考えたが、スパークはやめておくことにした。
　ゼーネア族長は人質だが、今、公都においておくのはひどく危険である。
　彼女ひとりを殺せば、ダークエルフ族とマーモ公国との同盟は崩壊する。そしてそれを望む者は、決して少なくないのだ。
「元気でな……」
　スパークはハーフエルフの娘に笑いかける。
「スパークもね……」
　リーフはダークエルフたちとうなずきあうと、闇のなかに溶けるように立ち去っていった。
「そろそろ、行きますよ」
　リーフが去ったあと、しばしのあいだ茫然としていたスパークに、スレインが声をかけてきた。
　側には夫人レイリアの姿もある。
「パーンたちは先に行って待っていますよ」
「分かりました……」
　答えると、スパークはその場で剣を抜き、鞘を投げ捨てた。
　剣を握る右手がわずかに震えているのが分かる。
　邪神戦争に、本当の決着をつけるときがきたのだ――

2

　空洞の岩の壁に黒い穴が不気味に開いている。その輪郭はたえず揺らいでおり、緑がかった瘴気を発していた。
　終末の門である。
　その門の前に、ふたりは立っていた。
　ひとりは精悍な男で、暗い銀色の鎧に身を包み、剣と円形盾を手にしている。
　転生者フィオニスであった。
　そしてもうひとりは、黒い衣服に身を包んだ黒髪の娘。
　ニースである。
　彼女がとにかくも無事なのを見て、スパークは大きく安堵の息をついた。
「よく来たな……」
　フィオニスが嘲笑の声を響かせる。
「マーモ公スパーク、ロードスの騎士パーン、亡者の女王の御両親まで一緒とはな」
「おまえとは、話し合うことなど何もない」
　スパークは冷ややかに返す。
「それもそうだな。やることはどうせ決まっているのだ。亡者の女王の目の前で、今度こそ貴様を葬ってやろう」
　そう言うなり、フィオニスは剣を構え、進みでてきた。
「今のうちだ、ニース！　スレイン師のもとへ!!」
　スパークは大声で言った。
　だが、彼女は一歩も動かない。
（どうしたんだ、ニース？）
　スパークは疑問にかられたが、気を取られている間はない。
　一瞬でも隙を見せたら、間違いなく命を落とす。この転生者は、それほどの戦士なのだ。スパークは身をもって、それを知っている。悔しいが、ひとりで勝てる相手ではない。
　フィオニスは迷うことなく、スパークに向かってきた。
　そして、神速のごとき、一撃を放つ。
　かろうじて盾で防ぐ。
　だが、連続攻撃が続き、スパークはたちまち防戦一方に追い込まれた。
　数箇所、浅く斬られ、血がほとばしった。
「万物の根源、万能の力……」
　スレインが、古代語魔法の詠唱をはじめ、スパークの身体能力を拡大した。
　力がみなぎり、身体が軽くなる。それでも、反撃の余裕は見いだせなかった。
　だが、じっと隙をうかがっていたロードスの騎士がそのとき動いた。
　全身でぶつかってゆくような突きを放ったのである。
　フレイム王カシューが賞賛する彼の秘剣だった。
　フィオニスはあわてて身を引き、間一髪のところで躱す。
　そして体勢を崩しているパーンの首を刎ねようと剣を振りあげた。
　だが、今度はスパークがその隙を逃さなかった。ひとつ牽制を入れてから、相手の脛を払う。
　鎧の裏を掻く確かな手応えがあった。
　傷はそう深くはないが、フィオニスの足の運びが、ぎこちないものになる。
　筋を切断できたのかもしれない。

スパークはつぶやくと、空洞の最深部を振り向いた。
　そこには、破壊の女神カーディスの骸とされる巨像があり、終末へと至る門がある。
　ふたりはそこにいるのだろう。
「皆は、ここに残ってくれ。オレはニースを救いにゆく」
「まさか、おひとりで、ですか？」
「スレイン師とレイリア夫人も一緒だ。ロードスの騎士と永遠の乙女も同行してくれる。相手はひとりだ。人数をかける必要はないからな……」
　スパークは答えた。
　本心を言えば、ひとりで挑みたい。だが、今の自分では絶対に勝てない。
　伝説の戦士であったときの肉体を、転生者フィオニスは取りもどしているのだ。
「行かれるのか、マーモ公？」
　そう呼びかけてきたのは、新生マーモ帝国の宮廷魔術師であった男だった。
「あなたは、どうされる？」
　スパークはヴェイルに訊ねた。
「最後の戦い、見届けたい気もするが、わたしもそろそろ行かねばならない。迎えが来ているようだ……」
「迎え？」
　ふと見ると、彼の頭上を赤い色をした蝙蝠が羽ばたいている。
　怪訝に思うが、余計な詮索をするつもりはない。
「さらばだ、マーモ公……」
　ヴェイルが手を差し出してきた。
「おまえの刑は執行したことにしておく。これからは死人として暮らしてくれ」
　握手をしながら、そう声をかける。
　おそらく、この男とは二度と会うことはあるまい。
「死人として暮らす、か。まさに、そうなるだろうな……」
　ひとりごとのようにつぶやくと、ヴェイルは瞬間移動の呪文を唱えて、その場から姿を消した。
「さらばだ……」
　スパークは一瞬前まで、彼が立っていたその場所に向かって短く一礼した。
　新生マーモ帝国の勢力は、マーモ公国が取り込んでいる。それはヴェイルの意志も受け継いでいるということだ。
「なかなかの戦いぶりだったよ」
　ヴェイルと入れ替わるように、闇の森の蛮族ナグ・アラの女戦士ドニアが、スパークのもとへとやってきた。
「真の闇を知る者として、わたしたちはこれからも、おまえをマーモの支配者として認めよう……」
「感謝する。もしも、あなたの部族がマーモ公国の援助を必要とするときには、遠慮なく申し出てほしい」
「そんなときがあるとは思えないけどね。そちらこそ、戦士が必要なときには、声をかけておくれ。わたしたちの部族の戦士は、遥かな昔から傭兵としてロードス各地で戦ってきたんだからね」
「こちらこそ、そんなときがあるとは思えないな。戦は、もう十分だ」
　スパークが言うと、ドニアは笑い声をあげながら、その場から立ち去っていっ

STORY

長年の戦乱に、いつしか「呪われた島」と呼ばれるようになったロードスは、ようやく平和と安定の時代を迎えようとしていた。ただひとつ暗黒の島マーモを除いては――。破壊の女神カーディスの教団によって占領されていた王城は、闇の勢力を味方につけたスパークの手で解放された。教団を率いるフィオニスとの最後の決戦に挑むため、ニースが囚われている地下神殿に向かうスパーク。それを助けるべくパーンとロードスの義勇軍が続く。だが、その時、ニースは、カーディス降臨によって世界を破滅から救おうと、亡者の女王ナニールとして覚醒しようとしていた。

Main Characters

ニース

スパーク

レイエス(フィオニス)

リーフ

MAP／羽住都

「これが、世界の終末の姿なんだろうな」
ロードスの騎士と呼ばれる男が、背後に続くハイエルフの娘を振り返って言った。
「そうかもしれないわね……」
永遠の乙女として知られる森の妖精は、悲しそうにうなずいた。
マーモ公国の王城ウィンドレストの地下に広がる巨大な空洞を舞台として、過去に例のない戦いが繰り広げられていた。
長い階段を下って攻め込んだのは、マーモ公国に味方する諸勢力であり、ロードスから渡ってきた義勇軍である。
そのなかには、ダークエルフの姿があり、暗黒神ファラリスの神官がいる。闇の森で暮らす蛮族の戦士たちもいた。先の戦いでは、マーモ帝国に属し、ロードス諸王国の軍勢と死闘を繰り広げた者たちである。
「マーモを解放するための戦いと思っていたが、それどころではなかったな」
ロードスの騎士、パーンは苦笑する。
倒すべき敵の大半は人間ではない。世界の終末から召喚されてきた異形の怪物であり、不死生物どもだ。
それらを率いているのは、破壊の女神カーディス教団の高位の司祭たちであるが、彼らもすでに終末に属していると言っていい。
「カーディス教団に、これほどの力があったとはね……」
思いもしなかったわ、と永遠の乙女ディードリットがうなずく。
「古代王国が滅びたあと、ロードス全土を征服するほどの勢いだったそうだけど、帰らずの森は、迷いの結界に守られていたから……」
ハイエルフにとって、人間どうしの争いは関知するところではなかったのだ。
そして生まれてからまだ二百年にも満たない彼女は、そのときのことを知らない。
「この戦い、決して退くわけにはゆかないぞ。我らの敗北は、この世界の終わりを意味するものと思え！」
パーンは義勇軍の戦士たちに号令すると、自らも剣を抜いて戦いをはじめた。
そしてディードリットはわずかな空気の流れから風の精霊シルフを召喚する。
ロードスの騎士が魔物を倒し、永遠の乙女が瘴気を浄化する。その戦いぶりは、他の人々の模範となった。
戦士たちは魔法使いたちと連携し、敵に挑んでゆく。
犠牲も多く、激しい戦いとなったが、短時間で形勢は決した。
魔物も、亡者どもも、そして破壊の女神の高司祭たちも次々と討ち倒されていった。
やがて地下空洞に建つ大地母神マーファの地下神殿も解放される。もとはこの場所に、破壊の女神カーディスの大神殿があった。ここは女神の邪悪な聖地なのである。
カーディス教団が滅び去ったことを、人々は確信した。
勝利を喜び、歓声が各所であがる。
だが、パーンもディードリットも、これが真の勝利ではないことは知っていた。
本当の戦いはこれから始まるのだ――
「スパーク……」
ハーフエルフの少女が沈痛な表情で、マーモ公国の公王に呼びかけた。
「アルド・ノーバが見つかったわ」
リーフの表情を見て、スパークはマーモ公国の宮廷魔術師の死を確信した。
「アルド……」
深い喪失感を味わいながら、リーフにその場所へ案内してもらう。
神殿を取り巻く柱のひとつに、アルド・ノーバは鎖で縛られたまま、変わり果てた姿となっていた。
「ひどい拷問を受けたあと、短剣で心臓を貫かれている。最後はそう苦しまなかったと思うけど……」
リーフは顔を伏せ、涙を隠した。
スパークは茫然としたまま、アルドの骸を鎖から解き放つ。
戦の神マイリーに仕えるグリーバス司祭が側に来て、優しい大男の冥福を祈った。
「アルドの願いは、たったひとつだけよ」
祈りを終え、大地の妖精ドワーフ族の司祭は、スパークを振り返った。
「心得ています……」
スパークはうなずく。
そのとき、リーフが無言のまま抱きついてきて、胸に顔を埋めた。
スパークは小柄なハーフエルフの娘の髪に手を置き、愛おしむように撫でる。
「おまえは、オレより先に逝くなよ」
そう囁きかける。
「ハーフエルフであるおまえには、何百年もの寿命がある。オレがいなくなったあとも、この島の未来を見守り、ダークエルフとの同盟を確かなものとしてくれ」
「友達使いが荒すぎるよ」
リーフは鼻をすすりながら抗議をした。
「おまえにしかできないことだからな」
スパークはリーフを強く抱きしめ、彼女が苦しさを覚えるまえに離した。
「分かった……」
リーフはこくりとうなずく。
ダークエルフとの同盟は彼女自身が望んでいることでもある。
マーモに残っているダークエルフたちは若木ばかりだ。だからこそ、新しい体制にも適応できると信じている。
「スパーク陛下……」
そのとき、ひとりの若い騎士がやってきて、畏まった。
「神殿内をくまなく探しましたが、ニース様は見つかりませんでした。また、フィオニスなる転生者の遺体も……」
「そうか……」

新ロードス島戦記

終末の邪教　最終章

人よ伝えよ、勇者の熱き心を。
人よ詠えよ、女神の優しき心を。
人よ語れよ、ロードスが刻む跡を。

永久の時を紡ぎ、幾万の星々が煌めく
壮大なるロードスの物語――ここに完結!!

水野良
Ryo Mizuno

イラスト
美樹本晴彦
Haruhiko Mikimoto

暗黒の島ここに

ロードス島戦記 電子書籍配信スタート!

携帯向け電子書籍サイト『ちょく読み』で、7月6日より、『ロードス島戦記　灰色の魔女』『ロードス島戦記2　炎の魔神』がダウンロードできる。続巻も順次配信予定なので、未読の人はぜひアクセスしてみて!

詳しくは157ページで。

この長き連載は若くして暗黒の島マーモの領主となったスパークを描いてきた。

ロードスにおいて、最後の闇と言われる暗黒の島マーモ。その公王として、マーモの闇を払拭し、ロードスに真の平和をもたらすことを自らの使命としてきたスパークは、頼もしい仲間や、公私にわたって彼を支える聖女ニースと共に、幾多の困難を乗り越えてきた。しかし、その度にマーモの現実を知っていくスパークの心に、変化が起こっていた。

「闇こそマーモの真なる姿なのではないか?」と。

そのスパークの前に現れた、破壊の女神を信奉するカーディス教団。世界のすべてを破壊し、終末の世を迎えることを望む彼らよって次々と仲間を失い、ニースも囚われの身になってしまう。ニースには亡者の女王ナニールが転生した魂が宿り、そのナニールの覚醒こそが、世界の破滅の鍵だったのだ。

ニースを救いだし、教団を退けるために、新たな力を求めてスパークは闇の森の蛮族に伝わる試練を受ける。それは自らの内にも闇を宿すという決意でもあった。そして試練を乗り越え、見事生還を果たしたスパークは闇の森の蛮族と生き残った兵士たちを率い、決戦の場へと赴く――。

ロードスの呪いは、パーンをはじめとする幾多の英雄によって打ち払われた。最後に残る暗黒の島マーモ、ニースが立ち向かうナニールの魂、そして世界の破滅を望む最悪の敵カーディス教団――。

邪神戦争の真の結末がいま明らかになる!

大河ファンタジーの最終回は次ページから

「ロードスという名の島がある」
今から20年前、この言葉から始まり、ファンタジーの金字塔となった『ロードス島戦記』。その続編である『新ロードス島戦記』の連載が始まったのが8年前。そして今号、ついに最終回を迎える。

根室アヤカ
出席番号(女子)：10
クラスに想いを寄せる男子がいて、おっとりとした性格。しかしその戦闘力はクラス一を誇る。
焔邑相馬
出席番号(女子)：13
神社の娘で凛とした美人。しかしその言葉遣いは見た目を裏切り、口汚い。
灘英斗
出席番号(男子)：12
どんな些細な事件でも手帳に状況をまとめ、書き込む癖がある。乙組の生徒監視委員。
史上初！クラス全員クセ者!?
さぁ「マキゾエ」の巻き添えになろう
マキゾエホリック
Case1:転校生という名の記号
すべてはここから始まった！
壊滅的インパクト第1作目！
マキゾエホリック
Case2:大邪神という名の記号
古代巫を名乗る少女、図書館に眠るオカルト本に、校庭に放置された巨大ロボット
あらゆるジャンルを越えた前代未聞の大事件！
マキゾエホリック
Case3:魔法少女という名の記号
upcoming!!
の2人と藍子がキーパーソンとなり物語が進んでいく。黒幕という名の記号に恥じず工藤が暗躍し、灘が1年乙組に降りかかる超難題を解き明かすという超緻密で破天荒なミステリ的展開も『マキゾエ』の楽しみ方なのだ！
一筋縄ではいかない展開と、巻を追うごとに明かされていくクラスメイトの記号、その真価は今号のザ・スニで確認せよ!!
小説本編は298Pから!

2006年の年明けと共に、ライトノベル市場に一大旋風を巻き起こした超問題作『マキゾエホリック』が満を持して登場‼ 「壊滅的インパクト！」という売りと共にデビューしたこの作品。じゃあ何が壊滅かというと——。

なんといってもマキゾエの特徴は、クラスメイト1人1人が「記号／属性」を持っていること！ しかもその記号はライトノベル読者にはお馴染みの、メイドや魔法少女、超能力者や殺し屋なんていうもの。そんな記号たちを1年乙組というクラスに集めた、超画期的な小説が『マキゾエ』なのだ。

物語は高浪藍子という季節はずれの転校生が、1年乙組に転入してきたことから始まる。意図的に集められたクラスに現れたイレギュラー。果たして彼女の存在、そして【受難】という記号は、このクラスにどのような影響を及ぼすのか？

そして記号を判別できるのはクラスの中でも、生徒監視員である灘英斗と、【黒幕】という記号を持つ工藤スグルだけ。こ

あたしは負けない――この《地獄》で。
刻印魔導師たちの、灼熱のウィザーズバトル！
円環少女
サークリットガール
長谷敏司
Satoshi Hase
イラスト/深遊 Miyuu
鴉木メイゼル
《円環体系》魔術を操り、刻印魔導師として百人討伐の修羅道を歩む。専任係官の仁に恋する少女。
もって戦いに赴く魔導師としての顔、そして「泣き顔や悔しい顔が大好き！」と言い放つイジメキャラな顔。罪を負った刻印魔導師でありながら、この世界では普通の小学生でしかない彼女のギャップこそが強烈な光となってファンの心をわしづかみにするのだ。
さらに、これまで見たことのないユニークな魔法大系の数々、ド派手なビジュアルイメージが炸裂するバトルシーンなど、あらゆる面白さがギッチリと詰め込まれた超高密度ファンタジー「円環少女」を、今すぐ目撃せよ!!
好評発売中
円環少女
［サークリットガール］
①バベル再臨
②煉獄の虚神（上）
③煉獄の虚神（下）
小説は180ページから

スニーカー文庫の最先端が集まった！
スニーカー祭'06
「円環少女」のビッグニュースはこれ！
神和瑞希
地球にしか存在しない、「気」を操る魔法使い。無口で冷淡な性格だが、きずなには懐いている。
十崎京香
専任係官を束ねる事務官。家が近所の仁とは幼馴染み。
倉本きずな
滅亡したと思われていた幻の魔法《再演体系》の使い手。父親を亡くし、十崎家に居候している。
武原仁
メイゼルを管理する専任係官。その一環として、彼女の通う小学校に(ニセ)教師として赴任中。
キュートにサディスティック！ 最強小学生ヒロイン、降臨！
この物語には、数多くのヒーロー、ヒロインが登場する。苦労ばかり背負い込んでいる武原仁、天然系の倉本きずな、感情を表に出さない神和瑞希、——そして、ある意味、最強の名をほしいままにしている小学生魔導師、円環なす対象を操作して魔法を発動する『円環少女』、それがメイゼルなのだ！
魔法を消去してしまう人類が住まうがゆえに、幾千もの魔法世界から《地獄》と忌み嫌われる地球。元の世界で犯した罪のため《地獄》に堕とされた犯罪者は〈刻印魔導師〉となり、敵対する魔導師百人を倒すという、いまだ成し遂げた者がいない刑罰を課せられていた。常に死と隣り合わせの過酷な日々は、大人でさえ心をすさませてしまうのだが、刻印魔導師メイゼルは違っていた。何にも負けない強い意志で百人討伐に立ち向かう——自分の手で未来を切り開いていくために！
時には悲壮感すら漂う覚悟を

神様ゲーム
The God Game
宮﨑柊羽 Miyazaki Syu
イラスト 七草 Nanakusa
キュートで腹黒な神様とゲームをしてみませんか？
◆かのう様◆
神出鬼没で美麗な土地神。
ゲームを持ち込むのが大好き
スニーカー文庫の最先端が集まった！
スニーカー祭'06
フェスタ
「神ゲー」のビッグニュースはこれ！
小説本編は158ページから

これは遊びと祈りに満ちたPLAY&PRAY THE GAME!!
◆鈴木朔◆
全てが人間の常識を越えた存在、生徒会会長。
◆尾田一哉◆
ツッコミ能力NO.1である、生徒会会計。
◆桑田美名人◆
武道の達人でお茶に命を賭ける、生徒会書記。
◆羽黒華南◆
ハムスターのような愛くるしさ、生徒会臨時採用。
◆秋庭多加良◆
かのう様に気に入られてしまった、生徒会副会長。
秋庭多加良たちが通う叶野高校がある地――叶野市。この場所には願いを強く持つ者が集まるという。なぜなら〝かのう様〟という、みんなの願いを叶えてくれる、貴い土地神様が住んでいるから。でも実は、その〝かのう様〟は、めちゃめちゃ腹黒なうえに、ゲーム好きだったのです!!
そんな〝かのう様〟に気に入られてしまった、多加良を始め生徒会のメンバー。彼らは毎度、〝かのう様〟が持ち込むやっかい事に振り回される。例えば、神様とのかくれんぼや、進化と退化のトビラを使っての○×ゲーム。どちらも地球の存続が関わっている、壮大な腹黒ゲームなのだ。さらに多加良たちにはもうひとつ進行中のゲームがある。それは、その人が持つ一番強い願いに反応して咲く〝願いの植物〟を100本摘むこと。いくら神様がゲーム好きだって、ダブルゲームはやりすぎ!?
キュートで腹黒な神様が仕掛ける〝神様×神様ゲーム〟!!
今回はどんなやっかい事が、生徒会メンバーを待ち受けているのか!?

羽ばたく少女たちのユメ――。

お待たせ、新展開の第2部! 〝虚界戦争〟編、はじまるよ!!

はてしなく遠い隣りの異世界アンダカ。そこに棲息する怪造生物と呼ばれるモンスターたちをこちらの世界に呼び出す技術《怪造学》を学ぶ少女たちの姿を描くのが、本作『アンダカの怪造学』。主人公の伊依は、人間と怪造生物が共存できる世界を夢見て、立派な怪造学者になることを目指しているんだけど、〝怪造生物は人間にとって便利な道具か、実験動物程度の存在〟というのが世間の認識。そんな周囲の無理解と時には衝突し、時には傷つく伊依。それでも、ヘコまず、ポジティブに夢に向かって突き進む彼女の姿は、徐々にクラスメイトたちの心を動かし始める。物語開始時は、怪造生物の桃子と唯一の親友・香美しか味方がいなかった伊依だけど、侍少女の舞弓や幼なじみのダークヒーロー・仇祭 遊、そして桃子の代わりに新たな相棒となった怪造生物の梅子らをはじめ、仲間がたくさん伊依の下に集い始める――というのが、第1部(スニーカー文庫第Ⅲ巻)までのお話。

さて、第1部で役者も揃い、この秋に登場予定の最新刊からは、いよいよ新展開の第2部がスタート! その名も〝虚界戦争〟編。〝虚界〟とは、異世界アンダカを指す言葉なんだけど、それが〝戦争〟って……どういうこと!? そう、第2部は戦争らしいデスよ? 現在、最新刊を絶賛執筆中の日日日から仕入れた情報によると、これまでは人間側の怪造生物に対する問題を解決してきた伊依だけど、第2部では、虚界で起きている争いも伊依は解決しちゃう……らしい? さすがは伊依! 人間と怪造生物の幸せのためには、虚界が抱える問題にまで飛び込む気か?

一気に話がスケールアップして、ますます目が離せない『アンダカの怪造学』、最新刊登場まで、キミは辛抱できるかな?

広がるセカイ。
伊依&梅子
香美
スニーカー文庫の最先端が集まった!
スニーカー祭'06
フェスタ
「アンダカ」のビッグニュースはこれ!
アンダカの怪造学
日日日
あきら
Akira
イラスト:エナミカツミ
Katsumi Enami

第12回 スニーカー大賞作品募集

大賞 [正賞]トロフィー [副賞]300万円
+応募原稿出版の際の印税

▶応募資格

年齢・プロアマ不問。

▶募集作品

異世界ファンタジーのみならず、ホラー・伝奇・SFなど広い意味でのファンタジー小説を募集! ただし未発表作に限ります。

▶応募規定

- 原稿枚数は、400字詰め原稿用紙換算で200枚〜350枚分以内。
- ワープロによる原稿可。ただし、フロッピーでの応募は不可です。プリントアウト原稿は必ずA4判の用紙で1ページにつき40文字×30行の書式で印刷すること。なお、感熱紙、400字詰め原稿用紙への印刷は避けてください。
- 手書き原稿の場合は、A4判の400字詰め原稿用紙を使用。鉛筆書きは不可です。
- 原稿のはじめには、以下の事項を明記した応募者プロフィールを必ず付けてください。

(1枚目) 作品タイトルとペンネーム、原稿枚数(ワープロ原稿の場合は400字詰め原稿用紙換算による枚数も併記)。なお、作品タイトルとペンネームについては中央に大きく表記し、必ずふりがなをふってください。

(2枚目) 作品タイトル、氏名(ペンネーム使用の場合はペンネームも)、年齢、郵便番号、住所、電話番号、お持ちの方はメールアドレス、職業(略歴)、応募歴、受賞歴。また、氏名とペンネームには必ずふりがなをふってください。また、何を見てこの「スニーカー大賞」を知ったのか、その媒体名(雑誌名、または告知ポスターなど)も明記して下さい。

(3枚目) 応募作品のあらすじ(1200字以内)

- 原稿用紙、プリントアウト原稿には必ず通し番号を入れ、最初に応募者プロフィールを付けてから右上部をバインダークリップで綴じること。ヒモやホッチキスで綴じるのは不可です。また原稿用紙の場合は、一度、台紙より切り離してから綴じてください。もし、原稿が厚くなる場合は、2〜3冊に分冊してもかまいません。ただし、その場合には、必ず一つの封筒に入れて送ってください。

▶応募締切

2006年10月2日(当日消印有効)

▶発表予定

最終選考結果については「ザ・スニーカー」2007年8月号(6月末発売予定)の誌上にて発表予定。また、途中経過については角川書店のホームページ上にて発表していく予定です。

▶選考

角川書店出版事業部

▶原稿の送り先

〒102-8078 東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店出版事業部・第二編集部 「第12回スニーカー大賞」係

【注意事項】

- 同一作品による他の文学賞への二重応募は認められません。
- 受賞作品の著作権(出版権をはじめ、作品から発生する映像化権・ゲーム化権、他などの副次商品化権を含む)は、角川書店に帰属します。
- 応募原稿は返却いたしません。必要な方はあらかじめコピーをとってからご応募ください。
- 電話による問い合わせには応じられません。

スニーカー新人王2006

9月1日刊3作品をいち早くフィーチャー!!

続けて登場するはこの3作品。まさに現在進行形で形成中の物語の片鱗を感じてくれ!

この夏、最大にして最強の新人戦が開幕する!

第10回スニーカー大賞・奨励賞受賞

多重心世界シンフォニックハーツ

上.独声者(モノリス)の少年

著:永森悠哉

イラスト:曾我部修司・高山瑞季(シトロネット)

**僕は“真実”を知ってしまった。
なら、戦わなくちゃ――
本当の世界を取り戻すために。
そして、あの娘のために。**

STORY

ひとつの体に様々な能力に秀でた複数の人格を宿し、有効に使い分けることで、驚異的な発展をとげた惑星「アーモネイディア」。そこでは複数の人格を持つ者は〈多声者(ポリフ)〉と呼ばれ、理不尽な権力を握り、富を築いていた。そんな中、別人格を所有する能力のない〈独声者(モノリス)〉と呼ばれる少年ソロと美少女カノンは不遇の日々を過ごしていたのだ。しかしある時、バイクに乗った謎の男を追ってきた邪悪な勢力により、二人の日常は突然戦場に! そしてソロは衝撃的な“世界の真実”を知ることに――!?

第10回スニーカー大賞・奨励賞受賞

イチゴ色禁区

①夏の鳥居のむこうがわ

著:神崎リン

イラスト:文倉十

「馬鹿正樹。死んだら許さないから! 正樹が死んだら、誰が私にイチゴミルクキャンディーをくれるの?」

STORY

お盆。毎年この時期は、玉城家が管理している「道」が、帰ってくる霊で渋滞を起こす。それを解消するために、正樹と亜美は上位血統として「すすぎ」に神社へ赴いた。待っていたのは美少女巫女と、神出鬼没な婚約者。さらに「名も無きモノ」が道を塞いでいるとの話を聞く。現場に行ってみると、そこには記憶を失った幼い少女が落ちていて!? 女の子だらけの神社でひと夏の思い出と思ってたのに、待ち受けていたのは正樹と亜美を繋ぐ陰謀への序曲だった。年の差コンビが織りなす、甘くてクールなイチゴミルク・デスティニー!

第10回スニーカー大賞・優秀賞受賞

レゾナンス

1.夕色の墜落

著:山原ユキ

イラスト:矢野口君

**こんな力があるんなら……
生まれてくるんじゃなかった。**

STORY

主人公、霧崎深也は政府の非公然組織“形生局”に所属する、特殊技能代行人。何者かに脳を“寄生”され、精神を蝕まれていく代わりに発火能力を手に入れた。形生局に通報されたとある事件の捜査のために、深也は学園に潜り込み、能力を持つものを探し出そうとするが、共鳴したその力は更なる悲劇を生み出そうとしていた。倒すべき敵を愛してしまったその悲しみと憎しみ。しかし深也の体は形生局なしでは生きられない。任務か、愛か。誰もいない校舎に悲しみの炎が舞う。

この3作品の全貌は次号ザ・スニーカーで明らかに!

第9回角川学園小説大賞・優秀賞受賞

骨王（ボーンキング）
I.アンダーテイカーズ

著:野村 佳
イラスト:THORES柴本

CONCEPT

ミステリータッチなイントロに始まり、バイオホラーな変拍子を混じえて、SFアクションに至るストーリーを、圧倒的な緊張感とドライブ感で描き切った作品、それが本作『骨王（ボーンキング）』。そして、先の読めない展開と恐るべき真実を隠した世界観を彩るヴィジュアル担当は、あのTHORES柴本！ 緻密な世界観と美形揃いのキャラという共通点はあれど、『トリ・ブラ』とは一味違うヴィジュアルイメージを展開しているぞ！

STORY

憧れの従姉を惨殺された少年・明良海翔は、現場に残された血文字"B・O・N・E・K"だけを手がかりに犯人を追う。だが、それを境に彼を取り巻く日常は崩壊した。連日、街に流れるヒット曲"BORNKING"。歌詞が存在しないはずのこの交響曲は、「アキラカイトの喉を切り裂け!」と連呼し、それに従った少女に海翔は命を狙われる。腕から骨状の刃を発生させて襲いかかる少女の前に、絶体絶命に陥る海翔。だが、彼を救ったのは、自分の腕から生えた、これも骨状の剣！ 人外の異能を発する少年少女、かつて蔓延した謎のウイルス……異常な出来事の連続に茫然となる海翔が、謎を解くカギは「BONEKING」にある――。

スニーカー新人王 2006

8月1日発売

第9回角川学園小説大賞・奨励賞受賞

純情感情エイリアン
① 地球防衛部と僕と桃先輩

著:こばやしゆうき
イラスト:まくら

CONCEPT

容姿端麗・頭脳明晰・勇猛果敢なヒロイン桃先輩と、ちょっと気弱な主人公・赤城くんのラブラブコメディかと思いきや、学校の部活動「地球防衛部」VS地球外生命体との戦いにまで発展する想定外なストーリー。テンポ良く、とぼけた感じの一人称視点といい、バトルシーンの微妙なユーモアといい、なんだかこの小説（色々な意味で）おかしすぎ！ なにはともあれ、キュートな桃先輩の破壊力あるツンデレっぷりを堪能してください！

STORY

高校に入学した僕の目に飛び込んできたのは、部活紹介で壇上に上がった麗しの美少女・近藤桃先輩。彼女に運命を感じた僕は、すぐにその「地球防衛部」へ入部したんだ。怪しげな名称だけど、地球防衛のための体力作りから始まった訓練はとってもハード。でもそんな苦労も、桃先輩がいるから乗り越えられるよね。いつも強気でツンツン体質な桃先輩、いつか振り向いてくれないかなあ、と妄想する僕のクラスに、甘い雰囲気な女の子・天野明日香が転校してきた。すかさずオカルト部を新設した彼女は、僕を転部させようとモーションをかけてきたんだけど、その現場に、怒った表情の桃先輩が現れて……これってもしかして三角関係ってやつですか!?

この夏、最大にして最強の新人戦が開幕する！
現実と非現実の境界なんて、曖昧なの。
そんな現実を変えるために――
キミは命を賭けられる？
スニーカー
新人王
2006
8月1日発売
第9回角川学園小説大賞・奨励賞受賞
リバーシブル
1.黒の兵士
著：水月 昂 イラスト：方密
CONCEPT
「こんなヴァーチャルもの、見たことない！」受賞作を読んだ担当者は叫びました。ネットゲームのコントローラとして出てくる“調停者”というメカがポイント。イラストのクールな美少女・伊緒が頭につけてる奇妙な黒い装置がそれなんですが、意味深なこのアイテムのおかげで、とっつきにくいはずの現実×仮想現実世界がミステリあり、アクションあり、もちろん美少女たくさんの大エンターテインメントになってます。お楽しみに！
STORY
タケルが消えた。俺や伊緒ら5人の仲間たちがハマっているゲーム“マスケラ”――アンドロイドを操り、テロリストとして新首都“セントラル・シティ”を破壊していくという悪趣味だが抜群に面白いしろもの――をプログラムしたクラスメートだ。そう、ただのゲームだと思っていたんだ、タケルが消えるまでは。“調停者”なる謎めいたコントローラ、次々と襲われる仲間たち、そしてタケルの家に隠されていたモノホンの戦闘用アンドロイド“ノワール”。俺たちの周りでいったい何が起きているんだ？ “マスケラ”に隠された謎を解き、タケルを取り戻すべく、俺たちは“ノワール”を起動させセントラル・シティへ向かう！

スニーカー文庫の最先端が集まった!
スニーカー祭'06
フェスタ
この夏、最大にして最強の新人戦が開幕する！
「スニーカー新人王2006」
とは何か——!?
スニーカー新人王2006キャンペーン
8月1日よりスタート予定！
まさに、これこそが「スニーカー祭'06」の最強のカード
と言える「スニーカー新人王2006」キャンペーン！
それは、スニーカー大賞・角川学園小説大賞という、
スニーカー文庫が擁する2大小説賞を獲得した6人の作家が、
この夏、一挙にデビューを飾るというイベント。
キミのお気に入りの一冊が、必ず見つかるはずだ！
骨王 I.アンダーテイカーズより
イラスト／THORES柴本

ザ・スニーカー年間定期購読のご案内
「近くの書店でザ・スニ売ってないよ！」「買い忘れた～(悲)」
…なんて言ってる人！ そんなことで悩む必要なんてないわっ！
ザ・スニーカーの年間定期購読に申し込めば、待ってるだけで確実にあなたの手元にザ・スニが届くのよっ！ ＴＶアニメが絶賛放送中の私たちＳＯＳ団の活躍も、これでチェックしてねっ！
ザ・スニを買いのがさない方法、知ってる!?
絶対!
イラストつきメッセージシートが毎号封入!!
画像は2006年2月号に同梱されたものです。イラストは毎号変ります。
応援よろしく!!
年間定期購読者だけの特典として、ザ・スニーカーで活躍するイラストレーターのサイン＆メッセージつきペーパーが手に入る！ 絵柄は毎回描き下ろしだぞ。
(これまでの年間購読をお申し込みの方にも同梱してお送りします)
お申し込み方法はこちら!
郵便局にある払込取扱票に、下記の例のように記入して、年間定期購読料4320円をお振り込み下さい。
☆この時の振込み手数料はお客様負担でお願いします。
☆お名前には必ずフリガナをつけてください。
☆本の到着は発売日を予定していますが、発送の関係上、若干ずれることもあります、ごめんなさい！
☆ザ・スニーカーは偶数月30日発売です。(日・祝日の関係で若干前後します)
☆月号は発売月の翌々月表記になります。(例) 8月30日発売→10月号
小社ホームページ(http://www.kadokawa.co.jp)の「マイショップ」→「定期購読のお申し込み」からもお申し込みができます。
払込取扱票
00
01309 195208
¥4320
株式会社 角川書店
「ザ・スニーカー」の
平成○年○月号より1年間の定期購読を
申し込みます。
お客様の住所氏名連絡先等をご記入下さい。
電話番号を忘れずに!
お名前には必ずフリガナを付けてください。
年間定期購読料
1年間(6冊)4320円(税込)
☆送料は当社で負担いたします。
☆定期購読期間中に特別定価の号があっても、不足金はいただきません。
☆増刊号は含まれませんので、ご注意下さい。
お問い合わせ先
角川書店 受注センター読書係
049-259-1100(9～17時 土・日祝日を除く)
イラスト／いとうのいぢ

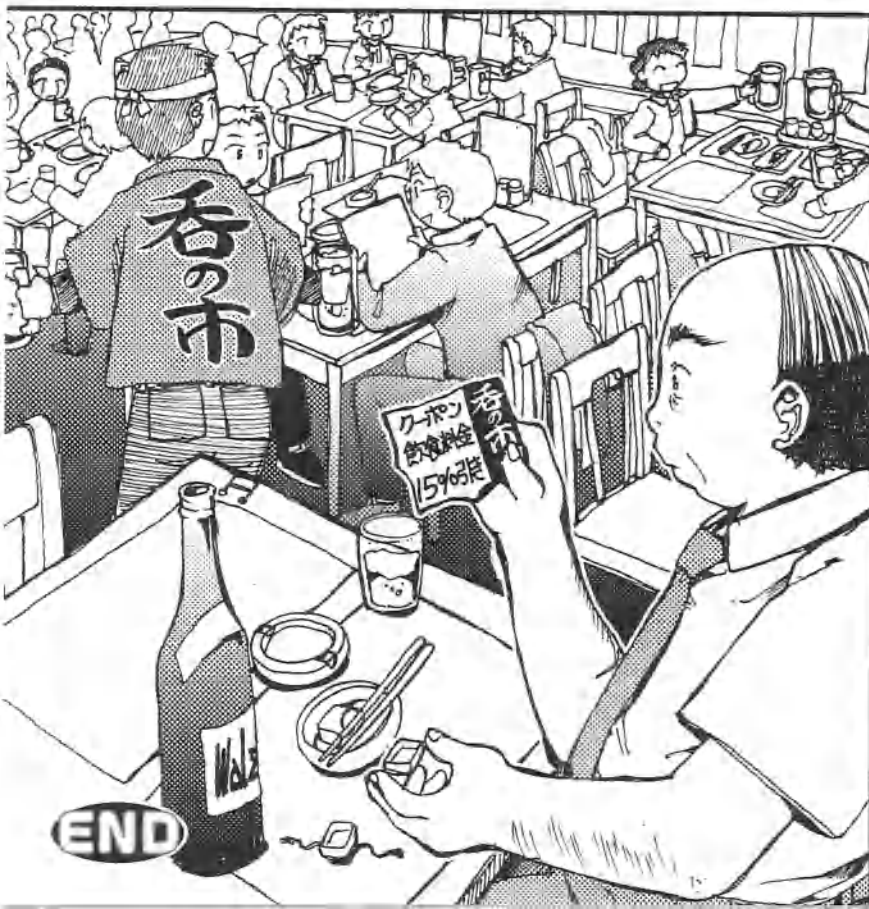
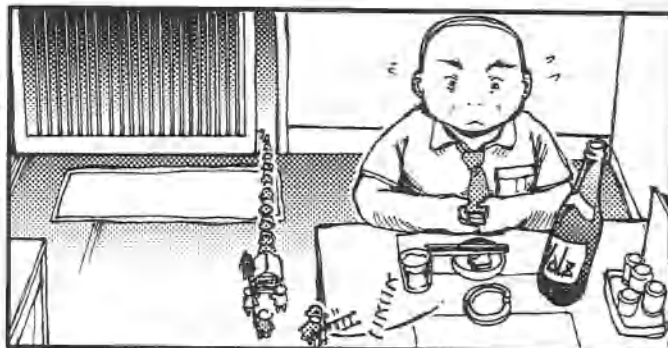
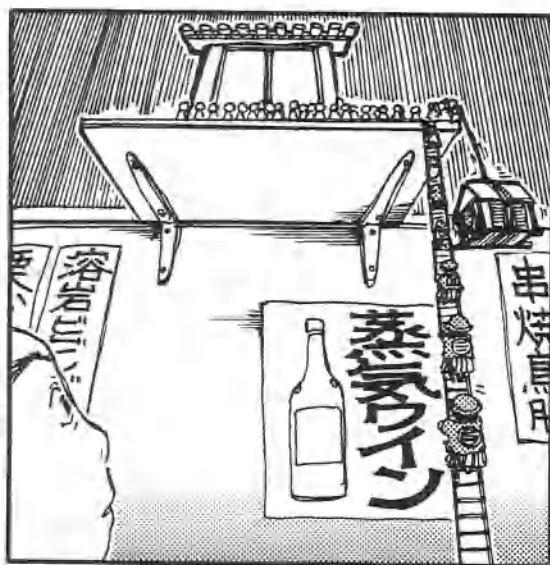
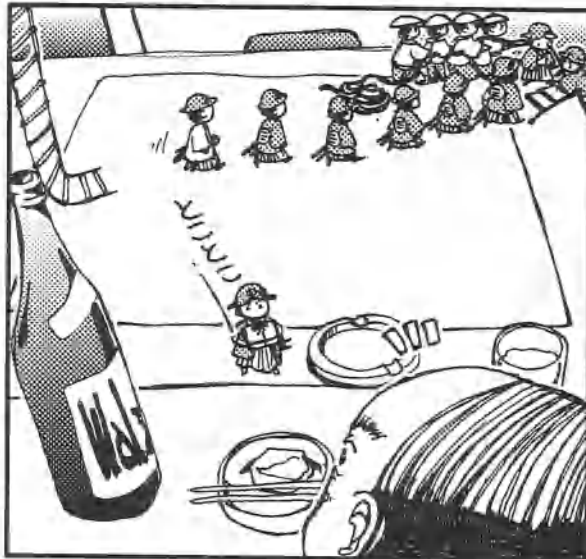
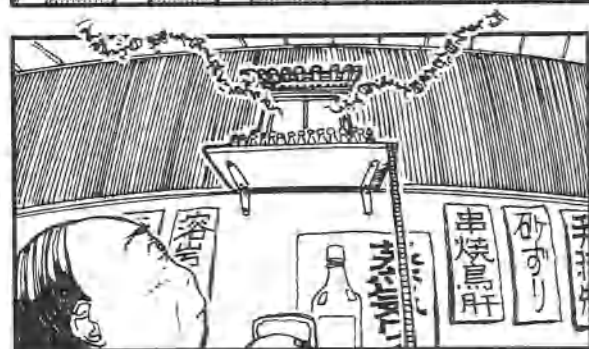
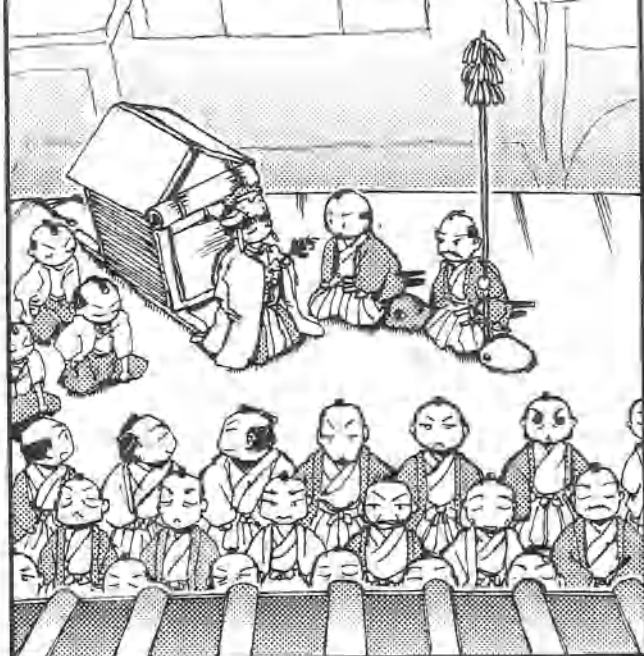
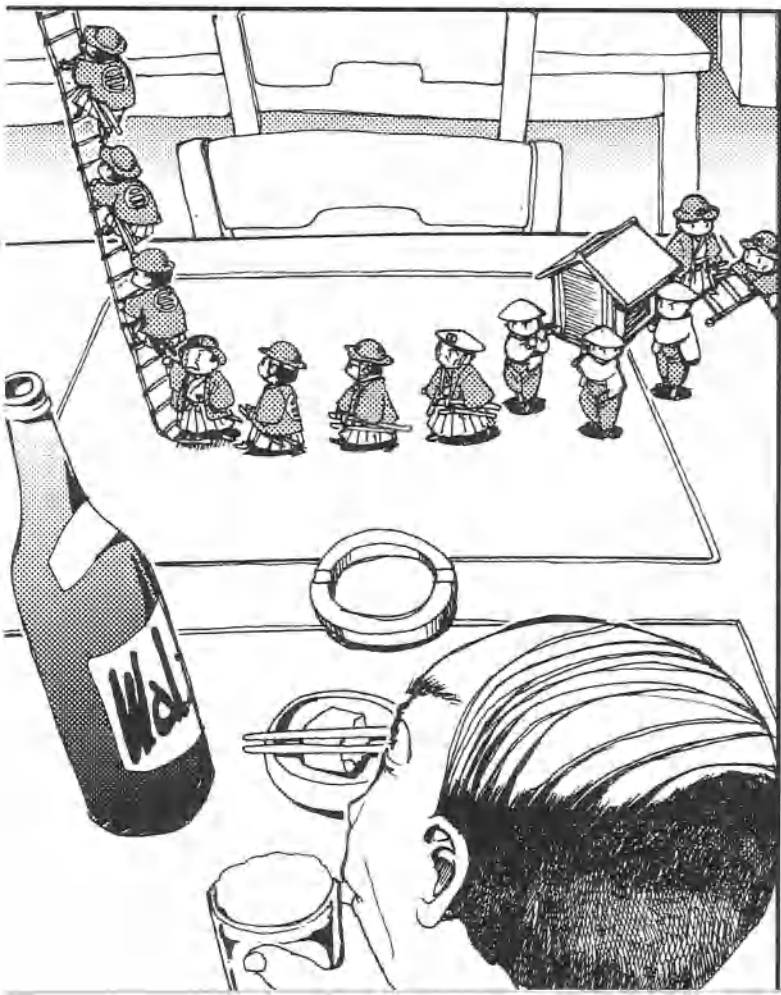
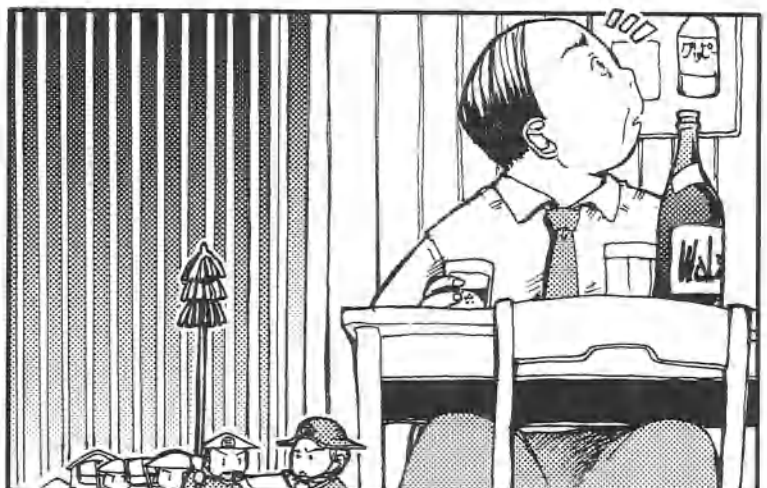
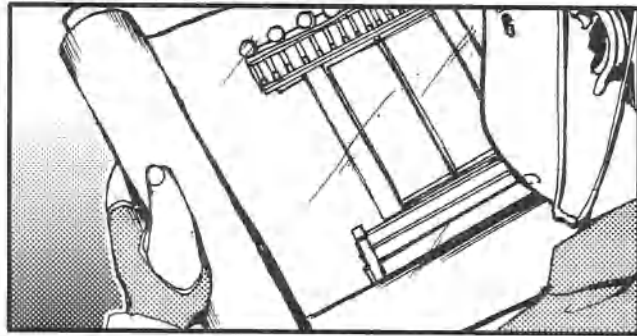
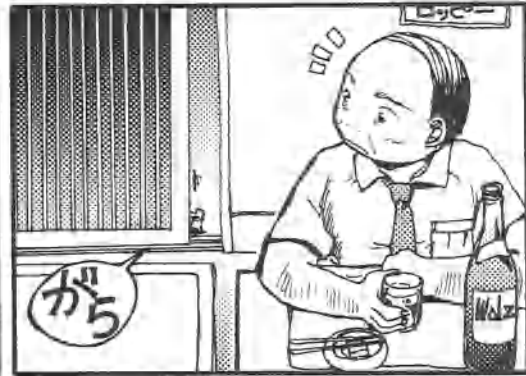
ビーンズエース BeansA 誕生1周年フェア開催!!
BeansA 1st Anniversary
ビーンズエース BeansA 誕生1周年フェア
カバーイラスト図書カード総計400名にプレゼント
各タイトル100名ずつ
発売中のコミックス4タイトル
×と
月刊Asuka8月号増刊
BeansA Vol.5で応募!
月刊Asuka8月号増刊
Beans A Vol.5は7月7日(金)発売予定!
定価580円(税5%込)
ビンボーお嬢様!?奮闘記!
彩雲国物語①
由羅カイリ／原作◎雪乃紗衣
TVアニメ放送中!!
For GIRLS
ASUKA COMICS DX
悪魔の力を秘めた少年のコミックバトル!
クロム・ブレイカー①
阿倍野ちゃこ
応募方法
各コミックスのオビに付いている応募券を、7月7日発売予定のビーンズエースVol.5の応募台紙に貼り、それを官製ハガキに貼り付けて応募してね。それぞれのコミックス応募券に対応する図書カードを、抽選で各100名様にプレゼントするよ☆ 詳しい応募方法・あて先等は、各コミックスのオビまたはビーンズエースVol.5を見てね♥
双子の学生魔法使いバトル!!
バイトでウィザード①
原作◎椎野美由貴／漫画◎佐伯淳一
キャラクター原案◎原田たけひと
For BOYS
Kadokawa Comics A
超科学アクション!
されど罪人は竜と踊る
原作◎浅井ラボ／漫画◎灰原 薬
キャラクター原案◎宮城
角川書店

差し出された小箱、お父さんのささやかな幸せ。

END

串焼鳥肝
蒸気ワイン
溶岩ご
栗おこわ
溶岩
串焼鳥肝
砂ずり
ぱん!!

きょろ
つん
蒸気ワイン

キュート&癒し系、ときにはブラックほんわかワールド

仕事帰りの一杯、突然目の前に現れたのは……!?

RAGNAROK EX.

"Why should I worry about — I knew all along what to do,didn't I ?"

と歩き始めた。女たちも、文句ひとつ漏らさずにそれに続く。リロイに付いていけば安全だと、そう確信したのだろう。
　下手をすればキリムの巨体が私たちの頭の上に降ってきていたのだが、まあ、そんな最悪の仮定をわざわざ教える必要もなかろう。
「ま、待ちやがれ」
　足早にここを立ち去ろうとする一行の背に、瓦礫の下からそんな声が届いた。
　誰あろう、ブガードだ。
　縛られたまま落下したブガードは、頭から血を流し、両足が瓦礫の下に完全に埋まっていた。あれでは縄を抜けるどころか身動きすら取れないだろう。
「てめぇ、俺をここに置いていくつもりか？　賞金が惜しくないのかよ」
　死ぬよりは牢獄のほうがマシと考えたのか、ブガードは必死の形相で言い募る。
　リロイは暫し考え込むように黙っていたが、ふと、肩に担いだバードを指先で突いた。
「だとよ、どうする賞金稼ぎ」
「——惜しくない」
　バードは、憎々しげに、だがきっぱりと言い放つ。
「そこで、朽ち果てろ」
「ま、待てよ！　待ってくれ！」
　ブガードは悲鳴を上げたが、もはや振り返るものは誰もいない。
　館のどこかで、瓦礫の崩れるかすかな音と、何者かが動く気配が闇の中、伝わってくる。

　崩れ落ちた館が闇の中に飲み込まれた頃、微かに、断末魔の悲鳴が届いてきた。
「賞金首ってのは、生死を問わずだったんだから、首だけ切って持ってくればよかったんじゃないのか」
　唐突に、リロイがそんなことを口走る。
　ミナを始め、女性陣がぎょっとした顔でリロイに目を向けた。
　リロイはなんとなく非難と感じたのか、眉間に皺を寄せる。
「なんだよ、俺、なんか変なこと言ったか？」
「これ以上、彼女たちにトラウマを作ってどうする」
　ほとほと呆れ返りながら、私はそう言った。
「おまえに気を遣うなどという難しいことは期待しないが、ならばせめて、なにもいわずに黙っていることぐらいは期待させてくれ」
「黙れ、と一言で言えないのか、おまえは」
「黙れ」
「…………」
　私はようやくリロイを黙らせることに成功し、小さく鼻を鳴らした。
　するとなぜか、リロイに担がれたバードが、弱々しい笑い声を漏らす。
「なにかおかしかったのか？」
「いや、すまない」
　私が問うと、バードはすぐに笑い声を飲み込んだが、その目はまだ笑っていた。
　リロイが、ムッとした顔で、
「おまえは黙って肩の上で死んでろ」
と悪態をつき、その結果、ミナに凄い形相で睨まれていた。
　余計なことを言わないように、黙っていることもできないとは。
　度し難い男だな、こいつは……。

end

なにもいわずに黙っていることぐらいは期待させてくれ。

ガラスが次々に砕け散る。七つの首のうち、早々にリロイが潰したのを除く六つの頭が、リロイを睨め付けた。

「少し動くが、我慢しろよ」

巨獣を前にして、リロイに気負った様子はない。キリムは巨体を震わせながら、六つの口腔でリロイを飲み込むべく首を伸ばしてきた。

リロイはハンマーを捨て、メイスを握りしめる。

あまり動き回るとバードの傷に障ると判断したのか、その場に踏みとどまって応戦するつもりだ。

視界一杯に迫ってくる無数の頭部を、メイスの乱舞が迎え撃つ。

間合いに入ってきた顔面めがけて繰り出されるメイスは、鈍い響きを連続させ、血飛沫でリロイの周囲を彩った。無数にある眼球が叩き潰され、長い首がその痛みにのたうち、周囲のあらゆるものを破壊していく。

しかし、遂にキリムが身体ごとリロイを押し潰そうと向かってきたために、リロイもその場に踏みとどまることを放棄せざるを得なくなった。

蛇のようにうねるキリムの首に飛び乗り、そのまま背中へと跳躍する。キリムはそのまま壁に突進し、これを紙のように破って隣室へと飛び込んでいった。

この突進が、床の限界を超えさせてしまう。なんの前触れもなく、キリムの巨体が階下へと吸い込まれていった。

大量の建築材を巻き込んでキリムの巨体とその上のリロイが着地したのは、私たちのいる部屋のすぐ隣だ。女たちは悲鳴を上げ、少しでも遠ざかろうと壁にへばりつく。

そんな中、ミナだけが別の悲鳴を上げた。

「兄さん!!」

瓦解していく天井や壁の音で、その声が届いたかどうかは分からないが、ぐったりしていたバードが僅かに顔を上げた。

「下がっていろ」

反射的に前に出ようとしたミナの肩を押さえ、私は剣を鞘から引き抜く。私の役目は、彼女たちを守ることだ。キリム自体の始末はリロイに任せて支障ないだろう。

現にリロイは、メイスただひとつで、キリムの頭部を正確無比に打ち砕いている。

問題は、床だ。

ここが一階ならまだしも、二階である。キリム落下の衝撃を完全には受け止められず、耳にいたいほど軋む音が大きくなっていた。

次第に、傾いていく。

そんな中、こちらに狙いを定めた首のひとつに切っ先を向けながら、私は叫ぶ。

「なにかに掴まっていろ！　崩れるぞ！」

そして、食らいついてきた巨大な顎に剣を突き入れた刹那——

世界が、傾いだ。

キリムの足下から広がった亀裂が、遂に陥没したのだ。

私は咄嗟に剣を手放し、手を伸ばす。床が傾いた為に、背後にいた女たちが私のほうに滑ってきていた。全員は無理でも、何人かは受け止められる。

凄まじい衝撃と轟音が夜の大気に広がり、館は半壊した。

瓦礫の中、私はすぐさま立ち上がり、受け止めた女以外の姿を捜して辺りを見回す。幸い、斜めに傾いで崩れ落ちたおかげで、私たちのいた場所に落下物がない。助けだした全員が軽傷で済んだ。

振り返れば、大量の瓦礫に身体の半ばを被われたキリムはぴくりとも動かない。

その背から降りてきたリロイは、血まみれのメイスを放り投げた。

「もう少し穏便にできないのか、おまえは」

「文句なら、我慢の足りないこの家に言えよ」

リロイは平然と嘯き、頭や肩にのった木片を払いのける。

そこに、ミナが駆け寄ってきた。

「兄さん、しっかりして！」

縋りつくミナに、バードはかすかに微笑んだ。

リロイは私が手放した剣を瓦礫の中から拾い上げると、宝玉を鍔元に埋め込み、女たちが全員無事なのを確かめて頷いた。

「この騒ぎの間に、ここを離れる。みんな、歩けるな？　というか、歩けよ」

「なら聞くな」

私の呟きには耳を貸さず、リロイはさっさ

「死にたいなら、肩の上で勝手に死んでろ。おまえの死体をミナの前に放り出すだけだ」
「——あんた、口が悪いな」
バードは土気色の顔に、微苦笑を浮かべる。
リロイが唐突に進行方向を変え、手近にあった部屋に飛び込んだのはそのときだった。
轟音が、頭上から響いてくる。
天井を突き破って現れたのは、巨大な人の頭部だ。無数の眼球を備えたその頭は、寸前、リロイが走っていた空間をその牙で飲み込み、取り逃がしたと見るや木片を撒き散らしながら周囲を見渡す。
リロイは見つかるのを待ってはいなかった。バードを担いだまま部屋の中から飛び出し、ハンマーを撃ち込んでいく。片手とは思えない威力のその打撃は、巨大な頭部を陥没させた。
咆吼が響き渡る。
潰された頭ではなく、階上——それも真上だ。
次々に天井が砕け散り、現れたのは六つの巨大な頭部だった。リロイの肩の上で、バードが絶望的な呻きを漏らす。リロイは咄嗟に跳び退ったが、幾つもの穴を開けられた天井に無数の亀裂が走った。
そして、天井が崩落する。
地響きと共に室内へ落下してきたのは、七つの人の頭を持つ巨大な蜥蜴だった。
《闇の種族》、中級眷属のキリムだ。
その重みに床が撓み、壁が軋み、歪みで窓

次々に天井が砕け散り、現れたのは六つの巨大な頭部だった。

振り返りながら、リロイは腰に差していたメイスを引き抜いた。
踏み込んでいくその速度は、決して遅くはないラルヴァの身のこなしを鈍く感じさせる。
メイスが一体の頭頂を粉砕した次の瞬間には、もう一体の繰り出した指先の爪が打ち砕かれていた。そのまま返す一撃でこめかみを強打し、沈黙させる。
難なくラルヴァたちを屠ったリロイは、ハンマーを回収して先を急いだ。
やがて、通路に男がひとり倒れているのを発見する。
ミナの言っていた特徴とは一致しない。腹を刺され、死んではいないが身動きが取れないようだ。
「おい、おまえらが追っかけていった賞金稼ぎはどっちに行った」
リロイは男の胸ぐらを掴み、引きずり起こした。傷口が痛んだのか、男は呻き声を漏らす。それでもリロイは容赦なく追及した。
「訊いてることに答えろ」
「――し、知るか」
リロイが誰かは分からなくとも、仲間でないことが分かれば対応は決まっている。
それに対するリロイの行動は、窓まで男を引きずっていくことだった。中庭に面した窓を開け、男の身体を軽々と持ち上げたあと、腕一本で空中にぶら下げる。抵抗する力が残っていない男は、それでもこの暴挙にどうにか抗おうとしたが無駄な努力だ。地上三階の高さで宙吊りになった男は、傷の痛みと落下への恐怖で顔を引き歪める。
「もう一度、訊く。賞金稼ぎはどっちに行った?」
「こ、この通路の先を左に行った。その先はわからん」
「そうか」
口早に答える男に、リロイは通路の先へ目をやりながら頷く。
そして、手を離した。
男の悲鳴が落下し、鈍い音とともに途絶える。
なにかが駆け寄り、肉を裂いて内臓に食らいつく咀嚼音がすぐに続いた。
リロイは涼しい顔で通路を左に曲がる。
そこにも数人の男たちが倒れていた。いずれもすでに絶命している。この先は行き止まりになり、扉がひとつあるだけだ。
リロイは扉を開け、中に踏み込んでいく。
ベッドやキャビネットが置かれたその部屋は、昔は寝室として使われていたようだ。
その奥に、壁を背にしてしゃがみ込んでいる男がひとりいる。栗色の髪にハーフコート、そしてその手にはパラッシュと呼ばれる広刃の直刀が握られていた。ミナから聞いていた特徴に当てはまる。
リロイはハンマーを壁に立てかけ、男に近づいていった。
「あんたがバードだな」
問うと、男はゆっくりと顔を上げた。手で押さえているその脇腹からは、出血が酷い。月光に照らされた顔はすでに土気色だ。
「あんたは……?」
「さらわれた女を助けに来た傭兵だ。ミナってやつに、おまえを頼まれてな」
リロイは男の側に屈み込むと、傷の具合を確かめた。内臓が修復不可能なほど深いわけではないが、横に長く、やはり出血が多すぎる。
「ミナは無事か?」
「ああ」
リロイは言葉少なに答え、ベッドのシーツを剥ぎ取った。お世辞にも清潔とはいえないが、このまま出血が続けば命に関わる。
「なら、ここから早く逃げろ。俺のことは放っておけ」
胴をシーツでぐるりと縛り、傷口を塞ぐリロイに、バードは荒い息をつきながら言う。しかしリロイはそれを無視して、彼の身体を担ぎ上げた。そしてハンマーを片手に握ると、部屋を飛び出していく。
担がれたバードは時折、呻きながら、達観したように繰り返した。
「この出血だ、どうせ俺は助からない。足手まといになるぐらいなら、ここに置いていってくれ」
「悪いが、あんたひとり担いでたってさして変わりはない。それに、死体だったとしても連れて行くって約束したしな」
通路を疾走するリロイは、淡々と告げる。

問題は、バード自身が動いていないことだ。動けないほどの怪我を負ったか、あるいは
——
「もし、死んでいたとしたら、どうする」
そうそうはっきりとは聞けない最悪の結果を口にするのにも、リロイは躊躇わなかった。部屋から出る直前に振り返り、思いやりとは縁のない厳しい眼差しでミナに問いかける。
「あんたが望むのなら、死体でも連れて帰ってくるぞ」
生々しい、残酷なその言葉に、ミナの顔がみるみる青ざめる。
気を遣う、という行為は、リロイにはハードルが高すぎるようだ。
ミナは、その恐ろしい想像に頬を強張らせたが、それでもはっきりと、言った。
「はい、おねがいします」
「少しだけ、待ってろ」
それだけ言い残し、リロイは部屋から出て行く。
私は、ブガードが壁際に蹴ったソファを前に出し、それに腰掛けた。
あとは、待つだけだ。

3

慎重、という言葉を知らないのか、リロイは上階への階段を発見すると、迷うことなく駆け上っていく。
館を震わせていた振動は、今のところ止まっていた。
リロイがそちらに向かっていることを察知して待ち受けているのか、それとも逃げ出したか——まあ、後者はありえないだろう。人間と違って《闇の種族》は、逃亡するという思考が乏しい。
上階通路を疾走するリロイだったが、唐突に停止する。
中庭に面した窓が打ち砕かれ、なにかが飛び込んできた。飛び散るガラス片とともに通路に降り立ったのは、長い黒髪を振り乱した全裸の女だ。その肌は闇の中に白く浮かび上がり、その指先では長く鋭い爪が鈍い輝きを放っていた。
《闇の種族》下級眷属ラルヴァは、瞳のない黒い双眸でリロイを捉えると、牙の生え揃った口を開き威嚇の音を発する。その音を聞きつけたのか、リロイの前後に次々と裸身が現れ始めた。
下級に分類される眷属だが、知能は決して低くない。
単独行動を取ったリロイへ真っ先に狙いを定めたのが、その証拠だ。
ただし、その相手の力量を計ることまではできないらしい。
ラルヴァの襲撃に気づいて足を止めたリロイだったが、すぐに動き出す。
巨大なハンマーが、轟と唸りをあげた。
遠心力と自重で威力を増したハンマーが、ラルヴァの頭部に激突する。頭蓋骨がその衝撃に耐えられず粉砕され、頭部を構成する組織が木っ端微塵になって飛び散った。
力を失い崩れ落ちる裸身を踏み越え、恐れを知らない二体めが迫り来る。
巨大なハンマーは重量もあり、その破壊力に比して扱いの難しい武器だ。
だが、リロイの膂力はその欠点をものともしない。
間合いに飛び込んできたラルヴァに対して、剣速に負けるとも劣らない速度の打撃が跳ね上がる。胸部に激突した一撃は青白い身体を真上に吹き飛ばし、通路の天井に叩きつけた。肋骨が肺と心臓を突き破り、天井にめり込んだラルヴァは大量の鮮血を口から迸らせる。
その血の雨の下をくぐり、リロイは前進した。
左右に移動しながら肉薄してくる一体は、ハンマーの一撃を警戒している。背後からも、二体のラルヴァが駆け寄っていた。
一斉に襲いかかり、ひとりでも食らいつけばいいとの戦法だ。
リロイは馬鹿にしたように、口の端をつり上げる。
そして、ハンマーを前方の一体めがけて投げつけた。
凄まじい回転で空を破壊しながら飛んだハンマーは、ラルヴァの胴を薙ぎ払う。ハンマーごと壁に激突し、それを粉砕して部屋のひとつに倒れ込んだ身体は、ぴくりとも動かない。

降り立ったのは、長い黒髪を振り乱した全裸の女だ。

「その賞金稼ぎがあんたにとってどんなに大事な奴かは、この際、どうでもいい」
　どうでもよくはないと思うが、リロイはそう断言し、部屋の隅にいる女たちを指差した。
「だが、俺がそいつを捜しに行くってことは、あんたも含めてここにいる奴の命が危険に晒されるってことだ。それでもあんたは、捜してきて欲しいんだな」
「わ、わたしは……」
　ミナは思わず口籠もる。それはそうだろう。ここにいる女たちは、殆どが顔見知りではない。
　リロイが依頼を受けた街でも、さらわれたのはミナだけだ。ブガードたちは移動しながら物資や女たちを強奪し、この古びた館に居を構えたらしい。
　見ず知らずの他人と近しい人間の命を天秤にかけられたとき、どちらを取るかは言うまでもないのだが、内心はどうであれ、そうはっきりと言われてしまっては身も蓋もない。
「どうなんだ？」
「わたしは――」
　ミナは、心の裡の葛藤をその瞳に映して揺らめかせたが、やがてそれは、決意の色に変わった。なにかを振り払うように短い髪を揺り動かし、決然と頷く。
「あの人を助けてください」
「わかった」
　リロイは力強く頷き、ベルトから鞘ごと剣を外した。
「ちょっと待ってよ」
　ここまで成り行きをただ見つめていた女たちの中から、ここにきて抗議の声が飛び出した。
「わたしたちを置いていくの？　外の奴らが来たら、死んじゃうじゃない……」
　リロイが、自分たちではなくミナを助けに来たことは認識しているらしく、引き留めようとするその声は弱々しい。リロイは彼女たちを安心させるように、笑みを浮かべた。
「安心しろ、ここには相棒を置いてく」
　リロイがひとりで来たのだとばかり思っていた彼女たちは、ミナも含めて、目を丸くして辺りを見回し始めた。
　だが、見つかるはずもない。
　私はまだ、リロイの手の中だ。
　ともあれ、ここは私の出番らしい。
　私の意識は、常は剣の鍔元の宝玉の中にあるのだが、立体映像を創り出し、そこに意識を移動させることにより人間形態として行動することができるのだ。空気中の分子を利用した超高密度の立体映像は、ものに触れることもできる。
　私は、プログラムを起動させた。
　部屋の中に突然、現れては、ブガードはともかく女性たちを驚かせるに違いないと考え、廊下に立体映像を創り出す。幾重にもローブを纏った、見目麗しい銀髪碧眼の青年が私だ。
　私はリロイが蹴破った場所から室内に入り、女たちの驚きの眼差しを浴びながらリロイに歩み寄った。そして剣を受け取り、鍔元の宝玉だけ外してリロイに返す。立体映像へ意識と五感を移している今の状態でも、宝玉を通して映像や音声などの情報を収集することが可能だ。
　リロイは宝玉をふところに仕舞い、床に落ちていた武器を拾い上げる。メイスを腰に差し、ハンマーを担ぎあげた。
「あんたが最後にバードを見たのは？」
「この部屋からです。中の様子をうかがっているところを、見つかったみたいでした。何人か追いかけていったみたいですが、正確には分かりません」
「リロイと違って頭は回るようだな」
　私は皮肉をたっぷりこめて言った。
　多勢に無勢なだけではなく、助けるべき相手がそこにいる状態では、現にそうであったように人質を取られて身動きが取れなくなる可能性がある。バードとやらは、その辺りを考慮していたのだろう。
　リロイは私を横目で睨みつけ、小さく舌打ちした。
「どのくらい前だ」
「多分、三十分ぐらいだと思います」
　リロイはそれだけ聞くと、扉に向かう。三十分、追跡したブガードの手下が戻らないことを考えれば、おそらくはバードが返り討ちにしたのだろう。先ほど動き出した大物以外に、なにかが館の中で動いている気配はなかった。

絶句するブガードに背を向け、リロイは窓際に歩み寄った。月明かりの下、蠢く影を確認する。ここに入るときに五体ほどを始末してきたが、まだ二十体近くが館を包囲していた。それらがいつ、襲いかかってきてもおかしくはない。

安全地帯が確保できないこの状況では、ブガードの言うとおり、リロイひとりで女たちをここから脱出させるのは困難だろう。

「餌で釣って、やれるだけやっちまったほうがいいか……」

リロイが非人道的な呟きを漏らしたとき、突然、重々しい響きが頭上から聞こえてきたかと思うと、館自体がぐらりと揺れた。

女たちが、悲鳴を上げて身を寄せ合う。ブガードも不安を隠せないのか、振動で埃が落ちてくる天井を見上げた。

リロイは面倒くさそうに舌打ちする。地震でないことは明白——巨大ななにかが階上で動いた為に、古びた館が軋んだのだ。

ここに突入するとき、確かに、大きななにかの存在を私もリロイも感じ取っていたが、今の今まで動かなかったのでひとまずは放置していたのだが……。

「動き出したか。厄介だな」

私が思わず漏らした呟きに、リロイは頷く。動かなかったものが動いたということは、すなわち動く目的が生じたということだ。特別、悲観的に考えないとしても、その目的はここにいる人間の捕獲に違いあるまい。

その巨大な気配に触発されたのか、外でじわじわと包囲網を縮めていた《闇の種族》も、新たな動きを見せていた。館のあちこちで物音が頻発し、なにかが動き回る気配が至るところで感じ取れる。

リロイは振り返り、女たちに目を向けた。一体なにが起こっているのか、それすら把握できず、恐怖に次ぐ恐怖で彼女たちはパニックに陥る寸前だ。どこかで音が発すれば、悲鳴を上げて身を縮こまらせている。きつく閉じられた瞼から、涙がこぼれ落ちていた。

そのさまを冷徹に見つめていたリロイは、視線を外すと乱暴に髪を掻きむしる。

恐怖は、人間を縛りつけるもっとも身近な感情だ。

今の彼女たちを引き連れ、《闇の種族》の包囲を抜けるのは、さすがにリロイでも簡単なことではない。こちらが予期せぬ行動に出て、自らが死に至るだけならばまだしも、全体を危険に陥れる可能性もある。少なくともリロイの腕は二本しかなく、どれほど戦闘に関して天才的資質を持っていようとも、やはり限界というものがあるのだ。

「ここである程度、迎え撃ったほうがよいのではないか」

「それしかないな」

この部屋の一角に固まって、震えている間は、守るほうとしてもやりやすい。

だが、そんな女たちの中から、ひとりが立ち上がり近づいてきた。ミナだ。

「探して欲しい人がいるんです」

怯えているのは隠しようもないが、それでも真摯な顔つきで、リロイをひたと見据える。

「他にもまださらわれてきた奴がいるのか」

「いえ、その人は賞金稼ぎです。まだこの館の中にいるかもしれません」

ちらりとブガードを一瞥し、リロイは眉根を寄せた。

この部屋に突入したとき、ブガードはリロイを賞金稼ぎの仲間だと勘違いしていた。その賞金稼ぎが、ミナの言っている男のようだ。

だが、リロイの仕事はミナを助けだすことだ。依頼を完遂することだけを考えた場合、他の女性すら仕事の邪魔でしかない。

しかも、その賞金稼ぎが生存しているか、はたまたこの館内にまだいるのかどうかすら不明なのだ。

いずれ、ここにも《闇の種族》が押し寄せてくるだろう。そんな状況下で、いるかどうかも分からない男を捜しにいくなど正気の沙汰ではない。

「そいつの名前は」

「バードです」

どうやら、リロイは正気ではないようだ。彼の特徴を聞き出すその姿に、私は溜息を禁じ得ない。

まあ、前々から分かっていたことだが……。

「ひとつ、確認しておきたい」

リロイは、縋るような眼差しのミナを見据えた。

にものでもない。この状況では、その全員に、間違いなく彼自身も含まれることになるからだ。

リロイはふと作業の手を止め、ブガードを一瞥した。

「よく知ってるな、この館の周りにいる奴らが人を喰うって」

「こちとら、あいつらを追い払うのも日常なんだよ」

ブガードは自慢げに鼻を鳴らしたが、それはつまるところ、これまでに何人かが喰われたということに他ならない。

「悪党稼業も苦労が絶えないらしいな」

皮肉げにリロイが口の端をつり上げると、ブガードは忌々しげに舌打ちして顔を背けた。

作業を再開したリロイは、息のあった四人の男たちの拘束を完了し、続けて、彼らを一本のロープでつなぎ始める。そしてブガードを含めて五人を、数珠繋ぎにした。

「奴らの習性に詳しいなら、知ってるだろうが——」

リロイの作業に疑念の眼差しを向けていたブガードに、リロイは淡々と告げた。

「喰ってる間は、それに夢中になる。それを利用しない手はないよな」

「——てめぇ、まさか俺たちを餌にする気か」

目を見開き、固い声を漏らすブガードは、凝然とリロイを見上げた。

リロイは、見た者の背筋を凍らせるような邪悪な笑みを浮かべる。

RAGNAROK EX.

"Why should I worry about — I knew all along what to do, didn't I?"

なりとも混乱しているようだった。リロイは彼に剣を捨てさせると、人質の腕を掴んだまま、捕らえられていた女たちを解放する。そして、彼女たちに使われていたロープでブガードを縛り上げた。
両手両足を拘束され、絨毯の上に横倒しにされたブガードは、恥辱に歯を食いしばる。
ブガードを完全に無力化したリロイは、ようやく、若い男の腕を放した。
折れた腕から這い上がる激痛に、男はなかば意識を失っている。
リロイはその姿を見下ろし、そして不意に、その腹に強烈な蹴りを入れて悶絶させた。
「て、てめぇ！」
「こいつを許してやるなんて一言も言ってないだろう」
リロイは楽しくてたまらない、といった表情で、床の上の男の背を踏みつけた。男が取り落とした手斧を拾い上げ、ブガードに脅しをかけるかの如く握りしめる。
悪辣なリロイに対して、ブガードは憤懣やるかたないといった表情で呻いた。
「俺を捕まえれば懸賞金が手に入る。それで満足じゃねぇのか」
「俺は賞金稼ぎじゃない。傭兵だ」
そんなことはどうでもよさげに、リロイは言った。
賞金稼ぎがひたすらに賞金首を追う職種なのに対して、傭兵といえばなんでも屋に近い。そして賞金稼ぎが殆ど個人的な生業なのに対して、傭兵には傭兵ギルドという組織が存在する。その中で傭兵は実力と実績に応じてランク分けされ、それに見合った仕事と報酬を受け取る仕組みだ。
リロイは自由契約の傭兵だが、かつてはギルドに在籍し、最高ランクであるSS級の地位を約束されるほどの実力者だった。
《黒い雷光》、《疾風迅雷のリロイ》といえば、その筋では知られた二つ名である。
「ミナって女はいるか？」
人質に使った男を踏みつけながら、リロイは女たちを一瞥する。ブガードたちを一蹴し、自分たちを助けてくれた相手であるにもかかわらず、目を向けられた女たちは萎縮したように体を竦ませた。
まあ、悪党ですら尻込みするようなリロイの言動を目の当たりにしたのだから、素直に助けが来たと喜べない心情も理解できるというものだ。
「……わ、わたしです」
やがて手を挙げたのは、ブガードに乱暴されかかっていた小柄な女だった。リロイは頷き、ようやく若い男の背から足をどけると、壁に死体を縫いつけたままだった剣を引き抜く。
「あんたの街の人間に依頼されて助けに来た」
これを聞いて――正確には、助けに、という単語を聞いて――ミナばかりではなく、他の女たちも安堵の色を顔に浮かべた。
剣を鞘に収めたリロイは、余ったロープで、まだ息のある男たちを縛り上げていく。殆どが重傷で、放置しておけば絶命するのは明らかだ。それを憎々しげに見つめていたブガードは、なにもできない代わりに、声にたっぷりと悪意を乗せた。
「おまえひとりで、その女たちをつれて無事に出て行けると思ってるのか？　この館の周りには《闇の種族》がうろついてるんだぜ」
「知ってる。入ってきたときに見たからな」
ブガードの言葉は、リロイの作業の手を止める役にすら立たなかった。
しかし、女たちは一様に顔から血の気が失せ始める。ここに連れ込まれるときもそれなりに恐ろしい思いをしたようで、助かった安堵をそれが上回り、その身が小さく震え始めた。
《闇の種族》――出自も正体も謎とされる、人類の天敵だ。その異形の姿に、人間を遥かに凌駕する膂力と生命力を秘めている。総じて人類に激しい敵意を持ち、無差別に襲いかかってくる恐るべき存在だ。
《闇の種族》はその能力や外見によって幾つかに分類されているが、下級に分類される眷属でさえ、普通の人間にとっては太刀打ちできない相手である。上級ともなれば、それはもはや生物というよりも、物語の中に登場する魔神や魔王と遜色のない超常的存在だ。
「おまえら全員、奴らに喰われちまえ。いい気味だ」
ブガードは嗤ったが、それは虚勢以外のな

リロイは楽しくてたまらない、といった表情で、床の上の男の背を踏みつけた。

両手に握った小柄な男だ。

仲間の無残な末路に、冷静さを失っているらしい。続けざまに短剣を繰り出してくるが、狙いが甘く、リロイの突進の勢いを止める役には立たなかった。

リロイは短剣を握った彼の手首を手刀で弾き、隙ができたその部分に拳を撃ち込んでいく。胸骨に激突したその打撃は、骨を粉砕しつつ小柄な彼の身体を吹き飛ばし、壁に激突させた。脆くなっていた壁が陥没し、振動で天井から漆喰が剥げ落ちる。身体をふたつに折って這い蹲る男は、咳き込んだ拍子に大量に吐血していた。

リロイはその結果を見届けることなく身を捌き、死角から撃ち込まれたハンマーの打撃をやりすごしている。

鈍器というに相応しい鉄の塊は、絨毯の下の床板を破壊し、長年の間にたまっていた粉塵を巻き上げた。ハンマーを手にした巨漢は、すぐさまそれを持ち上げ、リロイへ再び叩きつけようとしたが果たせない。

そんな鈍重な動きを、リロイが黙ってみているわけがなかった。

彼がハンマーを持ち上げたとき、すでにリロイは彼の背後だ。ハンマーに勝るとも劣らない威力を秘めた左右の拳が彼の脇腹を殴打し、巨躯がよろめいたところへ、股間めがけて足が跳ね上がる。巨漢は悶絶して崩れ落ちると、声もなく痙攣した。

巨躯が倒れると同時に奇声を上げて間合いに飛び込んできたのは、禿頭の男だ。拳に鉄製のナックルを装着していることから、格闘——というよりも殴り合いが得意のようだ。繰り出してくる左右のコンビネーションは、なかなか堂に入ったものだったが、残念ながら一発たりとも命中することはなかった。矢継ぎ早に撃ち込まれる拳をあざやかに躱し、カウンター気味に繰り出したリロイの一撃は、男の顔面を捉えていた。鼻柱を砕かれた禿頭の男は転倒し、苦痛の呻きを漏らす。

リロイは小さく鼻を鳴らし、頬についた返り血を手の甲で拭った。

残るふたり——剣を手にしたブガードと、手斧を握りしめた若い男は、相手が素手でありながらまったく歯が立たない状況に愕然としている。

すぐに立ち直り、行動に移ったのはブガードだった。

捕らえていた女たちのところに駆け寄ると、その中のひとり——ショートカットの若い女を後ろから羽交い締めにして首筋に剣を押しつけた。

「動くなよ！　この女が——」

人質を取り、脅しをかけようとしたブガードの声は、それこそ剣で切断されたように途切れた。

その目に映るのは、手斧を手にした若い男が、リロイによって捕縛されている光景だった。

「おまえこそ、剣を下ろして女を解放しろ。さもないと、こいつが経験したことのない痛みで泣き叫ぶさまをたっぷり目に焼きつけることになるぞ」

リロイによって腕をねじ曲げられ、若い男は苦鳴を漏らして手斧を取り落とす。ブガードは自らが人質にした女に目をやり、それから仲間の苦痛に歪む顔へ視線を移した。

その目には困惑がある。

自分が人質を取って、相手の優位に立つというやり方を選択肢の中に入れておきながら、自らがその立場に立たされるという可能性は考慮していなかったようだ。

まあ、賞金首になるような連中なら、それが普通か。

「迷う暇なんてないぞ」

黒い瞳に禍々しい光を宿しながら、リロイは躊躇うことなく、男の腕をへし折った。骨が折れる音に、喉の奥に引っかかるような苦痛の叫びが重なる。激痛に立っていられなくなり、足下に崩れ落ちる男の、無事なほうの腕をリロイは掴み取った。

「さあ、早くしろ。俺は気が短いんだ」

「わ、分かった」

ブガードは慌てて、人質にしていた女の首筋から剣を引いた。若い男の無事なほうの腕が、関節を無視した動きを強要させられそうになっていたからだ。リロイの徹底したやり方に、彼の表情は強張っている。

人質を取ったのに人質を取られ、有利な状況が不利な立場へと一転し、ブガードは多少

RAGNAROK EX.
"Why should I worry about — I knew all along what to do,didn't I ?"

ブガードの憤激を、リロイはせせら笑う。
「覚悟が足りないんじゃないのか？　まあ、もう今更、遅いけどな」
　そして、無造作に包囲網の中へ歩を進めた。
　ブガードを始めとする男たちは、屈辱的なリロイの言葉に声もなく、怒りに双眸をぎらつかせる。
　無意味に相手を挑発するのは如何なものかと思うが、この男の性格上、致し方あるまい。
　前進してくるリロイを、左右から挟み込むようにしてふたりの男が迎え撃つ。
　横薙ぎの斬撃はリロイの前後から急襲し、逃げ場を奪う。躱しにくく受けにくい連携だが、そもそも、間合いを詰めてくる彼らの動きも斬撃の速度も、遅すぎた。
　リロイは右手側――前方からの攻撃に反応する。恐れる様子もなく、薙ぎ払われる刃へと自ら突き進み、神速で振り上げた剣を叩きつけた。耳に痛い金属音が炸裂し、折れた鋼が、弓から放たれた矢のように天井に突き刺さる。
　すぐさまリロイは、右方向へと身体をスライドさせた。
　左手側――背後からの攻撃は空を切り、切っ先を下に向けたまま、リロイは折れた剣を握りしめる男のふところへと潜り込んだ。
　その動きは、彼らの反応速度を遥かに凌駕していた。
　得物を失った男は、跳ね上がってくる刃を受けることも躱すこともできなかった。下顎から垂直に駆け上る剣身は、男の顔を削り取って額に抜ける。切り取られた顔が、絨毯の上で濡れた音をたてた。顔面を失った男は後ろへ蹌踉めき、驚いたように指先を持ち上げるが、それが自身の喪失部分に辿り着くことなく力を失い崩れ落ちる。
　左手側から攻撃を仕掛けてきた男は、相方の剣が叩き折られ、そして顔面を失うその流れを殆ど視認できなかったようだ。
　足下に落ちた仲間の顔を見て、考えるより先に本能が身体を突き動かした。
　身をひるがえして部屋から飛び出そうと試みたのだ。
　だが、その動きさえ鈍重すぎた。
　リロイは振り返りざま、彼めがけて剣を投擲する。空を貫き直進する切っ先は、男の肩胛骨の間に深々と突き刺さった。肉を断ち骨を砕くその威力に男の身体は吹き飛び、胸から突き出た剣先が壁を抉る。
　まるで昆虫採集の虫のように壁へ縫い止められた男は、小刻みに痙攣して息絶えた。
　――そろそろ、自己紹介しておこう。
　私の名は《ラグナロク》。
　逃げだそうとした男を壁に縫い止めた剣――
――それが、私だ。

2

「馬鹿が！」
　ブガードが吼えた。
　仲間たちが次々と絶命していく悪夢のような光景と、その中で希望を見いだした喜びに、彼の声は震えていた。
　ブガードを含めて六人の男たちが、いまだ健在だ。いくらリロイが手練れとはいえ、武装した荒くれ者たちに素手では不利は否めない――と、ブガードは思ったのだろう。
　この最大の好機を逃さぬよう、彼らは一気に包囲網を狭めてきた。
　しかしそれは、大きな間違いだ。
　剣を振りかざして駆け寄ってくる長身の男を、リロイは徒手空拳であるにもかかわらず、余裕の表情を顔に浮かべて迎え撃つ。
　撃ち下ろされる刃は、リロイの肩口に狙いを定めていた。それが空を切ったのは、リロイがわずかに身を捌き、踏み込んでいったからだ。
　至近距離から、突き上げるような拳を男の腹部へ叩き込む。
　腹腔内に衝撃が伝わる鈍い音とともに、男の身体が宙を舞った。
　すでにその一撃で意識を失っていたのか、回転し、背中から絨毯の上に叩きつけられるときも、受け身すら取れていない。
　リロイは、眉ひとつ動かさずに踵を振り下ろした。
　正確無比に喉笛を踏み砕いたその一撃は、男を絶命させると同時に、次の攻撃への第一歩でもある。
　目を血走らせて肉薄していたのは、短剣を

覚悟が足りないんじゃないのか？まあ、もう今更、遅いけどな。

めた場合は遺体かそれに準ずる証拠品が必要だが——賞金首を捕まえさえすれば報酬を手にすることができた。

大陸中央部では、どちらかというと粗野なイメージのある賞金稼ぎだが、西方諸国では歴とした職業のひとつである。

「残念だが、おまえの仲間はどこかで勝手にくたばってるぜ。この俺さまの手にかかるまでもなくな」

「随分お喋りな賞金首だな」

リロイは冷笑し、しかしその目は、男たちの一挙手一投足を具に観察している。唐突に現れたリロイを見て驚いていた男たちは、すでに落ち着きを取り戻し、戦闘態勢に入りつつあった。腰に差した鞘から剣身を引き抜き、あるいは、撲殺目的のメイスを握りしめる。

「こういう場合は、もう黙って殺し合うしかないだろ。少なくとも、こっちはそのつもりなんだがな」

「——いい度胸してやがる」

頬傷の男——賞金首ブガードは、リロイの不遜な態度に頬を歪めた。

荒くれ者たちを引き連れて、強奪、殺人、強姦などを繰り返していたブガード一味には、多額の懸賞金がかけられている。だが、ブガード自身がかつて小国の騎士をしていたこともあり、それなりに組織化された一味は、これまで何人もの賞金稼ぎを返り討ちにしてきた。彼らにすれば、たったひとりで自分たちの前に現れた上に、人数差をものともしないで戦いを挑んでくるリロイは異質に映ったかもしれない。

「さあ、始めようか」

殺気が噴き出すそのただ中で、リロイは口の端をつり上げて嗤った。

ゆっくりと、剣の柄に指を伸ばす。

凶相の男たちは、リロイに剣を抜かせないつもりらしい。リロイが攻撃態勢を取る気配を見せた瞬間、特に打ち合わせしたようにも見えないのに、三人一組の男たちが襲いかかってきた。

先頭の男は、この集団の切り込み隊長的な役目なのか、長髪を靡かせて肉薄してくる。躊躇なく間合いに踏み込みつつ、低い姿勢から細身の剣を突き出してきた。なかなか俊敏だ。これを受ける、あるいは躱したとしても、後ろからの第二、第三の攻撃がバランスを崩したところへ繰り出されるという寸法らしい。

この戦法に、それなりの自信があったのだろう。

長髪の男は、鈍い衝撃が身体を襲っても、すぐには状況が飲み込めない顔をしていた。

剣を鞘から引き抜き、繰り出された刺突を弾き、そしてバランスを崩したところへ剣を振り下ろす——その一連の動きは、男の想像外の速度で行われたのだ。

長髪の男は脇腹を断ち切られ、血飛沫を纏いながら絨毯の上に顔面から激突する。

切り込み隊長が易々と屠られたことを、続く男たちが驚愕する暇はなかった。

リロイはふたりめの男がメイスを振り下ろしてくるより早く、その顔面を切っ先で抉る。顔面を破壊して頭部に突き抜けた剣身は、進入時と同じ速度で引き抜かれ、三人めの首筋へと食らいついた。美しい弧を描く刃は彼の頸動脈を噛み千切り、瞬時にしてその生命を奪い取る。

切り込み隊長と、それに続くふたりの男を瞬きの間に殺害したリロイは、剣を振るってついた血糊を絨毯の上に飛ばした。

「別に、準備運動させてくれなくてもよかったんだがな」

事も無げに言い放ち、リロイは肩を竦める。

男たちは、自分たちと相対しているのがただ者ではないと悟ると、これまた声を掛け合うでもなく、リロイを包囲するように室内をゆっくりと移動し始めた。

「やってくれやがったな……！」

ブガードの軋むような怒りの声に、女の悲鳴が重なる。ソファの上で硬直したまま成り行きを見つめていた女を、物のように、縛られた女たちのほうへと放り投げたのだ。そして古びたソファを壁際へと蹴りつけ、床に転がしていた剣を手に握る。その目は、死した男たちを凝視したまま凄絶な輝きを灯し始めていた。

「俺の仲間を殺して、楽に死ねると思うなよ」

「さんざん人殺しといて、自分の番が来たらそれかよ」

湿った部屋の空気がさらに重くなるような

Main Characters

リロイ・シュヴァルツァー

主人公。フリーランスの傭兵。その並外れた戦闘能力から《疾風迅雷のリロイ》などの二つ名を持つ。意志を持つ剣〈ラグナロク〉を相棒に、戦いの日々は続いてゆく──。

ミナ

リロイが依頼を受け、助けることになった少女。賞金首ブガードにさらわれてしまった。

ラグナロク

リロイの無二の相棒にして、意志を持つ魔剣。常に冷静沈着。破滅的な行動をするリロイを助ける。普段は剣の鍔の宝玉に意識が封じられているが、立体映像として顕在化できる。

バード

賞金稼ぎの男。ミナの兄。ブガードを追って、アジトである館に潜入したが……!?

1

施錠されていたドアを、我が相棒リロイ・シュヴァルツァーは蹴り開けた。

衝撃で蝶番が弾け飛び、埃が霧のように舞う。室内へ飛来したドアは、運の悪い誰かに激突し、悲鳴と共に黴臭い絨毯の上を跳ねた。

驚愕に見開かれた無数の双眸が、戸口に立つ黒い姿を視界に収める。黒いレザージャケットを羽織り、黒の革パンに黒いブーツ──薄闇の中で目にすれば、人間と言うよりも悪魔のように映る。

リロイは、その漆黒の瞳で室内を一瞥した。

かつてリビングとして利用されていたその部屋は、かなり広々としている。だが、壁の至る所に亀裂が走り、天井の漆喰は剥げ落ち、床に敷かれた絨毯は色褪せていた。雨漏りが酷いのか湿気が多く、黴の臭いが充満している。

最初に目に入ったのは、男たちの集団だ。十人ほどの男たちは、いずれも武装し、一般人とは違う暴力の匂いを漂わせていた。長いアウトロー生活のせいで、顔には禍々しい表情が深く刻み込まれている。

そして部屋の片隅には、彼らとは違う世界で生きてきた、と思われる女たちが後ろ手に縛られて身を寄せ合っていた。顔から血の気は失せ、唇は恐怖で小刻みに震えている。リロイがドアを蹴破ったとき、悲鳴ひとつあげなかったのは、声すら出せないほどに怯えきっていたからだろう。

リロイの視線は、部屋を一巡りすると、中央に置かれたソファで停止した。そこでは、大柄な男が小柄な女性を組み敷いている。無理矢理なのは、彼女の表情を見れば一目瞭然だ。衣類は乱れているが、どうやらぎりぎりのところで間に合ったらしい。

「なんだ、てめぇは」

ソファ上の男は、腹に響くような声で恫喝してくる。なかなか凄みのある顔つきだ。頬に醜く残った傷跡が、彼の暴力に満ちた生活を物語っている。

男はリロイの姿を睨め付けながら、床に降り立った。

「──そうか、あの賞金稼ぎの仲間か」

リロイが応じる前に、男は独りごちた。

ここ西方諸国には、無数の小国家や自治領が存在する。その為、大陸中央のアスガルド皇国やヴァナード王国のように広大な版図を有する国家とは違い、警察機構が広範囲にわたって犯罪者を取り締まることができない。自国領を飛び出した犯罪者を追いかけた場合、逃亡先の国や自治領の警察諸機関との連携が困難なのだ。

一言で言うと、縄張り争いである。

そこで生まれたのが賞金首制度だ。

犯罪を犯したものを賞金首として、その捕縛に懸賞金をかける。生死は問わず──仕留

〈最強の傭兵〉リロイのもとに、ある依頼が舞い込んできた。
現場に足を踏み入れるとそこには……!?
剣風渦巻く超格闘ファンタジー連載第2弾。
リロイの黒き雷光が、悪と《闇の種族》を斬り裂く!
RAGNAROK EX.
Pay Back
ラグナロクEX.～ペイバック
安井健太郎
Kentaro Yasui
イラスト
TASA

い。ジャバンは美奈子を圧倒していた。本来ならば、やはり勝てるはずのなかった相手。それでも勝てたのは、やはり勢いに乗っていたからなのだろうか……。

　ああでもないこうでもないと考えながら、ヒデオはみんなとアパートへ向けて歩く。

「ところであの二人って、どっちが人間ではなかったんでしょうね？」

　美奈子がぽつりとつぶやくと、大家さんが懐から携帯端末を取り出し照合する。

「地球刑事で登録されてますのニャ」

　それを覗いたウィル子が納得したように。

「柴崎甲士郎が仮の姿で、地球刑事が正体と言っていたのですよー」

　受付のラティ嬢が騙されたのだろうか。

　というのは誰もが思ったが、誰もが口にしなかったここだけの秘密。

「親睦会が、ヒデオさんたちにはおめでとう会になりましたニャ。それではお待ちしてますニャ？」

　アパートに帰ってきて、大家さんは一階入り口近くの管理人室へ。ヒデオと美奈子は、それぞれの買い物袋を置きに自室へ。

「にひひ。でも残念でしたね、マスター。マスターが婦警を庇ったりしなければ、ライバルも減って一挙両得だったのですよー？」

　ウィル子はいつでもジャバンに勝てると知っていたのだ。だから美奈子を庇った時にも、無意味なことだと。

「だからあの土壇場まで黙っていたんですね!?　そう言えばあなた！　もう少しであの人死ぬところでしたよ！　ウィル子といいましたね!?　殺人未遂で逮捕します!!」

「にははっ！　一休さんでもするつもりですか？」

　ウィル子がノートパソコンの中に退避した。屏風のトラに縄はかけられないということだ。

　諦めて美奈子は隣の自室に。ヒデオもまた自分の部屋の前でドアの鍵を取り出したとき、言わねばならないことを思い出す。

「助けてもらって。ありがとう」

「えっ……？」

　と面食らったような美奈子。

「あ、いえ、あの、本官は……」

　そんなことを言われるとは思ってもいなかったのか、美奈子はもじもじと。

「本官こそ、あのとき庇ってもらって……本官はあなたのことを誤解していたようです。ヒデオさん」

「……いえ。別に」

　沈黙が訪れる。

《なんなのですかこの空気はー！　ウィル子は嫌いなのですよー!!》

　パソコンのスピーカーから、ウィル子の声。

　美奈子がはたと。

「え、えっと、それではまた後で」

　美奈子はそそくさと部屋の中へ入って行った。ヒデオもまた、自分の部屋に。パソコンを置き、買ってきた荷物を投げ出し、座り込む。

（……疲れた）

　疲労と空腹。筋肉痛は不思議なことに、光線銃を受けてから大分楽になっていた。

《そういえばマスター、二日くらい何も食べていないのでは？》

「我ながら。燃費がいいと、思う」

《余計な肉はいりませんけど。必要最低限の肉くらい付けてくださいね》

　全くだ。大家さんには、遠慮なくご馳走にならなくては。ヒデオは重い腰を上げ、大家さんのいる管理人室に向かう。

　明日を戦い抜くための、カロリーを得るために。

to be continued...

明日の『聖魔杯』無責任大予想

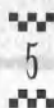
賞味期限が切れた食物を食べると体中にじんま疹がでる機能を最近発見した（実話）新担当がお贈りする、次回の無責任大予想だぞ。

隣の部屋に美人警官、ウハウハのヒデオに、さらに未亡人乱入!?　12人の妹も加わって始まる大ツイスター大会。ヒデオを待ち受けるのは春画か地獄か!?

次回『戦闘城塞マスラヲ第4話・メロメロ大作戦（仮）』にウイルス・イン！

……本官は誤解していたようです。

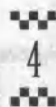
す」
（極悪……）
「あ、まだ残ってました。ジャバン・音声システム。いただきっ♪」
「……」
声もしなくなった。ひゅうと吹きすさぶ一陣の風に、街灯に照らされた沈黙のジャバンスーツがもの悲しい。
「ウィル子。殺したら」
「あ」
ジャバンOSという珍味を食べるのに夢中で、普通に忘れていたようだ。はっと気付いたような美奈子が、ジャバンのヘルメットを岡丸で叩き割った。
「大丈夫ですか!?」
「たっ……助かっ……」
息も絶え絶え。
一同がホッと一息した、そのとき。
「よくぞこの男の思い上がりを正してくれた……礼を言おう」
塀の向こうから、今どきカセットデッキを持った白衣姿の壮年がよっこいしょと現れた。変身の時にテーマソングを流したのは、この人物だったようだ。
「お……おやっさん……！」
それがジャバンのパートナーであるらしい。
「おやっさんって……また違う話が混ざっていませんか？」
ウィル子が言うが、ヒデオは知らない。おやっさんなる人物は、ジャバンの肩にぽんと手を置いた。
「わかったか甲士郎。これが世界の広さだ。それを……その世界さえ飛び越え、いきなり地球刑事を名乗ることがどれほど愚かな話か。わかっただろう……」
「ああ……目が覚めたよおやっさん。村落刑事、ご町内刑事、島刑事というステップアップには、そういう意味があったんだな……。島で通用した正義が、世界にまで通用するわけじゃない、か……」
随分と地道な努力を重ねているらしい。
おやっさんは特殊な工具を使い、文字通り凝着したようなジャバンスーツを解体していく。ようやく体の自由を取り戻したジャバンこと甲士郎。
「でもおやっさん、このオレは諦めないぜ。いつかきっと、画面の中に輝いていた、あの宇宙刑事たちのようになるために……オレはオレの正義をもう一度見詰めなおしながら、ステップアップしていくぜ！」
「うむ、その心意気だ！」
ガッ。と固く手を握り合う二人。
（いい、話だ）
夕暮れの海辺であれば、さぞ絶景であっただろう。
「ウィル子はこういうノリは好きではないのですよー。結局負けを認めるのですかー？」
台無しだ。電子ウイルスに情緒を求めようというのが無理な話なのだろうか。
おやっさんは快く頷き、
「うむ、ジャバンスーツはこのありさま、わしは技術者で戦闘能力というものはない。ジャバンスーツのソフトウェア面での弱点も発見できたことだし、君たちには喜んで勝ちを譲ろう」
「ヒデオさんとウィル子さんの勝ちですニャ！」
おやっさんの宣言に、大家さんがさっと手を上げる。正義VS超正義。しかして勝者は極悪という、なんともいたたまれない結果に終わったのであった。

5

ジャバンたちは敗退手続きのために、センターへ向かって去って行った。その頃にはヒデオも、再び痺れが取れていた。
（……）
今回の勝因は、ひとえに相性のよさだ。ウィル子が感染できるようなものを着込んでいたジャバンが、不運だったというより他ない。
そして……あんなものを凝着するような相手が、二人と現れるはずもない。
（つまり）
今回の勝負もまた、まぐれと言えばまぐれ。別段得るものはなかったわけである。ジャバンからあの光線銃でももらえればまた話は違っただろうに、世の中そこまで甘くはない。
（否）
負けなかっただけ良しとしなければならな

受付で、パソコン端末に触れて侵入しようとしたウィル子。それが今回は、ジャバンスーツ（真）だったということか。
「にはははっ！　宇宙刑事に比べればたかが一惑星規模！　ニセモノは所詮ニセモノ！　ウィル子の敵ではないのですよーっ！」
「このオレが悪かった！　憧れてただけなんだ！　超正義は悪ふざけが過ぎたと思っている！　だから助けてくれっ!!　とにかく息が！　死にたくないー!!」
　悲痛な叫びがスーツの中に木霊する。
「にひひ。負けを認めるのですかー？　婦警にじゃなくて、ウィル子たちに負けたと認めるのですよー！」
「わかった……わかったから！　このままだと、死ぬ！　死んでしまう……！　システムを元に、戻してくれ……!!」
「跡形も無く食べちゃいましたから、無理で

ヒデオさん!?　どうして……！

だがそのことを、勝負に熱くなっていた美奈子よりも、ヒデオの方が予測できていた。シビレはかなり薄らいでいた。
「ジャバン・ブラスター!!」
セリフに合わせて、ヒデオは美奈子に飛びかかる。どんぴしゃのタイミングで、色付き光線はヒデオに再び直撃する。
「マスター!?　なんて無駄なことを!?」
（……）
味方に否定されることまでは予測できなかった。
「チッ……まだ生きていたか、目付きワル怪人」
死んでいたらお前も失格だ、と言い返したかったが、どうせ何を言っても聞いてくれなそうなのでやめる。
ただその中で、美奈子だけがとてつもないショックを受けたように立ちすくみ、足元に倒れたヒデオを見詰める。
「ヒデオさん!?　どうして……！」
「……あなた、は。……しい、と」
そう。あの男の正義よりは、彼女の正義の方が正しいと。そう思う。シビレでうまく言葉にはできないが。
「ヒデオさん……」
「美奈子殿。この心意気、無駄にするわけにはいかぬでござる」
岡丸の声に、美奈子が十手の柄を握り直す。
「ええ、もちろんよ！」
「盛り上がってる所を悪いのですが、ウィル子はそういうノリは好きじゃないのですよー」
は？　と一同。
ウィル子が姿勢をただし、飛びっきりの営業スマイルを見せる。
「警告！　ジャバンOSバージョン2．01bがWill．CO21に感染しています!!」
ビクッ！　とジャバンが硬直した。
「う……動けないっ……!?」

4

「まさか本当に、このオレのジャバンスーツにウイルスが!?　そんな馬鹿な、いつの間に!!」
「変身直後、ウィル子がぺたぺた触ったときに接触感染したようです。削除しますか？」
受付嬢のスマイルで、ウィル子は手の平の上に大きなポップアップウインドウを開いて見せた。『YES』『NO』の二択。
身動きが取れないという異常事態に、半ばパニック状態となったジャバンは叫ぶ。
「い、YESだっ！」
「はい、ジャバンOSを削除します。しばらくお待ち下さい」
「NO〰〰〰ッ!!」
「はい、Will．CO21は削除されません」
「ちがう！　OSを削除しないで、ウイルスを削除するんだっ!!」
「いやです」
極悪。
（まさに……極悪）
まあウイルスに向かってウイルスを削除しろというのも滑稽な話だ。超愉快型極悪感染ウイルスが、愉快に本領を発揮する。
「Will．CO21はお仕事中です。しばらくお待ち下さい」
「やめろーっ！」
「Will．CO21はお食事中です。しばらくお待ち下さい」
「いやだ――っ!!」
「Will．CO21は、ジャバン・パワーアシストシステムをおいしく頂きました。Will．CO21は、ジャバン・パワーアジャストシステムをおいしく頂きました。Will．CO21は、ジャバン・カメラコントロールドライバをおいしく頂きました。Will．CO21は、ジャバン・バランスコントロールドライバをおいしく頂きました。Will．CO21は、ジャバン・ライフセービングシステムをおいしく頂きました」
やがてジャバンはだらんと棒立ちになる。ヘルメットからバイザーの輝きが失われる。ずしゃん、と重い音を立ててメタリックスーツが崩れ落ちる……。
「見えない!?　動けない!!　暗い！　狭い！　息が！　苦しい！」
声はすれどもぴくりとも動かず。さながら、等身大の牢獄と言ったところだろうか。
（恐ろしい、話だ……）

そんな元気に親指立ててウインクされても。
「というわけで、さあ婦警！　まずはこの怪人を捕縛だ！」
（……）
ジャバンと大家さんの解説が長かったおかげで、シビレが和らぎ始めていたヒデオ。だが美奈子に手錠をかけられてしまっては、シビレが取れても身動きはできなくなってしまう。
（……負ける）
手錠を手にした美奈子が、倒れたヒデオの横に立った。
「美奈子殿」
その確認するような声は、美奈子の十手。岡丸であった。
「美奈子殿は、ヒデオ殿に借りがあるのではござらぬか？」
今朝の勘違いのことか、昨日ぶん殴ったことか。
「……うっさいわね十手のクセに。借りなんてないわよ！」
ふん、と美奈子は鼻を鳴らして、ヒデオの顔を覗きこむ。
「でも逆恨みはされてるみたいだから、これで貸し借りなしよ」
逆恨みではなく。
（……普通に。恨んで、いるのですが）
「どうしたんだ、婦警！　早くそいつに手錠を……」
美奈子はついとジャバンへ向き直った。
「あなたの超正義は間違っています！」
「なにっ……!?」
「ルール改正を知らないと見計らった、卑怯な不意打ち！　自分以外は怪人と言い捨て、あろうことか自分がこの町の法だなどと言い出す傲慢さ！」
誰かも、この町には警察がないのでどうたらこうたら言っていた気がしたヒデオだが、ここはそれこそ流れに任せることにする。
「よって日本警察という名の真の正義を代表し、正義詐称であなたを逮捕しますっ!!」
「くっ、なんて婦警だ……ただの正義が超正義に勝てるとでも言うつもりなのか！」
十手を振り抜いた美奈子。
「勝たなければなりません！　彼が言ったような本来あるまじき不信感を払拭するためにも、我々警官は正義として常に正しく勝ち続けなければならないのです!!　あなたのような悪に屈するわけにはいきません!!」
憑依武器『岡丸』は一瞬でその丈を長剣ほどの長さにまで。
「このオレを……悪と呼んだな!?　許さん！　ジャバン・ソ――――ドっ!!」
「行くわよ岡丸!!」
ジャバンスーツ（仮称）の力なのか、それとも地球刑事の実力か。サイバーデザインのブレードと、この上なく古めかしい十手との、世にも珍しいチャンバラ劇は白熱を極めた。
おいていかれたのは倒れたヒデオと、何もしていないしされていないウィル子。
「大家さん、この場合はどうなるんですか？」
「勝った方の勝ちですニャ？」
「婦警が勝ったらウィル子たちは!?」
文字通り火花散る攻防を目で追いながら、大家さんが言う。
「ジャバンさんが敗退して、ヒデオさんのやられ損ですニャ」
つらい。
しかし、負けるよりはずっといいだろう……とヒデオが思うのも束の間。
「はっはっは！　さっきの威勢はどうした婦警！　見ろ、これが地球刑事の力だ!!」
生身の人間よりは、どう見ても強そうなのがジャバンスーツ（仮称）。だんだんと美奈子は疲れ気味に、ジャバンは息を切らす様子すらなく、稽古をつけてやっているような力関係にまで成り果てる。
「たかが一地方の公務員が、地球規模の刑事に敵うはずがない！」
「くっ……！　なんて不条理！」
（だが）
ようやく、少しは動けるようにまでシビレが回復してきたヒデオ。
「とどめだ婦警！」
「しまった……!?」
美奈子がうろたえた。
ジャバンが突然後ろへと飛び、距離を置いたのだ。そう、向こうには飛び道具がある。美奈子の動きが疲れて鈍くなった所で、狙い撃ちするつもりだったのだ。

反則！　反則なのですよー！

（厄介なのに。捕まった、ようだ……）

だから。こんな奴は早々に負かして、退場してもらうに限る。そう考えれば申し出を受けたのは正解か。まあどの道勝負は成立しているのだ。

（問題は）

何で勝負するかだ。むしろここが勝負どころと言えなくもない。ヒデオはまず、相手の出方を見ることにする。

「……それで。勝負方法は」

「なに？　フフフ。ははは！　そうか、やはりな！　行くぞ！　ジャバン・ブラスターっ!!」

腰から抜いたピストルが、真っ直ぐヒデオに向けられる。銃口を向けられたら避けるような訓練を受けていないヒデオは、身をすくめもしなかった。

棒立ち。何かのヒーロー、超人ではあるまいし、咄嗟に避けるなんてできようはずもない。銃口から放たれた色付き光線がヒデオを直撃する。ヒデオは、ピリピリと全身が痺れる感覚に身を任せる他なかった。せめてウィル子の家であるノートパソコンを、地面に落とさないよう、抱えたまま倒れ込む。

「マスター!?」

（これは。シビレる……）

言うなれば、全身が正座していたような。動こうとすると痒いようなくすぐったいようなで、体が言うことをきかないのだ。

「本来なら怪人は抹殺するべきだが、殺人を認めないという大原則に則り……パラライズモードで、少しの間動けなくなってもらう！　運がよかったな、目付きワル怪人」

いちいちポーズを取るのをやめて欲しい。

「反則！　大家さん反則なのですよー！」

「反則ではありませんのニャ？」

ぎょ、とウィル子の目がまん丸くなった。

「どーしてなのですかーっ!?　勝負方法を決めて、それを審判に申請してから勝負のはず！」

「解説してやろう」

ブラスターを構えたままのジャバンが言うことには。

昨夜の開幕後、ビンゴ大会などのイベントもあらかた片付いた頃。ちらほらと勝負を申し込む参加者も増えてきたのだが……当然、お互い有利な条件で勝負をしたいものだからなかなか勝負方法が決まらない。一回負ければそれまでの大会。お互い一歩も条件を譲らず、そもそも勝負が始まらないという事態がそこら中で起こったのである。

いくら大会が無期限だからといっても、キリがなければラチも明かない。そこで明け方近く、主催者側から『基本ルール』というものが提示された。

すなわち、とジャッジの大家さんがまとめる。

「特に無条件で参加者同士の勝負の合意が成立した場合、勝負方法はバトルに限定されますニャ」

（つまり）

いいやめんどくさい、とりあえず始めちゃおう……という具合に。勝負方法を決めずに始まった場合は、戦闘になるということか。

よりによって、

（最も、不得手な）

しかし参加者の装備や、開会セレモニーでのあの反応を見れば、それがもっともスムーズだろう事も容易に想像がついた。

「この場合、片方の明らかな戦闘不能をジャッジが認めるか、参加者が戦意喪失の宣言をするか、対戦相手を捕縛してセンタービルに引き渡すかでのみ、勝敗が決まりますニャ」

「マスターがかっこつけて早退しなければ……」

勝利者インタビューを避けるために、仕方なかったのだ。が、

「……」

無表情がトレードマークのヒデオも、さすがに冷や汗を浮かべてしまう。最後まで会場に残っていれば、おのずと知れていた事実。それを知らずに精神論を語り、勝負に乗ってしまったのは自分。

「大会に関する情報はテレビやラジオ、インターネットの聖魔杯公式サイト『みんなのひろば』でも、随時お知らせしてますニャ？　要チェックですニャ」

テレビやラジオは持っていない。パソコンは、

「これでおあいこですね、マスター！」

嫌いだ」
ずごごごご、とどす黒いオーラを纏うヒデオに、頼もしさを覚えるようなウィル子。
「おおっ⁉　フォースの暗黒面が、マスターに力を！」
「……そう。例えば」
ヒデオは慎重に過去を思い起こした。
「度重なる、交通違反のもみ消し」
「うぐ！」
美奈子が呻き声を上げる。
「度重なる、暴力団との癒着」
「いやーっ⁉」
美奈子が頭を抱える。
「そして度重なる……図書券マージャン」
「やーめーてー！　って、それは別に度重なっては……。いえ、あの、はい、遺憾に思います」
ヒデオは眼光だけで美奈子を黙らせた。
しかしジャバンは。
「はっはっは、それがどうした！　そんなことは日本という国のごく一部の話に過ぎない！　このオレは地球刑事！　そんなチンケな正義を超越する、超正義！」
『！』マークのたびにそれらしいポーズを取り、がっ、と拳を握るジャバン。
「あの……刑事殿……？」
「法のないこの都市では、このオレこそが法！　このオレの超正義を全世界に広めるための！　優勝へのヴィクトリーロードを邪魔する奴は全て悪！　即ちこのオレ以外の参加者は全て怪人！」
「ほ、本官もでありますかっ⁉」
チッチッチ、と指を振ったジャバン。
「心配することはない。このオレと一緒に戦い、最後のいいところで勝ちを譲ってくれれば……新たな超正義の世界で、キミを副長官に任命してあげよう！」
何の。と突っ込む余裕など、ヒデオにはもうなかった。この男、相当だ。
「キてますねー、マスター」
はちゃー、あいたたた。と自分の額を叩き苦笑するウィル子。

つまりマスターは……
勝負は全部受けるとでも!?

もちろん勢いだけでどうなるものでもあるまいが、それすら失うわけにはいかないのだ。

ここで勝負を断ったとして、その取り柄とやらを見つけるまで勝負を断り続けるのか？

「それは……」

（否。……断じて、否）

臆病。根性なし。イモ引き。言い方はいろいろあるが、つまりはそういうこと。最終的には大佐への劇的勝利でさえ、ただの偶然だったと囁かれるまでに堕ちるだろう。そうなったら最悪だ。事実偶然だったにしても、そうは思わせなかったあの勝利。それが流れ。

ならば自分たちは、演じ続けるのだ。常に余裕と貫禄を持って事に臨み、優勝候補を演じ続けることで、さらに大きな流れに乗らねばならぬのだ。

そのためには、逃げることは許されない。

「つまりマスターは……。申し込まれた勝負は、全部受けるとでも!?」

（……）

頷く。起きた時には震えるほどだった筋肉痛も、半日経って随分よくなってきている。

「負けたら、終わりなのですよー！　そんな精神論ではなく、具体的なプランを！」

「それは、ない」

ないが、流れは逃せない。何もないからこそ、何一つ無駄にはしたくない。

「……にひひっ」

ウィル子は意地悪げな笑みを浮かべた。

「結局は行き当たりばったりですか？」

「僕と、君の。出会いからして」

身も蓋もない話に、ウィル子が笑った。

「にははははっ！　わかりました。ではそこから生まれた流れに身を任せましょう！」

「おい、さっきからこそこそと！　勝負に乗るのか乗らないのか、目付きワル怪人！　それともこのオレに恐れをなしたのか!?」

すい、と二人は振り返る。ヒデオはその生まれ付きの目付きの悪さで無言のまま。ウィル子は極悪ウィルスを絵に描いたような、意地悪な笑顔で。

「うくっ……!?　なんて迫力だ……！」

（……）

そういう風に見えるのなら、それがいい。

「にひひっ、お待たせしました！　あなたをどんな手段で敗退させるかの算段が整った所です」

大嘘だが、プレッシャーを掛けられるならそれでいい。

「よし、そうか！　つまりこの勝負……！」

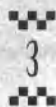
「乗った」

「乗ったのでーす!!」

大家さんが手を上げて宣言した。

「勝負成立しましたニャ！　ジャッジするのですニャ!!」

ラウンド2、開始。

3

男は親指で自分を指差し、聞いてもいない名を名乗り始めた。

「オレの名は柴崎甲士郎……だがそれは仮の姿。その正体はッ!!」

男が隠れていた電柱の後ろ、塀の裏でカチリと音が鳴り、シンセサイザーのメロディー際立つ、それっぽい音楽が流れてきた。

「地球刑事・ジャバン!!」

男はそれっぽいポーズを取り。

「凝・着!!」

テーマソングはともかく。ぴかー!!　と全身が光り輝いたのは、ヒデオもすごいと思った。光が止むとそこには、サイバーなヘルメットと全身プロテクター姿……蒼銀色に輝くメタリックスーツを身にまとった、地球刑事ジャバンの姿が。

「こ……これはすごいのですよー！」

ウィル子は危機感なくそれをぺたぺた触り、それからポツリ。

「でも蒸着ではないのですか？」

「いや……あれはホラ、宇宙刑事だろ？」

ひそひそ。

ともあれ。

「刑事殿でしたか!?」

美奈子という名の婦警が婦警然と敬礼をするのを見て、ヒデオは不安になった。

「しかし。地球、何とかと」

○○県警とかじゃなく。

「黙りなさい地球犯罪者目付きワル怪人！　お縄を頂戴しなさいっ!!」

「……。これだから、僕は。ケイサツが、大

が決まっている。狙うなら、スライム。柔らかくて弱そうなあたりから狙うべきだろう。

「でも、ダンジョンでモンスターに負けても、負けは負けですのニャ。失格なので気をつけて欲しいのですニャ？」

ヒデオは力強く頷いた。

次に、イギリスにあるパブのような酒場の前を通りすがると、気のよい喧騒で賑わっていた。表の立て看板には、『仕事の依頼、斡旋、承りマス』。ウィル子も目を止める。

「これは、もしやクエストですか⁉」

「そですニャ。参加者さんも、私たち主催者側も、必要があれば依頼を出してますのニャ」

ヒデオはそこに、人と人とのつながりを垣間見た。率直に言えば……楽しそう。面白そう。そんなワクワク感。これもまた、東京のアパートにこもって久しく味わっていない感覚だった。今回の生活用品を揃える買い物にしても、上京したての頃の、あの夢と希望に満ちていた感じが思い出された。

見るたび、聞くたび、新鮮な驚きと発見。この都市には、何かとてつもない素敵なエネルギーが秘められている。そんな都市の活気にあてられたように筋肉痛のことも忘れ、ヒデオは晴れやかな気分で帰路に着く。

そして居住区まで帰ってくる。大通りからアパートへ路地を曲がり……。

「ちょいと待ちな」

街灯の灯った電信柱の陰から、一人の男が姿を現した。ジーパン、革ジャン、眉太くモミアゲの長い、濃い目の醤油顔。

「見つけたぞ目付きワル怪人！　このオレと、勝負だ!!」

殺人者、常習者と来て、今度は怪人だ。

怪人。

怪人はないだろう。いくらなんでも。

いい大人が。

「乗」

「なぜ乗るのですかーっ⁉」

ウィル子のチョップがいい角度で降ってきた。

見ず知らずの人間にいきなりあそこまで言われて、黙っていたくはないというのもあるが。それは言わないでおくとして。

「……今朝。君も、言っていた」

「？」

「勢いに、乗る」

「おおっ⁉」

感心したように驚くウィル子へ、ヒデオは小声で言う。図に乗ったわけではなく、あくまでも冷静に。

「僕たちは。大佐に、勝っている」

大家さんも言っていた。大変な話題になっていると。つまり何の取り柄もないはずの自分たちこそが、今まさに優勝候補なのだ。

偶然とは言え、その勢いを逃せるはずがない。なぜならばそれこそが、運任せ天任せしかなかった自分たちが、次に得たものだ。

「た、……確かに！　マスターの目が、何だかかっこよく見えてきたのですよー！」

寝泊りするハメになるとも知らなかったし、それは後の祭り。
「浮いたお金で武器なんかも買えるといいですね」
（……）
　ウィル子の言葉はもっともだ。ショッピングセンターへ来る道すがら、ゲーム中でしか見たことのない『武器屋』『防具屋』が何件かあり、当然参加者たちで賑わっていた。
（問題は）
　自分自身、武器なんて持ったためしがないことだ。ネコに小判の意味ぐらい、ヒデオは知っていた。
　会計。メイドさんがレジを打って、カゴからビニール袋に商品を移していく。
（もう、何も、言うまい）
　常識をこの都市用に構築しなおしつつ、ヒデオは新品の一万チケット紙幣を支払う。
　5000と印刷された紙幣と、硬貨がいくつか。お釣りとして返ってきた。
　レジを通り過ぎると、食材とお酒を買い込んだ大家さんが既に待っていた。少し遅れて美奈子も合流。
「では帰って宴会ですニャ。楽しみですニャ」
　外に出ると、既に日が暮れていた。クルマやバイクのヘッドライトが通り過ぎる中を、ぽつぽつとした街灯を辿るように、歩く。ふと気が付いたように、美奈子。
「大家さん。ああいう自動車なんかは、主催者側のものなんですか？」
「はいニャ？　あれは参加者さんのものですニャ」
「え……まさかあの山道を自動車で登ってきたんですか！」
「たぶん買ったのですニャ？　ここではお金があれば、大抵のものは買えますのニャ」
　大佐も似たようなことを言っていたと、ヒデオは思い出した。美奈子が自分の財布を覗きながら。
「受付で貰ったのがこれだけだから……」
「頑張ってモンスターを倒すといいですニャ」
　ウィル子が興味深そうに、大家さんに聞く。
「一匹やっつけると、いくらぐらいもらえるのですか―？」
「ピンキリですニャ。前にレッドフィールド大佐がアイアンゴーレムを倒して、ン十万の褒賞を得ましたニャ。残骸を工業区の製材所に持っていったら、さらに百ン十万で売れたそうですニャ」
「マスター!!　明日はアイアンゴーレム狩りにッ!!」
（……無理）
　とりあえず。スライムがいたとして。それがどのくらいの強さなのか。そこから確認しないことには。
「普通のゴーレムでも、セトモノやモルタルのいい材料になるそうですニャ。小手調べに、そのあたりから始めてみるといいですニャ」
（否）
　ゴーレムなんてものは、硬くて強いと相場

ていくには……そんなささやかな親睦会からがいいだろう。開会式はいきなり大舞台過ぎた。

(僕は)

自分は、ただ勝ち続けるだけでなく……自分の全てを変えていくのだ。この大会で。

「では。お言葉に、甘えて」

ヒデオは頷いた。そもそも、こんな自分を誘ってもらえること自体が有難く、嬉しい申し出だった。大家さんは気さくに頷き返してくれる。

「そんな遠慮はいりませんニャ。美奈子さんはどうですかニャ？」

「ええと……犯罪者と団欒するのは不本意ですけど……では、監視の意味を込めて」

妙に形作って言う美奈子を、ウィル子が笑った。

「にひひっ。食事代がもったいない卑しい婦警なのでーす」

「なっ!? 違います本官は！」

岡丸とかいう腰の十手は何も言わなかったが、ヒデオには、心なしか居心地が悪そうに見えた。

そんなわけで夕方、みんなで親睦会の買出しに行くことになった。みんな、と言っても参加者で入居しているのはヒデオたちと美奈子たちだけ。

「チケットの初使用ですね、マスター」

(……)

受付で貰ったのが、緑で10000と印刷された赤い紙幣五枚。五万チケットである。気になっていたこの都市の物価だが、道端にある自販機の缶ジュースは一本一二〇チケット。つまり1チケットは、1円相当の価値を持つらしいことが推察できていた。

(……なるべく、節約する方向で)

到着したのは、居住区から大通りを南に下った、商業区の大型量販店。何でもかんでも安売りする、郊外の大手スーパーのようなものだ。夕方という時間帯もあろうが、中は参加者も主催者側の者も問わず、結構賑わっていた。

食材は大家さんに任せて、ヒデオたちは生活用品を求めてだだっぴろい店内をさまよう。

「すごい……本当に外の町と変わりないのね……」

美奈子が感心しきりに言う。そんな中を、鎧兜のファンタジーな参加者とすれ違ったりすると、この都市、ひいてはこの大会がいかに常軌を逸しているかがよくわかる。

耳としっぽの生えた大家さんなど、文字通り可愛いものだ。

(毛先が、Q。ツブ塩。アリエール……)

セッケンはレモン色のものを。

ヒデオはリーズナブルな商品を特に選び、カゴに入れていく。ノートパソコンを持ったままなので、買い物しづらい。

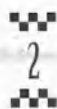
「人間はお金がかかりますね、マスター」

イチから揃えるとなると、呆れるほど。アイテムの持ち込み自由、優勝者が決まるまで無期限……という聖魔杯の開催告知を見た時点で、ある程度の生活雑貨は持って来るべきだった。

しかしどうせ初戦敗退で終わるだろうという投げやりな気持ちだったし、まさか会場で

麻薬はダメ！　絶対！

「何を、根拠に」
「その荒んだ目付きと禁断症状の痙攣が何よりの証拠です！　開けなさい！」
凹んだ。それを今度は怒りに変えて言い返す。
「……。何の、権限があって」
「警察がないこの町では本官が法です！　というより、場所がどこだろうと麻薬はダメ！　絶対!!　それが世界常識！　さ、おとなしく開けて出てきなさい！　あなたは完全に包囲されています!!」
（……）
困り果てたヒデオだったが、一緒にいるらしい大家さんが助け舟を出してくれた。
「ヒデオさんは、疲労で震えてますニャ」
「え？　そうなんですか？」
「私は鼻がいいので、そんな震えるほど冷たいのやってれば匂いでわかりますニャ。そんな危険な人は、入居お断りですニャ。きっと受付の段階で弾かれてますのニャ？」
正論だとヒデオは思った。匂い云々はわからなかったが、主催者側の大家さんが言うのだから説得力があった。気まずそうにおずおずと引き下がる婦警へ向かって、ここぞとばかりにヒデオは言った。
「……また。早とちり、ですか」
昨日は殴られ、今日は名誉を毀損されたのだ。むしろ言わない道理はない。
「また!?　またじゃありません！　そっ、そんな紛らわしい目付きで震えているあなたが悪いんですっ!!」
「勝負ですかニャ？」
ジャッジの腕章を付けた大家さんが、ぴこぴことネコ状の耳を動かし、言った。

2

「勝負しますかニャ？」
「……」
「……」
双方、チェーンロックされた僅かなドアの隙間から睨み合ったまま。
（……否）
この不条理極まりない婦警を、コテンパンにのしてやりたいのは山々だった。しかしヒデオは、いつになく熱くなっている自分を自覚していた。普段から夢も希望もなく冷めきって過ごしていた自分だから、よくわかる。
だから冷静を取り戻す。恐らくは腐っても婦警。柔道、剣道、逮捕術、その他鍛錬を積んでいるに違いない。受付小屋の前で日本刀のリュータとやり合っていた姿が、ヒデオの脳裏に蘇る。
実力で優勝候補にいた大佐。その大佐が直弟子と認めていたリュータ。そのリュータと真っ向からやり合っていた、この婦警。
北大路美奈子というらしい。
「マスター、くれぐれもヘンなことを言わないように」
振り返ると、いつの間にかチョップを構えたウィル子。ヒデオは力強く頷いた。
（コンディションは。昨日より、悪い）
何しろ立っているのも辛い状態なのだ。優勝候補に勝てたからといって図に乗れるようなプラス思考が可能なら、二年間も家にこもりきったりしてはいない。
「……受けない」
「こっちこそ、申し込むもんですか！」
決裂。
「それがいいですニャ。敵が多い大会ですニャ。せめて同じアパートに住む者同士、仲良くしますニャ？」
そういうわけでもないのだが。
特にこの美奈子とだけは。
「親睦会を開きますのニャ」
「は？」
と美奈子が、横を見て間抜けた声を出す。
「私が開いて、皆さんを招待しますのニャ。一日分のご馳走代が、タダですニャ」
「うはー！　それはおいしいのですよマスター。ウィル子はともかく、チケットは節約するべきです！」
ウィル子が力説する。なるほど、こうして住まいは主催者側から提供されているが……その他消耗品は武器でも食事でも、参加者が、大会の通貨である『チケット』を代価として購入しなければならない。
ヒデオはただの人間なので、ウィル子と違い、食物を食べなければ生きていけない存在。
そして、こもりグセの付いた自分を改革し

「……これは、どうも」

何のことはない、このアパートの大家さんだった。大家にしては随分若く、二十歳手前くらいの女の子。頭にネコっぽい三角の耳二つ、お尻の方から柔らかそうな長いしっぽが一本生えているが……開会式で参加者の有象無象を見てしまった後では、驚くには値しない。当然この部屋を借りるにあたり、挨拶は済ませてあった。

「住み心地はどですかニャ」

「大変、よく。眠れました」

疲れていたせいか、久しぶりに、夢も見ないほど泥沼の眠りだった。で、意識は冴えているが、肉体的な疲れは抜け切っていなかったわけで。

「そですかニャ。……寒いですかニャ？」

「……いえ。疲労で」

筋肉疲労による痙攣である。

「そでしたかニャ。大佐とすごいバトルを繰り広げたと、評判ですニャ。すごい参加者さんに入居してもらって、私も光栄ですニャ」

彼女は参加者ではない。カジノのディーラーのような制服に、タイトスカート。

そしてジャッジの腕章。

つまり彼女は主催者側で審判を務める傍ら、アパートの管理人をしているのだ。アパートが主催者側が用意した物件なので、主催者側の彼女が管理人であることは道理。

「お部屋の不都合があったら言ってくださいニャ。善処しますニャ？」

「はい。どうも」

「それじゃ私は、お隣さんにも挨拶してきますニャ」

大家さんは隣に向かった。

（……。昨日は）

大佐に勝利後、寝床を求めて、このアパートに辿り着いた午前一時。大家さんは、自分とウィル子が初の住人だと言っていた。寝ている間に、誰かが移り住んできたのだろうか。

（あり得る）

思い起こせばあの初戦はあまりに派手。しかもヒデオが倒した相手は優勝候補の大佐。ならばその自分を何者かがマークして、隣の部屋に陣取るというのは大いにあり得る話。

（そう……アリエール並みに）

しかし今はシャワーが先だと思い、ユニットバスのドアノブに改めて手をかけ。

きんこーん。

「あのー、昨夜お隣に越してきたものなんですけど、ご挨拶に伺いましたー」

しおらしい女性の声。

この、都市を舞台にした聖魔杯という大会の参加者は、最終的には全て敵であろう。

しかし、今。自分もウィル子もこれと言った特技もなく、明日をも知れぬ今。わざわざ挨拶に来てくれた人を、あえて邪険に扱う必要があるだろうか。とヒデオは考え直した。

（共同戦線……）

うまく仲良くなれれば、そこまでもっていけるかもしれない。問題は、出不精症候群の自分がそこまでの愛想を振りまけるかどうか。

「ウィル子」

「にひひ。にはは……」

漫画に夢中で気付きやしない。

（否）

これは勝負どころだ。大会とは関係なく、個人的に。これを契機に自分は、明るく社交的な自分へと生まれ変わるのだ……とまで思い詰めたヒデオ。

「あのー……いらっしゃいませんかー？」

「今。開けます」

ヒデオは筋肉痛の震えを今こそ武者震いに変え、敢然とドアを開けた。

「おはようございます、隣の北大路美奈子と……」

「……」

あろうことか、昨日、受付で自分をブッ叩いた婦警であった。腰にはあの喋る十手をぶら下げ、引越しソバのつもりか、ざるソバなど片手に。

「薬物の不法所持で逮‼」

ぱたん‼

ヒデオは咄嗟にドアを閉めた。カタカタ震えているのは、恐怖からではなく、あくまでも極度の疲労によるもの。

それを言うに事欠き、薬物ときた。

いかな温厚なヒデオも、昨日の今日ではさすがに堪えかねた。慎重にチェーンロックを施し、そっとドアを押し開ける。

住み心地はどですかニャ？

しやクスリが切れたとか」

「ない」

いくら自分の目付きが悪いと言っても、ヒデオはさすがに断言してやった。純粋に出不精症候群、いわゆる引きこもりが外出した際の二次的症状、筋肉痛である。

恐る恐る立って、歩いてみる。

「これは……、つらい」

「あああ……勝ったはずのマスターが、引きこもりから病み上がりにグレードダウン……」

天を仰いだウィル子は、やる気をなくしたようにパソコン画面の中に戻っていく。声はスピーカーから。

《わかりました。無理はよくありませんし、どう戦っていくかもまだ決まってませんし。どうせ先は長いですから、今日はお休みにしましょう》

画面の中には四畳半くらいの、小奇麗な一室。そこでソファーにくつろぐウィル子。テーブルの上の皿に載った幾何学形の何やらをパクつきながら、マンガなぞ読み始める。

《にはは。ぱくぱく》

「……」

何事か。

「ウィル子。それは」

《はい？　オヤツです。ぱくぱく》

「オヤツ」

《マスターの家からこの会場に来るまでの間ホットスポットがいくつかありました。なのでいろいろぶっこ抜いてきたのですよー。そのままだとかさ張るので、こうして圧縮してますけど。ぱくぱく》

《専門的な、用語だ》

実はそれほどパソコンに詳しくはないヒデオ。ウィル子はそんなヒデオを気にせず、幾何学形のいくつかを手に取った。

《解凍するとこんな感じです》

どこかの会社の名簿やら、会議書類やら、アダルト画像やら。

《ろくな会社じゃないですねー。ぱくぱく》

「いまそこに。顧客リスト、と」

《そうでしたか？》

ぱくぱくぱくり。

「……。その部屋、は」

《初公開！　これがウィル子のお部屋なのですよー。ノートPCの性能ではこれが限界です。もっと広くできますけど……》

ががががががが！　とハードディスクが唸りを上げて、瞬く間に部屋が改装されていく。非常にだだっ広くはなったが、真っ黒。画面に映っているのはもはや家具ではなく、カクカクした緑色の枠線だけだ。

《見ての通り太古の3D技術、ワイヤーフレームです。さすがに今どきテクスチャーも貼ってないというのは、ウィル子的にはどうにも》

《つまり》

専門用語はさておき、何もない土地だけなら、そこそこの値段で広く買える。しかし豪華な部屋となると、その装飾だけで底を突く。パソコンの性能が、すなわち住環境のためのコストらしい。

考えている間に、ウィル子的にバランスの取れているらしい元の四畳半に戻っていた。これがどこかの研究所や軍事施設にあるスーパーコンピューターなら、王宮のような広さと豪華さになるのだろう。

ウィル子は再び、リラックスムードでマンガを読み始めていた。

《……つらい》

居ても立っても辛いのが筋肉痛。熱いシャワーで疲労を取り除こうかと、ユニットバスへ向かおうとしたとき。

きんこーん、とチャイムが鳴った。

《来客の、ようだ》

町は町でも、ここは聖魔杯の会場。「互いの同意が無ければ勝負が成立しない」、というルールなので奇襲はないとして。

新聞の勧誘。宗教の勧誘。消火器の販売の勧誘。

《……そんな、ところか》

前のアパートでは、それ以外の人物がチャイムを鳴らしたためしがなかったので、他の可能性は思い付いても却下する。

きんこーん、と、もう一回。ヒデオはユニットバスのドアノブにかけていた手を、方向転換して玄関のドアノブにかけた。

がちゃり。

「大家ですニャ」

Q あなたは『戦闘城塞マスラヲ』を読んだことがありますか？

No. こちらからお読み下さい。

1分でわかる

戦闘城塞マスラヲ

大会名：聖魔杯

優勝すれば世界を支配する権利を手にできるかもしれない「聖魔杯」。全世界で参加募集の告知がされたこの怪しげな大会に、引きこもりのヒデオが相棒の電子精霊(!?)のウィル子と人生を賭けた一発逆転の勝負を挑む！

参加資格：人間と意志ある人外のペアであること

会場には世界中から魔人やら鬼やら人外の者たちが集合。人間にも銃やナイフを持った危険なやつばかり。武器も持たない非力なヒデオに勝ち目はみえず、さりとて持ち金はたったの14円。もはや引き返すこともできない背水の陣！

勝負方法：問わず

格闘、レース、ギャンブル、ボードゲームなど、勝敗がつけば何でもアリ、ただし相手を殺すと失格になってしまうバトルロイヤル！　このルールを活かしたヒデオは初戦で優勝候補筆頭の「大佐」を撃破、大勝利をもぎとる！

優勝資格：勝ち続けること

ヒデオのビクトリーロードは始まったばかり!?　次の相手は!?

本編へGO

BATTLE CHARACTERS

北大路美奈子
憑依武器の喋る十手「閻丸」をパートナーにした警察官。正義感が強いが暴走気味。そのせいなのか、早とちりが多い。

ウィル子
正式名称Will.CO21。片っ端からデータを食い尽くす最悪のウイルス。人間にも感染するらしいが、その力は未知数。

川村ヒデオ
就職面接34社すべてに断られ、夢も希望も失った20歳。「人殺しの目」と言われるほど目つきが悪いが、根は善良なヒキコモリ。

Yes. では本編をどうぞ。

1

　開幕セレモニーの翌朝。
　聖魔杯の会場となる隔離閉鎖都市の、住宅街の一角。二階建て六畳一間のキッチンとユニットバス付きアパート（要するに昨日まで住んでいた普通のアパートと大差ない物件）にてヒデオは目を覚ました。
（く。……これは。困った）
　部屋に備え付けられていた毛布に入ったまま、思うヒデオ。コンセントに繋いだままのノートパソコンから、待ちかねたようにウィル子が飛び出してくる。
「おはようございますマスター！　昨夜と言ってもほんの数時間前の劇的勝利の興奮も冷めやらぬ今！　この勢いのまま次の獲物を探すのですよー！」
「それが、ウィル子」
「はい？」
「体が。動かない」
　びっくりしたウィル子は部屋の中をせかせか見回り、カーテンを開けて狭い裏庭を眺めたり。
「どこかに敵が!?　マスターが寝ている間に何か怪しげな術をっ!?」
「……筋肉痛で、体が」
　その先を言っていいものかどうか大いに悩んだヒデオであるが、意外にもウィル子は平静を取り戻し、右手でグーを作った。
　こん！
　どたんばたんごとんがたんっ!!
　昨日、自殺に失敗して二度も打ちつけた箇所をクリーンヒットされて、ヒデオは激しくもんどり打った。
「動くじゃないですかマスター」
「……」
　テレビを叩いたらちゃんと映りました、みたいな言い方。
「だが、これで。どう戦えと」
　カタカタカタカタ。
　半分毛布を被ったまま、極度の疲労により痙攣するヒデオ。その目付きの悪さも相まって。
「マスター……信じたくはありませんが。も

ますます大好評！「お・り・が・み」の林トモアキが贈る無差別級バトル開幕中!!
何が善で、何が悪なのか――!?
すべてが敵のこの街で
(自称)正義と(仮称)正義が激突する!
戦闘城塞マスラヲ vol.3「正義VS超正義」
BATTLE FIELD: "MASURAO"
林トモアキ
Tomoaki Hayashi
イラスト
上田夢人
Yumehito Ueda

うに見えたのは気のせいだろうか？　大助が拳銃を降ろし、地面にうずくまったノイルに詰めよる。
「今のを見たな、〝かなかな〟」
「槍型は危険！。槍型は危険！」
「いいや、まだ俺が抑えつけられる。もし暴走が止まらないようだったら、この俺が責任を持ってモルフォチョウを殲滅してやる」
　歩み寄り、緑色の模様を浮かべた腕で宇野ノイルの頭をつかむ。
　少女の頭を引き寄せ、数センチの距離で睨みつける。あたかも自らの力と恐怖を植えつけるかのように、間近で言い放つ。
「この件は、〝保留〟だ」
「う……」
「お前に命令を下した人間に、そう伝えろ。そしてもう余計な手出しはするな。もしこの警告を無視するようだったら――」
　ノイルの頭蓋骨が軋む音が、聞こえたような気がした。
「殺すぞ」
　大助が少女の頭を解放した。まさに悪魔の笑みで、震える少女を見下ろす。
「服を脱いでも、許さないぜ」
「ううぅ……殺されるのは嫌だよぅ……殺さないで。〝かっこう〟はやっぱり悪魔……殺されたくない……保留、保留……」
　自分の身体を抱きしめて、ガクガクと震えるノイル。
「亜梨子」
　大助が亜梨子を振り返った。
　彼女はピクリと肩を揺らす。頭が霞がかかったように、ぼんやりとしていた。
「そのモルフォチョウは、不安定になってきてる。中央本部も――問い詰めてもしらばっくれるだろうが、危険視し始めた」
「……」
「時間がないかもしれない」
　大助が亜梨子に向かって、手をさしのべた。
「今なら〝虫〟を殺して、元の生活に戻れるかもしれないぞ。――連れ戻すか？」
　亜梨子は夜空を見上げた。
　槍から分離し、蝶々の形に戻ったモルフォチョウが舞い降りる。
　このまま、親友のことは思い出にしてしまったほうが良いのかもしれない。
　虫憑きと関わると、否応なく心身を傷つけられる。
　傷つけられるのは痛いし、傷つけると辛い。
　だが――。
「摩理のことを知ってる人に、本当に心当たりがないの？　あるなら隠さずに教えて」
　ここで立ち戻れば、間違いなく後悔する。
　ノイルにモルフォチョウを殺されそうになった時、そのことを嫌というほど実感した。
　摩理は亜梨子を信じ、夢の結晶である〝虫〟を託した。
　ならば自分がすべきことは、前に進む他にない。
　大助が差し伸べた手を握りしめた。
「〝三匹目〟が、花城摩理と接触していた可能性がある」
　同化型の虫憑きを生む、謎の原虫指定。亜梨子は以前に説明を受けていたために、そのことを知っている。
「〝始まりの三匹〟に手を出すしかない、か」
　大助が呟いた。彼でさえ躊躇いを見せる相手のようだが、自分のことのように覚悟を決めた顔つきをしている。
　右腕と左脚が痺れているせいで、立っているのも辛くなっていた。膝から力が抜ける亜梨子を、大助が受け止める。
　この先に、何があるかも分からない。
　だが亜梨子はまだ前に進むことができる。
　一歩でも前に進めるなら、せめて迷わずに突き進もうと思った。
　一人では困難でも、自分のそばには頼りになる少年がいる――。
　そう思って大助を見て、ふと思い出す。
「……わざわざ手を貸してやってるのに、なんだよ、その顔は」
「ドサクサでヘンなことしたら殺すわよ」
「なんだよ、それ」
「もみもみ……」
　ギクリ、と表情を強ばらせる大助を、亜梨子の蔑んだ視線が突き刺す。
　月明かりの下、肩を支え合って歩く二人の影が廃工場に伸びていた。

to be continued...

トラマルハナバチの宿主を追いつめた時、亜梨子にはもう身の危険がなかった。
それなのに本人の意志を押し退け、摩理が表へ出てこようとしたのは――。
「……亜梨子に忘れられたら、私は最初からこの世にいなかったのと同じになっちゃうじゃない……！」
摩理は頭を抱える。
誰とも会うことなく、誰にも気づかれず、ひっそりと死に近づきつつあった記憶もまた、モルフォチョウに刻み込まれていた。
花城摩理は、確かに生きていたのだ。それなのに誰からも忘れられ、何も遺さずに世界から消えるのがたまらなく怖かった。
「そんなの、ひどすぎる……！」
「お前が亜梨子に代わって現れるたびに思っていたが……結局、そうなのか？　お前は自分が生き続けたいという目的のため、亜梨子を乗っとろうとして――」
「違うわ！　だって私は、悪魔の薬を選んだんだもの……！」
大助が眉をひそめた。
「悪魔の薬……病室にあった絵本のことか？」
「私はただ、亜梨子といっしょに生きたかっただけ……でも私にはやらなきゃいけないことがあって……」
「やらなきゃいけないこと？　なんだ、それは？」
「――思い出せないの」
頭を抱えたまま、摩理は顔を強ばらせる。
顔に浮かんだ模様が、銀光を放っていた。槍と一体化したモルフォチョウが暴れる。
亜梨子に忘れられるのだけは、嫌だ。
「私は、何をしようとして……」
その気持ちが強まるほどに、摩理は何も考えられなくなっていく。孤独に対する恐怖が深まるほど、摩理の頭が真っ白になる。
「花城摩理の記憶さえ、不安定になりつつあるのか」
大助が低い声で唸った。
「とにかく今は、消えろ。亜梨子に戻るんだ。さもないと……お前の〝虫〟を殺すぞ」
「……！」
ハッとして摩理は顔を上げる。
その時、自分がどんな表情をしていたのか――冷酷な悪魔でさえ一瞬、動揺の気配を漂わせたことからも明らかだった。
「そんな顔をするな」
「……」
「亜梨子はお前のことを忘れたりはしない。……思い出になるだけだ」
摩理は模様を浮かべた右腕を見た。モルフォチョウとの強引な同化によって、すでに感覚が麻痺してしまっている。
親友の身体を傷つけているのは、自分も同じだ。そのことに気づくと、力が抜けた。
「ねえ、薬屋大助さん。あなたは亜梨子と私を、どうしたいの？」
澄んだ表情で、問いかける。大助の構えた銃口が、ピクリと揺れた。
「亜梨子を助けたいなら、モルフォチョウを殺すだけでいいわ。私に同情するなら、私に戻れだなんて言わないわよね？」
「俺はモルフォチョウの監視任務をこなすだけだ」
「本当のことを言って」
微笑を浮かべる摩理に対し、漆黒の悪魔が黙り込んだ。しばし待つも、返答はない。
「あなたも迷ってるのね。自分がどうしたいか、分からないんだわ」
「……」
「私たちみんな、迷子の集まりみたい」
少しだけ、救われた気がした。
迷い、悩むことは生きている証拠だ。
亜梨子をとりまく人々が迷っている間は、摩理はまだ存在し続けられる。たとえ〝虫〟に遺された記憶が曖昧で、自分自身が何者なのか分からなくなりつつあっても、だ。
亜梨子――。
そっとまぶたを閉じる。脱力した摩理の身体から、モルフォチョウが分離した。
「――ん……」
どこかで、自分の名を呼ぶ声が聞こえた気がした。
一之黒亜梨子は意識を取り戻し、まぶたを開く。
「大助……？」
視界が開けると、大助が自分に銃口を向けているのが見えた。
少年の表情は見えなかったが、安堵したよ

けではない。模様を浮かべた肉体も、槍と同様に強化されているのだ。
ノイルが腹をおさえ、地面に膝をついた。衝撃音で威力を半減させたとはいえ、生身の身体で摩理の攻撃をくらってはひとたまりもないだろう。
摩理は槍を拾い、振りかぶる。
「……服を脱いでも、許さないわよ？」
ニヤリと笑み、槍を振り下ろそうとした時だった。
背後に威圧感をおぼえ、振り返る。
摩理の視界に、業火を撒き散らしながら自分に襲いかかる弾丸が飛び込んだ。
「……っ！」
とっさに槍で迎撃する。
だが弾丸の威力は凄まじかった。今度は演技ではなく、槍が手から弾き飛ばされる。
摩理自身も地面に投げ出されるが、すぐに立ち上がって顔を上げる。
「どうして、私を撃つの——」
怒りで奥歯を噛みしめ、言い放つ。
「薬屋大助さん……！」
視界の中を、漆黒の悪魔が歩み寄っていた。〝かっこう〟——薬屋大助だ。脚に怪我を負っているため、動きは鈍い。額から血の糸を垂らしているのも見える。だがかっこう虫と同化した大型拳銃を構えた姿は、こちらの反撃を許さない隙の無さだ。
大助が、わずかに顔を動かした。ゴーグルで覆われた表情は見えないが、地面でうずくまるノイルを睨んでいるようだ。

「最初から監査なんてするつもりがなかったんだな、〝かなかな〟。亜梨子を挑発して、命の危険に晒して、暴走するようなら排除するために来たってわけか」
「や、槍型は危険と判断ー。〝かっこう〟は即刻、槍型を殲滅してくださいぃー」
「誰の命令だ？　一玖とかいう本部長か？　魅車副本部長か？　……どっちにしろ、それほどまでに中央本部は亜梨子を危険視するようになってきたってことか」
厳しい口調で言い、大助が摩理に向き直る。
「どうして出てきた、花城摩理？」
摩理は顔を歪めた。眼前の少年に対する怒りがこみ上げる。
躊躇いもなく自分を撃ったことが、許せなかった。今の摩理は亜梨子と一心同体だ。亜梨子は彼を友達と思っているのに、彼は亜梨子の身体を狙って銃弾を放ったのだ。
「亜梨子の身が危険だったから——」
「本当のことを言え」
銃口を向けたまま、大助が摩理の返答を冷たく突き放す。
摩理は言葉に詰まった。

ことには違いない。
　宙を駆けるノイルが嘲笑った。
「〝友達を化け物呼ばわりしないで〟！」
　ノイルに対して言った亜梨子の口調を真似、少女が言う。
「そんなこと言ってる自分自身が、化け物になってもいいんですか？」
「……！」
「嫌ならおとなしくしていてください。そうすればモルフォチョウから解放してあげます」
　モルフォチョウから解放される——。
　一瞬だけ、亜梨子の心が揺れた。
　ノイルが夜空にかざした手から、音叉の音色が響いた。星空に波紋が拡がっていく。
「衝撃度ぉー」
　戦いの中に生きる虫憑きたちと向かい合うのは、とても怖い。
　そのことをもう、認めるしかない。
　だが——。
　摩理の笑顔が脳裏に蘇った。
——私の夢、あなたに託してもいい？
　槍をつかんだ腕に、力を込める。
「プラス、じゅう！」
　怖いが、嫌だった。
　辛いが、どうしても嫌だった。
　こんなところで摩理から託された夢を奪われるのだけは、亜梨子には耐えられない——。
「摩理……！」
　亜梨子は、亡き親友の名を呼んだ。
　衝撃音が銀色の槍に降り注ぐ。

　一之黒亜梨子の呼びかけに答えたのは——
　亜梨子自身の口だった。
「亜梨子……」
　ぽつり、と亜梨子の口で呟いた時には、花城摩理はノイルの後方に移動していた。
　右手と右頬、そして左足に銀色の模様を浮かべた摩理は、銀色の槍を振りかざす。
　たちまち周囲を銀色の鱗粉が埋め尽くした。
「緊急事態発生ぃー。危険度ぉー、プラスいっせんまんー」
　衝撃音をかわされたノイルが、空中を蹴って摩理から距離を置いた。
　摩理は怒りのままに、亜梨子の顔を歪める。
「ディオレストイの〝虫〟ごときが、私を消そうだなんて……許せない」
「機動力ぅー、プラスごぉー。判断力ぅー、プラスろくぅー。能力制御度ぉー、プラスはちぃー。暫定、火種三号と認識ぃー」
　摩理の槍が虚空を一閃した。
　同時にノイルもまた音叉の音色を響かせた。
　鱗粉攻撃と衝撃音が真っ向から激突する。
　二つの波動が弾けて消えた瞬間、摩理は〝虫〟と同化した足で地面を蹴った。弾丸のごとき速度でノイルの横に移動し、槍で薙ぐ。
　だがノイルは衝撃音によって宙高く舞い上がり、槍による攻撃をかわした。摩理の頭の上で一回転しながら、掌底を突き出す。
　とっさに横に跳躍する摩理。
　大きな震動とともに、直前まで摩理が立っていた地面が陥没した。

「ちょこまかと、邪魔な能力……！」
「衝撃度ぉー、プラスじゅうにぃー」
　摩理とノイルの戦いは、一進一退のせめぎ合いとなった。
　攻撃力においては摩理が圧倒していたが、スピードはノイルに分があった。
　だが戦いの形勢が動いたのは、すぐだった。
「あっ……！」
　ノイルの攻撃を避けきれず、摩理の手から銀色の槍が弾き飛ばされた。
「チャンスぅー。衝撃度ぉー……」
　言葉通り好機と見たノイルが、摩理の懐に飛び込んだ。音叉の音色を響かせ、構えた掌底の周囲に波紋を呼び起こす。
「プラスにじゅうー」
　ピンチに摩理は顔を歪める——かと思わせ、冷めた目つきでノイルを見た。
「わりとあっさり引っかかるのね」
「……！」
　摩理はノイルとまったく同じ動きで、銀色の模様を輝かせた右手を振りかぶった。
　二人の少女の腕が、交差する。
　衝撃が弾ける音が響き渡った。
「——げほっ」
　衝撃音の壁を突き破り、相手のみぞおちに掌底をめり込ませたのは摩理だった。
「同化型の武器は、強化した装備だけじゃないのよ」
　今の摩理は、先ほどまでの亜梨子とは違う。
　モルフォチョウと同化しているのは、槍だ

緊急事態発生ぃー。
危険度ぉー、
プラスいっせんまんー。

していく腕が、引き裂かれそうだった。

——ひどい……。

耳元で、聞き覚えのある声が囁いた。

——私は悪魔の薬を選んだのに……。

恐怖とともにその声の主を思い出したのは、はじめてだった。

「ま、摩理……？」

背筋を寒気が襲う。

耳元で聞こえる声は、他ならぬ亡き親友のものだった。

触手が肩を越え、首元に迫った。言いようのない恐怖がこみ上げる。

「く……ああああああっ！」

苦悶の声を上げ、亜梨子の意識が薄れる寸前だった。

荒れ果てた工場跡に、甲高い音が響いた。

亜梨子はその音に、聞き覚えがある。音楽の授業だったろうか。何かの楽器のチューニングを習った時に聞いた——音叉の音だ。

音叉の音色が響くと同時に、亜梨子を包み込んでいた銀色の鱗粉が弾け飛んだ。空間が波立ち、目に見える光景に波紋が生じる。

「監査、中止ぃー。槍型の暴走を確認ー」

いつからそこに立っていたのか、瓦礫の山の頂上に宇野ノイルが立っていた。

胸の前で両腕を交差し、天秤のように身体を左右に揺らす例のポーズをとっている。

「危険度ぉー——」

ノイルの口元に、ニヤリと笑みが浮かんだ。

「プラス、ひゃくまんー」

「……！」

音叉の音色が響いた。ノイルを中心に空間が波立ち、ほんの一瞬、ヒグラシに似た“虫”の残像が映し出される。

少女がパーカーを脱ぎ、裏返す。リバーシブルになっていた闇色のパーカーを羽織り、どこからか取り出した黒い布のマスクとゴーグルを装着する。

「“かなかな”は槍型の“虫”を危険と判断し、これより殲滅する」

喜々とした少女の声に、音叉の音色が重なった。

「……！」

黒ずくめになったノイルが素早く動いた。

何もない空間に向かって、掌底を突き出す。

直後、亜梨子のそばで音叉の音色が響いた。

銀色の鱗粉を突き破り、衝撃の波が亜梨子を貫く。

「うぐっ……！」

なすすべもなく、亜梨子は不可視の衝撃に弾き飛ばされる。殴りつけられたような衝撃だが、硬い感触ではない。まるで大音響のスピーカーの前に立ったかのようだ。

“衝撃音”——。

周囲の領域を支配しているものの正体を、身体で実感した時には遅かった。

ノイルが空中へ跳躍した。

虚空を蹴る少女の足が、空間に波紋を生む。

音叉の音色とともに、弾かれたようにノイルが空中で進路を変えた。

衝撃音の壁を蹴り、ノイルが一瞬にして亜梨子の懐に飛び込んだ。

「衝撃度ぉー、プラスいちぃー」

両手を突き出し、亜梨子が手にした槍に向かって見えない何かを叩きつける。

爆発的な衝撃音が、銀色のモルフォチョウを貫いた。槍とともに亜梨子は空中へ放り出され、硬い地面に投げ出される。

「くはっ！」

ノイルが衝撃音で作った不可視の階段を駆け上り、宙高く舞い上がった。

「衝撃度ぉー、プラスにぃー」

大の字に倒れた亜梨子の右手が、見えない衝撃を受けて地面にめり込んだ。

穂先を作っていたモルフォチョウの翅が分散した。

「衝撃度ぉー、プラスさんー。プラスよんー。プラスごぉー」

音叉の音色が立て続けに鳴り響いた。

モルフォチョウの翅が破れ、痛みに藻掻くように槍が暴れる。

亜梨子自身も痛みに耐えながらも、傷ついていくモルフォチョウを見て顔を歪める。

「や、やめて——」

親友が遺したモルフォチョウを怖いと思ったのは、はじめてだった。

だがそれでも、摩理が生きていた証である

傷つけられる。――その痛みは、もう亜梨子
には耐えられないほど強まっていた。
　だが出会ってしまった以上、亜梨子はこの
問いかけをしなくてはならない。
「虫憑きって……なんなのよ」
　俯き、声を絞り出す。
　何かと戦っていない虫憑きなどいない――。
　亜梨子がその言葉を聞いたのは、いつのこ
とだったか。
　生前の花城摩理が〝ハンター〟として、戦
っていたことを知った。
「どうして、こんなに戦ってばかりいるのよ
……」
　親友の死後、薬屋大助と出会った。それが
きっかけのように多くの虫憑きと出会い、彼
らは皆、何かと戦っていた。
「あなたたちが私を捕まえようとして、襲い
かかってくるんじゃない。昨日までは普通の
暮らしをしてたのに、虫憑きだと分かっただ
けで捕獲されるなんて納得いかないわ」
　少女がせせら笑った。
　違う――。
　亜梨子は無言で、頭を左右に振った。
「……？」
　少女が首を捻る。
　確かに特別環境保全事務局という機関に抗
うために、戦っている虫憑きもいた。
　だが本当に理由はそれだけなのだろうか？
　以前に出会った〝優しい魔法使い〟は特環
など眼中になかった。記憶を垣間見たため、
そのことはよく知っている。
　よくちょっかいをかけてくるハルキヨもそ
うだ。彼は同組織など嘲笑いつつ、摩理のこ
とを探っているのは明らかだ。
　とうの特環にいる大助もまた、何かのため
に戦っているようだ。彼は誰かの帰りを待っ
ているとも言っていた。
　ならば、摩理は？
　亜梨子の親友は、なんのために戦っていた
のだろう？　なぜ亜梨子に自らの〝虫〟を託
し、今も彼女に囁きかけてくるのだろう？
「教えてよ……ねえ……」
　俯いたまま、亜梨子は唇を噛みしめる。
　ハチの宿主である少女が、鼻で笑った。ま
るで虫憑きすべてを嘲笑うかのようだ。
「他に理由があるとしたら、そうね……私た
ち虫憑きみんな、いつまでも、どんな目に遭
っても夢を諦めきれないからじゃないの？」
「夢を……諦めきれない……」
　結局、そうなるのか。
　他界してもなお〝虫〟を遺すほど、摩理は
強い想いを遺していった。
　摩理の意図が分からないかぎり、こんなこ
とが続くのだろうか？　平凡で楽しい日常を
捨て、憎くもない相手を傷つけ、傷つけられ
続けなければならないのだろうか？
　摩理の願いを見つけ出さないかぎり、亜梨
子は解放されることがない。
　自らの意志で探そうとしていたモノが、重
圧となって亜梨子に覆い被さっていた。
　虫憑きと出会うごとに、亜梨子は辛い思い
をしていく。
　自分のしていることは、平凡な日常を捨て
るだけの価値があるのだろうか？
　こんなにも辛い目に遭うならば、いっそ親
友のことなど忘れてしまったほうが――。
　――そう願ってしまった瞬間、亜梨子の視
界が銀色の輝きで埋め尽くされた。
「……っ！」
　握りしめた銀槍が、目映い輝きを放ってい
た。翅が変形してつくられた穂先が勝手に暴
れ、周囲の瓦礫を吹き飛ばす。
「な、なにが起こっ――くあっ！」
　槍を支えきれず、亜梨子の腕が地面に叩き
つけられた。有り余った槍の破壊力が地面を
打ち砕き、周囲を震動が襲う。
　痛みに顔を歪める。とっさに槍を手放そう
とするが、なぜか腕が槍から離れなかった。
　前後左右に暴れる槍が、瓦礫の山をさらに
粉々に打ち砕く。トラマルハナバチが吹き飛
び、宿主の少女が後方へ投げ出された。
　亜梨子は自分の腕を見下ろし、目を見開い
た。思わず悲鳴を上げる。
「きゃああっ！」
　槍から銀色の触手が伸び、右腕にめり込ん
でいた。触手は銀光を放つ模様となって、亜
梨子の腕から肩へと身体を浸食していく。
　同時に、激痛が腕を襲った。
　虫憑きではない亜梨子に同化型の〝虫〟が
一体化しようとする反動だろう。触手と同化

砲弾の破片が、こめかみを打った。だが構うことなく、砲弾の雨の中を駆け抜ける。

敵は攻撃をしながら距離を稼いでいたようだ。砲弾が発射されているのが、はるか遠方にある別の工場からだと分かる。

亜梨子は一直線に発射地点に向かって走る。眼前に迫った砲弾を、槍の一薙ぎで両断する。槍の威力は凄まじくとも、操るのは亜梨子の細腕だ。威力におされ、倒れる。

すぐに飛び起きて再び走り出す亜梨子めがけ、追撃の砲弾が浴びせかけられる。

「見つけた……！」

亜梨子の視界に、開け放たれた工場のシャッターの奥で蠢く影が見えた。

遠目にも姿が分かるほど、大きな躰をした〝虫〟だ。亜梨子の身体くらいはありそうな頭部には赤く輝く複眼と無数の触覚があり、胸部は黄色い繊毛に覆われている。トラックの荷台のような腹部は黄色と黒の縞模様をしており、先端にぽっかりと穴が空いていた。

トラマルハナバチに似たその〝虫〟は、腹部の先を亜梨子のほうへ伸ばしている格好をとっている。そばに佇む人影は、〝虫〟の宿主だろう。射し込む月明かりに照らされ、細い長身と長い髪が見て取れた。

異形のトラマルハナバチが口器を大きく開いた。八本の脚で引き寄せた金属製のドラム缶を一息で呑み込み、胸部へ送り込む。胸部がゴムのように蠢き、缶を圧縮しているようだ。圧縮されたそれが腹部へと送られる。

ハチに似た〝虫〟の腹部が見る見るうちに膨らんでいく。せり出すように腹部の先端に現れたのは、ドラム缶を圧縮して作られた大きな針だった。——いや、それまでの球体とは異なり、鋭く輝くそれは巨大な矢のようだ。

大きく膨らんだハチの腹部から、鋭い矢が撃ち放たれた。

自分の腕では、防ぎきれない——そう直感した亜梨子は、とっさに槍をふりかぶった。

「……っ！」

銀色の鱗粉を振りまく槍を、真っ正面からハチめがけて投げつける。

銀の槍と、ハチの矢。

恐ろしい破壊力を秘めた両者が真っ正面からぶつかり合った。空気が弾け、震動する。

勝利したのは、亜梨子の槍だった。

巨大な矢を跡形もなく打ち砕いた銀槍が、大きな〝虫〟の足元に突き刺さる。

巻き起こった衝撃波で、ハチの宿主が吹っ飛んだ。工場の外装が轟風に吹き飛ばされ、壊れた屋根が夜空へ舞い上がる。

「はあっ……はあっ……」

息を荒らげながら、亜梨子は破壊された工場へ近づいた。

瓦礫の山と変わり果てた中、地面に突き刺さったモルフォチョウの槍を引き抜く。

衝撃によって、トラマルハナバチの腹部に大きな傷が刻まれていた。脚の何本かも消し飛んだため、立つこともできない。

「う……」

粉々になったコンクリートに半身を埋めた長髪の少女が、苦しげな呻き声を上げた。うっすらと目を開き、亜梨子を見上げる。

少女はじっと亜梨子のことを見据えている。よく見ると身体中に乾いた血の跡が染みついていた。ここにやって来るまでにも、激戦をくぐり抜けてきたのだろう。少女の表情は心身ともに疲れ切っていた。

亜梨子は槍を突きつけたまま、動かない。

否。動けなかった。

槍の穂先が、かすかに震える。

「トドメを刺さないの？」

満身創痍の少女が、目を細めた。

「それなら、こっちから攻撃するわよ」

倒れたままのトラマルハナバチの腹部が膨らんだ。体内に残っていた残りカスだろうか、小さな矢が腹部の先に生まれた。

大助を傷つけられた怒りによって、一度は吹っ切ったはずの迷いが蘇っていた。

覚悟を決めた様子の少女の姿が、これまでに対面してきた虫憑きと重なっていた。

亜梨子がここで捕獲すれば、少女は特別環境保全事務局の一員として再び戦場に戻ることになるのだろうか？　つい先ほど再会した夜森寧子のように。寧子は本当に、そうなることを願っていたのだろうか？

また一人の虫憑きと、出会ってしまった。

眼前の少女が憎いわけではない。だが目の前で友達を傷つけられ、怒りを抱いた。

戦う理由などないのに、出会えば傷つけ、

虫憑きって……なんなのよ。
どうして、こんなに戦ってばかりいるのよ……。

腰の拳銃を抜く隙もない。
だが亜梨子は足がすくんで動けない。
「あ……あ……」
これまでに直面した出来事とは、違う。
容赦のない殺意を込めた攻撃が、亜梨子を狙っている。相手と話しあう余裕などない。
「動けないなら、せめて領域を解除しろ！ここにいたら、俺の力まで相殺される……！」
能力を解除しろと言われても、亜梨子はただモルフォチョウが変化した槍を持っているだけだ。どうすればその能力を発動したり、解除できるのかなど分かるはずもない。
――亜梨子……。
耳元で、誰かの囁き声が聞こえた気がした。
――私と代わって……。
手にした槍が、いっそう輝きを強めた。銀色の鱗粉が吹き荒れる。
「ぐっ！」
大助を包んでいた緑色の輝きが、鱗粉に吹き消されるように弱まっていた。砲弾に当たり負けした拳が、後方へ弾き飛ばされる。
亜梨子の頭が、真っ白に染まっていく。
どこからか聞こえる囁き声に、理性が溶かされていく。このままその声に身を委ねたくなるような、不思議な感覚に包まれていた。
「危機回避能力ぅー、マイナスさんー！」
砲弾の雨が鼻先をかすめるにも拘わらず、宇野ノイルはゆらゆらと身体を揺らしている。大助に手を貸す気は全くないようだ。
――亜梨子……。
聞き覚えのある声が、頭の中に響いた。
亜梨子の口が勝手に動いた。
「私なら――」
銀色の槍がざわりと波立った。
「亜梨子を守って――」
「〝お前〟は引っ込んでろっ！」
大助の一喝が、亜梨子の身体を揺らした。
ハッとして彼女は顔を上げる。
今、自分は何かを呟いていたようだ。だが何と言っていたのかは、記憶にない。
「大助……？」
「亜梨子！　お前がここに来ることを選んだんだろうが！　今さら逃げるな！」
ぼんやりと顔を上げた亜梨子の頬に、赤い染みが飛んだ。大助が振り回す両拳から、鮮血が弾け飛んでいた。
「しっかりしろ！　さもないと……花城摩理の〝虫〟に自分を乗っ取られるぞ！」
亜梨子は息をのんだ。槍を見下ろす。
「私が、〝虫〟に……？」
大助が亜梨子の腕をつかんだ。そのまま、強引に横へ投げ飛ばす。
「きゃあっ！」
地面に投げ出され、転がる亜梨子。その耳に、大助の苦悶の声が届いた。
「ぐあっ！」
襲いかかる球を防ぎきれないと判断したのだろう。亜梨子を放り投げ、自分もまた危険地帯から脱出しようと試みたようだ。だが球体をかわしきれず、片足に攻撃を受ける。
「大助！」
「逃げろっ！　正面ゲートに戻れ！」
片足を地面につきながらも、大助が亜梨子に向かって叫ぶ。
それが一瞬の油断となった。
「大――」
少年の身体に、巨大な球体が直撃した。アスファルトを粉砕するほどの威力を秘めた球体が、一瞬で大助を視界から吹き飛ばす。
亜梨子の全身が総毛立った。
「大助ぇっ！」
何度も地面をバウンドし、大助が遠方へ転がっていく。
敵の攻撃は止まなかった。
トドメとばかりの一斉砲撃が、倒れた少年に襲いかかる。
「……っ！」
考えるよりも先に、身体が動き出していた。
勢いよく立ち上がり、大助に迫る砲弾めがけて槍を一閃する。
銀色の鱗粉が、砲弾を呑み込んだ。
大小様々な球体が木っ端微塵に砕け散る。
「よくも、大助を――」
亜梨子の見開いた眼差しが、砲弾が放たれる方角を睨みつける。
今の一撃で、敵は亜梨子へと標的を変えたようだ。砲弾が雨あられと降り注ぐ。
いきおいよく地面を蹴り、真っ向から砲弾に向かって駆ける。土煙と水の幕もろとも、迫り来る砲弾を槍で一刀両断にする。

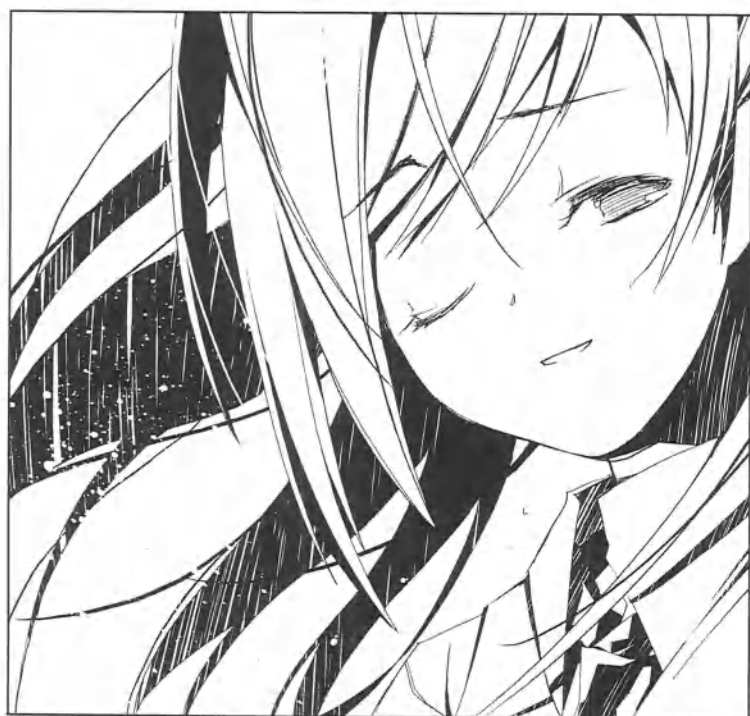
しっかりしろ！
さもないと……花城摩理の〝虫〟に
自分を乗っ取られるぞ！

「退屈度ぉー、プラスいちぃー」
唐突に上がった声に、肩をすくませる。
「い、いきなり声を出さないでよ！　ビックリするじゃない！」
「落ち着け。まだ近くにはいない」
戦闘経験を積んだ者の勘だとでもいうのだろうか、大助が先へ先へと進んでいく。
敷地の向こうに、夕日が落ちた。電気系統が排除された敷地に、夜の帳が落ちる。
大助が足を止めたのは、小さな工場に挟まれた通路だった。
急に周囲が明るくなった。
銀色のモルフォチョウが、唐突に翅を輝かせたのだ。素早い動きで亜梨子がつかむ鉄パイプの先に止まり、躰を変形させる。
「来るぞ」
鉄パイプが銀色に輝く槍へと変貌したのと、大助が呟いたのは同時だった。
そばに建っていた工場の壁が、爆発した。コンクリート製の壁を打ち砕き、巨大な塊が飛来する。
あまりに突然の出来事に、亜梨子は硬直したまま動けない。
だが本人の意志とは関係なく、持ち前の動体視力が塊の全貌をはっきりと捉えていた。
亜梨子の身長の数倍はありそうな球体の一部に、歪んだ二本のシャフトやパンクしたタイヤが見て取れた。――巨大な塊は、フォークリフト一台が丸められたものだった。
凍りつく亜梨子に、変わり果てたフォークリフトが直撃する寸前だった。
緑色の軌跡が視界をよぎった。
大助だ。
弾丸のような速度で迫る球体に、緑色の模様を浮かべた拳を叩きつける。
「……っ！」
爆音のような衝撃と轟風が吹き荒れた。
常人離れした怪力で殴られた球体が、迫ってきた速度に勝る勢いで工場に打ち返された。壁を破壊し、屋根すらも崩壊させる。
亜梨子の目前で、一棟の工場が音を立てて打ち崩れていた。
「ちっ……外したか」
大助がつまらなそうに舌打ちした。
巻き上がった土煙に紛れ、逃走する人影が見えた。攻撃をしてきた虫憑きだろう。
呆然と立ちつくす亜梨子の背後から、緊張感のない声が響いた。
「〝感知能力〟を確認ー。レア度ぉー、プラスじゅうー。反応速度ぉー、マイナスにぃー。状況対応能力ぅー、マイナスにぃー。暫定、火種六号に認定ー」
宇野ノイルが身体を揺らす。亜梨子の〝虫〟について監査をしているようだ。
「ぼうっとしてるな。後ろに隠れてろ」
「……！」
土煙を貫き、次々と亜梨子たちのもとへ謎の球体が飛来した。
大きさも様々な球体――コンクリートのような色をしたものや、ベルトコンベアを丸めたもの、屋根の一部らしい鉄骨をねじ曲げたものなど、ありとあらゆるものを球状に歪ませた砲弾が連続して降り注ぐ。
「きゃあっ……！」
状況に対応できない亜梨子の前に、大助が立ちはだかった。ミサイルのように遠方から飛来する砲弾を、大助が両拳で叩き落とす。
敵の攻撃は絶え間なく続いた。
周囲の地面には無数の大穴が空き、破裂した水道管から大量の水が噴き出す。
土煙と水の幕で、視界が利かなかった。地響きと冷たい水の感触が、亜梨子から冷静な思考能力を奪っていく。
「ううっ……！」
一際大きな砲弾が迫ったのを見て、亜梨子はがむしゃらに槍を振り回す。
銀色の鱗粉が、巨大な砲弾を粉砕した。勢い余った槍が地面を分断し、足場を破壊する。砲弾を砕いて余りある鱗粉が、周囲を埋め尽くした。視界がさらに悪化する。
「落ち着け、亜梨子！」
「〝鱗粉攻撃〟と〝物理攻撃〟、さらに〝領域支配能力〟を確認ー。レア度ぉー、プラスはちぃー。破壊力ぅー、プラスじゅうー。冷静度ぉー、マイナスよんー。能力制御度ぉー、マイナスごぉー。判断力ぅー、マイナスごぉー。暫定、火種五号に認定ー」
「とにかく動け！　このままじゃ敵の的だ！」
亜梨子の前で防御に専念しながら、大助が叫んだ。敵の攻撃をはね返すのが精一杯で、

りはしない――。
「……無茶をしたら、すぐに連れ戻すぞ」
大助が結論を出した。
「おとなしく連れ戻されるかどうかは、別問題よ」
微笑む亜梨子の、手の震えが止まった。

4

虫憑きが潜んでいることが分かったのは、赤牧市郊外にある工場跡だった。
大手メーカーの電子機器の生産拠点だったらしく、敷地は広大だ。製造過程に応じた無数の工場が集まっているだけでなく、管理施設や倉庫などが広い敷地内に点在している。海外への工場移転が決定し、土地を売り出している最中とのことだ。
亜梨子と大助は正面ゲートの近く、警備員の詰め所の前にいた。周囲では中央本部の装備である白コートを着た局員が数人、ゴーグルの無線を通じて連絡を取り合っている。
「被害はどれくらい出てる？」
大助は東中央支部の装備である漆黒のロングコートとゴーグルを装着していた。
「追跡中に二人……この敷地に追いつめてから、二人……二人は治せたけど、一人は欠落者になってるわ……」
夜森寧子、コードネーム〝ねね〟が小さな声で答えた。彼女の〝虫〟は再生能力を持っているため、治癒役を担っている。
「やっかいな相手みたいだな。だいたいの潜伏場所くらいは、分かってるのか？」
「ここから逃げないよう敷地全体を包囲するのが精一杯で……現時点で分かってる敵の能力はさっき教えた通りだけど、まだ別の能力を隠し持ってるかも……」
寧子がチラリとこちらを見た。
視線に気づき、亜梨子は顔を強ばらせる。
中央本部に支給された白コートは、実際に着てみると予想よりも軽かった。ゴーグルはサイズが合わなかったため、首から提げている。武器の支給はなかったため、地面に転がっていた錆びた鉄パイプを握っている。
稀少な同化型の〝虫〟を宿す亜梨子のための装備も製作中らしいが、完成まではまだ時間がかかるそうだ。どこの誰が作っているのかまでは、聞かされていないが。
銀色のモルフォチョウが、輝く鱗粉とともに舞い降りた。
「彼女も任務に参加するの……？　訓練もうけてないのに……」
「あのヘンなの付きでな」
「緊張度ぉー、プラスいちぃー」
戦場の空気にそぐわない声が響いた。亜梨子の後方で、パーカー姿のままの宇野ノイルが身体を左右に揺らしている。
「死んだら、治せないわよ……？」
寧子の静かな一言に、ギクリと心臓が跳ねた。はじめて会った時とはうって変わり、寧子の顔つきが戦闘員のそれになっていた。
大助がグローブを装着し、腰のホルダーにさした大型拳銃を確かめる。
「ついてくるだけだ。戦わせたりはしない」
「不満度ぉー、プラスいちぃー。それじゃ監査になりません。殺さないで」
「指揮系統は〝かっこう〟に任せることになってるから……私たちはサポートを――」
「いらない。邪魔だ」
言い放ち、大助がさっさとアスファルトの上を歩き出す。
「あんな言い方しなくてもいいじゃない。寧子さんがかわいそう――」
たしなめようとして、口をつぐむ。
大助の頭上から、緑色のかっこう虫が舞い降りた。弾けたように躰を変形させ、無数の触手となって少年の身体に同化する。
漆黒のロングコートをなびかせて歩く大助の頬に、緑色に輝く模様が浮かび上がった。全身から異様な威圧感を放つ。
静まりかえった敷地内を突き進む大助には、普段の面影は欠片も残っていなかった。冷酷非情の悪魔が、戦場を練り歩く。
「……」
一方、少年のあとを小走りでついていく亜梨子の頭の上、銀色のモルフォチョウは目立った動きを見せない。不規則な軌道で虚空に鱗粉をばらまいている。
亜梨子は鉄パイプを握る腕に、力を込めた。いつ襲われるとも分からない緊張感に、額から冷たい汗が流れる。

が上手く出てこない。
　自分がかすかに震えていることに気づく。
　もしここで頷いてしまったら、また亜梨子は虫憑きという特殊な人生に身を置いた人々と向かいあうことになるのだろうか？
　楽しいと感じていた平凡な日々から離れ、かつての摩理や〝優しい魔法使い〟のように虫憑きと死別するようなことも――。
　だが亜梨子は親友のために、虫憑きと会わなければ――。
「わ、分かっ――」
「もういい」
　ふいに、視界が閉ざされた。
　大助が背後から、亜梨子の顔を腕で抱くようにして覆い隠したのだ。
　自分が今、どのような顔をしているのか分からない。
　自分をかばう大助が今、どのような顔をしているのか分からない。
「こいつは連れていかない」
「命令違反になりますよ。殺さないで」
「俺を従わせたいなら土師を通せ。そもそもあいつの命令じゃなきゃ、こんなところまで来るものか」
　大助の腕が、亜梨子の目元をこすった。
「こいつは虫憑きじゃない。ただの一般人だ」
　言い放ち、亜梨子から離れる。
「反抗度ぉー、プラスいちぃー」
　ノイルの声を聞きながら、立ち去ろうとする大助の背中を見る。
　亜梨子と大助の間に、銀色のモルフォチョウが舞い降りた。
　振り向くことなく離れていく少年の後ろ姿が、亡き親友と重なった。
「……」
　唇を噛みしめる。
　花城摩理は自分が虫憑きであることを、亜梨子に語らなかった。
　薬屋大助は決して亜梨子に本心を見せず、距離を置こうとする。
　なんとなく――。
　彼女らがそうしていた理由が、悪意によるものではなかったのではないかと感じた。
　ここで自分が二人の意志に甘えれば、再び平凡な日常へ戻ることができる。
　だがそうすれば、自分の手は二度と届かないような気がした。
　遠ざかろうとする花城摩理や、薬屋大助をはじめとする虫憑きたちの背中に――。
「……行くわ」
　ピタリと大助の足が止まった。
　振り向いた少年の表情は、厳しかった。
「来るな。お前は〝こっち側〟の人間じゃない」
「じゃあ、連れていきなさい」
　拒絶する大助に向かって、手を差し出す。
　笑みを作りつつも、まだ手が震えていた。
「お願い、大助」
　大助が顔を歪めた。
　亜梨子が迷っていることに気づいているのだろう。
　だが亜梨子も同時に、大助もまた迷っていることに気づいていた。
　迷っているということは、亜梨子のことを考えているということだ。どうすることが彼女にとって良い選択なのか、真剣に考えてくれている。
　そのことが分かるだけで、亜梨子は大助のことを信じられる。
　本物の化け物ならば、そんなことで悩んだ

尖らせる。
怒りがこみ上げ、亜梨子は少女に歩み寄る。
「よせ、亜梨子」
亜梨子の肩をつかんだのは、大助だった。
「コイツは怯えてるように見せかけて、俺たちをからかってるだけだ。どうせこれも監査の一つとでもいうんだろう」
「忠誠度ぉー、マイナスいちぃー。監査員の仕事を邪魔しないでください。殺さないで」
平然とした顔で、再び身体を揺らすノイル。ちらりと亜梨子を見て「冷静度ぉー、マイナスいちぃー」と付け足す。
「俺たちのことでお前が怒ってどうする。こっちは化け物なんて言われ慣れてるんだ。たいして気にすることもごふっ」
「慣れてるんじゃないわよ！」
みぞおちに亜梨子パンチをくらい、うずくまる大助。亜梨子は返す刀で、怒りの目をノイルへと向ける。
「もう一度言うわよ、宇野ノイル！　人の友達を、化け物呼ばわりしないで！」
「殺されちゃう、怖いよぅー」
両目を潤ませた少女が、いつもの調子で身体を揺らす。亜梨子の足元から「お前は人を勝手に友達呼ばわりする前に、友達とやらをぽんぽん殴るクセをなんとかしろ……」という呻き声が聞こえた。
一触即発の空気に割って入ったのは、携帯電話の着信音だった。
大助の携帯電話だ。何かを問答した後、舌打ちとともに「分かった」と答える。
「ちょっと離れる。お前の監視はいつも通り〝霞王〟と代わるが、おとなしくしてろよ」
「急にどうしたのよ？」
「元はといえば中央本部でエースをはってた女がリタイアしたせいで、管轄外の任務まで俺に回ってくるようになったんだよ。迷惑かけやがって、あの馬鹿ワンコが……」
首を捻る亜梨子に背を向け、大助が携帯電話を耳にあてた。〝霞王〟を呼び出すつもりなのだろう。
「お前とはじめて会った時と同じ——未登録の虫憑きの捕獲任務だよ」
「……！」
「グッドタイミングぅー」
声を上げたのは、宇野ノイルだった。
「その捕獲任務、一之黒亜梨子さんも同行してください」
亜梨子、大助の両者が少女を振り返る。
「……なんだと？」
「睨まないで、殺されるぅー。——私の監査も、残すところたった一つとなりました。虫憑きの号指定において最も重要な分野、戦闘能力の度合いです」
亜梨子は目を見開いた。
「ひいては彼女を実戦に投入し、どのくらいの戦闘能力を持つか監査します」
「ダメだ。許可が下りるはずがない」
「却下。私が許可します。これまでにも彼女が虫憑きを相手に戦ったという報告があります。今回もさして危険は——」
ノイルの言葉が、ピタリと中断した。
大助が顔つきを変えていた。どうしても亜梨子を連れて行きたくないのか、静かな怒気を込めた視線で少女を見据える。
「俺に回ってくるような任務だぞ。偶然出会ってきただけの今までの虫憑きとは違う」
「う、ううぅ……こ、殺さないで」
大助の殺気に気圧された様子のノイルが、ピタリと動きを止めた。
「でも、却下」
「調子に乗るなよ、〝かなかな〟……」
「一之黒亜梨子さん。異存はありませんね？」
亜梨子はピクリと肩を揺らした。
これまでの亜梨子ならば、迷わず同意していただろう。一人でも多くの虫憑きと出会うことは、彼女自身が望んでいたことだ。
虫憑きのことを知れば、亡き花城摩理のことを知ることができるかもしれない——。
「分かっ——」
分かったわ。
頷こうとして、言葉が詰まった。
ズキリ、と胸に痛みが走る。
——キミは、〝虫〟をなんだと思う？
先日、その一生を垣間見た〝優しい魔法使い〟の言葉が脳裏をよぎった。すると堰を切ったように、これまで出会ってきた虫憑きたちの顔が思い浮かんで消えていく。
「分かっ……」
もう一度、答えようとしたが、やはり言葉

私たちを化け物か何かだと思ってるの？

一つ屋根の下で暮らし、恵那や多賀子をまじえて四人でいることが日常となりつつあったはずだ。日が経つごとに違和感も消え、虫憑きや特別環境保全事務局のことなど忘れそうなくらい楽しい時間を過ごしている。

　亜梨子だけではない。恵那や多賀子だって、とっくに彼を友達だと思っているはずだ。

　それなのに大助は決して、一定の距離から亜梨子たちに近づこうとしない。

　思えば、大助と同じ同化型の虫憑きだった花城摩理も、彼と同じだったのかもしれない。

　自分が虫憑きだということを、死ぬまで亜梨子に秘密にしていた――。

「なんなのよ……」

　恵那に追い回されているノイルを振り返り、亜梨子は小さく呟いた。

　放課後。

　遊びの誘いを断り、亜梨子は教室を出た。

「おい、亜梨子。どこ行くんだよ」

　監視役の大助が、慌てて彼女を追いかける。だが亜梨子は憮然とした顔で、無視した。

「なに、ふてくされてるんだ？」

「大助には、関係ないでしょ」

　言い放ち、校舎を出た。影に覆われて薄暗い校舎裏に着いた頃には、周囲には亜梨子と大助の姿しか見えなくなっていた。

　だが彼女は、もう一人の人物の存在に気づいていた。振り返り、呼びかける。

「ノイル。いるんでしょう？」

　亜梨子の声が響くと同時に、樹木の陰に人の気配が生まれた。

「敏感度ぉー、プラスいちぃー」

　宇野ノイルが姿を現し、身体を左右に揺らす。いつものことだが、こっそりと後を尾けていたことを悪びれた様子もない。

「ねえ、ノイル。あなたにお願いがあるの」

「うぅ、悪魔と槍型が睨んでるぅ。殺されちゃうよぅ。脱ぐから、殺さないで」

　亜梨子の言うことを聞いているのか聞いていないのか、ノイルが服をはだけさせる。

「私はたしかに監査とやらを受けるって言ったわ。でも、もう少し目立たないようにできないの？　恵那や多賀子だけじゃない……クラスの皆にも迷惑がかかってるのよ」

「却下」

　両腕を交差させて揺れていた身体が、ピタリと止まった。

「私の監査は、特環の意志です。何人たりとも私の監査を止めることはできないから殺さないで。ああ、ついに下着まで脱げと――」

「それも、やめなさい」

　苛立ち、亜梨子は口調を強くする。ノイルの行動で最も気になっていたのが、常に怯えているその態度だった。

「何日もそばにいたんだから、もう分かってるでしょう？　私はもちろん、大助だってあなたを殺したりなんかしないわ。私たちを化け物か何かだと思ってるの？」

「思ってるに決まってるじゃないですか」

　亜梨子は愕然とした。ノイルが青ざめた顔で、震える身体を揺らす。

「監査するにあたって、モルフォチョウの前の宿主である花城摩理と、監視者の〝かっこう〟のことは調べてあります。二人とも化け物です。花城摩理、通称〝ハンター〟と一号指定〝かっこう〟……うぅ、怖い。殺さないで。今までたくさん虫憑きを欠落者にしてきた冷酷な化け物と知っていながらお願いします。私は殺さないで。なんでもするから。お願い、お願い」

　ガクガクと震え、涙すらにじませるノイル。尋常ではない少女の様子を見て、亜梨子の足元にも恐怖の影が忍び寄った。

「……」

　横にいる少年を見ると、とうの本人は怯えるノイルを冷たく見下ろしているだけだ。

　亡き摩理もまた、亜梨子の知らないところで今の彼のような顔をしていたのだろうか？

「たった三人しか発見されていない同化型のうち、二人が化け物……きっともう一人も化け物に決まってる。そのうえ〝戦闘狂〟もいるなんて、この学校は怖すぎるよぅ。きっと私なんか殺されちゃうんだぁ」

「いい加減にしなさい……！」

　とうとう亜梨子は大声を出した。

「摩理は化け物なんかじゃないし、大助もそうよ！　二度とそんなふうに呼ばないで！」

「化け物は化け物なんですぅー。監査員の私の判断は、絶対なんですぅー」

　ノイルが身体を左右に揺らしながら、唇を

廊下で他生徒の落とし物を拾ってやれば、どこからともなく「親切度ぉー、プラスいちぃー」の声が響く。
下校時に友人らとショッピングをすると、購入した衣服を見て「美的センスぅー、マイナスいちぃー」と言って立ち去る。
選択授業で作った粘土細工を一瞥し、自らが作った見事な裸婦像と見比べて「器用度ぉー、マイナスいちぃー」と勝ち誇る。
とにかく四六時中つきまとわれ、私生活のすべてを採点される。
亜梨子のストレスが、すぐに限界を超えたのは言うまでもない。
「んぐっ、はむはむ、ふふへ度ぉー、ふはふひひー」
昼休み、亜梨子の弁当からおかずをつまみ食いし、ノイルが身体を左右に揺らす。「グルメ度、プラス一」と言っているらしい。
「……」
最後の楽しみにとっていた一品を奪われ、亜梨子の中で何かが切れた。席を立ち、同級生と昼食をとっていた大助に詰めよる。
「ど、どうしたの、一之黒さん——ぐあっ！　苦し……ちょっと……待っ……！」
優等生の演技をする大助の襟をつかみ、教室の外へひきずっていく。
「げほっ、げほっ……なにすんだ、いきなり！　殺す気——痛っ！　おい、やめっ……笑顔でボディブローは……ぐはっ」
「ねえ、大助さん？　わたくしの監査委員とやらに対する怒り、誰にぶつければ良いのかしら。あなたよね？　あなたで良いわよね？」
「お、お前が自分で監査を受けるって言ったんだろーが！　俺に当たるな！」
「特環の人は皆、あんなストーカーまがいの監査を受けてるの？　あなたも号指定されてるからには、同じような目に遭ったのよね？」
小声でたずねながら、大助のみぞおちに繰り返し拳をめり込ませる。
「受けてるわけないだろ、あんなワケの分からない監査」
大助が亜梨子のパンチを受け止め、言い放った。亜梨子は眉をひそめる。
「今までは局員の号指定を定めるのに、別の局員を動員することなんてなかったんだ。アイツ自身、今回のことはテストケースだって言ってただろうが」
「じゃあこれからは、あんなのが普通になるのね。きっと特環は滅ぶわね」
「滅んでたまるか。——なにか分かったか、〝霞王〟？」
廊下の壁に押しつけられた大助が、亜梨子の後ろを見た。
振り向くと、いつの間に近づいていたのか、金髪の少女が佇んでいた。亜梨子のクラスを振り返り、恵那や多賀子の弁当にまで手を出し始めたノイルをちらりと見る。
「ああ、六号指定のヤツを脅して聞き出したぜ」
ネコをかぶっている普段とは一変し、本来の喋り方で少女が答えた。
「無指定のクセに号指定局員を脅すなよ……まあいい、それで？」
「〝かなかな〟だったか？　あの女を知ってる局員は中央本部にもほとんどいねぇ。六号指定のヤツでも情報を引き出せなかった」
「俺が一号指定の権限で調べたかぎりじゃ、確かに中央本部に所属してることになってるぞ？　それなのに同じ中央本部の人間が知らないってのは……どういうことだ？」
彼らは密かに、宇野ノイルのことを調べていたようだ。
「つまり中央本部にいるクセに、今までどんな任務をしてきたか分からないってことだ。——おもしれーじゃねぇか。戦う口実ができたら、オレ様がヤッてやるぜ？」
戦闘狂の本性を剥き出しで、笑う〝霞王〟。
「なに物騒なこと言ってるのよ……大助も黙ってないで、止めなさいよ」
大助は無言でノイルを見据えたままだ。戦闘の時以外はめったに見せない表情である。
「〝霞王〟、ちょっといいか？　〝ねね〟に手伝わせて、情報班に探りを——」
「あ、ちょっと、大助……！」
亜梨子を押しのけ、少年が〝霞王〟を引き連れて歩いていく。
「また私は蚊帳の外？　私のことなのに……」
唇を尖らせ、二人の背中を見送る。
また〝亜梨子は関係ない〟とでも言うつもりなのだろうか？

「計算能力ぅー、プラスいちぃー」
宇野ノイルが両腕を交差し、身体を左右に揺らす。
教室中の人間が目を丸くする中、ノイルが何事もなかったかのように再び席に座る。
静まりかえった教室に、数学教師の咳払いが響いた。「え、えー、じゃあ次の問題を」と、こちらも何も見なかった様子で先を進める。「どうして注意されないのよ……」という恵那の呟きも聞こえた。
教師が「宇野さんに解いてもらいましょう」とノイルを指した。少女が席を立ち、亜梨子とすれ違う形で黒板の前に立つ。
しばらく考えた後、ノイルが何を思ったのか自らの制服に手をかけた。
「……うぅ、バカですみません。解けないと殺されますかぁ？　脱ぐから殺さないでぇ」
「自分は解けないのかよ」
誰もが呆然とする中、大助の声だけが教室に響いた。
体育の時間、亜梨子とノイルはバスケットボールのゲームで同じチームになった。
「……」
「良い動きぃー。運動能力ぅー、プラスいちぃー」
「……」
「ナイスパスー。判断能力ぅー、プラスいちぃー」
「……」
「ナイッシュー。決定力ぅー、プラスいちぃー」
やはり同じチームの九条多賀子が、無邪気な様子で首を傾げた。
「あのぅ、亜梨子さん。なぜあの方は参加もせずにゆらゆらしてるんでしょうか？」
「知らないわよ……」
拳を震わせながら、亜梨子は押し殺した声で呟くしかなかった。
体育の授業が終わると、女子は更衣室で着替えをすることになる。
どんな脱ぎ方をすればそうなるのか、不自然に制服をはだけさせたノイルが下着姿の亜梨子をじっと凝視していた。
気にするまいと心に誓い、亜梨子は友人と談笑する。だがノイルは冷静に、恵那や多賀子らと亜梨子を見比べているようだ。
ノイルが悲しげな表情で、両腕を交差した。
「発育度ぉー、マイナスーーー」
「亜梨子ドロップキック！」
少女がロッカーに叩きつけられる振動が、更衣室を揺るがした。「き、凶暴度ぉー、プラスいちぃー」と言い残し、動かなくなる。
ノイルの〝監査〟は連日、息つく間もなく続けられた。

にされたかで区別されます。〝大喰い〟により虫憑きにされた者は実体を持つ〝虫〟を操る分離型、〝浸父〟によるものは任意の媒体によって〝虫〟の能力のみを具現化する特殊型、〝三匹目〟による虫憑きは〝虫〟を自らの肉体と一体化させる同化型――花城摩理のモルフォチョウはこのうち同化型によるものとされています。殺さないで。あ、ダメかも」

　ノイルがブツブツと語り続ける。

「特別環境保全事務局は虫憑きを能力の種類と強力さによって、火種、異種、秘種の三種類に分け、さらに一号から十号までの号指定を決定することでそれらを管理しています。存命中の花城摩理のデータが極めて少ないため、モルフォチョウがどれに属するかはまだ決まっていません。どうか命だけは許して」

「バカにしてるのか？　そんなことはとっくに知ってる。お前は何しに来たのか説明しろって言ってるんだよ」

「ああ、殺される。私は一之黒亜梨子の号指定を定めるために、本人を監査しに来たんです。――これまで虫憑きの号指定は中央本部の司令部が取り決めていましたが、一之黒亜梨子さんは果たして本当に虫憑きなのかどうかの判断を再確認するため、いわゆるテストケースとして私という無能でどうしようもなくか弱い、殺さないで、しかし特環に忠実な監査員が設定されたという次第です」

　亜梨子は大助と顔を見合わせた。

　自分が虫憑きとして号指定されると言われても正直なところ、ピンと来なかった。

「亜梨子に号指定は必要ない」

　きっぱりと言い放ったのは、大助だった。

「俺はこいつを虫憑きとは思ってないからな」

「大助……」

「わがまま度ぉー、プラスいちぃー」

　ノイルが身体を左右に揺らし、大助の顔を見つめ返した。それまで怯えきっていた表情に、一瞬だけ暗い笑みが浮かぶ。

「中央本部は虫憑きと認定しました。魅車副本部長から一之黒亜梨子の監査を正式に任された以上、私の行動は特別環境保全事務局の意志と思ってください。だから殺さないで」

「魅車……あの細目女か。本部に帰って伝えろ。今さら何を企んでるのか知らないが、余計なことで花城摩理のモルフォチョウを刺激するようなことをするなってな」

「ど、獰猛度ぉー、プラスいちぃー。そんな目で脅したって、私の監査を拒むということは〝かっこう〟さんの命令違反ということになって、あ、ダメ。もう死ぬ」

「分かったわ」

　亜梨子は声を上げ、大助とノイルの間に割って入った。事態はよく理解できないが、放っておくとトラブルになりそうだ。

「お前は黙ってろ。こういうことを許すと、中央本部はどこまでも勝手なことを――」

「監査って言っても、別に危険があるわけじゃないんでしょう？　大助や〝霞王〟に監視されてるんだし、今さら監査が加わったところで大したことじゃないわ。大助がイジめるからほら、彼女こんなに怯えてるじゃない」

「好感度ぉー、プラスにぃー。槍型は悪魔と違って良い人ですぅ」

　涙を浮かべた少女が、亜梨子の背中に隠れる。大助が舌打ちした。

「後悔したって知らないからな」

　少年の不吉な予言は、すぐに実現することになる――。

　宇野ノイルという少女がやってきた翌日から、亜梨子の日常が一変していた。

　数学の授業を受ける亜梨子の表情は、緊張で強ばっていた。

　亜梨子だけではない。他の生徒たちの間にも、ピリピリとした緊張感が漂っている。

　数学の担当教師が厳しいわけではない。どちらかというと穏和な教師もまた、黒板に公式を書く手つきがぎこちなかった。

　教師が振り返り、やや躊躇った様子で「じゃあ、この式を解いてください、一之黒さん」と亜梨子を指す。

「はい」

　亜梨子は席を立ち、黒板の前に進み出る。さして難しくもない問題を解くと、教師が「はい、正解です」と頷いた。

　ガタンッ！　と教室の中央で、勢いよく一人の少女が立ち上がった。

わがまま度ぉー、プラスいちぃー。

その場にくずおれた。突然に泣きだした少女に、教室の中にどよめきが生じる。
　ノイルの瞳が見ていたのは、亜梨子の後方の席――薬屋大助だった。
「こんな近くに〝悪魔〟がいるなんて、ぜったい殺されちゃうよぅ。いやぁ、まだ死にたくない……ゴメンナサイ、言うことを聞くから殺さないで。ああ、このパーカーですか？　確かに校則違反です。これが気に入らないんですね、すぐに脱ぐから殺さないで……パーカーだけじゃないんですか？　うぅ、分かりましたぁ、制服も脱ぎますからぁ」
　パーカーを脱ぎ、制服のボタンを外し始めるノイル。あまりの出来事に、教師を始めとする誰もが硬直している。
　泣き崩れたノイルが両手を身体の前で交差させ、手のひらを上に向けた。そのまま天秤のようにゆらゆらと身体を左右に揺らす。
「恐怖度ぉー、プラスいちぃー……うぅぅ、〝悪魔〟がいるからにはこの中にいる誰かが槍型なんだ……なんで私がそんなのの監査なんかしなきゃいけないんだろぉ……ぜったい死ぬ……もっと脱ぐから殺さないでぇ」
　がたん、と音を立てて亜梨子は席を立った。
「先生。彼女は慣れない環境で、コンランしているみたいです。保健室に連れていきますね。――薬屋くん、手伝ってくれない？」
　教師の承認を受ける前に、亜梨子はテキパキとノイルの服装を正し、立ち上がらせる。
　大助もハッとして席を立った。
　二人でノイルの両腕を引いた状態で、有無を言わさず教室から外へと出る。
「あぁぁ、このまま処刑台に連れられていくんだぁ。ひどい……さすが悪魔と呼ばれる人……残酷度ぉー、プラスいちぃー」
　ゆらゆらと揺れるノイルの頭を挟んで、亜梨子は大助を引きつった表情で睨みつける。
「間違いなく特環の関係者よね？　特環って変人しかいないものね？　絶対、そうよ。しかも特殊型の虫憑きなんでしょ？　そうよね？　違うって言いなさいよ、後生だから」
「いや、局員が派遣されて来るってのは聞いてたけど……何しに来たんだ、コイツ？」
　保健室に向かう廊下に、ノイルのすすり泣く声が延々と響き続けていた。

宇野ノイル。
　彼女は自らを、特別環境保全事務局の中央本部に所属する局員であると名乗った。
「監査員？」
　保健室に近い渡り廊下で、亜梨子と大助は声を揃える。
　ノイルがビクリと肩をすくめた。柵に背中をぶつけ、青ざめた顔で制服のボタンに手をかけようとする。
「いや、脱ぐなって」
「特環内でどう思われてるのよ、大助……」
　黒眼がちな双眸が特徴的な可愛らしい少女だ。だが恐怖で青ざめた表情と、ガクガクと身体を震わせているために挙動不審きわまりない。第三者が見たら、亜梨子と大助がノイルを脅しているようにしか見えないだろう。
「おい、俺は中央本部から新しい調査員が来るとしか聞いてないぞ。監査員ってのはどういうことなんだ？　説明しろ」
　服を脱ごうとする腕をつかみ、大助が迫る。ノイルは目をそらし、震えた声を絞り出す。
「せ、説明すれば殺さないでくれますか、東中央支部所属火種一号にして悪魔と呼ばれ怖れられる〝かっこう〟さん」
「……やけに説明くさい言い方ね」
「私は中央本部所属〝かなかな〟と申します。他者の〝虫〟を受け継いでいるという異例中の異例、一之黒亜梨子さんが虫憑きに認定されるにあたって必要な過程を果たすために派遣されました。私みたいなダメ虫憑きが大それた任務をおってしまってゴメンナサイ。気に障らないですよね、でも殺さないで」
　決してこちらを見ないようにしながら、機械的な口調で語るノイル。
「必要な過程？」
「まわりくどい言い方してゴメンナサイ。殺さないで。必要な過程とはつまり一之黒亜梨子、通称〝槍型〟の号指定です」
　亜梨子は目を見開いた。大助もまた驚いて動きを止めている。
「虫憑きのタイプは〝始まりの三匹〟、つまり原虫指定された三匹のどれによって虫憑き

ねーけど……なんだよ？」
「駅前に新しいアミューズメントパークができたらしいのよ。いっしょに行くでしょ？」
　言い、後方を指さす。恵那と多賀子が情報誌をのぞきこんで談笑していた。
「いや、俺は別の用事があるからいい。お前の監視はいつも通り〝霞王〟に代わらせる」
「なによ。最近、多いじゃない。行くところにいつも目立つ金髪がいるものだから、そろそろ恵那たちも怪しんでるんだけど」
「俺の任務はお前の監視だけじゃないからな」
　言い放ち、大助が鞄を持って席を立った。ちらり、と意味ありげな視線を受け、亜梨子は彼の言いたいことに気づく。
「あ……摩理のことは、私もすぐに調べようと思ってるのよ。まだ足の調子が悪いけど、それが治ったらまた――」
　慌てて言い繕う。だが大助は目をそらさなかった。彼女の足がとっくに治っていることなど見通しているのだろう。
「お前は何もしなくていい。前みたいに騒ぎばっかり起こすより、よっぽど助かるしな」
「な、なによ。そんな言い方――」
「虫憑きのことは、虫憑きが処理するさ。それが当たり前なんだ」
　珍しく、少年が微笑を浮かべた。彼が所属する機関は亜梨子を虫憑きと認定したそうだが、彼自身はそう思っていないようだ。
「良い機会だ。どこが自分の居場所なのか、もう一度よく考えろよ」
　狸坂香魚遊曰く〝虫憑きの中でも最も過酷な人生〟を歩んでいる少年が言い残し、教室を後にした。すぐに恵那が近寄ってくる。
「あれ？　薬屋クン、来ないの？　……ちっ、せっかくお化け屋敷でドサクサに襲ってやろうと思ってたのに」
　さりげなく物騒なことを言う大助マニアだが、ふと真面目な顔をする。
「ねえ、亜梨子」
「なに？」
「薬屋クン、アタシたちのそばからいなくなっちゃったり、しないわよね？」
　ドキリと亜梨子の胸が鼓動した。
　大助は亜梨子の監視のためにホルス聖城学園に潜入している。当然、モルフォチョウの一件が解決することがあれば、以前いたという桜架市へ戻っていくのだろう。
「ど、どうしたのよ、急に。ちょっとこの頃、付き合いが悪いっていうだけで……」
「また同じクラスになれたからかな。最近、思うのよね。アタシたちの関係って、今がベストっていうか……前はたまに退屈だったけど、今はそんなこと感じないっていうか」
　頭の良い恵那が珍しく考えこんでいる。
「ゴメン、なんか自分でもよく分からないかも。生まれてはじめての感覚って感じ？　欲しいものができたっていうか」
「ずいぶん漠然としてるわね……」
「そうなのよね。アタシ、今まであんまり先のこと考えたことなかったし」
　なんでも人並み以上にこなすことができるクセに――いや、それゆえにか、いつも不真面目な少女が照れた様子で笑う。にわかに未来の希望を抱きつつある恵那の表情は、以前よりも活き活きとしているように見えた。
　恵那が抱いているという感覚は、今の亜梨子と似ているのかもしれない。
　大助がそばにいるのが当然になり、恵那や多賀子もそれを受け入れている。四人でいる時間が増え、それが心地よくなっていた。
「そうね。こんな毎日も、悪くないわ」
　ぽつり、と呟き、亜梨子は笑んだ。
　だが――。
　平和な日々は、長続きはしなかった。
　数日後。
　早朝のSHRで担任教師の横に佇む少女を見て、亜梨子は平穏な日常が崩れ去っていく音を聞いた。
「姉妹校から交流生としてやってきた、宇野ノイルさんです。ホルス聖城学園との校風の違いを学び合い、お互いに仲良く――」
　教師の紹介を受けたのは、細身の少女だった。長い髪に天秤をモチーフにした大きな髪留めをつけ、制服の上からフード付きの白いパーカーを着ている。手足が長く、スタイルが良いのが目を引く。しかし――。
「ううぅ、ついにこの時がやって来てしまったぁ……どうして私がこんなところに来なきゃいけないんだろぉ……ううっ、ぐすっ」
　黒眼がちな瞳を潤ませ、宇野ノイルが急に

大助に近づく前に、亜梨子は恵那と多賀子の腕をつかんで引き止めた。二人を引き寄せ、耳元で囁きかける。
二人の目つきが一変した。
「な、なんで西園寺さんと九条さんまで、冷たい目に……！　おおいっ！　今、廊下を通った霞——アンネさんまで同じ目をしてなかったか？　オレが何したってんだよ！」
〝霞王〟の本名は、御嶽アンネリーゼという。彼女は大助の補佐役として、同校に紛れ込んでいる。金髪の少女が廊下を通り過ぎる間際、上品な顔つきを豹変させて大助を蔑んでいた。唾を吐くジェスチャー付きだ。
「胸に手を当てて考えることね。——それとも、もう手を当ててるのかしら？　自分以外の人の胸に、ね」
「なんであんな女に……言ってくれればアタシだって……」
「いやらしい……」
「い、いやらしい？　ていうか、一之黒さんの〝うまいこと言ってやった〟みたいな顔がムカつく……！」
三年生に進級した際にクラス替えがあったのだが、亜梨子と大助、そして恵那や多賀子という顔ぶれは変わらなかった。偶然なのか、それとも特別環境保全事務局が学園に対して何か働きかけたのかもしれない。
二年生の時と面子が変わらないせいか、普段の生活も以前と変わらない。仲の良い友人たちと笑いながら過ごす日々だ。エスカレータ式の制度があるため、高等部に進学するための勉強も楽なものだ。
始業のチャイムが響く中、窓の外をよぎる輝きが目に入った。
銀色のモルフォチョウだ。
親友だった花城摩理から受け継いだ〝虫〟は、常に亜梨子のそばにいる。まるで亜梨子の気を引いて、自身が幻ではないことを自己主張しているかのようだ。
だが亜梨子は——。
「……」
無意識にモルフォチョウから目をそらし、恵那や多賀子との談笑に戻った。
〝優しい魔法使い〟という虫憑きと出会ってから、いったい何日が過ぎただろう？
虫憑きと関わらない日々は、ゆっくりと亜梨子の心に安寧をもたらしていた。親友と死別してから虫憑きを探し続け、大助と出会ってからは多くの虫憑きと接触してきた。
すべて、亜梨子自身が望んでいたことだ。
虫憑きのことを知りたかった。
彼らが戦い、傷つき、傷つけられる理由を知りたかった。そうすれば親友が〝虫〟を残した理由を知ることができると思っていた。
だがふと平凡な日常に戻ると、それはかつての退屈な日々とは異なっていた。
傷つけ、傷つけられる痛みのない日々。
ごく普通の中学生らしい生活は亜梨子を癒すと同時に、心の奥にたぎっていた何かを溶かしていくかのようだった——。

「ねえ、エロ大助。少しは反省したかしら？」
放課後、亜梨子は薬屋大助に声をかけた。少年が誰も見ていないことを確認し、優等生の仮面をかなぐり捨てる。
「エロくないし、何を反省するのかも分かん

そうして亜梨子は、虫憑きのことを少しずつ理解してきたつもりだった。
だが――。
「……」
ある虫憑きの最期を思い出し、亜梨子はまぶたを閉じる。
その少女は〝優しい魔法使い〟と呼ばれていた。何をやってもうまくいかず、ただ他人を助けるためだけに自らの能力を行使していた虫憑きだ。〝虫〟の力に翻弄された一生を送り、ついには亜梨子の目の前で知人の身代わりとなって壮絶な最期を遂げたのである。
それでも〝優しい魔法使い〟は笑っていた。
あれが――。
あんな人生が――。
虫憑きという人々にとって、当然の人生だとでもいうのだろうか？
「くすくす。もしかして今頃になって怖じ気づいたんですか？　威勢良く虫憑きのことを知りたいと言ってたのに？　見てください、〝霞王〟。この人はやっぱりただの普通人です。ざまーみろです」
「メシの邪魔をするなってんデス」
振り向いた香魚遊の顔面を、〝霞王〟が笑顔でつかんだ。「ミシミシ。がくり」と呟き香魚遊の動きが停止する。
亜梨子は言い返すことができなかった。
香魚遊の言う通りなのかもしれない。
自分の中で、小さな違和感が生まれていた。
親友だった摩理や虫憑きのことを考えると、胸がチクチクと痛むようになっていた。その感覚は漠然としたものだったが、抜けない棘となって亜梨子に突き刺さっている。
「まあ、あなたがどんな虫憑きの人生を見たのかは知りませんが」
死んだフリで〝霞王〟の手から逃れた香魚遊が、「ニヤリ」と呟いた。
「虫憑きの中で最も過酷な人生を送っている人が、すぐそばにいることをお忘れなく」
亜梨子はピクリと顔を上げた。香魚遊が誰のことを言っているのかはすぐに分かった。
「大助が……？」
「何かと戦っていない虫憑きなんていません。そんな虫憑きが入り交じる地獄のド真ん中を、今も昔も歩き続けているのが彼です」
亜梨子は唇を噛んだ。
いつもそばにいるために忘れがちだが、薬屋大助も虫憑きなのだ。今まで冷たく接することもあったため、罪悪感がこみ上げる。
普段は何かとケンカばかりしているが、今度からは彼のことを優しい目で――。
「そうそう、かっくんといえば。最近はあなたのおかげで頻繁に会えて嬉しいです。この前もぺろぺろだけでなく、もみも――」
「彼だけはそのまま地獄に墜ちてもいいんじゃないかしら？」
満面に笑みを浮かべ、亜梨子は席を立った。

「……」
「……おい、亜梨子。そろそろ、朝からずっと人の顔をゴミでも見るかのような目で見てる理由をきかせてくれ」
ホルス学園の教室に着いたところで、一人の少年が思いきった様子で言った。
同世代の男子と比べ、背丈や身なりもごく平凡な少年だ。普段の生活態度も周りに合わせて協調性を発揮し、同級生とトラブルを起こしたこともない。唯一の特徴といえば、頬に貼ったバンソウコウくらいである。
彼の名は、薬屋大助。以前にある事件で知り合った以後、特殊なケースである亜梨子を監視すべく同居している少年だ。普段は優等生を演じているが、こと戦闘となると、〝かっこう〟としての冷徹な戦闘員に変わる。
「あ、西園寺さん、九条さん」
大助が教室の出入り口を見た。
亜梨子の友人が登校したところだった。
同級生の中でもあか抜けた印象の少女は、西園寺恵那。校則が厳しいにもかかわらず、制服を着崩して健康的な胸元や太ももを露わにしている。彼女は大助のことが大好きで、最近は度を超えているのが心配なところだ。
もう一人は、九条多賀子。資産家の子息が多いホルス聖城学園の鑑ともいうべき少女である。短めに刈り揃えた黒髪を揺らし、落ち着いた足取りで教室に入ってくる。
「なんだか一之黒さんの様子がヘンなんだ。二人はなにか知ら――」

くすくす。もしかして今頃になって怖じ気づいたんですか？

最近、そんなことをよく考える――。

「すたすた」

亜梨子の背後から、無感情な声が聞こえた。

「キョロキョロ。発見」と呟く声に続き、再び「すたすた」という声が近づいてくる。

「ガタン。着地」

ドリンクの載ったトレイをテーブルに置き、一人の少女が向かいの席に腰を下ろした。

前髪を切り揃え、左右で長さの違う髪型が特徴的な女の子だ。左目の下に貼った無数の星形のシールが照明を反射して輝いている。

以前に会った時のような白黒の私服ではなく、今日は亜梨子とは違う学校の制服姿だ。

「ニヤリ。おひさしぶりです、〝槍型〟さん。――それに〝霞王〟さんも」

星のシールを貼った少女が、チラリと別のテーブルを見た。そこには山のように積んだハンバーガーを脇目もふらずに貪り食う、金髪の少女が座っていた。

金髪の少女も、ピタリと動きを止めた。こちらを振り向き、それまでとはうって変わって上品な笑顔を作る。

「食事の邪魔をしないでクダサイ。ぶっ殺しマスヨ？」

イントネーションのズレた日本語で言い放ち、再びハンバーガーをつかむ〝霞王〟。

亜梨子は頬を引きつらせ、二人を見る。

「人がシリアスな物思いにふけってる空気を、見事なまでにぶち壊してくれるわね……」

「ニヤリ。あなたに気を遣うつもりなんてありません。――〝霞王〟を買収してまで、私を個人的に呼び出した理由を聞かせていただきましょうか」

ドリンクを飲み、「ごくん」と呟く少女。

擬音という擬音をわざわざ口にする少女の性癖には、いまだに慣れることができない。

金髪の少女、〝霞王〟。

そして亜梨子の前に座る、狗狸坂香魚遊。

先ほどの物思いに従うならば、彼女たちは一般人とは異なる側に存在する少女たちだ。

つまり、虫憑き。

それもただの虫憑きではない。

〝虫〟という現実離れした存在を隔離、隠蔽するために、政府はある機関を創設した。

特別環境保全事務局――多種多様の能力を持つ虫憑きに対応すべく、毒をもって毒を制すことを実現している組織だ。特環と略称される同機関は捕獲した虫憑きを訓練し、統制することで在野の虫憑きを捕らえている。

〝虫〟と、特別環境保全事務局。

この二つに関わったことで、亜梨子の日常は大きく変わった。

だがそれは、亜梨子自身の望みでもあった。

かつて病で他界した親友が描いた夢――それが何かを知るために、虫憑きというものを知りたいと願ったのだ。

「ええと、別に用件ってほどのことじゃないんだけど……」

「ピクリ。まさか、かっくんのビンカンな身体の部位を聞こうと？　ふるふる、それはあゆゆーだけの秘密なので教えません」

「それはどーでもいいわ。心底」

香魚遊の言う〝かっくん〟とは、やはり特別環境保全事務局に所属する少年、薬屋大助のことだ。諸々の事情から、亜梨子を監視するために同居している少年である。

「あなたの能力って、他の虫憑きの記憶が見られるんでしょう？」

「ふるふる、正確には〝虫〟の記憶です」

「今までに見た中には、その……かわいそうな人生を送ってきた人もいるのよね？」

「カワイソウなんて偉そうな言い方は気に入りませんね。シアワセな人生を送っている虫憑きなんていません」

亜梨子は、窓の外へ視線を移す。

「そう……よね」

香魚遊が「はてな？」と首を傾げた。だが何かに気づいた様子で、「ピコーン」と呟く。

「ニヤニヤ。あなたが先日巻き込まれた事件は知っています。なんでも精神支配系の能力を持つ虫憑きの記憶を見たとか？」

ぎくり、と亜梨子の心臓が跳ねた。

虫憑きだった親友のことが知りたくて、今までに何人もの虫憑きと会ってきた。

特別環境保全事務局という組織を知るきっかけとなった同級生の虫憑きをはじめ、仲間を疑うことを知らない歌手の虫憑き、虫憑きたちを導こうとする少女、眼前にいる魔女や戦闘狂もそうだ。炎を操る魔人やウザい女に翻弄されたこともある。

Main Character

一之黒亜梨子（いちのくろ・ありす）

ホルス聖城学園中等部3年生。旧家の伝統に従い武術全般を叩き込まれた、戦うお嬢様。

薬屋大助（くすりや・だいすけ）

一之黒家に居候する転入生。特別環境保全事務局のエージェントとして亜梨子を監視中。

花城摩理（はなしろ・まり）

亜梨子の親友。病に侵され死ぬ直前に、ある理由から亜梨子にモルフォチョウを託す。

STORY

夢を追うために、そしてつかんだ夢を守り抜くために、異形の〝虫〟から超常の戦闘力を与えられた少年少女たち。彼らは、〝虫憑き〟と呼ばれている――。

一之黒亜梨子の前にその〝虫〟が現れたのは、親友の花城摩理がこの世を去った直後だった。摩理に取り憑いていた、触覚が四本ある銀色のモルフォチョウ。だが宿主が死ねば消滅するはずのモルフォチョウは、なぜか亜梨子から離れようとせず、時に異形の長槍と化して亜梨子を守ろうとする。いったいなぜ？　亜梨子は〝虫憑き〟を監視する極秘機関〝特環〟から送り込まれてきた少年・薬屋大助とともに、その答えを探し続けてきた。そして今ここから、新章が始まる――！

ファーストフード店の二階からは、大通りを歩く通行人の顔が見てとれた。

その光景に重なって、窓の表面に自分の顔が映っていた。

黒い瞳はぼんやりと眠たげで、口にはストローをくわえたままだ。長い髪を後頭部で一つにしばった髪型は、何年も前から変わらない。今日は春の陽気が強いせいで、ホルス聖城学園中等部の制服は第二ボタンまで開いている。

中等部三年生に進級したばかりの一之黒亜梨子は、四人掛けのテーブルに一人で座っていた。何をするでもなく、ぼんやりと日常の時の流れに身を任せる。

窓の外に、小さな影が舞い降りた。

銀色の翅を羽ばたかせたモルフォチョウだ。

だが実在のそれとは異なり触覚が四本もある上に、躰そのものが銀光を放っている。

――〝虫〟。

思春期の少年少女に取り憑き、こうなりたいという夢や希望を喰らう超常の存在。十年近くも昔から人々の間で囁かれている化け物の中には、こんなにも綺麗な姿をしているものもあるということを知る人間は少ない。

否、〝虫〟という存在そのものが、この国ではあやふやなものでしかないのだ。常に噂になりつつも、決して明るみには出ない。政府の公式見解では〝いないもの〟とされているため、実在することを知る者は数少ないのである。だが疑心暗鬼になった一般市民によって、〝虫〟に取り憑かれた人々――虫憑きは差別と恐怖の対象として見られている。

銀色のモルフォチョウは、他の誰でもない亜梨子に取り憑いた〝虫〟だ。

だが本来は、彼女自身の〝虫〟ではなかった。病で他界した親友、花城摩理という虫憑きの少女から受け継いだのである。亜梨子本人の意志とは関係なく、だ。

虫憑きは、実在する。

今、亜梨子が見ている平和な光景の中にも、虫憑きが紛れ込んでいるのかもしれない。

一枚の窓ガラスを隔て、亜梨子の前を平凡な人々が通り過ぎていく。

自分は果たして、〝どちら側〟の人間なのだろうか？

親友の〝虫〟を受け継いだ虫憑きなのか。

それとも虫憑きと関わってしまっただけの、ただの一般人なのか。

ムシウタ
MU SHI- UTA
bug
17. 夢まどろむ迷子
新しい春、謎の転入生、そして消えゆく親友の少女
それは、最高で最悪のスプリング・フィーバー!
岩井恭平
Kyohei Iwai
イラスト
るろお
LLO

「マリオネットラプソディー」は複雑でありながら安易さを持つ設定と、特徴的なキャラクター、重いテーマに魅力があります。しかし生死を扱う作品は、キャラクターの軽い人間描写がより浮き彫りになってしまいます。人間には「温度」がある事をお忘れなく。複雑で深い温度を主人公に与えてやれば、作品は説得力を増し、輝くはずです。

「時載りリンネの冒険」は子供達に元気さがあり楽しく読めました。ですが、大人が描く子供の描写の中に、非常にアンバランスで宇宙人的な子供のリアルさが少し入れば、さらにヒネリの利いた強烈な個性になるのでは。またせっかくの面白い設定が、後出し解説のもたつきで生きない点もありましたので、謎解きは明快に、鮮やかに。大人の登場人物も魅力的ですから、ぜひ伸ばしていって下さい。

「相克のファトゥム」は読みやすくはありますが、スタイルの統一感の無さと、アクション描写のわかりにくさがもったいなく感じました。話運びにおける、点を配置する位置、そして結ぶ線が絶妙になれば、描きたいモノがもっとダイレクトに伝わるはずです。

「グランホッパーを倒せ！」は決して一番ではないけれども、手元に置いておきたい好感の持てる作品。潔くわかりやすく面白い。女性に味があっていい。しかし斬新さはまったく無い。これからの作品に大きく期待しています。

選考委員

でじたろう

「ファントム」「斬魔大聖デモンベイン」などのゲームを世に送り出した株式会社ニトロプラス代表取締役社長。現在はゲーム他デジタルコンテンツのプロデューサー、メカデザインやサウンドエフェクトなどでゲーム制作にも関わる。

スニーカー大賞選考委員という栄誉ある立場を授かり、大変にうれしく思います。プロデューサーという立場からの視点と、弊社ゲームシナリオライターの鋼屋ジンから貰った意見と合わせて、選考に臨ませていただきました。

最終選考となった4本はどれも楽しい作品でした。その中の2本、「マリオネットラプソディー」と「相克のファトゥム」は、昨今のライトノベルや美少女ゲームなどで人気の、いわゆる伝奇アクションものに属します。同ジャンルながら、「マリオネット〜」は客観性が乏しく非商業的な臭いが強い作品です。二次創作において己の願望を顕著に投影されたオリジナルキャラをメアリー・スーと呼びますが、この主人公にはそのきらいがあります。ですが光る部分も見受けられるので、推敲次第で化ける可能性もあるでしょう。

反対に「相克のファトゥム」は品質的に安定感のある印象でした。ただ高い完成度を誇りつつもインパクトが足りません。続編を意識して全力を出し切っていない感も歯がゆいです。もっと色々なアイデアをぶつけていっても良いと思います。

「時載りリンネの冒険」は少女の描写に作者の愛を感じました。こういったこだわりは作家として武器になるでしょう。ジャンル的には魔女っ娘モノになるでしょうが、作者なりの「ファンタジー」を描こうとしている点に好感を持ちました。ですが情報の出し方に少し難があり、読みづらい箇所がいくつか見受けられました。

「グランホッパーを倒せ！」は今回最も楽しめた作品です。仮面ライダーパロディは商業、非商業問わずによく見かけますが、ここまで丁寧かつ真面目に作られると圧巻です。スニーカー読者層を考えると微妙にずれていますが、こんな作風があってもいいかと。

次回作でどんな技を見せてくれるのか、とても気になる作家です。

選考委員

野崎岳彦（スニーカー文庫編集長）

今回から、スニーカー文庫編集部を代表して、選考の末席に加わらせていただくことになりました。選評は、編集者としての視点を踏まえて書かせていただきます。

「相克のファトゥム」と「マリオネットラプソディー」は、対照的な作品でした。前者の長所は後者の短所、前者の短所は後者の長所に見えます。「ファトゥム」は、特殊な設定も多く、その世界に入っていくために努力が必要でした。書き手だけが分かっているルールを読み手に伝える工夫が少ないため、物語のドライブ感を殺いでいるのだと思います。一方で、その独自の世界観は、うまくいった時に絶大な魅力になるだろうと期待させてくれます。

「マリオネット」の方は、キャラクターの安定度やストーリーの分かりやすさで、書き手のスタイルが明瞭に伝わり、読み手が途方にくれるようなことはありません。しかし、その分既読感が強く、ご都合主義的な話し運びが目立ってしまっています。プロとしての資質は感じるものの、デビュー時にはこの点がハードルになると思います。

「グランホッパーを倒せ！」は、好感を持って読み終わることができたこと、仮面ライダー＋釣りバカ日誌というモチーフを真面目にやろうとしたこと、この二つを評価します。しかし、残念なことに、書き手独自のアイディアに乏しいため、パロディのレベルを大きく超えることができません。このタイプの作品が広い読者を獲得するためには何が必要なのか、もう一歩深く考えてみることをお勧めします。

「時載りリンネの冒険」は、四作品中最も可能性を感じました。構成や設定に不十分な点は多いものの、修正点がはっきりしていて、仕上がりの形が見通しやすい作品です。書き手の個性が作中にきちんと表現されており、技術的な修練を積めば、この作品の完成度を高めることができるはずだと判断しました。

選評

選考委員 冲方丁

1996年「黒い季節」で第1回スニーカー大賞〈金賞〉を受賞しデビュー。「マルドゥック・スクランブル」で第24回日本SF大賞受賞。他著に「カオスレギオン」「微睡みのセフィロト」など。その他、漫画「ピルグリム・イェーガー」原作、アニメ「蒼穹のファフナー」シナリオ参加など、多方面に活躍中。

選考委員の総入れ替えによる初の選考だったが、特に方針が混乱することもなく粛々と選考が行われた。その点については今期応募者も、今後の応募者も安心して頂きたい。

「相克のファトゥム」は選考作品の中で最も「印象が薄い」と評された。人間関係が上手く描けておらず、それゆえ各人物の決意が曖昧で、世界を支配するルールや掟と結びつかずに終わっているからである。また独自の言葉遣いや造語がなくアピールが不足している。そういった難点を克服すれば、より豊富なアイディアに満ちた作品になるはず。

「グランホッパーを倒せ!」は、逆にきわめて作品の傾向が明確で、カラーが強く、評価も高い。だがパロディ色が強すぎることから、既に世にある同じ傾向の作品と比較されやすく、独自のセリフ回しやアイディアが不足していることが目立ってしまう。小ネタだけでなく読者の感情を揺さぶるような工夫を心がければ、さらに素晴らしいものになる。

「マリオネットラプソディー」は、肉親の死をどう感じているのか伝わってこないなど人間関係が曖昧な上、主人公が無敵という設定を活かせず緊張感を失わせている。これも独自の言葉遣いや造語もなくアピール不足が目立つ。もっと物語の中心となる感情をしっかり描くことで全ての要素を一つにまとめれば、独特の雰囲気をもった作品になる。

「時載りリンネの冒険」は、ヒロインの描写の前に妹の説明が入ったり、世界設定が語られる最中に全く別の話題が挟まれたりと、情報を出す順番が混乱している。独自の世界を築きつつ、豊かな児童文学の雰囲気をやどしているので勿体ない。もっと情報を精査し、効果的に読者を作品世界に導く工夫をすれば、情緒豊かな作品になる。

四作品とも、まさに奨励賞の名の通り大きな課題がある。ぜひ自分に足らない何かを見つけ出し、今回僅かに届かなかった一歩を踏み越え、デビューに漕ぎ着けて欲しい。

選考委員 安井健太郎

1998年「ラグナロク」で第3回スニーカー大賞〈大賞〉を受賞しデビュー。同年よりザ・スニーカーにてラグナロクシリーズの別ブランド『ラグナロクEX.』を連載開始。シリーズは長編11冊、EX.シリーズ8冊を数える。

「相克のファトゥム」

色々なアイデアを詰め込むことができる人ですが、そのそれぞれのアイデアがうまく噛み合っていないところが残念です。結果、散漫、あるいは薄い印象しか読む人に与えることができないのではないでしょうか。女の主人公をもう少し魅力的にかけたなら、それだけでも、かなり違っていたと思います。

「マリオネットラプソディー」

四作品の中では、一番、文章に濃さを感じました。それはおそらく、もっとも大事な主人公とヒロインの関係が、プロットをそのまま持ち込んで完結してしまっているからではないでしょうか。ふたりの関係をもう少し突き詰めて書いていけば、印象ががらりと変わったと思います。

「グランホッパーを倒せ!」

いわゆるパロディなのですが、構成力はあると感じました。文章の淡泊さは、今回に限り、いい方向に傾いている気がしますが、文章自体で楽しませることができるかどうかが、今後の課題になりそうです。今後もこういった方向性で進むのか、あるいはまた違った側面をお持ちであるのか、楽しみにしています。

「時載りリンネの冒険」

可愛い女の子を書く、という意欲は伝わってきました。是非はともかく、伝えられるということは大事だと思います。序盤、やや構成に難があることと、一人称でなくてもよかったのでは、と感じましたが、設定自体は面白く、よく考えられていると感心しました。

全体的に、個々のキャラクターはそれなりに描けていても、そのキャラクター同士の関係性があまり表現できていないのでは、と感じました。物語は関係性から生まれてくるものですので、そこをもう一度見直してみればさらに作品がよくなるのではないでしょうか。

選考委員 杉崎ゆきる

1995年に「ASUKA」新人漫画賞を受賞しデビュー。「女神候補生」「D・N・ANGEL」「りぜるまいん」等アニメ化された作品も多数。他著に「ブレンパワード」「ラグーンエンジン」など。

まったく方向性の違う4作品に、かつてない真剣さを持って向き合い、読みました。それぞれ良い点も悪い点もある中で、真っ先に感じたのはタイトルの弱さ。読者が最初に作品と出逢うのはタイトルであり、そこから勝負は始まっている。面白い作品のタイトルは、それだけでも引き付ける魔力が存在するという事を意識して欲しいと思います。

大賞

該当作なし

奨励賞（賞状＋トロフィー＋賞金20万円）

相克のファトウム　七瀬川夏吉（岩手県）

東北の地方都市で人に仇なす魔妖を討つ祓魔師の事務所を営む美女・烏兎とその助手の高校生・裄丸は、退魔機関WORDSから、ある亜神の護衛を依頼される。その護衛対象の亜神・イタルは、彼がかつて造ったという次元超越能力を持つ星河鉄道の奪取を目論む存在から狙われているというのだ。早速、イタルのもとへ向かった烏兎と裄丸だったが、謎の少女の襲撃を受け、イタルと烏兎が敵の手に落ちる。はたして裄丸は、愛する烏兎を救えるか——!?

奨励賞（賞状＋トロフィー＋賞金20万円）

グランホッパーを倒せ！　いとうのぶき（三重県）

妻子持ちのしがないサラリーマン・浜岡圭介が勤める株式会社出州田商事、その実態は世界征服を企む悪の秘密結社デスタールだった。そう、圭介は悪のサラリーマン戦闘員だったのだ！　今日も富士山を噴火させるために静岡まで出張し、額に汗して真面目に働く圭介。だが、そんな彼の前に立ち塞がるのは、強力な戦闘サイボーグ——宿敵のグランホッパーだった！　愛する妻子のため、出世を目指して今日も悪事に励む平戦闘員・圭介はグランホッパーを倒せるのか!?

奨励賞（賞状＋トロフィー＋賞金20万円）

マリオネットラプソディー　赤鴉黎（千葉県）

人を自在に操る異能の力・操糸術を伝える家系・統堂家の次期当主である少年・睦月透真。わけあって、統堂を離れている彼の前に〝山田太郎〟と名乗る男が現れ、連続通り魔事件の調査を依頼される。かつて、その事件の調査中に命を落としたという母の代わりを務めることを決意した透真は、統堂の本家から彼を連れ戻しに来たメイド少女の冥と共に事件の調査を始めた。その過程で被害者たちの体内に蟲がいることを突き止めた二人は、〝蟲遣い〟を追うが、事件は二転三転し、意外な結末に——。

奨励賞（賞状＋トロフィー＋賞金20万円）

時載りリンネの冒険—イクリージアステイアーズ—　清野勝彦（北海道）

小学六年生の箕作リンネは、一見どこにでもいそうな女の子。でも、彼女は〝時載り〟と呼ばれる時間を止める力を持った種族の末裔だった。〝時載り〟の能力は読書量に比例するというが、活字嫌いのリンネが止めることのできる時間はせいぜい一、二秒。そんなある日、リンネと彼女の幼なじみの少年・久高は、誰にも読むことのできない不思議な言語で記された本を拾う。俄然、好奇心を刺激されたリンネは本の持ち主を捜そうとするが……。

第11回 スニーカー大賞結果発表

選考委員一新のうえ次の「10年」を開始したスニーカー大賞。新生スニーカー大賞・第1回と言える今回の選考は左の通りとなった。残念ながら大賞は該当作なしという結果ではあるが、選考会での熱い議論により最終候補作4作品すべてを奨励賞とした。4人の新たな語り部たちの未来に注目してほしい。

新選考委員

冲方丁

安井健太郎

杉崎ゆきる

でじたろう

（株式会社ニトロプラス代表取締役社長）

野崎岳彦

（スニーカー文庫編集長）

イラスト：佐伯淳一（コミック『バイトでウィザード　轟け我が魂よ、と異端者たちは嘆いた』より）
文庫＆コミックス
3冊連続刊行
キャンペーン
バイトでトリプル！
「バイトでウィザード」シリーズがスニーカー文庫で6月・7月に2か月連続刊行。さらに6月26日にコミック版も発売。この連続刊行を記念して読者プレゼントがあたるキャンペーンを実施中！
3冊のキャンペンーン対象本の帯についている応募券のうち、2枚を切り取って応募すると、
A賞：椎野美由貴＆原田たけひと直筆サイン入り色紙／5名
B賞：椎野美由貴＆原田たけひとサイン入り複製原画／100名
が当たります。
詳しくは対象本の帯をチェックしてね。（応募締切7月31日当日消印有効）
バイトでウィザード
轟け我が魂よ、と異端者たちは嘆いた
Kadokawa Comics A
発売中
バイトでウィザード
唱えよ安らぎの歌、と星は輝いた
スニーカー文庫
発売中
バイトでウィザード
双子の飼育も銀玉次第！
スニーカー文庫
7月1日発売
小説もコミックも、あたしにまかせて。
く激しいエピソードのクライマックス編。『双子の飼育は～』は、本誌でおなじみ研修生編の第四弾。双子の父・尚をはじめ、あいかわらずヘンテコなゲストキャラが大暴れする、内容濃い一冊。どちらもバイトの今の勢いを感じさせる最新作なのだ。しかも、この2冊は、連続刊行キャンペーン（このページ左上を見てね）の対象本なので、ぜひ手にいれて素敵なプレゼントを当ててほしい。
イラスト：原田たけひと

バイトでウィザード

Miyuki Shiino
椎野美由貴
TAKEHITO HARADA
イラスト 原田たけひと

双子の活躍が、コミックスでも読める!

豊花　京介、やったわ。コミックに登場よ。
京介　ああ、おれも出ているらしい。
豊花　そんなの、あたりまえじゃないの。どうせ、あんたは寝てるだけでしょうけど、あたしは大活躍のはず!
京介　……そこのところは、読んでもらってくれ。

「ビーンズエース」誌で好評連載中のコミック版「バイトでウィザード」の単行本第一巻が発売された。豊花、京介の双子術者はそのままに、マンガ家の佐伯淳一が、テンション高く描くキュートでコミカルな学園魔法バトルが、ついに登場する。

小説にはないオリジナルストーリーを盛り込んだ第一巻では、砂島礼子の墓参に北海道へ向かった豊花と京介が、謎の敵に襲われる。矯正術で対抗しようとする二人だったが、なぜかその地では光流脈の術が発動せず、京介はコミック版でも生命の危険にさらされるのだった。コミックならではの魅力が光る、もう一つの「バイト」にぜひ注目してほしい。(コミックスとビーンズエース誌の連動フェアも開催中。詳しくはコミックス新刊帯か七月七日発売のビーンズエースVol.5で)

また、原作の小説も、発売中の六月一日刊「バイトでウィザード　唱えよ安らぎの歌、と星は輝いた」に続き、七月一日にも「バイトでウィザード　双子の飼育も銀玉次第!」を連続刊行中だ。礼子との長長編版第一〇巻の「唄えよ~」は、

赤き星からの侵略を迎え撃て――
鬼才が挑む外伝第2弾、発売決定！

■TVアニメ
機神咆吼デモンベイン
毎週木曜深夜0:00帯WOWOWノンスクランブル（無料放送）にて絶賛放送中!

■アニメ、ゲーム、小説、コミック……
最新情報をここでCHECK!
公式HP:デモンベイン7
http://www.demonbane7.net/web/

■8月1日発売予定
斬魔大聖デモンベイン
軍神強襲
原作:鋼屋ジン（ニトロプラス）
著:古橋秀之
イラスト:Niθ

している。鬼才・古橋秀之（代表作：『ブラックロッド』『サムライ・レンズマン』）が大好評をもって迎えられた『斬魔大聖デモンベイン機神胎動』に続き、外伝第2弾『軍神強襲』を執筆しているのだ！

　覇道兼定は、鋼の機神デモンベインとともに消息を絶った父にして世界の守護者たる覇道財閥総帥・鋼造の行方を追っていた。だがその不在をつくように開始された、火星人の地球侵略。アーカムシティを蹂躙する多脚歩行戦車群に、魔導書ネクロノミコンの化身たるアル・アジフは新たな主エドガーとともに鬼械神アイオーンを駆って反撃を試みる。だがその圧倒的戦力差を覆せるのは時空すら超えて魔を断つ剣――無敵にして不滅の人造神デモンベインのみ！

　人と魔。希望と絶望。愛と憎悪――そのすべてを鋼鉄の軋みとともに叩きつける、古橋秀之にしか紡ぎえない「デモンベイン」アナザーストーリー。全てのファンよ、その驚愕の顕現をしばし待て！

斬魔大聖デモンベイン
原作:鋼屋ジン(ニトロプラス)
イラスト:Niθ
新たなる魔導書(バイブル)、顕現迫る!
TVアニメが絶賛放送中、待望の新作ゲームソフト「機神飛翔」も発売され、まさに破竹の快進撃を続ける「デモンベイン」。
そしていま、この壮大にして熱き「魔術と鋼鉄の物語」に触発された、新たな物語が生まれようと

誰にも知らない昔がある

「ねぇ、マリア。あなた、ほんとうに強くなったわ。わたしたちのクラン〈ZOO〉に入る前は、ガラスのように繊細で、ナイフのように誰も寄しぇ付けなくて——でも、いろんな経験を積んだ今のあなたは、もう立派な〈侵入者〉。しょしてなんと言ってもわたしたちのかけがえのない仲間よ。だから、ね、マリア、しょんな苦しくて辛い思い出なら、早く忘れてしまいなしゃい。しょして、その真紅の髪をなびかしぇて、真っ青な空に向かって叫ぶの。

——明日はきっと晴れる

しゃ、マリア。廃墟の上で薔薇の花びらをまき散らしている変態しゃんはほっといて、ね、行きましょっ。みんな待ってるわ」

スニーカーフェスタの今号より、誇り高き仲間たちの物語『薔薇のマリア』が帰ってきた。今回のクールは、謎に満ちたZOOのメンバーの過去が明かされる「ZOO過去篇」。第1回目は美貌の〈侵入者〉にしてこの物語の主人公マリアローズの物語だ。ZOOに出会う前の孤高のマリアは一体どんな生活をしていたのか？

ウェブラジオドラマも絶好調、そして8月1日には待望の新刊も発売予定！　ますます目が離せない『薔薇のマリア』にこの夏も大注目!!

小説本編は314ページから

薔薇のマリア最新情報

ネットラジオサイト"Webラジ"にて、オリジナルストーリー配信中!
薔薇のマリア
Don't make me alone
ボーナストラックてんこ盛り
9月6日ドラマCD発売！
詳しくはコチラ
http://www.jvcmusic.co.jp/m-serve/webradio/

STORY
カタリの提案で、お宝目指し霧の虚洞ミストホロウへ潜入するZOO一行を待ち受けていたのは、一面真っ白な霧と、そして……!?

CAST
マリアローズ／桑島法子、トマトクン／星野貴紀、アジアン／石田彰、サフィニア／ゆかな、ユリカ／こやまきみこ、カタリ／岡本寛志、ピンパーネル／志村知幸、悼みの君／最上嗣生　ほか

薔薇のマリアVer1 つぼみのコロナ

ザ・スニーカーで連載した天然ボケ魔術士コロナの真実の物語が、書きおろし新章を加え、早くも文庫で登場!

スニーカー文庫最新刊8月1日発売!

史上最強の傭兵
リロイ・シュヴァルツァー
Leroy Schwartzer
キミはもう
"リロイ・シュヴァルツァー"を
体感したか!?
小説本編は106ページから

RAGNAROK
ラグナロク

安井健太郎
Kentaro Yasui
イラスト
TASA

唯一無二の相棒にして、意思を持つ魔剣
ラグナロク
Ragnarok

連載再開2回目。リロイがさらにパワーアップ!

超直情型、破天荒、無愛想、粗忽……この黒ずくめの男リロイ・シュヴァルツァーを形容する言葉は事欠かない。常に沈着冷静な意志を持つ魔剣ラグナロクが〈相棒〉となって、すでに幾千の戦いと刻が流れた。

前号の久々の登場で、多少大人になって帰ってきたかと思ったが、やはりリロイはリロイでしかなかったようだ。しかし、粗暴だけがリロイの取り柄(?)ではない。人としての筋を通す男気を感じさせる、男が惚れる男でもあるのだ。

その並はずれた身体能力と戦闘力から、誰もがうらやむ傭兵の最高峰SS(ダブルエス)級への昇進も間近だったのに、ためらいもなくギルドを脱会したのも、名声よりも仁義を優先するそんなリロイの男気を象徴する、今や懐かしいエピソードだ。

さて、そんなリロイが前号衝撃的にザ・スニーカーに帰ってきた。

そして連載2回目の今回も、フエスタ号にふさわしい、期待通り(以上?)の大暴れをしてくれるぞ! このフェスタを機会に、リロイ・シュヴァルツァーという男の魅力を体感して欲しい。

リーズなのだ。

凶悪な目付き、でも中身は超がつく人見知り&引きこもり男・川村ヒデオ。そんなヒデオが拾ったパソコンに、極悪感染ウィルスのウィル子が侵蝕していたことがきっかけとなり、彼らは「聖魔杯」に挑むことに。「人と人外のペア」であれば参加でき、優勝すれば世界を手にできる可能性もあるこの大会。ヒデオのダメ人生を返上するにはうってつけだったのだ。

ところが会場には、銃やナイフで武装した人間に、魔人、ロボットなど得体の知れないヤツらが三〇〇〇人も集合していた! 一般人のヒデオ&戦闘能力ゼロのウィル子ペアに、唯一勝機があるとすれば「勝負方法は問わない」というルールのみ。

バトルでなくとも、ギャンブルだってレースだって料理対決だって構わない。味方を見つけて集団戦に持ち込んでも問題なし。いかにして有利な条件で勝負にのぞむか? それがヒデオに残された最後にして最上の手段なのだ! その為に必要となるのが、高度な交渉術なのだが……引きこもりを進行中のヒデオにはそれすら期待できそうになく……。

とにかく逃げず、恐れず、諦めず、勝ち続けなければならない「聖魔杯」。どうする、どうなる!? もうヒデオから一瞬たりとも目が離せない!

崖っぷちのバトル開始は90ページから

引きこもり男が挑むのは
世界を争奪する「聖魔杯」
隔離された城塞都市に
ウィル子
正式名称Will.CO21。超愉快型極悪感染ウイルスにして電子精霊(!?)。人間にも感染するらしいが、その力は未知数。
川村ヒデオ
夢も希望も失ったヒキコモリ男。まるで人殺しのような眼光だが、根は善良。ダメダメ人生を返上すべく「聖魔杯」で優勝を目指す!!
林トモアキ
Tomoaki Hayashi
イラスト: 上田夢人
Yumehito Ueda
戦闘城塞
マスラヲ
BATTLE FIELD: "MASURAO"
大人気シリーズ「お・り・が・み」の林トモアキが贈る、無差別級バトル「戦闘城塞マスラヲ」。連載開始早々アンケートランキングの上位に躍り出た、今もっとも伸び盛りのシ

スニーカー文庫の最先端が集まった!
スニーカー祭(フェスタ)'06
「され竜」のビッグニュースはこれ!
戦い(ダンス)と、
今日も俺たちは、
このイカれた街(エリダナ)
ガユス
常にネガティブ思考と不幸が全開の化学錬成系咒式士。愛剣は魔杖剣ヨルガ。
Kadokawa Comic Aより好評発売中!
されど罪人は竜と踊る
原作：浅井ラボ　漫画：灰原薬
キャラクター原案：宮城
「され竜」の他にも、「ハイドでウィザード」「彩雲国物語」「クロム・ブレイカー」といったビーンズエース誌発のコミックスが一斉登場!　それを記念してコミックスとビーンズエース誌の連動フェアが開催中!　詳しくはコミックス新刊帯か七月七日発売のビーンズエースVol.5を見てね。
されど罪人は竜と踊る

されど罪人は竜と踊る
浅井ラボ
Labo Asai
イラスト：宮城
Miyagi
ギギナ
冗句(ダンス)と、不条理(ダンス)——。
で踊り続ける——。
最強の攻性咒式士
ガユスとギギナ。
二人の戦いが
新たなる場面(ステージ)へ。
咒式と呼ばれる森羅万象の力を操り〈異貌のものども〉や〈竜〉を狩る攻性咒式士のガユスとギギナ。普段は流れ者の行き着く街〝エリダナ〟で細々と依頼を受けている二人だが、その実態は最高峰である十三階梯の咒式士。多くの咒式士が集まるエリダナにおいても有数の咒式士とされる二人は、皇国を揺るがす陰謀劇、悲しき天才の復讐、悲哀にくれる少女の絶望や、その他多くの事件に巻き込まれ、傷つきながらも戦い続けてきた——。
そんな二人組ガユスとギギナの活躍（？）を描いた大人気シリーズ「されど罪人は竜と踊る」のコミックスが登場！　エリダナを舞台に繰り広げられる強力な咒式バトル、二人の毒舌が新鋭・灰原薬の手によって描かれたコミックは、され竜ファンなら絶対にゲットだ！

今年のフェスタのトップを飾るのは「ムシウタ」！　絶好調の「ムシウタ」のビッグニュースは、今号より衝撃の新章に突入することだ！

お嬢様学校に通う少女・一之黒亜梨子。普通の中学生の女の子だが、ただ一つだけ違うこと。それは亡き親友・摩理から“虫”モルフォチョウを受け継いだこと。世間では忌み嫌われ恐れられている“虫”。なぜそんなおぞましいモノを、親友は亜梨子に託したのか――？その理由を探るために、様々な“虫憑き”と出逢ってきた。そしてここより、大きく物語は動き出す！

学年があがり一つ大人になった亜梨子。今までは“虫憑き”というもの、そして摩理の想いを探るだけで必死だった。しかし亜梨子が考える以上に“虫憑き”の生活は過酷なもので、夢のために目の前で微笑みながら死んでいく少女すらいた。だから亜梨子は、初めて迷う。

「忌み嫌われている“虫”と関わるより、今のままの平穏な生活を選ぶべきなのでは？」と。その迷いを聞き、今まで共に“虫憑き”と関わってきた最強最悪の“虫憑き”の少年・薬屋大助が、初めて柔らかく笑いながら肯定する。ここで2人の夢の旅は終ってしまうのだろうか――？「ムシウタbug」最大の危機であり、最高の緊迫感でお贈りする今回の連載！　最高で最悪のボーイミーツガール・ストーリーからは、片時も目が離せない!!

薬屋大助（くすりや だいすけ）

“虫憑き”を捕獲する組織、特環から派遣されたエージェント“かっこう”。今は一之黒家に居候し、亜梨子を監視する。

誰よりも熱く、

小説本編は66Pから!

ムシウタ
MU SHI- UTA
bug
岩井恭平
Kyohei Iwai
イラスト：るろお
LLO
スニーカー文庫の最先端が集まった!
スニーカー祭'06
「ムシウタ」のビッグニュースはこれ!
一之黒亜梨子
病死した親友・摩理から銀色のモルフォチョウを受け継いだ。ホルス聖城学園に通う、武術全般をたたき込まれたお嬢様。
大きな夢は
ここから始まる!

イラスト／るろお
夏休みを前に、年一度開催されるスニーカー祭は、普段のザ・スニより、なんとカラー1.5倍でお贈りします！
スニーカー文庫のいちばん熱いところが集結するこの大祭、楽しそうなとこを眺めて回るもよし、
美味しいとこを探すもよし、お気に召すままを楽しんで！
スニーカー文庫の最先端が集まった！
スニーカー祭'06
フェスタ

熱風海陸 ブシロード

OVERLORD CHRONICLE

著:吉田 直

イラスト:後藤なお

吉田 直が遺した熱き、最後の物語がここに!

大河バトルロマン『熱風海陸ブシロード』その前史
――著者急逝により未完に終わった
ストーリーの全貌が、ついに明らかになる!

イラスト/後藤なお ©武士団

2004年7月に急逝された吉田直先生の業績と人柄を後世に伝えるべく、先生の出身地である兵庫県芦屋町で特別企画展が開催されることとなりました。

名　称:作家　吉田直氏里帰り。「スナオ展」
期　間:平成18年7月1日(土)から10月1日(日)まで(月曜　休館)
時　間:9:00～17:00(入館は16:30まで)。期間中、土曜日は20:00まで
会　場:芦屋歴史の里　福岡県遠賀郡芦屋町山鹿1200番
内　容:吉田直先生の遺稿、遺品・作品に掲載されたイラスト原画等
入館料:200円
問合先:芦屋歴史の里(TEL.093-222-2555　FAX.093-222-2957)
HPアドレス　http://www.town.ashiya.fukuoka.jp/index.htm

アストラル6月期報告書

記：猫屋敷

我らが〈アストラル〉に寄せられた情報を緊急回覧します。各人、可及的すみやかに対処、および準備をしてください。

1. 文庫「レンタルマギカ　社（やしろ）の魔法使い（仮）」まもなく発売！

7月1日発売「レンタルマギカ　魔法使い、修行中！」に続いて半年振りの書下ろし長編「レンタルマギカ　社の魔法使い（仮）」がついに発売されます。今回は葛城家に呼び戻された葛城みかんちゃんを中心に、神を下ろそうとする葛城家の野望に我が〈アストラル〉が立ち向かいます。みかんちゃんの過去、そして私の過去がついに明かされます。しかも上下巻に亘る大ボリュームで展開予定！　発売は初秋予定。詳しくは次号ザ・スニーカーにて発表いたします。

あ、そうなんですか？ いつき

2. インターネットラジオ『webラジ』が好評配信中！

前号の『ザ・スニーカー』で発表したとおり、現在我が〈アストラル〉の活躍がインターネットラジオにて期間限定で配信中！　番組のパーソナリティは社長・伊庭いつき役の福山潤と私、猫屋敷蓮役の諏訪部順一。リスナーの恋の傷を浄化する「恋愛マギカ」、猫にまつわる俳句を読み上げる「猫俳句」のコーナーなど楽しい企画の上に、なんとオリジナルドラマも配信されています。内容は以下の通り。

◎STORY

我が〈アストラル〉に寄せられた依頼。それは建設中の高速道路を暴れまくる「首なしライダー」を鎮めて欲しい。一見ただの退魔依頼かと思われたが、実はその裏には死霊を操る謎の少年と暗躍する〈協会〉の存在があった……。いつきの妖精眼（グラム・サイト）が魔術の夜に光る！　オリジナルドラマということで文庫への収録はありません。『webラジ』内では「薔薇のマリア」も同時配信中。各人期間内にお聞き逃しないようお願いします。

アドレスはこちら！↓

http://www.jvcmusic.co.jp/m-serve/webradio/

3. 「レンタルマギカ」はなんと次号も小特集！

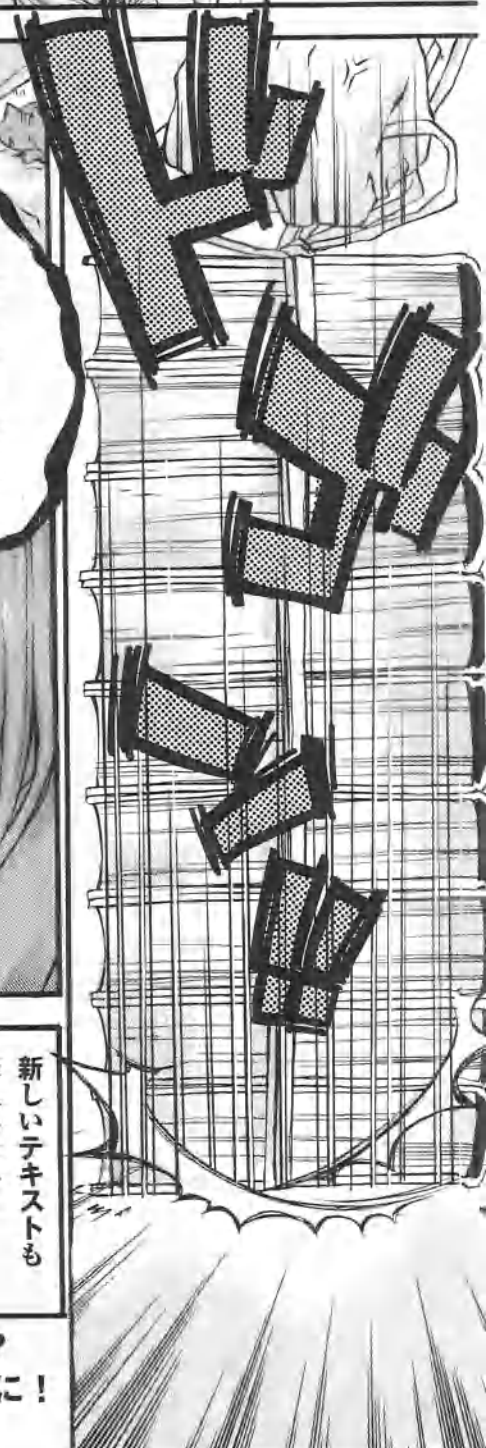
今回の巻頭特集が終わったから、と言って皆さん油断は禁物。次号の『ザ・スニーカー』でも小特集を実施いたします。史実に残る伝説の魔法使いたちの紹介記事や〈アストラル〉館の図面公開や〈協会〉の謎など、明かされていない謎に加え、三田誠×pakoの取材旅行珍道中日記など盛りだくさん。もちろん書くのは私ですが、社長や穂波さんにも手伝っていただきますからね。各人夏休みの宿題は必ず終わらせておくこと！

やったね!! ほ

みなさん大変ですね（笑） ま

アストラル社内回覧	
いつき	✓
猫屋敷	／
穂波	○
みかん	
黒羽	
青龍	
朱雀	
白虎	
玄武	

次号レンタルマギカ特集もお楽しみに!!

穂波が近頃会社に来ないいってアディリシアさんに話したら…
『明日あたりにいつきは目を離すとすぐサボるとか言って出て来ますわよ♡』って言ってたんだ!
スゴいな～アディリシアさんって～
……
ス。
そうや…
目ぇ離すとロクな事にならへん…
毎日キッチリしごいてやらなあかん様やね…
新しいテキストも購入したし…ビシバシいくで!覚悟してや…社長…
お金どこから…こんな本買う
そんな下らん事考えとるヒマあるならチャッチャとやる!
は…うう
END
コミック版のいつきも前途多難!?
月刊Asukaでの連載をお楽しみに!

結局占って もらえな かった…
今日もやっぱり 来ないのかな…
ぽつん…
何やっとるん？
穂波!!
どっど…どうして
一週間前から 見事に進んどらんな…
いっちゃんは 目え離すとすぐ サボる……
!
すっ…
スゴい…
？
すが？
あ、いや 昨日さ…

あの…占って貰いたい…事が…あって！
はぁ
会…じゃなかったし…仕事先の子が…近頃仕事先に来ないんで…すけど…
学校では普通に見掛けるのにどうしたのかなって…
心配で……
アストラル

昔っからそうや…
イツキが腰を抜かしている間に私が貴方のゆく末を聞いておいてさしあげますわ♡
えっ?!
では総カツしますと…
いっちゃんとおると暖かい気分になるわ
共に過去未来両方に困難や障害の暗示が見えますがお二人はお互いに足りないものをお互いが持っている形となっていますのでよりよいパートナーとなるでしょう
よかったですね
イツキ… 目をひらいてお聴きになったら
けど…
その分だけ
とても
悲しくなる時がある
すっ すいませんっ

ふぎゃあああああ！
ガタン☆
ドタン
ブルブル
イツキ
貴方まさか…
タロットの絵が
怖いんですの？
ギク
そ…そーでも
ない…ケド？
カク
カク
まったく…
アストラルの
先が思いやら
れますわよ。
イツキ
いっちゃんやなぁ…
クス…

知らないんですの？　イツキ…こうゆう方の占いは当たるんですのよ
ひそひそ
ポソポソ
そーなんですか？
ブチィ
ブシャ
…………！！
これは立派な仕事や！
ふるふる
あかん！あかん！
ペラ。
ゾゾゾ
う…
うひぃっ

イツキ…顔が真っ赤ですわ…熱でもありますの？
ぺら…
ぺら…
どぉーーーん…

ムカムカ…
まあ…いっちゃんは乗り気やない様やし…私も正体明かせんし…見て見ぬフリしよ
!

しかし…学校帰りに男女が占い…
イライラ

カップル気取りかッ!!
実際。

あら、何を震えてらっしゃるの？
……ア…アディリシアさん…この占い師さん…大丈夫…なんですか？
怖いです…

少しくらい私の我儘にお付き合い下さっても宜しいんじゃなくて？
かぁ…。
あ…う…
わ…かりまシタ…
月刊Asuka8月号（発売中）にて連載開始！
コミック版『レンタルマギカ』ザ・スニ初登場！
恋と魔法の幻想ファンタジー
レンタルマギカ
原作＊三田誠
作画＊成宮アキホ
キャラクター原案＊pako

折角の鬼の居ぬ間の何とやらですわ
放課後探索とシャレこみますわヨ
いっちゃん!!
とアディ!?
なんでこんなとこに2人っきりでおるん?!
でも僕…会社行って色々勉強しないと…
!
でしたら尚更ご一緒して頂こうかしら?
企業は大株主に特典やサービスを提供するものでしょう
ですから…

ちょい読み！
コミック版で魔術の夜（マギ・ナイト）をのぞいてみない？
私、穂波・高瀬・アンブラーは
只今占い師のレンタルマギカ中です
ただ。この仕事はアストラルにはナイショのお仕事なので…
心配や…。
ここ一週間会社に顔出しとらんから…いっちゃん…勉強サボりまくってるんちゃうやろか…
でもアレの為にはもうひと稼ぎせんと！
むんっ
…あ
あのっ困ります…
いいじゃありませんの

次ページからザ・スニ初登場、コミック版「レンタルマギカ」！

と、言いかけたときだった。
しゃらん、と鈴の音が事務所へ響いたのだ。
玄関のチャイムであった。
「あ、はいはい。僕出ます」
逃げるように玄関へ出たいつきが、扉を開けて、息を飲んだ。
「功刀さん」
「こんにちは、伊庭くん」
そこに、功刀翔子が立っていたのである。
「身体、大丈夫？」
「あ、あ、うん。功刀さんこそ」
「あたしは……守ってもらったもの。伊庭くんにも」
お爺ちゃんにも、と言って、翔子は学生鞄の内側へ手をいれた。
「今日、伊庭くん休んでたから。――これ、ノート」
そっと手渡されたのは、大学ノートだった。
わざわざ新しく買ったノートらしく、一ページ目から授業の内容がびっしりと書き込まれている。手間をかけたものであることは、想像に難くなかった。
「あ、ありがと」
「あたしこそ……本当にありがと」
ふぁさり、と三つ編みが流れた。
前髪がそよ風に吹かれ、その奥で輝いた表情にいつきは目を奪われた。
この事件で初めて見る、心底からの翔子の笑顔だった。
「じゃあ、また」

あなたのご要望に魔法使い、お貸しします。

翔子が去っても、しばらくの間、いつきは動かなかった。
まだ、胸のどこかにあの笑顔が残っている気がした。それはきっと、何よりも確かな今回の報酬であった。
それから振り返って、
「あ。そういえば、穂波、さっき何って……」
「……な、何でもあらへん！」
ぱっと、ノートみたいな何かを背中に隠し、穂波がかぶりを振った。
「ええから、早く社長業に戻り！　だいたい、今回にしても呪波汚染の洗浄やなんやで、結局赤字やろ！」
「え！　えええええ！　な、なんか無茶苦茶じゃない?!」
「口答えしない！」
ばあん、と極大の雷が〈アストラル〉事務所に落ちたのだった。

「ん？」
いつきの悲鳴を聞いたような気がして、途中で翔子は振り返った。
『あなたのご要望に魔法使い、お貸しします』
――〈アストラル〉の看板が埋め込まれた路地裏である。
その路地裏に吹く風へ髪を押さえ、ふと少女は目を細めた。
思い出したのである。
『幸せにおなり』
と、言い残してくれた祖父の笑顔を。
それは、きっと一生忘れないであろう、祖父の最後の笑顔であった。

end

レンタルマギカの基礎理論 Vol.11

●神隠し

人が何の前触れもなく、何の理由もなくいなくなってしまった時、よく「神隠しにあった」といわれる。本来は、山がまだ人の住む場所ではなかった頃、そこで行方不明となった者が出た時にいう言葉だった。人ではない、天狗や神によって連れて行かれてしまったのだと。
神隠しにあった者は、そのまま行方不明になる者もいれば、後になってひょっこり帰ってくる者もいる。最近では2002年5月にマレーシアでひとりの少年が失踪するという事件があった。100人が捜索に参加して5日後に発見されたが、発見された地点は失踪場所から数メートルも離れていなかった。その時、彼は「自分を捜してるみんなの姿は見えていたのに、何もできなかった」と話したという。

「ありがと……穂波」
そう呟き。
少年は、蒼氷色の瞳の魔女の胸元へと、倒れ込んだのであった。

翌日の夕方。
いつきは、〈アストラル〉事務所のデスクでへたばっていた。
さすがに学校は欠席したものの、今回の事後処理もあって、会社を休むことはできなかったのである。
目の前には、書類の山が積み重なっている。いつもの魔術や社長業のテキスト、呪波汚染の浄化報告など〈協会〉への提出文書、事件についての一連の書類など、まさしく山としか形容しようがない。
「お疲れ様、いつきくん」
「あ……ありがと」
黒羽の差し出してくれたハーブティーを飲みながら、なんとか視線だけをあげて、いつきが礼を言う。気絶した以外はまともな睡眠を取ることができず、目の下にくまができているのがなんとも哀れであった。
へたばったまま、ふと訊いた。
「そういえば……功刀さんのお爺さんって、結局、何の魔法使いだったのかな？」
「修験道ですね」
と、斜め向かいの猫屋敷が受けた。

こちらは雑誌用の原稿を執筆中である。くるくると万年筆を回しながら、懸命に原稿用紙へ文字を埋めている。
「修験道って、あの……山伏とか」
「ええ。ですから、あの鴉とかも説明はつきますね。鴉は修験道——とりわけ熊野神道と集合したそれの神使ですから」
神使。
要するに、神様の使いだ。
翔子の祖父が、媒体として鴉を使っていたとしても、何の不思議もなかった。
「じゃあ、神隠しも……」
「修験道が山の神隠しについて触れるのはある意味当然でしょう。ついでにいえば、山にこだまを残すのも天狗の技——つまりは修験道の術の内です。おそらくですが……自分がいなくなった後、神隠しという方便で、功刀さんを納得させようとしたんでしょう」
こだま。
神隠しと言われた、山を登る笑い声。
あれは嘲笑ではなく、爽やかな笑みではなかったか。
孫娘の幸せを見届けようとした——死せる祖父の、最後の笑み。
「……そっか」
その光景を想像して、いつきはなんとなく遠い目になった。
今度こそ、翔子の祖父は、思い残すことなく逝けたのだろうか。
「思い煩ってるほど、ひまじゃないやろ」
と、ため息混じりに穂波が突っ込む。
こちらも、〈協会〉への派遣を終えて、〈アストラル〉へ戻っていた。ただし、いつきと違って学校も出席している。このへん、体力の違いというべきか、要領の差というべきか。
「あわ、ダメかな。やっぱり」
「当たり前や。まずは仕事優先。だいたい、今回やって、あたしが間に合わへんかったらどないしたん！」
文句ありげに、唇を尖らせる穂波である。
「あれは……まあ、なんとなくだけど……穂波なら来てくれるんじゃないかと思って」
「…………っ！」
その言葉に、少女の頬が紅潮したが、それも一瞬のこと。
「思ってじゃあらへん！　そういう曖昧な判断で、社長が危険にあってたら、きりがあらへんやろ」
「ご、ごめんなさい」
剣幕に、少年が首をすくめる。
「……ええけどね」
すぐ、穂波の雰囲気が軟化した。
もとより、言うことを素直に聞く少年とは思ってない。ただ、あんな無茶を見せられたのだから、少しぐらいは反撃してもいいんじゃないかとも思う。
どれだけ心配したか、本当に分かっているのかと。
それから、少しそわそわ、鞄を持ち出し、
「これ、今日の授業のノートやけど——」

『行かない……』
と、そう囁きが聞こえた。
『お爺ちゃんは、絶対、どこにも行かないよ』
「あ……あたし……」
もう、翔子も理解していた。
祖父が何をしたのか。
誰が、何を言ったせいで、祖父が何をしてしまったのか。
……ああ。
祖父は、豹変したのではなかったのだ。
「だから……ずっといてくれたの……？」
骨董品に固執したのも、家を出られなかったのも、その魔術のせい。
五年もの間、死にかけた身体を蘇生させ、何度となく魔術で延命してきた。孫娘をひとりにしないため、それだけのために、老人は禁忌にさえ手を出した。
だけど……そんな願いが、ねじ曲がろうとしている。
いいや、すでにねじ曲がってしまった結果が、今の呪波汚染なのだった。
「——言いたいことが、あるよね？」
別の声が、割り込んだ。
「伊庭くん……」
振り返った向こうで、眼帯を押さえたまま、少年は優しく告げたのだ。
「約束は……ふたりでするものだよ」
と、絶え絶えな息で言う。
青い顔で、笑って続ける。
「だから……考えて。どうして……功刀さんは約束したの？　どうして……お爺さんは、無理してでも約束を守ったの？」

力ずくで呪力を破り、
払拭し、薙ぎ払う降魔の矢。

「どうして……？」
翔子は、もう一度祖父を向く。
祖父の幻影が崩れていく。
黒羽の顕現現象に、限界が来たのだ。
再び、溢れた呪力は呪波汚染へと堕落する。
祖父の姿もまた崩壊し、腐った鴉へと戻っていこうとする。
寸前、聞こえた。
『翔子……』
頭を撫でてくれたときの声。大きくて、温かかった手の平。
「…………あ」
その思い出が、翔子の背中を押した。
強く、かぶりを振った。
「もう……いいから……」
最初は弱々しく、しかし、次には力強く叫んだのだ。
「あたし……もう大丈夫だから！　もう子供じゃないから——だから、お爺ちゃん、行っても大丈夫だから！」
——すると。
祖父は笑ったように、翔子には見えた
——
光が走った。
呪力が散華する。
だが、あくまで『核』が抜けただけだ。呪波汚染が消えたわけではない。
屋敷に充満していた呪力は、すぐさま『核』の欠如を補填し、よりおぞましいカタチへ復帰しようと集っていく。
「いつきくん——また、呪力が！」
「大丈夫……」
黒羽の声に、いつきは天井を見た。
刹那、
「我は願う！　力の円錐のもと、地にも天にもあらざるヤドリギの加護もて、東の災いを砕け！」
ぶおっ、と残留した呪力がちぎれた。
風が巻いた。
何かが、屋敷の天井から突きたったのだ。
それは、まるで嵐がよどんだ空気を一掃するような、凄まじくも清々しい魔術だった。力ずくで呪力を破り、払拭し、薙ぎ払う降魔の矢であった。
「ヤドリギって——穂波さん?!」
「た……高瀬さん？」
黒羽と翔子とが、相前後して、箒にまたがった少女の名を呼んだ。
しかし、穂波は箒から下りるや、すぐさまいつきへと詰め寄ったのだ。
「社長！　一体、何があって……」
「あは……凄いや。やっぱり間に合ってくれた」
穂波の問いに、いつきは微苦笑する。
そのまま、視界がぐらりと足元へ流れた。
「しゃ、社長——いっちゃん?!」

けーっ！
鴉の一羽が、呪縛を抜けた。
片方だけ、翼を腐らせた鴉だった。
ねじまがった嘴が突き出される。速い。人間の頭蓋骨ぐらい簡単に貫くだろうと、そう確信できる一撃が、少年の脳天へと迫った。
その一撃へ、いつきは拳を放った。
「――戻れえええぇっ！」
叫びというよりも、祈り。
拳が嘴に貫かれ、肉の裂ける嫌な音が響く。
同時に、別の『声』が和室を圧したのだ。
翔子には聞こえないはずの、黒羽の『声』。
「――戻って！」
ぎゅるん、と。
世界が――裏返った。

――翔子は、見た。

そこは、小さな病室だった。
五年前の、事故の直後だということは、一瞬で理解できた。忘れるはずもない光景だったからだ。
消毒薬の、つんとする臭い。
あまりにも静かな、深夜の病院。
『行っちゃいやだ……』
そこで、幼い女の子が泣いていた。

レンタルマギカ

翔子だった。五年前の、まだ小学五年生の翔子。
とりすがっているのはベッドで、そこには祖父が寝かされていた。両親は集中治療室から出た後で、すでに絶命したことを――聞かされてはいなかったが、なんとなく分かってしまっていた。
だから、翔子はこう言ったのだ。
『お爺ちゃんまで……どっか行っちゃ嫌だ……』
無理な願いである。
そのときの祖父は、もう自分の身体を理解していた。目に見える外傷は少なくとも、内臓のダメージが致命的であることを悟ってしまっていた。
だけど。
だから、祖父は言った。
『行かない』
と。
『お爺ちゃんは、絶対、どこにも行かないよ』
死ぬと分かった身体で、そう約束してしまったのだった。
約束したからこそ――触れてはならない魔術へ、手を出した。

はかない白昼夢のごとく、その幻も刹那の閃光だった。

しかし、幻は新たな奇跡を連れていた。
翔子が現実に戻ったとき、千々に砕けた鴉がその羽根をひとところに集わせたのだ。
やがて、集った羽根はカタチを取り、翔子に見覚えのある人影となった。
「あ……」
翔子が、口を押さえた。
信じられないという表情が、抑えきれなかった。これほどの怪異を見た今ですら、目の前の現象は特別な意味を持っていた。
呼ぶ。
おずおずと、迂闊に口にすれば壊れてしまうというように、その人影を呼んだ。
「――お爺ちゃん……？」
その隣で、黒羽は一心に念じていた。
「…………っ」
――顕現現象という。
霊体を材料として、特定のカタチを取らせる異能だった。
今は、鴉を分解し、いつきの目に映った影を頼りに、呪波汚染をあるべきカタチへと戻している。
つまり、老人を蘇らせるという、本来のカタチに。
黒羽と同じ――幽霊というカタチに。
「――お爺ちゃん……？」
呼んだ翔子に、祖父の幻影はゆっくりとうなずいた。

見る。視る。観る。
少年の右目は――そういうモノだ。
魔法使いたちは、妖精眼とも呼ぶ。
だが、代償はある。さきほどの激痛はいや増し、直接神経を炙る業火と化している。汚染された呪力が、いつきの『魂』までも蝕まんとする。
（それでも――！）
鴉たちが、近づいてくる。
黒羽の騒霊現象が弱まっているのだ。
「……黒羽さん……お願いしていい？」
「っ……なんですか」
「…………」
結界を支える少女に、いつきはあることを囁いた。
「……じゃあ……その……カタチをつくれば……いいんですね……」
黒羽がうなずくのを確認して、少年は、今度は翔子に視線を移す。
「功刀さん」
「え？」
「見てあげて、あなたが」
それだけ口にして、鴉たちを見据えた。
半面を溶かした鴉がいた。肉の崩れ、骨を晒した鴉もいた。翼から蛆虫をはみださせ、膿のようにへばりつかせている鴉もいた。
見ているだけで、身が竦んだ。
顔からは血の気が引き、膝はがくがくと震えっぱなしで――それでも少年は口にした。
「この魔法を――本当のカタチに戻す――！」

そして、隣からの声に振り向いた。
「伊庭くん……」
翔子が、身をもたげていたのだ。
そのまま、目を見開く。
おぞましい鴉たちが遠ざけられていることに、彼女も気がついたのである。
「これって――伊庭くんがっ？」
「……僕じゃないよ」
淡く、いつきは少女に笑いかけた。
「だけど……大丈夫。……さっき、僕は魔法使いじゃないって言ったけど……」
ぎゅっと、眼帯を押さえつける。
「……僕には、手伝ってくれる魔法使いがいるから」
いつきが言う。その眼帯を透かして、少年には視えている。
しかし、この程度では足りなかった。
もっと奥まで。
もっと底まで。
もっと――本質まで。

「仕事って……誰が行ってるん?!」
「誰って……あぁっ!」
猫屋敷もまた、目を見開く。
魔法使いは、常に自分の身体から呪力を発散させている。呪波汚染を起こすほどではないにせよ、それらの『力』は近くで魔術が行使されるときには、確実に影響を与える。特に、別の系統の魔法に対しては、致命的な変化を及ぼすことさえある。
呪波干渉と呼ばれる現象だ。
それなりの魔法使いなら回避できる現象でもあるが――
「黒羽さんだと――まだ」
猫屋敷の答えに、穂波も息を飲んだ。
「もともと……五年も保ったんが奇跡的なくらいの術式や。縁ぎりぎりまで入れたコップの水みたいに、崩壊する寸前まできてるはず。少しでも呪的な変異があったら……」
それ以上は、言葉にできなかった。
猫屋敷の返事を待たず、穂波が飛び出したのだ。
「穂波さん!」
「――あたし、先に行く!」
手に持っていた箒をまたぎ、少女の姿は、夕闇へと吸い込まれたのだった。

すべてが、漆黒の羽根にひしがれていくようだった。

空気も空間も鴉に埋まり、伊庭いつきなんて存在は、簡単に消し飛ばされてしまいそう。
黒く禍々しい重圧に、何もかも潰される――。
消える。
消える――
消え――る――
「……くん」
ふと、何かが聞こえた。
「……いつき……くん」
声がしてる。
聞き覚えのある、誰かの声。
「う……」
その声にすがって、懸命に目を開いた。
鉛どころか、瞼が溶接でもされたようだった。
全身の力を込めて、それでも開くと――目の前に、半透明の少女がいた。
「黒羽、さん……」
「あ……あたし、廊下で変な声聞いて……急いで戻ってきて。そしたら……いつきくんも……功刀さんも……鴉に襲われてて……」
涙目の黒羽を見上げて、気がつく。
自分と黒羽とを中心に、ぽっかりと周囲数メートルの空間が、妖鴉たちを阻んでいるのだった。
少女の能力――騒霊現象である。彼女の念動力は、霊体にさえ効果を及ぼす。ゆえに、一種の結界となって、鴉たちの侵入も妨げているのだ。
だが、それとて永遠ではない。

けーっ!
無限に湧き出す鴉たちは、少しずつ騒霊現象の空間へと侵食してくる。
「………痛」
上半身を無理矢理起こし、眼帯を押さえた。
激痛を送り出す右目は変わっていない。この場の呪波汚染のせいだった。呪力へ過敏に反応するいつきの右目は、直接脳に負担を強いている。長く続ければ、命を落としかねないと忠告されてもいた。
（それでも……）
その右目が視たものに、いつきはこだわっていた。
こだわりたいだけの価値が、今視たものにはあったのだ。
「黒羽さん……分かる?」
「な、何が……ですか?」
「この鴉……黒羽さんと一緒なんだ……」
「あたし……と?」
疑問符を浮かべた黒羽へ、いつきは別のことを訊いた。
「廊下で声を聞いたって、どんなの?」
さきほどの黒羽の台詞だった。
――廊下で変な声聞いて。
「え……確か、そう、『行かない』って……」
「……そっか」
どこか寂しげにうなずき、いつきは立ち上がる。

漆黒の羽根と狂った鳴き声とが、屋敷などという小さな器を満たし、内側から破壊せんと暴れ狂っている。できそこないの粘土のように、びちゃびちゃ、びちゃびちゃと、羽根と肉とを畳に散乱させている。
その、悪臭。
嗅いだ鼻さえも腐らせてしまう臭い。
「……ぁ」
いつきの喉が干上がる。
おぞましさに、身体も心も硬直する。敗北する。恐ろしすぎて、気絶さえもできない。
鴉についばまれ、翔子が叫びをあげた。
「──嫌ぁっ！」
その声に、
「功刀、さん！」
条件反射的に、いつきの身体が動いた。無我夢中で鴉を殴りつけ、少女をかばおうと右足が前に出る。
「が──っ！」
だが、瞬間、その膝が落ちた。
右目に──眼帯の奥に、ただならぬ激痛が走ったのである。ナイフを突き立てられたごとき灼熱。脳までも爛れさせる苦痛。
紅い激痛の中で、いつきは悟った。
（違う……！）
確信。
激痛とともに流れ込んだものを、少年は認識した。眼帯を透かして、自分の脳へ映像を叩きつけられた感覚。
（これは……神隠しなんかじゃ……ない……）

反魂。御魂呼ばり。
泰山府君の法。死返玉の秘術。

思考だけが、空転する。
指一本も自由にならず、吐き気と激痛だけを詰め込まれた身体で、いつきは必死にもがいた。いくらもがいても、何ひとつ楽にはならなかった。
「功刀……さん……」

反魂。
御魂呼ばり。
泰山府君の法。
死返玉の秘術。
時代により、魔術系統により、さまざまな名前で呼ばれるが、その実体は「死者を蘇らせる」というそのひとつに尽きる。
完全な蘇生は不可能にせよ──散華するべき魂を、ほんのつかのま、この世にとどめおくという術だ。
命を不自然に生かすという意味で、禁忌の中でも最悪の部類といえた。
険しい山道を駆け下り、猫屋敷が言う。
「五年前に、功刀さんの両親が亡くなった話は知ってます……？」
穂波は、かすかに首をひねった。
「あ、うん。確か……山津波だったとか」
「奇跡的に助かったのが、功刀さんと祖父だと聞いてましたけどね。そういう事情でしたら、いささか真実と異なるのかもしれません」
「異なる……？」
猫屋敷がうなずいた。
「穂波さんの調べでは、反魂の呪物が流出したのは、おおよそ五年前でしたよね」
「あ……」
目を剥いた穂波に、猫屋敷は言葉を続けた。
「お爺さんの怪我も、致命傷だったとしたら？　病院を抜け出して家に戻ったけれども、本当は死ぬ直前だったとしたらどうです？」
「……だから、お爺さんは禁忌に手を出した」
死人を蘇らせる。
それほどの術は、まず人間の手には余る。いかな禁忌に手を出そうと、おいそれと成功するものではない。
だが。
死にかけた自分を、もう少しの間保たせるぐらいなら？
五年間、術を施した屋敷の中だけで過ごすぐらいなら？
「…………」
穂波は、愕然とする。
そこまでして、生き残ろうとした執念を思って。そして、それほどの禁忌が巻き起こす呪波汚染を思って。
山に設けられていた積み石も、そういった呪波汚染を緩和するためだったのだろう。すぐ呪力の洗浄をしなければ、第二、第三の異変が生じることは予想に難くなかった。
「あ！」
「どうしました？　穂波さん」
振り返った猫屋敷に、穂波が尋ねた。

と、声があがった。
「？」
「ひとつだけ、特別なことがあったかも」
「特別なこと？」
いつきがきょとんと首を傾げた。そうすると、二、三歳ぐらい幼く見える。
その様子に微笑してから、翔子は掛け軸の側に置いてあった小さな袋を取った。
「それ……」
「うん……これが、いなくなったお爺ちゃんの、枕元に置いてあったんだ」
お守りである。
手縫いらしいほつれた袋の口を、赤と青の紐が綴じていた。
「事故の後にお爺ちゃんがつくったんだ」
「事故……」
両親が亡くなったという、その事故。
「山津波だったんだけどね」
と、翔子は呟いた。
「近くにハイキングにいったとき、皆で巻き込まれて。——お爺ちゃんと、あたしだけが生き残っちゃったんだ」
まだその光景が瞼に映っているというように、翔子は目を閉じた。
「その後から、お爺ちゃん、少し変になっちゃったんだ。そのお守りつくって、ずーっと肌身離さず持ってて。家を一歩も出なくて。……あたしの言うことも聞いてくれなくなっちゃって」
（…………）

レンタルマギカ

いつきも、思う。
雪崩のごとき土砂の波。掻き分けても掻き分けてもなくならず、口も鼻も耳の穴までも埋め尽くす、泥の海。どれも人間を絶望させるには十分だろう。
あるいは、人を変えてしまうにも。
「ごめんね。嫌な話聞かせちゃった」
「う、ううん。こっちこそ、ごめん」
あわてて頭を下げ、謝罪する。
それから、
「じゃあ、そのお守りは……」
と、手を伸ばそうとした。

——ごそり

と、音がした。
「え……？」
ふたりが目を見張る。
ひとりでに、翔子の手でお守りが開かれ、内側から何かが転がり出たのだ。
符であった。
表面に、いびつな文字が書かれている。茶色に変色した紙に、朱色の文字で何事かが走り書きされていたのである。
だが——いつきは視た。
符の周辺に、光の糸がつながっているのを。糸。
その符を使った魔術が生きているという、その証明。
「功刀さん——！」
思わず立ち上がって、いつきが声をあげる。
そのときだった。
突然、屋敷全体が鳴動したのである。
ばさばさばさ！
ふすまを破り、天井を覆い、和室を黒い群れが蹂躙した。
ばさばさばさ！
ばさばさばさ！
鴉だった。
それも、奇怪に歪んだ鴉であった。
嘴はねじれ、翼は溶け崩れ、ぶよぶよとした内側の皮膚を露わにして、それは飛んでいるのだった。
そんな鴉が、廊下から大量に湧き出し、屋敷を埋め尽くそうとしているのだった。
「なんで……また?!」
翔子の悲鳴を、別の声が引き裂いた。
けーっ！
狂ったようにわめく、妖鴉の鳴き声。
けーっ！　げーっ！　げーっ！
反響し、共鳴し、圧倒する。
溢れ、笑い、這いずり、濁り合う。

は釘付けになった。
「先代と親交があった人が、呪波汚染を起こすほどの魔術に気が付かないわけはないでしょう。まして、これほど近くとなれば、関係のないほうがおかしい」
「それって、つまり――」
穂波の想像を、猫屋敷が言葉にした。
ほぼ、最悪のカタチであった。
「功刀さんのお爺さんが、反魂の禁忌に触れたと――そういうことになりませんか？」

「だから……お爺ちゃんまでいなくなるのは……嫌だな」
「…………」
翔子の頬をつたった涙を見て、黒羽は胸の何かが氷解するのを感じた。
（……ああ）
やっと、分かった。
何がひっかかっていたのか。
どうして、今回に限って、自分から依頼に志願したのか。
黒羽まなみは、生前のことを覚えていない。
どんな過去が自分にあって、どんな出来事で死んだのかも知らない。覚えているのはただひとつ。黒羽まなみという名前だけ。
――それは、つまり。
どんな家族が自分にいたのか、覚えていないということ。

――それは、つまり。
どんな家族が自分にいたのか、
覚えていないということ。

（……だから、羨ましかったのかな）
大切な祖父がいるという、この少女が。
「……黒羽さん」
いつきが、こちらを見ていた。
「うん、ありがと。社長」
自分の代わりに訊いてくれた少年へ、微笑する。
自分の、再確認。
少し哀しくて、少し嬉しかった。
〈アストラル〉にいると、楽しすぎて忘れそうになるけれど――自分に欠けているモノを、改めて知る。
ひとつうなずいて、黒羽は席を立った。当たり前だが、音ひとつしなかった。
「じゃあ、あたし、ほかに神隠しの手がかりがないか見てきます」
「う、うん」
少年のうなずきを背に、黒羽が屋敷のふすまを通り抜ける。霊体をするりと透過させて、廊下へと抜けた。
薄暗い廊下のあちこちに、黒い羽根が落ちていた。
神隠しに伴ったという、鴉の名残。
（あれ……？）
黒羽が瞬きした。
その羽根は、黒羽と同じ、霊体だったのだ。
密度の濃さのゆえに、一般人の翔子にも見えたのだろうが――普通、こんなにも長い間残存するものではない。
「ど、どうして……」
「…………」
（え……？）
拾おうとして、途中で黒羽は振り返った。
何か、声が聞こえた気がしたのである。
（奥……？）
黒羽の瞳が、屋敷の闇へと吸い込まれた。

「――どうかした？」
ふすまを見たままの少年に、翔子が声をかけた。
「あ、いやいやなんでも」
かぶりを振って、いつきは否定する。
黒羽を見送っていたのである。こういった探索は、幽霊である黒羽に任せられることが多かった。素人の翔子を刺激しないように、との気遣いもある。
（……僕も、ホントは素人のはずなんだけどなあ）
意味もなく暗くなってしまう。
今度は自分で回復し、翔子へと別の問いを重ねた。
「そういえば、神隠しの前後で、何か気がついたことがある？」
「……気がついたこと？」
「何でもいいんだけど」
言われて、翔子はかすかにうつむいた。
少しして、
「あ」

「疾！」
いわく、泰山府君炎羅符呪。
霊符は、飛翔半ばで地獄の炎を纏い、火山の奔流のごとく、一本の樹木へ押し寄せた。
だが。
その直前、地面へ何かが刺さったのだ。
「我は乞う！　すなわち力の円錐とヤドリギの加護もて、南の禍つ事より我が身を守れ！」

刺さったその地点から、たちまち植物の壁が伸び上がる。その壁を焼き切れず、霊符の炎も遮られた。
ヤドリギの矢、と猫屋敷は見た。
その呪物によって触発された魔術が、猫屋敷の霊符さえも凌いだのだ。
（ケルト魔術——っ？）
アイルランド周辺に伝わる、古代の魔術。猫屋敷の知る限り、現在の世界でこの魔術系統を使いこなすものは数人しかいない。
「穂波さん！」
「ね、猫屋敷さん——」
驚いた顔で樹木の陰から出てきたのは、依頼主の——功刀翔子と同じセーラー服を着た少女だった。
栗色のショートヘアと、雪花石膏にも似た白い肌。薄縁の眼鏡を押し上げた鼻梁も、ワンピースを纏う身体の線も理想的といっていい。
穂波・高瀬・アンブラー。
現在、魔法使いの互助組合——〈協会〉へ貸し出されているはずの、〈アストラル〉社員のひとりだった。
〈アストラル〉西洋魔術課社員が、いつきと同じ同級生だと知ったら、功刀翔子はどんな顔をしただろう。
「どうして、穂波さんがここに——」
「ね、猫屋敷さんこそ。あたしは、〈協会〉からの依頼で、禁忌がらみっぽい事件を追ってただけで——そしたら、いきなり符呪を打たれて——」
文句ありげに、こちらを見つめてくる。
「や。申し訳ありません。急に呪力を察知したもんで驚いてしまいまして。……あの、事件って……数日前の神隠しですか？」
「神隠し？　ううん、あたしの追ってたのは反魂がらみやけれど？　調べやと、もう五年ぐらい前の話やし……」
「そうですか……」
一瞬、安堵した。
が、その台詞に含まれた、ある情報に猫屋敷は気がついた。
「——穂波さん、禁忌に触れた魔法使いについては分かっているんですか？」
「え？」
質問よりも、その声の冷ややかさに、穂波の眉が寄った。
「ううん。〈協会〉では、名前まで分かってへん。この山のふもとに工房を構えてるやろうから、まずあたしが見に来て——」
「功刀、じゃないですか？」
穂波が硬直した。
「それって……」
「私が入社するよりも前のようですが、どうも先代の〈アストラル〉と親交があったようでして。昨日、お嬢さんが、うちに依頼に来られました。功刀翔子さん。ご存じですか？」
「…………」
同級生である。知らないわけがない。
だが、それよりも別の可能性に穂波の思考

する。
それから、こう尋ねた。
「……お爺さんのこと、どう思ってる?」
少し、沈黙があった。
「それって……言わないといけないかな」
「いやその……できたらで、いいんだけど」
いつきも、自分の質問でないだけに、しどろもどろに答えるしかない。
そんな様子を見つめて、
「……多分。駄目な人、ということになるのかな」
正直に、翔子は告白した。
親戚の誰に訊いても、その評価は変わらないだろう。
酒癖や、功刀家を一代で傾けた浪費癖もさることながら、この数年はひどく荒れていた。
怪しげな骨董品ばかり買いあさり、文字通り、一歩たりとも家を出なかったのだ。そして、自分の代わりに、常に翔子を使いへ出した。手紙や買い物はもちろん、どんな小さな外出だって翔子に強制した。そのため、小学校や中学校の旅行にも、翔子は行くことができなかった。
「あたしも……怖いことの方が多かった……」
翔子は、呟く。
理解できるはずがない。
孫娘よりも、自分の集めた骨董品を愛した人のことなど。
うっかり翔子が傷ひとつつけるだけで、青筋をたてて怒り狂った。二度としないと誓っても、丸半日は押し入れから出してもらえなかった。
でも。
皺だらけの、温かな手を覚えていた。
もっと、ずっと小さな頃のこと。
膝に座った自分を撫でてくれた、優しい手の平。子供の頭を撫でるのすら躊躇していたような、不器用な動き。
多分、それだけは一生忘れないだろう。
「だから……お爺ちゃんまでいなくなるのは……嫌だな」
つう、と翔子の頬から涙が伝った。

魔術は、必然的に世界を歪める。
その原動力となる呪力は、
いともたやすく変質し、現実を侵食する。

4

山頂近くで、猫屋敷は足を止めた。
「にゃあ」
先を歩いていた白猫——白虎が、くいくいと得意げに前肢を突き出す。
「おお、ご苦労様」
その指示に従って、用心深く灌木をかきわけたところで、猫屋敷は目を見張った。
「これは……」
石である。
やや大きな、人間の頭大ほどの石を、いくつか積み上げたものだった。素人が一見しただけでは分からないだろうが、表面にさりげなく紋様が刻んでいた。
猫屋敷の指が、その刻み目にそっと触れる。
やがて、
「……なるほど、呪力浄化の紋様ですか」
と、言葉がこぼれた。
魔術は、必然的に世界を歪める。
物理法則ではありえぬ奇跡を導くがゆえに、その原動力となる呪力は、いともたやすく変質し、現実を侵食する。
呪波汚染とはそういうものだ。
結果、どのような現象が起こるかは、いかなる魔法使いにも予想できない。神隠しなどはマシな方で、最悪の場合、一国が地図から消えたという事態さえ歴史上に存在する。
だからこそ、魔法使いは、呪力の管理に細心の注意を払う。
この石のオブジェもまた、そうした仕掛けのひとつだったのだ。
山の要所要所に置くことで、こもりがちな呪力を適度に発散させるという、そういう魔法的意味を持った呪物であった。
「流派は、修験道あたりの系譜ですが……」
しかし、同時に猫屋敷は眉をひそめた。
誰の手になる呪物かは分からないが、これでは普通の呪波汚染など起こりようがない。神隠しの原因はもっと別の何かということになる。
「じゃあ、社長と——」
足早に山を下りようとして、突然猫屋敷は振り返った。
同時、羽織の袖が翻り、縦四本、横五本——
—邪を征する早九字を切って、その中央より、一枚の符を迸らせたのだ。

ているのである。
「…………」
ちなみに。
黒羽は、なぜだか少し怒った顔をしていた。
「ど、どうかした？」
小声で、ぼそぼそと訊く。
「いつきくんは、時々、無闇に優しすぎると思います」
ぷいと、あっちの方向を向いたままだ。
どちらの少女からも顔をそむけられて、困り果てた表情で、いつきは頭を抱えた。
時折、こういうケースがある。自覚はないのだが、どうも伊庭いつきという人間は他人を怒らせてしまう癖があるのかもしれない。
（……やっぱり、貫禄とかないからかなあ）
と、無駄な思考に埋没してしまう。
そうして、和室に正座すると、翔子が話しかけてきた。
「そういえば……伊庭くんは何の魔法使いなの？」
「ふえっ！　い、いや、僕は手伝い——じゃなくて社長してるだけで、魔法使いとかそんなんじゃないけど……！」
「あ。猫屋敷さんが陰陽師だっていうし、この腕輪も西洋魔術課のどうとか言ってたから、てっきり伊庭くんもそうなんだって……」
手首につけた、トネリコの腕輪を翔子が撫でる。
「いや、ほかはそうなんだけど、ほら僕は父さんから受け継いだだけだから……」

「お父さんに？」
訊き返した翔子に、いつきはうなずいた。
「七年前に失踪したまんまなんだけどね。もともと、ほとんど会ったことがなかったから、あまり悲しいとかそんなのもなくて」
それも、神隠しのようなものだろうか。
物心づいたころには、すでに父との接触はなくなっていた。
だから、失踪したと言われても、まるで実感が湧かなかったのだ。ただ、ああ本当にいなくなったんだとそう思っただけだった。
叔父夫婦が、自分を本当の子供同然に育ててくれたのも大きかっただろう。養子にならないかと言われたこともある。義妹の勇花も、それなりに慕ってくれている。
実際、父のことなど〈アストラル〉の引き継ぎを迫られるまでは、思い出したこともなかったのだ。
「……冷たいの、かな」
微苦笑して、いつきは頬を掻いた。
すると、
「違うよ、それ」
急に、翔子が真顔で言ったのだ。
「え？」
「だって、いつきくん、その会社受け継いでるじゃない。魔法なんて使えないのに、魔法使いの会社なんてやってるんでしょ。あんな怖がりなのに、ちゃんと社長してるじゃない。なのに、冷たいとか言うのおかしいよ」
「…………」
いつきは、びっくりした顔で、翔子の言葉を聞いていた。
そんな風に考えたことは無かったのである。
〈アストラル〉を受け継いだのも、後の事件に関わったのもなりゆきで、自分の気持ちどうこうは考えたこともなかった。
「……そう、かな」
「そうだよ。委員長の言うことは聞きなさい」
自信満々に、翔子が胸を叩く。
「——委員長は関係ないと思うな」
それがおかしくて、いつきは笑みを噛み殺した。
ただ、心のどこかが軽くなった気がした。
「仕事で来たのに、これじゃあべこべだよ」
「ふん、伊庭くんがあたしに意見するのがあべこべなの」
つんとすまして、翔子が言う。
——と。
別の声が、いつきの耳朶を叩いたのだ。
「……いつきくん——じゃなくて社長。ちょっと、訊いてもらえますか？」
「え？」
いつきが振り返る。
それは、いままで隣で浮遊していた黒羽の言葉だった。
「どうかした、伊庭くん？」
「あ、いや」
手を振って、いつきはなんでもないと主張

同時、扇子とともに、猫屋敷の指から一枚の紙が宙を舞った。
符。
「謹請四神、救苦救難、妙見明星、救急如律令！」
その呪句がくちずさまれるや、途端、猫たちの瞳がくるりと霊気を帯びた。
あるいは山道を、あるいは草の根もとをかきわけ、凄まじい勢いで山の各所へと散らばっていったのである。
「……ふう」
ひとつ息をついて、猫屋敷は軽く肩を叩く。
「さて……無事にすめばよいのですけど」

翔子は、セーラー服のまま、屋敷の和室で正座していた。
八畳ほどの、ごく手狭な一室である。
奥の壁には掛け軸がかかり、その下の古ぼけた花瓶に、一輪だけ花が挿してある。
亡くなった両親の——特に父の好きな部屋でもあった。
葬儀から五年を経た今でも、まだあちこちに父の臭いが残っているようで、翔子はこの部屋に来るたび複雑な思いにかられるのだった。それは祖父も同じらしく、この和室で父の写真を眺めている姿を、見つけてしまうこともたびたびあった。
「…………」

だって、いつきくん、魔法なんて使えないのに、魔法使いの会社なんてやってるんでしょ。

じっと、そんな思い出を反芻する。
それから、ゆっくりと庭の方を振り返った。
「……伊庭くん？」
「ごめん、チャイムを鳴らしても返事が無かったから」
ぺこり、と庭に立った少年は頭を下げた。
「ううん」
翔子が苦笑する。
「驚いたでしょ。あんまり何もなくて」
両親亡き今、祖父とふたりだけで、ずっと過ごしていた屋敷である。
何が必要ということもなくて、結果、ほとんど物を買い足すこともなく日々を送っていた。両親が遺してくれた保険金は、大学卒業まで十分保つ額だったが、なんとなくそれに手をつける気にもならなかった。
——ただ。
こうして、友達が訪ねてくれることもなかった。考えてみれば、両親が亡くなった五年前以来、いつきがはじめての来客なのだった。
少しだけ、恥ずかしかった。
「なんか、あったかい家だね」
と、いつきは口にした。
「え？」
「あ、いや……なんとなく思っただけなんだけど。ほら、門構えとか、立派すぎると、かえって人を寄せ付けない感じがするでしょ。ここはその逆。——だから、お爺さんが、ひとつひとつ心を砕いてるんだろうなって」
庭を見回しながら、少年は、ごく当たり前のように言う。
ずっと住んでいた翔子でさえ、いままで気が付かなかったことを。
「…………」
まじまじと、翔子はいつきを見つめた。
いつもの伊庭いつきである。
クラスで見かける臆病で平凡な少年と、何ひとつ変わるわけではない。なのに、今の少年はどこか大人びていた。仕草はむしろ子供っぽいのに、もっとずっと大事なところで本質をつかまえているような、そんな感覚。
自分より、本当は先を歩いているんじゃないかという、そんな気がした。
「……ずるいな、伊庭くん」
と、翔子は呟いた。
「へ？」
「いいから。——そのままあがって。そっちだけ庭だと話しにくいでしょ」
視線をあわせづらくて、そっぽを向いたまま、翔子は言った。
「あ、あ、うん」
縁側にあがろうとしたいつきが、もうひとつ問いかけられた。
「仕事の方は……どうなってるの？」
「えっと……今、猫屋敷さんともうひとりの社員が、捜しにいっているところ」
いつきは、ちろりと横を見た。
もうひとりが幽霊で、今そばにいるとはさすがに言いにくい。
すぐ右に、黒羽まなみはふわふわと浮遊し

レンタルマギカ

な生物の気配さえ、内に閉じこめてしまったような感覚。昔の人々は、そんな山の風景に、神の眠る姿を想起したのだった。
　一時間に一本きりのバスが遠ざかってから、いつきと穂波は山のてっぺんを見上げた。
　ぶるり、と自分の肩を抱いていつきが呟く。
「えと……笑い声があったっていうのは……こ、このへんになるのかな？」
「もう少し上だそうですねえ」
　明らかにおじけづいている少年へ、猫屋敷があっさり告げる。
　あげく、追い打ちまでかけた。
「——昔は、それなりに霊的な歴史があった山みたいなんですけど」
「れ、霊的ぃっ？」
「ええ。記録では、大正ぐらいまで神隠しっぽいこともいくつかあったようで」
「…………っ！」
　声も出ないいつきに、猫屋敷がマイペースに話を続ける。
「多くは、低位の呪波汚染が引き起こす天災みたいなものですけど……地方によって、その姿は大きく形を変えます」
　山の地面に落ちていた葉を、長い指がそっと拾った。
「たとえば……天狗とかもそうですね」
　黄色く変色した大きな枯れ葉は、奇怪な人の手のようにも見えた。
　ヤツデの葉であった。
　鴉と、天狗。
　偶然というには、近しすぎるだろうか。
　それから、すぐそばのケヤキへと、猫屋敷は視線を移した。
「黒羽さん、上から見た感じはどうです？」
「……あ、はい。一通りまわってみたんですけれど、ぱっと見では何もなかったです」
と、そのケヤキの上から返事があったのだ。
　普通の人間が見れば、一枚の地図が宙を浮いているだけにしか見えないだろう。
　だが、猫屋敷といつきには見えた。
　腰までなびいた、極上の墨を思わせる黒髪。どこか猫にも似た、くりくりと大きな瞳。はつらつとした雰囲気は、曇った冬山にあってさえ、少女を華やかに彩るようだった。
　——たとえ、その姿が半透明でも。
黒羽まなみ。
　そういう名の幽霊である。
　魔法使いたちは、その在り方を霊体という。さる事件から彼女を〈アストラル〉へ誘ったのが、いつきだった。
「ふむ。黒羽さんが何も感じないとなると、少し厄介ですね。山ひとつがそのまま捜索範囲になってしまいます」
　猫屋敷の眉間が、かすかに曇る。
「ごめんなさい」
「いえいえ、黒羽さんのせいじゃないですし」
　猫屋敷がひらひらと扇子を振ると——不意に、隣のいつきが別のことを尋ねた。
「そういえば、今回はどうかしたの？　黒羽さんが、自分から依頼に手をあげるって珍しいけれど」
「え、あのその」
　指をからませ、もじもじとなる黒羽である。
「なんとなく、ってだけなんですけれど」
「ふうん？」
「はいはい。じゃあ、社長と黒羽さんは、先に依頼人の屋敷に向かって下さいな」
　少年の肩を叩いて、猫屋敷が話を締めた。
「その間に、こちらは山の調査を終えておきますから」
「…………」
　ふたりを送り出してから、猫屋敷はもう一度山を見上げた。
「この山で……神隠しですか」
　ぽそりと呟く。
　いささか、信じがたかった。
　呪力の残滓はある。しかし、段違いというほどではない。もとより、自然の要所には呪力がたまりやすく、そこらの霊山であればこれぐらいの呪力は珍しくもなかった。
　少なくとも、神隠しほどの現象が起きるには、あまりに平凡すぎる山だった。
「——玄武、白虎、朱雀、青龍」
　連れてきていた、猫たちの名を呼ぶ。
「……にぁ」
「にゃあ」
「うにゃあ」
「にぃ～あ」

うようでもあった。
　その手に、そっと温かいものが触れた。
　顔をあげると、それは白い猫の手だった。肩に乗った小さな猫の手首に、よい香りのする人間サイズの輪が引っかかっていたのである。
「これ……って……」
　翔子が目を瞬く。
　どうやら、木の枝を編んだ、手作りの腕輪のようだった。
　不思議に心の落ち着く香りがする腕輪で、翔子の恐れさえも、その香りの前では和らいでいくのを感じた。
「トネリコとリンデンの枝で編んだ腕輪ですよ」
　と、猫屋敷が答えた。
「うちの西洋魔術課で使うハーブなんですけどね。特にリンデンは女の子への効用で知られた聖樹で、発汗作用、鎮静効果がありますし……魔術の護符にも使います。あなたにさしあげますよ」
「あたし……に？」
「ええ」
　問い返した翔子へ、猫屋敷は微笑んだ。
　それから、
「大丈夫」
　と、柔らかくうなずく。
「だからここに来たんでしょう？　〈アストラル〉に、魔法使いを貸してもらいに。――だから大丈夫」

この山で……神隠しですか。

　誰もがほっとするような、心底から相手を案じていると分かる笑みだった。
　だから……翔子の震えも、いつしか止んでいた。
「あ……あ、ありがとうございます」
「――えと、お爺さんは……先代の頃に、うちのお客だったんだよね」
　これは、いつきが訊いた。
「うん」
　翔子がうなずく。
　骨董好きの翔子の祖父は、かつての〈アストラル〉からも品を買い上げていた。そんな祖父の荷物を整理していたとき、〈アストラル〉の名刺も見つかったのだという。
（……だったら）
　と、青ざめた顔で、いつきも思う。
　かつての〈アストラル〉と親交があったほどの人物の言うことならば、ただの迷信とも考えにくかった。
　神隠し。
　人が突然いなくなる、という魔的現象。
「さて。山や森がらみの呪波汚染だと、本当は穂波さんの方が専門なんですが……」
　猫屋敷の眉が、かすかに曇った。
「え？　穂波、どうかしたの？」
　振り返ったいつきに、猫屋敷が耳打ちする。
「……ほら。〈アストラル〉の借金返済を待ってもらうかわりに、〈協会〉支部へもうレンタルされてるじゃないですか……」
「あわわ。じゃあ、隻蓮さんが山ごもりで、みかんちゃんが遠足中だから、今うちで仕事できるのって――」
「私と、社長と……」
　もうひとり分、名前が空気に溶けた。
「伊庭くん、どうしたの？」
　首を傾げた翔子が、こちらを見ている。
「あ、いやいやいや、何でもない！」
「じゃああたし、どんな魔法使いを借りれば――」
「――ええと、その」
　困った風に、いつきが瞬きする。
と――その首が急に天井を向いた。
「あの……あたし、その依頼を手伝わせてもらっていいですか？」
　と、声がかかったのである。
　ただし、翔子はきょとんとしたままだ。いつきと猫屋敷にしか聞こえない『声』だった。
　そのふたりにしか見えない――半透明の少女が、事務所の天井をふよふよと浮遊していたのだった。

翌日。
　分厚い冬の雲に覆われた、山の中腹だった。
　この時期の山は、ひどく硬い印象がある。冷たい空気が土も樹も凍らせ、普段なら豊潤

寄って、バスに乗り遅れてしまったのだ。
言い訳を考えながら、
「ただいまあ」
と、玄関の扉を開いた。
刹那。
大量の漆黒の影が、廊下から飛び出した。
「――きゃっ！」
顔を覆う。
しかし、影は翔子には襲いかからなかった。
ばさばさばさばさ。
ばさばさばさばさばさ。
ばさばさばさばさばさばさばさばさばさ！
耳障りな音だけを残し、影たちは夕闇へと飛び散っていく。
「え……？」
鴉だった。
どこから現れたのかというほどの大量の鴉が、屋敷から飛び出していったのだ。屋敷の廊下はおびただしい羽根にまみれ、どこもかしこも爪と嘴の傷跡で埋め尽くされていた。
「…………！」
急に、翔子は怖くなった。
驚愕が冷たい恐怖に変わり、胃の腑まで落ちるのを感じた。
あわただしく靴を脱ぎ、つまずきそうになりながら、羽根だらけの床を走る。
その感触。
その悪臭。
むせると同時、喉から吐き気がこみあげる。
しっかりとした檜の床が、今ばかりは腐れ

て踏み抜きそうに思えた。羽根じゃなくて腐った泥か――考えたくもないけれど、死体でも踏みつけていくような気分だった。住み慣れた屋敷は、すでに異界でしかなかった。
ばさばさばさばさ！
また、鴉が飛んだ。
け――――っ！
け――――っ！
どこかで、たくさんの鴉が鳴いた。
「――――！」
翔子は、固く目をつぶっていた。
祖父の名を叫びながら、ほとんど泣きじゃくりながら、屋敷中のふすまと障子を開いていく。ひとつふたつと、開かれるたびに風が吹き抜け、屋敷を蹂躙した。
だが。
――屋敷には、誰もいなかった。

ガタン、と派手な音が〈アストラル〉事務所にこだました。
「だ、だだだだ、誰もいなかった？！」
床に落ちたいつきが、血相を変えて、わたわたと手を振ったのだ。安物の椅子から転げ落ちたのである。
「だ、大丈夫、伊庭くんっ？」
慌てて翔子が立ち上がりかけるが、これは本人が制した。
「……い、い、いやいや、ちょちょ、ちょっと驚いただけだから」
なんとか体裁をとりつくろい、いつきがひきつった顔で椅子に戻る。
「は、話の、続きを」
と、促した。
「……う、うん」
翔子も、うなずいた。
駐在さんを呼び、捜索願いを出して丸一日経っても、祖父は帰っては来なかった。
あるいは、それだけなら、単なる失踪ということになったかもしれない。少なくとも、魔法使いを借りようとは思わなかったろう。
しかし今回の場合、失踪直後の、最後の現象こそが問題だった。
「見たの。……うん、聞いたの」
と、翔子が視線を落とした。
誰もいないと悟り、山を振り返ったときだ。
赤く、禍々しく、燃えるような夕映え。
山の稜線が緋色に飾られ、世界が不吉な空気に息づく瞬間。
そんな中、それは嗤っていたのだ。姿も見せず、影も落とさず――しかし、確かにけたたましい笑い声をあげて、山を登っていったのだ。
「……ずっと前に、お爺ちゃんが言ってたの。山で笑い声を聞いたとき、誰かがいなくなったなら、それは神隠しだって」
まだ、鼓膜にその笑い声がこびりついているというように、翔子は耳を押さえた。
耳を覆った白い手が、小刻みに震えていた。
ずっとずっと、その震えがおさまらないとい

さきほどの看板と同じ文句が、セピア色の文字で。
〈魔法使い派遣会社・〈アストラル〉
――あなたのご要望にあった魔法使い、お貸しします〉

人が思うより、少しだけ世界には魔法が多い。
人が思うより、少しだけ世界には神秘が多い。
ほとんどただの高校生・伊庭いつきがそれを知らされたのは、もう九ヶ月以上も前のことになる。
その際、いつきはある会社の社長へと、勝手に祭り上げられてしまったのだった。
――魔法使い派遣会社〈アストラル〉。
表向きは占い師やオカルトライターの派遣会社だが、その実、世界各地から『本物』の魔法使いを集めた組織である。もっとも、それなりの栄華を誇っていたのは昔の話で、今は社員がひとり抜けふたり抜け、なんとか破産を免れているという寸法だ。
必然、即席社長となったいつきは、ひいひい言いながら、低空飛行の〈アストラル〉を支えているわけなのだが――

――魔法使い派遣会社〈アストラル〉。
世界各地から『本物』の魔法使いを
集めた組織である。

「――本当に、伊庭くんって社長なんですか?!」
思わず声に出してしまった翔子へ、
「ええ。いろいろあって、去年の初夏あたりから頑張ってもらってます」
こくりとうなずいたのは、事務所のテーブル越しに座った青年――〈アストラル〉陰陽道課課長・猫屋敷蓮だった。
いつきよりも、頭ひとつ高い。いぶした灰色の髪をしており、切れ長の目と整った鼻梁はかなりの美形といってもよかろう。肩からかけた平安風の羽織と扇子も――風変わりながら、独特の雰囲気に似合ってはいる。
が、その身体にまとわりついた名前通りのものが、それらの美点を台無しにしているのだった。
「……にあ」
「にゃあ」
「うにゃ」
「にぃ～～～～あ」
ちょうど四匹、黒、白、三毛、ぶちの猫たちである。それぞれ高く低く鳴き声をあげる様子は、さしずめ猫の四重奏だろうか。
「ああ、今日も猫たちの鳴き声は素晴らしい！　まさに神域。一聴即菩提。久留米の仙人も転げ落ちる美声！　いやいやこの声で堕落したなら仙人も悔やみますまい！　心どころか魂まで猫に捧げて、何の悔いがあるものか！」
「……あの、猫屋敷さん。話聞いてますか？」
猫賛歌をうたいあげる猫屋敷へ、一応いつきが釘をさした。こちらは青年の隣の椅子で、申し訳なさそうにちょこんと座っている。
……やっぱり社長とは思えない。
（……伊庭くんなんだなぁ）
苦笑して、翔子は少し安心した。
魔法使い派遣会社なんていうと人外魔境の異世界を想像していたのだが、どうやら自分と同じ、普通の人間の会社らしいと、そう素直に思えたのである。
そして――今回の事件を思い出し、暗い顔になった。
「功刀さん？」
いつきが、眉をひそめる。
翔子の変化に気が付いたのだ。
「あ、いや、ちょっと……思い出しちゃって」
「神隠し、でしたよね」
これは、猫屋敷が口にした。
「はい」
翔子が、目を細める。
彼女の住んでいるのは、布留部市から少し外れた山の裾野だった。
僻村といってもよい、閑散とした土地である。主要な鉄道の路線からも離れ、いつきと同じ学校に通うだけで往復二時間が潰れる場所だった。その分、屋敷は大きかったが、父と母が死んだ今、祖父とふたりだけで過ごすには、いかにも大きすぎる家でもあった。
その夕暮れ時、翔子の帰りは、いつもより少し遅れた。委員会の帰りに友人と喫茶店に

レンタルマギカ

《魔法使い派遣会社・〈アストラル〉
——あなたのご要望にあった魔法使い、お貸しします》

古めかしい、銅の看板だった。
丁寧に磨かれてはいたが、浮き彫りの文字は大分かすれている。伸びた蔦に絡まれていることもあって、少し離れると、看板そのものが見分けられなくなりそうだった。
もっとも、離れるほどのスペースもない。
商店街のビルとビルの間——やっと人ひとりが入れるかという、狭い路地裏の壁に、その看板は嵌め込まれていたのだ。
そして、その路地の奥では、何かの間違いみたいにできた空き地へ、小さな西洋屋敷がそびえている。
翔子にしてみれば、雷の落ちたぐらいの衝撃だった。
「ほ、本当にあった……」
思わず、身体中から力が抜ける。
祖父の荷物から住所を見つけたものの、きっとジョークグッズのようなものだろうとも思っていたのだ。一縷の望みを託した今日だって、やはり心底から信じてはいなかった。
だけど、確かに看板と屋敷はここにあった。
ばかりか。
がらりと、玄関から人影が現れたのだ。
「ふわぁ～ぁあ……や、やっと全部穂波の宿題が終わった……」
年齢は、翔子と同じ十六歳ほど。
なにやら、もごもごと呟きながら、げっそりとこけた頬を押さえている。どちらかといえば情けない感じの男の子で、どこのクラスにもひとりはいるような、おどおどした雰囲気を漂わせていた。
しかし、これまた普通の少年ではなかった。
上から下までのスーツ姿もさることながら、その右目に、大きな黒い眼帯をしていたのである。
普通に病院で渡される品ではなく、漆黒の革と金属でできた、まるで昔話の海賊がしているような眼帯だった。
(だけど……)
まったく別のことに、翔子は唖然としていた。
ぱくぱくと口を開き、なんとか平静を取り戻して、俄然強気に歩み寄る。
「——伊庭くん！　何してんの、ここで！」
「へ？」
きょとんと眼帯の少年が振り向く。
丸みを帯びた左目が、ますます丸くなって——それでも、かくかくとうなずいた。
「あ、あ、あ……功刀さん?!」
少年の名は、伊庭いつき。
翔子が委員長を務めているD組の生徒——要するに、クラスメイトだったのだ。
「あ……まさか伊庭くん、ここでバイトしてるのっ？」
「え、いや、まぁ……そんなもんだけど」
あわあわと、たじろいだ少年が無意味に両手を振る。
そんなところも、クラスでの様子と変わらなかった。なにしろ、あだ名が「ドラえもんで失神した男」である。幼稚園の頃、『のび太の魔界大冒険』で気絶したということだが、臆病というかなんというか、とにかく押しが弱い。クラスに厄介事が持ち上がると、まず生け贄になるのがこの少年だった。
それでも、翔子は失望せず少年を見据えた。
どの道、もうほかに頼るあてなどないのだ。
(うん……)
「考えようによっては、ちょうど良かったかも。伊庭くんだったら、嘘ついたってすぐに分かるしね」
「な、なにが？」
「何がって——ここ、そういう会社なんでしょうっ？」
むむ、と睨みつけて、翔子は用件を切り出した。
制服の胸ポケットへいれていた名刺を取り出し、必死の思いで突きだす。
「この名刺を頼りに、魔法使いを貸してもらいにきたの！」
昼の光に、名刺の表面がきらめいた。
水晶の透かしが入った——翔子が大事そうに持った名刺には、こう書かれていた。

文庫最新刊『レンタルマギカ　魔法使い、修行中!』7月1日発売
レンタルマギカ
あなたのご要望にあった魔法使い、お貸しします!
我ら魔法使い派遣会社「アストラル」
今宵の依頼は――カミカクシ
「魔法使いと神隠し」
三田誠
Makoto sanda
イラスト
pako

もう貴方は逃れられない――

いらっしゃい。そちらが〈アストラル〉アルバイト面接の方ね。会社見学はいかがだったかしら？　まぁ案内したのが、あの強欲陰陽師だからロクな説明していなかったらごめんなさい。私はアディリシア・レン・メイザース。魔術結社〈ゲーティア〉の首領にして、この〈アストラル〉の株主。ああ、そんなに怯えないでも結構よ。確かに私の側にいるこの金色の獅子と鎧甲冑は私の忠実な下僕だけれど、私の命令なしでは動かないから。

この〈アストラル〉はまだまだ大きくなりますわ。もちろんあの陰陽師や巫女の力ではなく、私がスポンサーについたんですから。イツキは……まだ少し頼りないところがありますけど、私がいれば大丈夫。だから貴方も成長株を見込んで入社希望に来たんでしょう？

まだ決心がつかない？　それならせめて株主におなりなさいな。このページの下の新聞記事をご覧なさい。五芳星のマークがありますわね。これは私たち〈アストラル〉の株主になるためにチケット。これを7月1日発売の私たちの黙示録『レンタルマギカ　魔法使い、修行中！』についている応募用紙で送れば、貴方を株主にしてさしあげますわよ。

株主になれば〈アストラル株主総会〉に参加することができますの。貴方の読んでみたい私の活躍やイツキの活躍を、語り部に描かせることぐらい簡単に成就しますわよ。

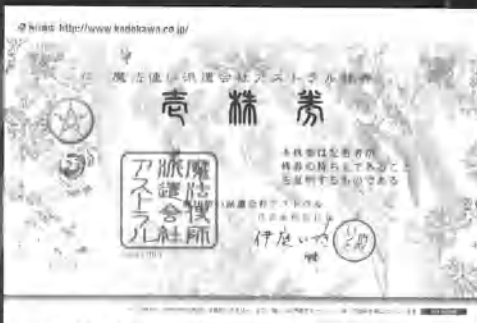
生きてこの部屋から出たいなら、応募することをおすすめするわ。もちろん強制じゃありません。……もっとも私の使い魔たちがおとなしければ、の話ですけどね、くすくす。

〈アストラル〉株主大募集！

魔法使い派遣会社〈アストラル〉では、事業拡大に伴い新規株主を大募集いたします。

下記の要項に従ってご応募いただくと、〈アストラル株主総会〉に参加できる「株券」が手に入ります。

株券に付いている用紙に「好きなキャラクター」と「読んでみたいエピソード」をお書きの上、ご返送下さい。2007年4月号（2月末売）の『ザ・スニーカー』誌上にて〈アストラル株主総会〉を開催、その席上にて結果を発表いたします。株主の皆様の声を反映した短編作品を2007年8月号（6月末売号）『ザ・スニーカー』にて発表する予定です。株主の皆様の忌憚ないご意見をお聞かせ下さい。もしかして“あの妹”や“あの弟弟子”が再登場する日が来るかも!?

詳しい応募要項は下記をご覧下さい。

応募要項

7月1日発売の文庫最新刊「レンタルマギカ　魔法使い、修行中!」の帯についている申込用紙に、左下の応募券をしっかりと貼り、返送用80円切手1枚を同封して応募先までお送り下さい。その際、封筒はしっかり封をし、裏面にはお名前・ご住所を必ず記入して下さい。なお80円切手以外の組み合わせ切手でのご応募は受けられません（例:60円切手と20円切手の組み合わせは不可）。

何通応募されても結構ですが、応募は必ず1つの封筒に1口でお願いします。応募方法に不備がある場合は、お送りできないことがありますのでご注意下さい。

◆応募先:〒102−8078
角川書店第二編集部「レンタルマギカ　株券係」
◆応募締切:2006年8月31日
◆発送予定:2006年10月下旬より
＊11月下旬になっても届かない場合は下記までご連絡下さい。
◆お問い合わせ先:J・L・S「レンタルマギカ」係
TEL:03-3262-6151
受付時間:10時〜12時、13時〜17時（土・日・祝日を除く）

▼キリトリ

応募券
ザ・スニーカー
8月号

巻頭特集
レンタルマギカ
魔法の魅惑から
アディリシア・レン・メイザース
ソロモン王の末裔にして七十二の魔神を召喚する天才。父親を魔法で亡くし、魔術結社〈ゲーティア〉の跡を継ぐ。〈アストラル〉の危機を救ったことから大株主として君臨する。その目的は!?
出張版
レンタルマギカの基礎理論
∴ソロモン王の魔術
古代イスラエルに史上最大の繁栄をもたらしたと言う、伝説の王ソロモンが用いた伝説の魔術。特筆すべきなのは『ソロモンの大きな鍵』、『ソロモンの小さな鍵』と呼ばれるふたつの魔術書に記された魔術たちである。
『ソロモンの大きな鍵』は主に土星、木星、火星、太陽、金星、水星、月の七大惑星の精霊たちの力を用いる魔術である。一方、『ソロモンの小さな鍵』はより細やかで、個人的な目的のために使用されるに相応しい魔術である。『小さな鍵』は複数の魔術書から構成されており、殊に第一の書に記された大王バールや地獄の憲兵連隊長アガレスなどの七十二の魔神を操る秘法は比類ない強大さを誇る。

□神道

万物に宿る神霊を祀り、荒ぶる霊を鎮める日本土着の巨大な信仰にして魔術の体系。八百万の自然霊、死して神となった英霊、または外来の神々や概念が昇華して産まれた概念神。または荒ぶる祟り神や悪霊。それら全てを祀り崇める途方もない魔術である。

「鎮め」を行うことで、例えば疫病を広める神は逆に疫病を治める神となり、落雷の神はその雷雨で田の恵みを与える神へと転化する。つまり、どのような神や霊とでも、共存できる要素を見出し、受け入れるのだ。これは、言葉としては単純だが、理解しがたく実践も難しいものと言えるだろう。しかし古来の神道はそれをこそ理想とし、その心によって日本という国の根幹を支えてきたのである。

天地万物と相和し、敵すらも味方と変えて共に生きる。それが神道の神髄であり、本質なのである。

巻頭特集
レンタルマギカ
葛城みかん
由緒正しい神社の次女。小学2年生にして〈アストラル〉神道課契約社員。古文は大学教授レベルの学力だが、行動はまだまだ小学生!?
魔法使いと大自然の切っても切れない関係
おっと暗い所から、一気に明るいところに出ると目がくらんでいけませんね。足下に気をつけて下さいよ。ここは〈アストラル〉の中庭。ここでは魔法の儀式で使う、魔法植物が植えてあるんです。
魔法には元々「神の声を聞く」とか「星で吉凶を占う」といった意味があるんです。つまりどの魔法も大自然の恵みと切り離しては生きていけない。だからここではそれぞれの魔法が使用する触媒を自家栽培してるんですね。ちなみに葛城みかんさんが持っているのはマンドラゴラ、と言いまして魔法薬に使うんです。これ、ちょっと癖がありまして、引っこ抜くと悲鳴を上げて、その悲鳴を聞くと死んでしまいます。ああ、そんなに怯えなくても大丈夫ですよ。ここにあるマンドラゴラはみかんさんの力、神道の力で害は抑えられていますから。
え？　あの赤い花はなんですかって？　ははは……見なかったことにしましょうか。警察の方に見つかると怒られるような花ですから。現代の世で、魔法使いが正当な儀式をするのは大変なんですよ、という事だけお話ししますね。
そして最後にご案内するのは「儀式の間」です。ここでは大株主・ソロモン王の末裔があなたをお待ちしてます。社長と私はここで失礼しますね。あ、いえ、逃げるわけじゃないですよ。社長は穂波さんからの宿題が、私は雑誌の締切りがありまして……では。あなたの無事をお祈りしております。

解読するのに一生かかる？ 先人の英知の結晶、それが「魔導書」 魔法使いの心臓部、ついに公開

出張版 レンタルマギカの基礎理論

△ケルト魔術

古代ヨーロッパのほとんどを席巻したケルト民族の魔術。しかし実際に体系だった魔術としてのケルト魔術は、1世紀頃のローマによるブリテン征服や後のキリスト教の伝来により衰退。かろうじて単独の儀式魔術や、バラバラに分解された個々の術式や呪文が現代に伝わるのみである。

ケルト魔術の特徴は、何よりも自然との一体化にあるとされる。森の木々や草花、鳥や獣たち、雨風や霧などの天候、そして石。これら自然の要素を繋げ、これらを操作したり、その力を借りることこそ、ケルト魔術の眼目なのだ。

中でも、樫の木とそこから生えるヤドリギを用いることに関しては、全魔術中でもトップクラスであり、ケルト魔術の使い手は元来ドルイド、つまり樫の木の賢者（ドル＝ウィド）と呼ばれていたほどである。

はめた〈アストラル〉の台所事情です。かいつまんで言えば「アストラルは風水的に悪い位置なので貧乏続きという意味なのですよ。よよよ～」という意味なんです。特に錬金術はとりわけ隠喩や象徴の多い学問で、書いてあることがまったく鵜呑みにできません。でも一流の魔法使いは、これらを読み解いて自分用にカスタマイズして「原書」を作るんですよ。

ここにいらっしゃる穂波・高瀬・アンブラーさん。彼女は古代ケルト魔術の使い手……平たく言えば魔女です。ケルト民族は散り散りになり、現在、ケルト魔術の正当な後継者は存在しません。だから彼女はほとんど独学で、魔導書を読み解いて自分の術に昇華させたのです。魔法というのは古くさいように見えて、実は進化しつづけるものなんですよ。

ほらほら社長も初めて書庫を見たような顔をしないで……えっ？　初めてなんですか？

……。っ、次行きましょうか！

次は〈アストラル〉の庭、魔法触媒を作っている菜園です。

穂波(ほなみ)・高瀬(たかせ)・アンブラー

〈アストラル〉ケルト魔術・魔女術課正社員でいつきの幼なじみ。いつきのお目付役として立派な社長にしようと日々特訓している。

自分だけの「魔導書」を作ってこそ、真の魔法使い!?

いきなり暗い部屋にご案内してすいません、ここは何千冊という魔導書を保管している我が〈アストラル〉の書庫です。おや穂波さん、こちらでしたか。

え？　魔導書を読んでみたい？　私はあまりおすすめしませんね。魔法使いというのはへんくつ者が多いんです。たとえば

――この地勢は盤石の神殿を模し、大気の乙女の守護と水銀が照応する三十六の門が火星の災いを阻む。天の輝きは北東を照らし、道の老婆は西を向いている。

わかりますか？　実はこれ、錬金術独特の隠喩(いんゆ)で私が適当に

巻頭特集
レンタルマギカ
なんでもやります
魔法使い派遣会社〈アストラル〉！
猫屋敷蓮
〈アストラル〉陰陽道課課長。その名の通りたくさんの猫に囲まれて過ごす。一見ぼーっとしているが〈アストラル〉創設時よりのメンバーであり、その実力は No.1。

ペット捜索から都市伝説の解決やオカルト雑誌の執筆まで

黒羽まなみ

一般の人には見えない文字通りの「幽霊」社員。現在は見習いとして、騒霊現象を使ってお茶くみや掃除をしている。

伊庭いつき

臆病なただの高校生だったが、失踪した父の跡をついで〈アストラル〉社長に就任。慣れぬ社長業に奮闘中。眼帯の奥にすべてを見透かす「妖精眼」を秘める。

古代ケルト魔法から陰陽道まで古今東西の魔法使いを派遣 あなたのリクエストは?

いらっしゃいませ、〈アストラル〉へようこそ! え、お客様じゃなくてアルバイト面接? 我が〈アストラル〉にもう一人雇える余裕はないのですが、わかりました。あなたの熱意に免じてまずは当社をご案内しましょう。申し遅れました、私、陰陽道課課長・猫屋敷蓮と申します。

こちらのパンフレットをご覧下さい。〈アストラル〉はお客様のご要望にあった魔法使いをお貸しする会社です。一口に魔法使いと言っても、その能力は様々。大自然との協調から生まれた古代ケルト魔術、魔神を召喚するソロモン王の召喚魔術、日本古来の術、絶対防壁の頂・神道など。〈アストラル〉ではお客様の依頼を分析し、魔法の特性を活かし、依頼を解決いたします。

とは言っても魔法使いというのは、常に日陰の存在。テレビCMや電話帳に堂々と宣伝をうつわけには参りません。基本は口コミや紹介で成り立っております。……最近の主な依頼はペット捜索や遺失物の捜索など、お世辞にも多岐に亘ってとは言えません。しかし、これからの〈アストラル〉は違います! こちらの眼帯をした少年、伊庭いつき2代目社長が就任して下さったんですからね。どんな難事件、怪事件もちょちょいのちょい……しゃ、社長、初めてパンフレットを見るようなお顔はやめて下さい、こちらの新人君が不安になるでしょう。え? アルバイト料? 交通費? ま……まぁまぁ、次は魔法使いの心臓部、魔導書の書庫をご案内しましょう!

いま、最も熱いシリーズ「レンタルマギカ」を初・巻頭特集!
巻頭特集
レンタルマギカ
文庫新刊&ザ・スニーカー連動サービス企画実施中!
〈アストラル〉株券型ポストカード
※詳しくはP15を見てね
文庫最新刊
「レンタルマギカ
魔法使い、修行中!」
7月1日発売!
魔法使い派遣会社
〈アストラル〉へようこそ!
東に困った人あれば、行って陰陽道の札を貼り、
西に捜し物する人あれば、行ってダウジングで一発発見!
古代ケルト魔術、ソロモン王の召喚魔法、陰陽道に密教、神道。
世界各地の魔法使いを集めた魔法使い派遣会社〈アストラル〉。
今回の巻頭特集であなたは新入アルバイトとして、
この不思議な会社と魔法使いの秘密に迫る!
——魔術の夜(マギ・ナイト)の謎が、今明かされる!
三田誠
Makoto sanda
イラスト
pako
Magical using dispatch company
ASTRAL co.,ltd.

スニーカー祭(フェスタ)06 超豪華プレゼント!!

年に一度、スニーカーの人気作品が勢ぞろいする大祭典が今年もやってきました。フェスタならではの豪華&レアなプレゼントを多数ご用意。アンケートに答えて応募してね！

涼宮ハルヒ

TVアニメ大ヒット御礼！勢いが止まらないハルヒからは、ファン垂涎のオリジナルグッズをプレゼント！

1 オリジナルデザインTシャツ

スニーカー祭06 10名

2 特製アートタイル時計

スニーカー祭06 5名

（グッズのデザインは変更する場合があります）

レンタルマギカ

伸び盛りのレンタルマギカがついに初・巻頭特集!! それを記念してオリジナルテレカをキミに！

3 テレカA

スニーカー祭06 10名

4 テレカB

スニーカー祭06 10名

（テレカのデザインは変更する場合があります）

5 Add

スニーカー祭06 1名

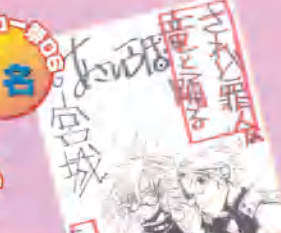
6 円環少女

スニーカー祭06 1名

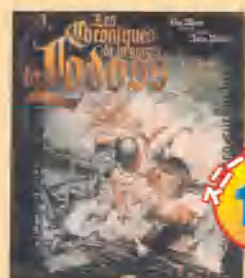
7 されど罪人は竜と踊る

スニーカー祭06 1名

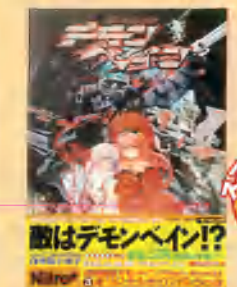
8 99番地のクロニカ

スニーカー祭06 1名

9 神様ゲーム

宮崎柊羽のメッセージと七草のサインが入ったイラストシート。何が書いてあるのかな？

スニーカー祭06 3名

10 新ロードス島戦記

日本ではまず手に入らないフランス語版コミック「ロードス島戦記 ファリスの聖女」。水野良のサイン色紙付で。

スニーカー祭06 1名

11 デモンベイン

TVアニメも絶好調のデモンベインからPCゲーム『機神飛翔デモンベイン』をプレゼント。

（この製品は15歳以上推奨です）

スニーカー祭06 3名

12 バイトでウィザード

ジャケットに椎野美由貴のサインが入ったドラマCD「バイトでウィザード」を！

スニーカー祭06 3名

13 薔薇のマリア

描きおろしイラスト&サイン入り文庫収納ボックス。「薔薇マリ」でいっぱいにしよう！

スニーカー祭06 1名

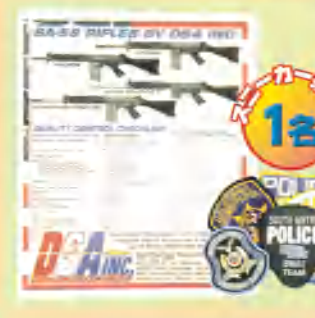
14 ムシウタ

岩井恭平&るろおのサインが入った「ムシウタ」宣伝用ポスターを2点セットでどうぞ！

スニーカー祭06 3名

15 ラグナロク

リロイの相棒“ラグナロク”をモチーフにしたキーホルダー。安井健太郎のサイン付き。

スニーカー祭06 1名

16 半熟編集者うえぽんが行く

鷹見講師からポリスワッペンと銃好きにはたまらない米国の銃の通信販売雑誌をセットで。

スニーカー祭06 1名

応募方法

とじ込みはがきのアンケートに答え、欲しい商品の番号と必要事項を明記し50円切手を貼って応募して下さい。締切りは7月21日（金）の消印有効です。なお当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。また、とじ込みアンケートはがき以外での応募は無効となりますのでご了承下さい。

17 投稿王国

SECRET!

編集部内でレアなアイテムを集めて詰め込んだ福袋。中身は当たってからのお楽しみ！

スニーカー祭06 1名

オフィシャル誌だからねっ!

豪華絢爛の全員サービス&プレゼント実施中 涼宮ハルヒを手に入れろ!

4大スペシャルアイテム

SPECIAL ITEM 1 [涼宮ハルヒ]QUOカード3種セットで100名様に!

角川コミックスエース「涼宮ハルヒの憂鬱❷」の発売を記念してSOSキャンペーン第2弾が絶賛開催中☆この「ザ・スニーカー8月号」にも応募券あり!(詳しくは234ページを見てね)

SPECIAL ITEM 2 ザ・スニ表紙イラストQUOカード全員サービス

今号のザ・スニ表紙用にいとうのいぢが描き下ろしたイラストをQUOカードに。全員サービスだから、ほしい人全員は手に入れられます!(詳しくは234ページを見てね)

SPECIAL ITEM 3 ザ・スニオリジナルグッズ!

オリジナルデザインTシャツ

時計付きアートタイル

オフィシャル誌だからこそ提供できる、いとうのいぢイラストを使ったオリジナルグッズ。今月のプレゼントは左の2点。巻末のアンケートに答えて応募してね。(詳しくは裏面へ)

SPECIAL ITEM 4 [ドラ☆スタ]ザ・スニオリジナルカード!

ゲーム「ドラゴン☆オールスターズF どらばれ」を知ってる人も知らない人もうれしいハルヒのオリジナルカードが今号には特別封入。他にもハルヒカードはたくさんあるから、集めて実際にゲームしてみてもいいかも。(詳しくは262ページからの「ドラ☆スタリプレイ」ページを読もう)

※賞品、プレゼントのデザインは変更になる場合があります

イラスト/いとうのいぢ

平成18年8月1日発行(毎月1回1日発行)第14巻第6号

《涼宮ハルヒSOSキャンペーン第2弾》続行中!

the Sneaker ザ・スニーカー

おいでよ、No.1ライトノベルへ!

August 8 2006

特別定価 780円

人気急上昇中!いち押し巻頭特集

レンタルマギカ

この夏、起動する6作品をフィーチャー!

スニーカー新人王2006

この表紙イラストのQUOカード全員サービス!

※応募者負担あり

涼宮ハルヒの憂鬱

谷川流×いとうのいぢ

賀東招二×谷川流

スペシャル対談

人気タイトル勢ぞろい!スニーカー祭'06

新ロードス島戦記 最終回&記念特集

オイレンシュピーゲル/ラグナロクEX.

ハイトでウィザード/ムシウタ

されど罪人は竜と踊る/薔薇のマリア

神様ゲーム/戦闘城塞マスラヲ

斬魔大聖デモンベイン

アンダカの怪造学/円環少女/北神伝綺

マキゾエホリック/99番地のクロニカ

第11回スニーカー大賞結果発表!

綴込付録

応援団長ハルヒ

不機嫌な悪女子

「ドラゴン★オールスターズF どらばれ」

ザ・スニ限定カード

特別付録

ハレ貼レユカイ♪

描き下ろしポスター

the Sneaker ザ・スニーカー August 8 2006

アニメも大人気 涼宮ハルヒの憂鬱

巻頭特集 レンタルマギカ

角川書店

the Sneaker ザ・スニーカー

ザ・スニーカー 平成18年8月1日発行(毎月1回1日発行)第14巻第6号

特別定価780円 本体743円

角川書店

雑誌 14081-08

4910140810864
00743

印刷/大日本印刷株式会社